

スラ谭奇

5



1972・5

❖ 新しい風俗文献誌 ❖

昭和四十七年四月二十日印刷 昭和四十七年五月一日発行 五月号（第二十六巻第五号）毎月一回一日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可・昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認第二〇号

奇譚クラブ

臨時増刊

女体緊縛写真集

定價一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と続肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ケイ
答打ちの態勢	関谷富子
鞭撻の痛苦	長井葉津子
浣腸責の序曲	左近麻里子
亀甲縛りの美態	中河恵子
麻縄と白肌の対照	左近麻里子
陽を浴びた柔肌	中河恵子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の翳り	中河恵子
責め疲れの放心	中河恵子
没我の心境の悦	中河恵子
痛打の末の悦	中河恵子
沖縄美人の緊縛	座間富子
剣玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ケイ
海老責の狂態	川路叢子
ボリウムの挑戦	座間富子
鞭打の下に挑	関谷富子
祭壇の人身御供	渡部好美
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富子
ムチが痛い、許して	関谷富子
柱を挟んだ連縛	渡部好美
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀人	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ケイ
マゾの女王に答	関谷富子
柱しぱりの恥らう	金原加奈子
夫婦の艶の慈味	渡部好美
長襦袢の艶を誇る	花坂道子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女の今縛られる	関谷富子
受入態勢に汚れる	関谷富子
折檻にも汚れず	前田真知子
責めてみた碧眼の女	佐々木真弓
日本式高小手縛	シラ・ケイ
猫の目のような女	絹川文代
足吊りの媚態	中河恵子
亀甲縛りの花	中河恵子
M女二輪の黒髪	渡部好美
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子

美しき吊り	長井葉津子
苦痛か悦楽か	関谷富子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エビ縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	座間富子
ボリウムの縛り	関谷富子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	中河恵子
汚辱の縄	金原加奈子
高小手本縛り	佐々木真弓
責めの陶酔	川路叢子
失神したマゾ女	関谷富子
前手縛りの悶	関谷富子
柱の彼方の天国	中河恵子
荒縄の海老責	三浦純子
美と縛の女神	前田真知子
可憐な置物	長井葉津子
ながし目の天使	佐々木真弓
酒の肴になる	川路叢子
妖蛇の洗礼	関谷富子
奔弄されるままに	前田真知子
海老縛りの妙味	川路叢子
柱につながられた女	長井葉津子
痛さをこらえる異国	関谷富子
責めの諦観	前田真知子
ホスレス裸人生	佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記 辻村 鉄三

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

入選作品の著者

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社編集部宛

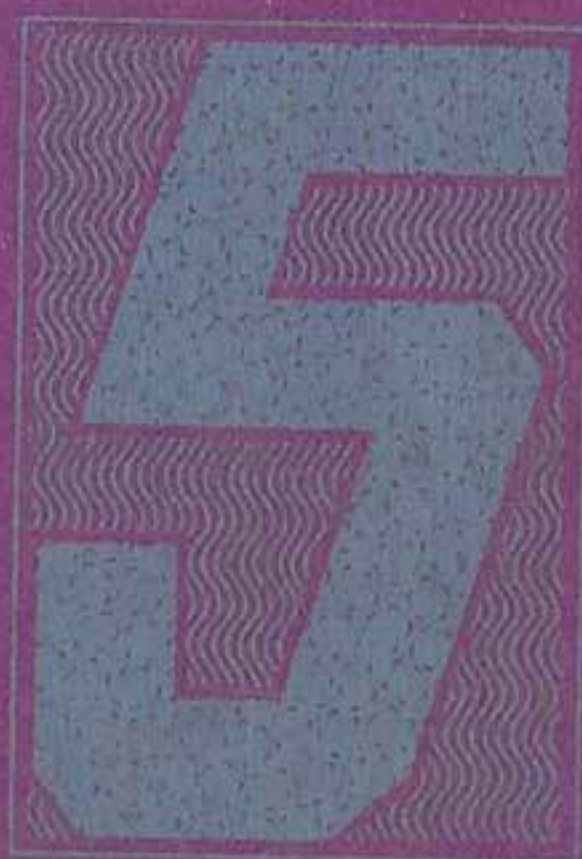
奇譚クラブ

昭和四十七年四月二十日印刷 昭和四十七年五月一日発行 五月号(第二十六卷第五号)毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大塚特別授承認雜誌第二一〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



縛られた憂愁の麗人

梨花悠紀子



奇

譚

ク

ラ

ブ

五月号目次

△昭和四十七年▽

△第二十六卷Ⅱ第五号Ⅱ通刊第二九一号▽

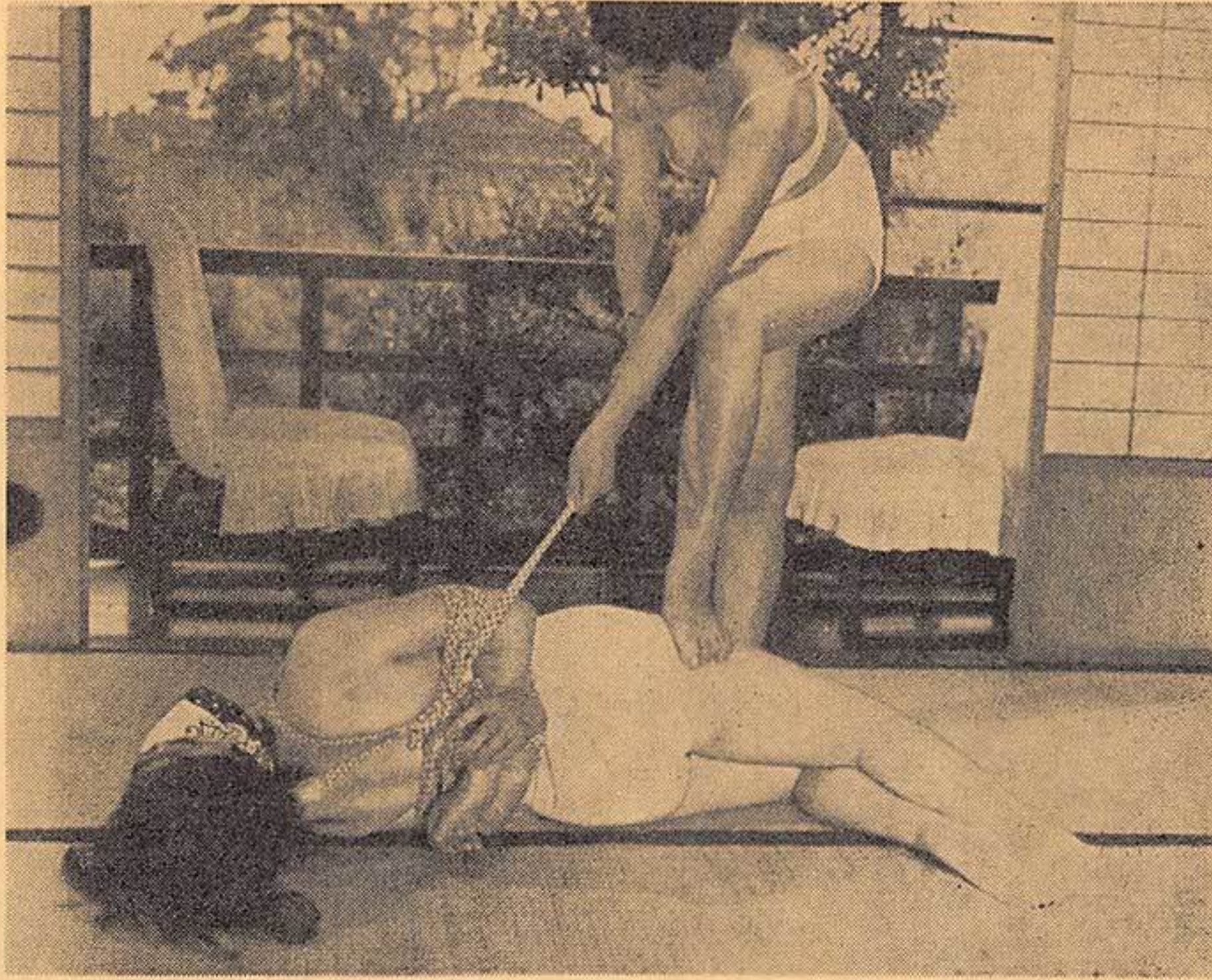
巻頭緊縛美フォト

- 縛られた憂愁の麗人……………梨花 悠紀子
“京都慕情”を綴る乙女(四葉)……………前田 真知子
マダム“芙美代”は語る(四葉)……………福井 桃子
激しき『SMプレイ』の名残り(二葉)……………江口 淑子

本

文

- フォト「無防備にさらす肌」△左近麻里子▽……………木村 勉……………(13)
吊り責め体験談『女体吊り責め考』……………香川紘一郎……………(14)
告白“黒髪に溺れる”……………後藤 執生……………(20)
女責め図 絵の系譜 “あるアヌス・マニアの告白”……………南 彦造……………(24)
SM同好者の皆様へ「好美のお便り」……………渡部 好美……………(36)
小説「拷問クラブ」……………鶴見 浩一……………(44)
シリーズⅡ5Ⅱ『女体絶叫』……………上条 直……………(56)
浣腸体験告白“妖花の泉”……………福井 桃子……………(62)
九カ月の『私の蛙腹を責めてみて』……………北川まりこ……………(74)
妊婦の告白 “まりこの結婚式”……………山光 純……………(76)
連載S大河小説 パロディ『花と蛇』(六)……………(76)



奇クサロン

(228)

四月号を喜び五月号を期待する	大原 茂
夫婦プレイに思う	土田 純一
マダム美美代の蛙腹に驚く	大原 女生
那津子にとまどう	長田 二郎
愛妻弘美の緊縛フォト	井上 浩
告白「懐剣の妻の初夜」	井上 則子
まり子の替歌「マゾ女ワルツ」	北川 まりこ
桃子取材に対する願望と提案	国川 栄一
サロン楽我記 第九十五回	辻村 隆
私の近作を語る	浜浦 順一
「被虐と浣腸の幻想」に寄せて	渡川 真
イメージ画「無情の搾衣」	黒田 縛
深田菊子を謳う	広島 一騎
S M誌氾濫の中の奇クに望む	竹迫 誠也
砂川圭子さんへ「デートの申込み」	島田 悦史
私がモデル志願したことなど	南 加津子
渡部夫妻に「純愛の人を讃えて」	瞳 輝太郎
編集部だより	編集部
鈴木千鶴子さんを浣腸責めにしたい	平山 連浣
夫婦プレイの断片	阪東 太郎
短信往来 高村浩子様へ	奈良 秀夫
〃 小杉千恵様へ	北撰の石田
自殺志願者の話	松山 壮吉
映画の人間馬シーン	佐野 寿

新聞切抜帖「あぶちつく受感」……………虹丸 虹吉……………(86)

M女通信

『私は縛りのモデルになりたい』……………高村 浩子……………(88)

連載小説「大噴火」△第四十四回……………千葉 青鬼……………(94)

告白「マゾヒストの手紙」……………安田 隆夫……………(102)

懸賞入選創作『性奴記』……………城崎 恭介……………(104)

創作「裏切りの処刑」……………南 はじめ……………(128)

S Mカメラ・ハント△石田敦子の巻△……………辻村 隆……………(134)

『官能のたわむれ』……………国川 栄一……………(158)

擬作「花と蛇」「愛する静子さまへ」……………乃美 対造……………(178)

連載・時代S小説『紫蘭の門』(9)……………風流極道軒……………(162)

読者投稿「再会的美酒に酔いて」……………乃美 対造……………(178)

連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(27)……………鬼山 絢策……………(180)

残酷ショートショート「うらめしや」……………小倉 幸男……………(192)

カメラ・ルポ『東京の踊子緊縛記』……………塚本 鉄三……………(194)

懸賞入選創作『サドの競演』……………工月 洋一……………(216)

読者通信……………編集部選……………(256)

イメージギャラリーII「家出娘受難」志羽利也(28)……………「坐れぬ腰掛」

絹川美代子(28)……………「移動する熱点」須坂旭(31)……………「舌いじめ」岡たか

し(51)……………「苦悦への招待」須坂旭(81)……………「滑走の快」春川ナミオ(87)

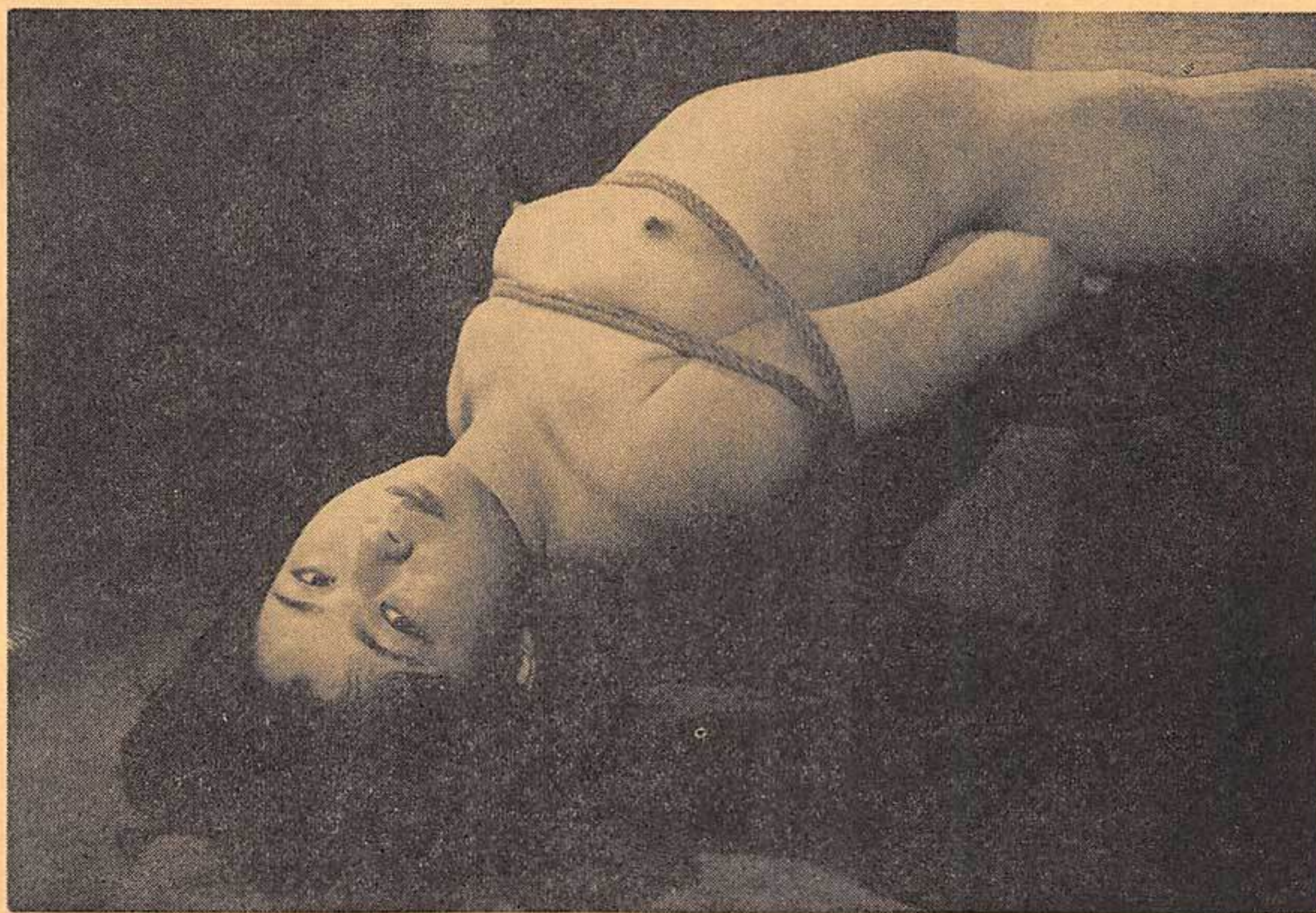
・「女体のキシミ」志羽利也(110)……………「鎖のキシミ」M・S生(116)……………「歯

車のキシミ」岡たかし(122)……………「柔肌極刑」市原幸三郎(168)……………「笑い

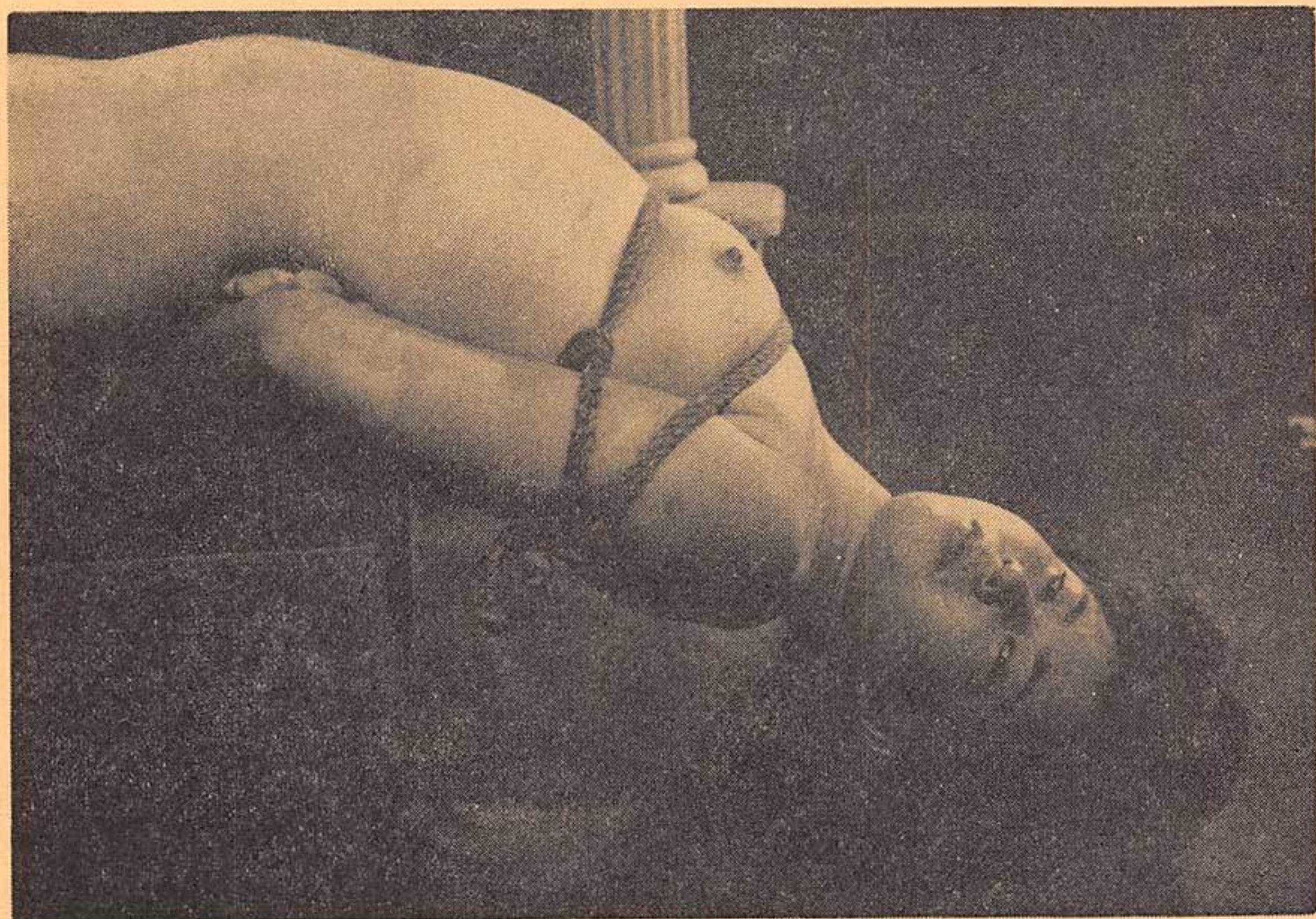
の強制」須坂旭(171)……………「獣欲のいけにえ」小川茂正(174)……………「歓迎ベル

ト」志羽利也(220)……………「新型マッド」春川ナミオ(224)……………三木敬子・浜本喜美

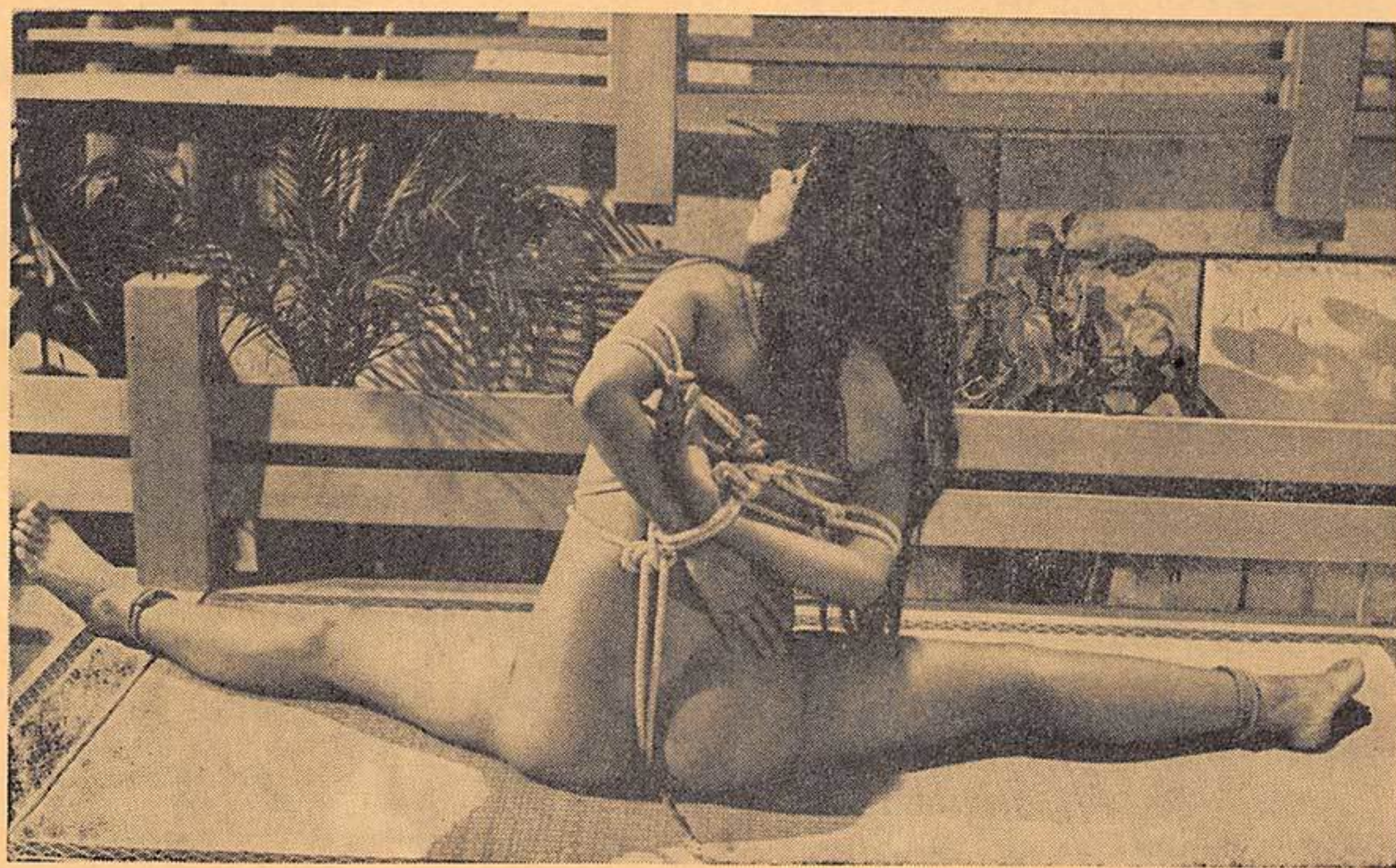
目次フォト「華麗な戯れ」……………三木敬子・浜本喜美

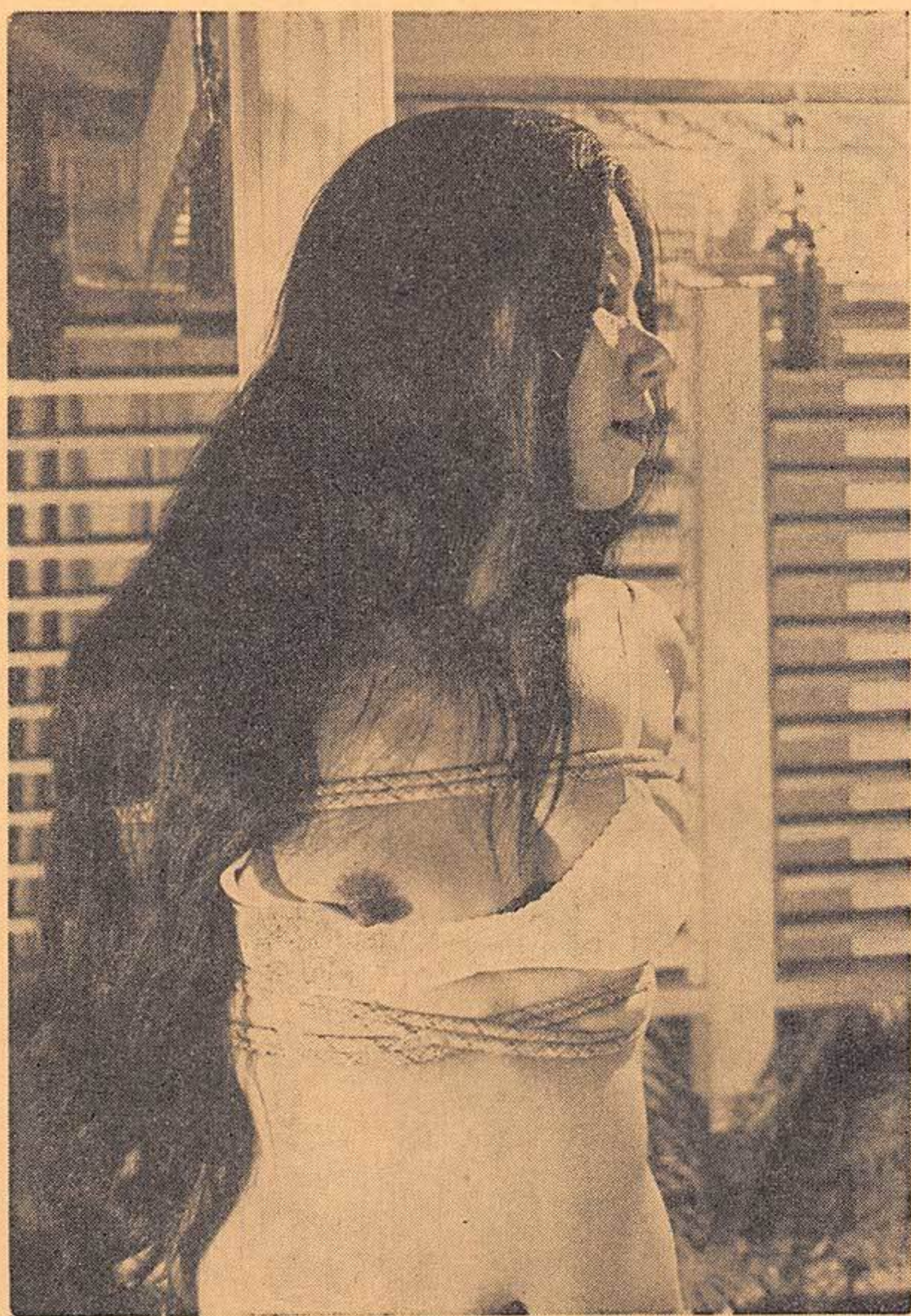
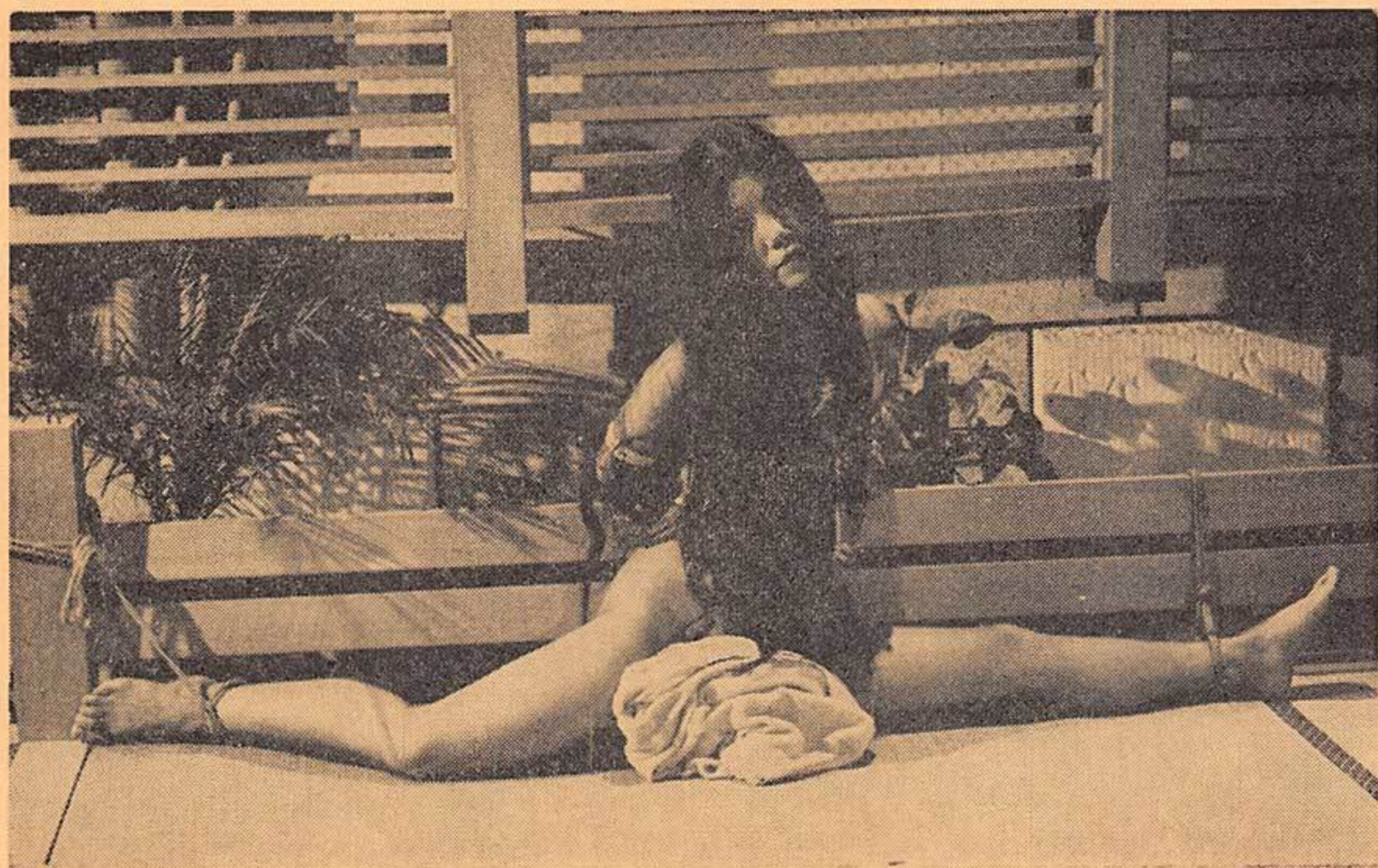


『京都慕情』を綴る乙女

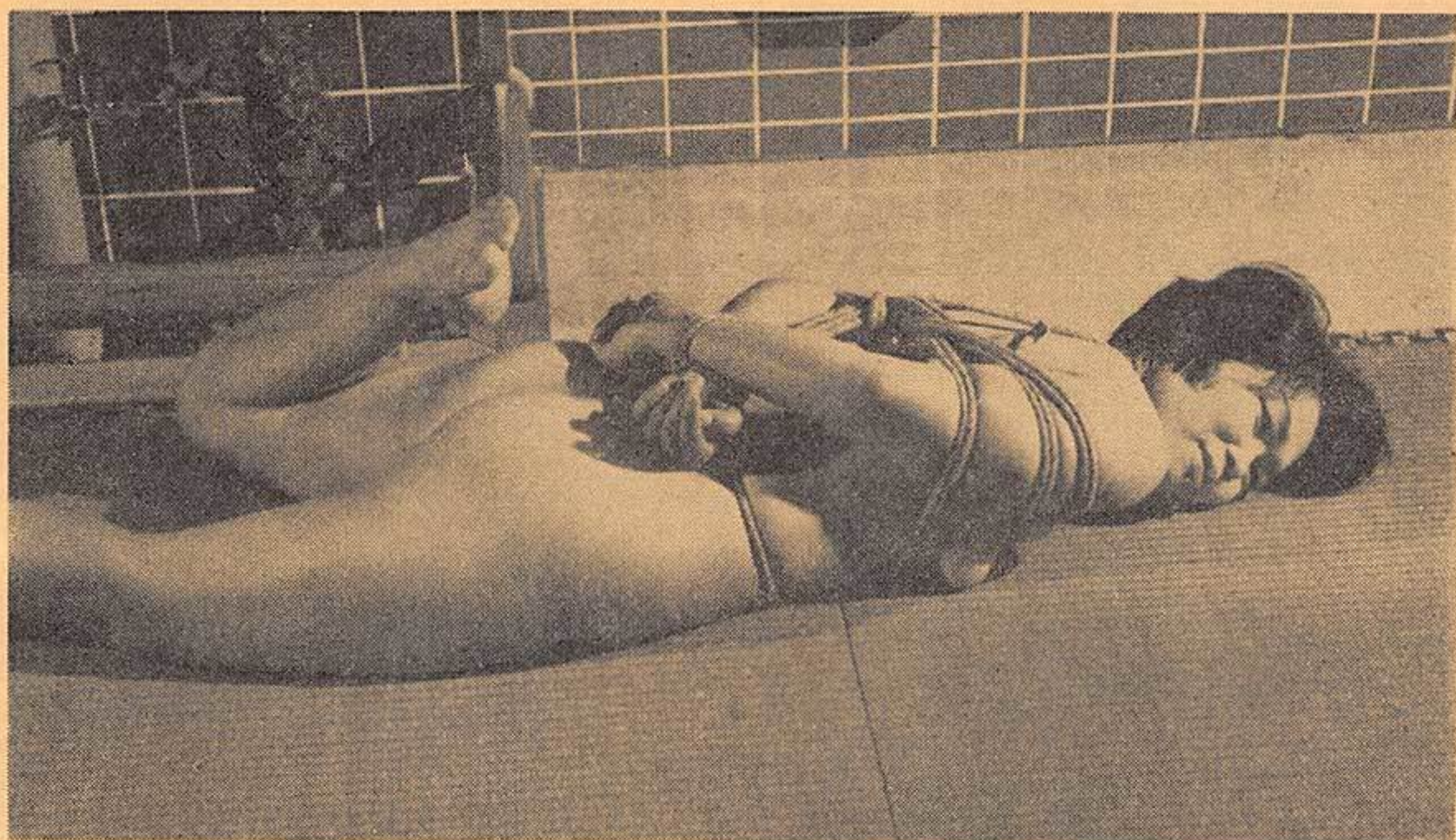


マダム「芙美代」は語る



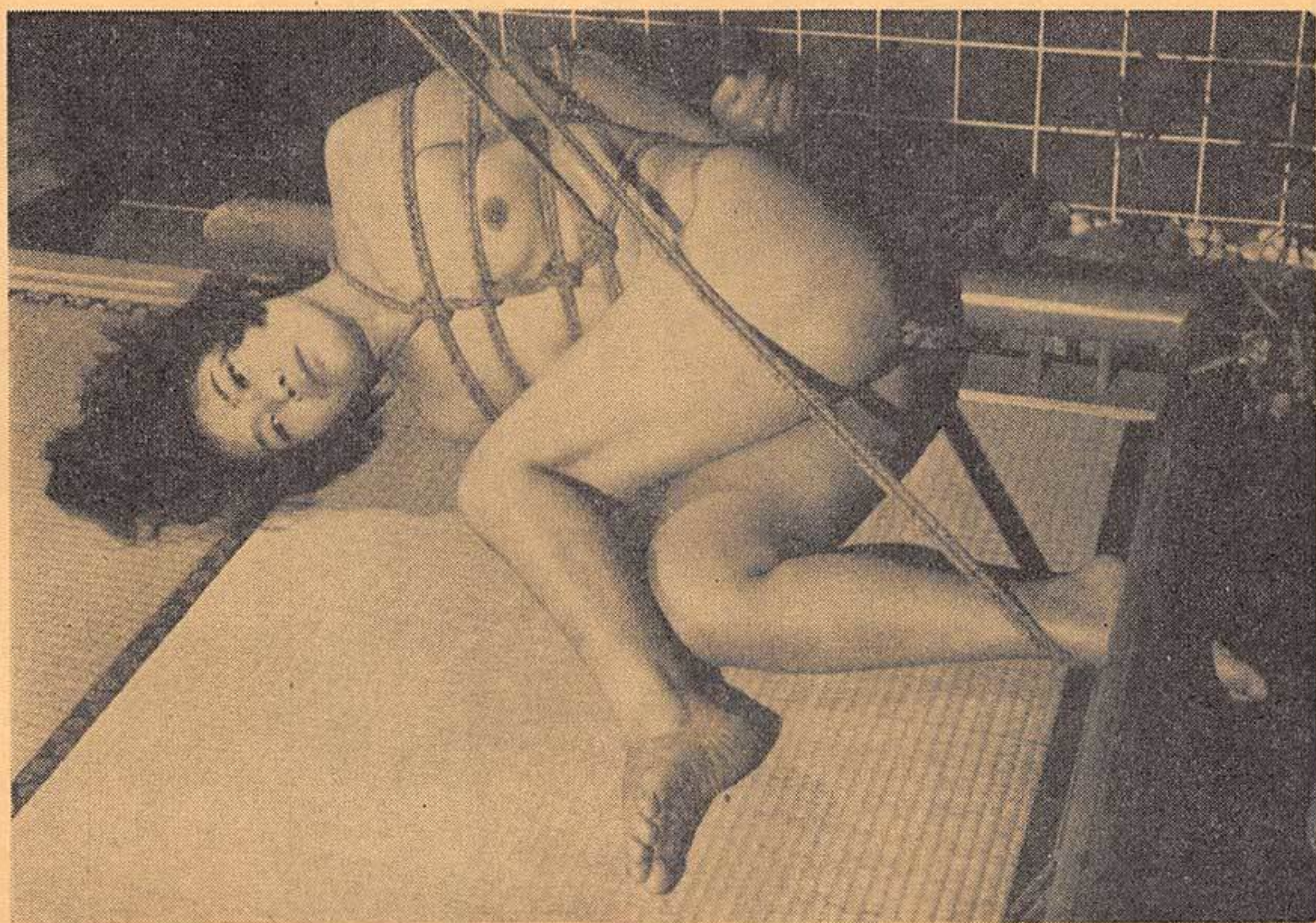


福井桃子



激しき『SMプレイ』の名残り

江口淑子



奇

譚

ク

ラ

ブ

1 9 7 2 年 5 月 号

<第 26 卷 第 5 号 ・ 通 刊 第 291 号>

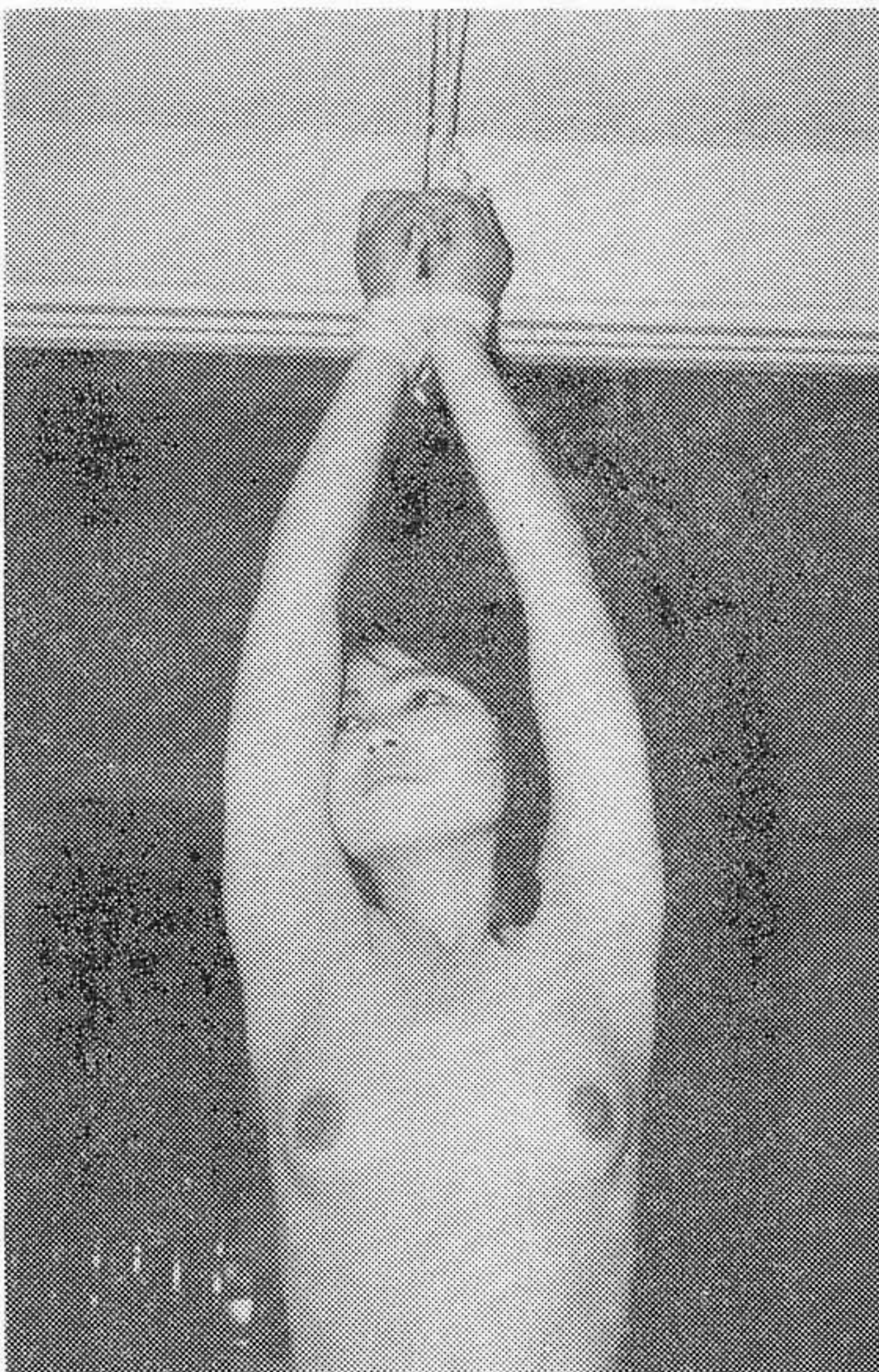
無防備にさらす肌

両手を吊られた女。下半身からパリリと下着が床の上に落ちて、真白い裸身が剝玉子のように視線の中に飛び込んでくる。伸びきった腋の下から脇腹にかけて、何一つ掩うものとしてない柔肌が、これ見よがしにむきだしになっている無防備感が彼女にとっては、たま

らない攻撃のムチとなって襲ってくるのである。現実には操りの手もムチもないのであるが、彼女の想念のなかには、絶え間ない被虐の思いが波うっているであろう。

(本村 勉・記)

△ 左 近 麻里子 ▽



／読者投稿＼

女体吊り責め考

／私の吊り責め体験談＼

香川 紘一郎

私は女体を責めることについての美感覚、或は縄で縛られたところの女体の美しさについての経験を以前より持ってきましたが、最近よく奇ク誌上でも言われています縄によるSMプレイも、結局は女体の美しさの強調にあると思っています。

私達が女性と一緒に生活する際、やはり彼女達には美しくあってほしいし、彼女達もまた、鑑賞者である男性には、より美しく見てほしいという欲望を、きっと持っていると思うのです。特に私のようなS傾向の者にとっ

ては、縄こそ女性の美を最大限に発揮させてくれる格好の小道具だと信じております。

この意味で、私は今までに、いろいろの女性を縄を用いて、いろいろに責めてまいりました。幸いにしてMがかった、よき女性の協力のもとに、女体責めの醍醐味を十分に味わってきましたが、縄によるSMプレイ、ひいては縄を用いた女体責めの究極の一つはハ女体吊りVであるという結論に達しました。

サディストといえば語弊があるとすれば、縄によるSMプレイ信奉者なら、一度は女体

を吊るしてみたいという欲望を持つだろうと思いますし、また反面、マゾヒストにすれば吊るされてみたいと思うことでしょう。

塚本鉄三氏の文に依れば、鞭に対して洗練された趣向を持つ関谷富佐子さんが、吊るし責めにして鞭打ってほしいと言っていたというのですが、M女性であったなら、当然の題望であると思います。

縛られて宙に吊るされた女体は、完全に自由を失ってしまい、相手の思うままにされるほかはないのです。しかも、前後左右、あら

ゆるる角度からの嗜虐者の視線を真向に受けて防ぎようがないのです。身の置きどころのない羞恥と縄によって宙吊りにされた肉体的苛責から逃がれる事ができないのです。

江戸時代には、海老責め、石抱きと共に、吊り責めは最も厳しい拷問とされていただけにサディスト、マゾヒストの限らない夢をはらんでいる責め方といえるでしょう。

吊り責めといっても、いろいろの方法があるでしょうが、特に後手縛りの吊りは、縄の掛け方次第で苦痛も最も激しく、やり方によってはSMプレイの域を越えた文字通り真の拷問になりかねません。

それだけに、もし完全な宙吊り責めを許容するM女性があるとしたら、それこそ、貴重な真のマゾであると言えるでしょう。

私は何人もの若い女性を責めの対象として



選び、縄で縛ってまいりましたが、吊り責めにまで進んだ相手は多くありません。しかしSM愛好者としての私の吊り責めへの夢断ち難く、格好の対象礼子という女性を得て、何度となく吊り責めの実験を試みました。

礼子は年令二十三才、中肉中背で縄で縛られるということは、最初のうちは拒否もせず

歓迎もせずといった態度だったのですが、それがSMプレイの回を重ねるに従って次第次第に興味を増してきたようです。もともとMの素質があったところへ、縄の洗礼を受け、私というS愛好者の飼育と相俟って、現在のような完全に近いMになったのでしょうか。

辛抱よく、徐々に縄に慣らし、縄に慣れてくると、次第に縛りの強さを増していったのですがそれがいつとはなしに彼女自身の口から「吊り責めにしてほしいわ」と言い出すようになってしまったのです。

といっても、簡単に吊り責めをやったのかというと、そうでもありません。SM信奉者としての私は、吊り責めへの夢が捨て難くて少しでも早くやってみたいという気持が強かったのですが、なにしろ、私一人で責め役兼カメラマンの役目、それにSMプレイヤーと



しても活躍しなければなりませんので、一朝一夕に成功しませんでした。

或時は、準備をしたまま、SMプレイヤーとしてハッスルしてしまい、私の方がダウンしてしまったこともあります。また、後手の縛り方が悪くて逆手がひらきすぎて、苦痛に耐えきれなくて中止したこともあります。

女体に対するあらゆる縛り方、責め方を経験した上で、女体責めの究極のものが、女体

の吊りであるという結論に達したのですから一回や二回の失敗でくじけることなく、辛抱強く機を見ては試みました。

私の経験では、固い細引きや新しいロープなんかより、棕櫚縄とか荒縄なんかの方がよいようで、私は専ら女体を縛る縄は後者の縄を用いています。直接、女体を縛る以外の、即ち女体を宙に吊る際の縄は、やはり余り太くなくて丈夫なものがよいようです。

そして、何といっても、△女体吊り責め▽で一番、大切なことは対象の女性です。簡単な緩い縛りぐらいだったら、まだいいのですが、少なくとも宙に女体を吊るということになりますと、やはりSMに関心のある女性、欲を言えばマゾ女性でないと無理でしょう。

それと、余り体重のある大柄で肥った女性の吊りは困難です。私は以前、二年ばかり縛ってきた女性を吊ってやろうと試みたことがありましたが、体重が六十キロを軽くオーバーしていた程の肥満体だったので、本人にその気があったのに、成功しませんでした。

余り体重があると滑車を用いても私一人の手におえませんし、彼女もまた、自分の体重を縄で支えきれなくなってしまう。従って体重が五十キロ以内の小柄でヤセ型の女性だと扱い易いといえます。その点、トランジスター・グラマーが△女体吊り責め▽のヒロインとしては本命になります。

第一支点と第二支点に滑車を使えば、一人の力でも容易に五十キロぐらいの女体だった宙に浮かすことが出来ますが、女体の縛り方如何では、折角、女体が宙に浮き上がっても、痛さや苦しさに耐えきれず、涙をのんで中止しなければならないことも多いのです。

滑車を用いずに踏台を使って、先に女体を縛っておいて台をとりはずすという方法もありますが、後手縛りの吊りをするときなんかは、この方法は案外、便利です。しかし、この方法ですと、一旦、踏台をはずしてしましますと、縛った縄に全体重が一度にかかってしまい、女体が苦痛に耐えきれなくなった時の救済手段に困ることです。踏台をはずした途端、縄が伸びて女体の位置が最初から大分下がるので、急にあわてて踏台を下へ持っていったって用をなさないことが多いのです。

だから、縄を解くときのことと考えて、はじめの踏台、又は卓や机の外に一段、低い踏台のようなものを準備しておいた方がよいように思います。

△女体吊り責めVのポーズとしましては、やはりSファンとしては逆さ吊りのダイナミックな残酷美にひかれます。両足首を揃えて縛った一本吊りも息づまるような迫力のある美しさを感じることが出来ますし、また両脚を思いきり八の字に広げた逆さ吊りも、まことにエロチックで、いろいろの空想を働かしてS心をくすぐってくれます。

両手と両足を揃えて一緒にして吊った、いわゆる猪吊りは、やり方によっては女体の苦

痛をやわらげて、吊りとしては少々耐久力のある縛り方ですが、無防備な裸身を嗜虐者の目にさらすという点では、最も適当した責めのポーズだと私は思っています。なにしろ、丸々と突き出た臀部が、何のさえぎるものもなく、ぶらぶらしているのですから、Sの鋭い視線から逃げるすべもありません。しかも両手と両足が全く使えないというのですからマゾ女性にとっては、こんな羞恥の極点はないでしょう。

『駿河問い』という拷問の方法は、このポ

ーズで女体をぐるぐると廻して責めるのだそうですが、私達Sファンとしましては、まだまだ、もっと変わった羞恥責めがあるような気がしてならないのです。

後手の吊りは、先にも申しました通り、江戸時代の正式の拷問の中の一つで、吊り責めというのは、これを指したのだそうです。このまま吊り下げて放置しておく、足の指先から血がしたり落ちるといわれる程、苦痛の激しい拷問だそうです。

勿論、私達ファンの行なうSMプレイは拷

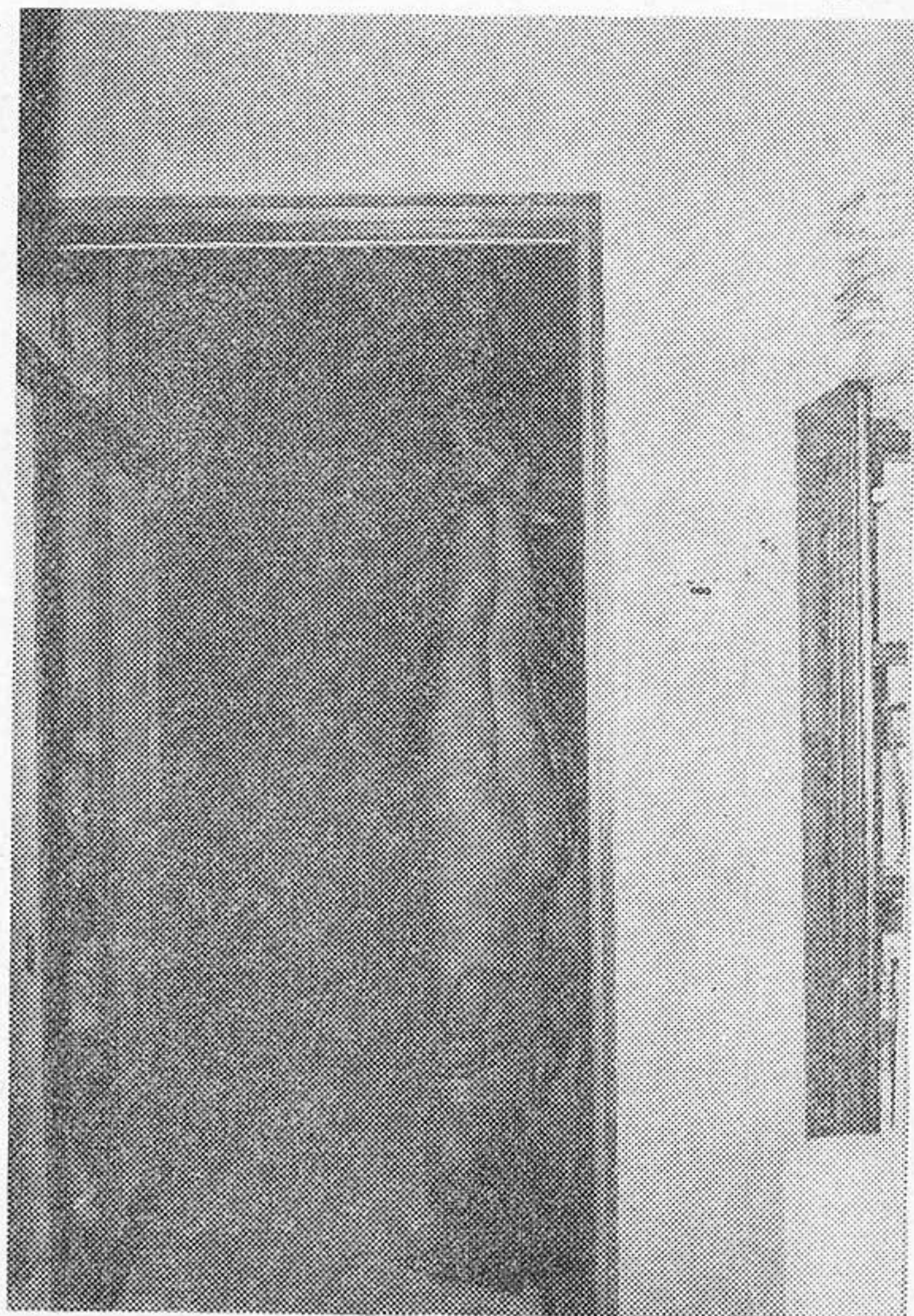


問ではなくてSMプレイですから、あくまでも女体の美しさを探究することにあるのです。

従って、或程度の苦痛が伴うことは当然としても、苦痛を与えること自体が目的ではありませんから苦痛を軽減する工夫を考えたり時間的に許容される範囲内に止めるといった手加減が必要です。これは良識あるSMファンであれば皆、行なっていることと思います。

それから、猪吊りとは反対に、両手両足を背中の方で一緒にまとめて逆エビのような格好で吊る方法も案外、残酷美もあり、しかも思ったほど女体の苦痛も激しくなくて、SMプレイとしては面白い責め方です。この吊り方で目の高さに女体が位置するくらいに吊ったら羞恥責めとしてもよいでしょう。

吊られた女体は、無防備の前面をあからさまに晒す耐えきれない羞恥感と、逆の姿勢で



宙に浮いているという不安定感とで、たえずよりどころのない不安を掩うことが出来ないでしょう。

私はまだ実験したことはないのですが、両手を揃えて縛った吊り、片足吊りなんか、想像しただけで胸がわくわくします。特に片足吊りは、もし適当なモデルが得られたなら、滑車を用いて是非やってみたいと思っています。

す。じりじり、じりじりと片足が吊られてゆくとき、残った方の足は、どのように空を蹴ってもがくことだろうと、楽しい空想をしています。相当のマゾ女性でないと、この片足吊りは中々耐えられそうにないと考えますと、尚一層やってみたい意欲にかられます。

この他、両手と両足を左右別々の支点で吊って弓なりに女体をしなわせたり、ハンモックのように宙に浮かしたりする吊りや、胴体に縄を通して吊るといった方法もありますが、女体の美しさを強調するという点では、もう一つ、よい縛り方とは申せません。

只今、私の抱えています夢は、よりよき若き女性の協力者が得られたならば、古い廃屋の梁からの逆さ吊りや山の中の松の木の枝から後手吊りをやって残酷美を追求することです。でも、こんな夢は、夢のままでおいてお

いた方がよいかもしれませんね。

ここに同封しました五葉の写真は、私が礼子をモデルとして最近実験した吊るし責め写真の一部です。よい出来ばえでもなく、また、私のSM生活の楽屋裏を見せたような写真ですが、親愛なる奇クファンのお目を煩し、たく敢て勇を揮ってお送りする次第です。

最近、奇ク誌上に投げられる読者ファンの方々の文章や写真が非常に多くなってきましたことは

私のような永年の奇クファンにとりましては非常に心強く感じます。そして一層、奇クが身近かなものに感じられるのです。

よし拙い一枚の写真であっても、それが私達と同じ奇クファンからのものであるということだけで、私達は大いに感激するのです。幸いにして、奇ク編集部は私達の共通の広場としての誌面を大きく開放して下さいいま



すので、どうか読者相互で資料を持ち寄って誌面を飾ってゆこうではありませんか。

奇クの大きな特徴の一つとして、読者の手に依って誌面の広範囲を占めて構成しているということを挙げることが出来ます。既成作家をずらりと並べるといふ雑誌のやり方は、商業ペースの上では、確かに最も安全であり且、一番に有利なのは当然のことです。そ

れを奇クでは、不利な面に目をつぶって敢て読者のために広く誌面を開放しているのですから、その大胆なサービス精神は大いに多とすべきでしょう。従って、読者の方々におかれては、各々自分の特異な持味を活かした投稿をされるのが此の際大切です。引っ込み思案では何の進歩もありません。投稿してこそ同好者の友達も出来、プレイメイトとも逢えるのではないのでしょうか。

吊り責め愛好者にして、大橋美代子さんのような方もあります。他にも、もっと沢山のかくれた愛好者が、きっとおられることでしょう。その意味で、先ず私のつまらない作品を皮切りとして出させて頂きました。誌友各氏のご批判とご叱正を賜れば幸いです。

——(おわり)——



カット・柏木 真佐男

私のかくれた性癖、それは二十五才を過ぎた頃より序々に現われて来たようです。

当時は、二十五才とはいっても、現在三十才の私にとっては、まだまだ、すべての点で幼稚なもので、具体的にどうということはありませんでしたが、年を経るごとに、それは顕著に現われて来たのでした。

そうです。私は、この広い世の中で、人は皆それぞれ、その程度の差こそあれ、そしてそれが本人に自覚されているかないかというだけで、皆が多少は持っているS、あるいはM的傾向といった性質だけではなく、はっきりと自覚する毛髪フェチズム併有者なのです。

あの「緑なす黒髪」といった表現。「滝のように背に流れる黒髪」又は「丈なす黒髪」等の文章で表現される女性の黒髪に徐々に、それこそ徐々に魅せられていったのです。

髪は女性の命とまでいわれます。

その髪の感触。冷々としたあの手触りと、その匂い。この世の中で、人間を作られた神々の傑作の一つに黒髪が挙げられると思いますが、いかがなものでしょうか。

私のこの性癖には波があると見え、高まる時期には、街を歩く若い女性の素直な、それこそ生まれてこのかた、パーマネント・ウェーブをかけたことのないと思われる黒髪、それも背の中程までも伸ばした人を見かけると

告

白

黒髪に溺れる

後 藤 執 生

もうそれだけで胸が高まり、早鐘のような動悸を覚える程なのです。

ああ、あの黒髪に触ってみたい。そのつぎには髪を一束にして握り締めてみたい。あるいは頬ずりしてみたい等と思ううちに、やはり最後の結論としては、あの黒髪を切り取って自分のものにしてみたいものだ、いつしか思っている自分自身に気がついて、呆然となるのです。

そのくせ、そのように髪に惹かれながら、ショート・カットにした髪、あるいはパーマネントをかけて縮らせた髪等には、一片の関心も興奮も呼び起こされる事はないのです。私の憧れる唯一の条件、それは、生まれた

ままの自然の長い黒髪、それだけなのです。

私は三十才で結婚しました。幸い妻は平凡な女で、全く夫である私に従順そのものでした。もちろん、私は早速、妻に髪を長く伸ばすように命じましたので結婚後、約三年半の頃には、パーマネントをかけぬ髪は黒々と長く、それは乳房が充分にかくれるくらいにまで伸び、私は種々工夫を凝らして、妻の長い髪を私好みに活用するようになりました。

髪を女学生のように三つ編みにさせたり、さるぐつわの代用に、長い黒髪を丸めて口の中に全部、押し込んだり、その他、考えつく限りの方法で、刺戟剤として活用したものです。

やがて私は、長い間の念願だったこと、つまり、女性の長い髪を、うなじの辺りで一つかみに束にして、鋏でジョキ、ジョキと切り取ってみたいという、執念にも似たその願いを、一夜、行なってみたのです。

よく切れる大きな鋏、それと十数コの輪ゴムとを事前に用意し、全裸にした妻を、二枚程の広げた新聞紙の上に正座させ、先ず三、四本の輪ゴムで、髪を首すじの辺りで一束にしっかりと縛り、そして、胸の高鳴るままに一気に鋏を入れたのです。

あの、切る時のジョリ、ジョリという音。

切り離れた瞬間に手許に残った三十センチ程の一束の黒髪。その湿った感じで一寸、冷たい感触。そして、ずっしりとした重さ、それらが言葉には表わせない感激でした。あの時の光景は、忘れようとしても忘れられないものがあるのです。

しかし、世の中の髪に関心のない人達が、この私の告白を読めば、必ず狂気の沙汰といわれる事は、まちがいですまい。そしてその性癖の不可解な点について、声を大にして論じられることと思います。しかし、このような性癖を有する私としては、極言すればセックスそれ自体よりも、黒髪の方に数倍の魅力を感じるのです。具体的には、どうということのない唯の一束の毛髪に……。

私は、その切り取った黒髪の束端を、バラバラにならないように、しっかりと十コ位の輪ゴムで縛り、大切に保存しています。少し暇があると取り出してヘア・ブラシをかけたりして、常に艶々とした状態を失わぬように心掛けています。時にはリンスまでも使って……。

このような性癖を有する私には、奇ク誌上を振わしている方達が使用されているらしい

女体責めの小道具類、例えばコケシ、コーラのビン、ソーセージ等と同様に、黒髪の束がある訳です。

深夜の我が家のティ・タイムで、紅茶を用意するために台所に立つ妻は、ピンクの前掛けの外には何も着けていません。その代りに、その前掛けの下には、約三十センチの黒髪の束があるというより、その内の二十五センチばかりが、ぶら下がっているのです。そして、立ち働く動作によって脱落しないように、魚釣り用のテグスで止めてあるのです。その眺めは、髪フェチの私にとっては最高の素晴らしさといえます。

紅茶をいれ終わってからは、その時の気分次第でSMプレーの軽いものや、そのまま浅くソファに腰かけさせ、肘掛けに足を載せた、いわゆる開股ポーズでテレビを観賞させたりします。

明るい電灯の光を浴び、艶々と光ってソファから垂れ下がっている黒髪！ そのシーンは、黒髪マニアたる私にとって何ともいえないものがあるのです。

その他のプレーで例をとると、ソファに深々と腰掛けてタバコをくゆらせている私の目の前で、前記状態のまま菱縄縛りにした妻に

—— イメージギャラリー —— 『家出娘受難』 —— 志羽利也 ——



部屋中、狭しと踊らせたり、菱縄縛りの代りにボディ・ペインティングを施してスネークダンスをさせたりして楽しむのですが、一寸したアイデアでも、かなり趣向の変わったものができるもので、妻の長い黒髪を三つ編みにして、赤いリボンをつけ、更に、その一束

の頭髪も三つ編みにしてリボンをつけ、その上で踊らせたりするので。

私も夫婦の、何カ月かに一度の本格的なSMPは少しばかり強烈で、主体は「髪吊りプレイ」なのです。

先ず、入浴した後の妻の長い髪を丹念に梳

いて、その髪を頭頂部でしっかりと強い細紐で固定するのですが、しかし、この黒髪の固定ということは、簡単なようで非常に難しいことを、少しでも力を抜いて縛ると、すぐ、すっぱ抜けてしまうことで知りました。だから、何度か失敗し、考え抜いた末に、頭頂部で一束にしっかりと固定した部分を、更にワイヤー・クリップで止めることを思いつきました。そうしておいて、部屋のカモイの真下に食堂用テーブルを置き、全裸菱縄縛りの妻を坐らせ、両膝を別々の縄で縛ってカモイに固定した上で、ワイヤー・クリップをつけた髪にも縄を取りつけて、カモイに固定し、テーブルをどけると、妻の体は両膝を縛った二本の縄と、髪を縛った縄との三本によって、空中に吊り下げられてしまう訳です。

自分なりの考えですが、これはかなり強烈な責めで、体重の半分以上は頭髪によって支えられる訳で、準備に手間がかかるだけに早く終わるのが残念ですが、せいぜい十分前後で止めるようにしています。

私も一度、この責めを撮して投稿したいと思っておりますが、その節には是非、諸先輩方の御批評をいただきたいと思ひます。

このようにして、私はある程度の願望は果

たした訳ですが、一面では、あらゆる蒐集癖の人達が似かよった道を辿るように、私は黒髪の蒐集を思い立ったのです。

話は一寸もどりますが、妻の髪は切った翌日から又、伸ばし始め、それから約三年半、経った現在は以前より、もっと長くなりSMPの小道具として結構、役にたっています。

さて、蒐集を思い立ったものの、適当に長くて素直な黒髪となると、物が物だけに誰にでも分けて下さいと頼めるものでなし、といって売っているものでもなく、一口にいつて大変な労苦でした。金と暇と熱意がなければ到底、集められる品物？ ではありません。それも、切ったクズのような短い髪ではなく少なくとも二十五センチから三十センチ以上の、パーマネントのかかっていない若い女性の黒髪の束なのです。

一本か二本ならともかく、一人分宛となると、普通では先ず不可能に近いものです。しかし、私は諦めきれずに、いろいろと考え、悩み、半年位の期間を費やして、遂にワリと確実に、且、合法的に、あるルートを通じて買い求めることに成功したのです。

しかしそれは、いつでも手に入るというものではありません。一カ月、待って一人分、

二カ月経って三人分という程度です。しかしこの計画が実現してから約三年、経った現在チリも積もれば何とやらで、短いのは二十センチ位、長いのは六十センチ位の女性の黒髪の束が、五十数人分も集めることが出来たのです。その間に使った金は、ざっと計算して二十数万円にもなると思いますが、要は金より熱意によって得られたものだと思っています。根気と熱意がなければ、仮に金はあっても一人分も集まらなかったことでしょう。

蒐集した黒髪の束は、一人分宛、しっかりと切り口に近い部分を輪ゴムで縛ってありますが、部屋の中で並べて拡げると優に畳二畳分の場所をとります。もちろん全部、パーマのかかっていない女性の黒髪なのです。その全部を拡げて眺める時、手入れをする時又は、それらの髪束を使用して、SMPをする時が、私の一番充実した満足すべき状態にある時なのです。

時々私は、このようなものを必死になって金と貴重な時間を使って蒐集する価値があるのだろうかと考えてしまいます。しかし、全てのコレクションというものは、特別な物を除いて殆どが、そのような論理でいけば、無意味、無価値で片づけられてしまうと思うの

です。

無意味なことを一生懸命にしているというところに、人間の悲しさがあるのではないのでしょうか。

今晚も、この告白文を書きながら、長いソファの背もたれから坐る場所いっぱい、黒々と、そして艶々と光る黒髪の束を拡げているのです。それらは、どれも手にとってみると、しつとりと、そしてずしりとした重みが、私の手のひらにかかって来るのです。

女性の素直で長い、そして豊かな艶を持つ黒髪よ、万歳！ お前は、いつまでも変わらずに私の心を豊かにしてくれることだろう。

「追記」

奇ク読歴約一年半ですが髪に特別な関心を持たれている方の記事が少ないようで残念です。四十六年十月号に「頭髮フェチ冥想」髪」を書かれた松原様と同じく、同年十二月号に読者通信で寄稿された北九州市の関司生様の「髪に髪に関して書かれています、まだ他に知られるのはないでしょうか。もし、おられるとすれば、その方達は、いかにして御自分の性癖を処理なされているのでしょうか。ただ悶々とされているばかりではないと思います、奇ク誌上で御意見をお聞かせ下さい。

女責め図絵の系譜

あるアヌス・マニアの告白

南彦造（カットも）



—ある接吻風景—
 既世の歴史に於ては
 男女の接吻は、このまゝに
 方法と態度と見られた。

○ 先日——東京近郊にある「ヌード劇場」の「招待券」を貰ったので、久しぶりで見に行った。
 御承知の通り、都内では八浅草六区Vの劇場を始め、新宿、渋谷、上野——池袋でも八全裸Vは許されず、所謂「特出」に到っては「検束」ものだから、淋れる一方だ。
 しかし八そのものズバリVでないと八見たよう

な？ 気がしないVのだそうで、地方を除いては、入場者も少ない——興行動員数の「激減」が結果を物語っている。

この劇場は——週刊誌、その他のスポーツ紙で紹介されている八有名Vな劇場というだけあって——観客動員数はかなり多い。内容自体も、立派？ であつた。

あまり八活字Vでは、表現し難いので、内容は御想像に、お委せしたいが、とにかく、あるマニアにとっては十分楽しめる演出ぶりであつたと思う。

○ 今回は、そこで知り合った、若い男性の趣味や趣向が面白かったので——意気投合し、劇場を出てからも、近くの喫茶店で談笑したので紹介したい——と思う。

○ 彼は、市内の板金工場の技術員である。肉体も逞しく、陽に焼けた男らしい顔つきと隠しだてのない告白が、リラックス調だったので、私のようなサド・マゾ派ではなかった（勿論、興味は持つが）話題を集めたい——と思う者にとっては、大変、好都合だった。
 私は——元来サド派だが、八血醒いSM愛好者Vは大嫌いだ。サドにしても八プレイ的なサドVとか八ソフトなマゾヒストVなら、

△好感▽は持てるが△犯罪的な要素▽を含み
 そうなSMに対しては△嫌悪の情▽を催すだ
 けだ。辻村隆氏の仰有るような△前技として
 のSM▽とか△プレイとしてのSM▽愛好者
 だったら、むしろ△歓迎したい▽と思ってい
 るものだからだ。

私の知友で——東大のエリート・コースを
 進み、父親が某大会社の重鎮である処から、
 彼も凄い会社の△営業マン▽として、海外駐
 在員も歴任し、現在も△有能社員▽として、
 活躍している男がいる。

だが、その有能な彼が△欠点▽とされてい
 るのは△二回も才色兼備の奥さんと離婚▽し
 なければならなかったことだ。

私も心配して理由を聴くと——彼は卒直に
 △私はサドですからね▽と云う。

「どうしてもサドでなくては、生きて行かれ
 ないのですか？」

と聞くと、また、あっさりと——

「すぐ殴ったり、縛っちまうんですよ！」

と頭の裏をペコンと叩き乍ら、羞かしそう
 に嘲う。その仕草には△どう見ても、悪質な
 加虐趣味はない▽と思うのだが、彼の実際の
 △夫婦生活▽を眺めていないから——真相は
 どの程度だか、瞭り判らない。

「君の……好みに迎合してくれる女性が現わ
 れると……いいんだがねエ」

と私は、気の毒になって彼を見つめる。

「一生、なおらんでしょう。性格だからネ」

と淡々として語る彼——。私は△彼に一番
 ふさわしい▽ピッタリした△奥さん▽が、現
 われぬものか——と、何時も同情的になる。

私は、彼の注文で、彼だけの△秘蔵画▽を
 描いてやった事があった。すると——彼は、
 私の原画を眺めて——

「この辺りの腰の線が不自然だよ！ 女の子
 を縛って……こう転がすとねエ……この辺り
 の筋肉が……円々と、このくらいにまで……
 盛り上がって……こんな形に……」

と、自分なりに鉛筆の線を入れて△修正▽
 して終まうのだ。

「おいおい！ それじゃア、まるっきり……」

俺の……線が消えちまうぜ！ 酷い奴だ！」

と私は詰る。すると彼は……

「君は、想像で描いているから不可ンのさ！
 実際に縛ったら……こんなもんじゃないぜ
 ！」

と真顔になって、否定する。

私は△まいったく、その通りだ▽と思う。女
 の子なんか縛った事がない——のであった。

彼は△極秘▽だと言って、他言無用の△条
 件つきで▽彼の撮影した△縛り写真▽を数枚
 見せてくれた。

それは——想像を絶した、物凄い緊縛の姿
 態であった。これだけのポーズが撮せるのに
 ——何故に、私のような者の描いた△稚拙な
 絵画の構図▽を求めるのか？ それが不思議
 でなかった。すると——彼は△絵には写
 真で撮影出来ない第四次元の世界があるから
 さ▽と答えた。

第四次元の世界とは？ 彼だけが描き続け
 る△サド・マゾの境地▽であろうか？ 写真
 などでは到底、撮り得ない△耽美の極致▽な
 のかも知れない。

彼は、そのポーズを——彼の愛妻に求めた
 のであろうが——満たされない俤だったので
 あるう。

私は、彼を△異常者▽とは想いたくないの
 だ。しかし、愛妻を縛ったり、殴ったりする
 行為そのものは、やっぱりノーマルな者から
 見れば△異常▽なのであるう。だが、戦争と
 か叛乱事件などの△無法状態▽を利用して、
 突発的に△悪鬼の如き嗜虐・加虐▽の限りを
 尽す、所謂△ノーマル▽な男達の△非行▽と
 較べたら、——彼の日常に於ける△異常▽な

度、学識、体験など——併せ、追隨して行くのが要諦なのだ。

私は——なるべく、彼と歩調を、合わせることに努めた。何か興味ある話題はないか？——と私も考えた。

○

終戦の年であった。千葉県のある町で、妙な事件が起こった。便所の掃き出し口から、長い竹竿で、いたずらする痴漢の頻発だ。

現地の警察署では、躍起となり、犯人を追跡したのだが、時には忍者の如く、出没するので、どうにも逮捕出来ないでいた。

御承知のように日本家屋のトイレは、表に面して掃出し窓が出来て居り△汲取口も、規準で測ったように、その真下にあるものが多いのだ。そして、掃出した後に△鍵△も掛けずに、完全に開けた俥だと、その奥の方まで△丸見え△だった。だから無理に△汲取口△から入らなくとも、この低い位置にある△窓口△で△狙い△の目的は満足出来たのであるう。

ところがである——後に、犯人が捕まっていたところ△によれば——彼は、旧軍隊時代の△衛生兵△であった。衛生兵とは、その名の示す通りの△男性看護婦△で△女人禁制△の

軍隊にあっては、軍医の助手として、兵隊の△保健問題の任に当たる△非常に大切な△兵種△であった。

だから△娑婆△にあっても△薬局店員△だったとか、診療医局関係の仕事に従事していた者などが入営すれば、便利だから、その兵種とされた。彼も、やはり娑婆では△薬種問屋の丁稚△の経験者だったという。

○

彼は満二十才で、徴兵検査に△甲種合格△生まれ故郷に近い——佐倉五十七連隊に入営し、衛生兵を命じられた。

だが……彼は、生来の△注射嫌い△。誰だって△注射好き△は居まい。しかし、彼の場合には△異常△なほどの△注射嫌い△で△注射針△を見ただけで△失神△する騒ぎも、たびたびであった。それが選りにも選って△薬店奉公△と△衛生兵△だった。見えない神は△悪戯△で△意地悪△なものだ。

その彼が——思春期の頃。得意先の△若奥様△に重宝がられるようになった。

理由は、簡単だった——若奥様が、酷い慢性の△便秘症△で、彼の△薬店△から、その治療の△浣腸薬△とか△器具△類を、定期的に買い入れてくれる△上得意様△だったのだ

が、それが彼の手もわずらわせねばならない——と云う、妙な結果？ を招いたからだ。

この若奥様と云うのは、さる金持のお妾さんで、所謂△二号△であったから、旦那様の留守も多く——おまけに独り住居でもあったので、治療に必要な△手助け△が居ない。

そこで——考えたのは、まだ子供っぽい彼の手を利用することだった。まだ純粹で△注射嫌い△だった彼にとっては——羞恥と嫌悪の交錯以外の何ものでもなかったのだが——その効能書を読みあげさせられ、その通りの△実行△を強いられた。断われれば——注文がないばかりか、不意に△湯殿を覗いた痴漢△として△薬店主△に訴え出る、と脅すのだ。その事件だって△若奥様の仕組んだ罠△と弁解すればよいのだが——当時の彼には、そんな頭脳も勇氣のかけらもなかったのだ。

○

彼は責められる俥に△薬の効能書△を読みあげ、奥の部屋とか△湯殿△の洗い場でイリガートルの操作まで、手伝わせられたのであった。

世間ずれした男性なら希求して止まぬ△悦楽の境地△であつたらうに——彼は△お得意様△の神聖にして侵すべからざる部分に触れ

のは、その瞬間であつた。

「太い奴だッ！ 丁稚の分際で！」

ポカッポカッと、拳固が、彼の脳天めがけて落ちて来た。

「あッ！ 許、許して下さいッ。痛いッ！」

「何だとッ！ こ……この不良がッ！」

「そうだわッ、酷いわッ！ 私が、女ひとりだと思つて、お湯殿まで覗くのよ。そのうえ駄目だつてのに……私の背中にまで、手を伸ばすんだから」

「ええッ？」

彼は仰天した。青天の霹靂とはこの事だ。

△何と云う酷いことを——嘘だ、嘘だッ！

若奥様の大嘘つきッ！△

彼は怒りと失意で体も震えた。寝耳に水の羞かしめ——とは、まさに、こんな一瞬の彼を指して云うのではなかったらうか？

彼は何処を——どう馳け抜けたか？——とにかく△女なんか死んじまえッ△と嘔鳴り散らしながら、街中を、彷徨い続けた。

彼は店主に叱られ、丁稚もクビになった。

彼の△女性観△が急激に悪化し△敵意△を抱くようになったのは、この時からだ。

○

昭和十六年十二月八日——太平洋戦争が勃

発した。彼は△衛生伍長△に昇進していた。

彼は、娑婆に嫌気がさしていたので、軍隊を△再役△して行つたのだ。そして変わらぬのは彼の△女性憎悪△と△復讐△であつた。彼は、若奥様に裏切られて以来△注射△にも馴れた。女性とみれば△冷酷△に扱うようになった。

彼は△女体の羞恥△に遠慮がなかった。彼は部隊の△占領地△に於ける△慰安婦△とか△芸者△の△検診△は、勿論——邦人婦女子の緊急医療に当たつてさえ、故意に、冷たかつた。まして抑留中の△敵国婦女子△の扱いに到つては△無惨△そのものであつた。

○

日本軍がシンガポールを占領したのは、昭和十七年の二月だ。その頃——彼は、南支那の占領部隊に属し△珠江△を南下していた。

この部隊では、兵隊が単独で△食糧△その他の調達に出掛けるのを△厳禁△した。

と云うのは兵隊が、いずれも飢えた狼のよう△に△乱暴狼籍△を働くのは勿論——△女漁り△に終始するやも知れず、と云う心配だ。

事実——何名かの兵隊は△卑劣な野望△の余り、民家に乱入したが、逆に△撲殺△のうきめに合っていた。

そんな場合でも△皇軍の威信△を掲げる部隊長は△名誉の戦死△扱いの△公報△を留守家族に、送つた——と云うのだから△戦死者の非業△も△人知るや知らずや！△だ。

こんな状態だから大抵の民家では、日本兵が迫るや——女房と娘を山奥に隠したり、絶対秘密の隠れ場所に匿つたりしていた。

ある朝のこと——彼は△残敵の掃討△で捕えた△ゲリラ△の若い娘が△酷い拷問△に合、半死半生で転がっている場面に、ぶつかつた。

だが『薬だ！』と称して△ヒマシ油△を飲ませ、その△脱糞するポーズ△を眺めたり、兵隊の見物をよいことに△女体検診△をも行ない——女体の羞恥を煽つたりもした。

○

その年の夏——彼の所属部隊は△広東△に駐留した。当時は、対岸の香港と九竜間を結ぶ△連絡船△の船客に対して△検疫△が実施されて居た。検疫と云えば、誰しも、先ず、△検便△を想起するであらう。しかも△直接検便△だ。

殊に、現地では、不潔な△伝染病△の媒体者も多かったのだ。大陸と島を結ぶ△船客△に関して、男女を問わず△身体検査△は厳

重を極めていたのであった。

直接とは、即ち△耳かき▽のような△ガラス棒▽で、単刀直入に糞便を採取し△検鏡▽する方法で——ふだん、だったら△個々の人権▽を尊重して、殆どが△個室▽で実施し、△公開▽はしないのだ。

ところが——占領そこそこ、この軍政下だった衛生担当者も少なく、従って△上陸直前▽の船客を、上甲板にずらりと並べ△後向きの姿▽で前に両手をつかせ——下着を下ろさせた。男は、よいのだが、女でも△人妻▽とか△妙齡の処女▽に到るまで△凌辱▽に等しい検査を受けねばならなかったのだった。

ところがであった——彼は敢えて、婦女子と雖も、強行した上に△ガラスの消息子▽が△破損▽したのを理由に、△食事用の杉の割箸▽を使用したのだ。

忽ち——喧々囂々たる非難やら△哀号！▽△悲鳴▽の連発だ。

体験者なら御存知のように、完全な消息子でさえ、異様な疼痛や痛みを覚え、検査後の数日は、あの際の△妙な感触▽に悩まねばならぬのだ。

そんな部分へ——事もあろうに笹くれだった△割箸▽では△堪まったモンではない▽の

であった。

酷く裂傷するもの——痔疾になる△と叫んで▽怒るもの——ありで、最高に気の毒なのは、うら若い現地の娘さん達だった。

むくつけき男ども同様に恥部を露呈し、甲板に両手をつくすと、可能な限りの△隠蔽▽に努めるのだった。衛生兵だけなら、まだしも船客の中には低劣な男どもも居て——猟奇の目で、哀れな犠牲者どもに△興味▽を集中するのであった。

○

昔から△愛憎▽とは△裏腹▽なもので、熱愛する余り、激しい憎悪に変わった——例は多い。

殊に、それが△男女間▽に於いて、凄まじい限りだ。

「明治一代女」の惨劇に於いて然り。「高橋お伝」の悲劇も、また△然り▽である。

就中、江戸時代の俚謡の中には、こうした△男女の愛憎▽を唄ったものが多い。

「打ちなと蹴りなと、いいよにさんせ。苦楽まかせた、この体。とか、へ会えば、何時でも踏んだり蹴たり。島田の蹴鞠じゃありゃしまい。」と云った類だ。

以上は△被虐的▽なものだが△加虐的▽な

ものとして、△振りや紫、喰いつきゃ紅よ。

色で仕上げた、この体。などがあり、夫婦同志が△頬に噛みついたり、太腿を振り合う▽愛情の表現は、これを△増進▽する意味で、ますます△濃厚▽になるので△効果的▽だ。

しかし△頭髪を掴み、腕を捻り上げ、顔面を殴打し▽挙句の果てに△刃物沙汰▽まで起こす真実の憎しみになると△物凄い殺傷▽と化するので恐ろしい。

特に△男が女に怨恨を抱く場合▽の拷問や責め場は△想うだに▽戦慄を覚えるのみだ。文政十一年の頃——江戸で、綺麗に化粧した婦人の△鼻▽を切り削ぐ、残酷な行為が、何者かによって行なわれた。

現在はテレビだが、当時は△歌舞伎役者▽の化粧に習い△首筋を白く、鼻筋も、馬のようになく塗る▽所謂——役者づけなるものが流行し、猫も杓子も△白首▽と△鼻白▽を楽しんだものだった。つまり——楽屋から△花柳界▽に伝わり、一般の女性にまで及んだ訳である。

七五三の晴着に女の子は△鼻筋▽を白粉で染めるのも、由来は、その頃からであって、この△鼻を切る▽と云った△犯罪の動機▽は——醜い△鼻筋の持主▽とか△鼻を醜くされ

たVの△恨みVではないだろうか?——と、
専らの噂であった——と伝えられる。

○

戦後の話だが——第二次大戦の終わった頃

のドイツ領内で△ゲペウVの拷問にあい△片
足を失ったVチンバのフランス人の△レジス
タントVが、当時のゲペウを、執拗に追いつ
め——到々——窮極の悲願だった△仇敵もビ

ッコVにすると云った
△復讐Vに、成功する
と云った——ドラマチ
ックな実話も残って居
る。怨恨にかける男の
△執念Vには、肌寒い
ものを覚えるではない
か。

ところで——それが
△女の場合Vだったら
もっと△悲愴Vだ。女
は性来△惨虐性Vが、
強いのか? 生理的に
△血の臭いVに馴れて
いる——とでも云うの
であろうか? 同性に
対しても狂ったように
△サディストV化する
ので——変質男よりタ
チが悪い。

昭和三十九年八月、

松竹配給の△紅閨夢V谷崎潤一郎原作は、武
智鉄二監督で、映画化されたが——そのシナ
リオ△三十九・漢宮Vのシーンは△故事Vと
は云え凄い。宮廷の美妃△柳美那が、嫉妬に
燃える△太后Vに捕えられ、両腕を切断。両
足も斬りとられた上で、更に、両目まで、か
んざしで抉り出される——と云った△惨虐V
さが展開する。

中国ならずとも、こうした△目をそむける
ような仕打ちVは、我が国の故事にも、かな
り多いのだ。

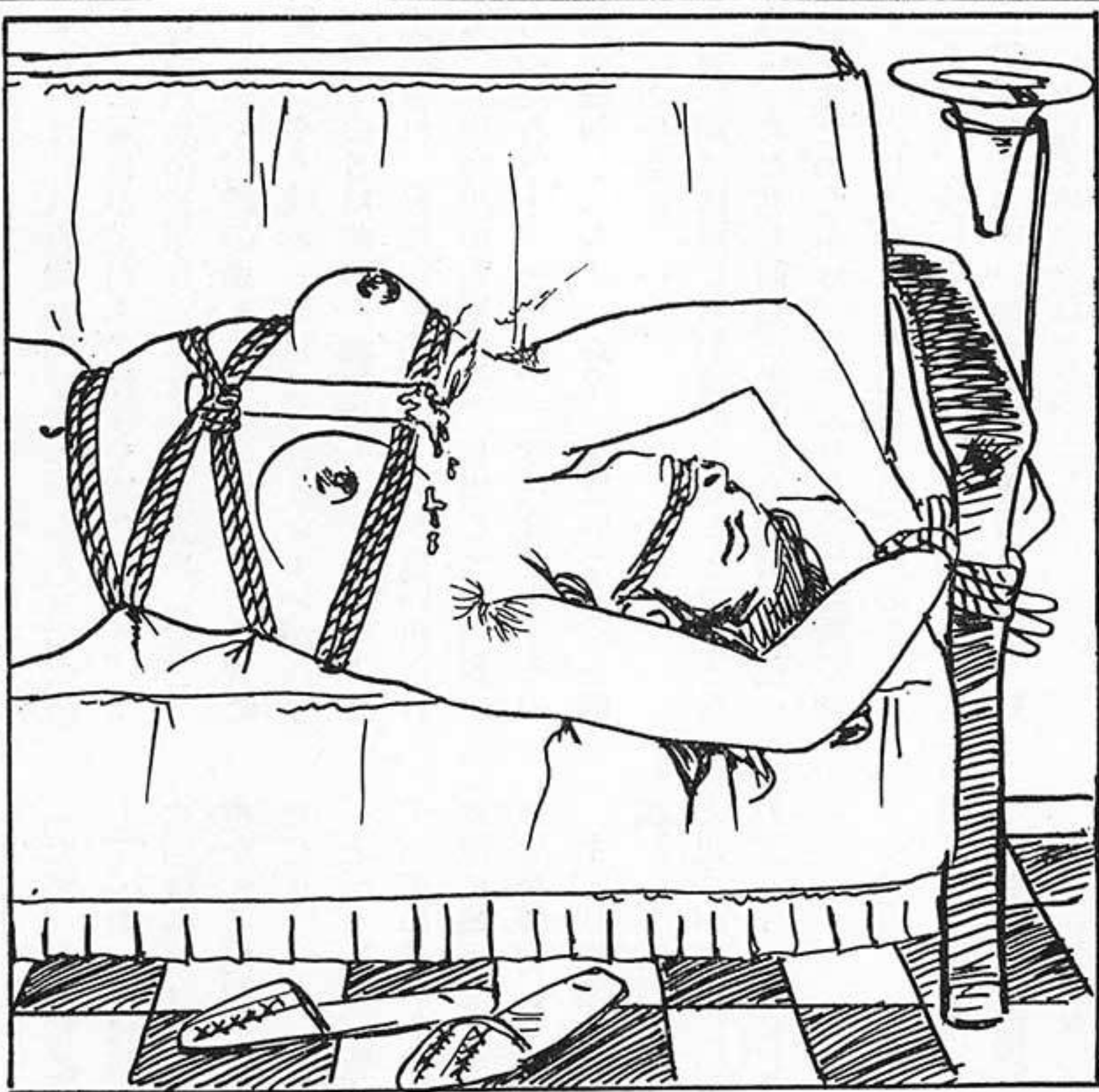
最近では△証拠隠滅Vの手段として、人体
をバラバラに切断し——捨てると云ったよう
な、神を恐れぬ冒瀆者も出ているが——警察
科学の発達した時代だから通用しまい。

だが——夫の裏切りを憎む余り、夫婦のか
すがいであるべき△赤ン坊を投げ殺したV実
話とか——生さぬ仲の、先妻の連れ子に愛情
が湧かず△継子問題Vに悩む余り——封建時
代の△お家騒動Vまがいの△マ、子虐めVを
始めたり△灸責めV△水責めV△針責めVな
どの限りを尽し、死に到らしめたような女も
居たのである。

○

終戦後——間もなくだが、池袋の焼跡で、

イメージギャラリー『移動する熱点』須坂 旭



△アバンギャルド劇場▽なる——お粗末な、掛小屋が出来て——そこでは、江戸時代に材をとった△八百屋お七▽まがいの△女の火焙り▽の看板が通行人の注視を浴びていた。その他△女の逆吊り▽△女の海老責め▽など、とにかく、緋の湯も、一枚の若い女が△責め問い▽や△惨形▽に処せられるシーンが△呼び物▽のSM劇が△北里俊夫▽氏のネームで上演され、妙に印象的だったのが思い出される。北里先生の監修なら、相当こった内容のものだろう———と思ひ、二度三度と———その前を往復し△見ようか？ 見まいか？▽と悩んだのを覚えている。

青年期には誰しも記憶にあることで———當時は、まだ私も前途に燃えた△芸術家志望▽の学生だったから、△そんなものは芸術に非ず▽で△目の毒▽△気の毒▽△学問の毒▽にこそなれ、決して△プラス▽にはならぬ———と諦観し切っていたせいでもあろうか？ 到々———見ず終まいだった。

ところが△前衛芸術▽という奴に、憧れている学生が居て（面白いぞ！▽と校庭で喋り捲くったから———ファンも増え、
「若い女の子が縛られて、バタバタ悲鳴をあげてるンやでェ！ しびれるやないか！」

と、煽りたてた△迎合派▽も続出した。

「莫迦云うな！ ゲテ物趣味だなッ」

「だが、どんなに頼んだって……あんな演技してくれる娘は居ねエゼ！ 安いもんだ！ 次回は『岡ッ引』が女拘捕を捕まえて、石を抱かせる拷問と磔刑の、凄げエ看板が出よッたぜ！」

と云う訳で、暫くは———この猟奇的なアイディアの芝居小屋に△前衛派▽が集まり、探求欲に飢えた、学生たちに△戦後の自由の良さ▽を表明しているかのようであった。

故、伊藤晴雨氏が△女責め▽の劇団で△実演▽して廻った———のも、この頃だった？ と思うが、惜しい事には観るチャンスも得られず———いまにして思えば慚愧の極みだ。

○

その頃———仙花紙の雑誌には思い切った裏話を書く者が現われ、所謂△カストリ文学▽なるものが、横行した。

私は△アヌス▽のファンではないが、やはり気になる印象的な△美女に関するトピック△は記憶している。

誰しも———有名女優とか、美女の裏話は知っていたがるものだ。最近でも———指圧の浪越徳治郎氏が、米女優△マリリン・モンロー▽の

全裸を治療中に拝観した———と云う逸話は評判で、テレビなどでも、機会があれば△肴▽になっていた———のは御承知の通りだ。そのせいでもあるまいが△宿泊ホテル▽のボーイさんが、部分の判らぬ△金髪▽で、大金儲けをした？ とか———まことしやかに伝えられた———のも、つい昨今のように思われる。

また、これは△戦争中▽のことだが———歌謡界の大御所△淡谷のり子▽氏が、戦地で兵隊の慰問中に△盲腸炎▽に患い、軍医のお世話になることとなった———が、その手術前の△剃毛▽を担当する衛生兵の拙セン△余り志願者が多かったので▽をする事になり運を掴んだのは△若い衛生兵▽だったが、その際に結んだという△秘密の約束▽が奮って居た。△剃毛した現物は、平等に分配すること▽。△微に入り、細に亘って観察の上、報告のこゝと▽など———とにかく大変な協定が調い———若い衛生兵は、その重責と、女体の圧倒的なポリウムで、失神騒ぎだった？ とか———その報道については———折に触れ、被害者の淡谷氏が△否定▽しているのだから△で、ちあげ▽のエロ話に違いないが、刺戟のない戦地での、男だけの集団生活に、あつては△ありそうな話題▽で———嘘と思いつつも———正

常な欲望の持主なら乗り出したくなるのも、当たり前だ。

○

しかし——まったく、それと同様な話で、

私が△ビルマ戦線△に従軍していた頃——その最前線を慰問に、はるばるやって来たレコード歌手の団があり、当時——新人歌手だったH嬢（特に名を秘す△が△急性盲腸炎△で手術することになった。日本と違って、白米には△小石△とか△もみ殻△などの多い粗末な現地食だから、胃腸の弱い女性歌手など、堪まったモンではないのだ——手術で、また、△あらぬ伝説△か？ △どうか判らぬが△興味津々たるニュースが、兵隊たちの間に拡まって行ったのだ。

剃毛の担当衛生兵が、役得で蒐集した△H嬢の秘毛△だ。活字での公開は、遠慮したいが——その美貌の華やかさとは、裏腹の△粗

弱△さに△幻滅△を感じた——と云うのだ。

当然のことで△ルックス△と△別のルックス△がイコールしてゼロとはなるまい。そこに△女体の神秘△もあると云うもので△天は二物を与えず△であったのだ。

その他——現役で、なお健在な△新派の名女優△が△痔疾△の手術で、ある国立病院へ行った時——その病院へ、実習で来ていた、多数のインターンが△全員△彼女の△手術△を△見学△した——と云うのだ。

と——云うのも、常日頃△名声の高い△女優は△いったいどんな形をしているのか？ △△それから……？ △と云う△興味△からであった——そうである。

だが、しかし如何に△名女優△といえどもその場面に、ぶつかったら△愛嬌△もへったくれもないのだ。ベッドに△鯨ほこ立ち△するのである。

私も一度だが——写真撮影で、そんな現場に△たちあった△ことがあるが——正常な状態と異なり△患者△だから△醜惡△の一語に尽きた——と卒直に述べよう。

とにかく——見られた図ではなかった。

○

ただしそのポーズに於いて△SM愛好者△なら△堪能△すべきものはあろう——と想像する——私の希望としては患者は△男性△よりは△女性△の方がよかったし、若い娘さんの方が、なおよい——と思ったが——若い処女に△アヌス病△は少なく——やはり△中年増の妊娠三カ月△のクランケに決まった。だが、肉体も若々しいし、脂肪の乗り始めた象牙肌の奥様だから——写真の写りも悪くあるまい——との御託宣であった。

当朝になるとスタッフも△白衣△に身を包み、クランケの神経に気を使い乍ら手術室に入った。クランケは既に△眼帯△で眼隠しをさせられているから——室内の様子は△分からない△でいる。私の方から見れば、△俯臥位△で△手術部位△を露呈した△体位△にさされているので、確かに△分らない△が白い掛布の隙間からチラリと覗ける△黒髪△とか健康そうな△鼻腔△△頬骨の円さ△が——か

天星社刊

△限定版グラビア写真集△

在庫案内

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

なりの△美貌▽を想わせた。

それにしても——奇想天外な△手術体位▽であった。女体拷問図よろしく、腰部をたかだかと挙上し、両脚は左右に修開した形で、固定され——白衣の下に隠れた実際の状態は判らぬが——かなり屈曲したポーズで、俯伏せの俥——緊縛されている。

このポーズだと、手術もやり易く、クランケ共々便利な型だとの説明があった。なるほど、逆の型の△臀背位▽だったら手術部が下位になりどうしても△目ざわり▽だろう——と思った。私は△手術部▽を見たかった——麻酔医や助手のインターンが、チラリと拡げては△覗き▽込むのだが——クランケの方は薬で、眠っているのか、静かに呼吸しているだけだった。

医師の説明で——初めて眺めるクランケの患部は△美醜▽を越えたものであって、△なるほど▽と云った△真実▽が素晴らしいのだ。しかし、しばらく△眺めている▽と△何の感興も起こらなくなり▽女体の臓器と云った——感慨に戻るものなのだ。

だから——担当の医師などは△見馴れた手術部分▽だから△病患に爛れた臓器▽と云った△意識▽の先行しか——想い浮かばないの

ではないか。

人間は△男女▽それぞれに△他の異性▽とは△違った肉体▽を知りたがるものではないだろうか？しかし△特徴▽を知って終まえば何の△感興▽も湧かない△異性の部分▽化して終まうのではないか。

百万ベンの性教育理論よりも△百聞は一見に如かず▽だと——私は思う。

倅せにも△女体▽を仔細に眺め得た者には——さして△珍しい女体の神秘▽ではなくなっているが——何でも知ろうと求める若き世代にとっては——学問など、落着けぬ状態なのだ——と云うことを、世の親たちは知り尽していないのだ。いまだに△タブー▽化しているのが△性教育▽の問題だ——と思う。

「性倒錯の世界」に於いて——そうだ。儒教のお蔭か？——とにかく——戦前派は△口と腹が違う▽のだ。言うことは立派だが——行ないは信用、出来ない者が多い。いまの△若い純真▽な世代が△のびのびと育てている▽だけに△親にも従って行けない若者▽が目立って増えて来て居る。性関係の問題について——最も△然り▽である。

○
落着いて勉強の出来ぬ学生が居た。結婚し

たら、成績優秀にして頭脳明晰な△特待生▽となった。理由は簡単だ。スツキリしなかった△モヤモヤ▽が解消したのだ。この学生は△学生結婚▽の草分け——とでも云うべきものだろう。

現在、東京の国立大学名誉教授までされた△数学では、子供時代からの天才▽と謳われた方で——頭が良くなる秘訣として△性的な悩みを持たないことだ▽と私にも説いて下さったのを憶えている。

人間の△異性間の欲望▽についての不満足が、どれほど△勉学力▽を減退させるか——承知して居ながら△罪惡視▽する処に、人間の生活の△歪曲▽された△不自然▽さがあるのは、もはや常識であろう。

五慾の中で最も解消し難いのが△異性間の悩み——である。素晴らしいスポーツマンほど△性慾▽も旺盛なものなので、△頭脳▽の優れた者ほど、性的面でも秀れているものなのだ。

それなのに、自分は、性的には十三、四才の未成年の頃から△女道楽▽に終始した男が△赤線禁止▽を提唱したりする。聴く処によれば、これ迄の体験が、赤線禁止を悟らせたとのことで随分と身勝手な理屈ではないか。

△なるほど……性関係の悩みは甚大である△
だから△必要論△を説く、と云うのなら△そ
の方面の大先覚者△だと思ふのだが△噴飯△
ものだ。

ある△ヌード劇場△の愛好者が△現代の若
者たちは気の毒だよ。指をくわえて眺めるだ
けで、全くお預けチンチンなんだからな△
と嘆息した。

新発足 懸賞△告白、手記、体験△原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ
に新しく、「告白、手記、体験」の原稿を
広く懸賞募集いたします。
一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな
告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字
塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告
白をもって誌面を飾る考えであります。
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

確かに——求めれば、中年以上の男たちに
は△性的な買物△が出来る。また功なり名を
とげた金持は△安い赤線△は無くなったが、
——庶民などには、手の届かぬ△高価な△赤
線△化した△芸妓△の存在が許されているの
で、彼女らを自由に操れば△性関係の悩み△
は、金力者に限り△解決△出来る仕組となっ
ているのだから——都合がよい。

ある為政者は、人間の手には△表裏△があ

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表
したいという熱意のこもった原稿を求めま
す。どうか奮って御応募下さい。
一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま
さは求めませんから、実際に体験されたも
の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ
ます。従って必ず自作の未発表のものに限
ります。
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲
載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で
す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ
い。締切日は毎月十日。翌月号より発表。
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送り
いたします。応募原稿は読者原稿と区別す
るたと「告白懸賞」とお書き下さい。

るように社会生活にも△表裏△があるのだ。
△大人になる△ということは、そ奴を△うま
く使い分けることなのさ！△と私に云ったが
——それでは、これからの若者たちは、浮か
ばれまい。

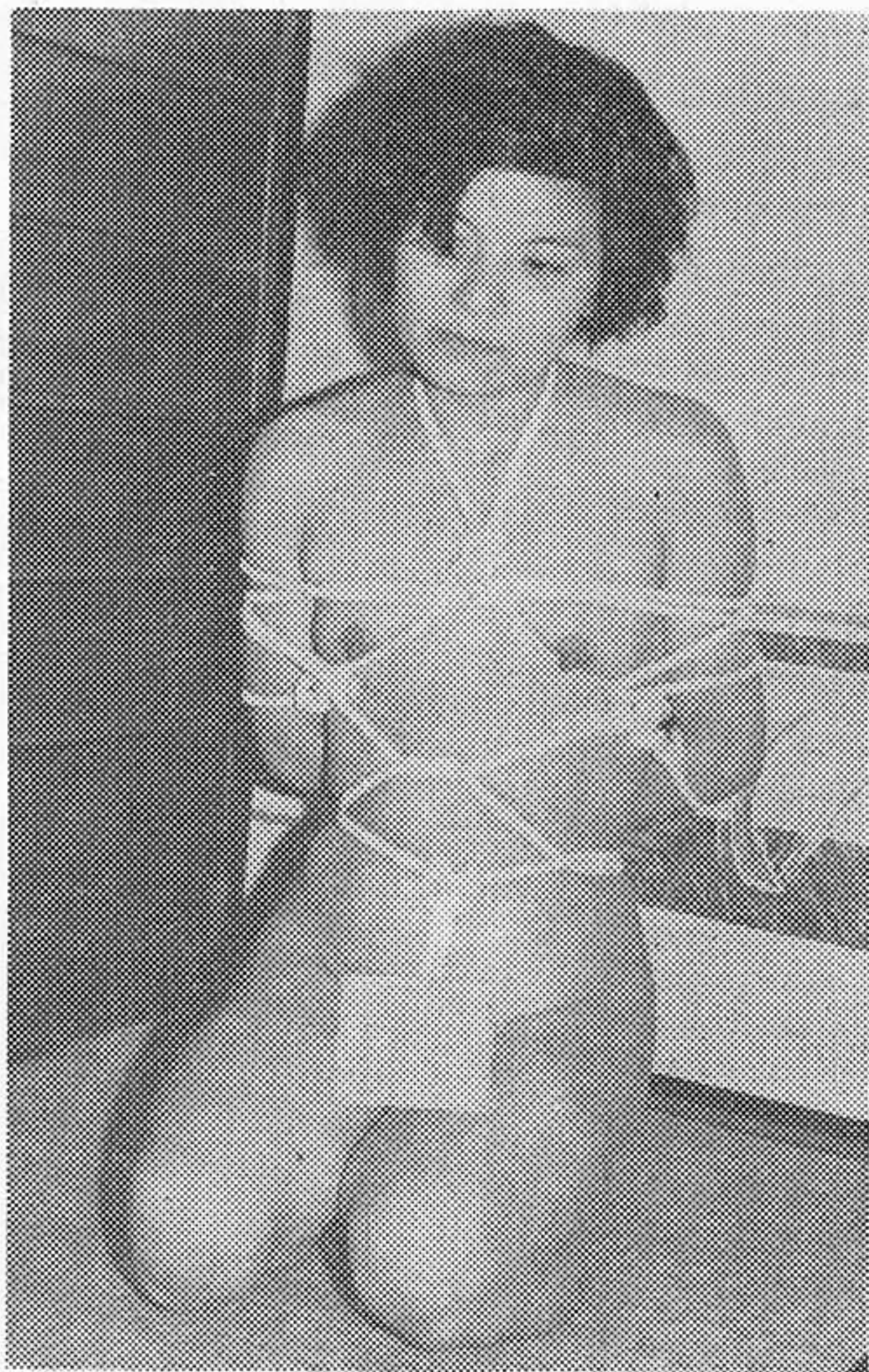
罪悪めいた場末のヌード劇場の切符売場で
大切な△虎の子△をはたいて、△アヌスの神
秘△を求める若者たちの△夢のないSEX△
に、せめてもの△明るい光△を与えてくれる
先覚者が何人、居るであろうか？

△ポルノ解禁△とか△フリーSEX△とか、
マスコミは騒いでいるのに、生活の表裏をう
まく使い分けた、所謂△現代の立身出世型△
は——表面では△道学者めいた倫理△を掲げ
裏面では△本能むき出しのアニマル△と化し
ているのだから——進歩は望めまい。

ちなみに——ヌード・ショウの要諦は△見
せては不可なのである。だが……しかし見
えたのなら仕方がない△と云う、当局の見解
だそうである。

見せる——とか、見える——とかは、別に
して△映画の題名△ではないが△昨日、今日
明日△と△見たい△願望者は、後を断たない
のである。

S M 同 好 者 の 皆 様 へ



好 美 の お 便 り

渡 部 好 美

大寒に入ったと申しますのに京都名物の底冷えもなく、過ごしやすい日々が続いております。SMプレー同好家の皆様、お変わりございませんか。好美も元気に新しい年を迎えました。毎年の恒例どおり、大晦日の夜半から元旦にかけて、主人より「縛り始め」といって全裸の好美は麻縄で緊縛され、旧年中の飼育のお礼と、来る年、よりよきマゾ女として奉仕することを誓いましたが、こうした「縛り始め」のプレーも五回目にもなりましょうか。

いつも奇ク誌上にて心あたたまる呼びかけをして下さる同好家の皆様、本当にありがとうございます。今年も皆様と一緒にSMプレーの遊びを分かち合いたいと思います。

表紙のデザインも新しくなった、奇ク誌の三月号を手に致しましたが、好美が始めて誌上に「私は、どうしてこんな女に」と題して恥かしい、つたない告白を致し、SM同好家の皆様と、お友達にさせて戴きましたのは七十年の、やはり三月号のことでしたのに、早くもその年に、七十一年新年号のカメラ・ハントに採り上げられたように辻村先生に一泊のプレー旅行をお願いして、先輩の川路むら子さんと御一緒に、飼育を受けることが出来

ました。あの時の、身も心も、とろとろになったような思い出が、今もなお、私の心の片隅に、熱く鮮明に灼きついておりますのに、時は早や、一年を過ぎて行ったのですね。

奴隷妻、好美は昨年一年間、主人の命令を忠実に守り、呼びさまされた被虐の願いに身を灼き、よきマゾ女、奴隷妻の勤めを果たして来たと思っておりますが、主人の申しますには「まだまだ、飼育が足りなかった。本当のマゾ女として、主人はもとより、同好家の皆様に欲んで戴くまでには、もっともっと努力しなければならぬ」ということですので今年は、こうした主人の希望に、心から満足して戴けるように、そうして同好家の皆様にも欲んで戴けるマゾ女に成長することを心掛けて、飼育を甘受して参ろうと思っております。

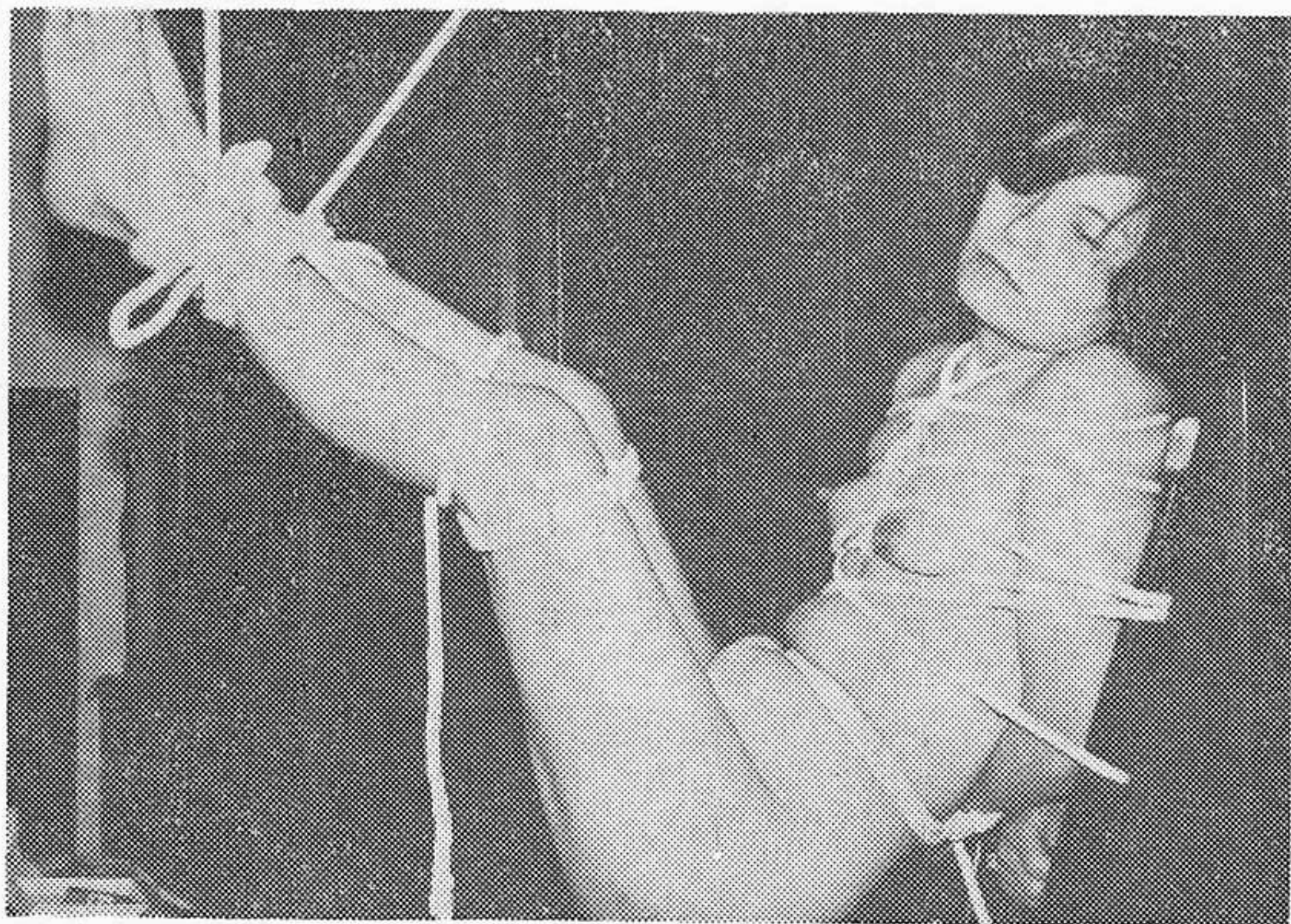
長い間の夫婦SMプレーを通じて、夫婦が共に、いっしか求め合うようになった新しい刺激、試行錯誤の中から「私が、主人の見ている前でサド氏から責められ、恥かしい思いをさせられながら、私自身も悦虐の欲びに全てを投げ出す」といった恥かしい行為も、始めの頃は、想像を口にするだけでプレーが新鮮な欲びでありました。それが、木山春男さ

んという、強いサド氏の出現によって、私達夫婦の長い長い夢、願望でありましたことが実現したのです。その様子については、奇ク誌新年号にて、主人が「SM願望の終着駅」と題して発表しております通りですが、主人とのプレーの中で描いておりましたそれよりも、現実には、はるかに強烈な刺激で、全身が

熱くなるのを禁じ得ませんでした。

私は、お別れするまでに何度か木山さんから強烈な飼育を受けておりましたが、いつしか木山さんに、マゾ女の奉仕を勤めますことに、たまらない欲びを感じる女になってしまっておりました。あの日も、主人と木山さんという二人のサド氏の前で、命じられるまま





に裸になり、縄を打たれ、私の肉体の全てを木山さんの苛責のままにゆだねる時そこに、主人の目を意識すればするほど、私の体は熱く燃えるのでした。

幾重にも、ぎりぎりと締めつけられる麻縄。乳首が引きちぎられそうなクリップ責めや、全身をつつかれる針責めにも「痛い」「苦しい」という感覚はなく、どんな強烈な責めも、恥かしい格好も、すべてが心地よい刺激となっていたのでした。あの時、私は何を叫び、どんな恥かしい言葉を口走っていたのか、一切が意識の中になく、ただ何度となく、気の遠くなるような潮の高鳴りが私を包み、そうして、静かに引いて行くのを、かすかにおぼえているだけです。

思えば、ずーっと遠いあ

の頃、奇ク誌を知り、緊縛という生まれて始めての刺激に、身も心も燃えに燃えた私ではありましたが、こんな恥かしいことを求める女に変わってしまったなど、とても考えられないのですが、現実には好美は、S性の強い方々の恥かしめを望み、責めを求める、はしたない女となってしまうのです。私をここまで飼育して来た主人ですら、私達のSMプレイが、ここまでエスカレートするとは思わなかったのではないのでしょうか。

マゾ願望の強い女になれという主人に飼育されている間に、私の精神も肉体も、そうされることに安らぎと欲びを知ってしまいました。が、主人から執拗にプレイを強制されていて、「もし、こんなことを主人以外のサド性の男の人から受けたら、どうだろう」などと考えるようになり、プレイの中で、ふと口にした一言が主人の想像していた願望と一つになって、私達夫婦の性倒錯の方向を示唆したのかもしれない。

主人にマゾ女に飼育され、心の底にねむっていましたマゾの扉を開き、同好家の皆様の心ある交友のお陰で、今日の好美に成長させて戴きましたが、苛められ、恥かしめられて肉体の欲びを知る、あさましい奴隷妻として

のみしか生きて行くことを許されないような私の運命を、決して後悔したり、悲しく思ったりはしておりません。好美の今日の心境は何も知らなかった私を、こんなにまで責めの好きなマゾ女に育ててくれた主人に感謝し、もっとも主人が満足してくれる奴隷妻となれるように努力して行きたいと思っております。

ほんの短い間でしたが、激しい責めによって、かぎりない被虐の欲びをあたえて下さった木山春夫さんは、もう、私の手の届かない過去の人となってしまいました。先日、戴きましたお手紙によりますと、春には結婚されるとのことでした。ちょっぴり淋しい思いも致しますが、遠い京の地より、幸い多かれと祈っております。

あの最後のプレーの日、主人の見ている前で全身に熱い蠟責めを受けながら味わった、あの激しく甘い、とろけるような強い刺激と快楽は、好美には二度と帰ってこないものかもしれません。

あれ以来、私は、主人とのプレーの中で、ふと、あの日、あの頃の思い出が、頭をかすめることがあります。そんな時、思わず自らの激しい責めを求め、主人を驚かすことさえあります。

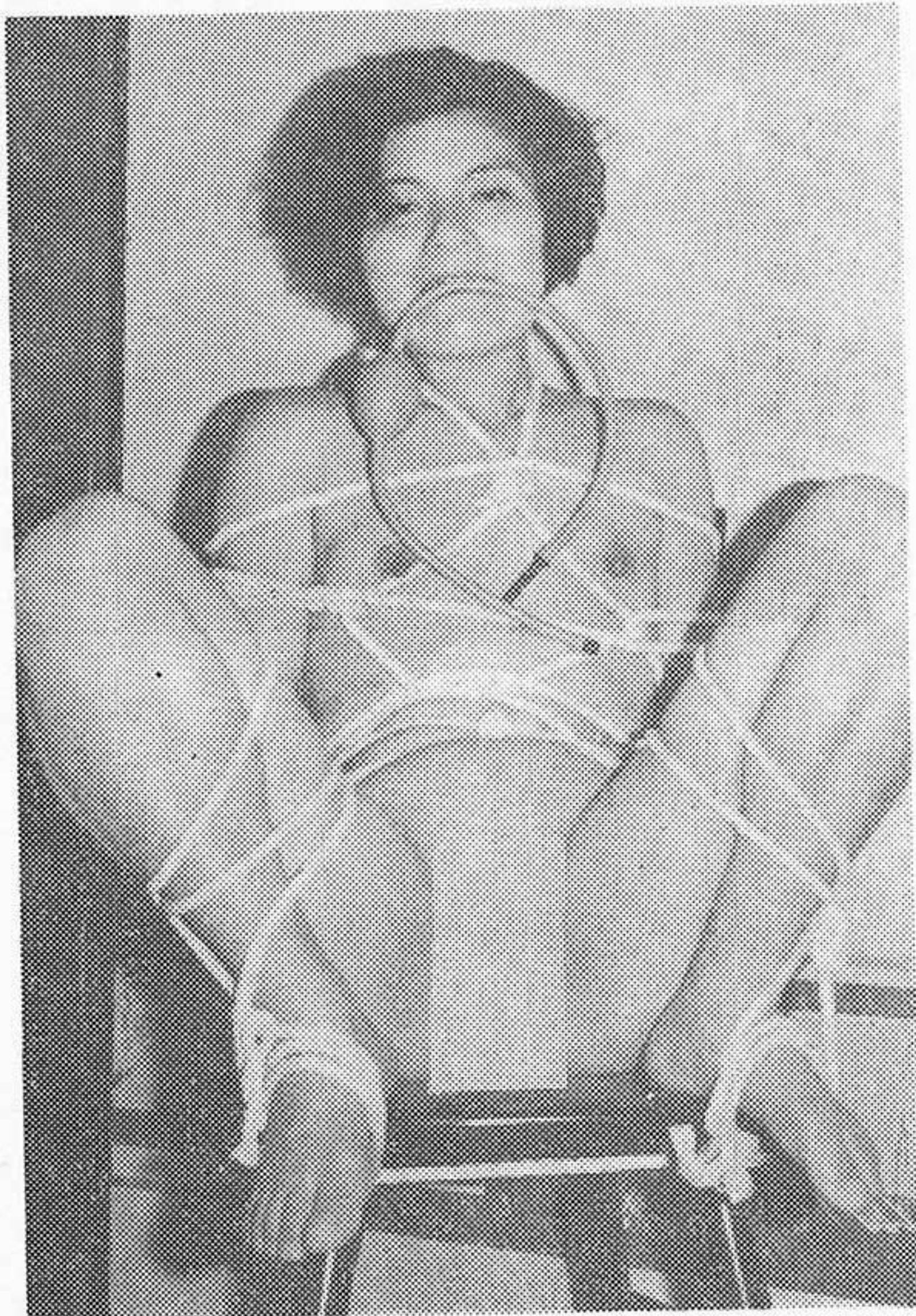
ります。

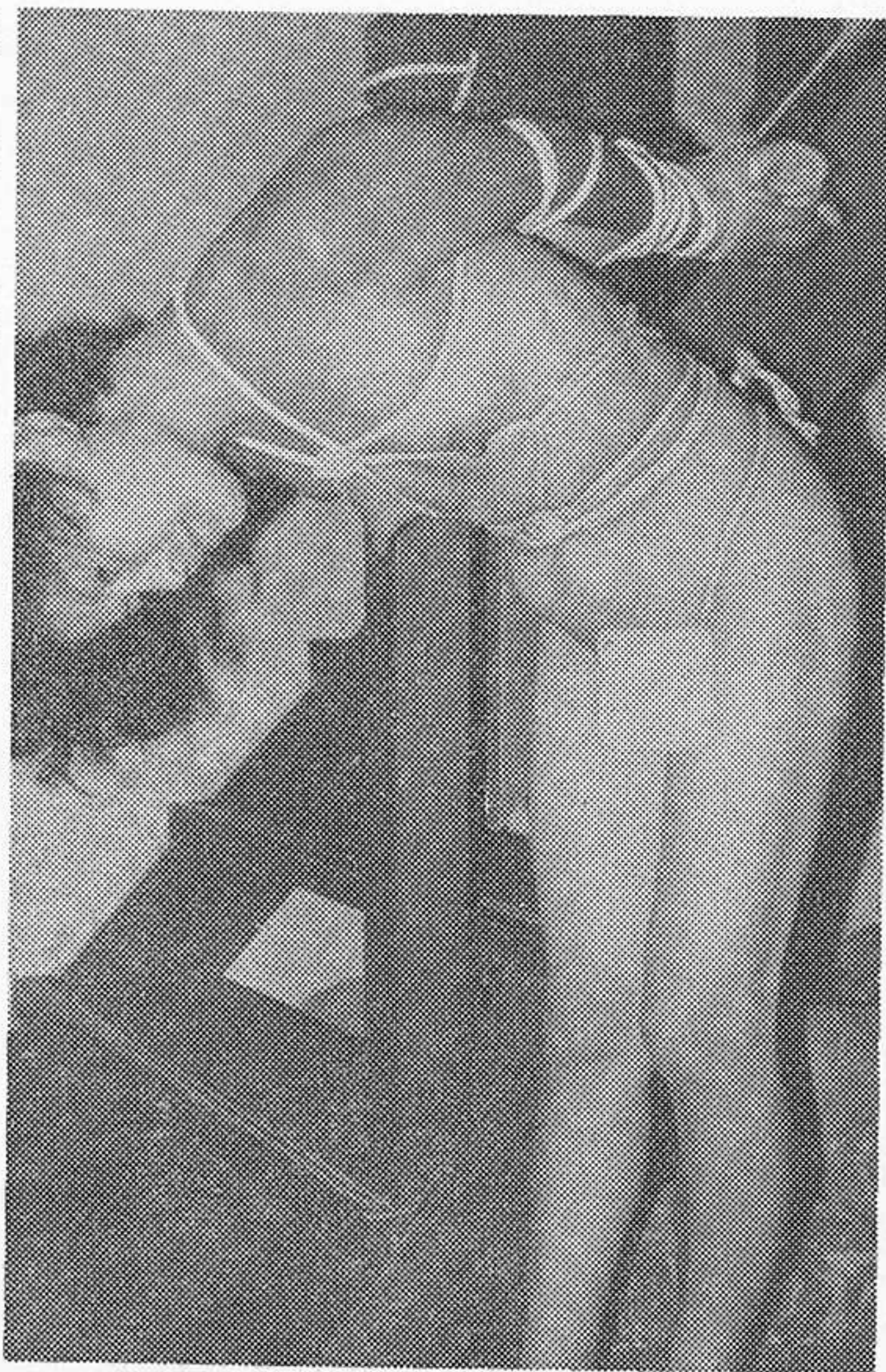
好美の被虐願望の第一頁に、木山春夫さんという忘れられないサド氏を書き記してしまったのですが、昨年は、ほかに忘れられないことがありました。

「週刊サンケイ」の異能人間シリーズに辻村さんが登場された誌面に、私の緊縛フォトが発

表されていて、とても、びっくりしたものでしたが、ある日、突然に辻村さんから、東映の「性倒錯の世界」という映画に協力しないかというお話があった時は、本当に驚いてしまいました。

主人は、いとも簡単に引き受けましたが夫婦が、こっそり楽しんで参りました私達のS





Mプレーが、まさか映画にまで登場しようとは夢にも思ったこともなく、だいいち、こんな年になって、たくさんの人の前で裸になってマゾの恥態をさらけ出すことは、私には、とても出来そうにありませんでしたので、何度となく「私のような女を使わずとも、奇ク誌上にも、もっと若く美しい方が、たくさんおられますのに……。それに、東映にはプロ

の女優さんが、ワンサとおいででしよう」と、遠慮させていたどころとしました。ですが、先生の「これは、ただの劇映画ではなくドキメンタリーで、性の倒錯した世界に、サド、マゾというものが現実存在し、SMPプレーとは、こんなものだというのを映画を通じて世間に知らせるためのもので、演出でない生のプレーを発表したい」という熱っぽ

いお話には、とてもお断わりできない厳しさのようなものが感じられ、結局は協力させて戴くことになったのです。

と、申しまして、いかに恥かしめられることの好きな私とて、S・M同好家の皆様の前ならともかくも、たくさん映画関係の人達の前で、しかも、明か明かとしたライトの下で丸裸にされました時は、目の前が真暗になるような恥かしさが全身に走り、足ががくがくふるえて、しかたありませんでした。もし、あの時、一緒に出演しました先輩の谷山さんがおいでにならなかつたら、きっと私はあの場から逃げ出していたことでしょう。

あの机の上の責めの時も、谷山さんが落ちて着いて辻村さんの指示に従っておられましたので、私も辛うじて気をとり直し、主人の責めを受けることが出来たのでした。

あの蟬責めは、まだ私も経験が少なく、熱いというよりは、何か鋭い固いものが素肌につきささって来るような感じでした。あのような強烈な責めを受けます時、心の中に抵抗を感じておりますと、とても、がまん出来るものではありませんが、そこは日頃のマゾ生活の有難さで、すぐに、気持を落ち着けて被虐を味わわねばと思いつくことが出来まし

た。そして「今、辻村さんと主人と三人でプレーしているのだ」と自分に言い聞かせ、プレーの渦の中に身も心もゆだねることによって、責めの欲びを感じようと致しました。

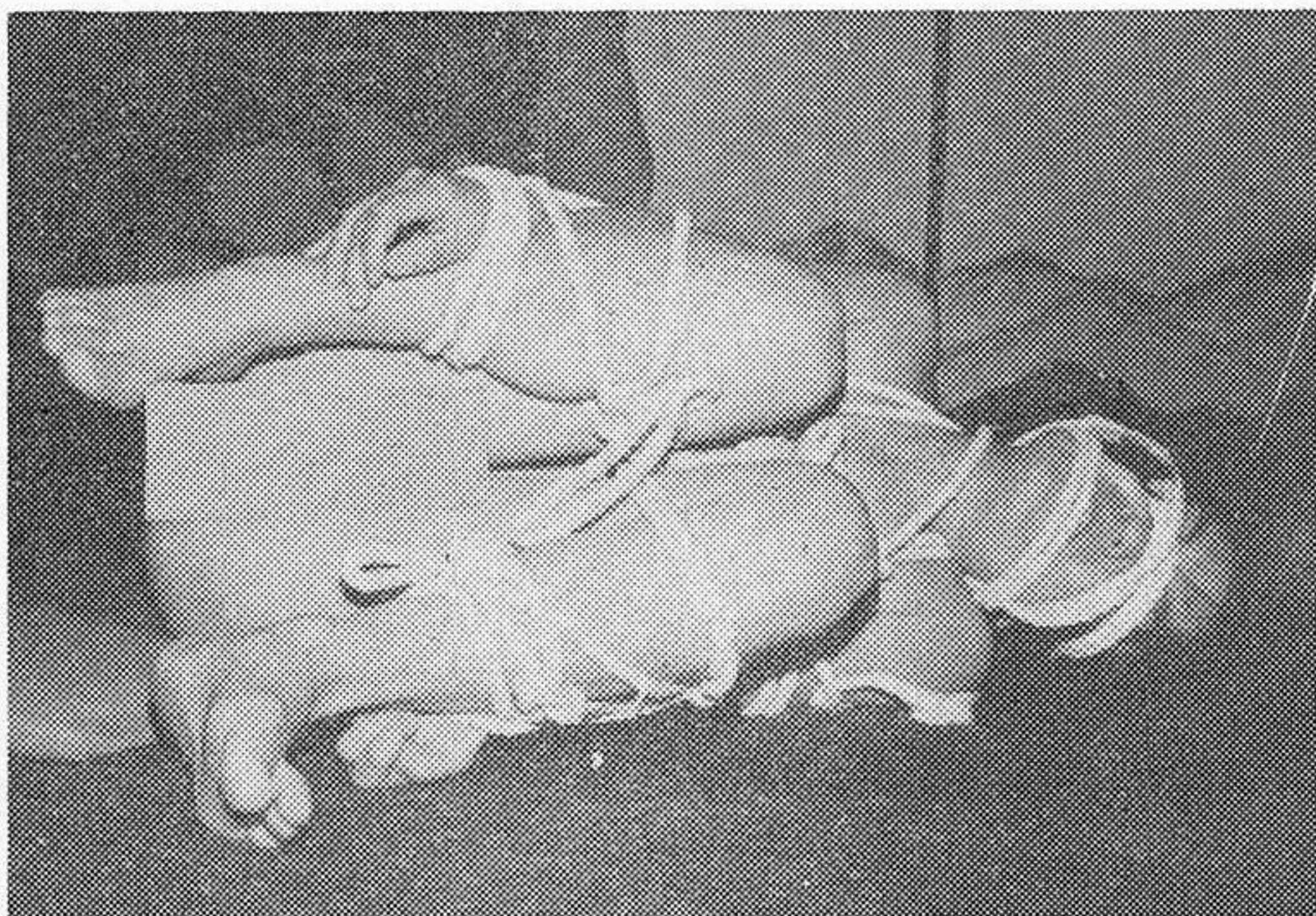
それにしても、あの吊り責めには、とても自信がありませんでしたが、谷山さんが「好美さん、私が先に吊るされますから、私のするようにしていれば大丈夫。頑張ってね」とはげまして下さったので、歯をくいしばって体を投げ出したのですが、吊られてぎりぎり回転する苦しさ、肌に刺さる主人手製の投げ針の責めは、本当に強烈なものでした。あの時こそは、激しい責めを、じっとこらえるだけが精一杯で、自分の被虐体が映画に撮影されている事など一切、忘れておりました。

総てが終わった時、東映の方々から「御苦労さんでした」と声をかけられて、ようやく自分がカメラの前で責められていたことを思い出し、とても恥かしい思いが、こみ上げて来ました。そうして同時に、体の所々に痛みを覚えたのでした。見ると、足に二センチほどの切り傷が出来ていて血が流れておりました。半年たった今も、私の足には、その時の傷跡が、はっきりと残っております。

奇ク誌上に「性倒錯の世界」についての批

評を書いて下さる方々もおいになり、新年号の杉本弘志様のように大変、酷評して下さいる方も多いことと存じますが、決して、私が進んで出演したのでもなく、SM実践者の一人として、マゾの真の姿を同好者の一人でも多くの方に見て戴けたらと、ささやかな思いから努力させて戴きましたのですし、私なりに全力でプレーしたつもりであります。

東映が、あのドキュメントを企画された時から、関係の方々と辻村さんとの間で、お話し合いがあったと聞いておりますが、もしあの映画が、SMの部分で、真のSMの姿を求めるのではなく、見せかけのショーを演ずるのでしたら、わざわざ私のような女を公衆の前で裸にしなくとも、プロの女優さん達を緊縛して撮ればよいのではないのでしょうか。そうでなくても今、奇ク誌のアイドルにもなっている深田菊子さんや、若い方々が出演されれば、それでよかったのではないのでしょうか。私は



先にも書きましたように、彼女達に出演してもらってはと、お願いも致しました。でも辻

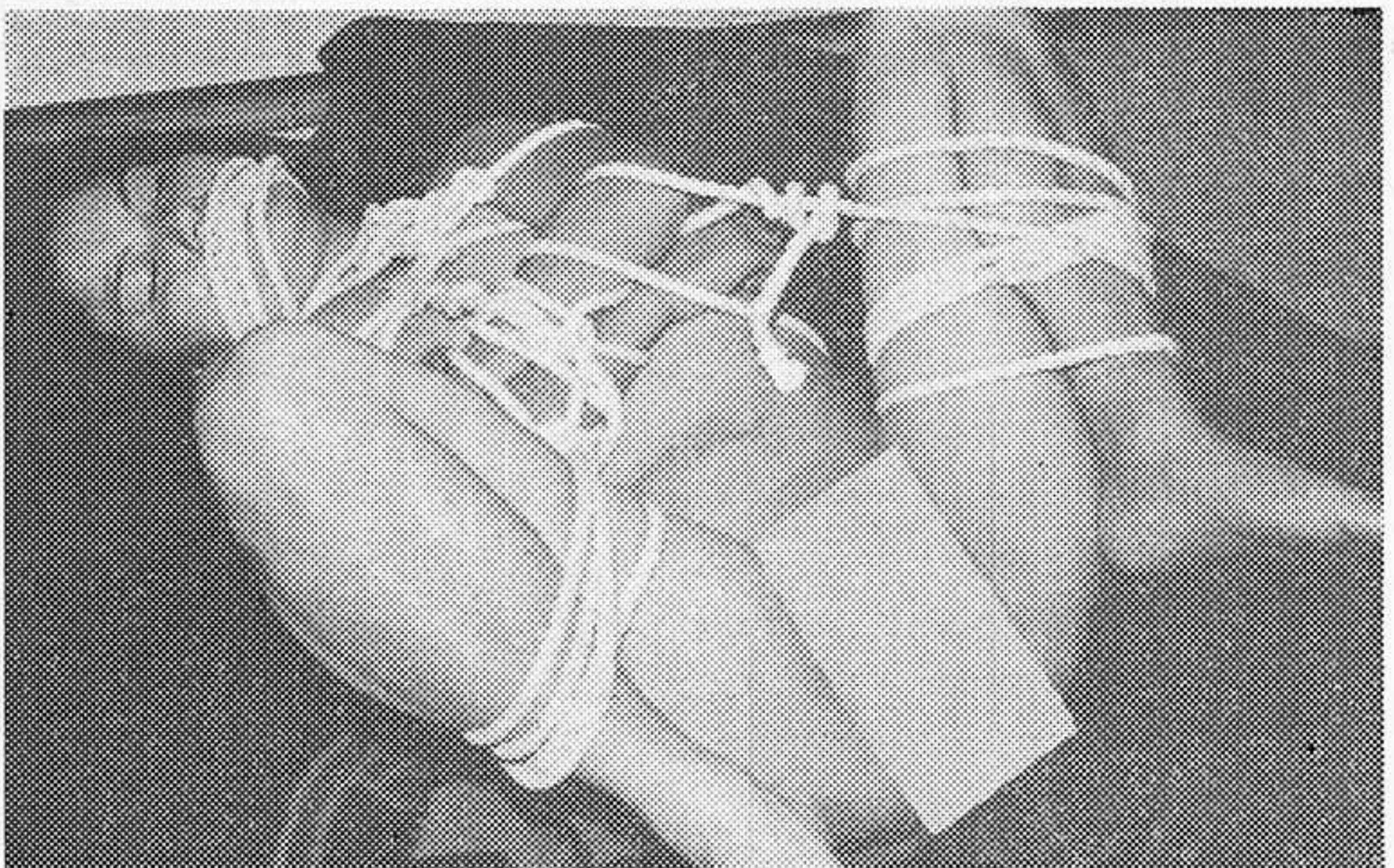
村さんも、いろいろお考えになって私達を出演させて下さったのだと思います。それにはそれだけの理由もあったのだとも思いますが杉本さんのあの一文を、「真のマゾの姿を」という辻村さんの希望に応じて協力された、先輩の谷山さんは、どんな気持ちでお読みになられたかと思えますと、とても悲しくなります。「真のM性とは」という私の心の支えさえ、ゆらぐ思いです。

その反面、もし奇ク誌が労をとって下さるならば、杉本さまの前で、深田菊子さんや若い方と、谷山さんと私とで、真のSMプレーとは、こんなものだといえるような、プレーの共演をして、被虐願望の真の姿を、お見せしたいとも思うのです。

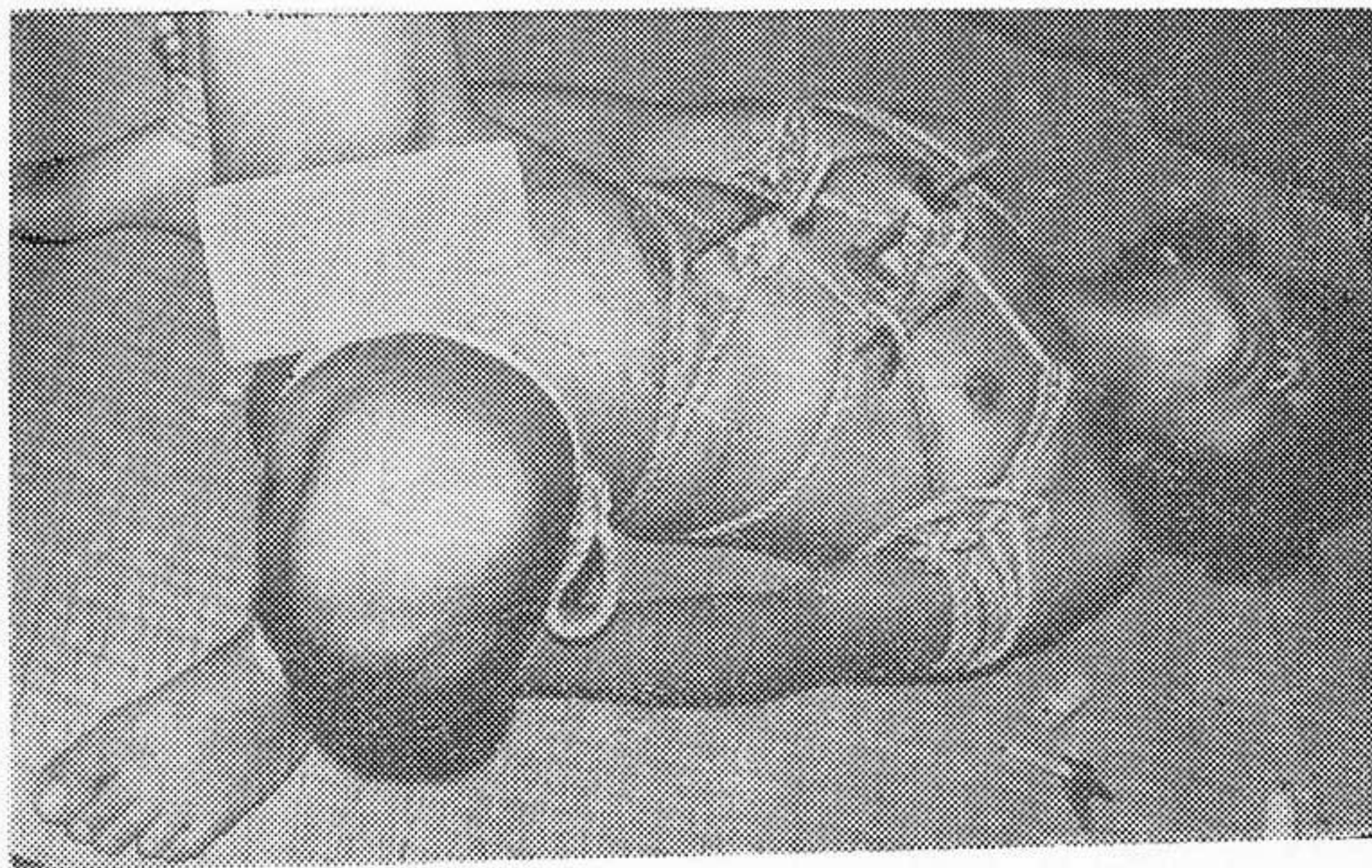
子供の植物図鑑を見ておりますと、よく何々もどきという植物名を見るのですが、「もどき」とは「よく似ている」ということから使われているのだそうです。SMもの氾濫の今日、何かと、さわがれおりますが「SMもどき」ばかりが多いのではないのでしょうか。でも、SKプレーなんて、所詮は天下に公表するものではなく、愛する主人、心ある同好者と楽しみ、プレーするものだ、つくづく思う今日このことです。

新年号の読者通信に投稿されています「小田原の由美」様。貴女様の手記、とても、感心しました。三年近くの飼育で貴女様が心の扉を開かれ、マゾ願望に目覚められましたことを、心から、お喜び申し上げます。私も、貴女様のような同好者のおいになりますことを心より、うれしく思います。ぜひ一度、お逢いして、マゾ願望の女同志、いろいろ、お話したいと存じます。三人プレーを経験して、素晴らしい思い出を作りました私達夫婦は、新しい試行を求めています。私は貴女の手記を拝見して、もし、主人が貴女様を飼育する様子を、椅子などに開股縛りをされて見学出来たら、どんなに素晴らしいことだろうと想像しております。

田尻長洲様。貴男様のおっしゃる通り最近、交換プレーを提唱される同好者が少なくなっていると思います。私達夫婦も、同好家御夫婦との交換プレーが実現したらと、よく話合っておりますが、過去に私達が経験いたしましたことから、本当の交換プレーとは、お互いに同じ条件でプレーすることが何よりも大切なことだと思います。



います。せっかく同好者同志が知り合いになれましても、先方は奥様を、だれともプレー



させたくないが、好美とはプレーしたいとおっしゃる方や、プレーまでは、なんだかんだ

と、お手紙や電話など戴くのですが、一度プレーをしてしまうと、なんの便りもなくなっ

てしまう方の中にもあります。夫婦同志が本当に信頼出来るようになるまで、あらゆる可能性を求め、信頼の度合を一つ一つ積み重ねた上で、自然と夫婦SMプレーが交換プレーへと移行するような条件を作っていくべきではないかと思うのですが、いかがでしょうか。交換プレーの実現を願って、私達夫婦も広く同好者の皆様との交友を願っております。

私の肉体は自分でも理解出来ないほど責めに変化を求めるのです。責めを知った頃は針で乳首やお尻をチクチクされるのがとても刺激でしたが、やがて、クリップ責めが好きになり、今は舐責めが、とても好きです。乳首や、腋の下、それに顔面に舐涙の雨が降ると、たとえばようなない欲びを感じるのです。

私は今、とても恥かしい飼育を受けております。それは、明るい電灯の下で丸裸になって、オナニ的自虐プレイを強制されるのです。それも、とても恥かしい女性用語を口走り、足のウラから顔まで全身くまなく舐雨を降らしてもらいな

がらです。初めは、恥かしいのと熱いのでなかなか合格点を戴けなかったのですが、近頃、やっと「よし」といって下さるようになりました。

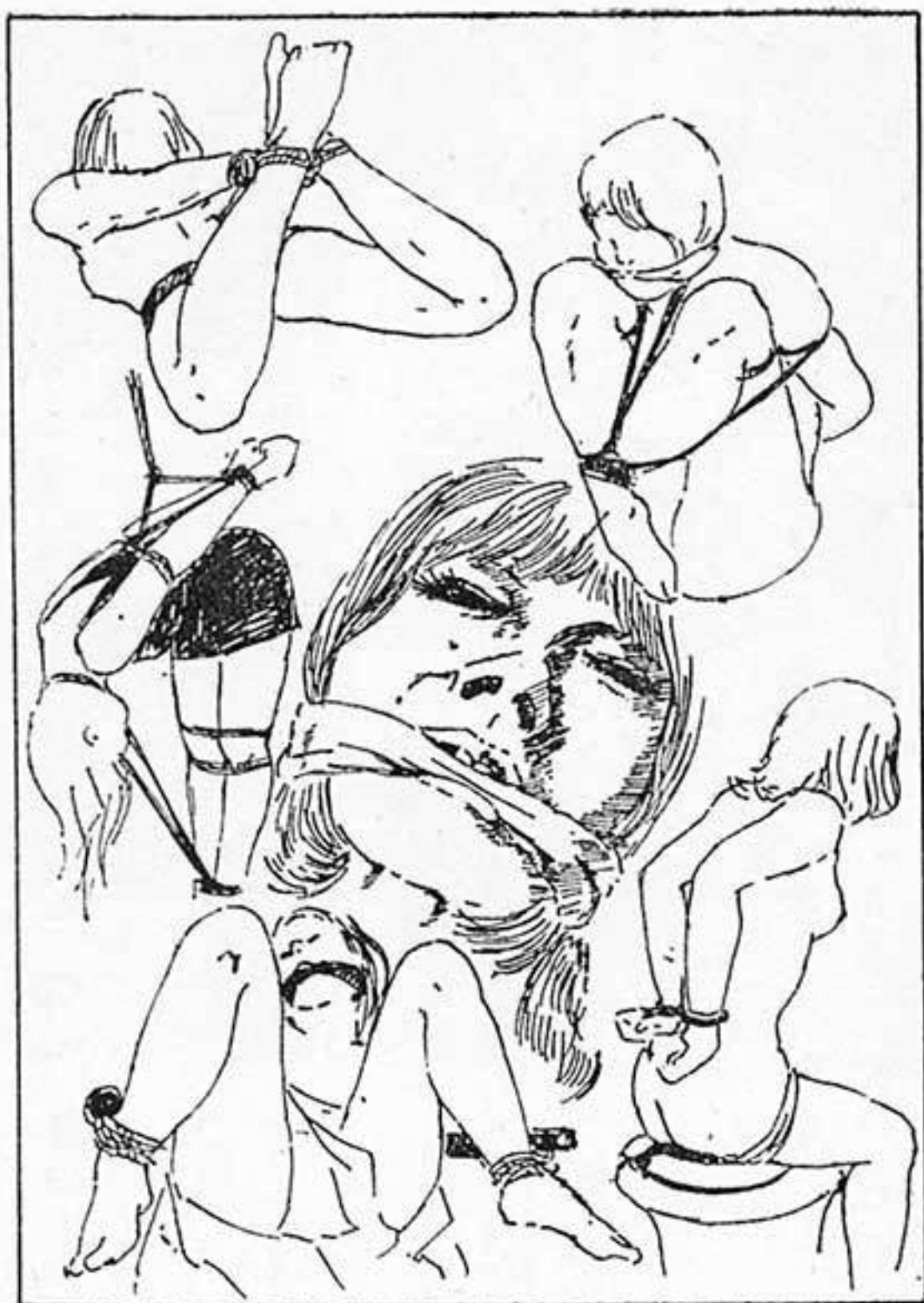
それに、時々受ける責めなのですが、浣腸を百CCほどして戴き、その上で前記の自虐プレイをさせられます。

先にも書きましたように、私は、こんなに被虐性の強い女になってしまいました。そのことに関しては少しも後悔などしていませんし、マゾ女に育てあげた主人に対しても、感謝こそすれ、恨みがましい気持を持ったことはありません。でも、やはり時々、このままでエスカレートして良いのだろうか、と考えることもあるにはあります。

しかしそれは、現在の奴隷妻としての日常のことではなく、激しいプレーをした後、何日もの体の節々が痛んだりした時に、体をいためてしまわないかという心配が湧くこともあるという意味です。でも、この点は、主人のほうがよく心得えていて下さるので、私は安心して責められていけばいいのでしょう。

私の体に熱い舐責めをして下さる、強烈なSMプレー同好者の出現を、主人と共にお待ちしております。

カット・志羽利也



☆小説「拷問クラブ」シリーズ(5)☆

女

体

絶

叫

鶴 見 浩 一

—

真理子の形よい口唇を押し開けて、始めて口枷が挿入された。

今日から七日間、本格的な苦痛教育が開始されるのだ。

地獄の責苦に耐えられず、自殺しようと決意しても、このゴム製の小さな口枷が、それを制する事になる。『死』という、最後の安楽を許さないための口枷であった。

「ウウ……」

不気味な予感と不安に、真理子は悲鳴をあげたが、もちろん声とはならない。

半開きにされた、真理子の可愛い口元を眺めて、松山老人の目が笑った。

「さて、お嬢さん。今日から本格的な責めを行ないます。貴女の肉体と神経が、本番の拷問ショウで失神しないように、あらゆる苦痛に耐える教育です」

松山老人の瞳は、異常なまでに清く、明るく澄んでいた。

善人でも悪人でも、その極限に達すれば、聖人君子の如き、きれいな瞳になるという。松山老人の澄んだ瞳は、永年に亘る女体拷問の犯罪的快楽がもたらした、サド行為の代償であるかも知れない。異常な快楽の追求は、異常な肉体の変化と比例していた。

真理子の白い身体は、天井から下がった鎖に吊られていた。すでに、最後の小さなパンティも脱がされ、輝くばかりの裸体が、ライトの中で震えている。

「第一日目は、全身責めと言いましてな、貴

女のきれいな身体を虐めてみます……」

松山老人は、電動のスイッチを押した。

ガチン、ガチャン、と鎖が歯車に噛み合う音がして真理子の裸体は上へあがっていく。

床と爪先が、一メートルも離れたところで、

松山老人はスイッチを離した。

「ウッ……ウウ……」

両手首と肩の骨に、自分の全体重がかかる

苦痛に、真理子は呻いた。

松山老人は、上を見上げながら、歌うように話しかけた。

「まず、このように一直線になった身体を、上と下へ引き伸ばしてみましよう」

「嫌、やめて！ ああ、お願い。やめて！」

もの言えぬ口の中で、真理子は絶叫した。

優しく、柔らかい乙女の神経を、暗い不安が無残に切り裂く。

その表情を見て、松山老人は楽しそうに笑った。

「まだ序の口ですぞ。今から震えていたのは、永い一日が過ごせません……。この後、

面白い責めが続きますから……」

松山老人には、言語的責めを楽しむ傾向がある。これから加えられる拷問の苦しさを説明し、その反応を見ようと、その表情は楽し

そうだ。

「全身責めと言っても、いろいろありまして

な、伸ばす、叩く、引き裂く、丸める、圧迫する、潰す等に分けられます。今からやるのは、肉体の引き伸ばしです」

松山老人は言葉を切ると、ニヤリとした。

「引き伸ばしと言っても、これは苦しいです

ぞ。肉体ばかりでなく、内臓まで引き伸ばすのですから……。健康で美しい貴女の身体が何処まで我慢できるか、見ものですな」

聞きたくなくとも、耳に飛び込んでくる松

山老人の声に、真理子は慄然となった。

——何故、何故、私はこんな酷い目に合わないければならないの！

真理子は、口の外に出ない悲鳴をあげた。

それは、捕えられて以来、何度も叫び続けている素朴な絶叫であった。

美しき処女である、というだけの無意味な理由で、真理子の肉体は、想像を絶する拷問の責苦を受けている。恐らく、これからも半永久的に……。

そう考えて、発狂しそうな絶望感に、真理子は襲われた。

真理子の長いマツゲを、押し上げるようにして、白い涙が、こぼれ落ちた。

松山老人は、満足そうにその涙を見て、作業を開始した。

ブランと下がっている真理子の両足首に、鎖が巻きつけられ、その鎖には鉄の重しが固定された。

「ウアッ……アウッ」

絶叫が、真理子の口枷から洩れた。

両手は上へ、両足は下へと、真理子の白い柔らかい肉体がピンと一直線に張り切った。

重しが、もう一つ、重ねられた。

「グウッ……」

手足の付根と内臓が、ミシミシと音を立てて壊れる苦痛が真理子を襲った。

三つ目の重しが下げられた時、真理子の裸体に脂汗が浮かんだ。手首と足首からは、すでに血が流れている。

「やめてえ！ 助けてえ！ お願いッ！」

力一杯、真理子は叫んだ。が、もちろん、口の外へは洩れない。必死の哀願の絶叫も、鈍い呻き声に変わるだけである。

囁くような、松山老人の声が、苦痛に喘いでいる真理子の耳に聞こえた。

「まだ、二キロ程しか下げてませんぞ。これからが苦しくなる……。十キロの重しを下げれば、肩と股の関節が外れ、三十キロ近くに

なると、腹の臓物が飛び出す……」
ニヤリと笑いかけ、松山老人は言語的責めを楽しんでいる。

「例の魔女拷問の記録によると、面白い事が記されています。貴女みたいに吊らされて、重しを増していくとすな、身体が、ついには裂ける……。どこから最初は裂けると思います」

松山老人はソツと真理子の可愛らしいヘソを触った。

「ここですよ、ヘソ……。私も始めて知ったんだが、まずヘソから裂け始めるそうです。そして、腹が真横に開き、腸が飛び出す。続いて、胴体が真二つに、ちぎれ落る……」

松山老人の、すさまじい説明と苦痛に、真理子の顔色は白くなった。

言語拷問の効果に、松山老人は満足すると慰めるように言った。

「お嬢さん、そう心配なさらなくてもいい。

適当にやめてあげます」

四つ目の重しが固定された。

「グウッ……」

異様に鋭い悲鳴が、真理子の口枷の間から洩れた。

真理子の肉体は、可能な限り伸ばされ、強

烈に引っ張られた。肉と骨はもちろん、内臓すらちぎれる激痛に、真理子の全身から驚く程の脂汗が流れ、つぶらな目が、カッと見開かれた。

——内臓が破れる！

遠くなる意識の底で、真理子の神経が喚いた。全ての臓物が、ねじ切られるような苦痛が、肉体の中で荒れ狂い、黄色い液体が口唇から洩れて、細い首に、したたり落ちた。

「ウ……ウ……」

低い呻きが、汚物とともに吐き出された。きれいな真理子の裸体は、信じ難い程に伸ばされたまま、ピクピクと蠢いている。それは、破壊寸前の内臓が叫び続ける、苦痛のケイレンであった。

松山老人は、真理子の瞳を、台の上にあがって調べると、強心剤を打った。非情な液体は、真理子の感覚を、激痛が続いている現実

に引き戻す。

「ウグウッ……ウウッ……」

真理子の目が異様に開き、鋭い呻き声が洩れた。

「まだ四キロ程の重しです。身長も五センチくらいしか伸びておりません。この程度で失神して貰っては困りますな……」

松山老人は呟くと、重しを横に引っ張り、強く離れた。

真理子の肉体が、時計の振り子のように動いた。

「ギイッ……グエッ」

蛙が潰されるに似た悲鳴をあげて、真理子の顔が大きく歪んだ。

こういう状態では、僅かな動きでも、想像を絶する苦痛に変化する。鉄の重しが、ブラリ、ブラリと動いたたびに、真理子の肉体は異様な衝撃を受けた。その衝撃は、地獄の責苦である。内臓が潰れ、骨が割れる限度寸前の衝撃であった。

手首と、形よい口唇から洩れた血が、床に飛び散った。

責苦に激しく歪む真理子の表情を見て、松山老人は軽い興奮状態に陥った。何時見ても美しい処女が悶え苦しむ構図は、一幅の絵のように素晴らしい。サドの世界に、芸術というジャンルがあれば、まさしく、この絵が、そうである。

全裸に巻きつく銀色の鎖、絶叫を絶やさないう半開きの唇、空虚に映る濡れた瞳、そして苦悩の脂汗と真赤な血潮……。その全てが完成された詩、絵画である。

——さて、どのように責めるか……。

責め方は無限に、ありそうだ。プレイとしてではなく、破壊への苦痛を与えるのだから……。絶命しない限りに於いては、この美しい裸体を、好きなように虐めたいぶつてよいのだ。

松山老人は、そう考えて、伸び切った真理子の肉体を、科学者に近い冷静な表情で観察した。

異様に筋肉が盛り上げられた手足の付根、細く絞られた腰、上下へ引き伸ばされた豊かな乳房——その全てが、現在の苦痛と、これから襲う拷問の恐怖に震え、泣いている。

松山老人は、台の上にのぼると、責めを始めた。

まず、両手の親指で、キリキリと張った真理子の肉体を指圧し始める。

「グエッ……」

胃を強く圧迫された時、真理子は獣のように呻いた。ちぎれる如く伸ばされた胃に、鉄の棒が叩きつけられるような激痛が襲う。

松山老人の指は、執拗に真理子の胃を責め続けた。

——胃が潰れる！
すさまじい苦痛に、真理子の肉体は悲鳴を

あげ、目がくらむような嘔吐が走った。

胃から脇腹へと、指の責めは移動した。張りつめた白い脇腹を、第一関節が埋まる程、親指で押された時、真理子の口から泡状の液が流出した。白い裸身からは、多量の脂汗が噴き出し、形容し難い呻き声が、地下室に響きわたった。

松山老人の快楽は、非情である。次の責めに、太い鞭が使用された。

ズシッ、と鈍い音を残し、皮の鞭が真理子の胴に巻きついた。

「……」

稲妻のようなケイレンが、真理子の全身を駆け抜けた。

真理子には、声がなかった。ただ、つばらな瞳が、異様に拡がり、反転する如く白目になった。

再び、力一杯に鞭が振られ、細い腰を圧迫した時、全身の血液が逆流する感覚に、真理子の神経は地の底へと沈んでいった。

二

二度目の強心剤で現実に戻った時、真理子は自分の目を疑った。

恐怖の鎖から解放されている自由な自分の身体を見出したのである。ただ、相変わらぬの全裸ではあった。

——今日は、もう責められない……。

淡い希望が、真理子の顔色に出た。が、それは、耳元で囁く松山老人の声で、無残に打ち砕かれた。

「弱いすな、お嬢さんは……。これから責めようとする時、失神してしまう。面白味がありませんよ。引き伸ばしは、やめました。その代わり……」

松山老人は、言葉を切ると、ニヤリと笑った。澄んだ瞳が、碧く輝いている。

「今度は、貴女の肉体を丸めてみましょう。引き伸ばされた身体を、元に戻してあげるのです」

松山老人は、薄く口を歪めると、壁にかかっている細い縄を取った。

——丸める……。

新たな不安が、真理子を襲った。

一杯に見開かれた、その可憐な瞳を見て、松山老人は細い縄を示した。

「この縄で、貴女の身体を丸めて縛ります。俗に言う八海老責めVですが、プレイとしては、本格的に縛りますので、かなりの

苦しみが襲う筈です」

引き伸ばされた肉体の苦痛に呻いていた真理子は、顔色を変えた。

「海老責め」とは、昔の刑罰ではないか！

何かの本で、真理子は読んだ事がある。それにかけてられた四人は、内臓圧迫の苦痛で悶死したという。

——それを私に！

真理子は、激しく首を振った。恐怖が波の如く全身を走る。

「やめて下さいッ。やめてえ！」

真理子の必死の絶叫は、もちろん声とはならない。

松山老人は声のない笑いを浮かべると、作業を開始した。

まず、両手を後に回し、背中では手首を合わせて縛った。真理子の意志は激しく抵抗するのだが、先程の責苦のために、筋肉の自由は、びれていて役に立たない。ただ、恐怖に燃える瞳と呻き声だけが、精一杯の叫びをあげているだけだった。

松山老人は両手首を縛り終わると、真理子の顔を覗き込んだ。

「さて、これからです。美しい貴女の肉体が何分程、持ちこたえるか、興味深いですな」

松山老人は、そう囁きながら、真理子の両膝を上げて曲げ、あぐらを組ませた。

「アッ……」

処女の羞恥が呻き声を発した。大きく割られた両足の間に、自分の顔を押つけられたからである。

「ウウッ……アウッ」

苦痛と屈辱の姿勢に、真理子は悲鳴をあげた。尻の谷間へ鼻が触れる程、グイグイと頭を圧迫される。全身の骨が、異様な音を立てた。

「アアッ……ウアッ」

内臓と筋肉が激しく圧迫され、真理子は息ができない苦しさに呻いた。

不気味なまでに真理子の肉体が曲がったところで、松山老人は縛り始めた。

胡坐をかけた両足の空間に、真理子の頭はねじ込まれ、カニのように曲がった両足首に細い首が連結された。後に回した両手首も、足首に吊られる。

白い肉体が、不自然に丸められ、強烈に圧迫された。そのままの姿勢で、松山老人は真理子の頭を強く押し始めた。

「ギャッ……グッ……」

真理子は、鋭い呻き声を洩らした。

全身の内臓が不気味に曲げられ、潰れる程に圧迫される。息すらできない苦痛が、脂汗となつて真理子の裸体を襲った。可能な限り

圧縮された肉体は、不気味な骨の鳴動と、強烈な内臓のケイレンを引き起こし、何度目かの地獄の失神を真理子に送った。

が——例によって非情な注射針は、苦痛からの逃避を許さない。

「グ……グッ……グウッ……グア！」

頭を押さえつけられるたびに動物の断末魔に似た呻きが真理子の口枷から飛び出した。

松山老人は笑った。心の底から楽しそうにサドの快楽に笑った。

「どうですか、お嬢さん。普通の海老責めとは少し違うが苦痛は、より強力でしょう。」

さあ、存分に自分の体を眺めなさい」

松山老人は、首の後ろで組み合わされている真理子の足首を、力強く引っ張った。

「……」

悲鳴すら、あげなくなった真理子の顔が、異様に歪んだ。黄色い嘔吐物が口唇から流れ始めた。骨が折れる程に曲げられた細い首が小刻みなケイレンを繰り返している。

通常であれば、完全に意識を失う程、強烈な責苦であるが、数回にわたる強心剤の注入

によって、真理子の神経は確実に苦痛を捕えていた。

真理子の地獄は、これで終わりではなかった。プレイではなく、肉体と感覚の破壊を目的とする松山老人のサド追求は、無限の責め方を容認していた。

サド快楽のため、美しき材料である真理子の肉体は、苦痛と屈辱の姿勢のまま、天井に吊り下げられた。

両足首に鎖が固定され、そのまま身体が床から離れた時、真理子の裸体は不気味に光った。驚く程の脂汗が、苦痛の表現として一度に噴き出したのである。

想像を絶する苦痛の感覚の中で、真理子の脳裏に横切っているものは、真赤な血の海を泳いでいる自分の姿であった。全身、無数に針を刺され、火の棒で骨を叩かれている自分の肉体であった。

真理子の口唇から洩れた、どす黒い血が、彼女の体を染め、床へ流れ落ちた。

その血を足元に認めた時、松山老人の体内に、異常性欲の衝激が力強く駆けぬけ、躍り狂った。

松山老人の澄んだ瞳は、らんらんと輝きを増している。より以上の刺激と興奮を求めて

老人の血は妖しく騒ぎ始めた。

——股裂き責めをやるう……。

松山老人の残酷なサド追求は、限界も拘束もなかった。憐れなのは、老人の快楽のため犠牲になる、全裸の美しい真理子であった。

引き下ろされ、床に崩れ落ちた真理子は、海老責めの縄を解かれた。

真理子は、思いつき息を吸い込んだ。圧迫されていた心臓が、ほっと一息をつく。数分も経つと、若い真理子の肉体は直ぐに回復し、正常に戻る。

真理子の顔に血の気が戻るのを待って、松山老人は口を開いた。

「元気が出ましたかな、私の可愛いお嬢さん……。それでは、次の責めに移りましょう……」

ヒイツ、と真理子は顔をあげた。

——まだ責められる！

先刻までの責苦で涸れてしまった筈の涙が真理子のマツゲを押し上げた。

「ああッ、もう嫌！ 許して下さい！」

声として外へ出ないとは分かっている、真理子は絶叫し、哀願を繰り返した。肉体の全てが叫ぶ、必死の悲鳴であった。

「ふふ……」

それに対する松山老人の答は、不気味な薄笑いである。

「ああ……」

真理子は、発狂しそうな絶望と恐怖に、全身の肌が粟立ち、ブルブルと震えた。

——お母様！ 助けてえ！

松山老人は、天井から下がっている数本の鎖のうち、一番離れている二本を引っ張ってきた。

真理子の顔が、恐怖で大きく歪む。

「そんなに怖い表情をしないで下さい。これからですよ、泣き喚く程、苦しくなるのは。股裂きという責めをやってみます」

松山老人の口調は、小学生に語りかけるように柔らかい。それだけに、その後に残酷な拷問の不安が、真理子の神経をズタズタに傷つける。

——股裂き！

真理子は慄然となった。先日の片足吊りの責苦が、強力に想い出されてくる。太腿を大きく開いた屈辱の姿勢で針を刺された、あの地獄の感覚が……。

「ウウッ……」

肉体の中を、気が遠くなりそうな悪感が走

った。

「さて、始めますかな……」

真理子の両足首に、非情な鉄の輪が固定され、それに連なる鎖が、音をあげて動き始めた。

「ウアッ……アアッ……」

真理子の目が、カッと見開かれた。大きく広げられた両足を上にして、身体が床から離れたのである。Y字形の下方に、豊かな黒髪が長く垂れた。

鎖と歯車は、正確に噛み合い、真理子の裸体は上へ上がっていく。

「ヒイッ」

足首と股の関節が、悲鳴をあげた。

両足は少しずつ開いていき、Y字形がT字に近く変形した。

「ギャアッ……ウアッ」

足の付け根から、身体が真二つに引き裂かれる苦痛に、真理子の痛感絶叫した。

長い真理子の両足が、無残にも一直線に伸ばされた所で、松山老人は鎖を固定した。

「どうですか、お嬢さん……」

脂汗を、したたらせている真理子の耳に、囁くような松山老人の声が聞こえてくる。

「……」

真理子は、もう何も言えなかった。絶叫しながら、両足をもぎ取られるような激痛に、ただ地獄の呻き声を洩らすのみである。

すでに、羞恥心は消えていた。清らかな自分の体が大きく開かれ、むき出しになっている事よりも、不気味な音を立てて骨が割れる感覚に、全身の神経が集中していた。

強烈な痛感と苦痛の衝撃は、耐え得る限界まで達していた。引き伸ばされ、丸められ、そして今度は引き裂かれた肉体の責苦は、脳神経すらも侵しつつあった。

何時もの松山老人であれば、限度を見極めて、適当に責めをやめるのであるが、今日の老人は違っていた。何か、異常に興奮していたのである。可憐な真理子の顔が、不気味に歪む苦悩の表情に、素晴らしきサドの美を発見したためかも知れない。あるいは制御役を務める信次が、この場にいない故もあろう。

明るいスポットの下で、小刻みにケイレンしている真理子の裸体に、松山老人の狂暴な血が騒いだ。

——無残な姿態をさらしているこの乙女を、思いっきり虐めてみたい……。

松山老人の瞳が、太陽に反射する湖水のように、キラリと光った。その手には、皮の鞭

が握られている。

松山老人は、真理子の後ろに回ると、目指す場所に力一杯、鞭を振り下ろした。一直線に引き裂かれた両足の中央部に——。

「グアッ——！」

形容し難い絶叫が、口枷の間から飛び出した。眼球が露出する程に、真理子の目は見開かれ、衝撃の強力さを示すが如く、鎖が激しく鳴った。

可能な限りに引き裂かれている真理子の体は、通常の何十倍という衝撃の苦痛を、確実に鮮烈に甘受した。

鞭の先は真理子の白い腹まで届き、後方は背中のかぼみに当たった。乙女の柔肉を中心とする鞭の軌道は、地獄の衝撃を真理子の肉体と神経に送った。

二発目の鞭が、同じ場所を襲った。

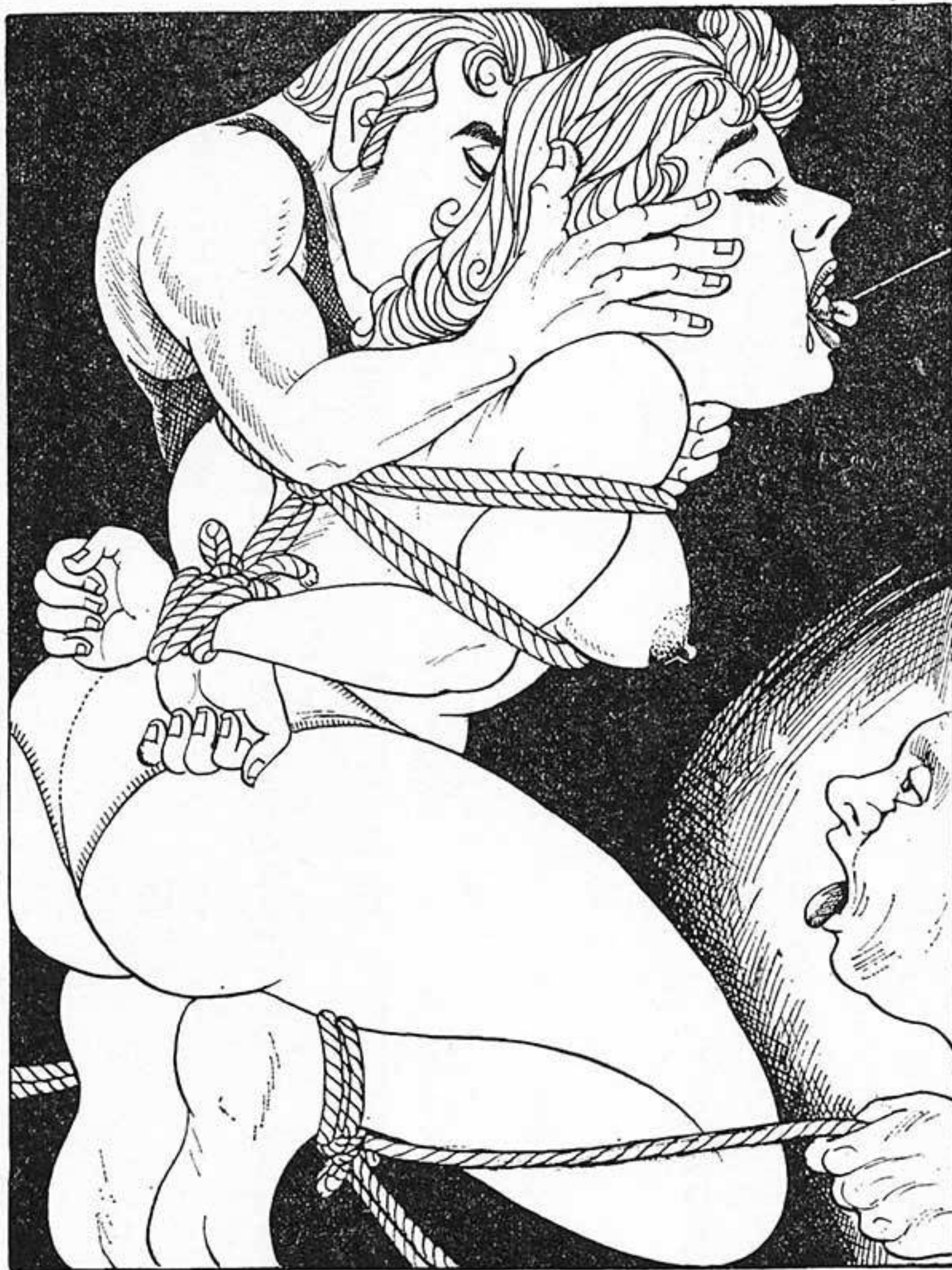
「……」

真理子の口からは、呻き声一つ洩れなかった。その代り、身体中の穴から、驚く程の液体が流出した。脂汗と、泡状の吐物と粘液、それに真赤な血——。

それらが、床をおびただしく汚した。

三発目が喰い込むと、真理子のつぶらな目が、不気味な白目と変化した。

イメージギャラリー『舌いじめ』岡 かし



そして四発目——真黒な血が噴き出し、多量に流れた。

「ギャァ！」

鋭い悲鳴が一声、可愛い口唇から、洩れた。首がガクンとケイレンし、黒髪が一瞬、逆立った。そして、汚物で濡れた口唇が、薄

く歪んだ。真理子は、全身で笑った。

想像を絶する責苦に耐えられなくなった、

真理子のデリケートな脳神経が、ズタズタに乱れたのである。

真理子は、発狂した——。

三

「しまったッ」

常人ではない真理子の瞳を調べて、松山老人は興奮状態から覚めた。

「責め過ぎた……」

松山老人は後悔した。あと八日間は正常でなければ困る。拷問ショウに狂人を出演させたのでは興覚めだ。そうかと言って、今から別の処女を探し出すのは、時間的に無理である。美しくて、身体がきれいな処女なんて、そうザラにいる訳ではない。

「そうだ」

思案していた松山老人は、簡単に結論を出した。

——この娘を正常に戻せばよい……。

設備と技術は松山老人の手の内にあった。少しの時間、本業の精神病院を使用するのである。電撃ショック療法を執行するだけなので、時間的にも手間をとらない。

松山老人は、この時ばかりは、自分の本業が精神科医であるという事に満足を憶えた。

二時間後——。

幸か不幸か、真理子の神経は正常に引き戻

された。院長自らの、秘やかな電撃ショック療法は効奏したのである。

憐れなのは、真理子という、この美しき処女であった。

脳神経が高圧電流によって悲鳴をあげ、正常に戻った時、果てしなき真理子の地獄は、非情な運命として再開されたのである。

死は、生き物にとって一番の苦痛という。何故なら、最終的な肉体の破壊を意味するからである。しかし、死の後には、平和なやすらぎが約束される。

が——真理子の場合は、そのやすらぎは許されなかった。死のみならず、失神という仮のやすらぎすら許されない。当然、肉体と精神の分離という変形的なやすらぎ、即ち発狂状態が容認されるものではなかった。あくまで、生命と健康な精神を保ったまま、肉体の破壊を強いられる真理子である。

正常な意識を取り戻した時、真理子の美しき裸体から洩れた最初の声は、断末魔に近い絶望の悲鳴であった。

その悲鳴を聞いて、松山老人の口が、楽しそうに歪んだ。

「正常に戻りましたな、可愛いお嬢さん。

さあ、地下室へ行きましょう……」

真理子の長いマツゲを押し上げるようにして、白い涙が、こぼれ落ちた。

四

信次と美佐の二人だけの家は、六日目を迎えた。

今日までの五日間——美佐の肉体は、信次の巧みな教育によって、完全なマゾヒストに変わりつつあった。

その夜、二人は生まれたままの全裸で、広い浴室の中に向かい合っていた。

「今日は何をするの……」

美佐の声は濡れていた。この五日間の羞かしく、熱い信次の責めを思い出すと、知らず知らずの内に、身体の奥が火照ってくる。始めての強烈な甘い異常愛戯の体験は、美佐の肉体と心を捕えて離さない。責められる喜びの開眼に、美佐の裸身は小刻みに震え、せつなく燃えていた。

「今日は、今までと少し違う……」

信次はニヤリと笑って、持参したカバンの中身を外へ出した。

「それは……」

美佐は、タイルの床に並べられたものを見

て、訝し気な声をあげた。

「そう……浣腸器だ」

「浣腸！ そんなものを、どうするの」

「君に使用する……これが快楽に繋がるんだよ」

「だって……」

美佐の顔が赤くなった。

「恥かしいわ、私」

「羞恥に耐える事も、マゾの快楽には重要な事だ……。さあ、始めよう」

信次は、イヤイヤをしている美佐の両手を背中縛りあげた。

「酷くしないでね」

不安そうに、美佐は声をかけた。

もっとも、新たな不安は、新たな喜びに繋がる事を、この五日間で肉体は知っている。言葉に反して、美佐の白い裸身は、ほんのりと期待の色に染まっていた。

信次は、美佐に四ツ這いの姿を要求した。

「嫌……」

と拒否の言葉は出るが、その口調は弱々しいのが、美佐自身、哀しい。倒錯性欲の芽は異常な勢いで美佐の肉を侵していた。

美佐は嫌、嫌、と繰り返しながらも、自分の意志で四ツ這いになった。

両手が後ろに回されているため床に頭がつき、丸やかな彼女の尻は高く突き出される。

信次の手が、そのままの姿で、大きく両膝を拡げた。

「あ……ああ……」

むき出しにされた腰に、美佐は羞恥の声をあげた。

信次は、程よい熱さのお湯で、犠牲者を愛撫するように洗い始めた。

「あッ……信次……」

美佐は、敏感に反応を示した。

「いいか、我慢するんだぞ」

信次の声とともに、

「ウッ……」

シュッと冷たい液が、腸の中まで走る感覚に、美佐は思わず腰を振った。

「駄目だ、動いちゃ……」

信次は、美佐の白い腰を抱きかかえるようにして、次から次へと、小さなプラスチックの容器を空にしていく。

半ダース入りのイチジク浣腸が、残り二本になった時、美佐は耐えられず呻いた。

「ああッ、もう許してえッ」

腹の中が、ドロドロに溶けていく感覚に、美佐の裸体が苦しうに、うねった。

「信次、もうやめてッ。トイレに行かせて頂戴。お願いッ」

「まだだ……」

信次は小さなゴム栓を、つまんだ。赤ン坊が使う乳首のおし、やぶりに似ている。

「ウッ……」

美佐は、思わず腰を突っ張った。

「な、何？ 今のは」

「ゴム栓だ。これを外さない限り、トイレに行っても無駄だ」

「ゴム栓！ 嫌、嫌よ！ もう許してッ」

美佐は暴れ始めた。

「そんなに動くと、苦しみが増す……」

信次は白い美佐の腰を押さえつけると、素早くゴムの貞操帯を装填した。

「あッ……」

美佐は悲鳴をあげたが、すでに遅い。腰一杯に、黒いゴムが張りついている。

信次は、満足そうに笑った。これでいい。

ゴム栓と貞操帯を外さぬ限り、苦しみからの脱出は不可能である。

薬が効き始めた美佐は、タイルの床を、のたうち回った。

「信次。た、助けてッ。我慢できないわ！」「まだまだ。二、三分しか経ってない……」

三十分程、我慢して貰う」

「三十分！」

美佐の顔が蒼ざめた。

腹の中が、恐ろしい勢いで鳴動している。ズーンと熱い、焦れたい感覚が、全身を責めた。

信次は落ちついた表情で時計を見ている。

「アアッ……助けて！ アッ」

美佐の全身に、汗が光った。あどけない顔が、苦悩の表情に歪む。

信次は、美佐の裸身を、あおむけに横たわらせた。両手が後に回っているため、白い腹部が大きく突き出された。

「アッ……苦しいッ！ 信次、助けてえッ」

ゴボゴボと鳴っている腹が圧迫されるので美佐は耐えられず、悲鳴をあげた。

信次は薄く笑って、美佐の悲鳴を無視すると、音を立てている白い腹部を、静かに撫で始めた。

「あッ……やめて！」

さすられるたびに、美佐の腸は激しく活動した。限界にきている便意は、苦痛と変化して美佐を責める。

信次は容赦しなかった。今度は、両手で腹を揉み始めた。強く弱く、粘土をこねるよう

に揉みほぐしていく。

「ウアアッ……助けてえ！」

美佐の顔が青白く変化し、涙が流れた。裸体はうねり、四肢がケイレンする。全身がしびれ、熱く腸が躍っていた。

美佐の我慢は、限界であった。恥も理性も捨てて、美佐は全身の力を抜いて集中した。苦しみを排出しようとした。

が——その行為は、不可能であった。小さなゴム栓と張りつけられた貞操帯が、その必死の力を押し返したのである。

「……」

美佐は、カッと目を見開いた。全身から脂汗が噴き出した。

薬を挿入されて二十分後、ようやく許された美佐は、トイレで半ば放心状態であった。

気が遠くなるような、生まれて始めて経験する、異常な快薬の洪水である。

「ああ……」

全身の力を抜いて、美佐は甘美な声をあげた。身体中が溶けてしまうような甘い感覚に美佐の目は濡れた。しかし、それ以上の快楽を知らされたのは、浴室に戻ってからであった。

白い裸身と、腸の中まで洗われた美佐は、再び四つ這いになる事を命令された。

「また……？」

「いや、もっといい事だ……」

ふふ、と信次は笑う。

「信次……まさか……」

美佐は、不安そうに信次の顔を見詰めた。

「そう……あらゆる方法で楽しもう」

「だってッ」

信次が、これから行なおうとする事が分かって、美佐は顔を赤くした。

——この人は！

美佐は、ブルンと首を振った。

「嫌！ 私は嫌よ」

「どうして」

「だって、そんな事……。信次、あなたは異常よ」

信次は、冷たく笑った。

「異常？ どういう事が異常なんだ」

「全部よ。ここにきてから信次は、ヘンな事ばかりやろうとするんだもの……。正常ではないわ」

「じゃ、美佐に聞くけどね」

信次は、美佐の目を見入って問いかけた。

「異常と正常の区別は、どこでつける？ 何

処までが異常で、どこまでが正常だ？」

「それは……」

美佐は口を閉じた。経験が浅い美佐には、こういう事に対する知識が乏しい。

「よく分からないけど、他の人達がやってない事するのは、やはり異常だわ」

「他の人達も、こういうことを楽しんでいるとしたら……」

「まさか」

ふふ、と信次は笑った。

「その、まさか……さ。みんな変化のある刺激を求めて楽しんでいる」

「……」

「事実、美佐も楽しかっただろう。この五日間は」

「……」

「どうなんだ？」

ええ、と小さく美佐は、うなずいた。

「でも、本当なの？」

「何が……」

「信次が私にしたような事を、みんなも楽しんでいるって……」

言いながら、美佐の顔は、羞恥で熱くなっている。

「本当さ」

「私……知らなかった。まだ子供なのね。でも、さっきの話だけど、信次はどう考えているの。異常と正常の区別は」

そう聞かれて信次の顔がニヤリと歪んだ。この可愛い娘の父親を考えたからである。

——あの老人こそ、異常者の権化だな……。常識では考えられないことを、正に犯罪と言える異常行為を、松山老人は平然と行なっているのだ。

「正常の限界はね、犯罪という線だ」

「犯罪？」

「そう。だから逆に言えば、SMプレイとしては、どんな変わった事でも、どんな酷い事でも、して構わない。肉体の破壊、即ち発狂とか死に至れば、当然、犯罪となるので異常と言える。それに繋がる行為だけを自重すれば、何をやっても正常さ……」

「よく分からないけど、じゃ、私達が今やっている事は正常の行為ね」

「ああ、だから安心してぼくに委せなさい。さあ……四つ這いになって……」

半信半疑の美佐に、そう命令すると、信次は強引に計画を進めた。

「ウッ……」

美佐は呻いた。予想していた感覚と、まっ

たく別の、鈍く、重い感覚であった。

「ああッ……信次……」

美佐は思わず、声を挙げた。

空になった腸が、覚えたものは、想像を超えた感覚である。肉体的というよりも、精神的な快感に、美佐の熱い吐息が洩れた。

美佐が、肉体的な喜びに、大きく喘ぎ始めたのは、その直後であった。信次の手に何時の間にか用意された、程よい大きさのバイブレーターが唸り始めたのである。

「ウッ……ああッ……」

美佐は、飛び上がりそうな衝撃に高く呻いた。その衝撃は、そのまま女体の歓喜と変化した。

「ああ……信次……これは……何……ああッ」
裸体をのけぞらせながら、美佐は熱い言葉を吐いた。

「……」

信次は無言だ。

めくるめくような攻撃を受けて、美佐の肉体は躍り狂った。喘ぎと呻き声が、明るい浴室に響き渡った。

強烈に責められる美佐の豊かな体は、羞恥も理性も忘れて、ただ躍り、うねり、回転した。美佐は涙を、こぼした。始めて体験する

奇妙なエクスタシーの涙であった。

——もう死んでもいい！

異常なしびれに身を苛まれながら、美佐はいつの間にか混乱した頭の中で叫んでいた。もはや異常でも変態でもよかった。これ程、強烈な忘我感を与えてくれるものなら、何でもよかった。

美佐は固く歯を噛みしめていた。唇が切れ小さな糸を引いて血が流れるのも気づかなかった。美佐の錯乱ぶりを見ながら、信次は二日後の事を考えていた。

——いよいよ拷問ショウだな……。

美しく、可憐な真理子の顔が、信次の目に浮かんだ。最後の責めで、泣き喚き、苦痛のケイレンにのたうっている真理子の裸体が、鮮烈に浮かび上がってきた。

何時の間にか——真理子の顔が、自分のたった一つの宝物であった明子のものに変わっている。

——明子！

清純な恋人は、残虐な松山老人の拷問に耐え切れず発狂して、今は鉄格子の中である。

——明子！ 明子！

信次は狂ったように、復讐の手段である美佐を責め続けていった。（この章・終）



浣腸体験告白

妖 花 の 泉

上 条 直

乱れる雑草の妖花に陶醉し得る自分は、他人に比べて人生に余分の潤いを享受する仕合わせ者であるとも思う。所詮は、孤独なペシミストの自己満足には過ぎないが……。

二

浣腸と私とのお付き合いも随分、長いものとなった。いつから浣腸に魅了せられるようになったのか自分でも分からない。それは雑草の種が私という土壌の中で、そっと芽を出し、ゆっくりと成長を続けて来たといえる。土壌が、その草の生育に適合していたのだらう。

ある時は、雑草に覆われ荒廃した自己に、いい知れぬ嫌悪と汚辱を感じ、時には、咲き

物心がついてから私の記憶に、はっきりと残っている最初の浣腸は、三、四才位の頃であった。生まれつき体の弱かった私は、母に医者へ連れて行かれるのは、しばしばだったようだが、ある日、診察台に横臥させられ浣

腸を受けた。その時、使われたのは確かにガラス製の浣腸筒で、大きさは定かでないが、電灯の光にキラッと輝いたこと、薬液の注入をくすぐったく感じたこと、私は全くむずかrazuに至っておとなしくしていたこと、これ等の事柄が昨日のことに余りにも鮮明に脳裏に灼きついていて。その時の病状や他の治療など、その頃の別の出来事は何一つ覚えていないのに、この印象だけ残ったことが、不思議に感じられてならない。

当時、国民学校と呼ばれていた小学校に上がってから私は病氣勝ちで、特に腸が弱くまともに作用しないことが多かったため、母や姉の手で、いちじく浣腸を施されたり、坐薬を入れてもらったりすることは多々あったが、日常、わがままを言っては抵抗し、すぐにすねて泣き出す私が、浣腸と坐薬だけでは何故か一度も拒んだ事がなく、なされるままに従っていたものだった。姉も同様に腸が悪く下着を汚したり、浣腸の世話になっている様子で、浣腸薬は姉弟のため、我が家には欠かせない常備薬であった。

発熱もたびたびで、熱にうなされて目を覚ますと天井や壁が、ぐんぐんと遠ざかって行き、無限の彼方に飛び去るように感じ、何と

もいえない恐怖に襲われて目を閉じる。今度は自分の心臓の鼓動が私の周囲に輪を作り、この輪が一搏ちごとに大きくなり、果てしなく脹らみそうで、先程と同じ恐ろしさに打ちのめされる。疲れ果てて、まどろめば、見る夢に必ず現われるのが自分の屍体。土の中に閉じこめられ、ねずみや犬に腹部を喰い破られる私の屍体等々……。

こんな病気の苦しさの中で、浣腸の時だけすべての苦痛の霧が、しばらく消散し、晴れ間を眺めていたように記憶している。

三

このような状態で、幼児期から、ずっと虚弱による下痢と便秘に悩まされ、浣腸の世話になってきた結果、浣腸のあとの生理的爽快に対する期待感に加え、アームスや直腸が特に敏感となり、これらへの刺激が私の全身を異様な興奮に誘い込むこととなってしまうのだらう。私は常に、その感覚を意識の奥底に秘めて遍歴することを、余儀なくされる身となってしまうと思う。

小学校四年生頃のある日、朝起きた時から特に体が、だるかったのが、授業中、急に胸が締めつけられる苦しさに見舞われ、全身の

力が抜けて目の前が暗くなり、闇の中を青白い光が、ちらと飛び交い、そのまま何も分かんなくなってしまう。

ひんやりしたものを覚えて意識を回復した私は、養護室のベッドの上で二人の先生に浣腸をされていた。大分、熱が高かったので、疫痢の虞れがあると思われたからだらう。疫痢で一命を失う子供の、まだ多かった時代であった。ガラス浣腸器で三、四回、注入され便器を差し込まれ、おなかを横、上、横、下と、ゆっくり、さすられながら排泄させられたのだった。二人の先生は、いずれも中年の婦人で、普段は生徒たちから口喧しい、うるさ型と評されていたが、私はここで、二人とも本当は、とても心の優しい人達だったことを知り、認識を新たにしたものだった。

当時、日本は大平洋戦争の敗色濃厚となった時期で、家庭菜園が各地で作られたが、肥料は所謂、下肥に頼らざるを得なかったので寄生虫が大蔓延して、小学校では毎月、一斉に全生徒に駆虫薬を飲ませることになっていた。

駆虫薬投与のあった日の放課後、翌日の理科に必要な植物を採取するため、私達級友は連れだって丘陵地へ出かけて行った。たしか

敗戦の年の五月で、B二九が昼となく夜となき、市の上空を通過するという状態だったが丘陵地帯では、戦争と平和を超越した豊かな自然のたたずまいが、私達を迎えて呉れた。

萌え出た若葉は陽光に映え、野生のつつじが朱、紅、紫と咲き乱れて、新緑の鮮かさに更に輝きを加えているかのようであった。緑の葉の間に白いコゴメウツギ、ナナカマドの可憐な小さい花が顔を覗かせ、柔らかな草の中には黄色のウマノアシガタ、ミツバチグリや紫のフデリンドウが色どりを添え、野鳥の奏でる歌声に呼応している風情であった。私達は喜々として跳ね廻り、初夏の野山に開花する草木を沢山、摘み取った。

そのうち、一行のB子が疲れた様子でしばらく草の上に寝転んでいたのが、急に「ああ……いや……困る……」と叫びを上げた。近くにいたC子と私が駆け寄ったところ、B子は顔面蒼白となり、右手をお尻に当てがい、もじもじするばかり。

すっかり忘れていた午前の駆虫薬のことが甦った。同時にC子も気がついて、横臥しているB子のモンペとズロースを恐る恐る、ずり下げた。当時の女性は殆ど皆、モンペと言う不恰好なスラックスを、国策により着用さ



せられ下着はズロースしかなかったようだ。

駆虫薬に追いつめられた犯人は、小指の半分位もB子のお尻から顔を出し、それ以上、出ることも引込むことも出来なくなった状態でした。

両手と草の葉で、すっかり顔を隠して「助けて……何とか……」と、B子は蚊の鳴くような声で訴え続ける。ためらいながらC子は犯人を紙で摘んで、そっと引っ張ろうとしたが、相手が相手であり、おっかなびっくりのC子は私に助けを求めて来た。C子に替って私が引っ張って見る。回虫のことは学校でも習ってはいたが実物に接するのは初めてだ。

土のミミズと殆ど変わらないみたいで柔らかく、ぬるぬるして、強く握むと潰れるか切れそう。なかなか動きそうにないのを、少しずつ苦勞して引き続ける私の表情は多分、大真面目だった事だろう。緊張の連続が限界に達したのか、B子が大きな溜息をついた途端、犯人はすっくと抜け出し、それに続いて水のような下痢便がどっと流れ出て、草の葉に飛び散った。

すると、先刻から多少おなかの中が、ぐるぐる鳴っていた私は、B子の排泄に誘われたのか、犯人引出し作業の緊張から解放されたせいか、急に強烈な便意に襲われた。何もかも忘れ、ズボンとパンツを下ろすのがやっとであった。腸の作用には神経の面が大きく働くらしい。勿論、駆虫薬が大きな原因には相違ないが。

B子のあと始末に掛かっていたC子も、続いて同じ運命を辿る結果になってしまった。C子の場合は更に、他の二人に対する気兼ねや羞恥が減少していたらしい。三人とも同じく水様であったことを覚えている。

その後、私は駆虫薬を飲まされれば、必ず激しい下痢が数日、続いた。しかし、何故かそれは一向、苦にはならず、むしろ駆虫薬の日を心の底で微かに期待している感さえあった。

四

私が最初の頃、漠然と求めていた浣腸は、後になって、アーンヌスへの刺戟と腸への刺戟

との二つから成り立っていることに気がついた。このことは奇ク二月号に掲載してもらった拙文に書いたが、私の場合は、多数の愛好者のような責めの手段としての浣腸ではなく専らA感覚と腸（ダラム）での感覚—D感覚—で、中でもD感覚が顕著であると自己診断するに至った。

D感覚だけを求めるのならば、浣腸によらずとも下痢だけで、こと足りる訳で、事実、私はその通りである。下痢と便秘を繰り返したような状況が十八、九才まで続いていた私は下痢がひどい時程、排泄の際に身が震え、頭の芯にカツと血が昇る強い興奮を覚え続けていた。これは自身の腸にのみ止まらず、他人の腸内の刺戟も敏感に、こちらに投影して、連鎖反応を起こしてしまう。浣腸に於いて、アクティブ、パッシブ、セフルプレイ、何れにも惹かれる所以であろう。

中学二、三年生の頃、私は比較的、健康になり血色も良くなった。それに伴って、他人より遅れていた年頃の象徴であるニキビもボツボツ出て来た。ところが、顔だけでなく腰や胸にもニキビの大きいようなのが吹き出し化膿してきた。驚いて医者に、みてもらったところ、医者は「化膿菌が、生理的な吹き出

もので繁殖している。それに、おなかも張っている。菌を殺し、おなかの中を掃除すれば直ぐよくなるよ」という意味のことを告げてから、看護婦に私を別室に連れて行かせた。

その部屋は処置室らしく、いろいろな医療機械、ピカピカ光ったメスや、その他の器具を入れた戸棚、流し台等が並び、真中らしい所に厚手のカーテンが引かれて二つに仕切られ、カーテンのこちら側に、黒レザー張りのベッドが置かれていた。その上に仰臥させられた私は、先ず静脈注射を受けたが、「しばらくこのまま待っていてね」と看護婦は出て行った。

注射は、戦争中から戦後にかけて脚光を浴びたスルファミン剤であろう。次は浣腸に違いない。私の胸は期待感に高まって行った。

やがて看護婦が、目盛のついた太いガラス瓶を逆さにしたようなものに黒いゴム管を連結したものを持って、私の足許を通りカーテンの向こう側に消えた。先程から隣に人がいる気配が漂っていた。カーテン越しに聞こえる小声では女の人だ。この医院は外科、婦人科の看板を掲げているので、隣は婦人科の手術室であろう事に、その時、気がつき、一寸した戸惑いと好奇の念に、かられた。お隣で

は、これから婦人科の手術が始まろうとしている。私はジョーッと耳を澄ませた。しかし、医師は一向に入って行く様子がなく、看護婦の話し声からすれば、浣腸がなされているもよう。私の関心は、いやが上にも高まらざるを得なかった。

「五分程、我慢して下さいね」の言葉を最後にそこを出た看護婦は、流し台で手を洗い、先程の器具の半分位の小さいものを持って私の横に立ち、仕事を始めた。これがイルリガートルという名称であることは、後で看護婦に聞いて知ったのであるが、今までに使われた、いちじく型やガラス注射筒型より、はるかに大量で刺戟の強いことに驚いたものである。

注入が終わり、脱脂綿を看護婦の手で押えられながら、煮えたぎって今にも腸が口とお臍から飛出しそうな激痛に、額に汗し、身悶えざるを得なかった。しかし苦痛の蔭にひそむ、何とも形容の出来ない不思議な感覚の虜になっていた。これは正に、快感そのものであったことは事実であるが、隣の部屋の気配が余計に私の感情を押し拡げるようだった。

五分間が過ぎ、看護婦は私のお尻の下に便器を当てがってくれただけで、隣の患者の世

話に出て行ってしまった。私は、更に一層の感覚の高まりに身を委せながら、体の中のすべてを流し出してしまい、抜け殻となって、ぐったりと身動きも出来ず、汚れたままで横たわっていた。

五

このことを、私は友人のNに話した。興味深げに聞いていた彼は、意外にも

「イルリガートルなら、ぼくの家にあるよ」「ええ?」

「姉が病氣した時、買った筈だよ。僕も二、三回やられたことがある。最近はお下痢続きで用はないけど」

といい、更に続けて「使い方は知っているから家へ来たら、やって上げるさ」

Nと知り合ったのは中学一年の春だった。中学に入学した時、私は絵画クラブに入会した。クラスの異なるNも、その際の絵画クラブ新入生だった。一学期に油絵の手ほどきを受けた新入部員は、夏休みに一二号程度の作品を一、二枚、仕上げてはどうかとの指導を受けた。私は油絵に大層、熱を入れはじめていた頃で、何としても休み中に二、三枚は物



にする決心だった。当時は戦後の荒廃時代で絵の材料の入手もなかなか思うようにはならず、どちらから言い出すともなく、Nと私は二人で休み第一日に材料を買漁りに行く約束をした。

それは、とても暑い、カンカン照りの日だった。二人連れ立って大阪市内の絵画材料店を、あちこち歩き廻ったが、成果は乏しいものに終わりそうであった。暑さで体が弱り、その上に喉が渴いて飲物を、やたらとガブガブやったため、私の腸は大分、怪しくなってきた。デパートの前を通り過ぎようとした時、私が

「トイレに行きたいから、このデパートに付き合って呉れよ」

「ぼくも、さっきから我慢していた」

Nも、おなかを押えながら答える。

二人で直進した一階のトイレは、四つ並んでいるボックスの三つに故障の札が掛かり、残る一つは使用中であったのだ。先にも書いたように、戦後のこの時期は何処も荒れ放題のままになっていることが多かったのだ。

やむなく二人で二階に上がったところ、二階も使える一つが使用中、三階はトイレ全部が閉鎖、四階で一つ発見してドアを開いた。

そこは洋式だったが、汚され方がひどく、白い便器が、丁度ケーキにチョコレートを流したようにやられて、到底、使えたものではない。だが、欲望というものは拒否されれば更に募るものである。せっぱつまった二人は、脂汗を流しながら五階に駆け上がり、やっと一つキャッチ出来、一つのボックスに二人一緒に飛び込んでしまった。けれど時、既に遅く、私はパンツに、しみを作ってしまった。ズボンを下ろしたNは私より一層ひどくしみというよりパンツの後側一面に拡がる程グショグショに汚していたのだった。

腸の中が激しく渦巻き、液状の便を、ときれとぎれに排出した時、私はうっとりと痺れるような感動に浸っていた。これまでも下痢の際、何かを臍氣に感じるようになってはいたが、この時にこそ、強烈に、しかも明確に意識したのであった。

代わる代わるトイレを利用したあと、私は

Nの後の始末に取り掛かろうとした。Nは最初、恥かしそうに躊躇したが、今となっては私の手を借りるより仕方なく、おとなしく私に委せる羽目となった。

Nは色白で、私と同じく瘦身の小柄な弱々しい感じの少年だったが、お尻は顔の蒼白さより更に一段と真白で、滑らかな皮膚に包まれて、とても小さく、なだらかな低い丘が可愛く二つ並んでいた。押せばマシマロのような軟らかさを想わせた。

後に谷崎潤一郎の『鍵』を読んだとき、ドキリと胸を突かれ、この時の光景が眼前に、ちらついた。

ちり紙で汚れを丹念に拭い去ってから、私は二重に穿いていたパンツの外側のを脱いでNに穿かせることにした。Nも二枚だったが勿論、外側にも通ってしまっており、捨てることにして隅のゴミ箱の蓋を上げたところ、中には潰された空のいちじく浣腸が一個、ポツンと捨てられていた。

こんなことがあって、私とNとの間は特別な親密さで結ばれることとなった。

六

Nとは常に行き来してはいても、浣腸は家

族の留守の時でなければならぬ。この機会には意外に早くやって来た。Nの両親が揃って田舎へ出掛けることとなり、姉さんは丁度、旅行中だったので、Nのお母さんから私の母へ、直さんに一晩、泊まりに来て欲しい旨の電話がかかったのだ。

その夜、私達は宿題を済ませ、寝巻に着替えて待望のプレイに取り掛かった。化粧石鹼一個の四分の一くらいをナイフで薄く削り、二五〇cc位の熱湯に浸して溶かし、五〇〇ccのイルリガートルに入れて、水を一杯になるまで注ぎ加えたところ、適当な温度の石鹼水となった。Nは、これを勉強机の鞆掛けに吊るし、蒲団の上に油紙を拡げて私を横臥させた。当時はビニールは、まだ普及していなく水を防ぐには油紙を用いていた。

「便器にしようか？ おしめの方が、よいだろう」

私は驚いた。

「おしめなんて、いやだよ」

押入の中には、差し込み便器二個と数枚のおしめ、それにおしめカバーまで、ちゃんと用意されていた。

結局、おしめは使って洗うと、翌日、両親が帰るまでに乾くかどうか分からないという

事情で、着用を免れることになった。

生温い石鹼液が私の直腸を快く刺戟し、それが腹部一面へと展がり、遂に全身を溶かすかのような一時期を過ぎると、突然に激しい便意に襲われ、頭の中で血が波立ち、石鹼液の暖かさも手伝って頬が赤く燃えるのを覚えた。イルリガートルは、すでに空となり、嘴管が抜き去られ、便器が当てがわれ、Nの右手は脱脂綿で、しっかりと押えている。

「今で二分だ。長い程、効果的だよ。五分では離さないぜ」

暫く喘ぎ悶えているうちに、便意がスーッと退いて行く。しかし腸がおとなしくしていたのは僅か四、五秒で、再び前より強烈に暴れ出した時は、もはや私の抑制力では手に負えそうにない。懇願する私にNは、

「よく頑張った。八分間」

と告げて手を離してくれた。

五〇〇cc入っていたのだから一個の便器では足りず二個目も殆ど満たしたようだった。

Nは甲斐々々しく世話をして呉れ、温いおしぼりで私の体を拭い清め、寝巻の乱れを直すのを、私は重病人のように身動きもせず、されるままに委せていた。排泄物をトイレに捨てて行って帰って来たNは、ドサツと私に並

んで、ふとんの上に横たわった。

「ごめんよ。疲れただろう」

それには答えず、

「ぼくも汚してしまった」

「え……」

私は驚いて起き上がり、介抱する方、される方が、ここで逆転した。

タオルをお湯で湿し、Nの足許に回ってパンツを脱がせた。パンツの後部には五、六糎の黄色のしみ、前部も親指の先くらいが汚れていた。

両手で顔を覆ったままNは、つぶやいた。

「僕も石鹼水が欲しいな」

「君、下痢じゃないの？」

「おなかの中、綺麗にしたい」

先程Nに教わった通りに石鹼液を作り、Nに注入を始めた。

Nの白く滑かな下半身は身動きもせず、蠅人形の如く電灯の光に浮き上がって見えた。

そのうち、蒼白い顔が、だんだんと桜色に染まり出し、腹部は大きく波打ち、肩は小刻みに震え、歯を喰いしばり堅く目を閉じ……。

私にはNの体内で起こっている嵐の模様が一部始終、自分自身のこととして理解するところが出来たのだった。

＜九カ月の妊婦の告白＞

私の蛙腹を

責めてみて

福井桃子



全国の奇く愛読者の皆さん、今日は。

毎月、私の告白を誌上に載せてもらって、皆さんからの読者通信などの反響を読んでいると、なんだか、他人のように思えなくなつて、つい呼びかけてみたくなるんですの。

テープレコーダーの前で、お喋りするのなんて、最初のうちは慣れなくて、まごついたんですけれど、もうこの頃では平気になってきましたものね。それともう一つ感心してるんですけれど、私が口から出まかせに喋っているのに、雑誌に載った私の文章を読んでもみるとあんまり、よくまとまってるんで、びっくりしてるんです。

私のお腹、ごらんになって？

私が嘘を言ってるんじゃないって、よくおわかりになったでしょ。これはホンモノよ。

昭和四十七年二月一日。いよいよ今日から郵便料金も値上げ、医療費も値上げ。私にとつては、妊娠九カ月の幕明け、といっても、出産まであと一カ月とちょっと。うまくマタニティドレスでかくしてるんだけど、裸になったら、ホラ、こんなに蛙腹なのよ。

お臍、さわらないで。くすぐったいもの。お医者さまはネ、もうこれ以上は、お腹は大きくならないって言ってるんだけど、私は、

もっとパンパンコに大きくなってほしいの。こんな大きなお腹をさらしていると、なんだか、人間のメスっていう感じじゃない？

私、時々、裸になって三面鏡にうつしてみよ。そしたら、なんだか、むしろ、この身体を責めてほしいっていう気持ちが強くなるの。私って、変わってるでしょ。

ええ、私、今、一人暮しでしょ。だから、今月の下旬には入院しようと思ってるの。当分、暮せるお金もあるし、悠々自適ってとこね。でも、こんなに、なんでもかんでも値上がりするようだったら、私のように貯金で暮してる者はなんだか、いらいらしてくるわ。それはそうと、あんたから取材に行くってお電話もらったでしょ。そしたら、ゆうべ、寢床の中で私、考えてしまったの。

私ね、こんな大きなお腹のまま素裸になって後手に縛られてね、そして縄尻をあんたに持たれて、野外を引き回しにあうのよ。

例えば、私の故郷の志摩あたりの海岸に縛られたままどころがされて写真にとられるっていうのなんかどう？ 私、海だったら馴れてるから、波打際に縛られたままころがされてって怖くないわよ。そりゃ、伊勢の荒海で小さいときから鍛えてるもん、泳いだり潜った



りは平気だわ。

寒いですか、志摩じゃ寒中でも海中に潜るけど、妊娠九カ月じゃどうですかね。そりゃ、ハワイやグアムの海岸でだったら、ご機嫌ですけど、こんな大きなお腹の女がワイキキの浜辺で緊縛モデルになったっていったら大変でしょうね。私はね、なんとなく、そ

んなことを、ゆうべ、考えてみたのよ。変でしょ、私って。一寸、露出症かしら。

本当は素裸が希望なんだけど、ワイセツ物陣列罪になったらいけないから、超ビキニで前だけかくすっていうのはどう？ もっともこの大きなオッパイ、包みきれんかしらね。ハワイは遠いからグアムですわね。海辺で

縛られポーズを写されるだけじゃなしに、素裸で泳いで沖へ出るのよ。そして、フカに噛まれて母子もろとも食べられてしまうつていうのは、どう？ 泳ぐ方は自信があるし、今のところ、身体の調子って、凄くいいの。

だから、素裸で波乗りも出来るじゃない。私のように泳ぎの達者な方だったら波乗りも簡単だと思うけどな。こんなことを考える私って変わってるでしょ。でも、これ、私、正直だから喋ってるのよ。二十代の女性だったら、夜の寝床でいろいろのことを空想するもんですよ。私を別格扱いにしないで——。

グアムって言えば、あの横井さんとかいう日本の兵隊さん、二十八年もよく穴の中でがんばってたわね。私なんか、横井さんの気持ちってわからないわ。それにしても長いじゃない。私がまだ生まれない前から、穴倉生活をしていただなんて想像もつかないわ。

人のために何故そんなにまでして自分を苦しめなけりゃいけないの？ 私にはどうしてもわからないわ。ええ、いくら説明されたって、そこんところはわからないの。

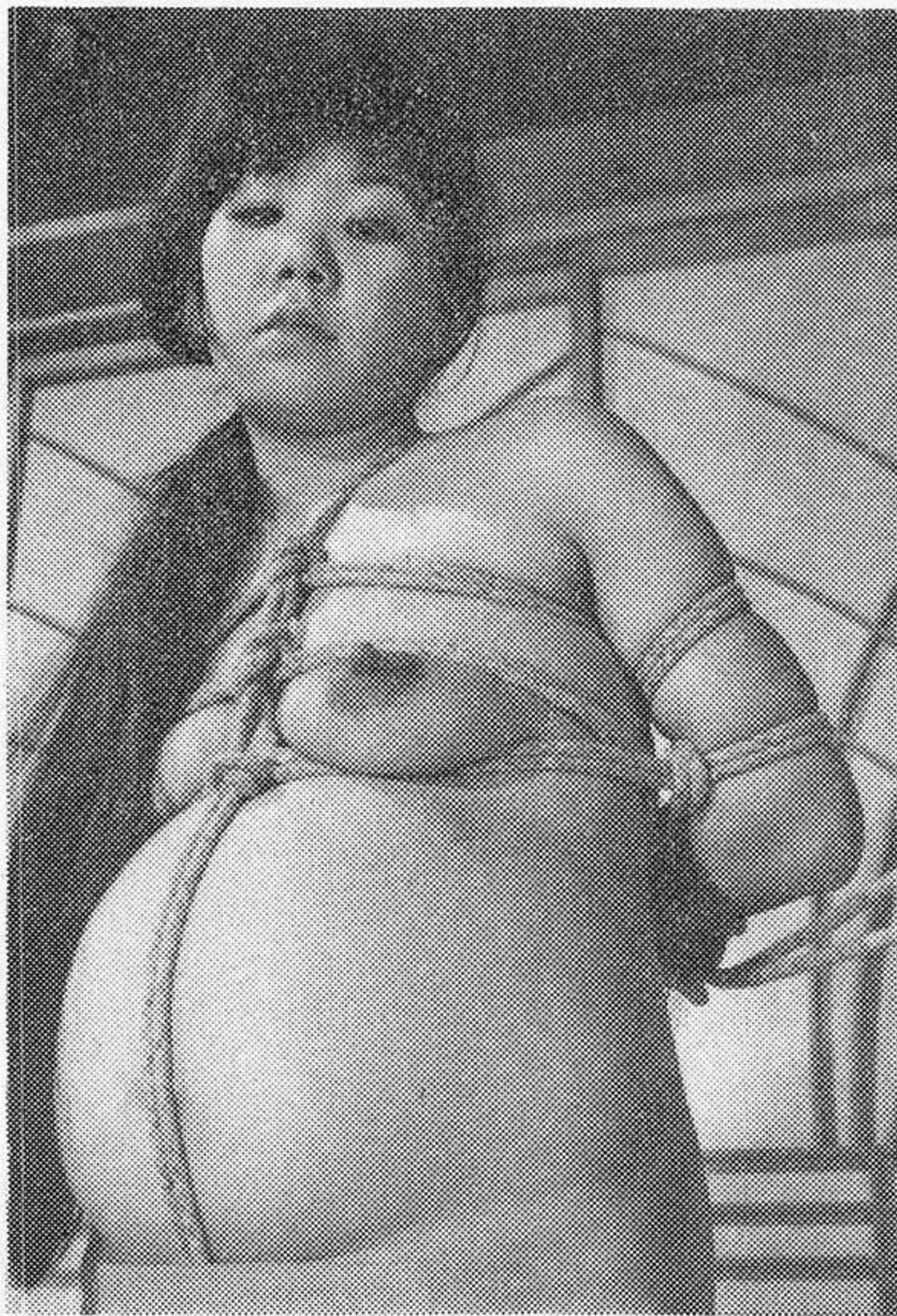
それじゃ、ぼつぼつ始めて頂きましょうかしら。ごらんになって、こんなにお乳張って乳汁が出るのよ。あら、吸っちゃうの。いや

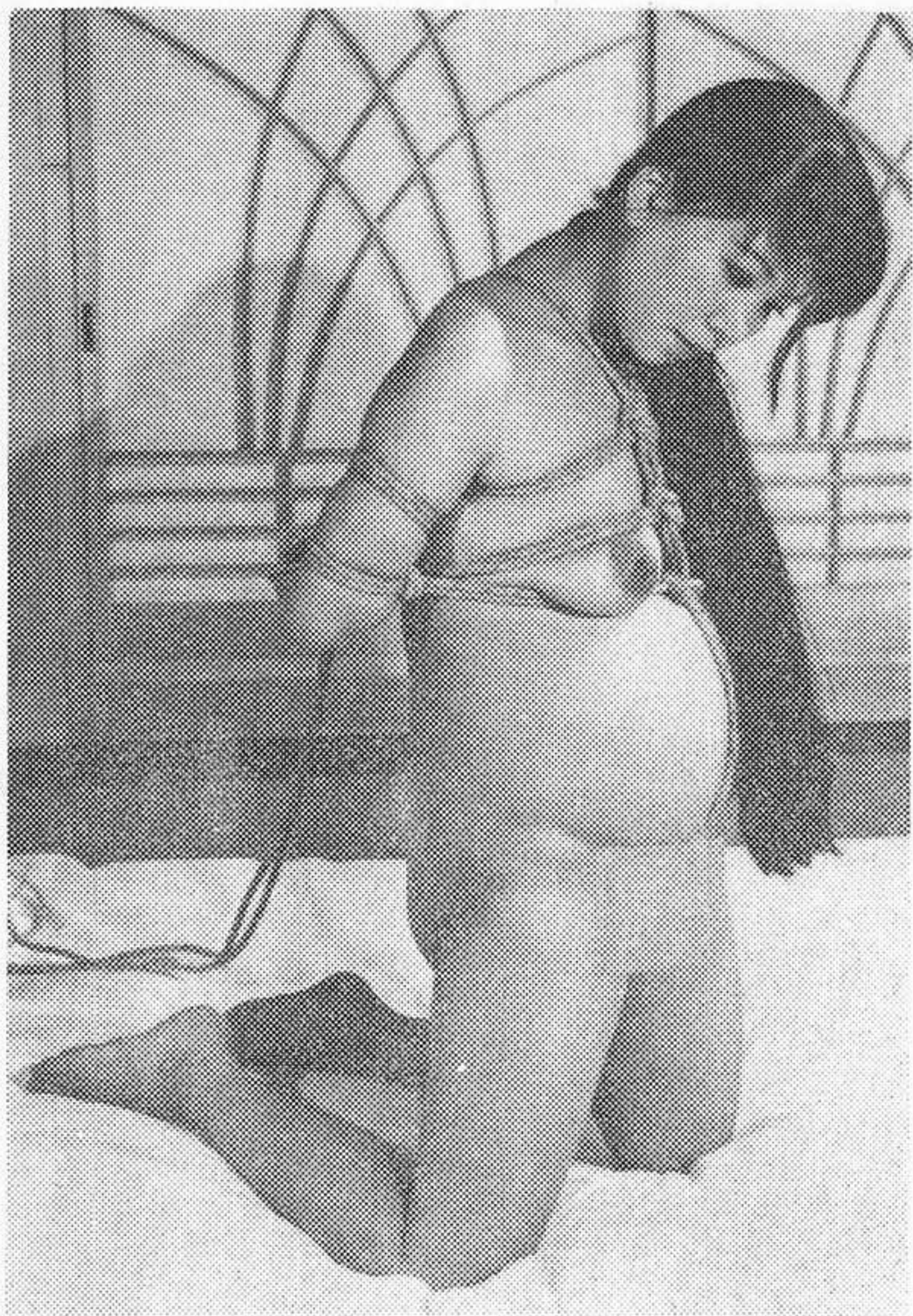
よ、くすぐったいわ。お止めになって、変な気持ちになるじゃないの。

よしよし、大きな赤ちゃん、オッパイが飲みたいの。ホレ、飲んでごらん。そんなに乳首を噛んだら駄目じゃないの。この蛙腹をさすってもいいのよ。なんだか、本当に赤ちゃんを抱いてるような気持ちよ。まあ、エッチ。

そんなとこへ手を伸ばすなんて。我儚な坊やだこと、ホラ、オッパイからお臍まで舐めさせてあげるわ。それから下はイケマセン。

胸から腰のとこ、それに後手はいくらきつく縛っても構わないのよ。あら、縄におチチがしみ込んでゆくわ。お腹は締めないで、苦しいから。そりゃ、私から希望して責めてほ





しいって言ってるんだから、お腹の赤ちゃんに差し障りさえなければ、どんなにきびしく縛ったっていいの。私は構わないわ。

前かがみのポーズって、お腹を圧迫するから一番苦しいのよ。それに、胸のこの縄のコブ、これがこんなに肌をへこまして、ああ痛い、痛い。でも、痛いのは辛抱するわ。お

腹を圧えると、とても苦しいのよ。こんなだとは思わなかったわ。海老責め？ そんなの出来っこないでしょ。こんな大きなお腹をかかえてて――。

そうよ、うつ伏せにもなれないわ。お腹を圧迫するもの。いやーね、乱暴なことして。足を挙げてですか。そりゃ、妊娠して

ない時は頭の上までも挙がりましたわよ。九カ月の妊娠腹じゃ、お腹がつっぱって、挙げようたつって、これぐらいしか挙がりませんわよ。もちろん、私にも挙げようて気持はありますわ。でも、挙がらないの。だったら、羞恥責めにするから、脚を上げろってですか？ どう、これで？

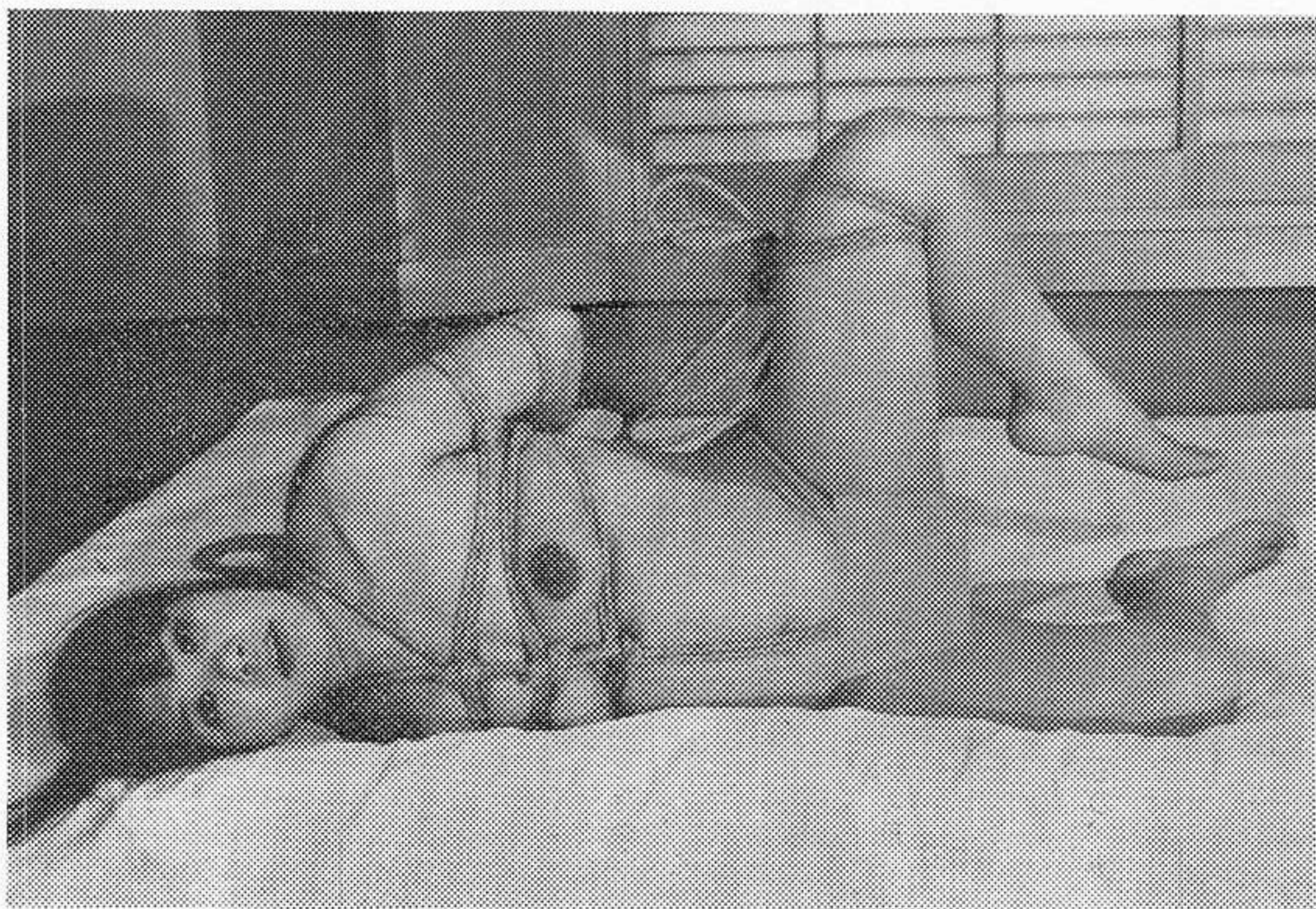
私の身体が堅くなったんじゃないのよ。こんな大きなお腹をかかえてるから、皮膚もつっぱるし、それに、こう、お尻から横腹にかけてもボテが入ってるでしょ。身動きできないのよ。だから、九カ月の妊婦を縛るってだけで、もう大変な責めなの。わかって？

ええ、全面的協力よ。ご安心になって。

私の辛抱できることだったら、極限まで耐えてみせるわ。だから、じゃんじゃん責めて下さっていいのよ。でも、無茶して赤ちゃんを産むようなことをしては、いやよ。やはり赤ちゃんは病院で産みたいもん。

今日はカラーのフィルム持ってきた？ それだったら、この、胸のここ、静脈ういてるでしょ。これ撮れないかしら。

肌がきれいになったって？ 外出しないからかしら。いや、それよりも夜更ししないからだと思わ。夜は早く寝て朝は晚いんだか



ら、結構なご身分だと思わない？ 今朝？ 今朝は九時に起きたわ。いつもは、もう少し早いんだけど。

そうね、テレビ見てるときも多いけど、やはり運動しなけりゃいけないって言われているんで、よく歩き廻るのよ。

マーケットなんか日に二度も三度も出かけるの。ええ、赤チャンの買い物なんかかね。

もし私に出産祝いを下さるんだったら、ベビーカーなんかどう？ 早いってですか、早くはありせんわよ。封筒にお金を入れてベビーカーと表に書いて下さったらいいの。私、こんなのがいいなあってちゃんと見てあるのよ。

それはそうと、私ネ、浣腸してほしいと思ってるのよ。普通の身体のとくと違って、妊娠九カ月になって浣腸されたら凄く気持ちがよいだろうって、思ってるの。

こう、なんだか、身体中が、特にお腹を中にゴムマリのように弾んでるって感じてしょ。だから、水抜きのように導尿や浣腸をしてほしいって気持ちよ。ええ、勿論、写真にとって下さって結構よ。注入から排泄まで、細大洩らさずに——。そのときの私の顔の表情もとっておいてほしいワ。

そりゃネ、出来れば逆さ吊りでも、エビ責めでも、猪吊りでも、私しゃしてほしい気持ちでいっぱいなんだけど、こんな大きなお腹とお尻じゃ無理でしょう？ この頃ね、お腹ばかりか、お尻がこんなに大きくなって、肉がついてしまったでしょう。

こんな遅いお尻で、M男の顔を押し潰したら面白いでしょうけど、妊娠した女がマゾを責めるなんて、一寸、変でしょ。珍しいことは珍しいでしょうけど、どんなんでしょうかしらね。私はね、私の変化で、むしろにSMづいてるんですの。こう、なんだか、M男を無茶苦茶に責めてみたいと思ったり、そうかと思ったら、凄い羞恥責めを受けてみたいと思ったり、感情の起伏が激しいんですのね。自分でもそれに気がついてるの。

普通の身体のとくと違って、縛られた姿を鏡に映してみると、なんだか動物的な感じ、

なんとなく人間の牝っていうような感じを受けるんだけど、どうかしら？

だからネ、こんな人間の牝を思いきり、いじめて、責めて、辱かしてほしいうって思う気持、するんだけど、不自然かしら？

鏡に映っている大きなお腹の女を眺めていると、いじめてやりたいって気持が起ころんだけど、その大きなお腹の女が自分なんだと思うと悲しくなって、逆に何人もの男のおもちゃにされたい——辱かしめられている自分の姿を思うと、思わずジーンとして、身体中がしびれるみたい。

こんな気持は、なんていうんでしょうね。一面、みじめでやりきれないの。普通の身体のときのように、全面的にSMに溺れきって快感にひたりきれないのよ。なんだか、こうなんていうんかしら、スカッとしないのね。生半可っていうんかしら。こんな気持って不幸だわね。私って、今までだったら、割り切ってたのね。流されてもいいから溺れきってしまえって性格だったわ。

荒海で泳ぐときはプールなんかと違って、うねりや波にさらっては駄目なの。身体全体をうねりに任せていながら、それをうまく利用して目的へ向かって泳いでゆく。そし

たら疲れなくて、早く自分の行きたい所へ行けるのよ。SMもそうじゃなくって？へんに力^{りき}まない方がいいと思っ
てんの。それが、この頃の私
って、少し変なのよ。やはり
妊娠してるせいかしらね。

さあ、もっときつく縛って
下さってかまいませんのよ。
妊娠したからって、急に縛ら
れたのと違って、普通の身体
のときから縄で鍛えてるんで
すから、ご遠慮なく。

あら、もう休憩ですの。私
の身体をいたわって下さって
恐縮ですわ。

この前、お願いしておいた
他の方の妊娠したフォト、持
ってきて下さった？ 見せて
下さいナ。私、こんな写真、
見るの、凄く興味があります
のよ。是非お願いしますわ。
まあまあ、わざわざ持っ
てきて下さったっていうの。こ
れはすみませんね。早く見せ



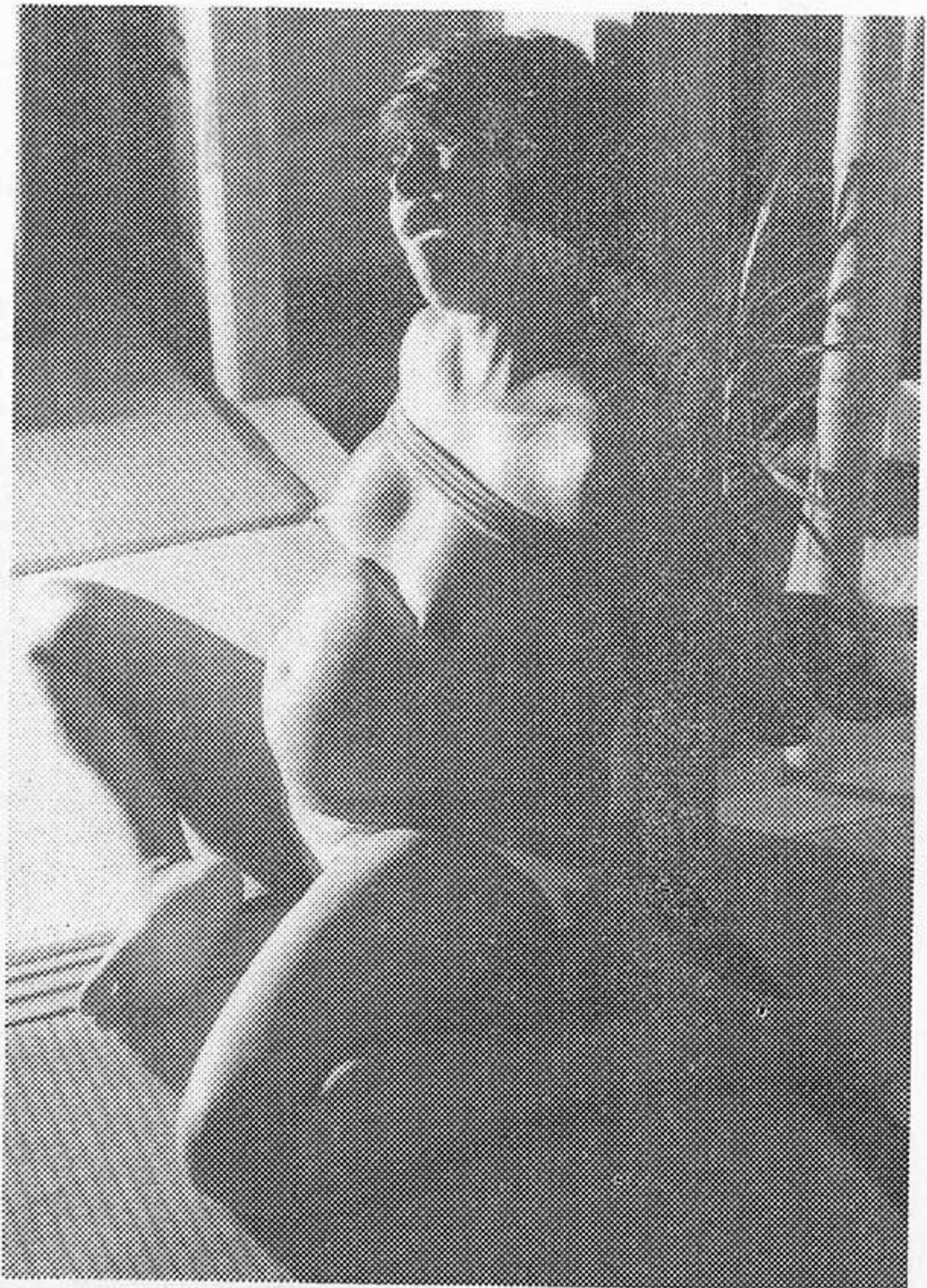
て下さいナ。この方が木戸悦子っておっしゃる方？ 立派な体格の方なのね。ええ、妊娠八カ月になって初めて縛ったっていうの？ へえ、そうなの。初産で、こんなに。やっぱり体格がいいから、お腹も大きいのね。

妊娠線がよく出ていますわね。お臍のあたりに、こう、なんだか産毛が生えてるみたいじゃない？ 写真がこれだけはっきりしてるのと怖いみたい。毛穴の一つ一つが写ってるようですよ。やはり人間って、妊娠するとお腹が大きくなるばかりではなくて、肌なんかも生地のまま出てくるっていうの。そうじゃないかって、誇張されるのかしら。

ねえ、私のこの胸のあたりの静脈、すけて見えるでしょ。おっぱいのあたりの肌、白くすきとおるようになってるでしょ。普通の身体のときは、とてもこんなじゃなかったわ。

次は中河恵子さんという方？

この方は割ときゃしゃな方ね。割かし美人じゃない？ あら、この方も私と一緒に、妊娠していないときから縛りのモデルをしておられたっていうの。だったら、妊娠してるときと妊娠してないときと比較して写真を眺めたら興味があるわね。私、この中河恵子さんって方の妊娠してなかったときの写真も見た



木戸悦子の八カ月腹フォト

かったわ。持ってきて下さったら、よかったのに。私って、同性の方のこんな縛られたフォト見るの、大好き。

男性の人の？ そんなの興味ないわ。見る気もしないのよ。なぜだって？ 大体、男性の写真は美というものが無いじゃないの。この中河恵子さんなんか凄く美しいわ。私、こ

の方、好きになってしまった。

あら、中河恵子さんて、奇クの読者の方と結婚されたの。だったら、奇クが取り持つ縁ってわけね。そう、是非、前の号も読んでみたいわ。そんなに何回も告白を書いておられるんだったら、是非ね。

そうなの、結婚されたあとも、あんた緊縛

の写真とったっていうの。だったら、奇クに発表しなさいよ。そのまましまっておくって勿体ないわよ。第一、奇クの読者の方も、きっと誌上で見たいと思うわ。

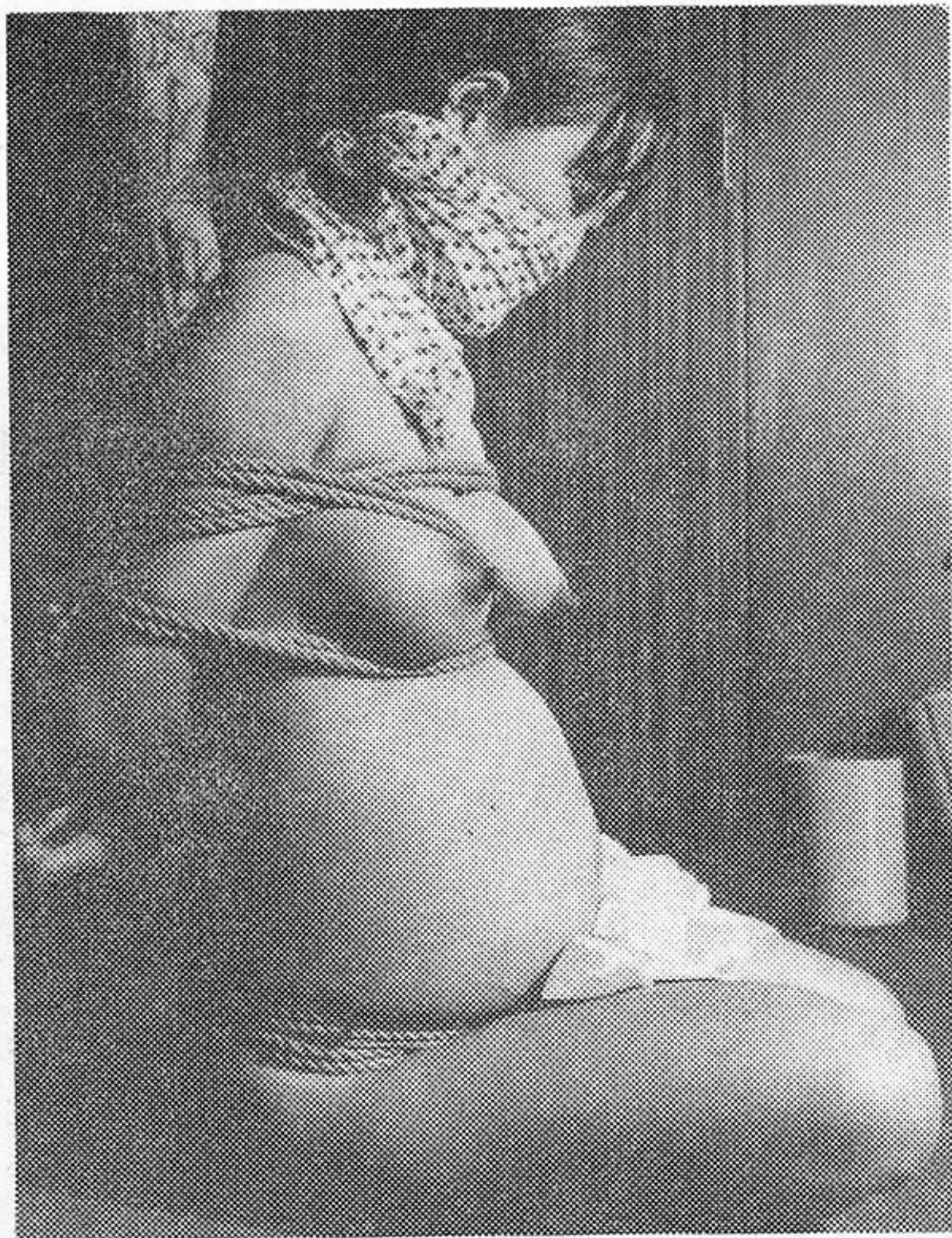
中河恵子さんて、一見してきゃしゃで、ひ弱な感じがするんだけど、女らしくって、シンの強い女ひとでしょうね。縛りには強いんですって？

マゾ女性の代表選手みたいな方ね。結婚される前だったら、私も一緒になって責められてみたかったわ。

あらあら、そう。それだったら、今ではこの方のほうが私よりか大分、年上ってわけね。この写真、見ると、二十三ぐらいに見えるけど、たしかに大分前の話だわね。

この方が、富田由美子さん？

この方も若いわね。初産で稚妻って感じね。お腹もそう大きくないようね。そう、これで八カ月ですの。



妊娠腹を晒す中河恵子

富田さんも、妊娠して、それで初めて責められてわけなの。やはり、妊婦マニアの方がいらっしゃるものね。へえそうなの。ご主人の中には、自分の愛妻がご自慢で、美しい妊婦姿を写真にしておきたいって方もあるんですのね。妊娠した女を見ると、なんとなく、い

じめてみたいって気持ちが起こるといのは、わかるような気がするわ。

私なんか、自分が妊娠すると、むしろに責められたいって気持ちがするもの。そうなんですよ。縛ったりいじめたりすることも好きなんですけど、何か変わったことをしてほし

いって気持ちが強いんですよ。私って、変わってるでしょ。まあ、普通の身体の時から比べたら肉体的にも異常なんですから、私のような女だったら、異常な気持ちになるのもあたりまえでしょう。

でも、女の人って、どんどん年をとって変化してゆくんですから、こんな富田由美子さんのような若い身体のときに写真にしておいたらいいですわね。一生の思い出になりますものね。私も、今から考えたら、十七、八から二十ぐらいの娘時代に、ヌードと縛りを撮っておいてほしかったわ。

女って、一度でも妊娠したら、ころっと身体つきが変わるものね。そりゃ妊娠しなくなつて二十五才を過ぎると変わるかもネ。

それに、私のように、赤ちゃんにお乳を飲ませたら、一ぺんにバストがガタガタきてしまふわよ。ええ、そんな見方もあるかもしれないせんわね。それがまた中年の魅力ってですか。奇ク的に見たら、そうかもしれないわね。私、せいぜい私なりに魅力を發揮したいとは思ってるんですけど、二十才前のヌード写真は残しておきたかったわ。

この方が双児の増田みゆきさんって方が？ 体格は一番小柄なようだけど、双胎だけあって、やっぱりお腹は大きいわね。

この写真が臨月のときですか？ 凄いわ、本当に蛙腹って感じね。お臍が、すっかり平べったくなって、そっくりね。

いやーあ、このカラーの写真は凄いわね。青筋が一本一本見えてるみたい。ちよっと手で触っても、はちきれそう。よくこんな写真撮ったわね。それに縛りも大変きついみたい。な感じ。この方も読者の方の奥さん？ でも双胎って、全く珍しいわね。

縛りでも妊婦でも、やはり小柄な方が強調されてモデルとしてはいいようね。私のよう



誇示するような富田由美子のボリューム

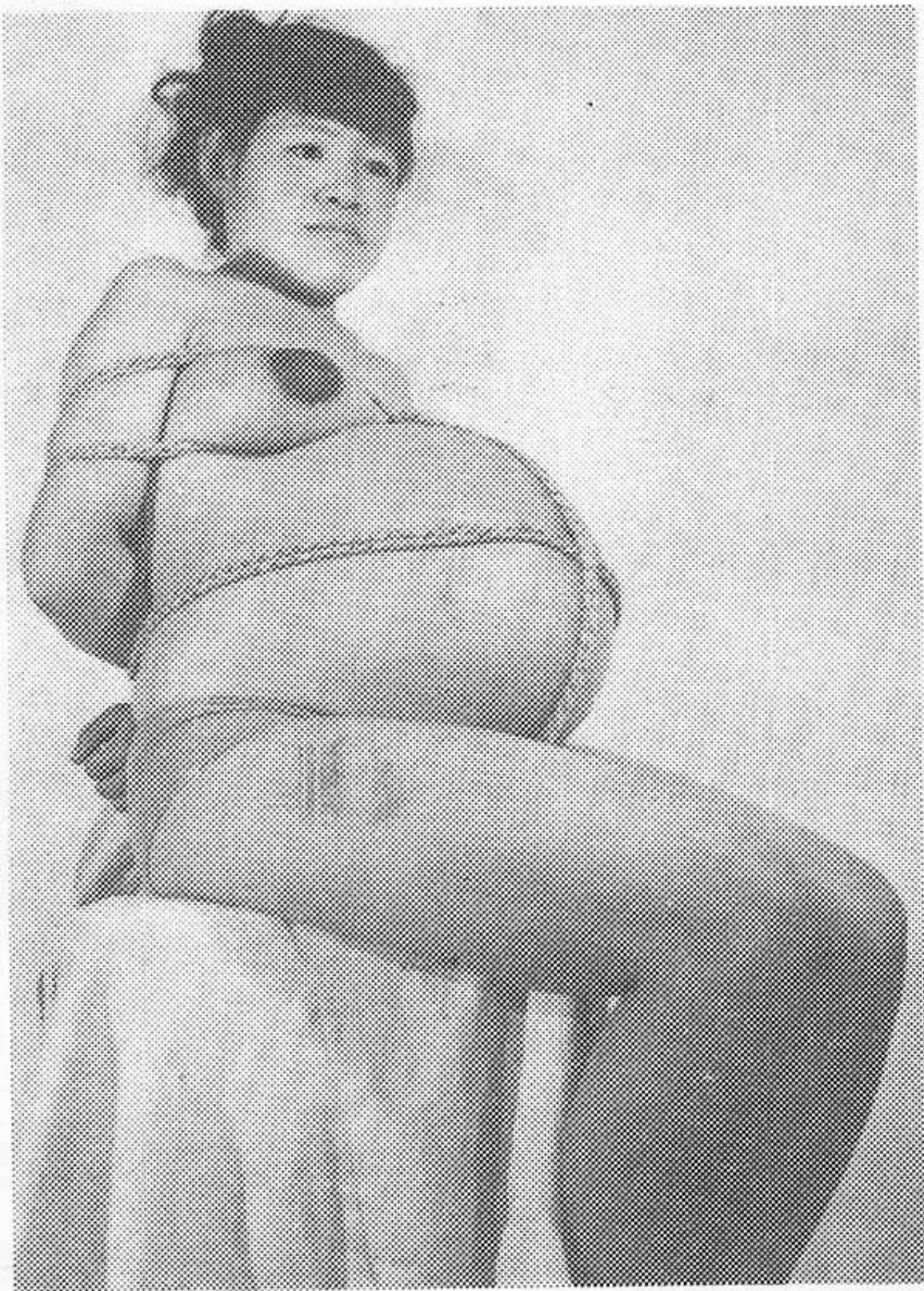
な大柄じゃ、その割にお腹の大きさも目立たないのと違う。自分では、この大きなお腹をどうしてかくそうかと苦心してるんだけど、いざ、裸になって、カメラの前に立ったときは大きい程、立派なもんね。

私って、至って健康だから、こんなおんきなこと言われてられるけど、人によってはツワリのひどい人は半病人か半死半生になるって

いう話よ。私なんか、モリモリなんでも食べるし、よく眠れるしツワリなんて、どんなことか知らないわ。だから、もっと強く縛って——なんてことも言えるのね。

あー大分、休ませてもらったから、煙草を一服のませていただいてから、縛ってもらいましょうか。ええ、私の方はどんな縛り方でも、どんなポーズでもいいですよ。ただお腹

見事な双胎腹で驚嘆を集めた増田みゆき



の赤ちゃんがびっくりしないようにして下さったからね。そうなんですよ、もう一カ月もしたらオギャアって言って、この世の中に出てくるんですから、そこんところは、お手やわらかにお願いします。

後手首も以前の様には上がらないでしょ。

ええ、私は痛いのは辛抱するんですけど、こ

う、なんて言いますか、お腹の皮がつっぱってしまって手が上がらないんですよ。やっぱり、お腹が大きくなっただけ、皮膚が張りきってるんでしょうね。腕ばかりじゃなくなって脚の方も上がらないのは同じですよ。それにこのお尻の大きいこと。大体、私のお尻は娘の時から、大きいことは大きかったんです

けど、妊娠したら凄いでしょ。石臼みたいに なってしまっ

だから、どうしても動作がぶくなくなってしまっ

て、お狭やかな私の感じて全然なくな

ってしまっただ

でしょ。もう、あ

んたの言いな

り縛りなりにな

ってしまいます

から、どうと

でも、お好きな

ようになさ

って下さい。

どちらかとい

えば羞恥責め

の方が好きだ

けど、痛い縛

りの責めも辛

抱しまし

てよ。

脚を頭の上

まで挙げる

ってのは、

普通の身

体のときは

平気で出来

ましたけど

、九カ月の

妊婦になり

ましたら無

理ですわね

。一カ月後

に出産を控

えた妊婦と

いうだけで

大変な責め

になると思

いますのよ

。大きなお

腹をかかえ

て、寝てい

る筈の妊婦

が、このよう

に麻縄で

ぎりぎり

と縛られる

んですもの

ね。女として

はこれ以上の

責めはない

と思うわ。

そう思わ

ない？

お膳の上

にあがるの

。なんだか

見世物みた

いね。そり

ゃいいわ。

いくら、

お腹をな

ぜて下さ

っても触

って下さ

っても、

私はかま

やしません

わね。仰向

けに寝ろ

ったって

、後手首

が邪魔

になっ

て駄目

ですわ。

これも責

から、無理に倒して下さっていいのよ。どうせ私しゃ、責められる女ですから、どうぞ、お好きなようになさって下さい。マゾ女性ですから、喜びこそすれ、文句なんて、これっぽっちも申しませんから。

私の身体が責められることを、どのように悦んでいるか、よくご存知でしょう。羞かしけれど、私の口より身体の方が先にそれを現わしてますものね。かくしようがありませんわ。大分、暑くなってまいりましたわね。ライトがつけっ放しで、私の身体に集中されますと、そこだけが乾燥したようになって、それでいて、腋の下なんか、こんなに汗なんですのよ。冬の最中だというのにね。

あら、テープが終わってしまいましたの？カメラとテープと両方では大変ですわね。でも、私が赤ちゃんを産んでしまうと、もう当分はカメラともテープともお別れだと思うちょっと淋しいですわね。

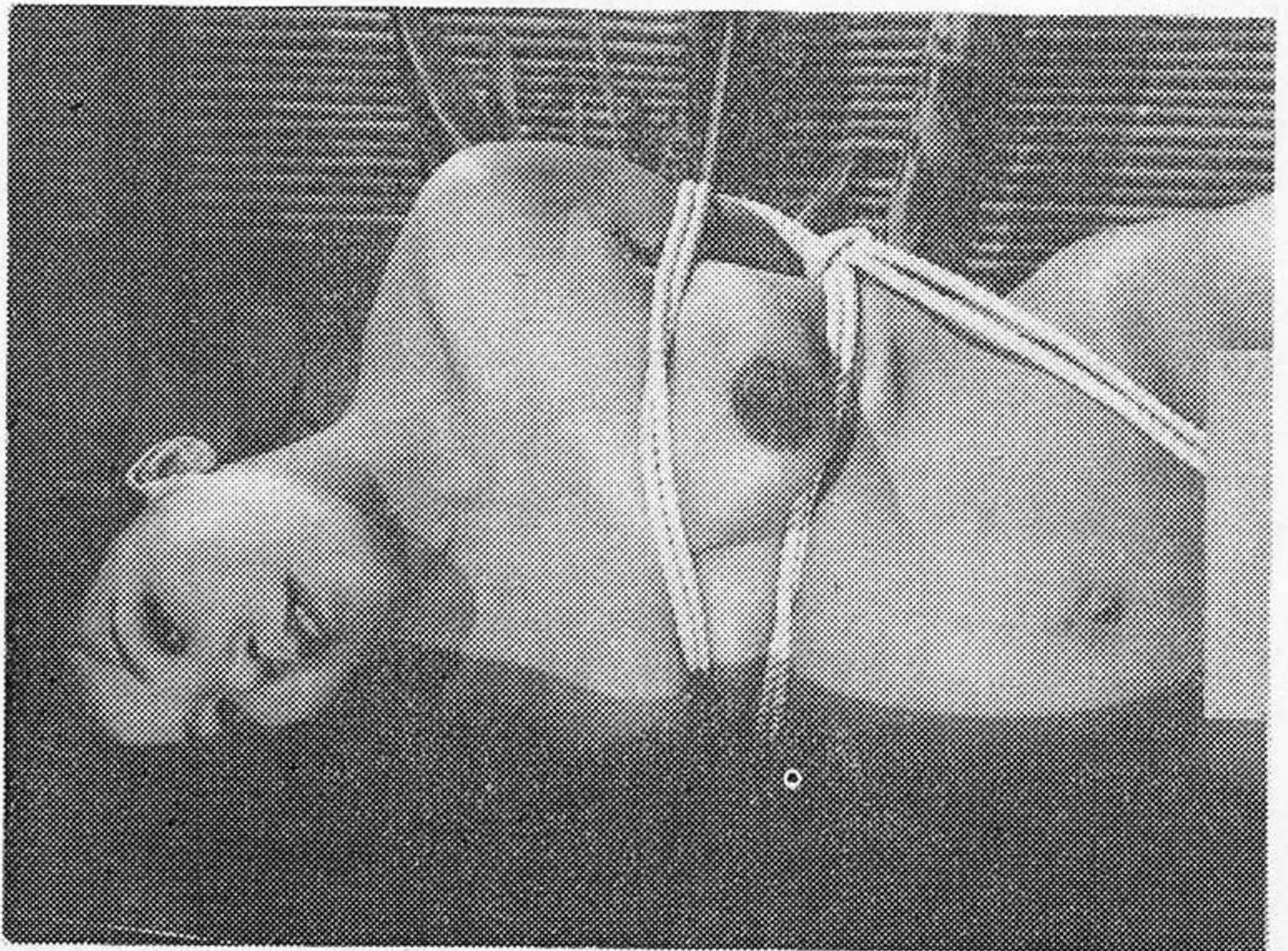
ええ、そりゃ、勿論、臨月まで取材してもらいますけど、このあと、お会い出来るのも一、二回じゃございませんこと？

それまでに、私もせいぜい話題を仕込んでおきますけど、私の妊娠した身体のすみずみまで、しっかりと写しておいて下さいね。

それから、出産までまだ少し日がありますので、妊娠した女に興味のある読者の方がいられたら紹介して下さいませんか。今のところ一週間に一回ぐらい、お医者のとこへ行くくらいで、私、一人で屈してしますの。そのお医者さん通いも、順調な発育だから、一週間に一ぺんも来なくてもいいって言われていますのよ。

一度、妊婦の好きな人、妊婦を責めてみたいっていう人と遊んでみたいの。いいえ、そんな変な意味じゃなくってよ。ただ、いろいろと話すだけでもいいのよ。そりゃ、SMプレイをしてくれたら、尚いいけど。

私って、欲張りでしょ。だから、SMプレイについてはいろいろと考えてるのよ。どう？ あんたも、私のお乳飲んでみない？ ホレ、こんなに出るのよ。乳首、こんなに大



きくなって、先がざらざらしてきたもの。

ええ、いいですわ。お易い御用ですわ。い

くらでも吸わせてあげますわよ。

この大きくなった乳房を变形するくらいまで、きつく縛ったら、どうなるでしょう。

妊娠ってネ、女の一生の中でも、そう何度も何度もあるわけじゃないでしょう。だから、私はSMプレイをするにしても、貴重な機会だと思っただけで、どう思われます？ そりゃネ、妊婦マニアの方だったら、もう涙を流して悦ぶんじゃないかって？

私は毎日、暇を持て余してるんですから、そんなマニアの方がいられたら一緒に、来て下さってもいいわよ。勿論よ、写真の方もカラーやスライドで、じゃんじゃん、撮って下さってもいいですわ。

ほら、ごらんなさい。ここのお臍の上のところ、触ってごらんなさい。動いてるでしょう。手で触



らなくたって、見ているだけでもお腹の皮膚がもぞもぞ動いているのがわかるときもあるんですよ。

この前もネ、お風呂で私のお腹を見ていた女の子が「おばちゃんのお腹、動いてる」って、びっくりしてるのよ。だから、じっと見ていてごらんなさい。時々ぴくぴく動くんですのよ。ええ、そりゃ、私は自分のお腹です

から、寝ているときでも、手か足か知らないけど、突然、動きだして、びっくりすることだってありますわ。

妊婦マニアの方とSMプレイするのだったら、今が一番安定してるんじゃないかしらね。いくらなんでも、私だって予定日の一週間前ぐらいになったら、あんまりヒドイSMプレイは怖い気がするわ。

もっとも、あんたには臨月まぎわまで、写真を撮ってもらう気にいるけどプレイをやるんだったら今が一番よい時期だと思うのよ。

ねえ、二、三日のうちに妊婦マニアの方が妊婦の責めの好きな方、連れてきて。

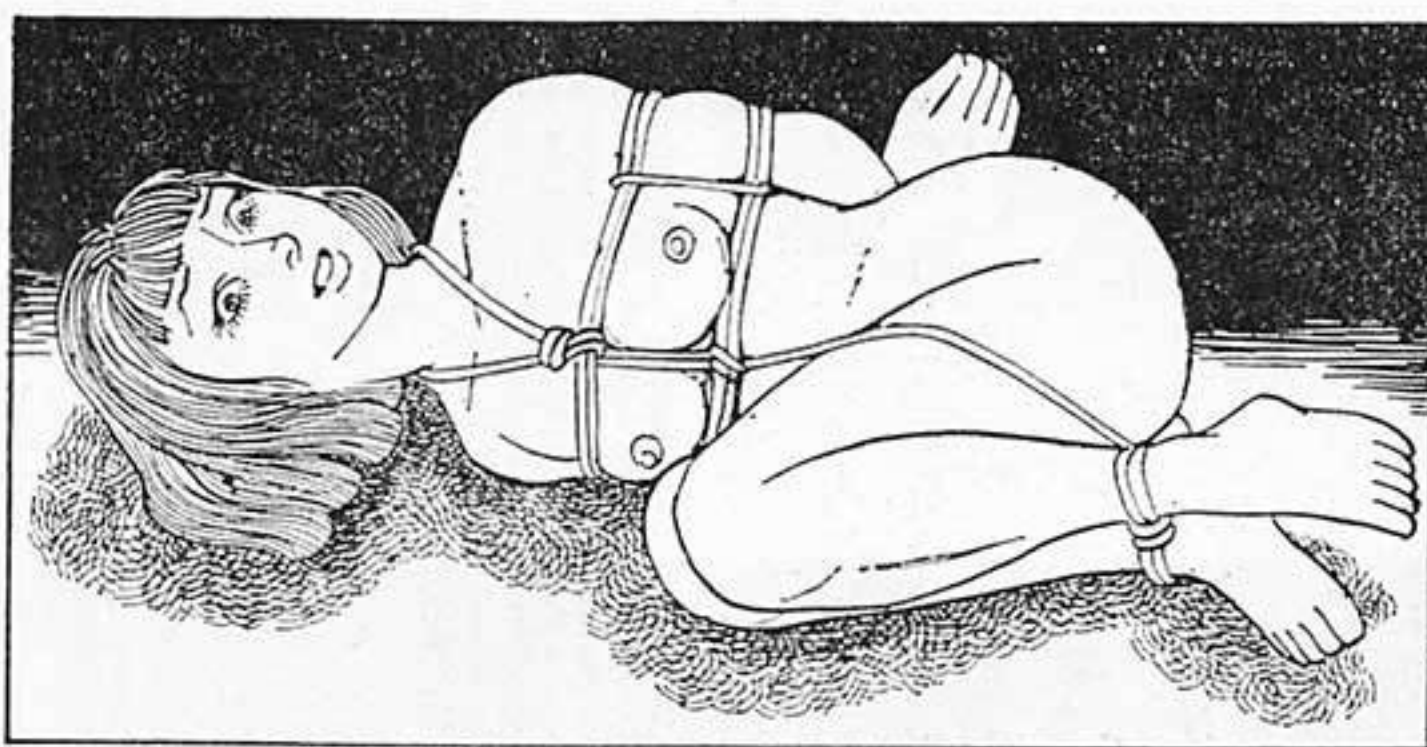
お酒のお相手は、こんな身重の身体だから出来ないけど、太鼓腹をかかえてのSMプレイだったら、大いにハッスルしてあげてもいいわ。

ねえ、きつとよ。

じゃ、今日はこれくらいで。また次にお逢い出来る日を楽しみに待っています。

では、皆さん、さようなら。

—(この稿おわり)—



カット・岩波大介

奴隷妻まりこは、妻とは申しますものの正
式の妻でなく、主人の籍にも入れてもらえず
子供を生むことも許されず、むしろ奴隷妾と
呼ばれた方が、ぴったりにいてよいのかも
知れません。

まりこの過去については別の機会に聞いて
いただくとして、現在の主人と結ばれたとき
のことを少し書いてみますと、知り合って間

思い出のメモより

まりこ

の

結婚式

北川 まりこ

もなく肌を許し、そのまま約一年間、アパー
ト暮らしの同棲生活を続けましたが、その間に
マゾの世界に、すっかり馴染まされました。

今の新居に移るのを機会に、主人の発案で
二人だけの結婚式を挙げましたが、結婚式と
いうより、奴隷宣誓式といった方がよいのか
も知れません。一時は捨てようと思ったもの
の、結局は大切に保存している主人の作った

「式の計画」メモがございますので、それに
まりこの説明を加えて書いてみたいと思いま
す。

式は大体、このメモ通りに行ないました。
括弧内は、まりこの説明です。

(一)場所。八幡神社の神前(主人の故郷の氏
神で、山の奥にある、神官のいない小さなお
社です。麓にあります一の鳥居までは車で行
けますが、後は神前まで、崩れかけた石段を
徒歩で、約三十分ほど登ったところにありま
す)

(二)日時。昭和四十二年二月四日。午前零時
より(立春の日の真夜中です。丁度私の満二
十三才の誕生日でした。当夜は、殊の外に寒
さが厳しく、参道には二、三センチの雪が積
っておりまして。式は、全部終わって車に戻
るまでに二時間余り、かかりましたかしら)

(三)服装。花嫁は羽織袴の正装。花嫁は全裸
(花嫁らしく、頭に白いベールだけ被らせて
もらいましたが、他に身につけたものは緊縛
の荒縄だけです。宿の人達の目を盗んで、そ
っと抜け出る時からそんな姿で、車のトラン
クに詰められて行きました)

(四)入場。花嫁は花嫁の縄尻を持つ。(一の
鳥居から御手洗まで、全裸緊縛、素足で歩か

されました。肌を突き刺す寒さで、凍え死ぬ思いでした。主人の提げた、携帯用テープレコーダーから流れるウェディングマーチに合わせて歩いていく中に、こんな惨めな結婚式を挙げなければならぬ自分が哀れで、しくしく泣き出しました)

(五) 楔。花婿は手と口をすすぐ。花嫁は全身の洗礼。(御手洗の前で縄を解かれて跪き、肩から、何杯もの氷まじりの冷水を掛けられました。それでなくとも慄え上がっていた素肌に滲みる冷水は、冷たいというより刺さるように痛い感じでしたが、その中に感覚は麻痺してしまいました)

(六) 礼拝。花婿は立ったまま。花嫁は土下座(洗礼の雫の垂れている裸身で、真白い雪の上に跪き、お祈りしました。身も心も浄まる思いでした)

(七) 宣誓。花婿、花嫁共に誓詞を読む。誓詞は神前に捧げる。(花婿は、妻を奴隷として飼育し、扶養すること。花嫁は、奴隷として夫に仕えることを、神に誓いましたが、ここで急にメモにない行事が一つ、追加されました。それは、花婿に対する花嫁の誓いの言葉でして、予め主人の用意していた誓詞を、主人の前に跪き、足先に口づけをした後に朗読

させられました。その要旨は、主人の籍に入ってもらえないことを認める。子供を生ませてもらえないことを認める。何時、捨てられても不服を云わない……という意味のことでした。このようなことを急に持ち出され、しかも女の身にとっては、とても辛いことばかりで、読み上げてしまっただけで、とまどいましたが、もう手遅れで、お誓いしたことになりました。その誓詞は主人が持ち帰り、現在でも金庫の中に納められています)

(八) 三・三・九度の盃。(水筒に詰めてきたお酒を二人が交互に注ぎ合って、普通の結婚式のように行ないました。その後で、少し余分にお酒を戴いて、冷え切った体も少しは暖くなってきたように思いました)

(九) 記念品の交換。花婿から花嫁へは、貞操帯、手枷、足枷、鎖。花嫁から花婿へは鞭、新しい縄。(花嫁への記念品は、その場で、すぐに裸身に装着されました)

(十) 記念撮影。(セルフタイマーを使って、二人の写真を何枚か撮りましたが、二人仲好く並んだのは一枚もございません。奴隷妻の結婚式にふさわしく、主人の前に跪いたポーズのものと、被虐のポーズが大部分です)

(十一) 記念責め。鞭打ち百回。(一つ、二つと

裸身に賜る鞭の数を、声を出して数えさせられました。雪の上にのたうち廻り、鎖の音を鳴らして、九十九、百と数える頃は、息も絶え絶えでした)

(十二) 退場。(再び雪の参道を歩いて車に戻りましたが、激しい鞭打ちと足枷のために足許も覚束なく、何度も倒れながら、ようやく車に辿りつき、そこで失神してしまいました。ウェディングマーチは、繰り返して、ずっと鳴らしづめでした)

結婚式のメモは、これで終わりです。この後、四泊五日の「被虐の新婚旅行」に出かけたのですが、この旅行のことにつきましても、別の機会に、ぜひ発表させて頂きたいと思っております。

このような結婚式を強行した主人に対し、当時は、ずいぶん恨めしく思いましたが、今ではむしろ、マゾ女にふさわしい、こんなすばらしい行事を、よくも計画し実行してくださったものだ、心から敬服し感謝しております。奴隷妻まりこは、今、マゾ女として幸福です。ただ、子供を生ませて頂けないことが、女の身にとって淋しうございますが、主人の命令ですので諦めております。ちなみに主人は当時四十三才の再婚でした。

パロディ

花

と

蛇

山光

純

カット・岡 たちし



三対一

ピンクのシェードをかむったムード照明の
灯っている部屋に、濃密な、ぎゅちりした質
量をもつ雰囲気のみちみちている。中央に備

という、押しこめられた女の溜息が深く洩れ
つづいて粘質のふかい秘密が隠されていそう
な、ひそやかな音が、かすかにベッドのあた
りから洩れでてくる。

厚くぬりつぶされ、ナイフで切れそうな妖
しい魅惑に満ちた香り。むせ返り、したたり

えられた巨大なダブル・ベッド。やわらかい、ひだのついで
いる羽根ぶとん。よじれてくしゃくしゃ
になったシートが、
空気の甘ずっぱさを
いっそう誇張するよ
うだ。

「あああ……」

のたうつ柔らかな生きもの。くねくねと熱い
肌をうちふるわせる豊満な肉体。——こうし
た肉体をもち、こうした匂いを一息ごとに洩
らし、この部屋の淫らな雰囲気を、いっそう
つのらせるベッドの中にいる女。

いま女は、ひとりの男に、固くしこった乳
首をゆだねたまま、この世ならぬ情炎の焰に
やかれている。女の乳房は、マスカットのよ
うに張り、焙りたての肉のように、ほてって
いるのだ。

女は小麦色にやけた健康そのものの喉もと
をのけぞらせ、必死に耐えている。なだらかな
シミ一つない光沢のある肌に、静脈の筋が
浮きあがっている。

女のその耐えかたが、単に肉欲にあふられ
た生ぐさいものだけであれば、彼女はどのよ

うに救われることだろう。女はいま、何のゆえもなく、まして何の罪もあるはずはないのに、ただ一方的に男にひれ伏し、無法きわる奉仕をするように強いられているのだ。背徳などという生やさしいものではない。女の抜群の肉体と、お俠んな心根をロードローラーでプレスし、その悲鳴を楽しむといった趣きである。

山なりに膝をおりまげ、両肢を開ききった彼女の固ぶとりの、ばんと張った、ふくらはぎ。くるぶしはスポーツで充分にきたえ上げられ、いかにもフット・ワークのよさを物語るようだ。同じ小麦色に引きしまったウエストが、臀部の双つの丘の豊かさを強調する。彼女は、強く皓齒をかみあわせて、三日月形の眉を、よせている。

「京子のやろう、ずいぶん、しぶといじゃねえか……」

ベッドのすぐそばに二人の若い男がいた。三郎と五郎である。

彼女——京子を攻略にかかる前、三人のあいだで、とりきめが、できていた。

京子が唇を半開きにし、夢みるように瞳をひらいて、ただ喜悦の吐息だけをつくようになるまで、決して攻め落としてはならない。

かといって、女の香にむせ返る肉体に容易に敗れたりしないため、男たちは充分に準備をととのえている。各自が外国産の強い痺れ薬を用いておけば万全である。他に、専用の特製責め具も、いつでも取りだせるよう暖めておく。

京子の方には鬼源自慢の塗り薬を充分に使ってあって、ぬかりはない。そいつは、くり返し使用しても、慣れることは絶対にできっこないのだ。

彼女の両手は間隔をとって後ろで結ばれていた。そのほかには何もつけていなかった。何一つ——ウェーブのかかった、みどりなす黒髪にも櫛はなかった。ブラジャーもパンティもつけていなかった。

男たちのためにさせられた濃目の化粧は、ぐんぐん開きつつある花にたとえられる京子のまる顔を、より一層、映えさせている。

二人の若僧——三郎と五郎は、より近く身をのりだして動きをみつめている。女の軀がいちばん珍しい盛りだ。最初が五郎、それから三郎という順に済ませたのだが、もう目がギラギラ光って喰いつくように凝視して、はなれられない。

「やっぱり、清次兄貴にゃかなわねえな。ま

だまだ修業が足りねえや。一つ、小夜子でもひっぱりだしてトレーニングをやるか」

と、十八才の五郎。

「いやいや、やっぱり美津子がいいや。おれは美津子にするぜ」

二人は遠慮のない声でいう。

その時、ぱったりと京子のうごめきがとまる。ピンクの靄のかかった瞳を、のしかかった清次の腋窩ごしに向け、

「ひ、ひどい。お約束じゃないの、やくそく……美津っちゃん、いじめないって。だから、こうしてあなたたちと、あたくし……お願い、約束どおりにして……お願い……」

清次が、邪剣な口調で、

「気分がこわれるじゃねえか。しつこい女だな、お前は。まあ、予定が変更されるってのは、よくあることよ。今夜、一生懸命につとめれば、弟たちも、許してくれるだろうさ。

何ごとも、お前しだいだぜ」

「……わかったわ。あたしは、もうどうなったっていい……許してやってね……美津っちゃんを……ああ……」

「さあ、精かぎり、根かぎりやるんだぜ。まだまだ、夜はながいんだ」

京子が口をひらこうとすると、清次は黒髪

にぐっと指を入れ朱唇を強く吸いはじめるのだった。

京子の舌は、清次の口の中で、ちよつととまどう。完全に男たちのペースである。女の必死のサービスを強要する心理作戦は心にくいまでに、鉄火な娘の心のなかの、もっとも弱い部分に喰いいるのだ。

軀は、もうすっかり諦めている。吉沢に処女を奪われて以来、もう何人の男のオモチャになってきたことだろう。しかし、心は諦めていない。この理不尽としかいいようのない毎を送らねばならない、どんな理由があるというのだ。——この邸のケダモノたち、鬼女たちに対する怒りは、今も瞋恚の炎となつて、この勝気な娘の心の中を駆けまわっているのだ。

ただ、どんなに必死の力をふりしぼって逃亡しようと試みても、常に後手に緊縛されている身。一糸も与えられずに、いつも男たちの好色な視線にとりまかれていた状況が、いつも逃亡を失敗させてきた。唇を血の出るほどに噛みしめさせる口惜しさである。

なかんずく京子にとっての最大の枷は、妹の美津子である。妹を思う姉の情の濃さを、暴行者たちは京子の体から幾度も、ひきだす

ことに成功し、すっかり味をしめた。美津子は、いってみればジャジャ馬を調教するための、もっとも効果的な手綱であり、鞭なのである。

京子のバストは九〇センチはあるだろう。こうして仰臥していても、ぐんにやりと流れたりしないということは、よほど固肉^{かたじし}に鍛えた身体だといえる。二十三才の若々しい肌には、どこにもたるみはなく、脂を塗って光らせたように生氣がある。乳暈はうすいピンクで、ぽちりと灯っている乳首は極くやわらかく、きわめて敏感な泣き処の一つなのである。

山なりに立てた太腿の内側は、下腹部のゆるゆるした動きにつれて微妙にうち慄え、情欲の小浪がうちよせてくると、ピクピクと愛^{かな}しげに、痙攣するのだ。指先を這わせると、きまって京子の首筋が赫く染まるので、このあたりも彼女の弱いところの一つだというのが容易にわかる。

むだ毛をすっかり綺麗にした腋下から手をさし入れ、清次は京子のスベスベした背、脇腹、うなじをまんべんなく刺激してゆく。性感の高まりにつれて、にじむような紅にそまつたやわらかい耳朵を口に含み、そろそろと

片手を滑らせて、急に予想外のところに奇襲をかける……。

「あうう……」

と思わず含み泣いて、半身を大きく弓なりにそらせ、みずから破局の淵に迫いこむべく燃えたち、はげしい反応をしめしはじめる京子。女の情念を露わにし、大きく双臀を振りながら、なりふりかまわず追いあげられてゆく……強い媚薬は、彼女の熱した体に吸収され、ヌラヌラに泡だって醗酵している。京子の意志がどうであろうとも、薬の効きめはいささかも容赦はしない。あらゆる官能は痛烈に責めさいなまれて叫び、合唱しているのだ。

引き返すことなどは、できっこない。ただ追われ、登りつめてゆく事にのみ溺れこんでゆく。彼女は生身の「おんな」なのだ。いま三人の男たちが彼女に有無をいわさず、そうしろと命じている。身に寸鉄さえも帯びず、両手を縛られ、その上、美津子をおさえられてしまっている全裸の女に、いったいどんな抵抗ができるというのだ。

ただ、このあまりにも深々とのめりこんでいる錯乱のなかに、ほんのすこしでもいいから愛情に似たものが介在していれば、裸女に

はどれほどの慰めになることだろうか。愛する人に捧げるといった風な、この上もなく優しい感情があれば……。

しかし、そんな優しさや甘さは、この淫蕩な雰囲気の中で、まったく存在してないのだ。三人の男には京子の気持なんてどうでもいい。教養や育ちも知ったことではない。必要なのはバストの大きさ、乳首の感度、接吻の巧みさ、さらに羞恥の縦線の技巧や深さ。——要するになぶりものにし、肉欲をみたすための女の体が素晴しければそれでいいのだ。淫楽の道具——。

汲めども尽きない欲楽を娛しむためには、だからこの女には、どんなことでもさせてやる。以前、一瞬のあいだに叩きのめされ舗道を舐めた、あの屈辱のお返しをしてやる。男のメンツをつぶした詫を、とことん入れさせる。性奴隷として這いつくばらせ、死ぬように羞かしいポーズを取らせ、そして飽きはてるまで楽しんでやらすにおくものか……快樂の宴は、まだ始まったばかりである。

と、その時、京子はブルブルと激しく尻を震わせた。さき程から切れぎれに綿々と続いていた言葉にならないピンキーな呻きが、生々しい切迫つまった声になりはじめた。

「ああ。……せ、清次さん……お、お願い」
一時にふきだした脂汗が京子の全身を、しっとりとしめらせ、濃厚な香りが、むんむんと、たちのぼる。

のけぞる喉元に、血管がはっきりとなぞられ、尻の両側以外には動かせない両手の指を血の気が失せるように握りしめる。両足指は強く内側にまくれこみ、胸の隆起がブルブルと揺れるのだ。

薬で武装した清次には、まだ少しの余裕がある。彼は、思いのたけをこめるように、自ら地獄へ陥ち込もうとする京子を左右に、いなし、耳元で、

「まだまだ……これくらいのこと、俺をだまそうたって、そうは問屋がよろずものか。いままでの若いとは、ちがうんだ。性根をすえて、頑張りな。さあ」

といいつつ、残忍な表情でさらに責めすすむのである。

しかし、すでに常軌を逸している京子に、それが知覚できよう、はずはない。すすり泣きは、さらに高まり、つよい体臭はベッドのすぐ近くでみとれている若いチンピラの鼻をつくのである。

京子は、この邸に拐われてきて以来、くり

かえし、くりかえし教えこまれた女言葉を、きれぎれに、しかし、はっきりと口に、しだしたのだ。

その屈辱の言葉は、三人のチンピラに、よりいっそう残忍な気持を、そそぎこまずにはいられない。

といって、攻略三番手を引き受けた清次ももはや責め疲れつつあるらしい。が、二人の兄貴分として、今一段のふんばりをみせる必要がある。

とたんに、

「ひ、ひどい……もうかんにんして！」

女は熱れきっている。いまここで死ぬのだと思う、思いのたけをこめ、うわごとのように同じ言葉をくり返す。今それは、悲鳴に似ていた。

「おねがい！ ゆ、ゆるして」

その瞬間だった。京子の意識が炸裂して飛び散った。

それは、核爆発さながらだった。

京子のもっとも奥深い脳髓の中で、なにかが白熱した。

おそるべきエネルギーをもった、灼熱の火球が閃光を、ほとばしらせた。それに伴って襲いかかった巨大な破壊の狂乱が、女の神経

機能を、ことごとく震撼させたのだ。それは髪の毛の一本一本を押しゆるがし、すべての細胞を破裂させ、意識を司る脳細胞を直撃したのだ。

それまでであった……。

京子とは言わず、すべての若い軀をした女で、その極限の緊張に耐えるものがあるうとは思えない。電気に打たれた家畜のように、ありったけのものを消費しつくした裸女は、一声高く叫んだきり、絶え果て、もはやピクリとも動こうとはしなかった……。

惨劇は、ここで一と休みする。

○

その頃、京子ほど颯爽としていた女性は一瞬に見当たらなかっただろう。可愛い丸顔に黒目がちの明眸がキラキラと光っている。若さと、健康美に溢れた、はつらつとした生気が超ミニのスタイルから眩く発散する。

赤い唇からこぼれる、まっ皓い歯が清潔でいかにも頭の回転のよさを思わせる話しぶりは、ハキハキして淀みがなかった。

歩きっぷりはカツカツとブーツの踵をならすものだから、発達した九十二センチのヒップは必然的にモンロー・ウォークになってしまふ。これは母に何度も注意されるが、直し

ようがない。

ご近所の夫人連の受けがよすぎるために、ひそかにミス・コンテストの推薦状を送られてしまった。

「ミス・コンチネンツ」——は、五大大陸の美女に妍を競わせる、例の有名なコンテストである。書類選考はもとより一発で通り、予備調査の担当者がやってきた。

折よく在宅していた京子は、はじめ何のこつとやら、よく分からなかったらしい。来意が分かってから、たちまち負けん気の強さが顔を出す。結局、ほうほうの体で帰っていった雑誌社の担当者は、それでも推薦状を送った奥さん宛に、何とかコンテストに出て貰う訳にはゆきませんか、と未練げな電話をかけたよこしたりした。

京子は母に、

「何よ、ミス・コンテストなんて。京子、見も知らぬ人達の前で水着姿になり、しゃなりしゃなりやるなんて、まっぴらごめんだわ。お好きな人もいるんでしょうけれど、京子には屈辱ものよ。無礼だわ、不愉快だわ。女性に対する冒瀆よ、あんなの」

と、剣もほろろだった。

そんな話は、ずい分ある。

学校を卒業して間もなく、彼女の態度や容姿にかねてから、ぞっこん参っていた先輩がはっきり求愛と読みとれるレターを送ってよこしたことがある。開校以来の秀才だなどと噂されていた長身のそのインターンも京子にかかつては、あっけなかった。

「男らしくないやり方は、京子キライ」で終わりをつげたものだった。

お転婆だった少女のころから、スポーツは何でもできた。同年の友だちとして遊んだ縄飛びから、やがて鉄棒、バレーボールにいたるまで、運動神経は抜群だった。高校の体育祭の女子二キロ競走で、一年生が優勝したというので、学園新聞に写真入りで表彰されたこともある。ついでだが、その時、袖なしの上衣とブルマーのスタイルでトップを走りながら、ちよっぴり妙な気持になったのを彼女は覚えていた。次第に大きくなりはじめていた胸のふくらみが、ユサユサするようで邪魔になる感じだ。意識しだすと、太腿もあらわに大勢の父兄や先生、生徒の前を走りぬけるのが恥かしくなった。ピッチは、そのためにさらに早くなってしまった。

体育祭のあと、ご褒美に連れていってもらったレストランで大きなテンダーローインを

食べ、さすがにお腹が一杯になって胸をさすったとき、又しても膨らみが気になり、ペロリと舌を出したりした。

美津子は、おとなしくエビのコキールなんかを食べている。京子は、五つ年下の妹が大の自慢だった。色白の可憐な美津子は、フランス人形のように、よく姉を慕い、まるで妹の理想像のような女の子である。姉妹そろっ

て、もとより成績もよかった。

大学に進むと、京子はすぐに空手道部を志望した。男のやることを女の子がやって何が悪い、というわけである。受け入れ側の男子コーチ以下はヘドモドした挙句、警察関係の婦人コーチを招請して、やっと入部して貰った次第である。勿論、女子部員の最初であったが、先輩や部員から何の異議もでたりはし

なかった。

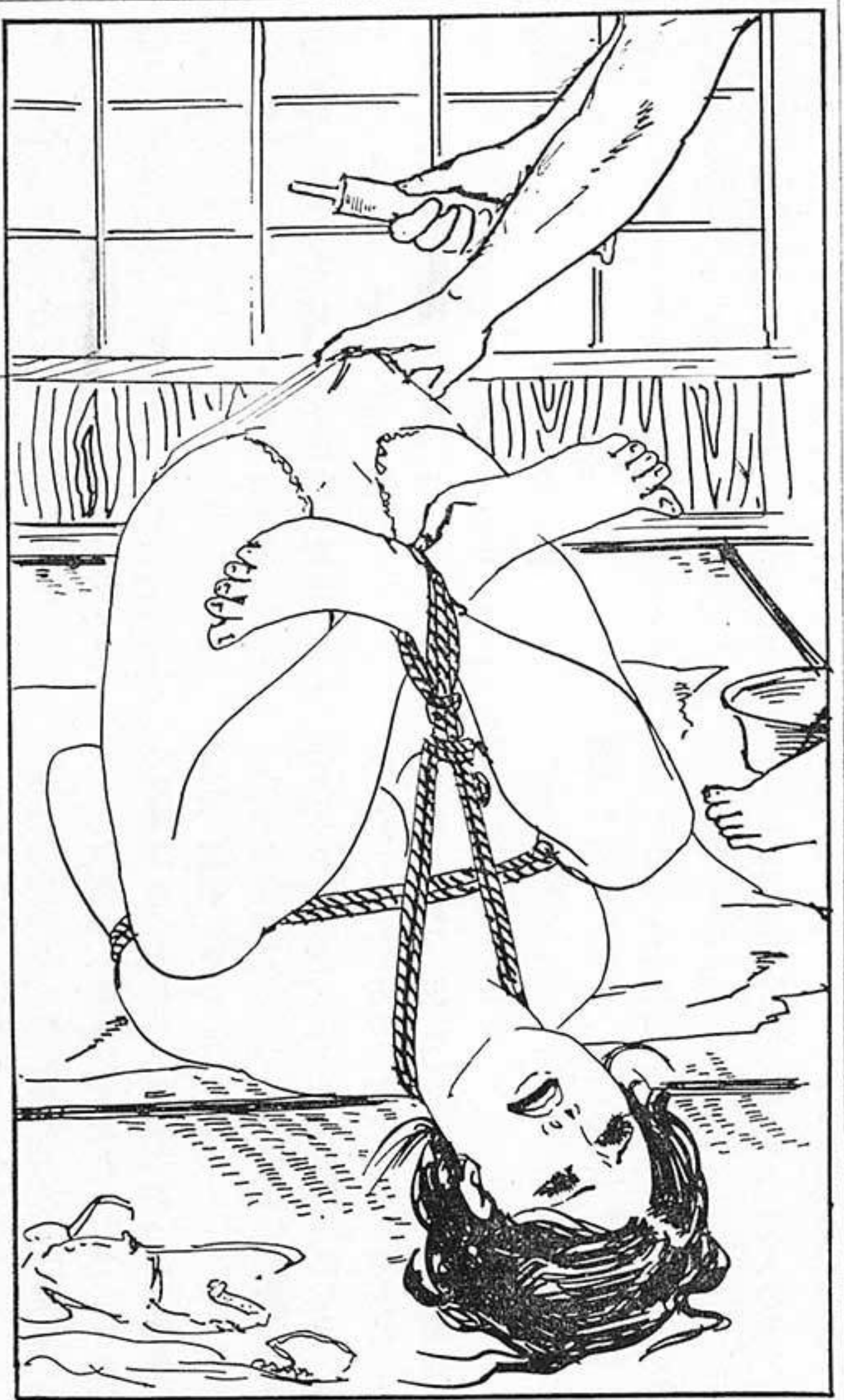
お嬢さん芸と見くびる男子部員をしりめに京子はたちまち上達した。天性の凜というべきだろう、卒業するときには実力二段の腕前だった。

京子の噂をきいて、学内の「お茶っぴイ」たちが何人も入部を希望し、京子には頬笑みを、男子部員には悲鳴をあげさせたものだ。彼女は空手道のほかにフェンシング部にも所属した。ただ、青春の可能性を追求したかっただけである。言い寄ろうとする男性たちは先の医学生に似た手きびしい反撃をうけ、可能性の全くないことを知らされた。「彼女には、とうていかなわんよ……」誰もが長嘆息をつきながら、身の不幸を慰めあった。

——その頃、一つのエピソードが生まれる。

男性にとって、あれほど容赦なかった彼女は、同性の友だちには、きわめて受けがよかった。待ち合わせの約束をすれば、二十分は前に行っており、あわてて駆けこんでくる友だちを笑顔で、むかえるのが常だ。

あの街角にある喫茶店。六時半に待ち合わせて、サロン・アラ・モードへ仮縫いに行く約束があった。そこで、無礼きわまる三人のチンピラに、からまれたのである。



イメージギャラリー

『苦悦への招待』

須坂

旭

「おい、その姐ちゃんを見ろよ、グンバツにイカスぜ。ようよう、アンヨを、組んでみな。パンティすりだぜ。ヒヒ……」

それが最初である。人の世の偶然というもののほど、たあいのないものは、ないのではあるまいか。

こういう手合いと、口をきくのさえ、けがらわしい。男のクズだ。京子は声の方を一本つすらせず、涼しい顔をしていた。

「ちくしょう、たまんねえな。オッパイ、ボインとくるぜ。姐ちゃん、俺さまにモミモミして貰いてえらしいな。その綺麗な顔に、ちゃんと書いてあるぜ」と別の奴。

「俺は、何といっても、あのでっけえケツがいいや……ああ、たまらんなあ……なあ、お姐ちゃん。俺が自慢のトウモロコシを思いつきり喰わしてやるからさ、つき合えよ」

△おめでたいのよ、この低脳たち▽

と京子は思った。豊かにウエーブした髪を痼症に振り、レジを取って表に出る。

三人のチンピラ兄弟たちは、お互いに見ばえのしない生計と境遇を、額に汗して働かない自分自身のせいとは思わなかった。何とか辻褄をあわせて「色と欲」を、ほしいままにしたいものだとばかり考えていた。一方的に

奪えるチャンスがやってこないのは、なぜだろうか？ という粗末な手合いである。

世の中は、そんなに甘くあるはずはない。その結果が、喫茶店でたむろして女の品定めに時間をつぶしている訳であった。彼らは勿論、退屈しきっていた。

京子が立ち上がって恰好のよい脚線が視界にさらされると、まったく反射的に兄貴の清次も立った。つられて、二人の単純きわまる弟たちも立つ。愚者の勢い、まぬけた衝動としかいいようがない。

都心部を何とかうす汚れたものにしようとな努力している屋台が出ていた。ほの明るいブゼン灯がゆらめいている、トウモロコシ売りの屋台である。

そこが勤務先であることを、三人のチンピラは雄弁に物語っていた。青果会社の汚れた前掛けをそれぞれ、ぶらさげていたからだ。

男たちは、屋台の前で京子に追いついた。

「おいおい、俺たちが、ご挨拶を申しあげたんだぜ、姐ちゃん。せめて、ニコリ笑ってウインクぐらいしてくれたっていいじゃねえかよ。ヒヒ……」

△しつこすぎるわ▽

と京子は思った。それでも逆らわずに、く

ぐり抜けようとする。

一番、年若い奴——五郎が、

「おっと、逃げる気かい、姐ちゃん。そうはさせんぜ。まあ、ホテルで徳利一本くらい、つきあうだけさね」

京子はカッとした。美しい丸顔に、お俠んな怒りの表情が浮かんだが、それは少しも京子の美貌を損わない。むしろ、若さに溢れた潑刺とした、きらめきが、その個性を一層、引きしめる感じである。

「あんたたち、何をガツガツしているの。お腹が、へってるんでしょう。それとも、お金が欲しいの。だったら、すこしだけ上げるから、アリガトってお礼をいうのよ」

夜の街角には通行人も多かった。しかし、声高な三人のチンピラに囲まれているミニの女の子に加勢の声をかけてくれるものは、例によって誰一人いない。

「金が欲しいなどと、いつ言った！ お前、俺さまを怒らせる気か」

「怒っているのは、こっちの方よ。何よ、女一人だと思って、強がったりして」

五郎の顔には、ニキビがいっぱい浮きだしている。まだ十七才になったばかりで、日頃から強がりばかりをいっている。図星だ。

「おめえ、俺たちを舐めてんだな。こうなったらもう勘弁できねえ。オトシマエをつけるまで逃がさねえぞ。さあ、こっちへ来な！」

「触らないで！ けがらわしい。あなた、まだ未成年でしょ。子供だわ。さあ、お家に帰ってママに甘えてた方が、いいわよ」

京子は美しい瞳を、はしく光らせながらズケズケと、言ってやったのだ。赤い唇からこぼれる、まっ皓い齒が清潔だ。

「このアマ！ そこまで言われちゃ、もう引き退れねえな。こいつは、俺の舎弟なんだ。五郎に因縁をつけるのは俺につけたのも同じさ。——さあ、人だかりがする前に、あっちへと案内してるんだぜ。その綺麗な顔や体を傷ものにされたくないや、今のうちに詫びの入れかたを考えておくこった」

「ごめんだわ。お詫びをするのはどっちの方よ。——あなたたちは、人間のクズね。いいえ、ちがうわ、豚よ。あたし、ケモノのお相手をするほど、お下品な女じゃ全然ないの。フフ……じゃアね。バイ」

それから先が乱斗になったのだ。もっとも乱斗などという映画もどきのシーンはなく、勝負は、またたく間についていた。

自然本体で吸気を止める。両腋を締め、親

指を掌にたたんだ右の手刀で最短距離から相手の眉間を強打し、右肘を真横に突きだす。身を翻しざま足を飛ばし、甲で打つ。接近戦での連続術である。身のこなしは、すこしの無駄もない鮮かきで決まる。

清次が眉間、三郎は水月、五郎が脇腹といった具合である。三人の叩きつけられた舗道は、鉛筆で光らせたように凍っていた。

後をも見ずに、京子は小走りにそこから立ち去った。冷静さを失っていたわけではないが、胸の飾りポケットに入れていた小さな手帖をどこかで落としただけの被害である。

そして、それっきりの筈だった。

あの花恥かしい立廻りのエピソードは、日が経つにつれ細かいところはよく思いだせなくなり、以前にそんなこともあった、というくらいの記憶で、ちよっぴりおかしさがこみあげてくるといった程度のハプニングで済んでしまった筈だった……。

○

復讐の快感と、セックスの快感に酔う三人のチンピラは、縛められた両手を不自由そうにのばして、床に落ちた羽根ぶとんをひろいあげて全裸をおおう京子の挙動を、好色な眼でみつめつづける。

小麦いろの滑らかに光った肌が、さき程の苦斗のあとを物語り、乱れた黒髪も、京子がもうかつての誇り高い処女ではないことを痛々しく告げているのだ。

三人の男に、たてつづけに征服された彼女は、顔をあげることもできないでいる。

伏目の長い睫毛、男好みの濃い化粧、丸い脂ののった肩……羽根ぶとんのすぐ下にある固く成熟した熱い肉体を想像すると、チンピラたちは、又しても新しく湧きあがってくる欲情に小鼻をピクピクさせるのである。

清次が、

「さて、じゃ、この、しびれる夜の記念撮影をしておこうじゃねえか。この生意気な女がとことん詫を入れた証拠にだ。五郎、一っ走りいってカメラなんか取ってきてきな。おれがポーズを考えておいてやる」

そして、三郎にむかって説教でもするように、

「どうでい、いまの悶え方をみただろう。だいたい女なんてどんな奴でも似たようなもんだが、こいつだけはちっとばかり上玉だから騒ぎようも派手だな。……こういうジャジャ馬みてえな奴を馴らすことも経験の内だぜ。だいたいお前や五郎は、ちっとばかりいい女

だと、すぐカッカと頭に上っちまって、せっつつくばかりのようだ。いいか、ちっとも焦ることなんてねえんだ。この女は、こうして表面は「お好きなようにして」と、媚びてるんだ。でんと据えられたお遊び道具なんだ、思いきり時間をかけて楽しむのよ。この女の心の中に持ってやがる生意気さの一たらしずつを、じくじくと絞りとるのよ」

といいながら、羽根ぶとんを顎まですっぽりとかぶり、目を閉じている京子にむかって「おい京子、聞いてんだらうな。お前も知ってるように、お遊びにとりかかる前に、とりきめた男の約束を、ともすれば二人が守りやがらねえんで、いま、説教をしてるところなんだ。お前も、何とかいえよ」

言い終わらないうちに恥辱にまみれた京子は、すっぽりと頭全体をふとんの中に埋めてしまうのだった。

「この女、甘ったれるんじゃねえや」

三郎は、たちまち手をのばして羽根ぶとんをはねあげた。上質の上ぶとんは、まるで軽くフワフワと滑りながら、ベッドの足元に消える。

後手に縛られたままの、豊かな悩ましい隆起をみせて息づいている女は、乳房を伏せ、

くの字に折れて、シーツに顔をおしつけている。右側の尻たぶが、小山のように盛りあがっているのは、しかたのないことである。

ピンクのムード照明のなかで、ねっとりとした光り息づくエロチックな肢体は、そのままグラビア雑誌に掲載すれば好評そのものであるう。

しかし、いわゆる検閲当局のOKが得られるかどうかは疑問である。この女体、このポーズからは、たった今まで、肉欲の嵐に翻弄されていたという、あまりにも露わなほてりが、生のままで、みてとれるからである。

二人が、思わずゴクリと唾をのみこんだとき、飛びはねる足取りで五郎が帰ってきた。手にカメラや、附属品、大きな紙袋なんかを提げている。

「兄貴、さあ始めようぜ。京子が、俺たちに心から詫びを入れる名場面をジャンジャン撮ろうぜ」

と、せわしくいいながらいくつものフラッシュ・ランプを、あちこちにセットして廻る。

三人は、まるで家具を入れかえるようにあてもない、こうでもない議論しながら、椅子を置いたり敷皮を払ったりするのだ。

強力なランプが点灯され、そうした舞台装

置を白日のもとに浮かび上がらせる。

「さて、セックス・スターだが……」

と、五郎はウミをもった頬のニキビをつぶしながら、

「いつもいつも素っ裸のままじゃ、おめえもあんまり面白くねえだろう。それで、これからの協力しだいで、何か着るものを貸してやってもいいんだぜ……」

などと、京子が渴望していることをニヤニヤしながらいう。

京子はシーツから顔を、はっと上げ、光る目で男たちを見あげた。

彼女ほどの聡い女性であっても、その魅惑にみちた申し出を黙殺することは、とうていできないのだ。

「なんでえ、その目付きは。ウソじゃねえんだぞ。ほら見ろ、ここにイカす乳当てと、パンティが、あらあな。ちょっとスケスケだがネグリジェも持ってきてるぜ。ヒヒ……」

「ありがとう、五郎さん。京子、お礼をいわ。さあ……」

と感情をつとめて押しかくした、慄える声で京子は答える。そして、両の乳房を押しかくしながら、不自由な両手をさしのべるようにするのだ。

「あんまりつけ上がるんじゃないや」と清次が口をはさむ。

「この貸し衣裳代は高いんだぜ。ところが、お前は、軀以外に支払うものはないときいて

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円(送共)

郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

る。まあ、これから行ない次第によっては、少しくらいまけてやってもいいんだが……と、りあえず写真撮影だ。グズグズせずに、こっちへくるんだ」

(大阪四二七八三番)『のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

京子を徹底的に楽しむために、チンピラたちは二重三重の心理的なワナを、しかけているのだ。二年前の詫びを入れさせること、美津子をかばうこと、その上、衣裳をつけさせてやってもいいなどいいだしたが、いずれも、この抜群の女の中に燃えている高い気位の炎に水をぶっかけ、褶伏しつくしてしまおうとする企みに、ほかならない。

こうしたやりとりの後、遂に彼女は煌々と照るライトの下に引きだされたのだ。

「さて、最初から思いきり猥褻なヤツでゆくか。まず、俺と京子、次に三郎、五郎のサシで撮る。スタイルは、お好みのまま……」

浮き浮きと、寝椅子の上で組み合うスタイルなどを清次は指示しながら、

「お相手をしているのが、ハッキリとお前だということが分かるように、その綺麗な顔をいつもレンズのほうにむけておくんだぞ。できる限り豊かな表情——ほら、つい今まで通りの顔付きをすればいいんだ」

などといい、猿轡をのばして京子を抱きあげながら、又しても耳元でヒソヒソと、下等なふるまいをしてみせるように強制するのだった。



シンブンきりぬきちょう

あぶちく受感

虹丸虹吉

|| 1 ||

『「空手師範」のソーレツ女性が、必殺のワザで内縁の夫を昇天させた。マニラ市の北五十マイルのところにあるアンジェレス市で、27日起こった話。』師範の名は、マリア・ラビーネ。

警察の調べによると、マリアは、内縁の夫ゴンザロ・ディマティラ(22)の顔や胸に二十回以上の「飛びけり」や「空手チョップ」を浴びせて殺したという。

なにに腹をたてたのか、殺しの動機は確かではないが、「もっと女らしいやり方はなかったか?」と、市民はふるえあがっている——(UPI) (71年12月29日付、Mシンブン海外こぼれ話)——

○

女性上位、ウーマン・リブ等の記事は、すでに慢性化? しつつあるようだが、こんなものすごい女性までが、とうとう出現したとあっては、いくらフィリッピンの話といたって、男性たるもの考えこまざるを得ない。まさに「ふるえあがる」のもオーバーではなさそうだ。

|| 2 ||

『超満員の朝の総武線。男はニンマリしながら電車の揺れに身をまかせた。そのうち、目をつぶり、時には首を振り、肩が小さきみに動く。男は、前にいた女性にタッチしようとしたのだ。だが、この日は相手が悪かった。東京H署の婦警さん。「ふざけちゃいけません

ん」と腕をつかまれ交番へ。

I区のF(40)。酒も飲まず仕事熱心と会社での評判はよい。「女はきらいだ」というて独身。ところが、真面目な顔の裏に、もう一つの顔があった。

T県の高校を卒業してすぐ上京。見るもの聞くもの、すべて新しいことばかり。とくに朝夕のラッシュの混雑は驚きだった。しかしそれもツカの間。いつしか、混雑が「生きがい」の場に変わった。初めてのとき、御茶の水駅から乗ってきた女性が、両国駅で下車するまで約12分、ひとことの抗議もしない。Fは次の日も、また次の日も……と、いつしかヤミツキとなり、「これまでにタッチした相手は数えきれない」と自供した。

しかし「さわった」「ワイセツだ」といったところで、この犯罪ばかりは告訴がなければ警察も手の打ちようがない。「早くおヨメさんをもらいなよ」と、説論だけで釈放になったが、Fの「ざんげ」を、さんざん聞かされた刑事さん。「それにしても、近ごろの若い女性は、さわり魔の横つらのひとつも、張りとはしたくないのかねエ」と、首をかしげることしきり——(71年12月1日付、Mシンブンタ刊「赤でんわ」欄)——

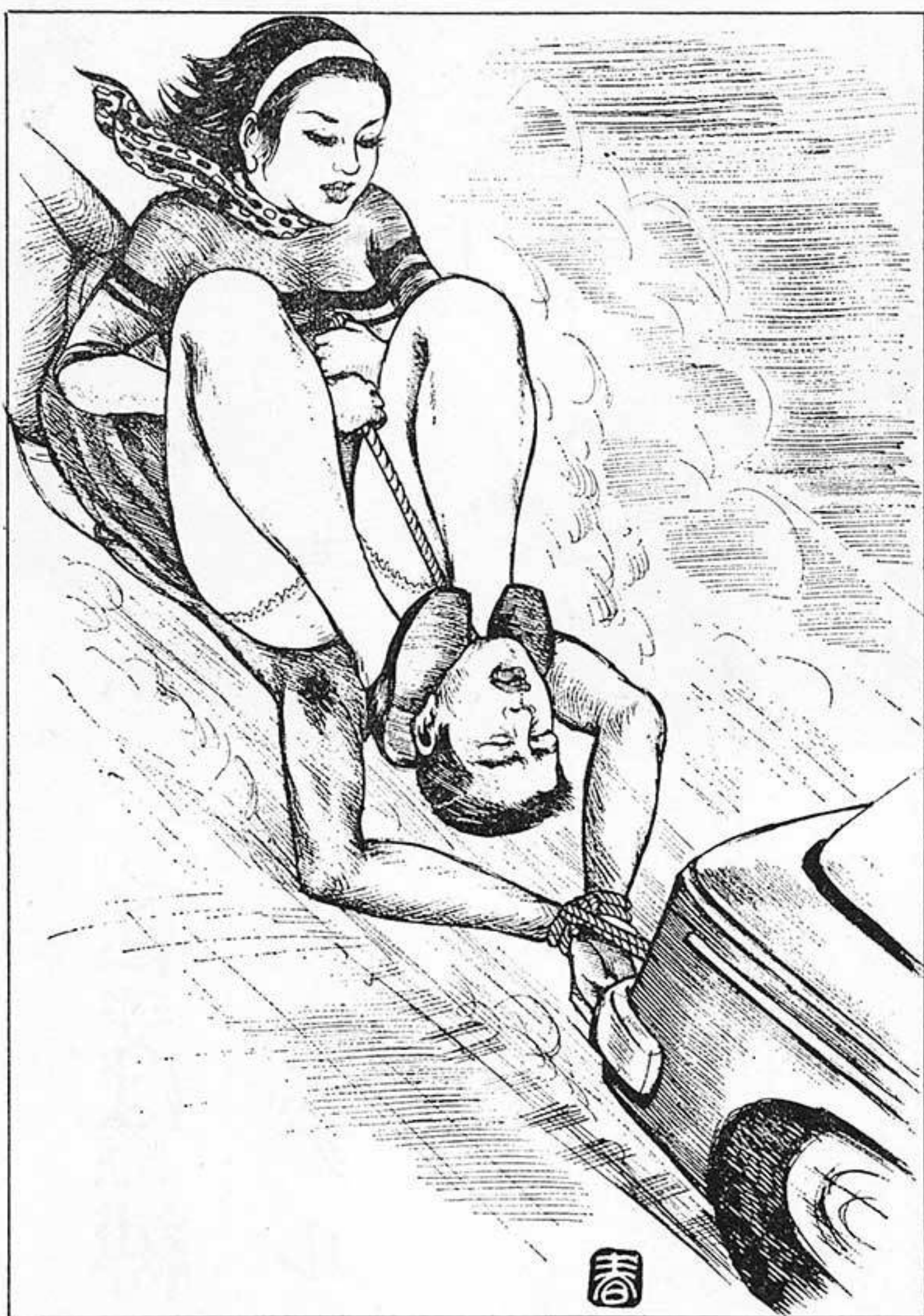
○

よくある「さわり魔」のおはなしだが、もしも、前項の「マニラの猛女性」と、この男とが出喰わしたら……？　なんて想像しちまって腹が痛くなった。いや、日本の電車でヨ

カッタねえ、マツタク。

|| 3 ||

『他人の手紙を読むのが楽しみで、二千八百五十六通もの手紙を盗んでいた郵便局員が、16日夜、東京郵政監察局に、窃盗と郵便法違



ナミオM画廊 『滑走の快』 春川 ナミオ

反でつかまった。

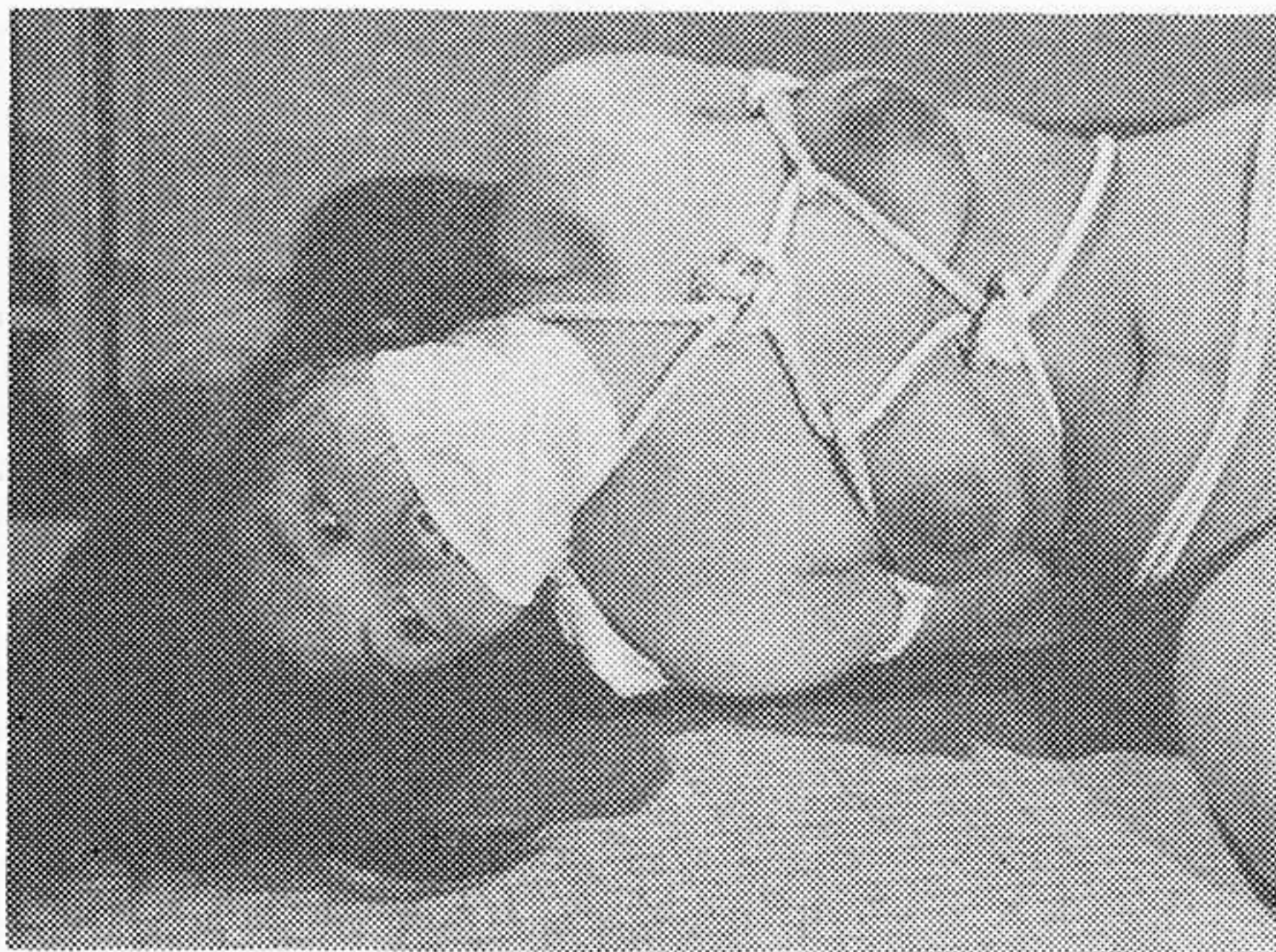
東京A郵便局員、O・A(24)で、区分け台から手当り次第にハガキ、封書を盗み、自宅のダンボール箱にしまいこんでは読みふけていた。

盗んだハガキの一部を、自宅近くの道端に捨てたことから「足」がついたが、調べに対し「他人の手紙を読むのがおもしろくて」と自供した。現金書留をねらう不良職員はこれまでにいたが、「読み魔」の逮捕は監察局始まって以来という——(71年12月18日付Mシンブン「雑記帳」)——

○

まことに奇怪、ヘンテコな人間が存在するものではある。一種のノゾキ趣味であろうことは間違いなく、おそらく、彼なりのエクスタシーに浸りながら読みふけていたことだろうから、これもまた「アブチックな性癖」の一つといえるのではないかと思う。

それにしても、これはまたなんとミミッチイ性根であることか。男は、いよいよ卑小化の道をたどり、一方、女は、ますますハバをきかせて？　いくらしい……みたいな感じをどうしようもなく感じとっちまうんだが、どういうものだろうか？



Λ M 女 通 信 V

私は縛りの

モデルになりたい

高 村 浩 子

私は二月になって突然、前のアパートを引

越して今の部屋に移りました。丁度節分の
日で小雪まじりの冷たい雨がパラパラと降っ
ていて荷物を運ぶ私の頬を濡らしました。

丁度一年前、はじめて奇クの緊縛モデルに

ちてくるといった、お天気でした。

私が引越した節分の日、氷雨というよ
うなベトベトした雨で暖冬になれて薄着をし
ていた私は思わず身ぶるいましたものでした。
何故、急にアパートを変わるようになった

なるため、お手伝いさんをしていたお
家を出て駅へ向かっていた時も、確か
このように粉雪のようなものが降って
いたように思います。でも、あのとき
は、うす陽がさしていたのに、高い空
からヒラヒラと花びらのような雪が落

かといいますと、知り合いになった男の人が
私が一人で住んでいるということを知ると、
私の部屋へ一緒に住まわせてくれとって、
しつこく、つきまとったからです。同居して
いる友達の部屋から追い出されそうになっ
ているからという身勝手な理由から、一方的に
私の部屋をアテにするなんて、なんという非
常識な男なのでしょう。

若い女性の一人住居の部屋へころがり込む
ということが、どんなことを意味するか、そ
の若い男はわかっていないようです。電柱の

かげで私の帰りを何時間も待ったり、廊下のふきっさらしで風呂から帰る私を待ったりするのを、その男は熱心さだと誤解しているようです。私はそんな女のくさったような男は大嫌いです。

その男の余りのしつこさに、私は急にアパートを変わる決心をしました。本当は五、六月頃になって、もう少し権利金にするお金がたまったらバストイレ付きのお部屋へ移りたいと考えていたのですが、変な男ににつきまといとわれてしまったので、急に予定を変更して一先ず今のお部屋を選んだのです。

玄関を入った脇が、管理人の部屋で、一つおいて私の部屋です。六帖一間にトイレ付きというのですから、前のアパートよりは少し広いですが、廊下を挟んで向かい合わせてに部屋がありますので大分、騒がしいです。田舎と都会ぐらゐの差があります。

僅かばかりの荷物ですが置き並べて部屋の真中にホームコタツをすえてみますと、硝子戸一枚の外を寒い風が吹きすさんでいても、この部屋は結構楽しい我が家です。姫鏡台、整理タンス、白黒テレビ、食卓、蒲団、ホームコタツ、これくらいしかない道具。なんと佗しい、お部屋でしょう。でも、台所用品は

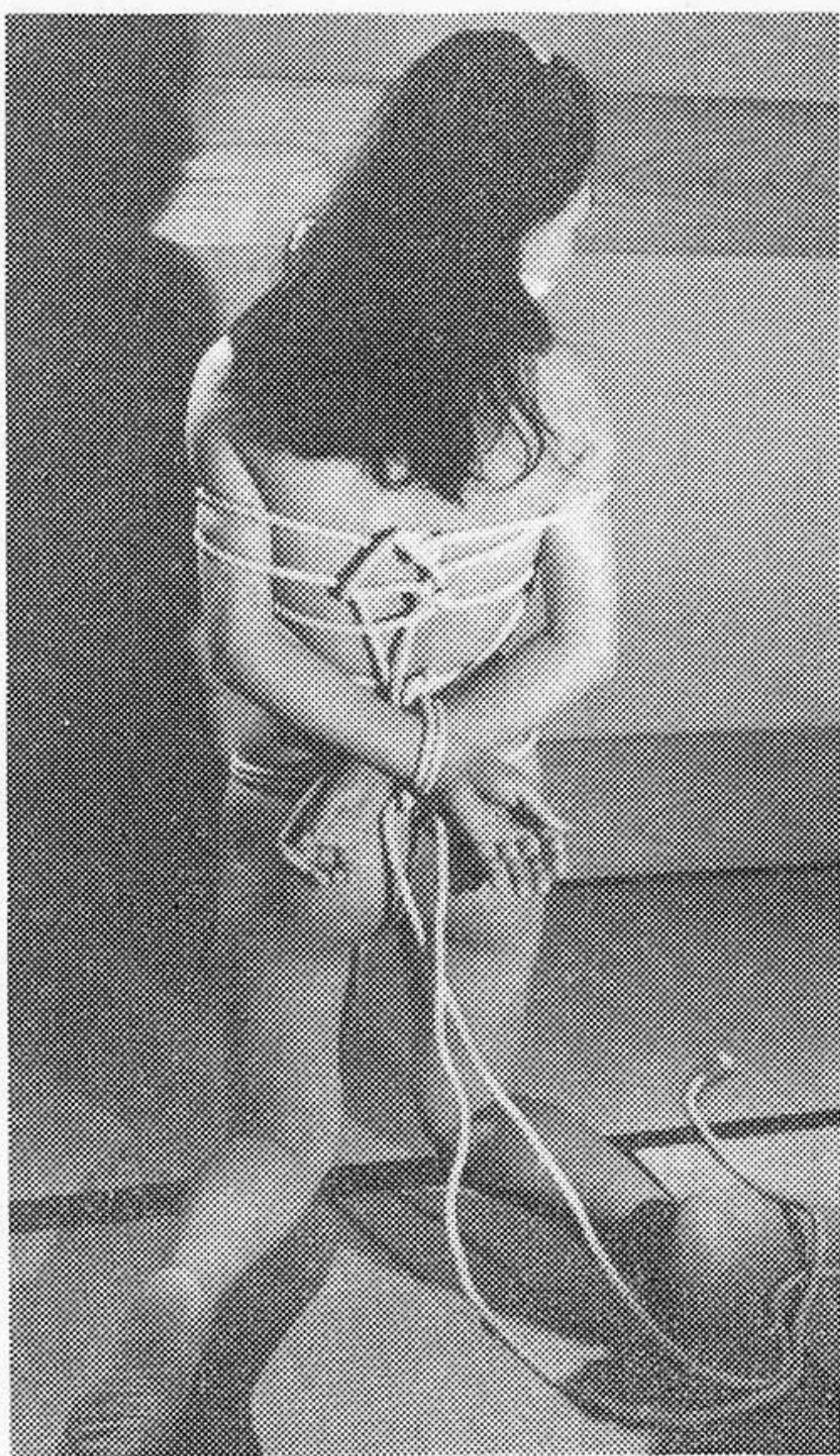
一通り揃っていますから、女一人自活するのには、これで支障はありません。

私にうるさくつきまとっていた女のくさったような男からも、それから、今まで文通していた人達とも、これで一応縁を切ったことになります。これからは、私が文通したい、交際したいと思った人達とだけ楽しいおつきあいをしたいと考えています。

文は人なりと言いますが、文通してみても、間違った文字を平気で使う人、アテ字を使う

人なんかは逢ってみると、やはりつまらない人が多いようでした。私が我儘で、相手の人を選び好みしているのかもしれませんが、でも、私にしてみると、文章なりお手紙なりを読んでも、この人なら、と思わないことには、どうしても心が動かないのです。

それから、紳士的に行動するとか、これ以上の線は手出ししないとか、又、自分が如何に真面目人間であるかということをも自分で書いている人なんかは大嫌いです。少なくとも



S Mプレイをする以上は、いじめられたいと願ひ、汚辱にまみれたいと願っている私の肉体の上に、暴虐の嵐をふりまいて下さるような男らしい方が大好きです。

大暴風雨の嵐の中で翻弄されている小舟が私なのですから、手加減とか遠慮とかはS Mプレイにとってはマイナスになりこそすれ、いささかもプラスにならないのです。

紳士的に行動するとういうような女々しい方の多くは、男としての責任を回避しようと考えているズルイ人で、S男性の風上にもおけない人ではないでしょうか。私にはそういうお手紙をもらったりすると、なんとなく、そんな気持がしてならないのですが、これは私の思い過ごしでしょうか。

早番の時なんかは、五時になるともうお部



屋に帰っています。この前のアパートはすき間風の寒い部屋でしたが、隣近所はこれでも人が住んでいるのか、と思うほど静かでしたのに、今度のお部屋は、廊下を子供達が遊び場にして騒いだりしていますので大変賑やかです。人混みの中にいていようで、その点淋しくはないのですが、一人で物思いにふけ

ったりするのには不適當です。それに管理人の中年の男の人が用もないのにドアをノックして入ってきて、永々と話し込んでゆきます。私と彼とは初対面同様に共通の話題なんて少しもなかったのですが、その管理人が私の部屋へ無遠慮に上がり込んでくる時はいつも隣近所のアパートの住人の噂話を、しにくるのです。

夫婦喧嘩の話だとか、子供が何人あるとか、他愛もない話を、くどくど述べたて、私が余り関心を示さないと今度は私のことを何かと詮索し始めるのです。私が一人でいるのが興味あるらしく彼氏がいないのかと、しつこく尋ねたりします。私は噂話のタネにされるのが嫌なので当らずさわらずの受け答えをしていますと、しつこく顔をのぞき込むようにして追求してくるねばっこい視線がたまらなく嫌に感じてくることがあります。

先日も編集部の方にガード下まで車で送って頂いた時に、私にも彼氏がいるのだという管理人へのみせしめに、私の部屋までお誘い

したのですが、急ぐ用があるからということ
で断わられたのは残念でした。

私はお手伝いさんをしていた頃と違って、
時間的には非常に自由になりました。午後五
時以後でしたら毎日でも出られますし、また
休みはお友達と替わってもらえますので、い
つでもとれます。そんなわけで、今の私は身
体をもて余していますので緊縛のモデルに是
非、どしどし使ってほしいのです。

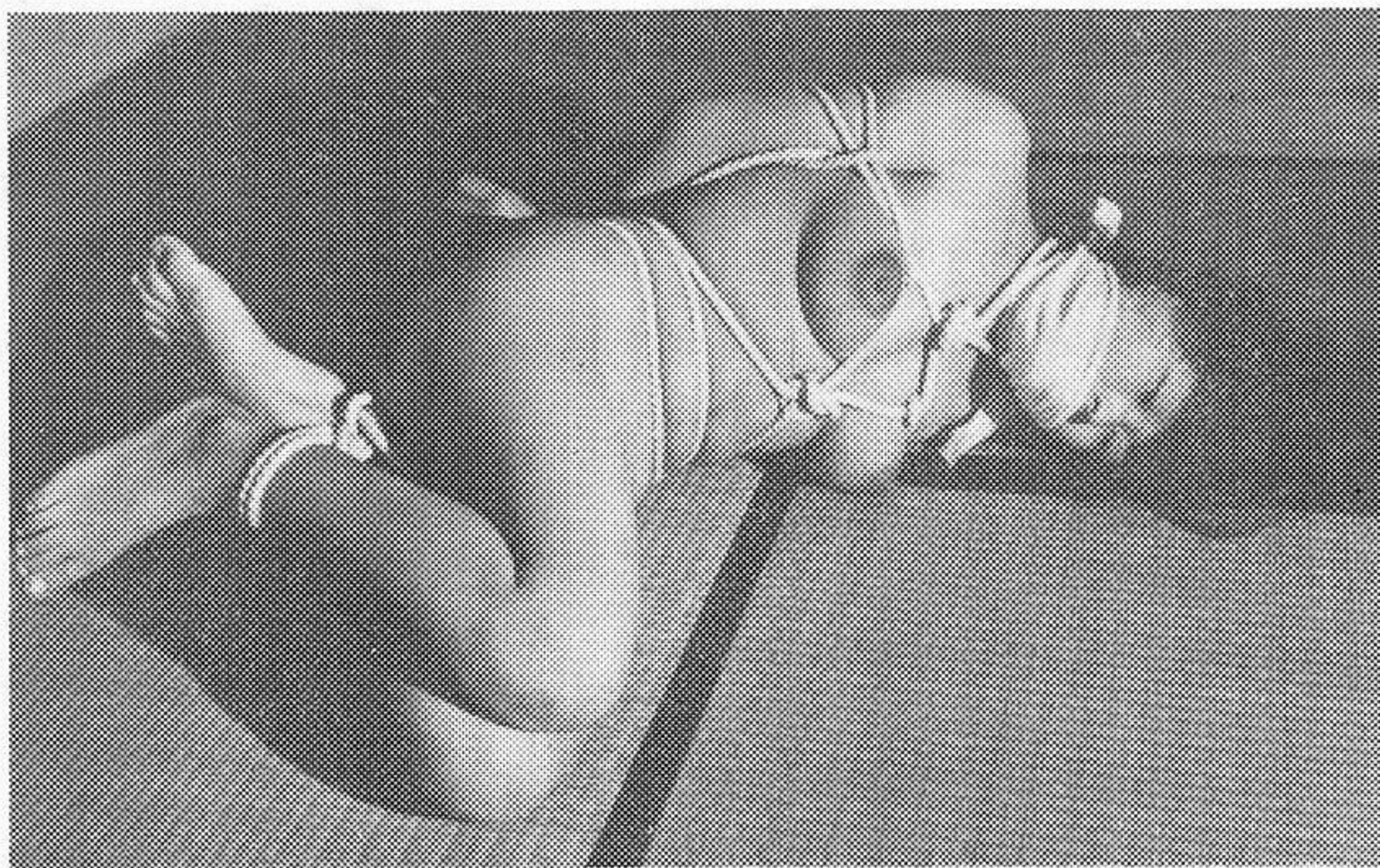
私が一読しただけで一遍に身体中が燃え上
がってしまう様な素晴らしいラブレターを私に
下さる方って、いらっしゃるのでしょうか
しら。割合口下手の私ですけど、お手紙の返
事でしたら、一生懸命その方の氣にいるよう
に書きます。文通によって十分に意志の疎通
をはかっておいて、こんな文章を書かれる方
って、一体どんな方だろうかという期待の氣
持でお逢いするのなんて、とても素晴らしいと
思うんですけど、少女趣味でしょうか。

夜になりますと、私はいろいろの筋書きを
空想して楽しいひとときを過ごします。そん
な時、いつも私は責められ、いじめられ、汚
され、犯されるヒロインの役割を演じている
のです。空想の中で、いつもいつも、そんな
ことばかりを考えている私って本当に変わっ

ておりますわね。

現実に緊縛のモデルになって、
いじめられ責められたときの楽し
さは今でも忘れることは出来ませ
ん。力強い男性の方の手によって
荒々しく私の裸身が縛られ、そし
て身体の自由をすべて奪われてし
まった上で、かずかずの羞かしめ
を受けることは、思っただけでも
身ぶるいするような悦びでした。

でも、縛られるということが、
いじめられるということが、すべ
て悦虐に通ずるものでなかったこ
とは、今までのSMプレイやモデ
ルの撮影で経験しました。殊に頭
を下にするようなポーズのときや
胃の附近を圧迫するような縛り方
やポーズをとらされたときは、言
いようのない嘔吐を催しそうな苦
痛のために、プレイの中止を懇願
したことがあります。どちらか
といえば、女の羞恥心をかり立て
るような責め方とか、女の誇りを
踏みにじるといった暴虐に対して
好ましい反応を示すことが出来ま





した。

勿論、私は縄は好きですし、身体が俵のよ

差し上げます。

この方こそ、

うになるほど、きつく縛られるのも大好きですが、ただそれだけで終わってしまうのは不満です。その間、カメラで執拗なほど身体のスミズミまで狙われるということは私のマゾの心を大変に満足させてくれます。ですから私は緊縛と責めのモデルになりたいのです。

私のこのような願いをおききとだけ下さって、どうか、お便りを下さいませんか。私のあとを追いかけてまわしたり私の帰るのを待ち伏せたりするような女々しい男の方は大嫌いです。私のマゾの女をぐつと驚づかみにして、掌の中でもみくちやにして、そしてポイと屑籠の中へまるめて捨ててしまうような素敵な方っていらっしやらないでしょうか。

と思った方には必ずお返事を、どうか、マゾ女の私が一度に

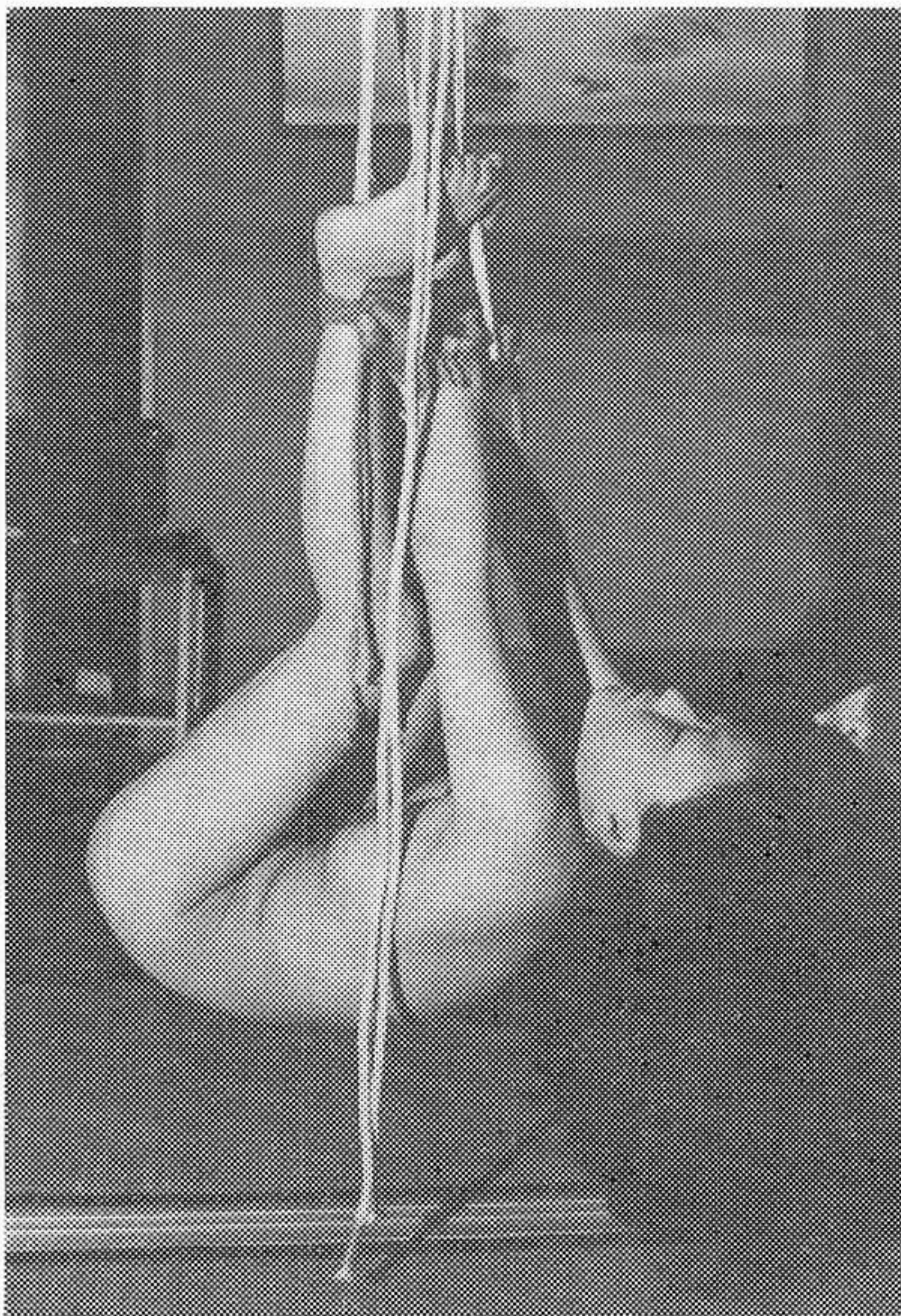
惚れ込んで身も心も捧げたいと感謝して、お返事を書きたくなるような素晴らしいお便りを願います。

ここ当分、私はアパートの一人住居の自由な身ですから、北海道から九州まで、どんな遠いところへでも責められにまいます。今までの私は、余り外出しませんでしたので、地理にくわしくはありませんけれど、これからは、どんな所へでもまいりたいと思っています。時によっては、時間と場所をきめてその方と中間の地点で落ち合ってもロマンチックで楽しいと思います。

私ががりついて帰らないで、と泣きながらお願いしても、私の手をふり切って冷やかに帰ってゆかれるような魅力的なS男性の方が、私の目の前に現われますことを神様に願います。今まで、私にお便りを下さった方々は、残念ですが私の気持を動かしてくれませんでしたし、熱心さにほだされて、渋々お逢いした方々も、私の方からお断わりしたい方ばかりでした。

私が身も心も捧げつくしても悔いない程のS男性って、いられないのでしょうか。

その点、やはり奇ク誌上に文章を発表していられる辻村様や塚本様は、私の気持が最も



動く魅力的な方ですが、お二人ともお忙しくて、私のような小娘の相手ばかりはしておれないと、いくらお誘いしてもお部屋へも上がって下さらないのは残念です。せめてロマン派生様でも、私を縛りのモデルにして、奇ク誌上に文章を発表して下さらないでしょうか。いや、これだけ沢山の奇クファンの男性

の方がいらっしゃるのですから、きっと、私をうまく使いこなして下さる方が、どこかにおられるに違いないと思います。

私は、その方が私の目の前に現われるのを気長に待ってみたいと思います。先に私は、『被虐の初夢』という一文を書いて四月号に載せていただきましたが、(この文章を書い

ております今日は、まだ四月号は発行になっておりませんけれど) 私はその末尾で、「私の前に、白い馬にまたがった素晴らしいSの騎士が現われますことを念じながらペンをおきます」と一つの願いをこめて書きました。

四月号はまだ発売になっておりませんので私の『被虐の初夢』という文章に対しての反響はわかりませんが、私の理想とするS男性があらわれましたら、その方との体験談も書いてみたいと思いますし、また若し、その方が奇ク誌上に発表する文章を書かれるというのでしたら、私は全面的に協力させていただきます。

二、三日、寒い日が続いて、生駒山あたりに降雪があったという記事と写真が新聞に出ておりましたが、二月も中旬になって、やはり暖冬異変というのでしょうか。毎日、暖かい日が続いております。引越しも無事に終わり、新しい部屋に落ち着いてみますと、なんとなく被虐の虫が、またまた、頭を持ち上げてきまして、こんなつまらない私事を、くどくどと書いてしまいました。

また、SMプレイをする機会がありましたら、そのことなど改めて書かしていただきたいと思っています。



第四十四回

いけにえのかわをなめす
牲 皮 鞣 製

王宮の正階、親授官以上しか通ることの出
来ない、そのくせ、巾が二十メートルもある
石段の左手、そこに不浄門があった。

今、王宮の正門を入ってきた荷車が、この
不浄門の前に停まった。

畜位の裸女に荷車を輓かせて来たのは、つ
い先頃、任官したばかりのジャンヌだった。
はげしい調教に鍛え抜かれた美畜の、ひき
しまった裸身は、側に立っているジャンヌの
美事なプロポーションと比べても見劣りがし

ない位だった。いや、その盛りあがったアン
グロサクソン系の乳房は、かえってヴォリュ
ームではジャンヌを凌駕していたといっても
よいであろう。

今まで何度か触れてきたことだが、有明の
全くバカ気たと思える程の人種差別——そし
て有明独裁のこの国では、その馬鹿げたこと
が大マジメで実行されてしまうのが常だった
が、日本人、至上主義さえなかったら、どち
らをアヤメとし、どちらをカキツバタとする
か、人は迷うに相異なる。ジャンヌこと小林
敏子にとって、しあわせだったことは、日本
人に生まれたことであった。反対に、純粹の

イギリス美人であったことが、何の罪もない
この女性を家畜の境涯に突き落としてしまっ
ているのである。そして、今や両者の隔たり
は、気が遠くなるような距離になってしまっ
ていた。

粗食と、息をつく閑もない程の労働とで、
見ちがえる程、しなやかになった女体。それ
だけに一層、その女性的特質、胸のふくらみ
や腰の曲線が強調されてきているのだが、そ
れでも、記憶のよい読者は、すぐ思い出され
るに、ちがいない。

この物語の発端、ミセス・ウィリーのヨッ

ト「キャロリーヌ二世号」が遭難したとき、乗り合わせていたブリティッシュ映画のスクリプター、ジュリー・シェリバンの、なれの果てだったのである。(第二、六回、参照)

とに角、美人だった。そして、それ以上に才気で知られていた。それが今や一匹の牝馬にしか扱われていない。その教養や才智には一顧も払われず、ただひたすらに表面の裸体美と筋肉力だけが調教の対象となっている。ネプチューン号での航海中、セルの中に蹲り

前号まで「独裁主有明は全世界から誘拐蒐集した数千の美女に畜従隷従を強制している。彼女等は五段七階級に厳然と分類され、巧妙に管理される。二品中藤佐瀬直美は一夜、有明のなさを賜り、上臈に昇進した。上臈、一品位は親授官といって祕儀によって授与される。そして、生きた女体を生贄にする。犠牲者は最下層の物位女囚から選ばれる。宮廷には有明と貴和をはじめとする貴妃が住むが、この他、文官府、武官府が左、右に続く建物にある。訓練連隊は少し離れたレセプションエリア近くにあり、畜獸調教所に接しているジャンヌは、かつての全学連女斗士、お手つきの故をもって目ざましく昇進し、見習士官となった。

ながら日本語のレッスンを受けた。利口な彼女は、忽ちある程度の片言ぐらい話せるようになってしまった。その日本語でさえ、今の彼女には喋ることが出来ない。四六時中、舌を押える嚙は、彼女から発声機能を完全に奪ってしまった。日本語の教育は、彼女に話させることを目的としたのではなくて、単に命令を聞き分ける能力を与えるためだったということ。美畜は今更ながら思い知らされるのであった。

上体を直角に曲げたまま腰をシャンと引きあげていなければならぬ。(第29回イラスト参照) 実際のところ、そんな姿勢で「休息」させられているよりも、調教場で思い切り、責め駆けさせられている方が、まだしも楽だと思えるくらいだった。

ジュリー・シェリバンは今、美畜F-10二七号として再生した。もはや、美しい唇で才気煥発な会話をたたかわすこともなかったしよく手入をしたブロンドを風になびかせることも出来なかったけれども、その肉体は彼女が、かつて想像すら出来なかったほど、野性的発達を遂げた。彼女は、よく駆け、又、よく曳いた。そして、この能力だけが、今の彼女を計るモノサシだった。

それに、畜位の中にも資質に応じたグレードがあった。有明や貴妃たちの乗り料とされるものは、自ら最高の美畜でなければならなかった。だからといって、毎日の生活が多少なりとも楽になれるといった種類の格差ではない。かえって要求される条件は、ますます厳しく、調教も、より激しさを加えるであろう。それでも彼女たちが少しでも上位にランクされようと血眼になる理由は何だろうか。

それにしても惨めだった。人も賞め、自分でも秘かに誇らしく思っていたアノ輝くばかりのブロンドは、惜しげもなく刈りとられ剃りとられてしまっていた。あまつさえ、体毛の悉くを電気分解されて、それに関する限りは赤ん坊のようであった。しかし、彼女に羞恥を感じさせる余裕は全くなかったといっている。課せられる日々の苛酷な調教は、常にギリギリの限界に迫っている。後手錠は、まだいい。獣のように口だけを使って喰べるマズイ餌も、まだまだ我慢、出来る。何より辛いのは、僅かな睡眠時間を除いて、絶対に腰を下ろせないことであった。畜舎にいるときでも、スタンションに首根っ子をはさまれて

こんな人権を無視した畜生同然の状態に落とされていても、まだ、その中で競走心を失わないのは人間性の、何ともやり切れない本性だったかも知れない。しかし、それ以上に有明たち高位者の目に触れる機会が多ければ多い程、このような畜位の地獄から抜け出る希望が、それは、たとえ雨夜の星のようなものであったとしても、そのような希望を抱く可能性があり得るということを本能的に感じとっていたにちがいない。

「訓練B中隊、見習士官F-七五三号、イケニエを受領にまいりました」

ジャンヌが大声で申告するのを待ちかねていたように、重い金色の扉が開いた。

下使いの婢が数名、昔「人樽」といった大きな木樽を台車にのせて押し出してきた。

それが、ジュリーの曳く荷車の上に移される。四人が寄ってたかって、やっと持つ位の重さだった。轆（ナガエ）が持ち上がって、

ジュリーの股下を突きあげる。この国では牽引車馬の轆は、すべて一本轆、つまり美畜がそれを股の間にハサむような構造に制定されている。この場合、前はウエストに巻いた軛（クビキ）代りの革帯に接続され、後は後手

にロックした手錠に結び留められるから勝手にまたいで外すことは出来ない。いうまでもなく全裸で、その上、剃毛までされてしまった美畜は、いやでも、その肌を轆にジカに当てざるを得ない。デザインした有明の狙いもその刺戟を利用することにあった。つまり、それだけ用心深く、滑らかに轆を曳くように心掛ける筈だったからである。

荷車は背後にある。そして、轆に固定された美畜は後を振り返ることができない。ジュリーには、自分の曳く車に何が積みこまれたか判らなかった。たとえ、桶を見ることが出来たとしても中味を想像することは出来なかったであろう。ただ、不気味な不浄門の感じと人々の態度、そして、何よりもプーンと匂う血腥さから、荷物が、ありきたりのものではないことを早くも察知していた。このことは彼女の総身から血の色がひいて、ブツブツと鳥肌立ったことでも裏づけられる。

桶の中には、佐瀬直美の祕儀のためにイケニエに供されたスラヴ女。汚辱の血漿を噴騰させ、万斛の恨みを呑んで死んで行った哀れな女体が、今や身首を異にして押し込められていたのである。

「サア」

と言いながら、ジャンヌがジュリーの鼻輪に結びつけた曳き紐を軽くひっぱると、電気に触れたように荷車は動きはじめた。これとても調教の成果だった。軽く曳かれた鼻輪は痛いわけでも、何でもない。しかし、これは「進め」という命令を伝えていた。命令を拒否することは絶対に許されない。そして、これは、もう条件反射のようになってしまっていたのである。

屍骸を積んだ荷車は、暗く長い坑道をゴトゴトと進んで訓練連隊に到着した。この衛門にもある不浄門（向かって左手の小門）を入れて、直ちに作業場に運ばれる。ここで死体処理を行なうためだった。

訓練中のアマゾン女兵に死体処理を受け持たせるということは、少しでも彼女等に馴れる機会を与え、嫌悪感や罪悪感からの脱却を促進する目的があるからである。

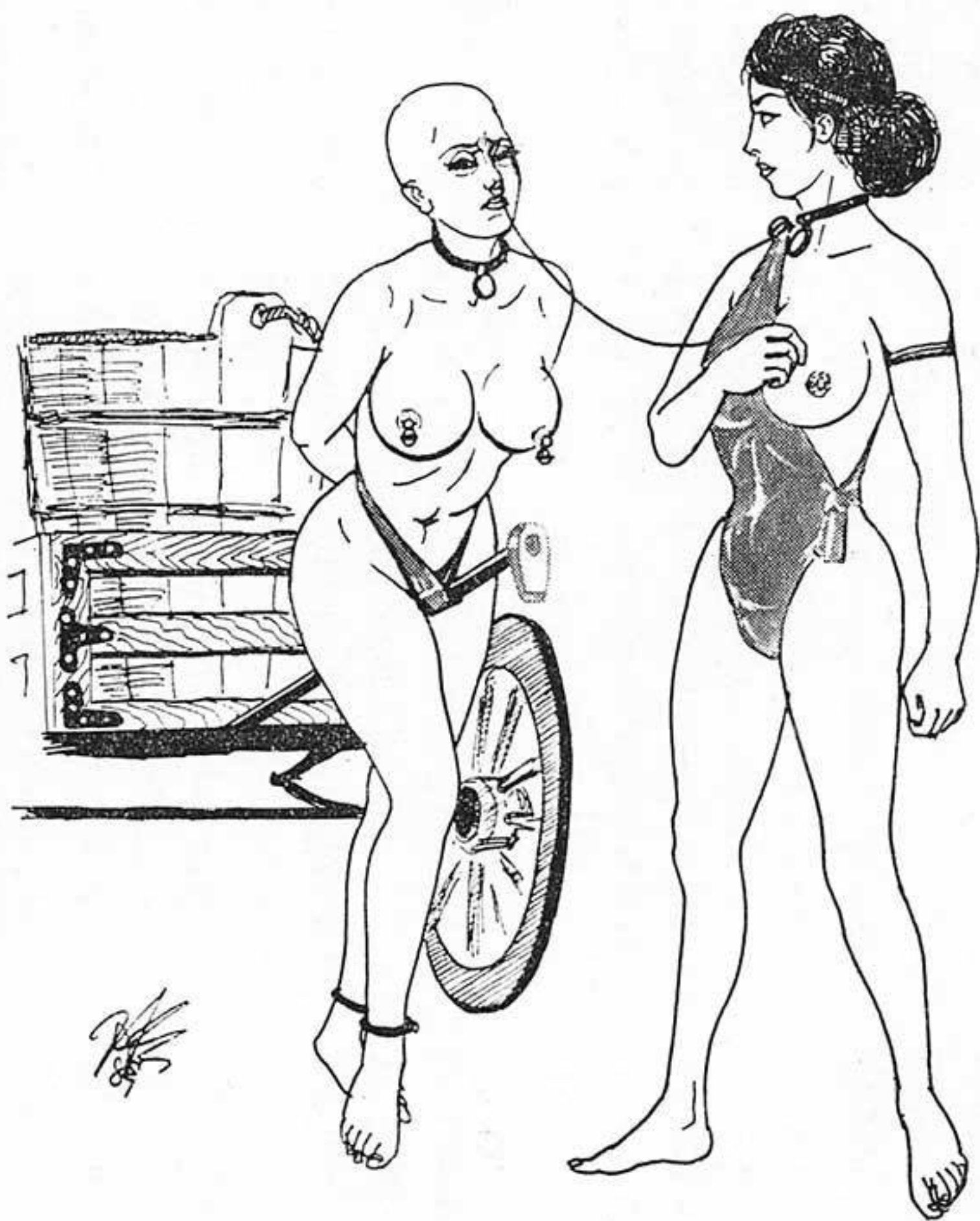
もう一つ。お局は、その名を冠した訓練中隊を組み合わされる習慣があった。たとえば夕霧の局には、夕霧中隊と俗称する中隊が訓練連隊の中で定められているのである。もちろん、文官であるお局に命令権があるわけ

はないし、勤務場所も違うのでめったに会うこともないわけであるけれども、お局は自分でデザインした中隊旗を授与することになっていて、中隊は、その光栄のために、お局の名に恥じないよう努力するわけである。

その意味で中世ヨーロッパ騎士道、はなやかなりし頃の姫と騎士との関係に似ている。

佐瀬直美が新しい局を創設することになると、当然、その名をいただく中隊が指命されなければならぬ。正式には新局の就任式のとくに発表されるわけだけれども、たまたまジャンヌの属するB中隊に内示があったのである。そして又、たまたまジャンヌの分隊が死体処理の当番になるよう命令されたという次第であった。

作業場は手術室の様なタイル張りだった。中央にコンクリート製の台があり、桶から出された首なしの屍体が、その上にドサリと投げ出された。



つい数時間前までは、あたたかい血が通っていたヴォリニームのある肉体だった。

はじめて屍体というものに手を触れた望月レイ子などは、不快感と恐怖のあまり、失神しそうになり、上官の木村上等兵に臀を、しただか叩かれてしまった程だった。

こうした出来事が、かえって皆の気持をシヤンとさせたのかも知れない。望月レイ子ば

かりではない。ジャンヌをはじめとする、十九名が十九名とも与えられた職務の、あまりにも恐ろしいのと、地上的な定義で「屍体を冒瀆する」という意識に悩まされていたからである。

一方のドアがあくと、全身を真黒なタイツで蔽った予備員が数名出てきた。死体処理の専門家たちである。四十才から五十才ぐらいの白人女ばかりで、皆プロレスラーのように逞しく太っている。

「コム、ヘル（こっちへ）」

一人が男のようなシワガレ声でジャンヌたちを呼び寄せた。

言葉からドイツ人であることが

解る。ユダヤ人の皮を鞣して、スタンドのシールドなんかを作った国民である。そんな意味では、この仕事などウツてつけの技術者なのかも知れない。

ジャンヌの分隊は、この女たちの指導を受けながら、スラヴ女の皮膚を剥がし始めた。脊中の刺青が大切なのだ。完全剥製を作るのとちがって、今日のは一番、簡単さ——とド

イツ女がジャンヌに言って聞かせた。

大勢の力はえらいもので、たちまち、スラヴ女の皮膚は、ソックリ剥ぎとられ、大きな平板の上にピンで張りつけになってしまふ。皮の内側を丁寧に洗いもう一度、不要なところをとり去り、なめらかにする。刺青、特に有明と佐瀬直美の混合血液で刺したサインの部分などは、ま新しいので、色どめのプラスチックを吹きつけたりする。

その上で、重クロム酸の溶液に漬け、更にこの国独得の特殊還元剤で仕上げると、ソフトで自然な色の鞣皮が出来上がるのである。

一方、皮膚を除いた死体は解体され、大鍋で煮た上、あとで、若紫中隊全員が一口ずつ喰べさせられる。

わか むらさき どう ばん
若 紫 幢 旛

ゾツとする吐気と斗いながら肉屋のような人肉解体の仕事を、やっとの思いで続けている望月レイ子は、放りっぱなしにされていた美畜、つまりジュリー・シェリバンが、そつと近づいて来たのも気がつかなかった。

ジュリーの方はといえば、望月レイ子が、さつき木村上等兵に叩かれたときから、ハッ

キリ気がついていたのである。ともにカンヌの映画祭に参加したのが運のつき、例の「希望号」遭難事件に巻き込まれて、とうとう、この国に誘拐されて来たのだ。毎日、凡そ人格を認められない畜馬の生活を強制されているジュリーにとって、こんなところで望月レイ子に会えたのは、何か心に窓が明いたような気持だった。美畜は、畜位の境涯も忘れ夢中で望月レイ子に、自分のことを認めさせようと努めた。

ところが望月レイ子は、前にも言ったように仕事に気をとられていたし、又、丸坊主の真っ裸、すっかりスリムになったジュリーでは、まさかそれが彼女だと直ちに認識出来なかったのも無理ではなからう。

そこで、ジュリーの方からコッソリ近づいて行こうとしたのだった。

大体、ジュリーには多少レズ気があつて、カンヌにいたときから望月に近づきたいと願っていた。又、アラビア海で脱走未遂の望月が制裁を受けているときも、一部始終をセル内のテレビで見せつけられて、スッカリ昂奮し、且、濡らしてしまった記憶が、鮮かに残っている。

リン、リンという鈴の音に、ふと振り返ったレイ子は、目と鼻の近くまで来ている美畜に気づいた。荷車を引きずりながらである。

白人女らしく、ハチ切れそうにふくれ上がった豊満な乳房が、先ず目に、とび込んでくる。そして、まだ子を産んだことがないのだろう桃色の乳輪。そのまん中に埋もれて、あんなにか分らないような小さな乳首。その双の乳首に、無理矢理に鈴が、糸で結んである。そつと身体を動かしただけでも、豊かな乳房が揺れる。それにつれて、鈴はリン、リンと非情な音色を立てるのである。

心から気の毒に思う望月レイ子だった。自分などより、よっぽど、いい肉体の持主なのに、日本人でないという、ただ一つの理由でこんな目にあわねばならないのか。それに比べれば自分などは、まだまだ、幸せなのかも知れない。

「アー、アーウ」

声帯をロックされている美畜では、獣のような喉音を出すしかない。そして、犬や猫が主人に対してするように、汗に濡れた裸身をすり寄せてくるではないか。

思わず二、三步、下がった望月は、まじまじと美畜の顔を見つめた。

記憶に残る面影だった。だが、何という変わりようであろう。羨ましいとさえ思っていた金色の髪は一本も残っていない。カンヌの浜辺で最少限度、上下を被っていたビキニの水着すら、かなぐり棄てて、日光に惜しみなく皮膚を曝していた、あの素晴らしい肢体。胸乳や腰の線は、むしろ豊かになっているようだが、それは他の部分の贅肉が落ちた故かも知れぬ。それにしても、まだ、あどけなさを残していた丸ぼちゃの顔が、すっかり引きしまって、かえって硬玉のような美しさを現わして来ている。一体、これが自分の記憶に残る「彼女」なのだろうか。

「ジュリー？」

そっと呼んで見る。

鈴の音が激しく鳴った。美畜の両眼から、どっと涙が流れだすのが見えた。

「何をしているッ！」

はげしく、こづかれて

「ハイッ」

と不動の姿勢をとる望月。

いつの間にか内藤伍長が側に立っていた。

美畜は鼻綱を激しく曳かれて作業場の入口の方に連れ出されて行った。

「ア、ア、アウー……」

必死に吼える声は、内藤班長には鼻綱を曳かれた痛さからだと思われたろうが、望月レイ子には美畜が誰に何を訴えようとしているか、よく分かった。

思わず二、三步、出ようとするところを、やさしく腕を押さえつけた者がある。

ジャンヌこと、新任の見習士官、小林敏子だった。

「あの女を知っているのね。でも、ここでは我慢するのよ。今に又、きっと会わせてあげるから」

自然に目がしらが熱くなる。こんなにやさしい上官は今までになかった。彼女には、よく分かっていて、もし彼女が美畜を追って出たとしたら、職務を放棄したといって、内藤班長から、こっぴどく締めあげられるに相異なかった。そうした危険から、ジャンヌは彼女を救おうとしてくれたのである。

望月は涙の雫を手の甲で拭いて、再び肉切り包丁を取り、おぞましい人肉解体の作業を続けて行くのだった。

数日してスラヴ女の鞣皮は見事に出来上がった。生きた皮膚そのままの透き通るような

白さ。その中央にクッキリと彫り出された紋章と勲記。

先ず紋章には六人の裸女が画かれている。そのうち、三人は後手のまま地面に正座して頭を垂れている。物、畜、奴婢を表わす。その上に立ち上がって裸身を反らせている女が三人。これは天地人の位を示して、同時に心技体三誓願の具現を意味する。三人の女が振りあげた腕は、有明を、かたどった赤い双頭の鷲によってしっかりと、その足で押えられている。真っ赤な翼は双曲線となって、六人の裸女を包み込むように、かぶさっている。紋章の下に漢文の勲記が刺青されている。

下者材質絶佳而

常修心技体誓願

恪勤精励善適心

依爰親授壹品位

以可補任上臈也

これを訳すと「下記の者、材質優秀であつて、常に心技体の三誓願を修め、恪勤精励、よく、心に適（かな）った。よって、ここに一品の位を親授し、上臈に補任（ふにん）するであろう」という意味になる。

そして、右臀の位置に「勲記を与う」として、佐瀬直美の肉体番号と俗名、さらに左臀

には前回でも述べたように、有明自ら混合血液で刺青したTAのサインが赤黒く浮き上がっている。

指の先まで丹念に剥離して開いてあるから腕や足、そして胴なども三倍以上の巾になっている。この鞣皮は肩の線でT字型の旗竿にくくりつけて幢旗の様な飾り旗に仕上げるわけである。手、足の部分の皮は房飾のように垂れたままである。つまり、首の部分と、そして佐瀬直美が削ぎとった二つの乳房を除いて、スラヴ女の皮膚は完全な一枚皮として再生されたことになる。

幢旗としての加工が、すべて終わり、旗竿が出来上がったところで、B中隊、すなわち新設の若紫中隊全員の宣誓式、および奉呈式が行なわれる。

下士官、兵は原則として、営門から出ることを許されないから、若紫の局自身で訓練連隊へ出向かなければならない。しかし、正式の編成がなされていないから、扈從の中臈以下も、新

年寄、夕霧の局から借りることになる。

親授官および、その扈從は、中央正階を通ることが許されている。とにかく、あのいまましいカプセルも、有明の執務室に預けて携行の義務を免ぜられる。カプセルを入れるポケットは、これからは有明のために、いつも清い空室にしておかなければならないからだ。

若紫の局は身も心も解放されて、すがすがしい気持で宮殿の中央正階を降りた。

宮廷府の高官は、宮殿内では全裸が普通だが、外出するときは特別にデザインされた薄物を纏う仕来りになっている。若紫は一品位をあらわす紅色、随伴する夕霧の中臈は紫色などと、位階に応じて色分けされた衣裳が鮮かな原色を交錯させていた。

高官でも二品以上は乗物に格式があった。武官には戦車があるが、文官は轎（きょう）と定められている。もちろん、位階に応じて装飾などの仕様が、ちがってくる。輿丁となるのは言うまでもなく四人の美畜であった。長柄は肩にかつぐのではなくて、ジュリー・シェリバンの装具と同じ胴ベルトで股下に吊るように固定されるのである。長柄をおろすと大体、膝立ちの高さになる。

訓練連隊長、伊藤香織は大佐だから二品相当官である。したがって若紫の局の方が上級者に



なるから衛門まで出迎えなければならない。

めずらしく八文字に開いた正門を、若紫と随行の中藤を乗せた二台の轎が静かに入って行くと、軍楽隊が歓迎の曲を奏でる。一行は本部の車寄せまで、真っ直に進んだ。

「よくいらっしました」

若紫に手を差し出しながら、伊藤香織は、うやうやしく言った。六十四年、入国の伊藤に比べて、若紫、すなわち、佐瀬直美は六十五年の登録である。年令にしても二十五才の伊藤に対して、若紫は未だ二十才。そして、つい半月程前、正確には有明のお手がつく前日までは、伊藤の方が先任の二品だったのである。しかし、一夜あければ、このように身分の差は確然と離れてしまう。身分制度の厳格なこの国では、こうした出来事が当たり前のように起こる。すべてが、有明の考え一つに左右されるのであった。文官と武官の場合は接触も少ないから、大して失望しないけれども、文官同志、又、武官同志の場合、追いつ越される羽目になった者の惨めさは想像に難くない。

小川晶子中隊長以下、B中隊百八十名が全裸の「正装」で堵列して出迎える中を、伊藤

連隊長に先導された佐瀬直美は、うす衣の裾を優美に引きずりながら、一人一人、心をこめて閱兵して行った。善きにつけ悪しきにつけ、中隊の全員は彼女に精神上的の従属関係を結ぶことになるのだと思うと、直美にとって新兵の端にいたるまで、おろそかに見過ごすわけには行かない。

最前列中央に、新しく出来上がった若紫の幢旗を奉持した、ジャンヌが直立している。鞆製の辛い仕事に奉仕した功をもって、彼女と彼女の分隊は旗手の役目を仰せつかる光栄を与えられたのである。

——なんという美しいひとだろう。

ジャンヌは思った。そして、この若い新局に仕えることに、身のうずくような歓びを感じていた。それは、有明に対する思慕の念と不思議に矛盾せず、かえって、そうすることによって有明との距離が、いくらかでも、せばまるような感じ方だったのである。

佐瀬直美の方でも、

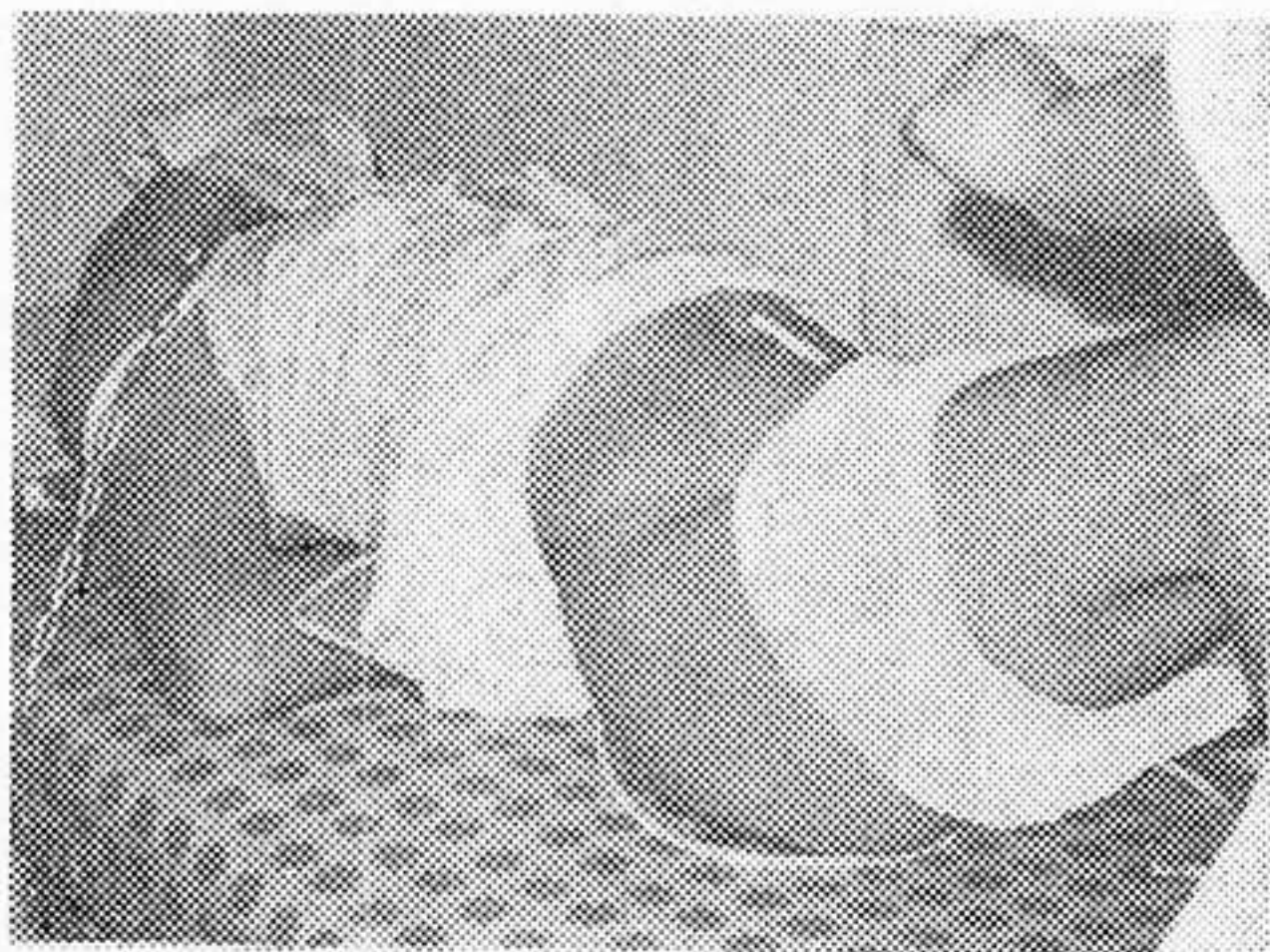
——これが有名なジャンヌなのか。

と、目をみはる思いだった。ジャンヌが宮殿で含頭礼を授けられたとき、佐瀬直美は月のもので出仕を遠慮していた。それでジャンヌを見るのは今日が始めてだったのである。

閱兵が終わると佐瀬直美手ずから、あらかじめ用意されてあったスラヴ女の人肉（それは中隊全員百八十名にわたるように、ほぐしてデンプのような干し肉に加工され、分隊の数だけボール箱に包装してあったのである）を取りあげて中隊長を呼び、その小片を口に入れてやった。中隊長は三分して三人の小隊長、さらに小隊長は三分して三人の分隊長へと、先ず夫々の口に入れてやってから伝達させたのである。数分で中隊全員がスラヴ女の人肉を食べ終わった。それは、あたかもキリスト教の儀式に似ていた。しかし、聖体といってもパンであるのに対して、これは正しく人の肉だ。さしものアマゾン女兵たちも顔色をかえ、目を白黒させながら、やっこのことで呑み込むのだった。

そのあとで、若紫という草書体の字を染め抜いた中隊旗を中隊長に授与し、代ってジャンヌの手から幢旗を預かるのである。（正式には有明から任官式るとき、与えられる）

さすがに、佐瀬直美は蒼白になった。止むを得なかったとはいえ、自分の殺した女の鞆皮である。その上、旗竿の先についていた玉は、何と彼女が削ぎとった乳房を二つ合わせて芯を入れた縫いぐるみだった。（未完）



<告白>

マゾヒスト

の

手紙

安田隆夫

永い年月を悶々としながらも、良識を失わずに辛抱してきたおかげか、ようやく四十一年になって、空想のみの世界から脱皮することの出来た私は、実際に味わうファンタジックな世界に生き甲斐を覚え、現実に関心を感じつつ責めと凌辱を想起しながら、次の機会を待つことの出来る現在の恵まれた状況に、心から幸福な男だと喜んでおります。

以下は、私に責めを施して下さる女性へ出した手紙ですが、誌上公開させていただいたと思います。尚、同封の写真は、その女性、八田嬢に撮していただいたプレイの記録の内

のごく一部です。出来るだけ掲載して下さるようお願い申し上げます。

八田千恵子様

思わぬ御無沙汰になりました。昨年、暮の二十四日に急用で上京いたしました。が、とんぼ返りの忙しさで、お寄りすることも出来ませず、せめて、お声だけでもと思い、お店へお電話したのですが、お休みになっておられガッカリ致しました。

十二月の初めに上京した折に貴女に海老貴めにさせていただいた時の写真は、現像だけは

しましたが、焼付けをする暇がなく、ネガを蛍光灯にスカシてルーペで眺めながら、貴女様への思慕にふけています。

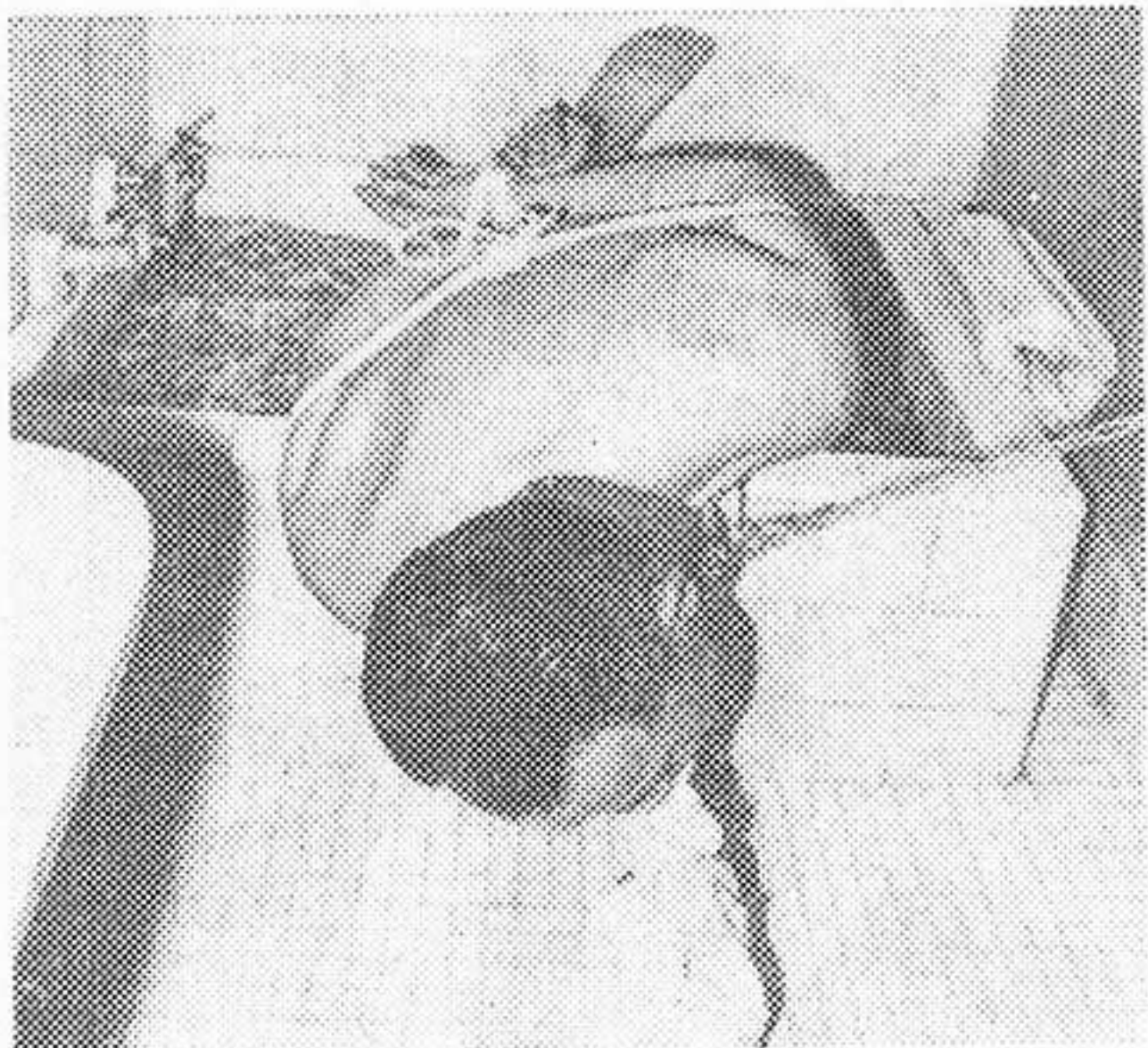
あの日、挨拶もそこそこに裸にむかれ、嚴重な後手に縛られた上に、別のロープで、あぐらに組んだ足首をくくられて首に回され、グイグイ引きしまられた時の苦しさで嬉しさは、今でもありありと思ひ出せます。

あの激しいベルトの鞭がお尻にさく裂して現実に引き戻されるまで、私は夢幻の境をさまよっていたのです。

貴女は、続いて私の首に犬の首輪をお掛けになり、クサリを引いて私を横倒しにし、お足の先で、私のぶざまな体を弄んで下さいましたね。私は、あの時、たいへん嬉しかったのですが、タイルに押しつけられた腕が、折れるかと思うほど痛かったのです。思わず声をたててしまったのも、そのせいでした。

それがウルサイといわれて、貴女は私の口にメンスバンドを押しこんで、徹底的なベルト打ちで私を叩かせ、その上に冷水をぶちかけて、痛打でほてった体を冷やして下さいましたね。その直後に、「今度はコレさ」とおっしゃって火の点いた煙草を二本、左右の鼻孔に挿し込まれましたが、吸えない煙草をいやだに鼻で吸わされる苦しさ。

全く貴女は拷問の天才です。さぞ見苦しい腕き方をしたと思いますが、



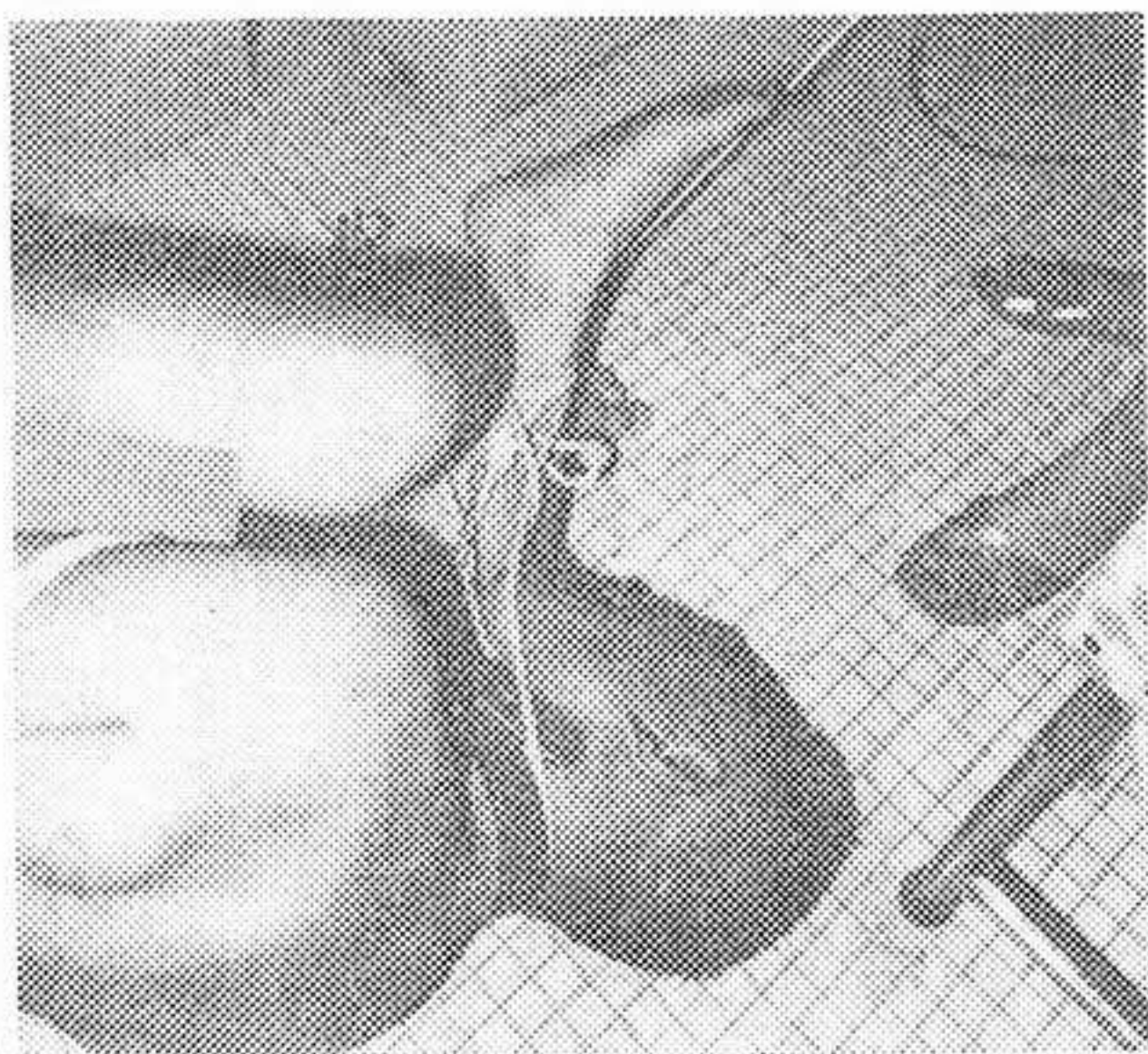
メンスバンドの猿ぐつわの上に、鼻の両孔を煙草の栓で閉じられたら、自然とあぁなってしまうことは、多分、貴女様はご承知でなされたと思います。その次の、私の尻と太ももに吸いかけの煙草を置いて、「どのくらい我慢出来るものかしらね」と含み笑いなさるながら、火をつけては吹き消したマッチの燃えかすを、所きらず置かれたのは、本当にお試しになった責めだったのでしょうか？

いずれにしろ、私めは死ぬ思いでした。嚴重にくぐられたあの縄目があったお蔭で、また、メンスバンドの猿ぐつわのお蔭で、貴女のご不興を買うような羽目には至らなかったものの、心底から逃げ出したかったのです。でもしかし、最後の、あの苦しみの中で与えて頂きましたお恵みのひとときで、正直いって多少、行き過ぎだとお恨みに思っていた気が夢散してしまい、今日只今に至っては、その節の火傷の跡をなぞりながら、いまひとたびの情に駆られている次第です。

貴女は、本当に怖い。そして、思いやりのある素晴らしいお方です。

その何よりの現われは、今、私が素肌にまとっているこのスリップとメンスバンド、それにこのストッキングです。ピッタリと私の肌に吸いついていくこの艶めかしい感触は、あの節、私が思わず喜びの声を挙げた貴方からの賜りものです。わざわざ、私のために「着古し」ておいてくださったお心遣いは、感謝の他ございません。

この私にとりましては何ものにも勝る贈物を賜りました時、全く夢中になって素肌に着せていただいた私を、貴女様は笑いながらご覧になり、「よく似合うわよ」と云われ、私にいろんなポーズをとることをお命じになっ



てはプツと吹き出され、笑いこらげておられたのは、多分、私の姿がコッケイだったからと存じます。ですが、あの節の私の心中は貴女様がお笑いになればなるほど、悦びが高まっていったのです。とうてい、ここに書き現

わし得ませんが、本当に天にも昇るような感激に、うち慄えつづけていたのです。そして、その感激は「サア、手を後ろに回して」と、お命じになったお言葉によって更に高まり、ギリギリと喰い込む後手縛りの緊縛を戴いたことによって更に更に舞い上がったのでした。

今のところ、何日という予定はまだお知らせ出来ませんが、なるべく早く上京したいと思っております。どうぞその節にも、前回以上に責め上げて戴きますよう伏してお願ひ申し上げます。

貴女様の奴隷、隆夫拝

カット・岩波大介



|| 懸賞入選読切創作 ||

性

奴

記

城 崎 恭 介

伴圭介には、こどものころから、奇癖があった。

留守番をいいつけられて、たった一人、しんとした家のなかにとりのこされると、用心深く戸締まりをしてまわり、母の鏡台の前に立った。

鏡に尻を向けたポーズで、ズボンを足もと

におとすと、かすかな動悸がした。するするとパンツをおろして、臀部が外気にふれた瞬間、カッと血がのぼって、耳たぶがあつく感じた。圭介は、膝のところにパンツをためてしばらくは、おのれの双丘を、なでまわしていたが、やがて、おもいきりよく、パンツから足を抜いた。

股目鏡をして、のぞきこむと、鏡には、決して肉眼ではみることのできぬ、自分の秘所が映しだされていた。しばらく観察してから

やおら指の腹をつかって、静かに愛撫を試みた。かすかな刺激も、そこに集った神経の叢葉によって、身体の深奥にまで伝えられ、指先が、腸管にしのびこむと、快美は、いっそうたかまって手足の力がぬけそうになった。

圭介は、指だけでは満足できなくなり、エンプツのキャップを使った。一旦、見えなくなった異物はゆるゆると姿をあらわし、懸命におしとどめようとする努力も空しく、ポトリと彼の足元におちた。

こどもが、砂いじりに熱中するような執念深さで、それをくりかえし、あきるまで、たのしんだ。

鏡に尻を晒して、四つん這いになったポーズそのものが、少年に犯罪者のようなスリルと、羞恥にみちた悦樂を与えた。

「お行儀よくなさいよ。お父さまは、学校の先生なんですからね」

と、もの心のついた時から、母親に口やかましくいわれた。世間への体裁ばかり気にして、彼には優等生らしくふるまうことを要求するくせに、自分は、やれ地域の集会だ、婦人会の旅行だと、家をあげてばかりいる母親に復讐するような気持で、孤独な時間をたのしんだのだ。

高校教師をしていた父は、圭介にほとんど関心もなく、めったに口をきいたこともなかったし、十も年上の兄は、これまた受験勉強に熱中して、世代の違う弟を無視していた。

おもてに、あそびに行っても、内気で、社交下手な彼は、仲間はずれにされるのがおちだったし、自然、だれもない家にとじこもって、秘密の悦樂にふける、風変わりな少年になってしまった。

フロイドの学説によれば、幼児期には、肛

門性欲があるとされているが、母親の愛もうけず、姉妹もなく、ガールフレンドをもつには内気すぎた圭介にとって、肛門への愛は、まさに性欲の変形であり、はかりしれない奥行きをみせる神秘の扉は、異性そのもののように、甘美な魅力を秘めていた。

「いたくないよ、そうツとやるから、がまんするんだよ」

「ほらほら、はずかしがるから、うまく行かないんじゃないか！」

「もっと、力を抜いて……そうそう。ゆっくり、やってあげるからね」

圭介は鏡に向かって、やさしく声をかけながら、加虐者と被虐者の一人二役を演じた。

彼の脳裏には、尻をさらした美少女と、それをいじめる圭介少年の姿が、二重映しになり、しまいには、美少女のほうに、自分の心が移ってしまつて、かすかなあえぎ声とともに、舌たらずな少女の声色をつかった。

「いやあん、いたた……圭ちゃん、やめて」

「だめよ。……みえなくなるまでよ」

「ああ、ひどいわ！ 圭ちゃん！」

責め手と、犠牲者のいりまじった幻想の中で、圭介は紫色のもやにつつまれたような深い陶醉境をさまよい、もはや彼我の区別はな

くなっていた。

足許におちたキャップは、異臭を放った。

圭介は、それが幻の美少女のもののようにおもえて、胸がときめいた。いきなり、キャップを鼻孔に押しこむと、ぐりぐりとこすりつけて、『美少女』のおもかげを、しのんだ。

「ごめんね、いたかった。今度は、やさしくやってあげるからね……」

圭介には、肛門のへりに黒子のある、生白い臀部が、そこだけ別の生きもののようにおもえて、そつと掌をはわせた……。

圭介が、小学校四年生になったばかりのころ、いままで風邪ひとつひかなかった母親が腎臓をわずらって、病床に臥した。

自宅の奥の間が、母の病室にかわり、とまりこみの看護婦が、つききりで看護にあたるほど重症だった。

圭介は、クレゾールの匂いがたちこめた病室の隅に、暇さえあれば、すわっていた。

「まあ、ほんとにお母さんおもしろい坊ちゃんだこと！ かんしんねえ」

と、年よりの看護婦は、目をうるませて、圭介をみやったが、たしかに母の病状を心配する気持もあったが、それ以上に、秘密なよ

ろこびを味わう期待があった。

「坊ちゃん、ちょっと、おもてにいったてちようだいね……」

看護婦が、小さなついたてを、ふとんのすそに引きまわし、煮沸した導尿用の金属の管をもつてあらわれると、圭介は胸をワクワクさせた。部屋を出るふりをして、廊下のすみうづくまり、そっと病室の中をうかがっている、ついたてのかけで、みえがくれる看護婦の動きにつれて

「あッ。い、いたい！」と、きれぎれに呻く母の声がした。

「奥さま、お小水をためたら、命とりですからね、少しがまんしてくださいよ」

看護婦は、職業的ないかめしさで、てきぱき、仕事をはこんで行く。

圭介には、ついたてのかけで、何がおこなわれているのか、おおよその想像はついた。看護婦の手に入っていた金属の管が、母親の体内に、強制的に挿入されて行く光景を脳裏にうかべて、圭介は自分が施術されているかのように、興奮し痛覚を味わった。

「あッ、ああ！」

眉をしかめ、首を左右にふる母親の姿が、ついたてのかけから、よくみえた。女子大卒

の学歴をかさにきて、いつも、ふちなし眼鏡の奥から、知的エリートでございと誇らしげに見下ろしていた、威厳のある母親のおもかげはすでになく、あまえん坊のこどものように、「いや、いや、いたい！」をくりかえすただの女患者にすぎなかった。

「ほーら。やっぱり、こんなにたまってましたよ。どう、気分がよくなったでしょ？」

と、看護婦に、こどもをあやすような口調でいわれると、すっかり身をまかせたようすで、「ハイ、ハイ」と少女のように、はにかんで、母親は目を閉じた。

圭介は、そんな母親を、感動の眼をもって凝視していた。いままで遠くにいた母親が、同じ性癖の虜になって、すぐそばにおりてきたみたいな感動だった。そして、自分もあんな風に扱われたいと、羨望の念がむらむらとわいて、処理に困った。

母親は、最後には、二週間ほど入院し、意外にあっけなく、あの世へ行ってしまった。

母を喪っても、圭介は、それほど淋しいとは、おもわなかった。母親のいないのには、なれっこになっていたのだろう。母親がわりになって、口やかましい父や兄のために、買物に行き、料理をつくってやらなければなら

ないのが、十才のこどもにとって負担ではあったが、他人があわれにおもうほど、こういうことを苦痛にはおもわなかった。

圭介にとって、学校から戻って、父や兄のかえってくる夕飯時まで、思う存分、したいことがやれるのが、うれしかった。

母の病気は、かけがえのない贈りものを、圭介にのこしてくれた。

ガラスの浣腸器である。

薬箱の底に、半濁色の器具は、淫靡な輝き帯びて、かくれていた。圭介は、息のつまりそうな興奮をおぼえた。

圭介は、その器具をつかんで、風呂場に走った。午後の陽光が、ガラス窓をこえて、豊かにさしこんでいるのが、隠微な饗宴に、ふさわしくないようにもおもえたが、ためらわず、下半身を裸にした。

洗面器に、わき残しのぬるま湯を張って、ゴシゴシ、石鹼の泡をたてた。

嘴先を液につけて、シリンドラーを引きあげて行くと、ギシギシと、ガラスのきしむ音が指先にひびいて、心地よかった。

角力の土俵入りのように、どっしり腰をおとして、圭介はかたずをのんだ。

——しゅる、しゅる、しゅる……

シリンドーを、おしあげて行くと、意外に力強い抵抗感があったが、石鹼液は、冷たい感触とともに、体内にのみこまれて行った。

圭介は、一気に注ぎこんでしまうのが惜しくなつて、シリンドーの端をおさえたまま、風呂場の鏡の前へ移動した。

くるりと尻を向けて、股ぐらから鏡の中をのぞきこむ。そこに映る異様な光景。圭介には、それが、看護婦に導尿されてあえいでいた、母の姿のようにおもえた。

やがて観念して目を閉じたまま身をまかせてしまった、母をまねて、圭介もかたく目をつぶって、一気にシリンドーをおしあげた。

石鹼液は、獲物を目指す猟犬のように腸管を走った――。

二

十七才のときに、圭介は、家出をした。

圭介が、高校をそっちのけにして、劇団エンゼルという人形劇団に入って、人形づくりに熱をあげていたのをみつけて、父は激怒した。昔から父とは理想のちがうことを、圭介は承知していたので、「出て行け!」といわれたのをきっかけに、さっさと家をとびだしたのである。

劇団エンゼルは、テレビで連続ドラマをやっているような花形劇団で、寮の設備もあり人手不足でもあったので、家出してきた圭介を、あっさりひきうけてくれた。

圭介の仕事は、工房で、人形をつくることだった。人形劇が好きでも、人前に出るのは得意でなかった圭介には、だまって人形をつくる仕事のほうが、性にあっていった。

工房の責任者は、フクちゃんという女性だった。圭介よりは五分年齢も上で、二十五、六にはなっていたはずだが目鼻立ちのくつきりした童顔で、ボールのような乳房と、はちきれそうな尻のまろみが、発育ざかりの女学生のように、はつらつとしていて、年齢よりは若くみえた。

フクちゃんは、圭介のことを、

「おい、ソクラテス!」

と呼んで、かわいがってくれた。あんまり口もきかず、作業場のすみっこにすわって、もじやもじやの髪の毛をかきむしりながら仕事をしている圭介が、哲人ソクラテスのようにみえたらしい。

口には出さなかったが、実のところ、圭介は、フクちゃんに、淡い恋心をよせていた。

父の反対をおしきって、家出という非常手段に訴えたのも、フクちゃんのそばに、ずっといたいとおもう気持ちを、おさえきることができなかったからだ。

フクちゃんは、人形づくりにかけては、神さまのような人だった。まるで、男のようにぞんざいな口をきき、女王のようにふるまっていたが、フクちゃんにまさる才能はなかった。ので、だれも非難するものはなかった。

圭介は、男っぽいフクちゃんが、無性に好きだった、いつも荒い縞模様のワイシャツのすそをからげて、前でしぼりあげたラフなスタイルで、ぼってりした腹部を露出させ、七分のGパンをはいた臀部を、くりくりさせながら歩く姿は、かえって蟲惑的だった。

「ちえッ、まだわかんないのかよッ!」

名人肌のフクちゃんは、気にいらないと、物差しの縁で、殴りつけることがあった。ぴしッと、手応え十分にやられると、赤いみみずばれができ、時には血がにじんだ。

たいていの男なら猛然と反抗の氣勢を示すのに、圭介は山羊のように柔和な眼で、フクちゃんを仰いだ。フクちゃんの怒りの底に、やるせなく光る愛情が、うれしかったのだ。「ふん、やっぱり変わってるよ。あんた、ソ

クラテスだね！」

殴られても、少しも動じない圭介をみて、フクちゃんは、かえって気味わるがった。

「伴クン、あんたを見込んで、話があるの。つきあってくれない？」

フクちゃんにデイトを申し込まれたのは、工房に入ってから、半年ほどたつたことだった。作業場の片すみによびよせられて、秘密めかして耳うちされると、圭介はすっかりあがってしまい、

「はい、結構です」

と、先生の前に出た高校生のよう、すなおに、うなずいた。

新宿のOという喫茶店でまっていると、指定した時間よりも、大分遅れて、フクちゃん、かけこんできた。

「ごめん、ごめん。仕事の打ち合わせで、おそくなっちゃったア……」

フクちゃんは、席につくなり、水をガブガブ飲み、たてつづけに煙草をふかした。そんな仕草の一つ一つが、精気にあふれて活気があり、圭介には新鮮に映った。

「今年の秋に、あたしのリサイタルをやるうと、おもってるんだ。何から何まで、あたし

一人だろ、絶望的な気分になっちゃうよ」

と、絶望とはうらはらの、うきうきした調子で、リサイタルに賭けた彼女の夢を語りはじめた。『アバンギャルド』とか『未来志向的』とか、むずかしい横文字や漢語が、わんさと出てくる議論に、いささか食傷しかけたころ、急に態度を改めて、

「今日、あんたに来てもらったわけを、ズバリおうか。あたし、モデルになってほしいんだ。つまり、あんたの身体を提供してもらいたいの」

と、圭介の瞳の奥をじっとのぞきこんで、フクちゃんは、意外な申し出をした。

「モデル？」圭介は、完全に動揺した。「だけど、ぼく……りっぱな身体してないし、やせっぽちで、ちんちくりんだし……」

「ううん、誤解しないでね、あたし、あんたのセックスを、モデルにしたいんだ」

「セックスっていうと、つまり、そのう、ぼくの……」

話は、唐突な方向へ発展した。

フクちゃんの企画によれば、リサイタルのよびものは日本神話からとった『日本誕生』という人形劇叙事詩だった。その冒頭にでてくる、イザナギ、イザナミノミコトは、男女

性の生殖器をかたどって、つくることになっていた。その男根人形のモデルになれ、というのである。

「ただのヌードでよけりゃア、モデルの紹介所へ電話一本すりゃ、くるんだよ。だけど、あたしのイメージは、爆発寸前のナマナマしいやつなのよ。こういうモデルはむずかしいよね。うっかり刺激して、あたしにとびついてこられたりしたら、おちおちデッサンもできないだろ……だから、あんたを見込んで、たのんでみたのよ」

「だけど、ぼく……まだ女の人をしらないし……」

「イザナギノミコトだって、はじめは童貞だったのさ。あたしのねらいは、そこにもあるんだよ。第一に、童貞であること。第二にがまん強いこと。第三に、あたしに手出しをしないこと……こういう条件に、あんたはぴったりだとおもうんだけどねえ……」

フクちゃんは、おもわせぶりに片目をつぶって、煙草の煙を、圭介の顔に吐きかけた。

——フクちゃんの前で、秘所を開陳する。

圭介は、目のくらみそうな羞恥心と、羞恥心の底からわきあがってくる嗜虐性とを、同時に体験した。しかし、嗜虐性のほうが、羞

恥心よりも次第に勝ってきて、今までねむっていた被虐本能が、一挙に昂ぶってくるのを抑えることができなかった……。

「やらせてください……」

圭介は、蚊のなくような声で、いった。

フクちゃんのマンションは、閑静な郊外にあった。

二LDKというのだろうか、中央に十畳ほどの洋間があり、画学生のアトリエのように油絵や、彫刻風のオブジェが、ところせましとならんでいた。

「きたなくて、ごめんね」

自分の部屋では、さすがに女にかえって、くいちらかしたパンくずや、脱ぎ捨てたままになっている衣服を、かたづけはじめた。

病的なくらい清潔好きだった圭介は、フクちゃんのもたついた仕事ぶりをみてみると、手助けをせずには、いられなくなった。

「ああ、ちょっと……部屋の真中を、もう少し広くしてよ。ソファが、ベッドになるはずだから、やってみてくれない。それから、写真用のランプがあるから、ベッドのすそのほうを照らすように、セットしてちょうだい」

圭介が働きだしたのを見ると、フクちゃん

は、すぐに横着をきめこんで、あれこれ指図しはじめた。

——ぼくの処刑場をつくってるんだ。

圭介は、前の大戦の時に、中国人の捕虜に自分を生き埋めにする穴を掘らせたという話を、何かの本で読んだことがあったが、現在の自分は、その捕虜と同じ境遇にあった。

「すまないけど、ベッドの上に、テーブルクロスを敷いてよ。モデルさんが若いから、洪水をおこすといけないわ」

フクちゃんは、モデルさんと第三者的表現をつかったが、圭介には、それがひどく適切におもえた。

「ベランダの物置に、ロープがあるから、もってきておいて。モデルさんがあばれたら、手に負えないからね」

圭介は、女王の命令に従って、哀れな犠牲者を拷問する獄卒のつもりで、黒ずんだロープをはこびだした。

「もういいわ。シャワーで、身体をあらってらっしゃい」

フクちゃんは、最後の命令を下した。

——圭介は、暗黒の中にいた。

ソファベッドの上に、仰向けさまにして大

の字に括りつけると、フクちゃんは、グアムテープで、圭介の眼を覆った。

視覚を奪われると、他の感覚が、異様に冴えるものである。

ライトの熱線が、カッと、下腹のあたりを襲うと、たちまち圭介の被虐本能が反応しはじめた。

フクちゃんは、圭介の身体には一指もふれずに、ベッドの周囲を忙しく歩きまわって、スケッチをしたり、写真をとったりしているらしい。スッスツと紙をこする木炭の音や、カシャ！ カシャ！ と、たてつづけに、シッターを切る音が響くと、フクちゃんの注視の眼を知覚して、モデルの圭介は、ふるえおののいた。

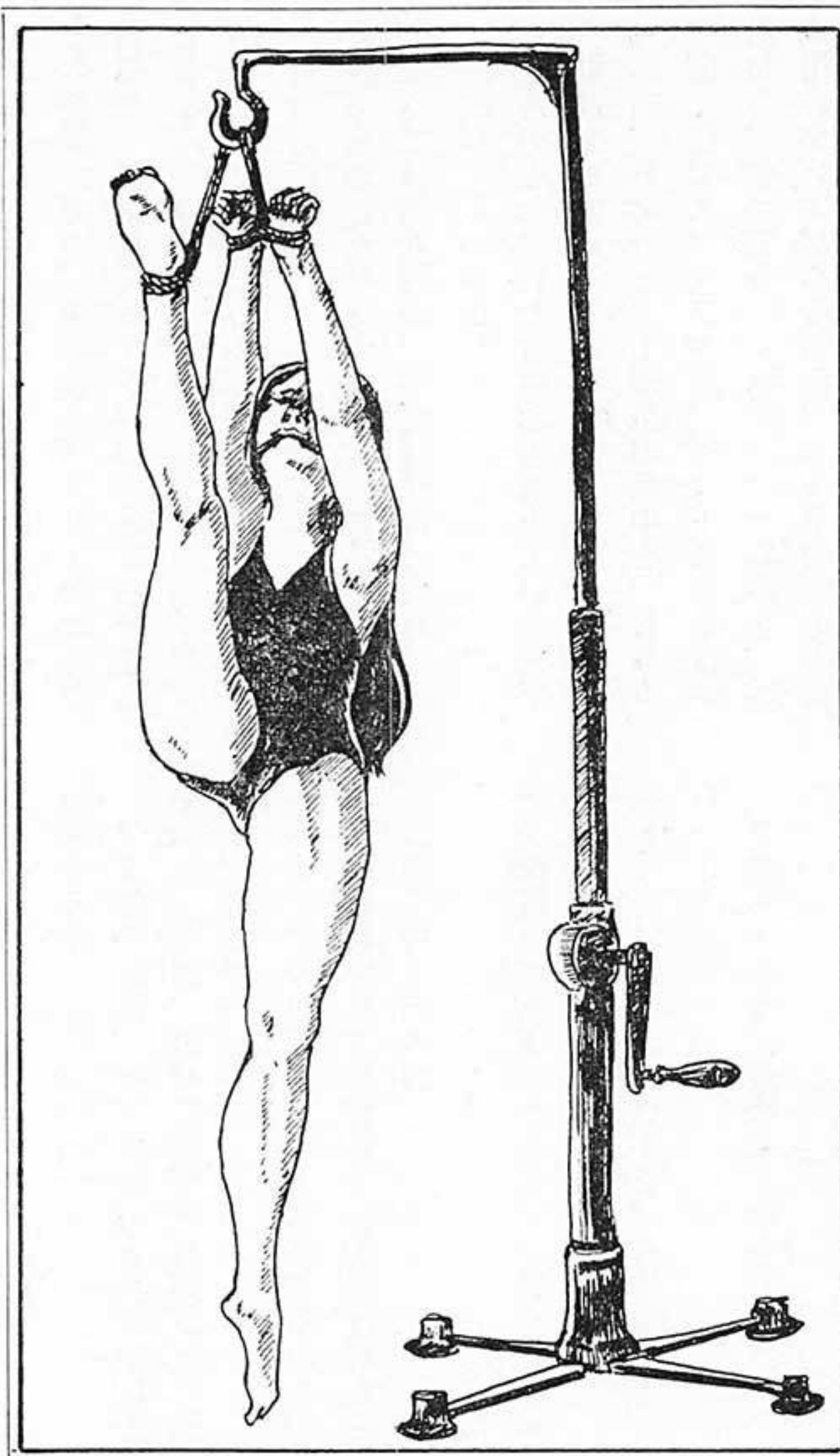
聴覚がなまってくると思覚が冴えてきた。かすかなカビの匂いが地下牢の虜囚を連想させた。フクちゃんは、想像以上に、激しい体臭をもっていた。圭介の鼻は、レーダーのようになり、その体臭によって、フクちゃんの位置を嗅ぎ分けた。

「どう、苦しい？」

フクちゃんは、圭介の枕元にきて、気づかわしげに、訊ねた。

緊縛によって、手足はかなりしびれてきた

……イメージギャラリー……『女体のキシミ』……志羽利也……



にまわった。

「ほ、ほ、ほ……目玉を剥いて、にらんするわ。おうおう、まるで発射寸前のロケットみたい……だけどね、楽にはしてあげられないのよ。お前のご主人さまったら、もっといいめてくれですってさ……」

ふきつける息によって、フクちゃんの顔が真上にあるのが、わかった。

まるで、猫が鼠をじらすように、フクちゃん、息をつかって、なぶりはじめた。唇がすれすれまで近づいたかとおもうと、スツとはなれて、執拗にくりかえされた。

圭介は、はじめて、身体をよじらせた。

生温い息をかけられるのは、唇をあてられるよりも、辛かった。暗黒の中で襲われる不安と期待で、ふきつけられた箇所は、灼きこげたように、疼いた。

「う、う……」

圭介は、足の指を反らせて、呻いた。

いま一息というところで、スツと責め手にかわされると、圭介の意志とは関係なく、息吹きに灼かれた箇所は怒り狂って、宙でわなないた。

「まあ。よろこびすぎて、涙を流してるじゃない！」

が、身体の内부는、もえるように息づき、厳しい責苦を求めている。

「なんともない……もっと……」

「もっと……どうしたの？」

「ひどくしても、かまわない」

「やっぱり、あんた、マゾね」

マゾというコトバが、圭介の被虐感を、衝撃的に昂めた。

——そうだ、マゾだ。マゾだ。マゾだ。

圭介は、口では答えなかったが、体ぜんたいに新しい活力がみなぎり、切なくゆれて、肯定をあらわした。

「ふ、ふ……あたしのカンが的中ね。劇団に入った時から、どうもその気があるような気がしてたんだ……」

フクちゃんは、あらためて、ベッドのすそ

フクちゃんは、何をおもったのか、圭介のそばをはなれて、ゴソゴソ探しものをはじめた。

「伴クン、あんた、男拓って、しってる？」

男と拓本の拓って書くの」探しものをつづけながら、フクちゃんは、声をかけた。「魚拓なら、しってるでしょ。釣った魚を記念して半紙に墨でなぞって、魚の形をうつしておくやつ……男拓っていうのも、おんなじようなもんなんだけどさ」

全部いわれなくても、圭介は察しがついていた。はたせるかな、墨をする音が、ギシギシ、きこえてきた。圭介は、新しい責苦を想像するだけで、四肢がこわばった。

「男拓なんてものはね、とりたたくって、自分じゃなかなかできないもんよ。童貞時代の思い出に、傑作をつくってあげるから、おとなしくしてんのよ」

フクちゃんは、縛りかたを少しかえて、足首の縄をほどくと、竹の棒のようなものをわたし、両端に括りつけると、圭介の頭部めがけて、強く引きあげた。強烈な開股縛りである。

「ほ、ほ……どんな男でも、こんな格好させると、おしめをかえる時の赤ちゃんみたいに

見えるもんだね」

フクちゃんは、そんな冗談をいいながら、いきなり霧吹きで、圭介の股間に水をかけはじめた。

やわらかい和紙がはりつけられ、やがて、墨を含んだ毛筆が、その和紙の上をなぞりはじめた。

和紙を通していても、その擦ったさは、耐えがたい。ちよつとでも動こうものなら、

「がたがたすんじゃないよ。ばか！」

と、臀部に平手打ちをくわされるので、圭介は唸りながら、こらえた。

「紙にうつすと、妙な形になるもんだ……だけど、ここんとこのぼかし工合は、なかなか芸術的だよ」

フクちゃんは悦に入って、ひとりごと独語をもらしながら、更に毛筆を動かす。

「ああ、もう、もう……」

圭介は、うわ言のように、喘いだ。

「どうしたんだよ、牛じゃあるまいし、もうもういってたって、わからないよ」

フクちゃんは、いじわるく訊ねた。

「だめです、ぼく、だめです」

「何がだめなの？ はっきり、おいしい」

「ああ。だめ、だめですウ……」

圭介の四肢には断末魔の痙攣がきていた。フクちゃんは、一気に和紙を剥ぎとった。

三

新宿のアングラ劇場で上演された、フクちゃんの人形劇リサイタルは、たいへんな評判になった。

——男女の象徴が踊り狂う怪奇の舞台！

と、新聞や週刊誌に書きたてられ、三日間の予定が、二週間に延期されたほどだ。

圭介も、一千円也の入場料を払って、連日のように見に行った。

入口で売られているプログラムの表紙に、べったりと、圭介の男拓が刷りこまれているのが、ショックだった。

幕があがると、暗黒の舞台に、赤いライトをあびて、巨大な男根人形が、うごめいていた。スピーカーから流れる吼えるような男の声につれて、汐吹き鯨のように、どろどろの溶液を噴きあげるのが、壮観だった。

やがて、男根人形のおびかけに応じて、女陰人形が、いくつも出てきた。それらは、自由に空中を浮遊し、やがて杭にこびりつくフジツボのようにからみつき、嬌声をあげなが

ら踊り狂った。

吼えたける叫びは、やがて、唸りとなり、喘ぎにかわり、息もたえだえの悲鳴となり、それに応じて、あわれ男根人形もナメクジラのように、消滅していった……。

女陰人形が四散して、パツと舞台があかるくなると、圭介の男拓が何かのしみのようにホリゾントに映し出され、やがて、それが日本列島の形になって、『日本誕生』の第一幕は終わるのである。

超満員の若い観客は、まつわりつかれて悶えぬく男根人形をみて、腹をかかえて笑いころげていたが、圭介は、むしろ厳肅な面持でその末路を見送っていた。

まして、彼の男拓が、日本列島に移りかわって行く光景に接すると、急に、国旗を仰ぐオリンピック選手のように、舞台に向かって敬礼したくなった。

リサイタルの大成功は、フクちゃんに積年の野望を実現させる、きっかけをつくった。フクちゃんは、さっさと劇団エンゼルをやって、独立し、人形工房『赤い人魚』を設立したのだ。

その際、劇団エンゼルの工房から、腕っこ

きの人形づくりを、六名ばかり引っこぬいたのが、凶運のはじまりになった。

劇団エンゼルが、陰湿な妨害を開始したのである。

フクちゃんにしてみれば、マスコミや、ジャーナリズムで、あれだけさわがれたのだから、よもや仕事がとれないとは、かんがえもしなかった。彼女の名声にあやかろうと、向こうのほうから、仕事がやってくるぐらいにおもっていたのだ。

ところが、向こうからくるどころか、テレビ局や雑誌社をめぐりあるいても、一つも仕事はとれなかった――。

劇団エンゼルのさしがねである。

マスコミ界では、人気番組をいくつもかかえている有名劇団と、いかに才能を喧伝されたとはいえ、たかだか、かけだしの個人的グループとでは、対抗できるはずもなかった。

虚名に酔ったフクちゃんの敗北である。

世間の反応が冷たいのをしると、グループの半数はやめてしまい、フクちゃん必死のたてなおし活動にもかかわらず、二カ月目の給料が不払いだとわかると、『赤い人魚』に居のころうとするものは、一人もいなくなってしまう……。

——こんなうわさを耳にして、いさみたったのは、圭介である。

何の前ぶれもなしに、フクちゃんが姿を消してしまってから、呆けたような毎日をすごしてきた。

自分は、モデルを提供したオブジェにすぎなかったのだ、とようやくあきらめて、彼女が栄光の道をすすむように、かげながら祈っていた圭介ではあったが、失意のどん底にあるときいて、だまっていられなくなった。

圭介は、姫の救難に敢然とおもむく騎士を夢みて、フクちゃんのところをよせるため、劇団エンゼルをやめる決心をした。

「何だ、ソクラテスじゃないか。今ごろ、何の用？」

圭介を迎えたフクちゃんは、あきらかに酒をのんでいた。

昼間だというのに、ボタンをかけちがえたネグリジェを、しどけなくまとい、眠たげな眼を無理に見開いたような表情で、冷たく圭介を見すえている彼女は、かつての健康優良児のような、はつらつさが失せて、一種病的な妖艶美をにじませていた。

「ぼく、劇団をやめたんです。フクちゃんの

仲間に入れてもらおうとおもって……」

圭介は、どもりどもり、ようやくのことでいった。

「ばかっただね、あんたは……あたしはオケラのパーだよ。劇団をやめたか、どうだかしらないけどね。冗談じゃねえ、そんな責任まで負えるもんかい！」

伝法な口調だけは、昔のままだった。

いったん口をきくと、あとはもう、とどまるところがなかった。劇団エンゼルの悪口から始まって、テレビ局のプロデューサーや、雑誌社の編集者の無能ぶり、見識のなさかげんをこきおろし、しまいには、自分がいかに不当に扱われたかを、涙をまじえて、圭介に訴えだす始末だった。

「S局のディレクターったら、あたしに、こわれた人形の修理をやらせようというんだぜソクラテス……ふざけるねえ、死んだってやだってどなって、とびだしちまったよ。わかるだろ、この気持？」

フクちゃんは、大粒の涙をこぼしながら、凄まじい憤怒を示した。

かつての自信や誇りは、あとかたもなく踏みにじられ、辛うじてのこったものは、空しい虚栄心だけのようであった。

「つまり、ぼくは……」圭介は、フクちゃんの自尊心を傷つけまいと、必死になった。

「お金をかせぐために、来たんじゃないくて、つまり……お金なら、自分でかせぎます。フクちゃんとぼくの分ぐらい、アルバイトでもやれば、かせげますから……」

「ほおん、すると、あたしの亭主にでもなるつもりで、きたのかよ、ソクラテス」フクちゃんの論理は、完全に飛躍した。「ちえッ、わらわせるんじゃないよ！ お前みたいな青二才に、やしなわれるくらいなら、首吊りでもなんでもならア……」

フクちゃんは、乾いた笑い声をたてた。妖気漂う笑いが、すっとおさまると、ギョロリと野獣のように、目が光った……それは、催眠術師のように、青味を帯びた、不気味な光だった。

「あたしには、わかってるんだよ……お前の卑しい性根がね。お前は、いじめてもらってきたんだ。あたしに強姦されたくて、ここに来た……そうだろ、ソクラテス」

圭介は、雷にうたれたように、沈黙した。錐のようにつきささる恐怖と、切ないまでの被虐の願望が、身体の内芯で、妖しく交錯した……。

「強姦してあげる、ズボンをお脱ぎ！」

圭介は、一瞬たじろいだ。

しかし、体奥からつきあげてくる被虐の本能に負けて、夢遊病者のように、立ちあがった――。

――それは、残忍な責めだった。

シャワーをあびてもどつてくると、フクちゃんは、ゴムでつくった精巧なオナナの模型をもつて、まっていた。

「わかるかい、これ」フクちゃんは、不遠慮に鼻先につきつけた。「よくできてるだろ。これは、あたしのをモデルにつくったんだ。……リサイタルの人形の原型さ」

圭介の脳裏には、『日本誕生』の場面が、鮮かに、よみがえった。これをデューフォルメしてあるが、たしかにあの人形のおもかげがのこっている……。

「ほ、ほ……びっくりするこたアないよ。舞台じゃ、お前そっくりの人形が、いじめられただけど、こんどは、ほんものをつかって、やってみたくなったんだ。あたしが、みてあげるから、こいつをつけて、いじめられてごらん……リハーサルが、うまくいったら、あたしのほうも、ほんものをつかってあげるか

ら」

圭介はフクちゃんにせきたてられて、その模型を手にとった。あまりみごとな出来栄なので、ただちに、圭介は熱くなった。

そのゴムの模型をみていると、あたかもフクちゃんのような気がして、むらむらと快感が昂まってきた。おもわず、手をのばそうとすると、

「おまち、手をつかっちゃ、いけないよ」

と、フクちゃんにさえぎられ、両の手首をロープで括られて、頭上高く吊りあげられてしまった。圭介は、バンザイをしたまま、うらめしげに、フクちゃんをみた。

「なにを、ぐずぐずしてるんだい！ お前の人形だって、手足ぬきのノッペラボウで舞台に上がったんだよ。人形に負けないように、じょうずに、やってごらん」

フクちゃんは、椅子を引きずりだして、圭介の正面に、でんと腰を下ろした。

あさましいその肢体を眺められているだけで、たしかに性感の昂まりは、おこった。しかしゴムになじんでしまうと、どうしてもあるポイントをこえることができなくなった。

圭介は、自由になっている脚をつかって、何とか捕捉しようとあせったが、それは、す

るりするりと身をかわして、圭介の努力を嘲けた。

「ああ、手を……つかわせて！」

疲労困憊して、圭介は叫んだ。

「だめ、だめ……足をつかうのだって、反則だから、こうしてやるわ」

フクちゃんは、竹の棒をもちだして、圭介の足もとに、かがみこんだ。そうして、ゆっくり時間をかけて、棒の両端に、足首を括りつけた。さらさらと、フクちゃんの髪が、腿のあたりを撫でると、刺激飢餓をおこしていた圭介は、大仰に声をあげて、身悶えた。

「ふ、ふ……あたしが、ミストルコなら、いっぺんに楽にしてやれるんだけどねえ……お気の毒さま」

フクちゃんは、さんざじらしておいて、すっと身をひいた。

「試合再開よ。しっかりおやり！」

臀部に、平手打ちを一つくらわすと、フクちゃんは椅子のほうへ行ってしまった。

両手両足の自由を奪われて、もはや、尻をくねらす以外に、術はなくなっていた。

「何よ、そのかっこう！ おしっこでもしたいの！」

フクちゃんは、たのしそうに、毒づいた。

四肢に加わる苦痛は、時間の経過とともに耐えがなくなった。痛みのほうに神経が行くと、命令された戦闘どころではなくなった。

「ちょッ、降参するのは、まだ早いよ。さあさあ、しっかり、しっかり……」

フクちゃんは、目ざとく活力を失ったのをみつけて、乾いた絵筆をもち出して、ゴムの外へ穂先をはわせた。

「あー、る、る、る……！」

圭介は、舌の根を痙攣させて、唾液をしたらせた。虫のはいのぼるような快感が、ゴムを通してしみ入り、走った。

「よいやさのよいやさ！ よいやさのよいやさ！」

フクちゃんは、圭介の必死の努力にあわせて、手拍子をとって、はやしたてた。

圭介は、キリストのように、空を仰いだまま、忘我の境をさまよいだした。

幾度か、目の奥で、真紅の火の玉がもえあがり、おとろえた。

しかし、命令完遂には至らないまま、拷苦にみちた時間は、無限につづくようにおもった。

——性の無間地獄である。

四

圭介が、マンションにすみついてしまっただけから、フクちゃんは、たてのものをよこにもしない、自堕落な女になってしまった。

掃除、洗濯、料理、買物など、主婦の仕事は一切、圭介がうけもち、おまけに生活費かせぎのために、校正のアルバイトまではじめた。はた目からみれば、ずいぶん酷使されているようにみえたらうが、当の圭介は、母の死後こういう仕事をやらされていたので、なれっこになっていた。

フクちゃんは、ベッドの中で食事を取り、一日中、テレビをみてくらしした。

「あんまり、ゴロゴロしていると、ふとりすぎになるから、美容体操でもするか……」

そんな独り言をいって、ベッドを出る時もある——美容体操とは、圭介を責めることだった。

彼女の栄光を奪い去ったものへの復讐の念がこもって、惨鼻な責めだった。

「男のくせに、何よ！ これくらいで、ジタバタするなんて、みっともないよッ！」と、満腔の敵意をこめてどなりつける時、

その「男」は、劇団、テレビ局、雑誌社……いや、それらを含む現代社会そのものの代名詞となって、彼女の胸を熱くこがした。

圭介は、犠牲の羊だった——。

彼の、それだけが男を証明しているようなシンボルに、生理用のナプキンを幾重にも巻きつけられ、ジャーの湯を、間欠的に注がれたこともあった。尖端に、たたりたたりと注がれると、じわじわと湯がしみこみ、火傷への恐怖から、総毛立った。

フクちゃんは、十分に濡らしておいて、こんどは、ドライヤーで、一気に乾燥をはかった。もうもうと立ちのぼる水蒸気とともに、全体に業熱が襲って、逆海老に括られた圭介は、助けを乞いながら失神しかけた。

表皮をつまみあげられて、クリップではさまれるのも、ずい分こたえた。クリップの数が増すと、皮膚そのものはかくれてしまい、ちらちらと、金属の飾りをぶら下げたまま、犬のようにはわされて、鞭で追いたてられた。

チャンチャンコと称する皮製のカバーがかけられるのも苦しかった。

カバーには、あみあげ状に紐がとりつけてあって、コルセットのように締めあげること

ができる。こうして、緊縛してしまうと、充血状態が容易に去らず、長時間の責めを可能にした。

鼻輪の鎖と『チャンチャンコ』の紐を連結されて海老縛り状にたたみこまれ、絵筆による操り責めをうけた時は、快感と苦痛が入り乱れて、おもわず脱糞したほどである。

圭介は、性の奴隷の役割を、喜々として演じた。しかし、性を仮借なきまでに責めたてられながら、一回も、フクちゃんと性交渉をもったことがなかった。

しかし、圭介は悦虐の測をのたうちまわりながら、純化され、神聖化されたフクちゃんの性を、たしかめていた。それは、虹色のものやの中にひそむ、現世を超えた、美しい性であった——。

ある意味で平和この上もない生活に、一大波瀾をもたらしたのは、堂守 勝という人物からかかってきた電話が、きっかけだった。

「天城福子女史は、おるかね？」

圭介が電話にでると、横柄な口調でいう、五十がらみの野卑な男の声だった。

圭介が、だまっていると、

「おれは堂守 勝という風俗評論家だ。ちょ

----- イメージギャラリー『鎖のキシミ』M・S・生 -----



っと、電話にでももらいたい」

と、カサにかかった、いいかたをした。

不承不承、受話器をとったものの、ほんの数語かわすうちに、フクちゃんの顔色はパツと明るくなった。

「まあ、いやですわ。おほ、ほ……」

と、くすぐったそうな高笑いとともに、も

じもじ腰をゆすって媚態を呈すありさまだ。

圭介は、不快な面持で、そんなフクちゃんを見守っていた。

虎が猫になるというけれど、男を男とも思わないフクちゃんが、十代の小娘のように、

はしゃいでみせたり、はにかんだりするのは異常なことだった。

「圭坊、仕事がいったよ。ちょッ、チャンス到来、四番バッター登場とござーいだ！ふ、ふ……待てば海路の日和かな……」

電話を切ると、指をパチンとならして、おどけたウインクをしてみせた。

「商談、商談……あたし、ちょっと、でかけてくるからね」

フクちゃんは、純白のパンタロンを着こんで念入りに化粧をすると、鼻唄まじりの、うきうきした調子で、小走りにマンションをでていった。

——あの電話の主は、なにものだ？

圭介の胸裡に、疑惑の雲が、拡がった。

その夜、フクちゃんは、もどってこなかったのだ——。

翌日の昼近くになって、フクちゃんは睡たげに、まぶたをはれあがらせて、ふらふらしながら、帰ってきた。

「どこへ行ってたんだよ、昨夜……」

圭介は、とがめだてするような口調になった。しかし、フクちゃんは、どすんとベッドに仰向けになって、

「話は、あと……ねかせてよ。ねむくて、ね

むくて、死にそう……」

と、うわごとのようにいうと、すーすー、いびきをかきはじめた。

かすかに微笑を浮かべて、観音さまのように柔和な寝顔である。

圭介は、毛布をかけてやろうとして、ふと手首の痣に気がついた。

縛りあげた痕だ——圭介は緊張した。

パンタロンの上衣の胸をはだけると、首から乳房にかけて、生々しいロープの痕が、二筋、三筋、おりかさなるようについていた。

そうして、白い肌のいたるところに、キスマークや針を刺した傷痕や、ロウソクの滴りなどが、ところせましと、散乱していたのである。

「フクちゃん、おい、フクちゃん！」

圭介は、とりみだして、フクちゃんの身体にしがみついた。

「せんせえ……やめて……あーん、もうゆるして……」

昏々とねむりこけた、フクちゃんの唇をついて出たのは、ハスキーな嬌声だった。

圭介は、ストラックスを脱がしにかかった。

すんなり伸びた形のよい脚にも、あちこちに醜い斑点がのこり、吊るし責めにでもあった

のだろう、足首と膝の周囲には、紫色の痣がくっきりと、のこされていた。

圭介は、悪魔的な兇暴さで、足首をつかむと、一気に開伸させようとした。

「ああん、もうやめて……フウコ、もうだめよう……」

夢うつつで、フクちゃんは、鼻をならしつづけたが、圭介は、騎虎の勢いで、容赦なく力をこめた。

今まで圭介に裸身すらのぞかせようとしなかったフクちゃんが、むしろ責め手の気をそるように、じわじわ力を抜いて行ったのが印象的だった。

そうして圭介が見たものは、腿のつけ根にこびつりついた血の痕、あきらかに破処女の証だった——。

圭介は、床に臥して、号泣した。

その次の日から、フクちゃんは、椅子ともしゆりかごともつかぬ、奇妙な道具の制作に、偏執狂的な熱情を傾けだした。

スケッチや、設計図をみせられた時から、淫靡な責め具であることは、察しがついた。

西洋の弓のように彎曲した二つの枠に、首枷や足枷が、横にわたされ、お伽の国の馬車

の車輪をはずしたような骨組だった。

フクちゃんのはりきりぶりとは、うらはらに、圭介は、さっぱり気がすまなかった。

口に出してはいえなかったが、この間、のぞきみたフクちゃんの秘密が、どす黒い澱みとなってわだかまり、圭介の心を暗くした。

「さあさあ、納期は決まってるんだからね、はりきってやってちょうだいよ！」

と、快活にハッパをかけるフクちゃんは、かつて劇団エンゼルの工房に君臨した、人形づくりの神さまにもどっていたが、せっかく築きあげたフクちゃんと圭介の隠微な結びつきは、目にみえて稀薄になった。

青天の霹靂のようにころがりこんできた仕事、二人の仲を引き裂き、冷却させて行ったのは、否めないことだった。

自堕落な毎日を送っている間は、なんとかして、かつてのフクちゃんにもどってほしいと、心底おもいこんでいた圭介だったが、ことうやうな淫猥な秘具をつくるのに、うつつを抜かしているフクちゃんを見ると、傷つけられた自尊心の痛みに身をこがしながら、圭介をいたためつづけた過去の彼女のほうが、ずっと気高く、凜然としていたようにも、おもえてきた——。

そんな圭介の気持ち知らぬげに、フクちゃん、猪突猛進、わき目もふらずに、制作にうちこんでいた。

家具につかうような、カシの一枚板をつかって、弓形の彎曲部や、首枷、足枷となる部分をつくるのが、圭介の仕事だった。

こういう部分にも、フクちゃんの芸術家としての才能は、遺憾なく発揮され、彎曲部には、ヴァイキングの旗印のような奇怪な図案が彫りこまれ、枷となる部分には、ふっくらした合成レザーを張りこんで、痛苦を和らげその代りに圧迫感を強める工夫が施された。

弓の絃の位置に、枷を支える棒が渡され、弓と弓との間は、梯子状に円棒で連結されると、ちょうどシーソーのようになった。

首枷と手枷のために、大小三つの穴をくり抜いた、厚さが四センチもあるかというカシの板が一方にとりつけられ、二つの穴をあけた可動式の枷が、逆の部分におさまると、さすがに西洋の中世をおもわせる荘厳な芸術品となった。

責め具の形状から察して、首と手を同時に枷にかけられた罪人は、弓状の彎曲に沿って身体を折り曲げられ、他端にある足枷で捉えられる仕掛けになっているらしかったが、こ

の責め具のポイントは、彎曲部の底部に仕組まれた、合成ゴムの責め棒にあるようだ。

その部分は、電動式になっていて、いろいろ複雑な動きをするらしく、制作にとりかかると、フクちゃんは、堂守なる人物に、しばしば電話をして、教えを乞いはじめた。

対話の内容から判断して、風俗評論家などという肩書は、まっかな嘘で、堂守 勝は、性具や責め具を開発して、それをメーカーに売りこんで歩くブローカーのようだった。

今度の責め具は、凝った芸術品をつくりたかったらしく、『日本誕生』の舞台をみて、フクちゃんに白羽の矢をたて、しかも、マスコミ界からしめだされて、にっちもさっちも行かなくなるまで待って、こういう話をもちこんだあたりに、ブローカーらしい老獪さにじみ出ていた。

圭介は、堂守の正体を知るにつけ、そんな卑猥な男の意のままになっているフクちゃんが、うらめしかった。

彼女は、奇怪な責め具もろとも、堂守の掌中にのみこまれていた。

仕事の打ち合わせのすんだあとに延々と続く痴語のかずかずが、フクちゃんと堂守の関係を如実に、ものがたっていた。

「いやん、エッチな先生！ フウコ、ポーツときちゃうから、やめて！」

「ばか、ばか、それはおあずけだといったのは、先生のくせに……」

「フウコ、もう『泣き泣き』しないわ。おとなにしてるから、うーんとかわいがって……しびれたいの、あたし」

圭介は、能面のように顔をこわばらせて、いかなる拷問にも勝る、コキユの苦悩を味わっていた――。

五

奇妙な責め具は、完成した。

カシの木の木地を生かして、黒ニスで仕上げた北欧調の風格は、王者の誇りを備え、畏怖させるような威圧感があった。

「すごい！」

仕上がりを見に、始めてフクちゃんのマンションに姿をみせた堂守は、感嘆の声を放ったきり、しばらくは、たちつくした。

圭介が想像した通り、堂守という男は、評論家というよりも、中小企業のおやじといった風采で、絹のマフラーを首に巻いたり、黒眼鏡を胸のポケットにはさんだりして、せい

ぜいスマートにみせようとしていたが、まるで、ちぐはぐで滑稽な、田舎ものだった。

「先生、もっとよくごらんになってよ。フウコが、いちばん苦心したとこ、ほめてくれなくちゃ、いや！」

フクちゃんは、堂守の腕にすがって、甘えた。こんなに、こどもっぽい彼女の一面が隠されていたとは、想像もできなかった。そして、フクちゃんを、これほどまでに変貌させてしまった堂守の魔力に、圭介は、神秘的な恐怖を抱いた。

「圭坊、先生に試運転をみていただくの。スイッチをいれて」

圭介は、もっそりと、責め具に近づいた。

「だれだい、この子？」

堂守は、はじめて気づいたらしかった。

「弟よ」

「弟？ ほんとの弟かな？」

堂守は、うたがわしげに圭介を見やり、指の間から拇指をのぞかせて……

「おれと、義兄弟だなんて、やだぜ」

「いやあん、ばか！」フクちゃんは、大仰に恥かしがり、堂守の腰を、たたいた。「先生とちがって、あたしは浮気しませんからね」

二人のやりとりをきいていて、圭介は、虚

しい孤独感に襲われ、涙ぐんだ。

「圭坊、スイッチを1にして！」

と、フクちゃんに命令されなかったら、その場から、立ち去っていたかもしれない。責め具のスイッチは、足枷の下の部分にあつて、そこにかがみこむと、ちょうど責められているものの、股間がのぞきこめるようになっていゝらしい。

ダイヤル式のスイッチを、OFFから1にすると、彎曲部の基底に据えつけられた、レザーばりの円座の中央の穴から、特殊な合成ゴムでできた責め棒が、ちよろちよろと、みえがくれるように作動しはじめた。

「ひ、ひひ……あたりをつけるというやつだな。ちえッ、おれまで、むずむずしてきやがるぜ！」

知らぬ間に、堂守は、フクちゃんの腰を抱えこんで、真上から、のぞきこんでいた。

スイッチを2にすると、責め棒は半分ほど姿をあらわし、緩急とりまぜて、前後運動をくりかえし始めた。

スイッチが3になると、ほとんど穴の上に姿を出して、ゆっくり攪拌運動をはじめた。

スイッチ4では、前後左右に数回ずつ、動きの方向が切り換わって前後運動をくりかえ

し、5になると、ほとんどその根幹の部分から、急速な攪拌運動を開始した。

「先生……あたし、だめよ……ほら、もう、ふるえがきてしまつて……」

圭介の頭上で、鼻をすすするようなフクちゃんの喘ぎがもれたかとおもったら、どさっと黒い影になって堂守の腕にもたれこみ、そのまま、もつれあつて、絨毯の上に倒れこんだ……

フクちゃんは、牝犬のように、堂守の唇を求めて、のしかかつて行った。

舌と舌とが、せめぎあつて、唾液が糸となつて、したたり落ちる……フクちゃんは、餓えた狼のように、堂守の唇をむさぼり、背中に爪を立てた。

——圭介は、啞然として、スイッチを切るのも忘れて、情痴の淵に身を投げた、フクちゃんを見守っていた……

ものうげにモーターは唸り、見ただけでフクちゃんを狂わせた元兇の奇怪な責め具は、無表情に回転運動をつづけた。

「足枷の中が、せまいようだな……」

堂守は、フクちゃんの足首を、枷にはめてみながら、不満げな口吻をもらした。

「あら、先生が計って下さった通りよ」フクちゃんは、首枷のかかった頤を引いて、自らの行方を見定めながら、いった。「拡げるのは、先生の御趣味でしょうけど、あたしのほうは、たのしくないもん！」

「ばかったれ！ こいつは、奴隷が、たのしむためじゃねえ、飼主さまのためにあるんでい！」

「はい、はい。拡げりゃいいんでしょ、エツチな飼主さま」

二人は、プレイをたのしむ気易さで、そんな対話を、たのしんでいる風だった。

首枷、足枷をかけられて、みた目は、中世の魔女拷問の光景だったが、細部にどこさされた被虐者への思いやりが生きているせいだろうか、フクちゃんは、むしろ堂々と、責め具の中に裸身を埋めていた。

「どうだね、浮気な貴婦人殿。拷問台のすわりごこちは……？」

堂守は、首枷のほうにまわりながら、芝居がかって、訊ねた。

「バッチリよ、エログロ男爵さま」

フクちゃんも、負けずにやりかえして、にーッと、鼻先に小じわをつくった。

「こいつウ……」堂守は、首枷の上のフク

ちゃんの頭部を、小脇にかかえこむと、いとしくてならぬ風に、頬をすりよせた。「首枷って、乙なもんだな。こうやって抱いてると、フウコの生首みたいな気がしてくるぜ」

「何の罪で、晒し首になったの？ 浮気の罪かしら？」フクちゃんは、自分の首をあずけたまま、凄艶な流し目を送った。「あたしは亡霊かもしれないわよ。先生にいじめぬかれて殺されたフウコの亡霊……」

「成仏しろよ、フウコ」

堂守は、二本の指で、フクちゃんのまぶたを抑えると、やさしく額に接吻した。

「はじめるの？」

フクちゃんは、目を閉じたまま、訊ねた。

「覚悟はいいね」

それが、プレイ開始のキーワードだった。

堂守は、いきなりフクちゃんの髪をつかむと、ぎりぎりぎり……と、ねじりはじめた。

腰まである長髪は、一本の縄によじりあわれ、それを握りしめた堂守は、力まかせに後方に、ひっぱったのだ。

「ぎゃあ、あ、あ、あーッ！」

虚をつかれて、フクちゃんは、怪鳥のような叫びをあげた。

髪の毛の先端は、梯子状の円棒に括りつけ

られ、フクちゃんは、のどを反らせたまま、固定された。

首枷の厚みがあるので、顔は仰向けにはならなかったが、頭皮がひきつれて目が釣りあがり、苦痛のあまり半開きの口元がひくひく痙攣して、歯と歯が、かちかちふれあう音が外にまで、もれた。

静から動へ、みごとな演出である。

スイッチが、1に入る。拘束されていないフクちゃんの腰部は、デリケートな動きをともなあって、苦悶のダンスを展開したが、頭髪にかかった激痛のあまり、うっかり腰をおとしてしまうと、改めて悲鳴をあげる結果となった。

「どうだ、フウコ、のりごこちは？」

堂守は頭部にまわって訊ねたが、うっすら目をあげたものの、苦痛と悦楽に苛まれて、のどの奥をかすかに鳴らすだけだった。

圭介は、佇立したまま、刻々変化するフクちゃんの表情を、追いつづけた。

先刻まで、吐き気がするほど堂守に対して反感を抱いていたが、今やフクちゃんに対する敵愾心がかきたてられ、フクちゃんに嫉妬する感情が湧きあがってきたのが、不思議だった。

「いかん、気分を出しやがったな、牝豚め。おい、カーテンをしめて、暗くするんだ」

フクちゃんが、法悦の表情をみせはじめたのを知ると、堂守は、圭介を手招いてカーテンをしめさせ、自分の鞆の中から、太いローソクを何本か、とりだした。

新しい責めの添加物である。

三本のロウソクに火がともされ、一本はフクちゃんの口におしこまれ、他の二本は手枷からのぞいた掌に、ロウ滴を落として植えられた。

うす暗くなった室内は、フクちゃんの顔のあたりだけ、黄ばんだ明るさとなった。

自らくわえたロウソクの灯によって、ロウ滴に灼かれ、苦痛のたてじわを眉間に刻みつけたまま、首枷の上に晒されているフクちゃんの顔は、受難の聖女のように、神秘的に映った。

「どうだ、辛いか、牝豚め……」

堂守は、縛りつけられた頭髪を、わしづかみにして、悪鬼のような形相をみせた。

「奴隷の分際で、かってにいい気分になりやがるから、こんな目にあわされるんだ。うんと苦しめ。苦しんで、おわびしろ！ ふん、いい気味だ！」

フクちゃんは、口で返答できぬかわりに、すつと目尻から、涙滴を溢れさせた。

「泣くのは、まだ早い……死ぬほど辛い目にあうのは、これからだ！」

ロウソクの光輪から、堂守の顔が消えたとおもったら、カチャリと、スイッチをまわす音がした。

「むう、ご……むう、ご……」

フクちゃんは、口に含んだロウソクの炎を激しくゆらめかせながら、懸命に頤を突きだして、のどの奥で涕泣した。

圭介は、中世の地獄絵図をみるようなおもいで、ふるえおののく三本のロウソクの炎を凝視しつづけた――。

六

その日以来、堂守は、ちよくちよくやって

きて、寝泊まりするようになった。

彼の事業にとって、フクちゃんほど便利な存在はなかったのだ。

彼女は、彼のアイデアを現実化する設計家であり、制作者であり、おまけにその威力をためす実験動物でもあった。

フクちゃんをあられもなく狂わせ、二度も

三度も失神させた箱型の悦虐機械は、『貴婦人の箱舟』と銘うたれて、ひそかに売り出され、莫大な利潤を堂守に、もたらした。

つぎに立案されたのは、『胎内』と名づけられた奇妙な拘束具であった。

「おれは、トルコのスチームバスで気がついたんだ。あいつの小型をつくって、牝豚どもをおしこんだら、痛快だろうなって……」

堂守は、その効能を得々として語り、フクちゃんを、後手前屈縛りにして、ビニールの大きな袋にとじこめ、首だけは出した形で、一昼夜も風呂場に放置しておいた。

彼女の体温で、ビニールの中は、むし風呂のように暑くなり、全身から汗の粒が噴き出した。堂守のいなくなった間に、圭介が水をのませてやらなかったら、おそらく小水だつて飲み干したであろう。

それ以上に苦痛だったのが、排泄である。

堂守はヒマシ油のまじった水を、フクちゃんに与えて、眼前で排泄することを強要した。下剤をかけられたのでは、さすがの彼女もたまらない。ビニールの表面に、白濁色の下痢便をしたたらせて、ついに羞恥の極致を晒してしまった。

手足のない袋詰めのだるまさんだから、食

~~~~ イメージギャラリー『歯車のキシミ』岡 たかし ~~~~



事をするのも人手を借りなければならない。

「よち、よち。ほーら、あーんして」

と、あぐらをかいた堂守の膝の上に、仰向けにされて、じらされたり、強制されたりしながら、男の口中で噛みくだかれた食物を、

スプーンで口に運ばれたが、被虐性の強い彼女には、無上の快楽であった。

こういう体験をもとに、耐久性のある透明プラスチックをつかって、拘束箱『胎内』は生まれた。

ちょうど、スチームバスを小さくしたような、一メートル四方ぐらいの箱で、この中に閉じこめられると、いやでも膝を折りまげ、胎児のような姿勢をとらされた。

四方が透明なので、排泄のようすも、不遠慮に観察できたし、底に車輪をつければ、乳母車のように押して歩けたので、引きまわしには、もってこいだった。

また把手にロープをかけて、宙吊りにすれば、おそらく裸身で閉じこめられた被虐者を下から見上げられたし、逆転させれば、逆吊りである。

——だれでも願望する胎内への郷愁！
というキャッチフレーズで、売り出されたが、なるほど、哺育器のような容器に入られて汗と自分の排泄物に濡れ、肌をぬめぬめと光らせた被虐者の姿は胎児を連想させ、首枷から首を出してはいても、何一つ自分の意志で行なえないために、いやでも加虐者を慕うようにできていた。

この『胎内』も、空前のベストセラーになり、堂守は今や当たるべからざる勢いで、次の新製品の開発に没頭した。

変型木馬『ユニコーン』である——。
ユニコーンというのは、伝説上の一角獣だ

が、堂守はそれをヒントに、角を一本生やした木馬をつくろうと考えたのだ。

一本の角は、ちょうど留釘の役割をはたして、被虐者に、降りることはおろか、わずかの移動もゆるさない。少しでも身をよじれば角先が責め苛むのである。

馬上において、鞭打ってもよいし、尾部に突き出たハンドルを操作して、角を動かしてみても、おもしろかった。

フクちゃんの献身的な努力によって、ユーモラスな表情をたたえたユニコーンの頭部がつくられ、合成ゴムの角がとりつけられた。背面はむしろなだらかで、被虐者を俯伏せにしやすいできており、表面に繊毛をけばだてた人工毛皮がはりつけてあって、素肌をつけるとむずがゆくなるように工夫してあった。

普通の木馬とは逆に、ユニコーンは頭部に被虐者がのせられるので、皮紐を束ねてつくった民芸調の尻尾は、俯伏せにさせた時の首紐としてもつかえた。尻尾をかき分けて突き出たハンドルは、被虐者自身が操作することでもできたし、そこに手を括ってしまえば、かな身悶えものがさず、角が動く仕掛けになっていた。

フクちゃんは、この木馬に跨がされて、は

じめてその威力を味わった。二本の角が、文字通り角突きあい、せめぎあって、フクちゃんは悶絶するまで、責めたてられた。

——角獣に犯されてる……。

快感の海をさまよいながら、自分のつくった怪物が、生きた妖怪となって、フクちゃんに襲いかかってくる恐怖と感動が、妖しい火炎となって、網膜をこがしつづけた……。

「おい、圭介、ビールをもってこい！」

日本間から、堂守の酔っ払った声がした。

ほんとうに、堂守がこの家にはいりこんでからというものの、圭介は休む暇もなかった。暴虐な帝王にかしづく侍女のように、エプロンはずす間もなく、酷使された。

冷蔵庫のドアをあけていると、「いや、だめ」と拒否する、けたたましいフクちゃんの嬌声にまじって、

「それから、流腸器もだ。でっかいほうを、もってこい！」

と、また声がした。

流腸器ときくと、かすかに胸が疼く。

圭介は、アトリエの一隅から、五〇CCの太い流腸器を、素早く探しだすと、深呼吸をして、動揺を鎮めてから、日本間の襖をあけ

た。

責めと責めの間の休息時間だった。

パンツ一枚であぐらをかいた堂守は、全裸のフクちゃんを前抱きにして、寿司をパクついていた。フクちゃんは、後手錠一つの身軽な括られかたで、露出した乳房を間断なく玩弄されながらも、堂守の頤に頭を埋めて、憩いの時を満喫していた。

「さあ、ここへねろ。注文通り、たっぷり飲ませてやるからな……」

と、堂守が膝の上に捻じ伏せようとする。「ああん、いあん……」と抵抗の口吻をもらしながらも、案外素直に身体をあずけて、俯臥した。逞しい双丘は、堂守の膝によって、いっそう誇張された。

「圭坊、あっちに行つてよ。こどもの目の毒よ」

しかし、さすがに、気がさすのか、圭介を追いたてる素振りを示した。

「ばか！」堂守は剥き出しの尻に平手打ちをくらわせ「つべこべいうな、牝豚！」

と、一喝して、圭介には目顔で、のみのこのビールを流腸器に詰めるよう指示した。「あーん、お尻から、ビールのますなんて、前代未聞よ」

フクちゃんは、浣腸器を横目でにらみながら、まだぼやいていた。

「口から入れたもんは、みんな尻に抜けるんだ。さかさまやっただって、悪い法はねえだろうよ」

と、奇妙な理屈を述べながら、豊満な臀部に指を這わす。

「あ……ち」

フクちゃんは小さな叫び声をあげて、一瞬鎌首をもたげたが、すぐに堂守の毛脛に、頬をすりよせ、熱い吐息とともに、足をずらせて、堂守に協力を示しだした……。

「おもてが、いい女は、うらのほうも、いいもんだな……くそ、しまり具合が、なんともいえねえぜ」

堂守は改めて感嘆した。

——圭介の視線も、その一点に、釘づけになった。

おさえにおさえていた、被虐の血潮が、カッと燃えあがり、耳たぶまで熱くした。

思わず手がわなないて、浣腸器がコップの縁をカチカチたたくと、

「どうした？」

堂守の鋭い目が光った。

「すみません……」

圭介は、あわててシリンドラーの尻を押し、管の中にたまった、ビールの泡を放出させはじめた。しかし、その仕ぐさの端々に、目にみえない神経の痙攣が走り、ぎこちなさを誇張していた。

——こいつ、嫉妬してやがる！

堂守は、長い経験から、本能的に圭介の心理を読みとった。すると、にわかに好奇心が昂まって、フクちゃんの肉体を苛むことで、間接的に圭介をなぶってみたいと考えた。

「圭介、サラダをかせや」

不審の面持で、圭介はサラダ皿をおしてよこした。堂守の狙いがわかると、ハッと胸を衝かれた。

「どうだい、結構なクリームがあるじゃないか」

マヨネーズをすくって、たっぷり塗りつけると、すっかり揉みほぐしたあとに、青々としたパセリを一本一本、植えはじめたのだ。「いきなりビールをのましちゃ、かわいそうだ、オードブルが、さきだわな」

フクちゃんは、狼狽して鎌首をもたげた。

そして、自分の尻を畑にみたてて、慰みにふける堂守に「ひどいわ、パパ」と気弱に抗議した。

「は、は……お前には見えなくて残念だな。

白いスロープにパセリの森ができて、砂漠のオアシスってとこだ。なあ、圭介」

堂守は、いじわるく、圭介をかえりみた。

圭介は、あわてて、顔をそむけた。

「ねえ、圭坊の前でエッチな悪戯やめてよ。

気まり悪いったら、ありゃしない」

フクちゃんは、尻をあずけながらも、文句たらたらである。

「何もかも、丸出しのくせに、えらそうな口をきくな。気まりが悪いのは圭介のほうだ。

姉貴のあさましい格好をみせられて、ヘドモドしてやがるぜ」

「おねがい、あっちの部屋へやって……二人きりになったら、いくらでも燃えるから」

「お前は奴隷だ。燃えたくねえっていったって、どうせ燃やされちまうんだ……」

堂守は、圭介に目顔で「行くな」と命じ、繁茂したパセリの森から、一本引き抜くと、

「おや、こりゃア、色艶がよくねえな。オアシスの泉で、艶をつけてもらおうか」

と、いきなり腿をつかんで、くるとパセリの葉をまわしながら、移動攻撃を開始したのである。

「い、い、い……」

圭介の手前もあってか、堂守の脇腹に額をおしあてて、ゆさゆさと髪をふるわしながら、フクちゃんは必死になってこらえていたが、責めどころを心得た堂守の玩弄にあっては、かなわぬ。やがて、ぎりぎりとししい臀肉を盛りあげると、

「あうん……ぐやん！」

と、奇妙な叫びをあげて、どさツと畳の上に落下した。足首をつかまれたままの、はかない逃亡である。

「圭介、ロープをもってこい！ ちょっと、少し楽をさせてやると、すぐに、このざまだ」フクちゃんの背中を踏みつけて、動きを封じた堂守は、いまいましてならぬ風に、目を怒らせ、圭介にも手伝わせて、強烈な海老縛りにかけた。圭介におさえつけさせて、手に唾しながら、首縄を締めあげると、フクちゃんの顔は、あぐらの足に埋まって、身動きもならなくなった。

「よっころしょツと！」

二人がかりで、足首をかつぎあげ、亀の子のように反転させた。だるまのようなフクちゃんは天井を向いた。

放射状に伸びた大腿の間から、満面に朱をそそいで苦痛をこらえるフクちゃんの顔がのぞいた。こんな拷問にあわされても、縄目に身をゆだね、喜悅の微笑すら浮かべているのが、神秘的だった。

それは、華やかな被虐体だった。

間断なき責めをうけて、桜色に染まった肌は、ねっとりした光沢を増し、貪欲なまでに渴望する被虐への希求が、成熟しきった女体の隅々に息づいて、豊潤な香りを放った。

「おい、圭介。いつまでも押んだままでいると目がつぶれるぞ……ばさツとしてねえで、浣腸、浣腸……」

と声をかけられて、圭介は、ぽツと赤くな

「ひ、ひ、こんなもんは、押んでたって、はじまらねえ……」堂守は、ぺたぺたと、馬の尻でもたくように、高々とかかげた双臀をうち鳴らし、「そらみる。早くビールが欲しいって、催促してやがるじゃねえか」と、マヨネーズにまみれたパセリの森を、指先で突いた。

やがて襲う責めを予知して、無言のつぶやきを、もらしつづける軟体動物は、小刻みにぶるぶると慄えていた。

「そんなに、がたがたすんなよ。あわてる乞食は、もらいが少ない……もうじき、じっく

りビールをのませてやるから、待ってな、お嬢ちゃん」

堂守は、もったいぶって、浣腸器を握りなおすと、目の奥に濁った色を浮かべて、本格的な、いたぶり責めをはじめた。ガラスの切っ先を、近づけたかとおもうと、引きはなし鳥が啄むように玩弄するのである。

「むう……いやん……」

石のように静止して、責めを甘受するポーズをとっていたフクちゃんも、この思わせぶりな、いたぶりに煽られて、激流に、もまれる、だるまのように、身を揉んだ。

圭介は、背筋に戦慄が走るのを覚えた。

この責めの残酷さが理解できたのも、幼時に、自分の手で加えた嗜虐的体験によるものだろう。マッチ棒の先端で、飽きもせず、鏡の中の彼女を啄み、自らを錯乱させたことがある。神経の集中部だけに、デリケートな刺激には、いっそう鋭敏で、哀切感がこもって心が疼くのである。

「お嬢ちゃんよう……お前の大好きなオカンチヨ坊やも、おちよぼ口じゃあ、キスもできねえって、こぼしてら。かわいそうに、こんなところで、立ちんぼだぜ」

堂守は、うす笑いを浮かべて、さかんにじ

らし責めをする。

と、おどろいたことにフクちゃんは縛しめに包みこまれた不自由な肢体で、必死の挑戦を試みだした——身体をにじり、首と連結した足首をおもいきり反らせて、わずかにのぞける目を、らんらんと光らせ、齒ぎしりして挑みかかる形相は、まさに色餓鬼だった。

目的のポイントに到達しかけると、バランスが崩れ、ガラスの嘴先が、嘲笑するように宙にのこった。

圭介は、自分の尻までが、ずきずき疼きだした。それは、次第に灼熱の火の玉となって彼の全神経を占領し、フクちゃんの味わっている快美と苦痛を、自分自身のもののように錯覚しはじめた……。

——もっと苦しめ、もっと哭け！

鏡の前の加虐者である、もう一方の分身は声を限りに絶叫した。

「みろや、圭介……」飽きもせず、浣腸器をそらせてたのしみながら堂守は、いった。

「あさましいというか、ハレンチというか、おっそろしく下等な牝豚じゃねえか。人の、いやがる浣腸をうけたがって、柳にとびつく蛙みてえに、尻から跳ねやがるんだからな」圭介は、たじろがずにフクちゃんを見つめ

た。そこにあるのは、個有名詞もない人間、いや、人間であることすらやめて、汗みどろの肉塊となった被虐の魂——性奴のすがただった……。

「おっと、こんなこといっちゃ、すまなかったな……これでも、お前の姉貴だ。こんな人間らしくない人間に飼育しちまったおれを、さぞかしうらんでるだろうな、お前は……」黙りこくった圭介を気づかって、堂守は、ひょいと、ふりかえった。

圭介の燃える視線は、陰火のような妖しい輝きを帯びていた。

「どうした？」

と、堂守が声をかけたのをきっかけに、圭介は、たまりにたまった肺の中の空気を一気にぶちまけて、

「ぼくは、姉さんがうらやましいんだ。ぼくも苛めてください、先生！」

と、叫んでしまった。

「なにイ？」

愕然として、気をゆるしたはずみに、ガラスの嘴口はあっけなく、軟体動物に捉えられた。

性奴の、けたたましい絶叫がこだました。そして、きれぎれに、もれつづける叫喚と

涕泣を背にしながら、圭介と堂守は顔を向けあったまま、無言だった——。

※ ※ ※

かずかずのアイデア商品によって、ポルノ業界の大立物になった堂守は、東京都下に豪邸をたて、メーカーや『大人のおもちゃ店』と称する販売店の主人たちを集めて、盛大な落成祝賀パーティを開いた。

会場には、地下の大広間があてられたが、西洋の古城の地下牢を模してつくられたといわれる、煉瓦づくりの密室は、それだけで猟奇的ムードを盛りあげるのに役立っていた。

天井から吊り下げられた大シャンデリアには、それぞれ、えりぬきの美人たちが、一糸まとわぬ裸身を晒して括りつけられ、無数のロウソクの滴りや炎で苛まれ、苦痛の呻きをあげていた。

『哀しみのシャンデリア』と名づけられた、堂守自慢の開発商品だった。

この地下室は、いふなれば、彼の開発した商品の展示室で、『貴婦人の箱』や『ユニコーン（一角獣）』『胎内』といった古典的な名作から、最新作に至るまで、ところせましと陳列され、それらの責め具には、個性豊かな美女たちが、惜し気もなく玉の肌を晒して

つめこまれたり、跨がされたりしていた。

この種の責め具には、なれっこになつてい
るはずの招待客たちも、さすがに美女たちの
口々に発する呻きや嬌声には圧倒されて、酔
っ払つたような目つきで、場内を彷徨した。
中でも人気を集めたのは、中央のプラスチ
ックの容器に収められた「生体玩具」で、ケ
ースの前には、「シヤム双生児」と名札が立
つていた。

容器の中味は、互いに後手に縛られた男女
が詰めこまれているといった、何の変哲もな
い地味なものだったが、その、シルクハット
をかぶって燕尾服の上衣だけつけた男が、実
は堂守の無二の協力者で、この館の女主人で
もある天城福子であり、ナイトキャップに純
白のネグリジェをまとい、後向位をとらされ
ている女が、美艷をたくわえた白顔の青年で
あったことに、倒錯的人気の謎があった。

『女』は、不要になつたものに、可憐な花模
様のついた皮のコルセットをつけ、銀の鼻鎖
に連結されていた。たった一本の細い銀鎖の
おかげで、ほとんど身体の自由を奪われ、顔
をあげることもならず俯伏しているさまは、
処女の、はにかみの象徴にも、みえた。

『男』は、肘を後に捻じあげられ、一本の棒

のように緊縛されているので、いやでも身体
を折り曲げねばならず、うまい具合に『女』
の上に、のしかかるポーズになっていた。ふ
くよかな腰には、革の褌が括りつけられ、奇
妙な棒が、臀部に隠れこんでいた。この奇妙
な棒は、『女』の臀部に繋がっているのだ。

『シヤムソーセージ』というのは、球根を中
心に左右同形に伸びたレズビアン用の淫具に
つけられた名称だったが、この『生体陳列』
の場合は、『男』の後手を括りあげたロープ
が、天井の滑車を通して『女』の後手につな
がっているもので、もしも陥落しようものなら
自分の下にいる『女』を釣りあげる結果とな
り、一蓮托生、にっちもさっちも行かない関
係を強いられていた。

性のシヤム双生児である。

蜷集した群衆は、快美と拷苦の極を往来す
る陰湿な『男』と『女』の様子を飽かずに眺
めていたが、そのうちに、いかにもくたびれ
はてた風采の中老男が、

「くそ、堂守先生のアイデアだけあって、こ
たえるね、この図は……女上位のかあちゃん
をもってるおれには、身につまされて、見ち
やいらねえや……」

と、呟くともなくいったのをきっかけに、

一座の空気は、妙にしんみりしてしまった。
「全くだ。かあちゃんに首根っこを握りしめ
られて、思いきって屁もひれねえのが、おれ
たちだもんな」

「こりゃあ、男は女の代用品にすぎないとい
う堂守先生の哲学をあらわしてるんですよ、
きつと……」

「いやあ、現代日本の象徴ですよ。上になっ
てるのが、アメリカで、下が日本……」

と、口々にいいあって、倒錯的毒氣にあて
られたのか、三々五々、別の陳列品のほうへ
向かいはじめた。

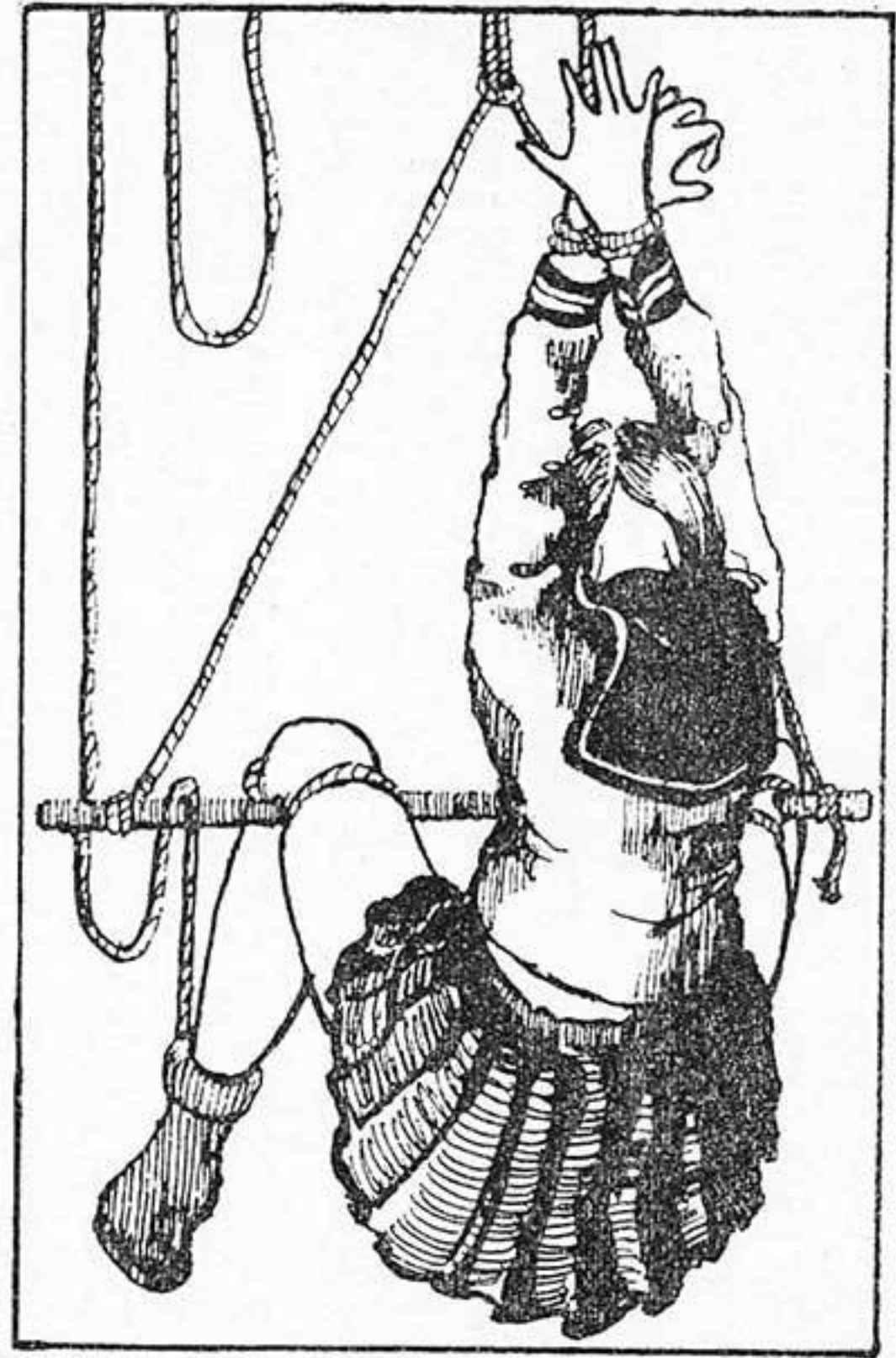
——圭介は、法悦境をさまよった。

かさなり、うごめきながら、自分とフクち
ゃんは被虐という胎盤に育てられ、一本のロ
ープ、一本の連結棒によって放ちがたく結び
合ったシヤム双生児なのだと思つた。

幼い頃、鏡に映した遊びによって加虐者と
被虐者を見出したように、自分の中にフクち
ゃんを見出し、フクちゃんの中に自分を見出
して、加虐と被虐のいりまじった小宇宙を、
充ちたりた幸福感を味わいつつ、飛翔しつづ
けた。

圭介は、虹色のもやの中にいた……（了）

カット・緑JOE



裏切りの処刑

創作

南 はじめ

水原由紀は、素直に両手をわたしの前にさしだしてきた。その彼女の両手首に、ストッキングを巻きつけていくわたしの胸は、ひとつの期待に高鳴っている。

「そんなに締めると、いたいわ。もう少し、ゆるくしてよ」

これから自分の身に何が起こるかを知らない、優しい由紀の声。その声は、わたしが計算して掛けておいた、プレスリーの悲鳴を挙げているような歌声によって、辛うじて聞きたれる程度だ。

「あら、いたかった？ ごめんなさい。でも

少しくらいは我慢してよ。せっかく、皆にないしよで少し高級な手品を教えてあげるのだから……」

そう言いながらわたしは、小さく頷く由紀に笑いかけて、その両手が自由にならないよう、しっかりと固定する。由紀の白く華奢な手首は赤く染まっていく。

「ハイ、いいわよ。立ってみて」
わたしは軽く命令する。由紀がベッドから腰をあげる。

「よくわかるようにやってみせてね。文芸部の三年生を送る会は明日だから、あまり練習

するわけにはいかないもの……」

由紀が微笑しながら言う。その笑顔に、ほつれ毛が少し、かかっている。女のわたしが見ても、なんとなく気をそえられる容貌だ。近くの男子高校生からミスK女子高といわれるだけのことはある。

「だから、順序をよく覚えてね。こうして手を縛ったら、次は……」

「どうするの？」

「ちょっと苦しいと思うけど、両足を、その両手の中に入れるの」

「両足を？」

「そう。さ、やってみて」

「ええ。……こうやるのね」と由紀は、わたしの教えたとおりに腰を曲げ、まず片足を入れ「ちょっとエッチな格好ね」と舌をペロツと出して笑った。

スカートから由紀の太腿と白い下着が、ちらつく。その健康な右足を見ながら、わたしはビッコをひかなければならない自分の右足を、巻スカートの上から撫でていた。

この右足のことで、皆にからかわれるのはなれている。でも、中学三年間、高校二年間ずっと本当の親友だと信じてこんできた由紀がわたしのいない所で、わたしの足のことを笑い話にしていたことは、皆のからかいとは別だ。

昨日の放課後、わたしが文芸部の部屋の前まで来たことを知らないで、彼女は得意げにしゃべっていたのだ。

「あの人のお母さんにたのみこまれて、それでつきあったげるのよ。あのビッコさんは、ほかに、お友達はできっこないわ。泣きつかれては仕方ないじゃない。……もちろん親友でもなんでもないわ」

「一生つきまとわれるかも知れないわよ、由紀さん。あのビッコで、あの御面相じゃあ、

とても売れ口はなさそうだから……」

「あらイヤだあ。……でも、そうでもなさそうよ。雑誌で読んだことあるんだけど、ビッコの人って、男の人にはいいんですってよ。もっともお床の中だけのことでしょくけど。

だから、フフフ……ね、わかるでしょ」

その時のわたしのうけたショックの強さ！信じきっていた友の、この裏切りを許すことができないでしょうか？ わたしは絶対に許さない。それで今日、由紀を自分の部屋に誘って、わたしが考えた処刑をしようとしているのだ。

「手伝ってよ。片足が入らないわ」

わたしを見上げる由紀の瞳には、なんの疑いの色もない。わたしは由紀の体をささえ、由紀はわたしに全身の重みをかけながら、残る片足を両腕の間に押し入れた。

「苦しいわ。息がつまりそう。さあ、はやく手品、教えてよ」

由紀の長い髪は床をなでている。肉づきのいい臀部が後につきでて、さかりのついた牝犬が、牡犬のとびかかってくれるのを、いまかいまかと待ち望んでいるような姿の由紀。これから由紀に加えようとする処刑の手順を思いだしながら、わたしは生唾を呑みこむ。

「いいわ、すこしの辛抱よ。すぐ楽にしてあげるから」

せわしい呼吸を繰り返している由紀の軀を移動させ、わたしはベッドの端に由紀の頭部がのるようにする。

「うう……くるしい……」

ベッドのクツションで顔を圧迫された由紀は、くぐもったような呻き声をもらす。が、その呻き声がこの部屋の外に洩れる心配はない。わたしの家は、いわゆる連込みホテルを商売としており、この部屋も客室の造りと同じで、少しくらいの叫び声は外に洩れないようになっているから……。

「どう、由紀さん。そんなに苦しい？」

「くるしい……わ……」

押しつぶされたような声で由紀は返事をして息苦しさから逃がれようとするのだろう、突きでた尻を左右に振っている。セーラー服と対になっているスカートからスリップが、パンティが見え、紺と白の模様を描き出している。

わたしはベッドに腰をかけ、由紀の髪を掴みながら云ってやった。

「手品というのは嘘よ。そのかわり、もっと楽しいことを教えてあげるわ。親友のあなた

だけに、特別によ」

耳許に顔をよせて息を吹きかけてやると、由紀の全身がピクッと震えた。やっと自分の置かれた状態が呑みこめたらしい。さかんに何か話そうと口を動かしている。が、口からでてくるのは言葉にならない呻き声だけ。わたしは由紀の髪を上につまみ引く。

「イタイ！……」

「話したいことがあれば、話さないナ。聞いたげるわよ」

わたしの髪を握っている右手に、力が加わる。由紀は眉を美しくひそめ、

「な、なぜ、こ、こんなことをするの。友達じゃないの」

「ともだち？……いい言葉ね。でも、あなたは昨日、わたしのことを友達なんかじゃないって、いったわ。たのまれて、仕方なしのつきあいだ、って」

「えっ！　なら、あの話を……」

「たしかに聞いたわよ、全部。ビッコは、何かが、とてもいいんですってねえ」

由紀は言葉を呑みこみ、わたしの顔を見つめた。小さく肉の厚い唇が、微かに震えている。わたしは由紀の顔を横に捻じ向け、そのまま髪をはなした。由紀の頭部がベッドの上

で小さくバウンドする。

「許して！　お願い！……ごめんなさい！」

「そんな声をだすのは、まだ早いわよ」

そう言いながら、わたしは自分のパンティを脱ぎ、それを由紀の鼻先に押しつける。

「ビッコの女が、お床の中だけでも男の人には、いいって言うのは、うれしいわねえ」

由紀の、いやいやする鼻を思い切りつまみあげてやる。彼女の顔は苦悶の表情に輝き、肉感的な唇を半ばあける。わたしは手にしたパンティを、その口の中に押しこむ、由紀はパンティを顔をふりふり口に押し、その瞳は恐怖と息苦しさの為に大きく開かれ、透明に光る涙の粒が宿っている。

「さあ、ぼちぼち生まれたままの姿になってもらうわよ」

由紀の頬にピンクを一つ張り、わたしは冷ややかに言う。そして、背後にまわる。

由紀は、自分の身に降りかかりつつある危害を避けようとするのだろう。必死に腰をくねらしている。

「おとなしくなさい！」

左右に揺れる尻を、わたしは思いきり蹴り上げてやる。柔らかい弾力が爪先に走る。

「ヒィー……！」

という、人間の声と思えぬ叫び声をだしつつ、由紀の腰が静止する。叫び声に続いて洩れる呻き声が、プレスリーの歌声に同調していくようだ。

「そうよ。おとなしくするのよ。今度、暴れたりしたら、どうするかわからないわよ」

わたしは腰をまさぐりながら、スカートのファスナーを引き、邪険にスカートを、引きおろす。スリップとパンティの白が、由紀の豊かに盛りあがった双丘を包んでいる。

「ふふ……、大きなお尻しちゃって。どう、少しは感じる？」

ピクピクと、けいれんしているように動く尻を、両手でわざとくすぐるようにしてやってから、わたしはパンティに、手をかける。

由紀は観念したらしく、そのまま動かない。

「いい子ね。ちょっと足を曲げて……そうそう……、ほら、とれた」

由紀の、肉のひきしまった二つの丘がカーテンから差し込んでくる陽の光で桃色に輝き微妙に揺れているように見える。口惜しいけれど、たしかに綺麗だ。

「さあ、これからが本番よ。その前に、口の中にある、わたしのパンティは取ってあげるわ。やっぱり、由紀さんの声が聞こえないの

は、淋しいから」

わたしはベッドに坐ると、由紀の口からはみでている布を、ひっぱる。

「あう……あう……」

と、由紀は言い、よだれを流しつつ口から布を吐きだした。頬が涙で濡れ、なんともいえない哀愁を湛えた表情をしている。

「どう？ おいしかった」

「やめて！ こんなひどいこと……学校に知れたら、あなた、退学よ」

表情をひきしめる由紀。わたしの心にむらむらと憎悪が増す。

「そんな格好にされても、まだお説教する元気があるとは、驚いた。フン。これ、お前の

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

パンティだよ。よく見な。こんなに汚れてるじゃないか！ ええ！……」

わたしは、由紀の顔にパンティを押しつける。由紀はもがき、許して！ を連発する。

わたしは、さんざん、いたぶったあげく、由紀の鼻に指をさしこみ、こねくりまわす。

「たすけて！ なんでもする、たすけてよ、おねがいッ！」

悲鳴をあげ、荒い息を吐く由紀。瞳は異様に開かれ、涙があふれ、唇は細長く開かれ、真紅な舌がのぞいている。

そんな由紀の表情を見ながら、いつしかわたしは、全身にみなぎってくる快感を感じはじめていた。

※

「これぐらいで、すんだと思ったら、大まちがいよ」

ぐったり顔を伏せている由紀をひきずり起こし、わたしは手にしたバイブレーターのスイッチを入れる。由紀はそれを見て、

「やめて！ な、なにをする気なの！」

「気がはいわね。わたしはただ、スイッチを入れてみただけなのに。そうか、そんなにムキになるところをみると、やってもらいたいのね。そうでしょう、由紀さん」

「お願い。もう気がすんだでしょう。さんざん、いじめたのだから。わたし、このこと、誰にも言わない。約束するわ。だから、もうやめて……」

由紀は涙声で哀願する。形のよい唇が、わなないている。

「駄目よ。わたしが許してあげたくても、わたしの、このバカにされた右足が、許さないのよ」

わたしの言葉に、由紀は眼を伏せた。唇がしっかりと結ばれている。わたしの責めに耐えるつもりなのだろう。

由紀は、しっかりと両方の太腿をあわせている。しかし、それだけでは剥身の羞恥は隠せない。

「由紀って、見た目よりずっとボリウムあんのネ。すごいじゃない。あたしみたいに片方だけ細いってことはないし、やはり、男の人は、ビッコよりいいっていうに決まってるわよ」

わたしは言葉で由紀を凌辱しはじめる。

「バイブレーターを見ただけで目の色が変わったところを見ると、毎晩ご愛用ってわけらしいわね。ねえ、どんな顔して、どんなふうにやってんの？ どのくらいの時間なの？ ど

うなのよッ」

由紀は、唇を噛みしめて一声も発しようとしないう。言葉を交すのが無駄なことだと知ったのだろう。ただ、わたしの手でなぶられる肌だけを微動させている。

「返事なんかしないっていうのネ。答えたくないのなら、それもいいでしょう。どうせ、そのうち、いやでも声をあげることになるんだもの」

あたしは、由紀の太腿に平手打ちを喰わしてやった。弾力のある柔らかな手応えが、小気味よい音といっしょに掌にひびく。

「あッ！」

由紀の美しい顔が、そり返って痛そうにゆがむ。余計に美しい表情になる。

きめの細かい太腿の、ふっくらした表面にたちまち、わたしの掌の型が赤く浮きあがってくる。

バチッ、バチッ！

わたしは無性に腹が立ってきて、つづけざまに、平手打ちを繰り返して、続いて思いきり爪を立てて捻ってやった。右足だけを……。

「い、いたいッ！」

由紀は、まっかになった顔を振って、耐えかねるように悲鳴をあげる。

「なによッ。ただ、この足一本のことで、どれほど、あんたが偉いっていうのよ」

わたしの腹立ちは、自分の言葉で更に、煽られることになってしまった。

「ビッコは、どういうわけで、お床の中ではいいていうのよッ」

「もう、もうカンニンしてよう……」

由紀の叫ぶような泣き声が、不思議なほどわたしの心をゆさぶってくる。

「男の人は、いったいビッコの女の、どこがいいていうのよッ」

わたしは、片手の掌いっぱい由紀の右太腿を掴んだまま、ぐいぐい爪を喰いこませながら、片手でバイブレーターを振りかざし、ビンビン響くモーターの手応えをたしかめていた。

「由紀ッ！ ミスK女子高と、ビッコの女との違いは、どこのよッ！ 男の人はビッコの足の、いったいどこで満足するっていうのよッ！」

わたしは、自分自身のいうことが、何を云ってるのかわからなくなったが、最初から用意していたバイブレーターの使用目的だけは見失わずにいた。

「あッ！ そ、そんな……」

由紀の、うろたえきった悲鳴が、わたしの持ったバイブレーターの動きとともに、ブレスリーの歌声より高く挙がった。だが、その悲鳴は、しばらくの後は声の性質が変わったのだった。

※

床の上に最初に縛られた姿のままで転がっている由紀の、桃色に火照った素晴らしい双丘をボンヤリと眺めながら、わたしは、つつき、夢中で脱ぎ捨てた自分の洋服を拾い集めた。

「わるかったわ。ごめんなさい」

由紀が、不自由な姿勢で顔を捻じ向け、優しい声で話しかけてきた。

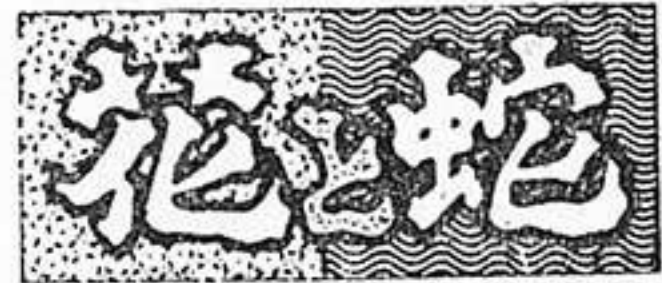
「オンナは、どうしたってやはりオンナよ。」

オンナに変わりはないのよねえ」

あれだけいじめ抜いてあげたのに、由紀の美しさは少しも衰えていない。いや、余計に美しくなった気がする。

わたしは、思わず抱きついていった。ひとたび鎮まりかけた先程の嵐が、急に勢いを増して再び吹き荒れようとし始めたのを感じながら……。

作 六 鬼 団



決 定 版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となった訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 巻号「花決定版」 || 定価一、〇〇〇円(送200円) ||

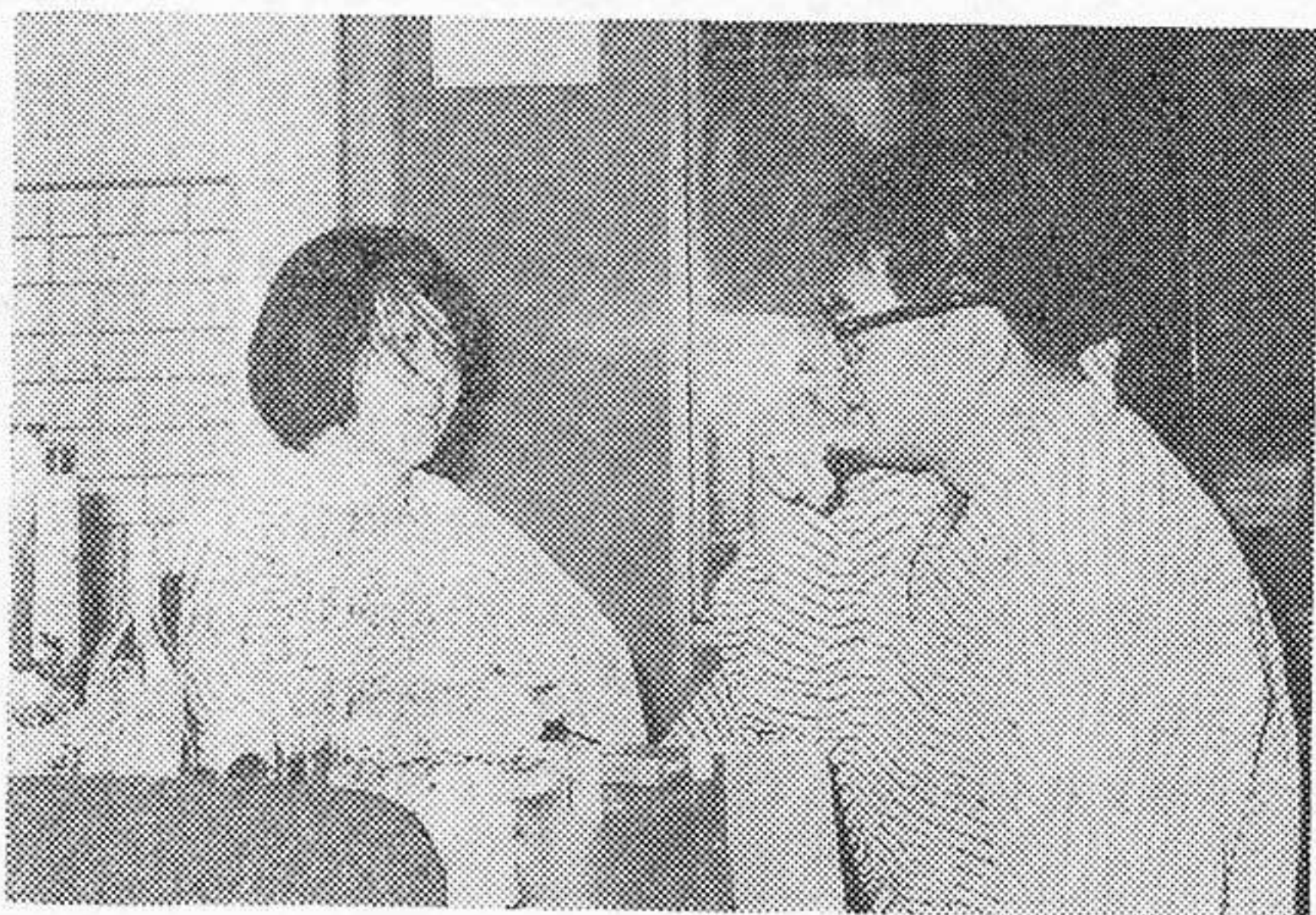
△ 内容主要見出し一覧 △

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の来 第四章 華やかなる 第五章 救済の来 第六章 餓魔の地獄 第七章 悪魔の地獄 第八章 恐怖の地獄 第九章 淫蛇の地獄 第十章 美姉妹の地獄 第十一章 色事子の地獄 第十二章 美事子の地獄 第十三章 落室の秘密 第十四章 密走の秘密 第十五章 脱走の秘密 第十六章 華やかなる 第十七章 地獄屋敷へ 第十八章 翻弄される 第十九章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すすまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。〒558 暁出版株式会社宛



もう既に七年半続けてきた、SMカメラ・ハントを振り返ってみると、まるまるのフィクションでないだけに、偶然性というものは非常に少ない。

一人の女性の、プライバシーに関することから、場所、氏名、日時などに多少のつく

SMカメラ・ハント

石田敦子の巻

官能のたわむれ

辻村 隆

りごとのあるのは当然だけれど、出来るだけリアルに書きたい反面、当の女性の社会的信用失墜や、プライバシーの侵害になっても困るし、その間に立って、忠実にハントの状況を報告しようとするのは、誠に難しいわざでもあるし、時によっては、虚構と現実の谷間を彷徨して、しばしばジレンマに陥ることすらあるのである。

カメラ・ハントという、限られた視野の中で、異なった女性を紹介してゆくことも、そ

れが断続的で、気が向けば書くというのなら気分もラクであるが、毎月となると、背負わされた荷は非常に重い。

私が十数年前から、脱サラリーマン的生活をしているから出来ることであって、ハントをやりたいから、こうした脱サラの道を選んだのか、脱サラ生活だからハントしだしたのか、それは、鶏と卵の関係にも似ているが、いずれにしても、足掛け八年、我ながらよく続くものと、自分であきれたり感心したりし

ている。

正直いって、カメラ・ハントのルートは、大同小異である。毎月、飽きもせず、同じように書く心苦しきも、せめて、月々相手が変わるだけで、幾分の救いにはなっているが、手段、方法は、よく似たもの。緊縛美を追求するの余り、それがM女性のハントになり、SMのプレイへと発展し、近頃は助平根性、丸出しで、謂わばSMポルノとでも名づくべきものになり下がっていることは自認している。

箕田氏の電話連絡、同好者、読者通信の方便なり電話によって、相手を知り、手紙か電話でデートを約す。

うまく会えたら、相手の個性や身辺を探り出し、一緒にメシを食って、アベック・ホテルへ、しけ込んで、相手方の嗜好にバランスのとれたプレイをして、あわよくば再会を約して別れる――。

要約すれば、これだけのことを、六〇枚から八〇枚近くも、ながながと書いて、ハントのフォトを挿入して送る。

それ続けるために、人知れず果敢なき努力をいたし、やきもき気を使い、コネを求め伝手を介して、毎月々々、飽きもせず、書き

綴っているのが、非日常性の、辻村隆という人間のすべてであった。

今月も又、同じ手法で始めるのかと思うと書く前は気が重く、書き出しは、いつも何となく照れて、お茶を濁しながら、(現に今もそうであるが――)やがて書き始めたら、出来得る限り真実に肉迫して、些細なことまで記憶の脳細胞からホジクリ出しては、ここまかくプレイの状況を綴り、終わりに近づくにつれて、ロマンチックになり、仄々とした情景の一節とり入れて、かの人を慕い、その人を偲んで、やれやれ、ホッとするのであった。

かく、弁解がましく書き出したのも、又しても同じ手法になるが、二月中旬、思いがけない女性から、ある日、突然、電話を貰ったことから、このハントが始まるからである。以上、言訳けめいた、内心、狂狹たる思いで、本文に入ろう。

札幌オリンピックのテレビをみていた夕暮れ、電話のベルが鳴って娘が出る。

「石田さんて女の人から電話――」
と、娘は私に告げる。

ハテ石田？ 誰だったかな――。記憶の片隅にもないが、プレイだけが女性の電話でも

なし、漠然たる気持で受話器をとり上げた。

「もしもし、辻村隆様でしょうか？」

「ええ、そうですが……」

「わたくし、石田あつ子と申します。もうお忘れでしょうか？」

「はて、失礼ですが、何処でお眼にかかったのかな？」

「ノンコと一緒に東映へおたずねして、嵐山のホテルで、男の方を虐めました」

「ああ、思い出した。あの時のノンコのお友達。確かアコさんでしたね」

「ハイ、あれから一度お目にかかりたいと思しながら、勇気がなくなつて――。この間ノンコに出会いました時、センスのお電話を教えてもらいまして、思い切つて、おかけしました。御迷惑じゃなかったでしょうか」

「よく思い出していただきました。私も一度お目にかかりたいと思っていました」

咄嗟にスラスラと、ウソがはいえたものである。嵐山のホテルで、東映のスタッフの見守る中で、その日が始めてだというアコは、むしろ初々しく、ノンコにリードされて新宮の東氏を虐め、果ては衆人環視の中で全裸になって、大胆に振舞ったのは、映画ルポで既に御存知の通りである。(昭和四十六年十二月

号『性倒錯の世界』のSM描写』参照)

その後、暫くは、アコにも幾許かの関心を抱いていたことは事実であるが、日と共に忘却の彼方へ消えてゆき、ノンコと出会ってもついぞアコの噂は、話題にもしなかった。

ノンコとアコのコンビで、M解放派の雄、東氏を虐めつくすプレイシーンを撮ったのが去年の八月二十日のことである。撮影が終わって、京都駅で別れて以来、丸半年ぶりに、ひょっこり掛かってきた彼女に対し、どのように応待したらいいか、咄嗟の判断もつかぬまま、彼女の電話の声が、懐かしがっているようにきこえたのをいいことに、調子のいい返事をしたのであった。

「ノンコから何もお聞きになっていらっしやいませんか?」

「ええ、度々出会ったけど、あなたのことについて、何も言わないものだから、聞いちゃ悪いのかと、私も、何もこちらからは、たずねませんでしたよ」

「……」

電話の彼方で、一寸考え込んだのか、言葉が、しばらく途切れる。

「何か御用でもあったのですか?」

「いえ、別に……特別の用件もないんです。

先日、あの映画を、遅ればせに見たものですから、何だかお目にかかりたくなりまして」「いいですとも、お会いしますよ、いつでも……。正直いって私は、あなたのことは何一つ知らないんです。何処に、お住まいなんですか?」

「ハイ、南海沿線の岸和田市なんです。大阪へお勤めに出ております」

「じゃあ、よかったら大阪でもお会いしましょうか?」

「御迷惑じゃないでしょうか」

「とんでもない」

「それでは明日の午後六時、心斎橋筋の『美松』という喫茶店の一階の、入口を入ったところで、お待ちいたしております。よろしいでしょうか、そこで?」

「明日ですね、分かりました。いろいろとお聞きしたい事もありますけど、電話で長話も出来ないでしょう。兎も角、行きますから」

「突然にハシタないお電話をおかけして、お呼び出して申訳ございません。それじゃお待ちいたします」

大胆にプレイした女性とは、まるで別人の様な、淑かで丁寧な口調の電話は、きれた。

先方から掛かってきた、誘いの電話である

が、予期していなかったことだけに、あわて、去年の夏のフォトを探し出し、石田あつ子の顔を、判っきり確かめようとしたが、故意か無意識か、彼女の裸身は、殆ど背を向けているか、髪で顔が隠れていて、判っきり全貌を表わしたフォトは一枚もない。

脳裡の底から、あの日の記憶を惹き出そうとするが、どうしても泛かんでこない。

あの日、私は所詮、傍観者に過ぎず、スタッフと共に、あれこれプレイの進行に協力したが、私自身がプレイヤーでないだけに、たった一度の、淡いゆきずりでは、彼女の顔に記憶のないのも無理からぬことであった。

恰度、特出しのストリップを見ていて、その直後には、強烈な印象を受けて、露呈した女達の顔を脳裡に思い浮かべても、ものの一カ月も経てば、その女達の、どの一人の顔も記憶にとどまっていらないのと、よく似た状況であった。

ままよ、会えば、又思い出しもするだろうとタカをくくって、私はもう記憶の糸を辿ることを諦めた。

唯、不可解なのは若い女心——。忘れた今頃になって電話をかけてよこし、一体この私に会って、何をいおうとするのか? 何を求

めようとするのか——。

彼女にSMの願望ありやなしやも未知であるし、精しい心理状態は何一つ、知らない。

ノンコに誘われて、幾許かの報酬になることを目当てに、映画に出た彼女は、東氏を責めたことも、勿論ノンコに教えられて、いわゆる俚にやったに過ぎぬことは、そのプレイの態度からも窺えた。

しかし、ゆきずりにしろ、一度でも全裸をみた若い女性と、デートすることは愉しい。私の好奇心は、思いがけぬ電話で、俄に大きく膨れ上がっていった。

× × ×

暮れなずむ戎橋に立つと、道頓堀の川面に五彩の影を映して、ネオンの光は、めまぐるしい許りに、黄昏の街を彩っていった。

心斎橋筋に向かって雑踏を掻きわけて、数分も歩くと、目指す喫茶「美松」がある。戦前から、古い老舗を誇る喫茶店であった。

時間を考えて歩いてきたから、喫茶店に足を踏み入れたのが午後六時五分前——約束の時間ぴったりのである。

一階から二階までを貫ぬいて、側面に鏡を貼ってあるから、誰しもが、入った刹那、倍の広さを感じる。よくよくみれば、我が姿が

鏡の彼方にうつっているのであるが、暗いルックスだけに、一寸した錯覚をおぼえる。

通路に立って辺りを見廻すと、入口に近い片隅の薄暗いボックスから、一人の女性が立ち上がって、柔らかに会釈する。

黒っぽいコート風の上衣に、同系色のパンタロン姿で、夜目にもくっきりと浮き上がった白い顔は、須臾にして、私の記憶を引き戻してくれた。

躊躇せず彼女の前に席を占め、傍にショルダバッグを降ろす。プレイのチャンスと僥倖を願って、カメラ、縄、バイブなど、一通りだけは、さして重くない程度に取り揃えてきていた。

「お久し振り。お元気？」

気軽に声をかけると、一瞬、彼女の瞳孔がとまどい、淡い羞恥のかげが流れた。

再会が、一気に半年前の、あの昼下がりの生々しいSMプレイの記憶を蘇らせたのであろうか——。

「お電話なんか差し上げて、すみませんでした。わたくし……」

いいかけて彼女は口籠り、ポツと頬を染めて、うつむいてしまう。そのしぐさが、何とも初々しかった。

折から、ボーイが注文をとる為に、テーブルの前で立ち止まったので、続ける言葉を打ち切ったのかも知れない。

「どうしたの？」

ボーイが立ち去ったので、言葉のあとを促すと、

「私、先日、やっと場末で、あの映画みたのです。私の顔が判っきり、うつっていませんのでホッとしました。実は、見るまでは怖くて怖くて、誰かに気付かれやしないかと、ヒヤヒヤしていたのです。映画をみて安心しました」

一気にいって、やっと私の顔を正視し、

「ノンコに誘われて、東映の撮影所へ行きましてけど、自分がどんな役柄か、何をするか、何も知りませんでした。あんなことをするとは全然、想像もしていませんでした。単なるエキストラぐらいの軽い気持ちだったので。逃げることも出来ず、あんな恥かしいことになって、随分あとで後悔しました。お友達が若し、あの映画をみたら、どうしようも悪い予感ばかり走って、毎日お勤めしていてもヒヤヒヤしていたのです。でも、男の社員の方も、仲間の同僚も、誰もそのことには触れません。それで、不安と好奇心にかられて

遂々一人で映画をみにゆき、やっとホッとしましたのです」

「故意か偶然か、あなたは、ずっとカメラに背を向け、髪で顔をかくすようにしてしましたよ。驚いたなあ、あんなプレイは、あの時が始めてだったの？」

「ハイ、本当に生まれて始めてです。沢山の人の前で、裸になったことも始めてです。ノンコや辻村さんにいわれて、夢中で脱ぎましたけど、心臓が飛び出るくらいドキドキしていました」



「流石にカントクさんは目が高かったね。ノンコにくらべて、あなたの方が、ずっと新鮮だといっていた。プレイの経験があるものとは始めてのものとの違いが、如実に出ていたのだらうね。でもお終まい頃は、結構ハッスルして、ノンコと声を揃えて、『ホラホラ、みせたげようか』とか、『もっと虐めましょうか』とか『なめるのよ』とか、かなり、きわどいことを口走っていたよ」

可憐にみえるタレ眼を、面映げに伏せて、

「ノンコが、そう云えというのですもの」

と、身をくねらせる。

「ところが、そんな言葉のプレイは、映画では、すっかり抹殺されていたよ」

「ええ、私の声は、殆ど聞きとれませんでした」

「それで、どうやら一安心したというわけ」
あつ子は大きく、うなずく。

「ノンコも、うぶなあなを、これ以上、こうしたプレイの方へ引込みたくないと思って努めてあなたの噂をしなかったようだよ」

「私、先日、辻村さんの書かれた、ノンコのカメラ・ハントを読みました」

「これは驚いた。私は、あなたに正体を明かさなかった筈だが……」

「ノンコから、それとなく、聞いていたので。もう、二、三冊、読みました」

「自分で買ったの？」

「あんな雑誌、誰にも買って貰えせんわ。恥かしいけど、自分で買い、胸をドキドキさせて、受け取ると逃げるように走ってしまいます」

「SM的なことに興味を感じたの？」

「いいえ、辻村さんが、どんな方か、知りたかったから……」

「びっくりしたでしょう」

「ハイ、正直いって……反面、すごく関心を持ちました」

「ホウ、私に関心を抱いたということは、とりもなおさずSM的なことに関心を持ったということですよ。その心理の過程を是非、きいてみたいなあ。食事、未だなんでしょう。どこかで、メシでも喰いながら、ゆっくりと話ませんか」

私への関心、則ちSMへの興味につながっている。私は内心、期するところあって、彼女を食事に誘った。

メモを攜んで立ち上がると、彼女も立ち上がる。

股賑をきわめる心齋橋筋を左に折れて、宗右エ門町へ、肩を並べて歩く。

いつしか石田敦子は、まるで恋人のように私に寄り添って、仄かなアバンチュールへの期待に頬を輝かせて、いそいそとしていた。

すし半中店の三階の小部屋へ上がる。

注文は、うどんすきの鍋ものと酒――。

チャブ台を挟んで坐ると彼女は、くつろいだ風情をみせて緊張の態度は、とけていた。

「ノンコが、あなたに呼んでいたように、アコと呼んでいい？」

「ええ、どうぞ。私は何と、お呼びしようか

しら？ ノンコのように、センセって呼ぼうかしら――」

「何だっていいよ。呼び易ければ」

「じゃあ、センセイにきめた」

他愛ない会話の中に心のしこりが、ほぐれ仄々としたムードが醸し出されていった。

仲居が、一通りの炊き方を示して、立ち去ってしまう。

酒を奨めると、意外にあっさりを受けて、近頃の若い娘は、物怖じせず、盃を口に運んだ。

年令をきくのも無粋と思われ、エトをきくと一寸口籠り「ウシ」と答えた。昭和二十四年生まれ、二十二才を過ぎたところらしい。

ノンコとの結びつきをきくと、夜間の和裁塾で、一年足らず一緒だったらしい。

野村信子に愛人があったことも知っていて岸和田まで帰るのが臆怖な時など、ノンコのアパートで泊まったことも数度あり、ノンコが、SM的な傾向を持っていることは、彼女自身の赤裸々な愛情生活をきかされて、薄々知っていたようであった。

あるいはと連想して、レスビアンではなかったのかと、冗談に紛らわして訊ねると、
「私にそんな気はないんですけど、ノンコは

独り寝が淋しいのでしょね。しきりにモーションをかけられて、遂々誘惑に負けて、ノンコのいう通り、触ったり吸ったりしたら、センセがハントに書いておられたような、あの人、スゴイケイレンを起こして、失神したみたいになって、びっくりしたことがありますの」

と、あっさり告白してしまった。熱気と数杯の盃で頬を火照らせ、思いがけず、なまめいた眼の色になって、アコも又、誘惑されたような態度を、いつしか示しているのであった。

既に私に電話をかけてきた時点において、内心、それを期待していたのではなからうか――。

すべては、ノンコの誘導によるよう見せかけながら、その実、石田あつ子自身、秘かにSM的な行為を希んで、それとは判っきり言い出しかね、私の挑発を待ち受けているかのようには思えるのであった。

「ノンコの実態は、映画で示したようなSではなく、被虐願望が強かったようだ。カメラ・ハントで御存知のようにね。アコのタイプから察して、あんたも、男性を虐めて欲だという行為より、虐められ、男性から羞かし

められ、自由に飛ばれることを希んでいるように思えるが、どうかね。私の推理は間違っているかい？」

「そんなこと、経験がありませんから、分かりませんわ」

「強いてプレイするとして、どちらか一方をとるとなると、アコなら、どちらをとる？」

「どちらもとりませんわ」

「ウソ——、だったら、どうして私に、忘れた頃、電話してきたの」

「映画のことや、ノンコのハントのことなどお話してみたかったから」

「そりゃ表面の詭弁に過ぎないよ。アコの本心は、ノンコとのプレイのように、自分を快楽の淵に沈めたかったのだろう」

「……」

「どうなの？」

たたみかけてきくと、アコの表情は奇妙に歪み、泣きべそをつくって、じっと唇を噛んだ。

ハッとして私は冷静にかえった。プレイへ結びつけようと、短兵急に、ことを急いで、無理矢理、相手をねじ伏せようとする強引さに気付いたからである。

すべてはフィーリングの問題であらう。

内心その気になっていたとしても、それはあっさり口に出せるものではない。

原点に戻って、私に電話をしてきたこと自体、何より雄弁な願望の現われではなかったか——。相手の口から、それを聞き出そうとする強引さが、反って反射的に殻に閉じ籠ってしまふ懼れ、なきにしもあらずであった。

若い娘の繊細な感情は、SMの願望を異質のものと考えて、口に出しているのを憚かられ、内心は愧じているのかも知れない。

柔らかいムードと、心通わせるフィーリングの問題である。

若い娘に、露骨に口に出して「セックスしようか」といえば、いやと首を振るにきまっている。口には出さねど、通じ合う心が、アベックホテルへと足を向け、くちづけと抱擁を重ねて、心燃え立たせ、セックスへと自然に導入してゆく——。

それと同じことが、いえそうである。

SかMかときめつけ、プレイしようと誘えば、言葉の露骨さに、若い娘は気分を壊してしまう。すべてはフィーリングの問題であった。

その事に気付いた私は、あわてて話を他へ外らすべく、頭の中で、SMに関連のある話

題を探し求めた。その気になれば、幾らでもある、ある。

「ノンコのハントの外に、どんなのを読んだの？ アコが私のファンと知って俄然、嬉しくなってきたね。よかったら知らせてよ」

「名前は忘れましたが、妊婦第一号の方を九州までハントにいったこととか、姫路で若い娘さんとプレイしたこととか」

「ウン、よく覚えてるね。奇クでそれ以外に興味があるものは、どんなの？」

「塚本という方のカメラ・ハント（カメラ・ハントは私の専売特許だが、彼女は混同している。確かによく似たようなものだからネ）も面白いし、たのしいわ。それから、ハントされた女の人の告白や手記など……」

アコは特徴のあるタレ眼に媚を泛かべ、口唇に笑みを湛えて、しきりに奇クの読後感を語るのであった。

いちいち、もっとも、成程とうなずき、彼女の喋るに任せて、私はハントの野望を、いよいよ昂めていった。

三本の銚子で私達は、かなり酔った。酒が彼女の口を軽くしていることも確かである。

隣のチャブ台に、三人連れのサラリーマンタイプの青年が座を占めたのをシオに、私達



は立ち上がる。

夕食の時間帯で、かなり立て込んで来たようである。

酔余の頬を撫でる冷たい、きさらぎの夜風も、快い春風の、そよぎのように思えて、私は既に腕を組み、道頓堀を西から東へと、そぞろ歩きしていった。

「アコにみせようと思って、とっときのフォトを持ってきたのだけど、どうする?」

プレイへの一つの陥穽である。

「見せてほしいわ」

「こんなところじゃ見せられないよ」

「喫茶店ならどう?」

「ダメ、人眼があるよ。凄いケツサクなんだから……」

アコは無言で、私の腕に縋っていた。

「今夜、何時までいいの?」

「少し遅くなるっておきました」

「南海電車で、ナンバから一時間はかかるだろうね」

「駅で降りて、十五分位、歩くの」

「余り遅くならないうちに帰らなくちゃネ」

「ええ——」

うつむいて、アコは私と並んで歩く。その行先に目的はない。私の決断を期待しているのだろうか。

道頓堀がきれて、堺筋に出してしまう。

信号で渡って、更に歩けば、舗道は急に暗くなって、ホテル群が点在している。

「フォトをみるために、一時間ばかり休もうか?」

「何処で——」

「二人きりになれるところで」

「何もしないと約束してくれる?」

「ああ、約束しよう、何もしないって」

「何だか怖いわ」

フト、カマトトめいたものを感じたが、女性本能の、私の本心を見抜いた懼れかも知れなかった。

ぐいと組んだ腕を引き、右に折れると、目についたアベックホテルの一軒に、組んだかいなを、しっかり押えつけるようにして、半ば引摺り込むようにして、私達は紫の色にボートと、浮かび上がったフロントに立っていた。

×

×

×

未熟の俤で、密室で二人きりになっただけ

に、何となく、ぎこちない雰囲気漂っている。

石田敦子は、顔をこわばらせ、不安と危惧の交錯する感情で、堅くなって机に向かって行儀よく坐っていた。

若い娘と相對して、最も扱いにくい時間帯である。

いきなり暴力めいたプレイに走れば、忽ち彼女は、遁げ出してしまうかも知れないし、場合によっては、大声で助けを呼ばぬとも限らない。迂濶には手が出せない。

さりとて、限られた時間を、唯、フォトを羅列して、みせるだけでは能もない。

何となく重苦しい空気を、どうして打破るかは、私の才覚にかかっていた。

ともかく緊縛のフォトをみせて彼女の反応を診断してみることが先決問題に思われた。

いきなり驚かせてもマズいと、選んできた緊縛フォトはオーソドックスのものが多く、極端な露出も殆どない。

六、七十枚もあろうか、袋からとり出してドサリと机上に投げ出す。M男性も数枚、挿入してあるし、クリスタールや、SMプレイめいたものも混じっている。そのどれに興味を示すかによって、彼女の嗜好を大体、探る

ことは出来る。

惹かれるようにアコの手がフォトに伸び、羞恥を顔一杯に漂わせながらも興深げにその一枚、一枚を克明にみてゆくのであった。

傍から覗き込むようにしながら、いつしか私の手は、彼女の肩を抱いていた。拒むでもなく抱かれた俤、アコは次々と眺めてゆく。頬は桜色に染まり、呼吸が微かに切迫していた。次第に心を昂ぶらせていることは、まぎれもなかった。

私はフト立ち上がって、バスに湯を入れにゆく。

戻って、

「もう、みな見たの？」

と、さりげなく声をかける。

「ハイ、一通り……すごいわあ。どの女の人、よく辛抱するのねえ」

感嘆口調に言って、フォトを揃えている。

「もっともっと強烈なのがあるけど、いきなりみせたら怖がると思って、もって来なかったよ」

「ノンコちゃんのは、ないのね。どうしてなの？」

「わざと持ってたなかったんだよ。だって、あんた達、仲の良い友達だろ。だから見せに

くかった」

「がっかりしたわ」

「でもサ、反対の立場で、仮にアコの縛った裸身のフォトを無断でノンコにみせた事が分かったら、アコいい気はしないだろ。仲のいい友達なんて、えてしてそんなものだから」

「でも、ハントに載っているんだから、一緒じゃないの？」

「あれは削除したり、隠蔽するところはチャンとしてある。何たって公刊だからネ。私のフォトはナマ——だから場合によっては困るのだよ。鮮明度も問題にならないしね。やはりプライバシーは守らないと、あとで文句をいわれるからね。ノンコにきいて、見せていいといえば、みせるよ」

「わかったわ。意外にカタいのね」

「プレイのルールだろうね」

「もう、フォトあれだけでお終まいなの？」

もっと見たい眼付きで、アコは催促する。

「ウン、あれだけだ。あれだって、アコに頼まれていないけど持ってきたんだよ。さあてこれで一休みの目的は終わったけど、アコ、どうする？ もうホテルを出たっていいけどよかったら、お風呂へでも入ったら」

内心の期待を伏せて、私はいかにもとり済



ました紳士ぶりであった。ここへ来て、ものの三十分も経ってはいない。

「ええ、でも……」

私の気持を忖度するように云い渡って、アコは、もじもじする。

「センサーどうぞ、お先に入って——」

「そう、じゃあ、さっと一風呂、浴びてくるかな——」

「一緒にと奨めても、ダメなのは分かりきっている。私はさっと立ち上がると、素早く衣服を脱いで裸になっていった。アコは眼をそ

むけて、所在なげである。

浅いバスに、湯は頃合にみたされていた。

湯のぬくもりに、体の背筋を伸ばしている。と、アコはトイレへ入った気配である。体の疼きに耐えかねて、官能の始末に、独りそつと顔を赧らめているのかも知れなかった。

鴉の行水で、湯から上がってくると、私はサッサと、備え付けの浴衣に手を通す。

「ああ、いい湯だった。さあ、いっといういで」
煙草をくゆらせながら、すすめる。巧みな索制につられて、うなずくとアコは、私の眼

を意識しながら上着とパンタロンを脱ぐと、下着だけになってバスへ消える。

透かし窓にチラと眼をやると、湯気に煙ってアコの白い裸身が、ニンフのように、うかび上がっていた。

(何もしないって約束してくれる?)

アコは決意した時、私にそういつてダメを押した。アコの謂う「何もしない」という意味は、「セックス」を指していることは燎らかである。ある程度の緊縛や、フォト、プレイを拒否しているのではなく、SMのプレイの結末で、セックスへと進みたがる私を警戒しての、予防的言葉であることは、充分承知していながらも、やはり私は、その言葉の持つ意味に、こだわっていた。

過去のハント女性の中にも、私は幾度かその言葉を聞いていた。そして、それはいつの場合も、自己弁護に過ぎないようであった。

SMプレイの白熱化と共に、めくるめく恍惚と陶醉は、泡雪の如く、初心を融かして、むしろ、自ら求めてくるまでに豹変すること、しばしばの経験である。

アコも又、前例に慨当するように思えても一を以て十を律するわけにもゆくまい。

その言葉にこだわること自体が、おかしい

のかも知れないと思いつつも、プレイへの発端を、どう持ちかけるべきか――。

一応納得の上で、行ないたいのが私の偽らざる気持であった。

ホテルの密室へ、二人で入った時点に於いて、既にアコの心は、ある種の期待を抱き、許容している筈と、これからの行為に、もっともらしい妥当性をみつけて、私はアレコレと、口説き言葉に腐心していた。

アコが出てきた気配である。バスタオルを胸高に巻いた姿が、チラリと覗く。私は当然の顔付きで、浴衣を手渡してやる。

ためらいもなく、身に纏って、頬を火照らせ、シンプルに掻き上げた、パーマ気もない髪を、うっすらしめらせて、アコは部屋に戻ってくる。

「どう、のどが渴いたでしょ」

サイダーを奨めると、美味しそうにのんで手持無沙汰に指を組む。顔を洗ったのか、白い皮膚の素顔をむき出しにして、妙に少女っぽく見えた。

私はショルダーバッグを開いて、無言で、カメラ、三脚、ストロボ、接続線などを取り出す。バッグの底に、細縄が埋まっている。

わざと見える様に、バッグの口を開いた俤



三脚にカメラを据えてゆく。

私の態度に気圧されたかのように、アコは黙ってみつめている。

セルフタイマーで、二、三枚、アコと喋る私を撮る。

「折角、準備してきたんだ。少し撮ってもいいだろう？」

「私なんかトテも……」

アコは謙遜してモジモジする。

「いや、素顔のアコは、すごくイキイキしている。まるで女学生みたいに初々しいよ」

あながち御世辞でもなく、真実思った俤に口走ると、

「うまいこと仰有って。誰にでも、そんなこというのでしょう」

と、一寸手強い。

「こいつ――」

そう叫んだかと思うと、私は制御出来なくなって、いきなり両手で肩を抱き、素早い唇を、呀っという間もなく、アコの唇に迫らせて塞いでいた。

アーウムーと、型通り悶えて、彼女の両手



は、私の体を引裂こうと力を、ぶつける。

それも須臾にして、両手の力が、ふうわりと抜け、強く抱きしめる俛に、女体は懐深くよりかかってきた。

そっと唇を離し、

「ね、いいだろう?」

と耳許を擦るようにして囁くと、

「ウーン、いや……センサー、いきなり暴力ふるうんだもの」

アコの声は鼻にかかって、拒否とはウラハラに甘えている。

「いつまでもジラせるからさ」

優しく抱きよせて、口説の私の声も甘い。

「じらせてなんかいないわ。センサーひとりいらいらしてるだけよ」

「よしよし、分かった。じゃあ、私はアコの奴隷になって、跪いて、アコに奉仕することにしたよ」

「いや、いや、センサーが、そんなことするの可笑いいわ。やっぱり威張ってなくちゃ」
「それじゃ私がアコを縛ることになる。いいの? それでも……」

「あたし、始めてなの。きつくしないで」

「ああ、きつくしない」

「あまり、愧かしい恰好させないでネ」

「よしよし」

「センサー優しいのネ。でもヒョツとしたら羊の面を蔽った狼じゃないかしら。縛って自由を奪ってから、ハントに書いてるみたいなことするんでしょう」

「そりゃ、やってみないと分からない」

「ソラ、本心をいった。非道いことしないと約束して——それならセンサーのいうこときくう」

「ああ、約束するよ」

シッカリしている——。言葉にゲタをあずけて、アコの体は柔らかく、しなった。

再び交わすくちづけ——。もうアコは、私の舌端の侵入を拒みはしなかった。せつなげに鼻腔から洩れる熱い吐息が、微かに私の頬をくすぐる。

そっと素肌の胸許に、片手を伸ばして、シコシコした隆起に手を触れようとすると、いきなりギュッと、きつく抓られた。

まだまだ、心の鎧は脱いでいないらしい。

「あ、痛い!」

唇を離して、顔をしかめると、アコは齒並



びのよい皓齒をくつきりとみせて、あでやかに笑った。タレ眼が悪戯っぽく、私をにらんでいた。

× × ×

裸身は、しなやかな牝鹿の如く、すんなりと伸びている。既に「性倒錯の世界」で見参ずみだから、今更、あれこれと書き立てることもないが、あの時は、プレイの進行で頭が一杯だっただけに、今こうして密室で一对一で相向かうと、改めて新鮮な感興が湧き上がってくる。

その気になると、アコはあっさりと浴衣を脱ぎ捨て、ブラジャーとパンティを私の眼前で外した。

最初は、こんなものしか撮れないのかと、その腑甲斐なさに、ハイド氏は、しきりにボヤク。

いきなり縄にゆけばよいものを、何をためらっているのか、柄にもなくフェミニストぶって、型に嵌まったヌード、十数枚を撮っていたからである。それというのも、彼女の願望が、未だにSかMか、判っきりと掴めなかつたからであった。

ったからであった。

映画では、まぎれもなくSの役柄を果たしている。それがよし、ノンコの要請であったにせよ、プレイ半ばより、アコも又、結構雰囲気にとけ込んで、ノンコと二人がかりで、東氏を虐めるのに、愉しげに振舞っていた。

本命のノンコが、豈はからんや、激しいM性の所有者とは知ったが、アコも又、Mであるとは限らない。言葉のハシバシに、しっかりした口調が現われるところなど、何となくS性も感じるのであった。

とすれば、縛られることに、アコは心ならずも協力する気になったようにも思えるのであった。

閨との境の唐紙を外し、頃合の縛り柱に向かって、全裸で立たせると、始めて私は一本の細縄で、心もとなげに後手に縛ってみた。案外平靜な面持ちで、アコは抗らわず、私のするが儘になっている。

私のこんな躊躇は、最近珍しいことであった。何が私を躊躇させるのか――。

アコと私との間に、完全な心の交流のないのが一番の原因のように思えるのであった。アコは正直いって、私に傾倒していない。何か、私という人間に好奇の関心を持ち、ふ



と、アバンチュールの渦の中へ、身を投げ出してみたい焦燥にかられて私と出会い、二人きりでホテルまできて、ここに到ったものの、心の奥底は尚、冷静を保っているかに見受けられるからであった。

SとMの相寄る心が、激しく火花を散らして燃焼してこそ、プレイも一段と愉しくなるが、一方が冷静であると、甚だやりづらかった。

私は、バッグに格納してあった縄を殆どとり出し、試みに、バサリと、女体に振り掛け

てみたが、アコの表情は、全然変わらなかった。

もうこうなれば、SMプレイの方はあきらめて、専ら緊縛美を追求する方が、賢明なようである。

「縛るよ、いいね」

つい、事務的な口調で声をかけると、

「ええ、いいわよ」

と、アコはアッサリうなずく。M願望の濃やかな秘情が感じられない。その冷静さに、反って、カッとした嗜虐の血がよびさまされ

私は、かなり荒々しく、柱ごと、犇々と縛り上げていった。

アコの背は、ピッタリと柱に密着して、首に縄をかけて柱に引きしぼってあるから、身動きもならず、相当に強烈であった。上半身縛り終えても、ポーカーフェイスめいたアコの表情は、依然として変わらず、強烈な緊縛にも関わらず、さして苦痛の色もなく、平然としていた。

「痛くないかい？ きつかったら、少しゆるめるよ」

初めての被縛に対する、いたわりの声をかけてみる。

アコはケロリとした口調で、

「ええ、大丈夫——どうってこともないわ」と、よく緊まった縄目に軽く眼を落として割り切っていた。

彼女の足許にしゃがむと、私は新たな縄で太腿から足首まで柱に縛りつけていった。

細身のスラリとした体に白縄は映えて、緊縛の肢態は美しかった。

縛り終わってストロボが光る。

彼女の性向が、SかMかの判断はつかなかったにしても、今こうして、現在目前に縛られて、海棠の花に似た、愁いを含む眼差しを

あらぬかなたへ落とすポーズをみては、心秘かに被虐の願望を抱いていると、断ぜざるを得なかった。

胸の隆起も、さしてふくよかでなく、乳房は、どちらかといえば未熟のようであった。又ぞろ触ってみたい欲望にかられて、ツト片手を伸ばすと、乳頭にふれる。ビクリと狼狽めいた表情を泛かべ、

「いけないわ、センサー。感じちゃう」

アコは、いやいやという風に首を振った。

その言葉を無視して、私の指はアコの胸を這い廻る。鼻腔にくぐもった、熱い吐息が、彼女の口から吐き出され、アコは束縛の不自由の裸身をきしませて、軽く悶えた。

「ああ、センサー、はずかしい。いっそ眼隠しして……」

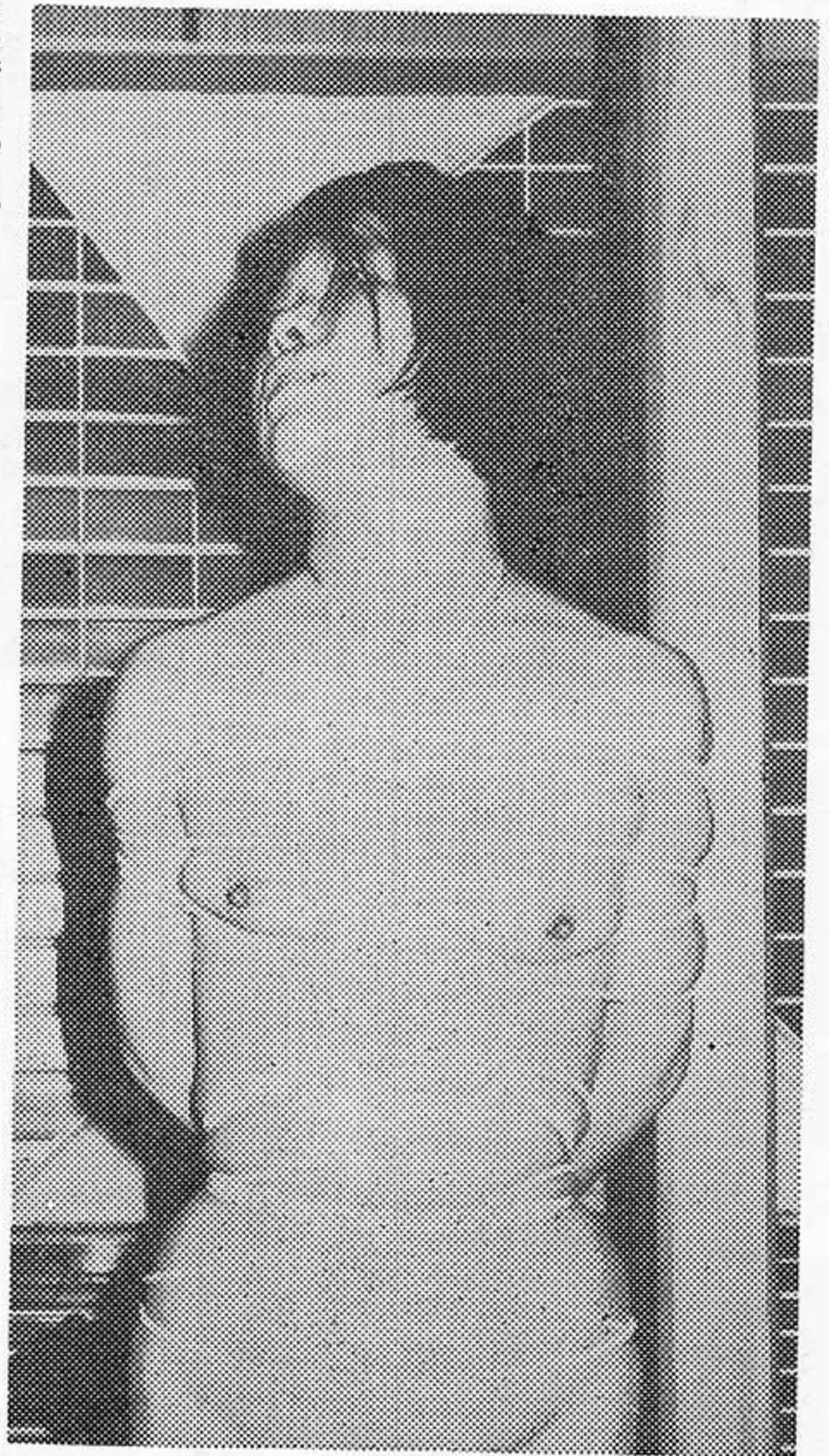
意外にアコは燃え始めている。きつく臉を閉じたまま、半ば譫言のように、眼隠しを求め、暗黒の中に、羞恥を包み込むことを、自ら願っていた。

浴衣の腰紐で眼隠ししてやる。スラリとした、たおやかな白く輝く裸身が、姿勢も崩さず、爽やかに直立し、私の指の愛撫を、むしろ甘受するかのように、軽く唇を開いて、皓齒をみせ、微かな歓びの喘ぎすら洩らしてい

るのであった。

アコは矢張り被虐を求めていたのだった。乙女ごころの愧かしさは、それを判っきりと口に言い出せず、私の直接の行動を、心秘かに待ち受けていたのではなかったか。

セックスに対する、危惧と不安を漠然と感じて、*“何もしないと約束して……”* といい乍ら、こうして、易々とホテルへ入ってきたところに、ノンコとプレイしたような、SMのたわむれを、内心期待していたのではなからうか――。



若い娘が、おぞましい、サド、マゾ的な言葉の口にするのは忌み嫌っても、内心求める願望は、私のちょっとした積極的な行動によって、その肉体が如実に歓びを示しているようであった。

躊躇し、逡巡していた自分がおかしく、行動がすべてを解決することを、改めて知らされた思いであった。私の直視を、一枚の布切れで遮蔽することによって、羞恥から解放されたつもりなのだろうか。

愛撫によって、しこりを持った乳頭と正比



例して、アコの歓喜の喘ぎは、いつしか、呻きにも似て昂まっていった。

頬が紅潮し、鼻腔がふくらむ。

「ああ、センサー、感じちゃう。いやーん、感じちゃうわ」

それは、精一杯のアコの、快楽と惚恍の表現であった。

私はいつしか、愛用の小型バイブをとり出して、双つの胸のふくらみに、交互に、愛の

伝播を送っていた。

叫喚は昂まる。

私の意識は、更に感度の高い位置を求めて視線を落としてゆく。

柱に、両脚を揃えて、しっかりと縛りつけた緊縛のポーズは、遺憾にも、私の行動の中止を余儀なくさせた。

緊縛とプレイの矛盾が、そこにも横たわっていた。

縄を解くと、放心したようなアコの全身がゆらりとゆらめき、フワフワッと私の胸にのめり込んできた。

力に押されて、半ば押し倒されるようにして、その場に、よろめいて坐り込む。

ポーカーフェイスの、虚勢をはった一見強がりにも似た平然とした態度は崩れ、うるおいのある、滑肌の赤裸々な女体が、じっと私の胸の中で息づいていた。

これが本当の、石田敦子の正体なのかも知れない。

こころもち、抱きしめるようにして、

「どうしたの、疲れた？」

優しく訊くと、激しく首を振り、

「いいの、いいの、何もいわないで。この尽じっとさせて……」

深々と顔を埋めて、独り呟くように、

「私って意地っ張りだから、ゼンゼン素直になれないのよ。センサーの書いたの読んで、私も、ああされてみたいと憧れて、自分から電話したくせに、素直にそのことを言い出せないの。御免なさいね、つまらない意地はって……」

言い終わって、羞恥にかられたかのように放恣な柔肌を絡ませてくるのであった。

「分かっていたんだよ、最初から——。若いアコに、SかMかなんて、きくこと自体、野暮だったんだよ。映画で、アコがSの役目をしたものだから、つい、きいてみたくなっただろうね」

「やれといわれたからやったけど、本当はチットモ面白くなかったの。もともと、エキストラぐらいの、軽い気持で、ノンコについていったのに、あんなことになったんだもの」

「いざとなると、女は大胆だよ。じゃあ、今のが本心？」

「ウーン、分かってるくせに……どうしても言わせるの。意地悪ねえ」

「もうきかない。そんじゃ、もう一丁、きつく縛ってやろうか」

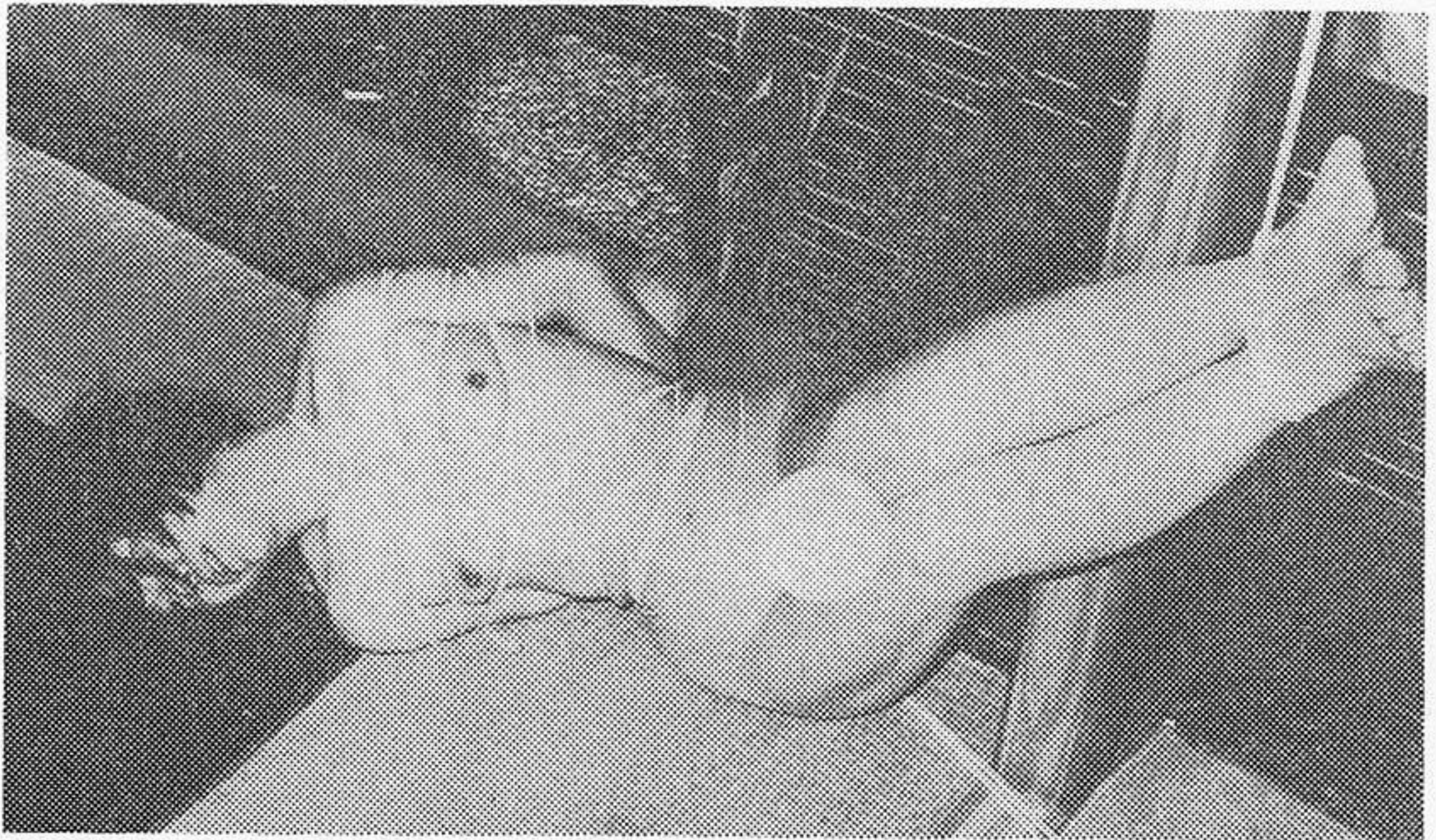
アコに軽くくちづけすると、そっと体を離し、細縄の束を引摺り出す。

深々と後手に両腕を捻じ、細縄は二の腕に凹みをつくって、強く喰い込んでいった。

今度は意識して、下半身には縄をかけていない。

胴を締めつけた、数重の縄は深く、坐って膝立てのポーズをとると、埋没してしまう強さであった。

石田あつ子は、この緊縛にも、さして苦渋



のいろを泛かべず、よく耐えていた。いな、むしろ、縛と緊縛された裸身に、秘かな自虐の喜びを感じているようにすら見受けられるのであった。

かなり手間のかかった縛り方だけに、あっさり解くのも惜しく、私はこの緊縛に、相当のフィルムを費消していった。

両足首に縄をかけて、鴨居に吊り下げると、下半身が浮いて、流石に彼女は眉をしかめ、足首の苦痛をこらえるのに、歯を喰い縛った。

足吊りにした俛で、ゴロリと俯伏せにさせ、試みに、軽く、臀部を平手で叩いてみる。

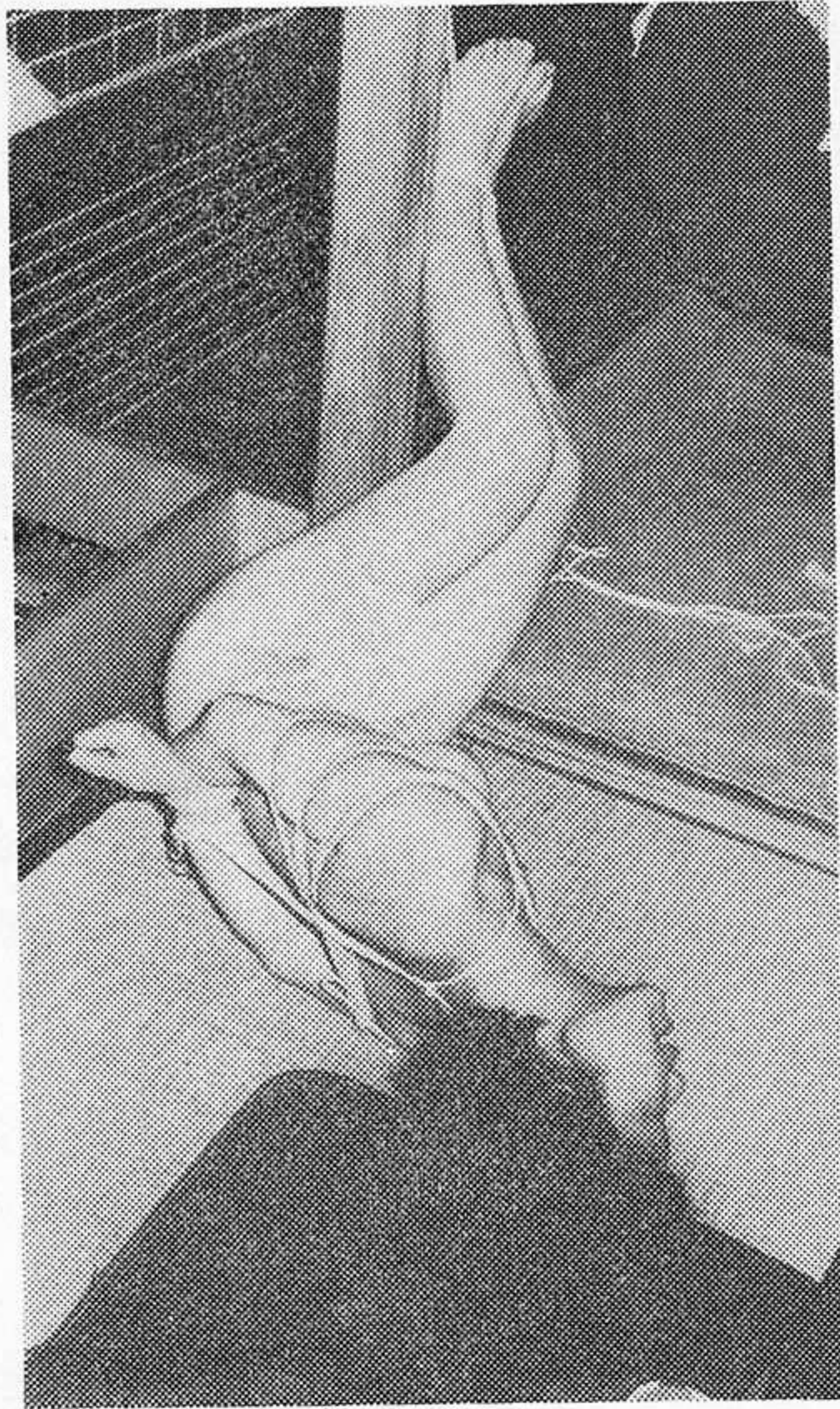
腰が弓ぞりになった方が苦しいのか、背をのけぞらせて、アコはウンウン呻いた。

「センス、腰が痛い。あっ、痛い。早く仰向けにしてエ」

「喘ぎ喘ぎ叫ぶ。よいしょと仰向きにさせて、柱に近く体を引寄せてやると、やっとラクになったのか、

「ひどいわあ、センス。おしり、ぶつなんて」

「痛かったのかい？」



「ウウン、ちっとも痛くないけど」

「じゃあ、ひどくなんか、ないじゃないか」

「でも、ぶたれるより、撫でてもらった方がいいわ」

「ノンコなんか、もっともっと凄かったんだぞ」

「あの人、失神すると、何も分からなくなるから、何をされても感じないのよ。私は失神なんかしないから、痛いものは痛いと感じるわよ」

「フーン、アコは失神しないのか。ハハ、失神するほどの経験がないんだろう」

「平気でもないけど、ノンコみたいじゃないわ。あの人ったら、オッパイ触っただけでも時によったら失神するのよ。ちょっとオーバーだわ。あんな調子じゃ、満員電車に揺さぶられても、ボーツとするかも知れない。センセー、足首が痛いわ。ほどうてえ」

「よしよし」

甘えた声につられ、私は云われる俤に解い

てやる。このあたり、根っからのフェミニスト振りで、嗜虐の血が、どうのこうのって柄じゃない。

横たわった俤、アコは巧みに、片腿を折り曲げて蒼丘を蔽い、私の視野から羞恥を隠蔽させていた。

「痛いかい？」

「ウウン、もう少し我慢出来る」

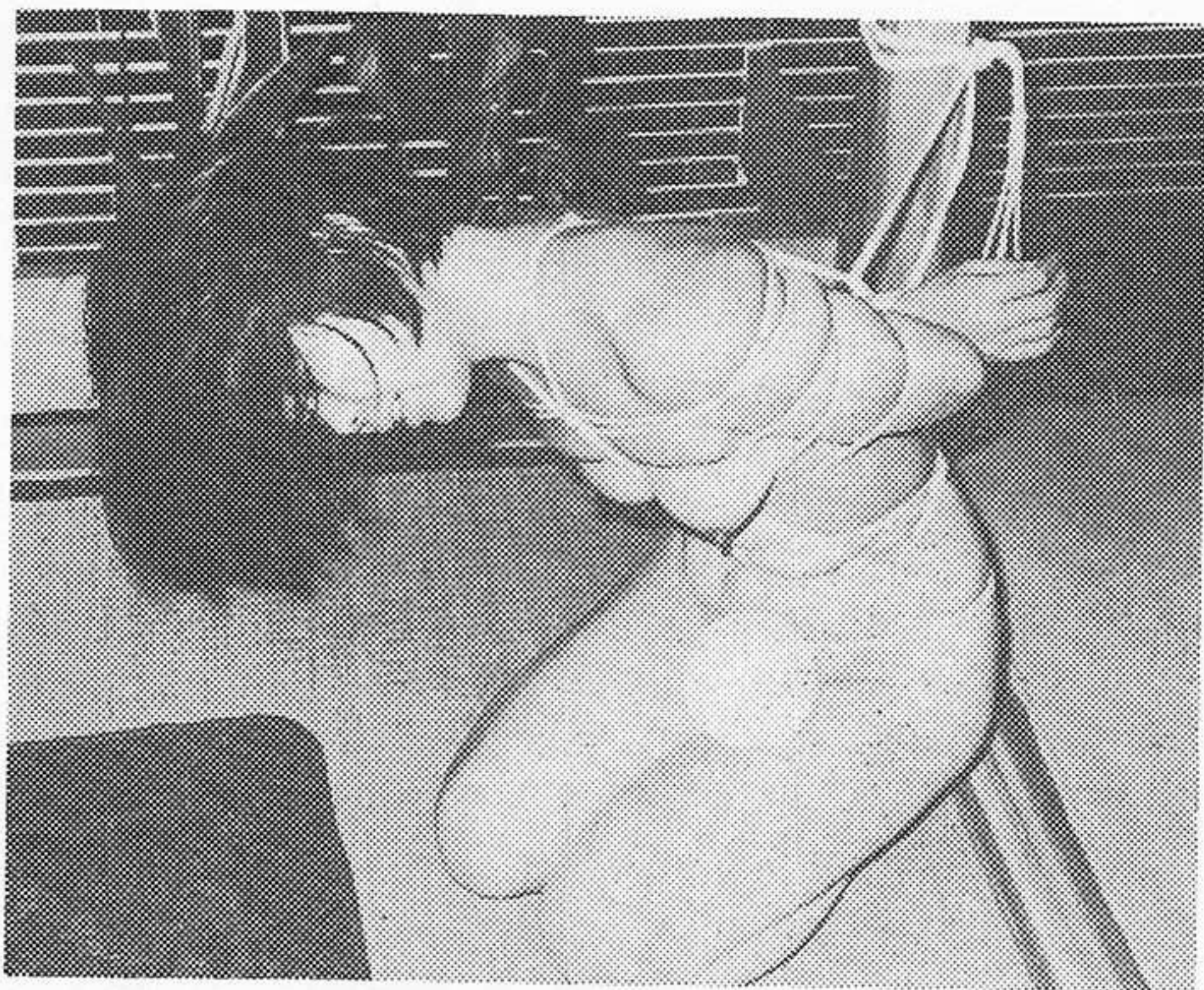
鸚鵡返しにいつて、ニツと笑みをこぼし、アコは、犇々としめつけられた、わが肌の苦痛を、むしろじっくりと味わい、楽しんでいく風であった。

つい比較するノンコとのプレイの対抗を無意識のうちに意識しているかにすら思える。

悪友ノンコに誘われてSを演じ、時によってはレズの対象になり、今、私の眼前でMの化身になって、裸身をくねらせている。

好奇心の強い年頃だけに、そうした機会に接し、自らを傍観者とせず、むしろ今夜にしろ、積極的に自分の方から私に接してきたあたり、確かにアコは現代に生きる、アバンチユールの強い女性であった。

抱き起こした彼女の瞳孔は、私をみつめて心なしか挑んでいるように光った。胸の厚くない細身の体が、ありありとMの願望に疼い



ている。
ぎ止める。

坐らせると、後手に縄をつないで、柱に繋ぎ止める。
強烈な胴縄の締めつけで、くびれた胴の肉

が、ポックリと縄目からハミ出している。

二の腕の、細縄の喰い込みは痛々しいまでに深かった。
「捕われの女奴隷ってとこだな」

鮮烈な、そのポーズに眼を細めて言うと、アコはチラッと顔を挙げ、

「センサー、私でも気に入ってます？」

と問いかける。

「ああ、ほっそりしていると
ころが被虐的で、すぐくプロ
ポーションがいいよ」

「そう、本当ネ。じゃあ、センサーさえよかったら、書いて下さっても、いいわ。一寸
愧かしいけどなあ」

アコは、はじらいの笑みをこぼして、私を見上げる。

「有難いね。アコのその言葉を、もっと早く
きいていたら、もっと、いろいろの緊縛のポーズをとっておくのだった。未だ二種類しかないんだよ」

「センサーさえよかったら、もっと縛ったって、いいわ。私は構わないから……」

アコは、ひどく協力的である。

私は吸いかけた煙草を押し潰し、急にアコが、いとおしくなって、女体の傍にいざりよると、犇と縄で締まった裸身を抱きしめ、ポツンと飛び出した乳首を、いつしか激しく愛撫していた。

咽ぶような歓喜の呻きが洩れて、美しき縛しめの女体は微かにおののき、媚を含んだ唇が、私のくちづけを求めるかのように近づいてきた。

口腔は渴いていた。全身の火照りと官能の疼きが、ぬめりを奪い去り、微かにのんだ酒の醗酵したような匂いが私の嗅覚に迫った。

既にアコの意志は沮喪していた。

傾斜した上半身で、膝は崩れ、太腿の筋肉は弛緩している。

禁断の実は、ねっとりとした甘い蜜の味を湛えて、蠱惑的である。

一瞥して、私の心は燃えさかり、胸の亢ぶりを抑えようもなく、柔らかい感触につられて一方の手が、当然のように、かたちよい蒼丘を求める。

後手を高々と引きつらせて、アコは横ざま

に倒れた。

ヘビー・ペッティングに、したたかに指頭を濡らせても、私の脳裡の片隅に、

(何もしないって約束して……)

と言ったアコの言葉が、オリのように澱んでいる。

こらえようもなく堰をきって、陶醉のはためきの叫喚が、夜のしじまを破って、部屋にこだましても、アコは野村信子のように、忽ち失神はしなかった。

心の何処かで、辛うじて理性を働かせて、その範圍の快樂の渦の中で、肉欲の欲びに浸っていた。

× × ×

SMのプレイの、心と心が融け合ってくるにつけ、私の縛りは、段々と簡単になる。

正直いって、クドクドと、十重二十重の縄をかけ、雁字搦目の自由のきかね緊縛が、大いにプレイの進行に齟齬をきたせ、むしろ煩わしくさえなってくるのであった。

縄目に遮られない、アコの柔らかい肌に、じかに接したい思いの方が強くなってくる。緊縛といい、羞恥や露出の体勢をとらせ、バイブなどを使うのも、前戯に等しい行為に思われ、嗜虐から欲情へ向かう一つの手段の

様に考えられなくもない。

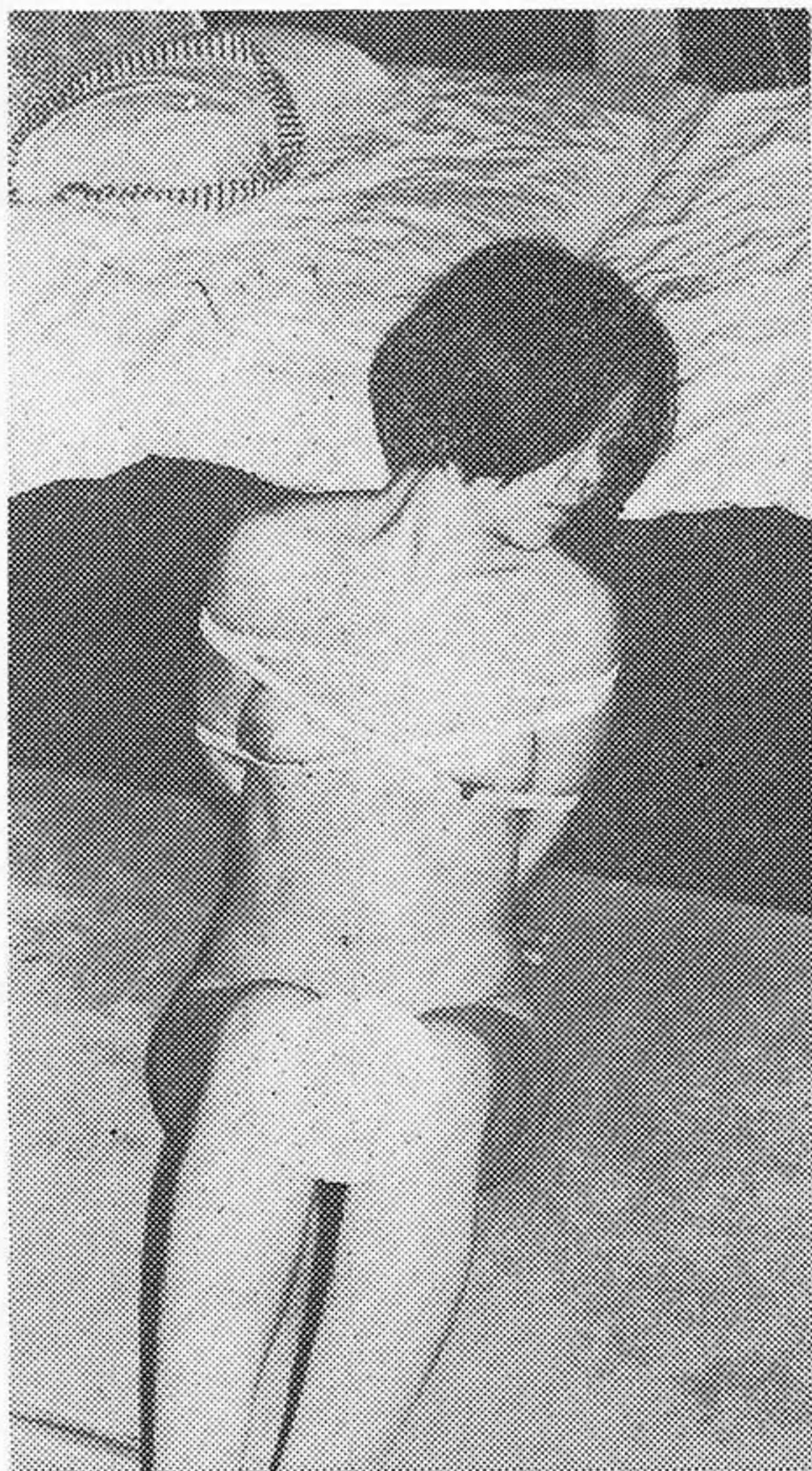
私の同好の知人は、よく言うのであるが、縄をゴテゴテと沢山、使うのは、所詮、見せるための緊縛であり、視覚的に強烈なSを感じるフォト的なものに過ぎず、真に、愛する者同志が、SMを交えたプレイをする時には腰紐一本、細縄一本で充分、こと足りると謂うのであった。一本の縄で、背後に両手首を縛しめただけで、既に自由を奪うに充分ではないか——美肌を愛で、その余り、打擲に走っても愛撫しても、必要以上の縄は、邪魔物

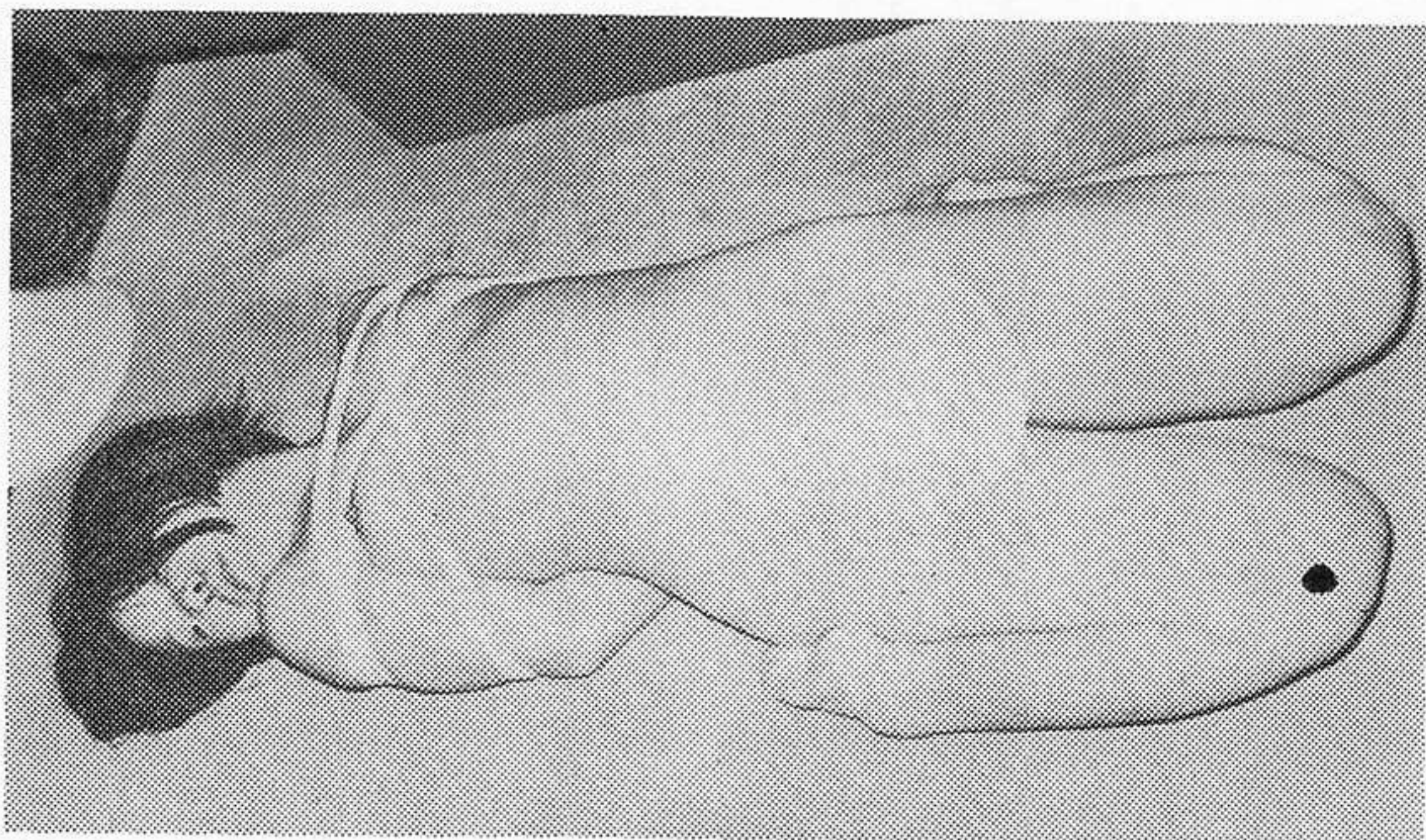
以外の何ものでもないと言ったのであった。

縄目によって開股せずとも、信じ合い愛する同志なら、自ら進んで絢爛と露呈し、放恣にのたうつと、我意を主張するのであった。

確かに、それも一理である。しかし、その論理は、セックスを前提とする、SMプレイの稀薄な者の言で、緊縛の醍醐味を知る者にとっては、一概には、うなずけない。

セックスには到って恬淡として、女体の逆吊りに嗜虐の欲びのきわみを求める同好のドクター氏もおれば、渡部氏の如く、蠟責め、





針責めなどにSの極致を覚える人もいる。

すべては一長一短であろうが、それだけに一言にSといっても、その嗜好は、多種多様であった。

さりながら、私の最近の、緊縛の落ちつく先は、むしろ簡単になりつつあった。凡ゆるS的行為を、すべて見究め、し尽した果ての再び元へ還元してゆくようで、そこには、数十年に亘る斯道行脚の、飽和状態も確かに含有されていくようである。

今私は、アコに対して最も初歩的なごく簡単に胸縄をかけただけの後手で縄目の少ない女体を、しみじみと鑑賞しているところであった。

恍惚のアクメの過ぎ去ったアコは、どこことなく物懶げで、再び始めようとした縛りに対し、軽い嫌悪の色を表わしたせいもあった。

プレイに未熟の女体は、一度の陶醉境の到来で、既にこと終われりと考えてか、貪欲に頻度を求めず、淡泊であった。

それはアコの女体の構造でもあろう

し、未婚の彼女にとって、性の成熟をみぬ、無知のせいであったかも知れない。

若くても淫奔度の強い女——、ノンコなどそのいい例であろう。

年齢的にSM経験豊富でも、淡泊な女——渡部好美など、性には淡泊である。

だから一概にいえぬとしても、アコの場合経験の乏しさと、性への潔癖感からくる嫌悪であったかも知れない。

私のいうが尽に、アコの柔軟な体は、両膝を屈折した俛で、背後に倒れ、徐々に腿を開いてゆく芸当をみせた。

執拗に、再びの陶醉を与えようと、私は五感をうずかせて女体に寄り添う。

「もう、いけないわ」

「どうして？」

「どうしてでも」

冷たい感触を湛えて、アコは反撥するようにいう。どこことなく凜とした口調に、私は素直に引き下がりもならず、ムラムラと意地が手伝ってきた。

「だって、もっと縛っても構わないといったじゃないの」

「縛ってもいいけど、もうこれ以上、感じさせないで……」

アコの眼はフト哀願するように、うるむ。自分がハシタなく燃えるのを、懼れているかのようにあった。

「いやなの？」

「ウウン、いやじゃないの。でも私がセンサーを、たびたび求めるようになったら、センサーが困るでしょう。そんな私になるのが怖い」

私は思わず、ぐっと詰まった。性に開眼した時、アコは、自分の体を持て余すのを懼れているかの口吻りであった。

火をつけて、数度出会って、遠ざかってゆく。そんな私に一矢酬いた、痛烈なる言葉であった。

熱からさめたように思わず寄り添っていた体を起こすと、アコはあわてて付け加えた。

「センサー怒らないで——本当は、もっと、もっとと抱きしめて欲しいのよ。私の気まぐれな火遊びみたいだけど、チョッピリ、センサーが好きになったの。約束を守って、何もしなかったから——。センサーが若し、けだものになったら、縛られている私は、全然抵抗出来ないんですものネ。その気だったら、好きなこと出来たでしょうに、触るだけで、何もしなかったわ」

「始めからの、約束だったもの——」

「でも、こんなことになって約束を守るだけカたいわ。私ネ、若し又センサーに抱かれたら、自分で約束を破りたくなる様な気持ちにかられていたのです」

「私自身、実の処、自分を制御するのに精一杯なんだよ」

「私って本当は悪い女だわ。話さなかったけど、将来を約束した彼がいるのです。彼のために、それだけは守っていたかったの」

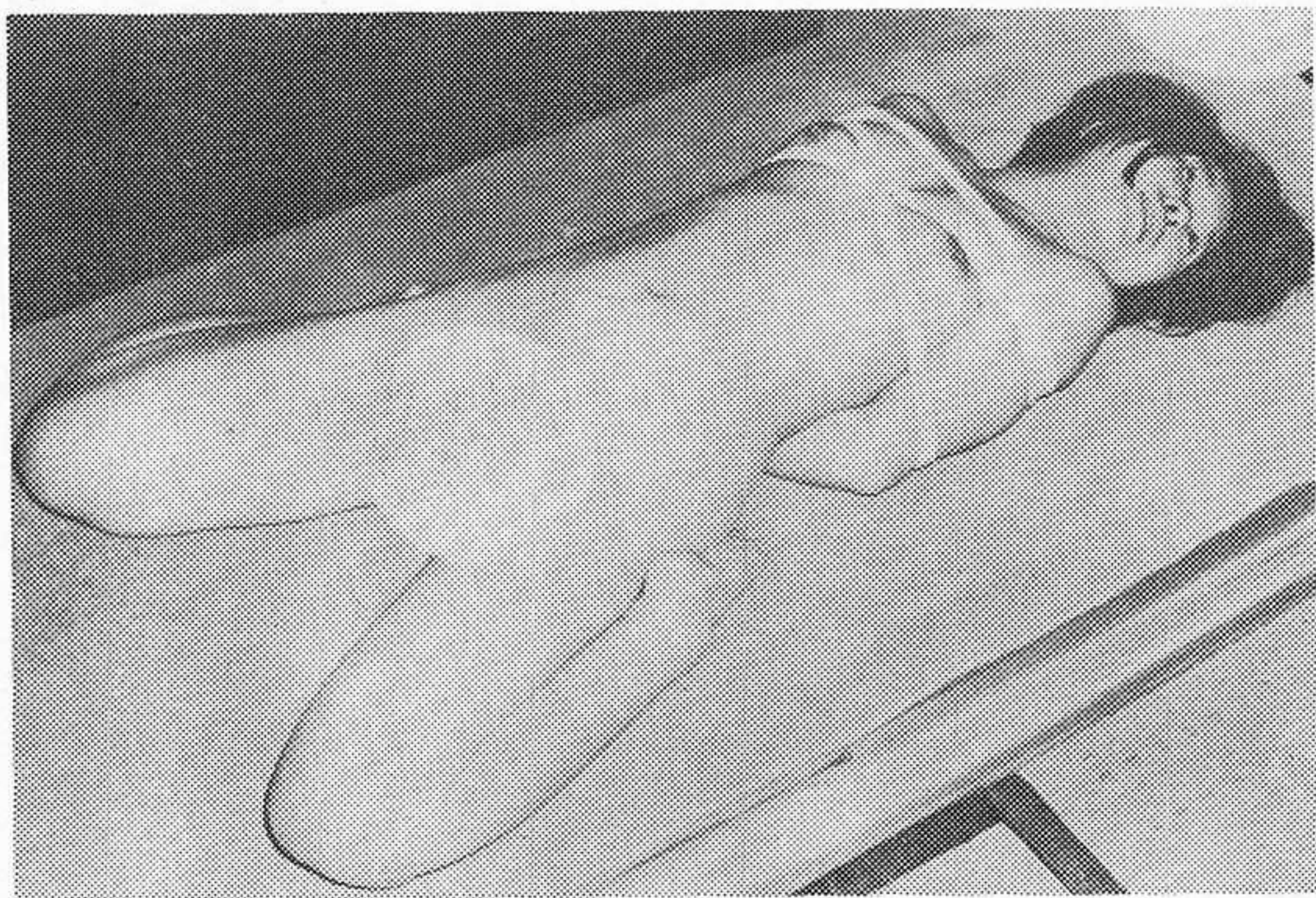
「いいじゃないか——守ってやるべきだよ。例え、彼とは婚前交渉があったとしても」

「分かるの？」

「分かるさ——」

私の指が、既にそのことを経験から熟知していた。敢えて告げなかったまでである。

「センサー経験、豊富なものねえ」



「約束だから守ったけど、若しアコが、彼の存在をいわなかったら、バージンでないだけに、私も分からなかったよ」

「映画に出たこと、ノンコとのこと、今夜のこと、私のこんな体験、彼は何も知らないのよ。凄く純情なお坊っちゃんなの」

「同じ会社の人？」

「ウウン、去年の冬、スキーで知り合った大学三回生——来年卒業したら結婚すると約束してあるの。だけどセンサー信じて。私の体は、あの人以外には、あげていないのよ」

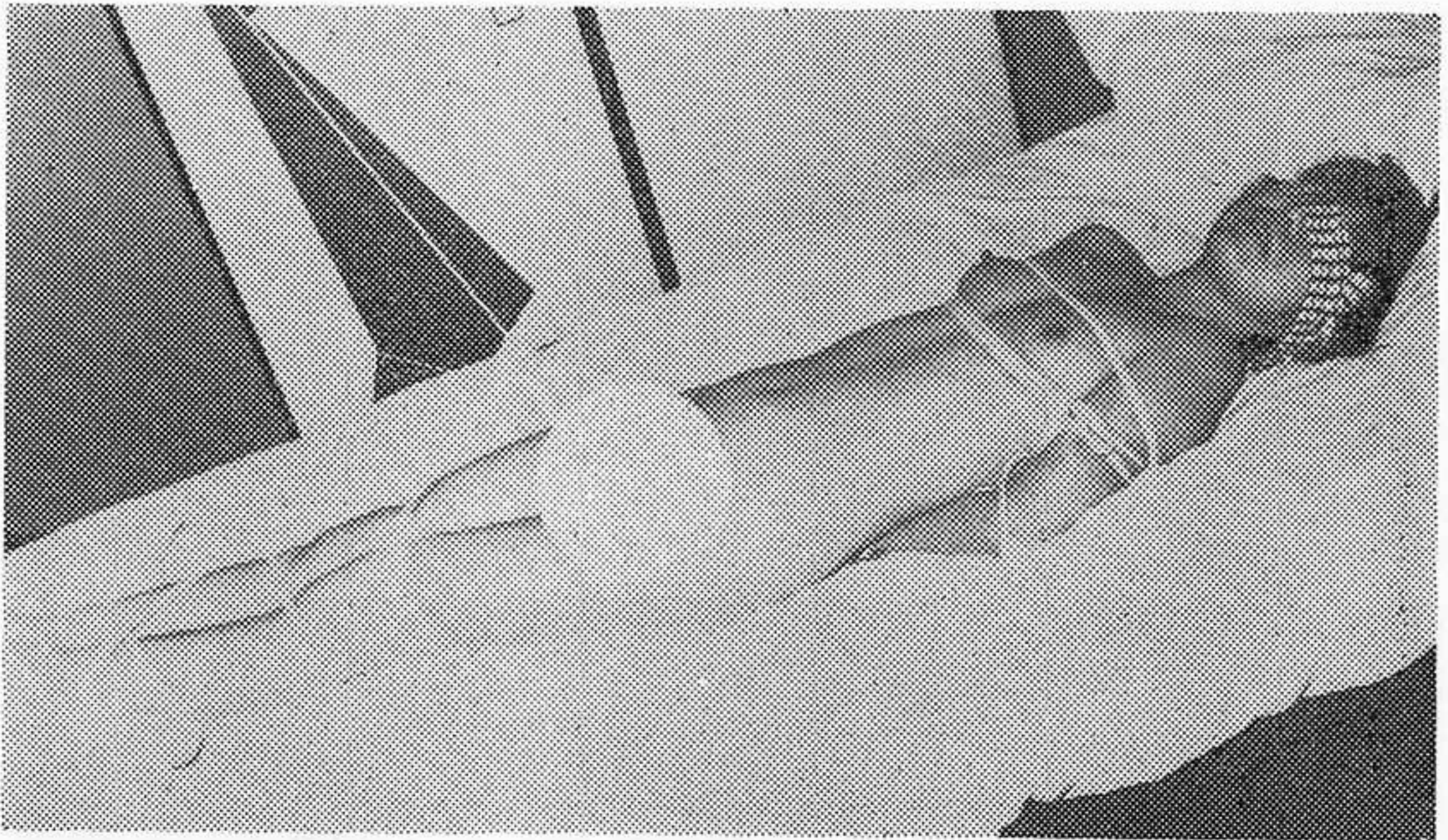
「信じるよ。プレイや、キッス、ペッティングは別ものと割り切っているんだね」

「いけないかしら」

「いけないもないさ。といっても、一歩間違えばの危険な火遊びさ。私だからいいものの、男はこういう密室では、ケダモノになり勝ちだよ」

「センサーを信用していたもの」

「思わず苦笑が頬を伝う。SMプレイに耽溺する筈が、思いもかけず、わが娘と同年代のアコに、つい日常の私が出て、老爺心の忠告めいた言葉を出したのが、我ながらおかしかった。」



すっかり熱は、さめていた。もうこれ以上プレイする気にならず、時計を覗くと午後九時半を廻っていた。岸和田市まで帰るには、そろそろ時間の余裕は少なくなっていた。私は黙って、簡単な一本の縄を、ほどき出した。

「もうやめるの？」

「九時半だよ。そろそろ引揚げなくちゃ、電車がなくなるだろう」

「大丈夫よ、もう一時間ぐらい」

帰るといえば、急に別れが惜しくなったのか、アコは、上体をゆすって、イヤイヤという風情を示した。

「支度する間もあるしさ」

「五分もあれば充分よ。ねえ、センサー。もう一度、目隠しして——」

言うなり、アコはヒョイとダブルのベッドに跳び移り、長々と体を伸ばして、手を差し伸ばしてくるのであった。

翻弄されたような気持で立竦んでいたが、媚の中に、挑むような気迫のまなざしを見て軽い駭きと共に、私の好色の血が俄に甦ってきた。

目隠しという、隠れ蓑の暗黒を求める心は今ひとたびの恍惚と陶醉の境地を、あきらか

に希んでいた。

縛らぬ前に、私は目隠しを施してやる。仰向けに寝た、扁平に近い胸が、微かに弾んで息づいている。

上体を抱き起こし、手早く胸縄をかけて背後で両手を縛ると、アコは既に淡い鼻息を洩らして、喘ぎ始めていた。

くるりと俯伏せにし、幾分の力をこめて、パシパシと臀部を平手打ちする。

「あーん、痛いよう、痛いよう」

甘えた啼き声が、シーツの下から、くぐもって聞こえてくる。

私の手にバイブがあった。

アコは一瞬、バネ仕掛けの人形のように躍動した。バイブが徐々に私の手許から移動していった。

しっかりと両腿を揃えさせ、素早く両脚を揃えて縛り合わせる。

アコの悦楽の呻きは急速に昂まってゆく。

小粒の「ぐみ実」を唇に銜え、私は美味を満喫して、しゃぶっていた。

悲鳴に近い愉悦の聲が、高々と口をつく。その悲鳴を防ぐべく、私の唇は、「ぐみの実」から、アコの唇へ移動していった。

「ああ、センサー、好き——センサー、好き

よ……」

耳をくすぐって走る囁言が、私への呼びかけとなって、アコの全身は刹那、激しく慄えた。

× × ×

慌しくも短い束の間の歓楽だった。僅か十分たらずの恍惚の宴を終えて、余韻を愉しみたげなアコを、せき立てて、私達はホテルを出た。

ナンバまで、歩くには遠く、タクシーを利用すれば、四、五分もかからない距離に迷って、日本橋から地下へ潜り、近鉄で駅一つのナンバまで乗ってゆく。

「センサー、お電話したら、又、会って下さる？」

「分からない」

「どうしてなの」

悲しげに聞き返す。

「大切な彼がいるじゃないか。私が制御出来なくなったら困る」

「今夜みたいなら」

「精一杯の理性で抑えているんだよ。プレイはね、度重なればエスカレートするよ。約束が守れなくなっても知らないよ」

「分からないんでしょう、妊娠さえしなければ

ば……」

大胆にいった、アコは私を見上げた。その眸は、妖しく乱れている。

「分からなくても、アコ自身の心が知っている筈だ。余り近づく怖いといったのは、アコだろう」

「知らないッ！」

ポンと膨れてみせて、ソッポを向く。

「いいわ、又、電話するから……」

投げやりにいったアコは、もう人影も、まばらになった、南海電車のナンバ駅の構内を小走りに改札口へ走る。

定期券をチラリとみせて改札口を通ると、広い構内の中央に佇む私に、サッと手を挙げて、エスカレーターで上昇していった。

石田敦子は、通り魔のように、夜のひととき、私の心の中をかけぬけていった。

電話をしてくるかも知れない——。

或は、もう、これきりかも知れない——。

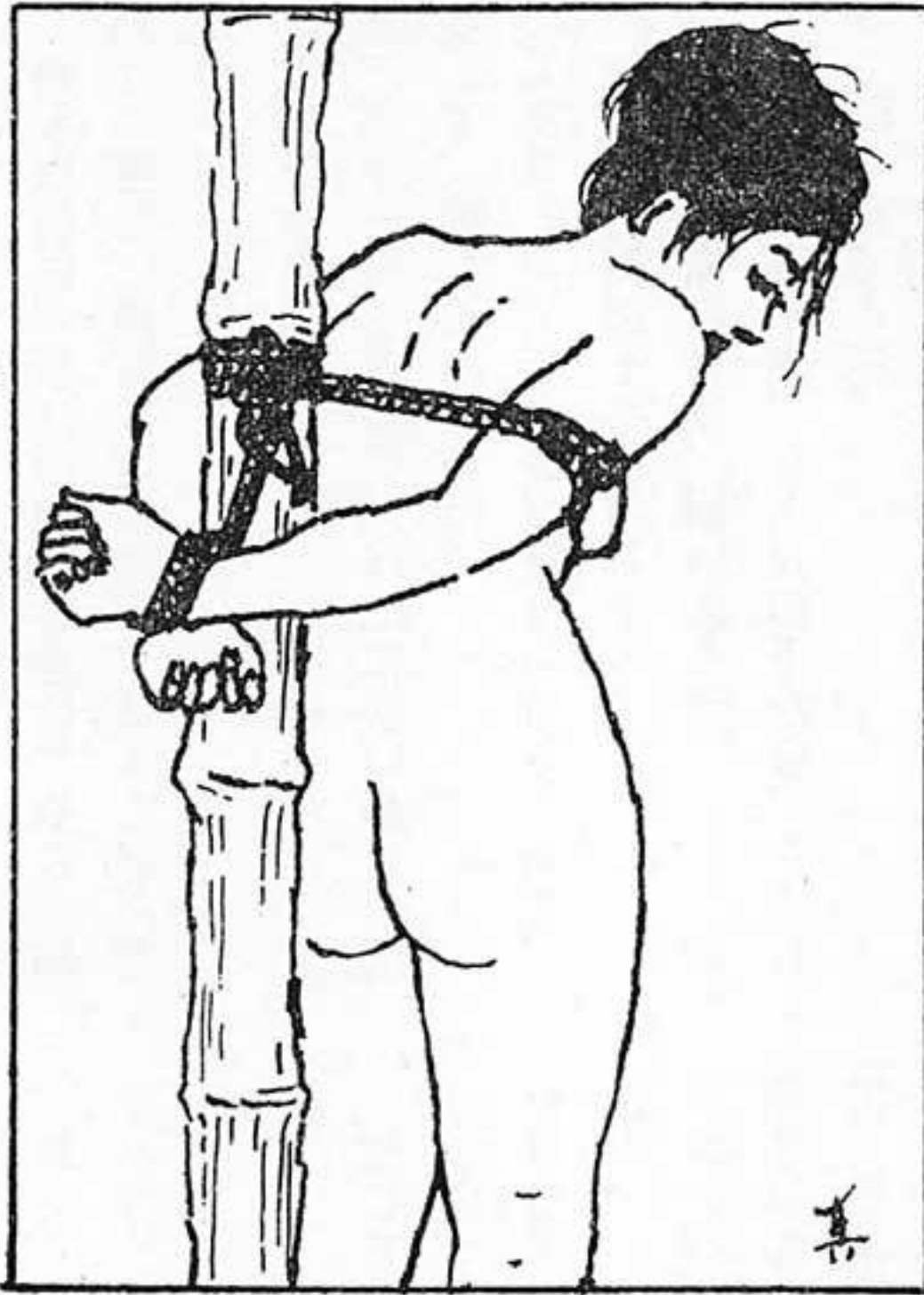
その時は、どう対処するか——。私は心にきめかねて、鼻腔に一抹の、女の肌の余薫を残しながら、如月のミナミの巷へ、酒の香を求めて、さまよっていった。

——(終)——

擬作「花と蛇」

愛する静子さまへ

国川 栄 一



カット・堀 真彦

奥様。突然に、このようなお手紙を差し上げ、おおどろきになられたことと存じますが、お許しのほどを、お願い申し上げます。

私は、森田組の雑役夫として働く五十一才の醜い下男でございますが、時おり垣間見て参りましたが、奥様のお美しさが目の奥から離れずに身の程も知らずに、恋いあこがれて参ったものでございます。

私が初めて奥様を間近かに拝見できましたのは、奥様が森田組に連れ込まれて、田代さん達の見ている前で川田さんに強制浣腸を施

された直後で、奥様のお出しになったものを取り片付けるために、親分さんが私をお呼びになった際でございました。

パンティすら許されない丸裸で、小さくちぢこまって、さめざめと泣き伏していらっしゃった奥様のご様子から、今の今まで、どのようなハレンチな羞かしめがおこなわれていたのか、私のような者にも、その時、十分に想像ができました。

「おしとやかできれいな顔をして、よくまあこんな恥かしいものを、みんなの前で出してみせられたものだ」と罵られて、奥様は身のおきどころもない風情でうつむかれ、ブルブル慄えていらっしゃいましたが、私はお美しいお顔と艶やかな乳白色のうなじを眺め、こんな美しい女の人がこの世の中にいるものかと我が目を疑いました。

このことを初回として、奥様がオシッコや浣腸責めをお受けになる都度、奥様の尿瓶やブリキ製のオマルなどをお洗いで参りましたが、何度となく跡仕末して参るうちに、次第に奥様のそれが、奥様ご自身の分身としていとおしく思えて参りますと同時に、奥様が他人ではなく私の可愛い娘か、あるいは身も心も許しあった愛人のように思えて参ったのでございます。

まだ、奥様がおみえになって数週間もたたないうちに、近隣の極道達を集めて奥様の花

電車のお披露目があるという噂が、私のいる下男部屋にも流れて参り、びっくりしてしまいました。

世が世ならば、立派なお屋敷で沢山の召使にかしずかれながら、遠山家の若奥様としてお花や茶の湯をたしなむ優雅な生活をお送りになってゐる筈の奥様が、こともあろうに暴力団の資金源として、多勢の下品な男達の好奇なまなざしの中に羞かしいお姿を晒させられるのかと思うと、私はお気の毒さで、いかりと悲しみのハラワタが煮えかえる思いが致しました。

しかし私のような無能非力な役たただずではどうするすべもありませんでした。そして当日、私は台所の隅で奥様をさかなにするお酒の燗番をしながら、大広間から聞こえてくる多勢の野卑な男どもの高笑いに胸をしめつけられる想いで、過ごしたのでございます。

みんなが立ち去って、ガランとした大広間の跡片づけをしておりますと、大きな紙クズ箆の中に、こま切れになったり、押し潰されたりしたバナナのむき身が棄てられているのを発見して、奥様のお心をおさし申し、涙を新たに致したものでございます。

でも、このようなことは、振り返ってみますと、まだ序の口でございました。やはり一番私を苦しめ悩ませたのは、あの薄馬鹿の大男捨太郎と奥様の、例のショーでございます

た。こんなことを申し上げますと奥様に嫌われると思いますが、本当のことを申し上げますとあの日だけは私も見物衆の一員に加わることが許されて、大広間の一番隅っこで遠くから奥様の悲しい御結婚式のご様子を、初めから拝見させて戴いていたのでございます。お許し下さい。

私は恋人が今、目の前で犯されているような錯覚を覚え、腰がガクガク震えておりました。

できるだけ、奥様がお取り乱しにならないようにと、心から祈っている私のせつないおもいに反して、捨太郎の妖しい手練手管にほんろうされ、官能美豊かな奥様が身悶えなさるのを見て、目を覆いたいような気持でおりました。

にもかかわらず、憎い捨太郎の奴は獣のような手でこれ見よがしに、羞かしさで赤く火照っている色白な太腿を握みあげ、乗り出して来る見物人達の鼻先に示して自慢するので私は気が狂いそうになりました。

そして、あげくの果て淫臭渦巻く大広間の中央で、奥様が後手に縛られた縄尻を、天井から垂れ下がっているロープにつなぎとめられて、かねて強要されていたとは云え、見物人達のまぶたをとかすばかりの妖しく悩ましい太腿や双臀を、ぐっとうしろの方へお反らせになった時、とうとう私は目まいを感じ

じてしまいました。

私の焦点の定かでなくなってしまうた視野の中で、非常に長い長い時間の間、奥様のお美しいお顔が苦しげに歪み、形よい乳房が波打ち、まろやかな腰が悶え続けたように思えました。が、実際は十分ばかりの短い時間だったそうでした。

しかし、その十分ばかりの間に、お可哀さうな奥様は、女としてみせてはならない恥かしい姿を何度も露わにされ、遂に気を失ってしまったのでございます。

いろいろとございましたが、女として耐える以上の羞恥責めを与えながらも千代様はまだ、あきたらずに大男の黒人を呼びよせて捨太郎の時以上の華やかなショーを催そうとなさっていらっしゃることは、すでに奥様もご存知でございます。

このたび、その黒人達の到着が先方の都合で遅れておりますので、その幕つなぎと申すべきオシッコ・ショーのお相手として、白羽の矢が私めになったのでございます。

たとえ殺されても、おかわいそうな奥様を虐げる役など引受けるものかと、一度は決心致したのでございますが、私がやらなければ他の淫虐な男がひどい仕打ちで、奥様の紅涙をしぼりとるに違いないと気がつき、内心喜びとも苦しみとも、判別できない複雑な気持で、これをお引受け致したのでございます。

そして淫らな想いに、ほくそ笑みながら、奥様のこの世のものとも思えない身悶えの姿を期待している千代様達の企てを、ひっくり返してやるのと同時に、この羞恥の極致から少しでも奥様の心をお救い申し上げるために、内緒で奥様に予め、彼等の計画をお知らせし、せめてお心の準備なりともさせてあげようと決心したのでございます。

遠まわしの云い方は止めて、端的にズバリ申し上げますが、私の氣持を察してお許し下さいますようお願い申し上げます。

明晩、奥様は昼過ぎからオシッコをするのを禁ぜられた上で、出場前にさらに多量の塩水を飲まされ、いつものとおり、まっ裸で多勢のお客人達の円陣の中央へひきずり出されることになっておりますが、いつもの排泄羞恥責めと異なる点は、ただ、見世物にされるというのではなく、みんなの好奇のまなざしの中で、ある男に（すみません、ある男とは私なのでございます）奥様が直接、オシッコを飲ませてみなければならぬということでございます。

美貌と教養に満ちあふれた若奥様が、満座の中でいやらしい中年男に、なんで飲ませてやることができますよう。おそらく、生まれて初めての苛酷な試練に耐えかねて、「ひどいわ、そんなことひどすぎます」と肩を慄わせ泣きじゃくり、当惑して、おろおろなさる

に違いない奥様を、肉体的にも精神的にも徹底的に罵りものにしようというのが、かつて貴女の召使いだっただヤセギツネのような千代様の、陰湿この上もない、ご計画なのでございます。

ポルノばやりの社会にあっては、「社会的タブー」の領域の価値判断そのものが変化してくるのも、自然のいきさつでございます。まして、ヤクザな森田組などの裏街道に於いては、単純な男女の性の演技などが漸次、いろあせて思え始めて当然でございます。

一般社会から疎外された彼等達が、抑圧された心の吐け口を色と欲との両面に賭けて、さらに「社会的タブー」にさからおうと意図するもの、これまた、ことの成り行きでございます。

上流社会の麗わしい二十六才の新妻という奥様が、野卑な男女の嫉妬と憧憬をシンボライズして、捕えられてしまったのでございます。まことにお氣の毒な奥様のご不運でございました。

社会の底辺に蠢く彼等の意識の倒錯が、權威、エリートに反ばくする攻撃性といったふうの彼等の属性となつて、現代社会でタブーとされるものを求めてエスカレートして行くのでございます。

花電車、交合見世物、浣腸ショーと変態性をあさりつくして商品化していった彼等の、

奥様に対する性の魅力が、あまりにも違う自分達のスケにとつてかわって理想像化され、いたましい遊戯妻として、セックスの領域を超越したセックスに花開きはじめたのは、物の自然の道理とも申せましょうか。普通ならとうてい手のとどかない上流社会のお美しい若奥様を、人間以下のものとしてもてあそぶことは、疎外されてきた男女にとっては地位のシンボルであり、自己嫌惡の内心のイメージを作りかえるものなのです。そして、奥様が丸裸で、賤しい男に自らオシッコを飲ませるための、はしたないポーズをとられる時に彼等の勝利があり、社会的地位の低さの埋め合わせに対する云い知れぬ快感が生まれるのでございます。

千代様や川田さんは、みんなの見ている前で私にオシッコを飲ませることを奥様へ強制しながら、どうせ、奥様がそのようなことがすぐに実行できる筈がないと考えていらっしやるわけでございます。だから、本当の下心は「オシッコを飲ませてあげなさい」と命じて、お可哀いような奥様の心を虐げながら、奥様の成育の極に達した女盛りのお体を、賜りものにして愉しむのが目的でございます。柱に奥様を立縛りにした上で、若い衆に両側から片方ずつ肢をからめとらせて、丁度、幼女が母親にオシッコをさせて貰っているようなポーズをとらせ、屈辱の尿意とたたかっ

ていられる奥様を、擦ったり刺激したりして笑いものにするつもりなのでございます。

そして、すすり泣きながら尿意にあふれて白桃のように美しい双臀をゆさゆさとうねらせ、我慢しようと思えている奥様の恥かしいお姿を撮影しようというのでございます。

予め飲まされた多量の塩水の効き目も現われて参るでしょうから、いくらお堪えになられても、結局、奥様の意思の力ではどうにもならない生理の限界がございましょう。おまけに両サイドから二人の若い衆に太腿を抱えられ、自由を奪われながらの集中攻撃で輪をかけられたのでは、その結末は目に見えております。

奥様、あらがってはいけません。あくどい彼等の排泄強要に耐えきれないことは、火を見るより明らかなのです。迷わず、できるだけ早く、彼らの云うなりに、私にオシッコを

飲ませなければいけないのです。

何のために、わざわざ彼等のみえすいた術中に落ち込んで、苦しい思いをしてまで喜ばせてやる必要がございましょう。

もう、奥様も私も、逃がれられない運命にあるのです。この上は、彼等に肩すかしを以て報いてやる以外はないのです。あきらめて下さいませ。

奥様。貴女は、年頃になった実の娘の、うれてきた女体を意識してしまうことが、父親にとって、どんなにタブーな悩みであることかを、ご存知でしょうか。それが、同じ意味で義理の娘との仲となると、より、ひとしおの感なのでございます。

私の友人のある男が、実の息子にめとった十代の幼妻と、ふとしたことから神も顔をそむけるような行為をするようになってしまい内心では苦しみながらも断ちきれず、つい邪悪な関係を続けていると語っていましたが、お可哀そうな美しい奥様の、羞恥と屈辱のお相手を務めることとなった私の今の気持が丁度この男の味わう両者をあわせ持ったような気持で、身の縮むような罪悪感と、天にも昇るような歓喜とに、さいなまれているのでございます。

いずれに致しましても、逃がれ得ないことだけは確かなのでございます。私が奥様の太腿に触れ、口づけを致しましたら、できる限

り飲みやすいようにして、少しでも早く排泄シヨウを終わらせることが、今の場合の最善の方法なのでございます。

くり返して申し上げますが、奥様がちゅうちよなさればなさるほど、千代様を始めとする淫らな見物人をあさましくも楽しませてしまふことを、くれぐれもお忘れにならないで思いきってオシッコをなさらなければなりません。

最後に、もう一言申し添えさせて下さい。私には、決してご遠慮なさってはいけません。家畜のような男ではございますが、私は心から奥様を愛しております。私は美しい奥様のオシッコなら、どんなに沢山でも喜んでお飲み致します。ご安心の上、一切を私におまかせになっていただきとうございます。たとえ奥様に羞恥を与える形でございまして、決して他の男たちと同然ではないことをお誓い申し上げます。

きれいごとばかり並べたてて参ったようではございますが、本当のことを申しますと、私は、美しい若奥様のオシッコが飲みたいのでございます。

云ってしまいます。奥様、私めにオシッコをお恵み下さいませ。

では、その日、その時を、心からお待ちしております。さようなら

——(おわり)——

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号『花』 定価五〇〇円(送共)

連載・時代S小説

紫 蘭 の 門

— (9) —

玄のまた玄 紫蘭の門
 玄牝と名づくるも可
 万物の母と称するも可
 これはこれまた衆妙の門

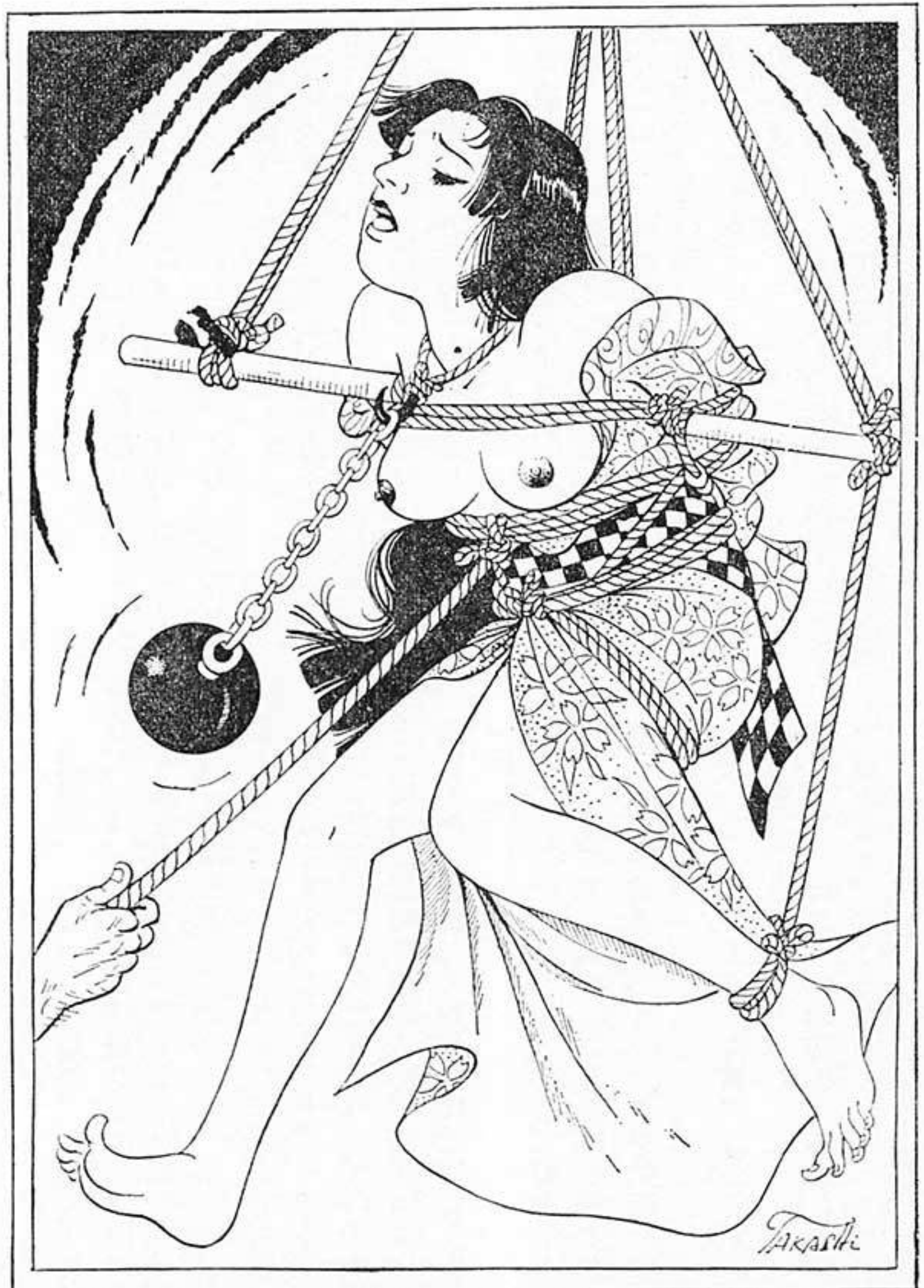
風 流 極 道 軒

異国渡来のゴム棒

座敷牢——、
 床板は栗材。三寸角の赤松材の格子が三方
 を固め、一方は灰色の壁で広さは二間四方も
 あるうか。施錠された留口の前に同じくらい

の広さの板間があり、荒筵やら縄、六尺棒、
 突棒、さすまたの類が無造作に、ちらばって
 いる。公儀金銀為替御用元禄屋重右衛門が趣
 味のためにつくらせた女体嗜虐の場所であり
 何人、いや、何十人かの女が、ここで、羞恥
 に、のたうっていた。

いま、七尺近い巨漢元禄屋の手にする手燭



カット・岡たかし

の光に照らし出されたのは、この座敷牢がいまだかつて迎えたことのないほど崇高い高貴（によしやう）の女性であった。

前右大臣菊亭政房の息女貴子姫——

すでに、一糸まとわぬ赤裸である。

いや、厳密に云えば、数条の縄目が、白蘭の肌に、蛇のようにからみつく。

金股流修羅繩阿鼻（あび）——混血の唐人陳沈宝たちが得意とする唐渡りの緊縛術であり、『阿鼻』とは——。

貴子に今、かけられている縄捌き。一見、伊予大洲藩士武知和太夫の創始した方円流のうち『土行総角』に似て、二の腕に二巻き、

前号まで——豊太閤五夜のロザリオのうち甲夜丙夜丁夜と三つのロザリオを手にした元禄屋の魔手は、残る二つを求めて十一代將軍家客の御落胤を自称する怪盗徳夜叉の情婦小紫のお景や公儀櫛師御用春田和泉とその妻豊香、娘千登世の身辺にのびる。一方、別れてもなお愛しつづけている前夫・押小路中納言高明が勅使として下向するに際して、その饗応の引出物として酒宴の賜りものにされることを拒否した菊亭貴子の裸身に、元禄屋たちの嗜虐の視線が注がれる。

胸元に六筋、それに首縄と、要所要所をきつちりと締めつけているが、一点、方円流と異なっているのは、下肢にかかる縄である。

「これはまた、陳のやつ、ご丁寧にのう」

元禄屋は、一番番頭の昭吉を振り返ってニ

ヤツと笑い、

「お前様（まえさま）がいやにお高くとまってるっしやるから、このような目におあいなさる」

と、腰をかがめる。

大あぐら（おおあぐら）に組まされた大理石（なめいし）のような太腿

の間から、ななめ上に向けて一本の棒がとび出していた。

黒光りのするその棒にはとげがある。いやとげというよりもい、がいがと云った方がよいかも知れぬ、丁度、すりこぎに二、三分（ぶ）から五分（ぶ）くらいのい、がいがを所かまわず植えつけたようなもの、それが、ななめ上に向かってたかだかと突きでているのであった。

「よい、とまけのようすな、旦那さま」

昭吉の云うとおり、横に倒れないためであろう、その棒の上端から六本の細紐がのびて二本は、交差された両足首に、二本は左右の太腿に、あとの二本は、腰のくびれを二廻りして、かたちのよい臍の真下で、きっちりと蝶結びにして、とめられてあった。

その棒を握ってみた昭吉が
「旦那。こりゃあ、木でも金物（かなもの）でもありません。何でやんしょう」

「ゴムと云うもんじゃろう。和蘭商人からきいたことがある。弾力があってよく撓（たぐ）み、損われず折れず、女泣かせにはもってこいのものらしい」

エレキテル——つまり電気のことを、雷から奪い取ったもので、人体のなかにおくりこみ、万病を治癒させるものと思っていた当時のことである。ゴムを女泣かせの舶来の道具と考えたとしても別に不思議ではなからう。

「ヘエッ。この柔らかい感触、そう云われれば女の餅肌（もち肌）にそっくりのようで」

昭吉が、不思議そうにゴム棒を握りしめ、くるくるつと、まるで播鉢（すりばち）でもこねるように廻してみる。

と——

今まで、ぐったりと、二人の入ってきたのも気付かぬように頂垂れていた貴子の唇から
「ウ、ウウ……お、おやめになって……」

はじめて、呻きが洩れた。

「おや、やっと人間並みに扱ってくれると云うのかい。ええ、姫」

昭吉の云った人間並みという言葉には、意

味があった。

老中領田下野、勘定奉行肥田若狹たちの前で、和蘭渡りのタルボタイプの写真器で、あらゆる羞恥の姿態を撮影されてからと云うもの、貴子は（人非人！ 外道！）という罵り以外は、なにひとつ口にせず、そのうえ、まるで、けだものでも、みるような蔑んだ視線を、昭吉たちに、おくるだけだったからである。だから、ついさきほども、陳沈宝たちが入ってきて、修羅縄阿鼻の縄掛けをするときひとことも、呻きひとつ洩らさず、ただ、その美しく崇高い裸身を縛るにまかせ、ゴム棒を××されるとき、全身の顫えを懸命に噛みこらして、

「アナタ、石、石女ジャアナイノカ」

と云う罵言をさえ耐えていたのであった。

それが——、陳たちが去って二刻の間に、状況が変化していた。貴子の肉体に、微妙な蠢きが起こっていたのである。原因はゴム棒にあった。この径一寸余の棒が、いつの間にか、貴子の甘い湿気をたっぷり吸いこみ、いがいががふくれあがり、柔肌を刺戟しつけていたのである。

そこを、昭吉がこねはじめたものだから、思わず、せつない呻きを洩らしてしまう。

「アアアッ……」

じれったそうな、さそうような呻きを、ふたたびあげて、貴子は、朱い唇を喘がせる。異国渡来のゴム棒が、貴子の理性を徐々に麻痺させていき、代りに、『女』というけだものの本能を、燃え立たせ始めているようであった。

「旦那様。めずらしく今宵は柔らかく」

と昭吉は、しきりにゴム棒を××す。

「ア！ アッ！」

喘ぎが、しだいに激しくなる。

「ア！ ア！ アッ！」

貴子は、いぎたないくらいに、乳白色の太腿をピク、ピクツとけいれんさせつづける。

陥るまでに、時間のかかる女であった。半刻はおろか一刻ほども攻撃をくり返さなければ、上に反りかえった乳首を下に向かせることもできない——元禄屋が、一度ならず経験としての結論であった。そして、なお、何度でも、何十回でも陥落させてやりたいと心底おもう女だった。

「待っていた甲斐があったな、昭吉」

「まことに旦那さま」

昭吉は、主人の心境をよく知っていた。

（女は惚れている男の前で責めるにかぎる。

この貴子を押小路中納言のまん前で賜りものにしてやる！）

元禄屋のこの上ない淫虐な楽しみが、明後日は、実現する。

「姫……」

元禄屋は、貴子の肩に手をおいて、「よくお聞きなされよ。このたび、勅使が下向してくる。その勅使とは」

ぞくぞくするほどの快感であった。

「その勅使は、中納言押小路高明！」

ひといきに云ったあと元禄屋は、貴子の顔にどのような変化が現われるかを見守った。

子なきがゆえに、そのもとを去って三年、いまだに愛している男の名を聞かされて、女心がどのように揺れうごくものか。が、

元禄屋の期待は、みごとに裏切られた。

貴子の端麗な顔には何の変化も現われなかったのである。

そ、そんなはずはない！ ふたたび、

「勅使として押小路高明が下向してくる。その夜の饗応の役を、この儂がひきうけることになったのだ。姫。貴子姫、聞いておるか」

淡雪のように凝脂ののった両肩に、大きな掌をあてて二度、三度と揺すり、

「押小路中納言が江戸にくるのだ、姫。それ

をきいても何ともないのか！」

声が、次第に高くなる。それに応じて、昭吉も、径一寸のゴム棒を、これでもか、これでもかと云うように××にえ××こむ。と、

「ウッ！ いま、いま、押、小路、押小路高明さまと仰言ったのでは……」

七尺近い垂髪のさきが栗材の床にくねり、貴子の切れなげな瞳が、うっすらとひらく。

「た、たしか、高明様と……」

「云ったともさ。おまえ様のまえの夫が勅使としてやってくる。その夜の遊びのきりもりを、この儂がやることになった」

こみあげてくる勝利感を押えかねた元禄屋は、はずんだ口調で、

「逢わせてやろうと云うのさ。その中納言とかの前へ、おまえ様をひきだしてやろうと云うのさ。素っ裸でな、一糸まとわぬその身に縄を掛けて三年ぶりの対面をさせてあげようと思うのさ」

「……………」

何か云いたい、云わねばならぬ！ が、それが言葉にならないもどかしさ！ 乾いた唇

のはしが、もどかしそうにふるえる。

「どうしたい、云ってみな。遠慮するこたあねえやな。もう、股まで開いて見せてくれた仲じゃあないか」

元禄屋は、ゴム棒に沿って手を下へとずらせていき、黒漆のような長い×が、純白の××にはりついていてるのに気づくと、右手の人さし指と親指でつまみあげ、貴子のはりさけるばかりにみひらいた眸のまえにつきだす。

「まったく、いい匂いしてるよ、おまえ様は！ 蘭の花の香りに、そっくりじゃあないか。あと三日、まあ、せいぜい磨きをかけておくことさ。ええ、どうじゃ。嬉しかろう」

途端――、

「高明さまと妾とは、もう何の関わりあいもございませぬ！ お逢いしとうもござりませぬ！」

裂帛という言葉であらわすほかはない叫びであった。

そのあまりの鋭さに、貴子の眸の前につきだしていた指が、ぴくっとふるえる。

「昭、昭吉。いま、なんと言った」

「高明さまには何の関わりもないと」

「フーム……………」

一筋の長い毛をためつつがめつ、菊灯台に

かざして眺めていた元禄屋は、やがて、もとの精悍な顔付きにもどる。

貴子の驚きとそれにつづく哀訴を期待していた元禄屋にとって、貴子の言葉は、まったく意外であった。しかし、さすが、元禄屋。「フッフッフ……………」それでこそ、この姫を、責める甲斐があろうと云うもの。フッフッフ……………」

その毛を分厚い自分の唇の上にのせて、ひといきにのみこむと、

「いやとは云わさぬ。姫、高明の前で全裸の身をさらすか……………」それとも」

ギョロリと眼をかがやかせていた元禄屋はかねて考えていた二者選一を貴子に迫る。

「鎖格子女之拷問——いま江戸中で評判の市村座の舞台で、すっ裸に剥きあげられるか、ふたつにひとつ！」

威丈高な尻上がりの口調であった。

「ふたつとも、おことわり申しあげます」

淡々とした貴子の答に、

「ヘッヘッヘッ、気取るなってこと。お前さん、ほれ、こんなに素っ裸じゃあねえか」

昭吉が、さらに強く、ゴム棒を××はじめ。こみあげてくる肉体のどうしようもない疼きを、咽喉のあたりでおさえながら、

「死ぬことも、妾が息絶えることもできませんようものを！」

必死の叫びであった。事実、いまだあれば貴子は、舌を噛むこともできる。

「噛みなければ舌を噛むのもよからうぜ。姫いま、おまえ様が死ねば、菊亭家は勿論、二条、近衛、鷹司と五摂家・関白、精華家が將軍さまを始め諸大名からの盆暮れの贈物や月々の献上品が、ぱったりと絶えて、どうにもこうにもならなくなるくらいのは、公儀金銀為替御用をうけたまわる、この元禄屋の胸先三寸にかかっているんだぜ」

事実——「今の世の諸侯は、大も小もみな商人に頭を下げて無心を云う」と荻生徂徠の高弟太宰春台が何度も記録しているような世の中になっていた。五摂家の筆頭近衛家の当主ですら、清酒はおろか濁酒さえ、ろくろく飲めない状態にあったのである。

（その肉体ひとつで、公卿衆、家族も含めて数万人の生活のためと思えば安いものではないか。儂も、高い買物をしたものよ。フッフッフ……それだけのお返しは、して貰わねばのう）

と云う元禄屋の誇らしげな言葉を、貴子はここ二十日あまり、何度、耳にしたことであ

ろう。

いま、それを、元禄屋は、得意気に、

「お前さまが死ねば、公卿衆が餓死するは、わかりきったことよ。それでも死にたければ、死ぬがよからう」

と、あらためて繰り返す。

「卑、卑怯なことを！」

「ちっとも卑怯だとは思いません。儂は、商人。商人と云うものは、損になる商売は決していたしません。さあ、そこで」

元禄屋は、貴子の紅真珠のような乳首を、もてあそび、昭吉には、ゴム棒を、さらに強く、と目顔で知らせると、

「姫、どうなさる。おそろく死にはなさるまい。さすれば、採るべき方法は、ふたつにひとつ——押小路中納言に逢われまするか」

「イヤ！ いやじゃ！ 妾は、イヤ！」

「さすれば、市村座の舞台に赤裸の身をさらされまするか」

「イヤ、イヤじゃ！」

「フウ……これはまた、ききわけのないことを」

左右の乳首をちかよせ、ひとつにして、あたかも、ふたつの紅真珠をもてあそぶように太い指先で、もてあそびながら元禄屋は、

「じゃあ、のう、姫。市村座は取り下げにして、どうです。儂等の仲間だけの会合に出て頂く。そこまで譲歩申しあげまするが」

余談になるが、かの聖女として著名なフランスは、オルレアンオルレアンの少女、ジャンヌ・ダルクも、夜昼わかたぬ獄卒たちの入れかわり立ち代りの拷問——その仔細は、読者諸賢のご想像に任す——に、一度は、魔女と云う自告書に署名させられているのである。

菊亭貴子が女にかけては百戦錬磨の二人に骨の髄まで、とろけるような思いにさせられての挙句の果てに、後者、つまり、元禄屋たちの会合にでることを承諾させられたとしても、それは女の業ごうと云うべきものであろう。

「ア、アウ……や、やめ……おやめに、おやめに……あ、あ、もう！ もう、おやめにな……アウ！ ねえ、お願い！ 妾は、高明さまにお逢いするのだけはイヤ！ その、そのほかのことなら！ アッ！ アアッ！ 昭吉……さま！ や、やめてください……アッ！ 妾、は、ほんとに、もうもう！ ヒイッ！ ヒイ！」

頬からあごにかけて幾条かの玉の汗がながれおち、蘭麝の香りが、いっそうつよく、元禄屋の鼻孔をひろげさせる。

「よしよし、もっと早くそれを云えばよかったのじゃ。そうすれば、このような目にあわずにすんだのに」

「旦那様。それは嘘！ 貴子姫がハイと云おうが云うまいが、ほれ、もう、こ、こんなに！ 旦那さま！ こんなによい匂いをする女を、どうして、私に、抱かせてはいただけませぬ。ほれ、このように、男を求めて悶えておられますものを！」

貴子の乾ききった唇は何かを求めて喘ぎ、あぐらに組まされた白く豊かな脚は、微妙に蠢いている。

「昭吉、言うでないわ。この姫君、めったなことでは男には抱かせぬ。解いてやれ。そのゴムの棒もとりはらってやるのじゃ」

「でも、今、すこしのあいだ」

「取りはらうのじゃ！」

強く云われて昭吉はやむなく、長い時間をかけて、ゆっくりと紫色の縄をとき、よいとまけのように張りめぐらされている六本の細紐をほどいていく。ぐったりと俯伏せた肩から背にかけて、黒髪が艶めいた光を放っていた。

「では、今夜はよくやすむことじゃ。明日にそなえてな」

元禄屋が、未練そうな昭吉をうながして座敷牢からでようとしたとき、

「お、お願いでございます。湯、湯浴みをさせていただきとう……」

思いがけない訴えに、

「湯浴み——風呂ですか、姫。風呂に入られてどうなさいます。どのみち明日は男たちの慰みものになられ、舐中が汚れた手や汗や酒で、まみれるのだよ」

昭吉が肩に手をかけ抱きおこして云う。

「でも、でも妾……」

「綺麗に洗っておきたいと云うのかい」

華奢な昭吉の指が、乳房の谷へと伸びる。

ピクッと全身を震わせたものの貴子は、もうされるままになって、

「湯浴みを、しとうございます」

と二度、三度、繰りかえすのであった。

「ハッハッハ……昭吉。どうやらこの姫様、やっと儂たちの気持が、わかり始めたと見える。明日は、見世物になる——多くの男たちの前にでるのなら舐を十分に洗っておかなければ失礼にあたるといわれるのよ。ハッハッハ……よかろう、貴子姫。たっぷり洗いあげ磨きあげて、儂たちを、せいぜい楽しませて貰いませう。昭吉、ご案内申し上げなさい。」

ついでにな」

貴子の裸身を眺めた元禄屋は、昭吉の耳元で何事かを、ささやいた。

一刻ほどのち——、

総檜造りの湯殿のあがり、の間で、昭吉と和吉の二人は、乳白色にかがやく裸身から、ほのかな湯気をただよわせている貴子を、前と後からはさむようにして、特別にあつらえたと云う紫綸子の湯文字をつけさせ、同じく純白の綸子の肌着の袖に手をとおさせると、

「たっぷり化粧をしておくようにとの旦那さまのおいつけでございます」

と、紗地に平織りで、紫蘭の花を織り出した長襦袢と褐色の細帯を、乱れ箱にのこす湯殿を、でていく。

雪洞が、

ほのかに、ともっていた。

ひさしぶりに身につける衣裳、たとえそれが下着であろうとも貴子は、ほ——とした気持ちになって、鏡に向かう。

江戸についてからの地獄のような日々が走馬燈のように瞼のうらに去来する。

——やつれたわね、貴子。

父をはじめ京都の公卿衆を救うために自分の身はどうなってもと、苛酷な運命をけなげに甘受している貴子ではあったが、ひとり鏡

——イメージギャラリー——『柔肌極刑』——市原 幸三郎——



に向かっていると、無性にわが身が、いとおしくなる。それにしても——

——押小路高明さまが、この江戸に！
嫁いで五年、人もうらやむ駕^{えんおう}の仲であつたが「嫁して三年、子なければ去る」——生

木を裂かれるように別れた二人であり、いまでも、貴子は、高明を愛しつづけている。
(その高明さまのまえに妾を！)
貴子は、元禄屋の冷酷さに、総身が鳥肌だつ思いであった。

せめて話し相手になってくれるであろう久我雅子も、同じ屋根の下に暮しているはずなのに、ここ五日ばかり、逢わせてはくれぬ。
(どんなことがあっても妾の、みじめな姿を高明さまにだけは見せたくない！)

老中、勘定奉行たちと結託し、私利のために貪婪^{らん}のかぎりをつくし悪虐非道な行爲をつづける元禄屋に対する激しい怒りと、押小路中納言高明への思慕と、今おかれている自分の立場——

(豊太閤さまが、五夜のロザリオなどをお遺しになるから、このようなことに！)
寝つかれないままに、夜も更ける。
和蘭時計が、ボンボンボンと三つ、打つ。
襖のそこには、どうやら見張番がたっているらしく、かすかな咳払いの声が聞こえる。
その声に、現実にはひきもどされた貴子は、明日、自分に加えられるであろうおぞましい責苦を思い、そして、それが、どうしても避けられぬものであることをさと、そーつとゆたかな双の乳房を抱きしめるのであった。

逆剥の美女衛門

駕籠でどこをどう揺られてきたのか貴子に

はわからなかった。着いた所は、透垣にかこまれた瀟洒な豪商の別宅風の玄関であり、待ちうけていたのであろう、三人のやくざ風の若者が、

「昭吉さん、和吉さん。ごくろうさんで。さあさあ、皆さま、お待ちかね」

と駕籠脇の二人に声をかけると、長い廊下をいきおいこんで案内してくれる。

昭吉に縄尻をとられた貴子は、人影も見えない中庭のやぶかんぞうや紫陽花に射しこむ夏の光の反映を麗わしい横顔にうけながら、俯向き加減に歩をはこぶ。

ここがどこなのか、また、どのような男たちが待ちうけているのかまったくわからないまま、廊下を三つばかり曲ると、薄暗いつきあたりに板扉が見えてきた。そのまえで、

「貴子さま、ではここで私どもは」

と昭吉と和吉は、やくざ風の男一人をのこすと、ひきかえそうとする。

貴子は、ふと不安になって、思わず、

「昭、昭吉さま！」

と、よびとめる。始めて女らしい、訴えのひびきを背にうけた昭吉は、

「姫。なにか……」

満面に笑みをうかべて、ひきかえした。

どんなに拷問を加えても貴婦人の誇りをたもちつづけていた女から親しく名をよばれた昭吉は、はずんだ口調で、

「なにか、御用が、姫！」

「い、いえ。なにも」

貴子の頬には、かすかに自嘲に似た笑いがうかんだ。

「姫さま」

昭吉だけでなく和吉も貴子にちかよると、乱れた長襦袢の襟元をなおしてやり、

「御用でしたら、この和吉がなんなりと」

「もう、よいのです。ただ、ただ、および申しあげてしまつて……すみませぬ」

（なあーんだ）と云う表情とともに和吉は、さっさとでていこうとしたが、昭吉は、

「心配はいりませんよ、姫。なにもいまから火焙りにしようの獄門にしようのと云っているのじゃありません。ただ、そのお躰を皆さまがたが賞味なさるだけなので」

（どなたなのでしょう、客人の方々は）
訊ねようとして貴子は口を噤んだ、思えば無駄な質問。誰であろうと、自分を待ちうけているのは男、それも一人や二人ではなからう。顔を、あかくそめて、そっと瞳をふせる貴子をのこして昭吉たちは去っていった。

「お前さん。どうやら、ほんとに公卿衆の女らしいな」

監視役で残った男は、自分で、引廻しの棒助と云うやくざだと名乗った上、親分は、逆剥の美女衛門と云う老中領田下野さまご最員の俠客で、羅卒の鞭兵衛と兄弟分だと云うことや、今日の客などについて問わずがたりにしゃべりだす。

それによると、主客は領田下野と勘定吟味役、佐渡刑部、札差の利倉屋、市村座の座付作者、為永種彦など顔見知りの男たちのほかに北町奉行所与力、工頭監物、公儀御用鞆師丸田平兵衛たちであると云う。

「すると、ここはどこでしょう」

貴子は思わず訊ねてみた。

「小梅さ。小梅の利倉屋さまの別邸」

縛られた不自由な躰で、あたりを見廻した貴子は、そこに、引窓のあるのに目をとめると、万一！ と、瞳をかがやかせて、

「逃がしては、くださいませんでしょうか」

思いつめた表情であった。逃げてどうなるのか、そこまで考える余裕はない。ただ、これから自分の身に加えられる屈辱に耐えきれない気持に襲われて、薬にもすがら思いで頼んでみたのであるが、

「逃がす?……お前さんをかい。フッフッフッ……たとえお前さんが天女であったとしても金輪際できぬえ相談よ。じたばたしねえで拷問をつつしんでお受けすることさ」

やはり予想していたとおりの答である。

「どうしようもないのですね、妾」

貴子が、棒助に淋しく笑って見せた。

その時――

「お迎えにまいりましたぜ、姫」

板扉が開いて、女に見まがうほどの優男が

二人あらわれると、

「美女衛門の身内で、美男の槍助」

「同じく陰間の架助」

と名乗ってのち、

「あ、っ、たちが本日の介添役。もう一人、獄

門の牢助はあっちで準備中でした」

「では、早速、お縄をあらためさして頂きや

すぜ。この縄掛けじゃあさ、まになりませんの

で」陰間の架助と名乗った男が、さっさと、

貴子の縄をといていく。

「どうしやす陰間の。四角でゆきやすか、菱

角にしやすか」

と美男の槍助が問う。

「平行・多角は止めとこう。白蠟でいこうじ

やあねえか。女谷流菱衆縄細菱」

「フッフッフ……初手から細菱とは、ちとばかり可哀そうな気もするぜ」

引廻しの棒助はそう云いながらも懷から、

毛羽がとげとげしく縄身からとび出している

棕櫚縄をとり出すと貴子の背後に回り、

「神妙に、なさっておくんせえ。御肌には

かすり傷ひとつ、つけやあいたしません」

女谷流捕縄術とは――

遠く上古、応神天皇の御代に帰化した百済

人、王仁に発するという縄捌きで、正平年間

(十四世紀)念阿弥慈恩の手で確立され、そ

の弟子、女谷勘解由重政が甲斐・信濃の国境

赤石山系で、棒術とともに完成したという。

貴子はすでに穴沢流の縄をうけ、金股流の

緊縛術に哭いた。ここに名をきいただけでお

ぞましい逆剥の美女衛門とかいうやくざの子

分たちの手で、いま、新しい女谷流の縄捌き

を、抵抗するすべもないまま、神妙にうける

ほかはなかった。

「できやしたぜ。さあ、参りやしよう」

架助に縄尻をとられて板扉の向こうへ一歩

踏み出す。

長い廊下のところどころに掛燭が不気味に

輝いている。

と、かすかに男たちの笑い声がきこえ、近

づくにつれて、それがいつそう高くなり、貴子の胸は、早鐘のように鳴りはじめる。

(男たちがいる……三人や四人ではない多勢

の男たちが、妾の軀を責めさいなもうと酒に

酔って、待ちうけている……)

「イヤ! イヤですう!」

突然、狂気したように貴子は、縄尻を持つ

架助の手をふりほどくと、長い廊下を、長襦

袢の裾を蹴立てながら、かけもどる。

駆ける、駆ける――ものの百歩あまりも息

はずませて走りぬけたとき、

「馬鹿な真似は、よしなせえ」

かけ、つ、こを楽しむような顔の四人の男たち

に、前後左右をとりかこまれた。

「それ、みなせえ。騒いだりするから、ほれ

あんなに旦那衆が」

いま、貴子が走り始めたあたりに、十数人

の男たちが顔をのぞかせている。

縄尻を棒助にとられた貴子は、こみあげて

くる悔しさに、齒をかみならしながら、二歩

三歩と、ひったてられていく。

居並ぶ、どの顔も、どの顔も、好色そうな

笑いを、うかべている。

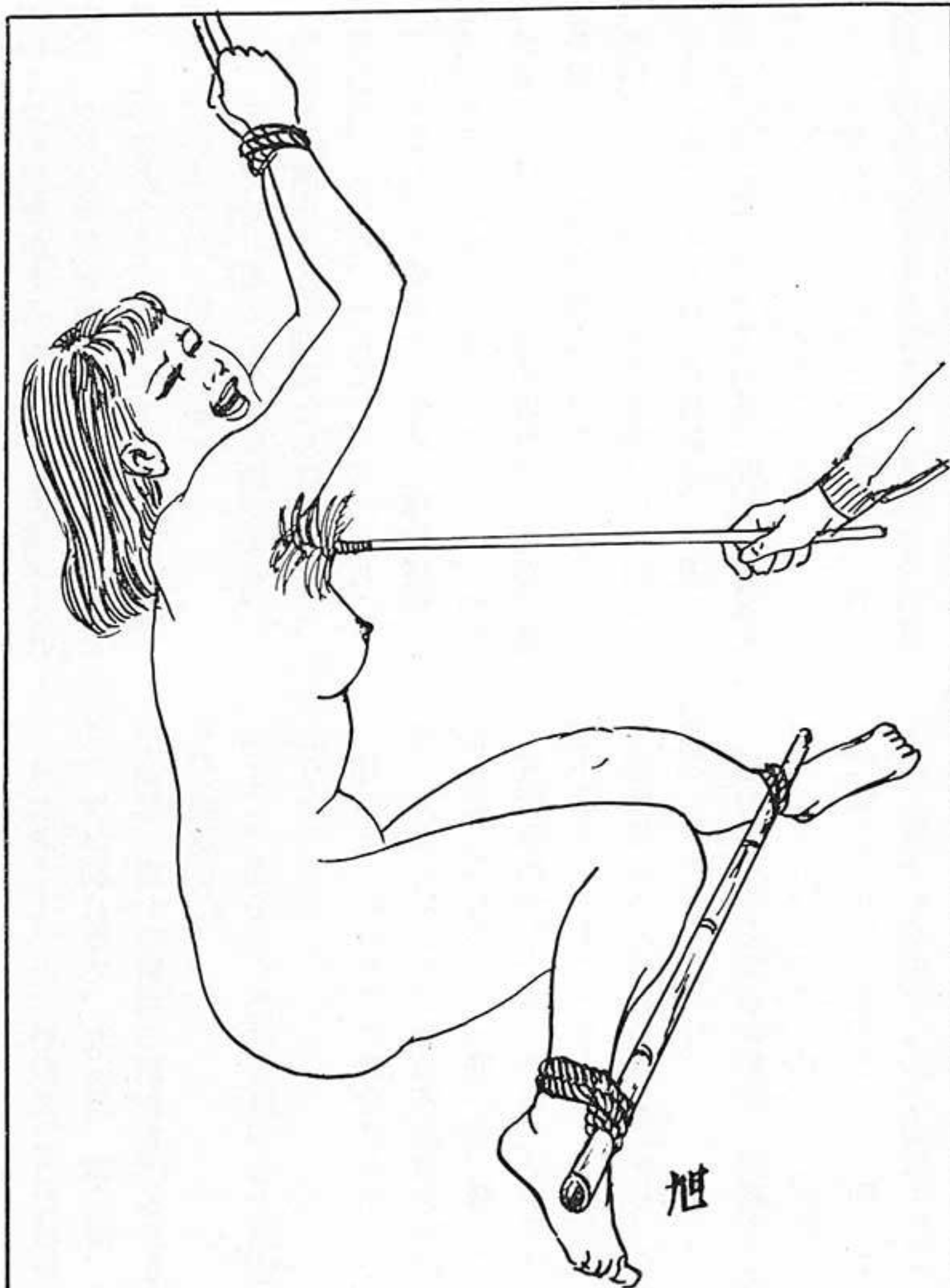
濃い眉の男もいる。上唇が紫色にふくれあ

がっている男もいる。異常に鼻のひくい男も

いる。武士もいるし町人もいる。が、どの顔も唇をなけば開き、赤く濁った眼を、貴子に注いでいる。

敷居をまたぐと、二十畳はあろう広間がひらけ、その正面に一段高く舞台があった。

その磨きあげられた床に、しっかりとひきすえられた貴子は、あらためて、自分が、淫楽の犠牲、酒宴の翳りものにされることを思い、産毛の一筋一筋が逆立つような恐怖と屈辱に、さいなまれるのであった。



……イメージギャラリー……『笑いの強制』……須坂 旭……

しばらくのざわめきのあと、
「東西、東西！」と木拍子が入って、

「市村座にはあらねども、ただいまより本日の演し物『鎖格子女之拷問』の開幕！ 開幕だ
！ 演じまするは、前右大臣菊亭政房の息女貴子姫！」

（為永、為永種彦さまだわ、この声は）

芝居がかった声が、市村座の座付作者為永種彦であると知った貴子は、かつて自分の躰のすみずみまで、彼にまさぐられたことを想い出し、いてもたってもおられない気持になる。種彦だけではない、棒助が教えてくれた今日の客たちの大半は、顔なじみであった。

元禄屋は、勅使押小路中納言高明の眼前に貴子をひきだすまえに、自分たちだけで、心おきなく貴子を責めぬこうと、今日の「責め場」を、もうけたのであった。

舞台では種彦が口上をつづける。

「まずは、この姫を素っ裸にむきあげまするが、五人の方がそれには必要。最初は、縄をとく。二番目が長襦袢。三番のお方は、肌襦袢。四番は御存知、こしのもの。さて、五番目は祕中の祕。さて、その順番は」

と、一息いれたあと、

「いま、貴子姫にかけられておりまするは、

女谷流菱衆繩のうち細菱。いくつもの菱形が姫の躰でつくられております。さて、あわせていくつの菱形があるのか。みごと当てられたおかたが最後の祕中の祕のお楽しみ。あとは、近いかたから、四、三、二、一の順番。さて、いくつか、いくつか」

と、まるでせり市のような口調である。

種彦や、領田、佐渡刑部たちはともかく、工藤監物、丸田屋、それに美女衛門たちにとっては生まれてこのかた、始めて拝む高貴の女性。ある者は痴呆の様に、ある者は、やら酒盃をあげながら、貴子の優雅に艶めく姿態を眺めていたが、種彦の口上がすむと、いっせいに、思い思いの数字を叫びはじめる。前からみたところ細い棕櫚繩は、十幾つの菱形を、すでにつくっている。問題は、見えない背面に、いくつあるかである。

各人の数を帳面にかきとめた種彦は、舞台の貴子の肩に両手をあてて、くるりと一回転させると、床まで垂れる黒髪をかきあげて厳重に縛りあげられた白くしなやかな両手を見せながら背面の菱形をかぞえあげ、

「二十六！ 当たりは逆剝の美女衛門さま。大当たりい！」

と、今度は、矢場の女のような口調。

美女衛門の、毛むくじゃらの顔が、思わずほころび、

「うおおー！」と、野獣のような歓声をあげる。次が利倉屋で、丸田屋、鞭兵衛、そして工頭と、貴子を素裸に剝きあげる五人の男たちが決定した。

「さて。繩をとくだけとは、ちと残念じゃがのう」

種彦といれ替わりに舞台にあがった工頭はゆっくりとはじめて触れる高貴の姫の蘭麝の香を楽しみながら、一筋一筋、解いていく。

五百匁蠟燭が十本、それに結び灯台が上手と下手に三台ずつともされて、身をすくませ、羞恥にふるえる貴子のうごきを、くまなく照らしたのであった。

その妖しくも美しい影が、交錯するなかでいままで自分をいましめていた棕櫚繩が、すべて舞台の床に、毛羽とともに舞い散ったとき、貴子の心境をなんと表現すれば、よいだろう。

思えば、人間は、眼に見えない多くの束縛の中でガンジガラメになって生きている。

が、百尺竿頭、一步前進して考えるとき、それは、無縄自縛のおろかさに過ぎない。

おろかなることよ——と聖賢は説き、無双

の国士は云う。

が、「自由」の重みにたえて未来を「夢」みることの出来るのは、まことの男のみ。

イイカゲンな男はもちろん、女は——たとえ、その女が、どんなに高言しようとも——女は束縛なしでは、生きてはいけぬ。

「女には、繩が、よく似合う」

五百匁の蠟燭が、ひときわ閃く焰の芯を、みつめながら、元禄屋が、ひとりごちる。

彼もまた、極点において、孤独な男なのだろう。そして、極点において孤独であるということは、無縄自縛の境地を、はるかに超越した、まことの男といえよう。

そして、元禄屋は、今日は、無言である。

彼の胸中には、手中にある甲夜、丙夜、丁夜の三つのロザリオに刻まれてある、おそらくは、「いろは歌」であろう字句が去来する。

甲夜——色は匂へど散りぬるを

丙夜——有為の奥山今日越えて

丁夜——浅き夢みし酔ひもせず

甲、丙、丁夜のロザリオが、これらの語句である以上は、乙夜と戊夜のロザリオの文句は、あきらかである。

問題は、それにつづいて刻まれている和蘭数字である。

元禄屋は、ひとり悠々と盃をあげて、今日は、とことんまで飲んでみるかと、自分自身に云いきかせながら、舞台の菊亭貴子を眺め16、16、22、12、3……と、甲夜のロザリオに刻まれてある和蘭数字について、思索をめぐらす。

一方――

貴子は、そのような元禄屋の「自由」とはかけはなれた「地獄の自由」に毛がひとすじずつ、毛抜きでぬきとられるような屈辱に、われを忘れていた。

工頭に、縄をとかれた瞬間、「自由」になった両手を、いったい、どこに、もっていけばいいのか。

唇か、瞳か、乱れている湯文字の裾か、それとも襟元か。瞬息の間を、数刻の思いですごした貴子は、やっと、艶めく指を、双の乳房へと、きめたのであった。

が、野獣のような声が、耳にひびく。

「姫、なにを気取っておる！」

掌にまで熊のような毛をはやした鞭兵衛が勝手知ったる躰とばかり、鶉色の腰帶を、するすると、はぎとり、

「ワッハッハハハ、右大臣の息女でも吉原の天神女郎でも、女に交わりはありはしねえ」

ベリッ、ベリという音とともに、紗織りの長襦袢の袖がちぎれて宙に舞い、つづいて、襟を押しひろげられる。

「アッ！ アレッ！」

貴子の悲鳴よりはやく舞台にかけあがったのは、三番籤にあたった丸田屋、

「鞭兵衛さん。肌襦袢は儼のものですよ」

と、鞭兵衛を押しつけて、躰をちいさく縮めている貴子の真正面に蹲みこむ。

「よい匂いをさせてるじゃありませんか、姫。さ、さすが、江戸の女とは、ちがう」

この丸田屋は、鞆師である。動物の皮に加工して腐敗をふせぎ、撓性、柔軟性、弾性などをあたえて、武具には不可欠の皮革をつくる。従って、肌触りとか香りには人一倍敏感であった。鼻孔をおっぴろげて、貴子の体臭をかきまわりながら、首頸から腕、足の部分と、肌襦袢と湯文字からこぼれている乳白色の肌を、ためつすがめつして鑑賞しながら、

「これは、絶品の膚ですな。刺青師に見せたらどうしても彫らせてくれと狂ったようになるでしょうよ。フッフッフ、ひとつ、地獄絵でも全身に刺青させたあとで、皮を剥ぎとって、表装して床の間にでも飾りますか」

職業柄とは云え、とんでもないことを云い

だす丸田屋に、

「あとがつかえてますによって、早う、肌襦袢をぬがせてやりなされよ」

声をかけたのは、四番目の利倉屋。

「まあまあ、そうあわてなさるな」

丸田屋が、齒の根をカチカチ鳴らして深くうつむいている貴子のあごに手をかけ、

「それでは、ぼつぼつとおぬがせを」

と云ったときであった。

突然、末席から大声があがった。

「そ、その肌襦袢、あ、あつ、たちに、ぬがせてはいただけませんかしょうか」

十数人の客の目がいっせいにそそがれるのにつられて、思わずそちらを眺めた貴子は、

「キャアツ！ お、おまえたちは！」

一瞬、甲高く叫ぶと、瞳を大きく見開いてたちあがった。

「ヘッヘッへ、清兵衛です」

「善兵衛です。まさかお見忘れでは」

藍微塵広袖のひとえに黒三の帯と、やくざ、風にみなりは変わっているものの、三年前まで押小路中納言家に仕えていた雑色たち。

「奥方、ひさしぶりじゃの」

もう一人、ぬっと顔をつきだしたのは四十才をこえたかこえぬか、髪を茶筌にゆった、

……イメージギャラリー……『獣欲のいけにえ』……小川 茂 正……



色の青白い男、

「そ、そなたは、青江、青江散位。なぜ、なぜ、おまえたちがこのようなところへ！」

青江散位もまた中納言家の用人で、朝夕、奥方さまと貴子に奉仕していた男である。

それが、こともあろうにこのような場所に

現われようとは！

悪夢でもみているような顔つきの貴子を、

ニタニタッと眺めた青江は、

「くびになり申してな。いまでは身どもは丸

田屋平兵衛殿の家の厄介者。この二人は、市

村座の下足番。本日、奥方さまが、酒宴に列

席されると承って、矢もたてもたまらず、ご主人にお願い申しあげて、のう、清兵衛」

「まったく青江さまから、奥方さまが、江戸においでになるとききましたときには、もうまるで、天にものぼる気持になりました。それにしても、奥方さま。お美しうござりまするなあ。あの頃、庭掃除をしながら、はるかに拝んでおりましたが、まるで、天女のようにだった」

夢だわ、悪夢に違いないわ。こ、このようなことがあるはずがない……貴子は、何度か美しい瞳をまばたかせたが、それが、夢でない証拠に、青江の手が、肌襦袢の襟をとらえる。瞬間――、

「アッ！ アッ！」

と激しく身をもんだ貴子は、その手のしたをかくぐって、飛鳥のように逃げだす。

五歩六歩、舞台の上手にかけこもうとする寸前、六尺棒が、足にからまる。

「じたばたなさるなと申しあげましたぜ」

引廻しの棒助が、ぶざまに横転した貴子の脇に手をいれて抱きおこすと、槍助と棒助が六尺棒を貴子の胸で交差させてひきすえた。

「こうなっちゃあ、儼はひきさがるほうがよさそうですね。ふるい御家来衆が奥方さまを

スッ裸にひきむくほうが、皆さまがたにも面白うござりましょうて」

丸田屋は案外あっさりと舞台からおりと領田下野のそばに坐りこみ、元禄屋と顔を見合わせてニヤッと笑う。

二人が仕組んだ筋書であった。

かつての下男に、貴子を賜らせる——そのときの貴子の顔がみものである——と。

案のごとく、貴子は、絶望に打ちひしがれた瞳を元禄屋にむけた。そして、

「元禄屋さま。お、お願いでござりまする。

どうか、どうか、妾を日本橋のお邸へ。このようなこと、貴子には耐えられませぬ。貴子の一生のお願い。どうかおききいれくださりませ！ 元、元禄屋さま」

六尺棒を右、左とはねのけた貴子は、必死で元禄屋にかけよると、その膝にとりすがって訴えるのであった。

「フッフッフ……姫。日本橋の本宅に帰ってどうなさるというのじゃ。陳沈宝たちに責め賜られるだけではございませぬか」

「イヤ、イヤです。ここではイヤなのです。

あ、あのような男どもに」

「青江さまたちに責められるのがおいやなのでござりまするか。儂としてもおかawaiiそう

には思います。が、儂が許すと申しあげましても、もう、このかたがたが……」

アッと後をふり返った貴子の襟もとをつかまえた青江は、そのまま、するすると紫綸子の肌襦袢を袖の裂けるのもかまわず、すっぽりと脱がせ、

「ア、アッ、何をする！ 何をするのです。妾に向かつて！」

むきだしになった胸たけた乳房を、ハッと押えてうずくまったが、その双の腕を善兵衛と清兵衛が、がっしりとつかまえて逆手にとり、背後に回す。

「舌を、舌をかみまするぞ。お、お離しなされませ！ 善兵衛！ 清兵衛！ 離せというのに！」

裂帛の声に、たじたじとなった善兵衛が、右手をはなした、とたん、

「無、無礼者！」

貴子のしなやかな腕がまえにまわり、（ピシャ！）と、こきみよい音をたてて、平手打ちが、善兵衛の頬にとんだ。

「慮外者めが！」

さらに、もう一打ち、掌がかえろうとした刹那、

「おっとっと、はしたない真似はおよしにな

るほうが、あとあとのおため」

がっきりと肘をとらえたのは、本日の「責め場」の介添役、美男の槍助。グイッと背後にその腕をねじあげると、貴子の胸もとを突きだすようにして、舞台へと追いあげる。

むっちりと肉の盈ちた双の肩から、きりりとひきしまり、いくらか上にそった、かたちよい乳房までをあらわに、舞台にひきすえられた貴子の両手を、再び善兵衛、清兵衛が、しっかりと捉える。

（あの頃は、とうてい思いも及ばぬ高嶺の花であったもの……）

青江は、全身に反抗の気配をみなぎらせている貴子をニタッと見おろすと、

「奥方、ではこれより身どもの主人、丸田屋どのに、その紫綸子の湯文字をとっていただくことにしたい。お覚悟めされい！」

といいはなつと、正座している貴子の膝をひらかせようと手をかける。

が、貴子が、生命がけでひきしめている両膝は、なまじっかのことで、ひらかなない。

「青江さん、手伝いましょうぜ」

美男の槍助はニタリと笑って懷から朱色の縄をとり出すと、二人がかりで、貴子の右膝をたてさせ、その膝のあたりに、くるくると

二廻りさせ、縄尻を、舞台の天井の滑車へとつなぎとめる。

「善兵衛、清兵衛。どんなことがあっても後手を、はなすまいぞ」

青江のたくらみ――。

それは、緊縛した裸身から湯文字をひっぺがすよりも、縄をかけることなく、貴子に適度の反抗を許しながら、素っ裸にむきあげる――楽しみ。無抵抗の女を裸にするよりも、女の反抗を適度に楽しみたいという考え。

だから、後手に縛りあげるかわりに、二人の雑色に縄の役目をやらせてある。

善兵衛たちでなくてもこの役目、男ならば誰でも一度は、つとめたくなるであろう。

黒う、しのような黒髪が波打っているきらめくばかりの背中。淡雪のような二の腕のつけねから、わずかにのぞいている腋毛の妖しさ。それに部屋中にただよい始めた麝香鹿の香袋と蘭花の髓芯から採ったと云われる蘭麝の香り。下賤の二人にとっては、まさしくこれは、三保の松原に天降った天女をスッ裸にむきあげるような比類ない快楽と云えた。

もう極楽にでもでくわしたように、口辺からよだれをたらして、振りほどこうと激しく乳白色の裸身をくねらせる貴子の双腕を後生

大事に、にぎりしめている。

朱 色 の 縄

「妖しいばかりの美しさ。珍重、珍重！」

老中、領田下野に話しかけられて、

「御意に召しまして光栄に存じまする」

元禄屋が軽く頭をさげる。

しーんと、しずまりかえった部屋のなかで滑車のきしむ不気味な音。

朱い縄が、一寸、二寸と小刻みにあがるに従って、貴子の右膝が、あがっていく。

「ア、アレッ！ 卑、卑劣な！ お、お離しッ！ 善兵衛！ 腕を離せと命じておりまするぞ！」

絶叫に近い声を貴子は、あげる。

右膝が一寸でも上にあがれば、いくら左膝をしっかりと床につけていても、紫綸子の湯文字がめくれて、そのかげから、腋毛にまさるほど黒々と艶めく草むらが、男たちの眼にさらけ出されてくる。それを、ふせごうにもどのような方法があろう、左脚をうごかせば湯文字がさらにみだれる、腰をふっても同じこと。ただひとつ、床をはなれた右足の爪先を内側に向け、右の腿を左の太腿に必死で密

着させて、女の股の力で、右膝が、ななめうえに、吊りあげられていくのを、ふせぐよりほかはなかった。

が、それも時間の問題――。

女の力では、大熊をも吊りあげる滑車の力には及ばず、やがて、右膝が、乳房のあたりまで、たかだかと吊りあげられる。

紫綸子の湯文字がめくれて、スーッと冷たい空気が、白く柔らかな内股のおくに忍びこんでくるのを感じた貴子は、最後の渾身の力をこめて、両腕をふった。

「アッ！ しまった！」

しっかりと、とらえていた右手をふりほどかれて善兵衛が叫ぶ。

「チィ！」清兵衛の舌打ち。

が、その清兵衛の顔に、貴子の平手打ちがとんだ。

「や、やりやがったな！」

清兵衛が、力いっぱい貴子の胸もとを押した。同時に、槍助が、滑車をぐいぐいとひきあげたものだから、がく、がくっと二度ばかり、床にたたきつけられた貴子の裸身は、右膝にまきついた朱い縄一筋で、惨めにも吊りあげられてしまう。

貴子にとって、わずかにも幸せだったのは

湯文字の裾が、股間にかかって、再びおおわれたことであつた。

双肩と頭と両手が、床についているだけ、逆さ吊りにされた貴子を見ては、もう、客席に、じいっと坐つてはおれないのが、男心というものであろう。

ものに動じない領田下野までが一膝のり出し、ほかのものは、舞台にかけあがって、貴

子の周囲に、むらがる。

「イヤ、イヤ！ お、おやめになってくださいませえ！ 舌を、ほんとうに噛みます」

貴子の悲鳴も、舌を噛むという言葉も、絶対に自殺できない立場に貴子がいることを知っている元禄屋たちには通じない。

「丸田屋さん、ご遠慮なく。さあ」

元禄屋にそそのかされた丸田屋は、眼の前

△強烈な被虐女性△

川路むら子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女性川路むら子さんの狂態を再び刻明に描写し、ここにフアンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
一条もまとわぬ裸身に只魔のような執拗な目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
如何に被虐を求めて泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
ねっとりとした脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けば忽ち妖気が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
細尻をとられて追ひ立てられ、うしろも責め手の意のままに、うしろも開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
締めつけた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
自分の顔面より上に両足を開いて挙げさせられた姿をかくすべし。

壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
ありきたりのM女性であつたものの、あるが彼女は許容しなかつた。

悶絶海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
身体が二つ折りになった苦痛もさることながら羞恥の個所があか

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
不安定な片足吊りで全身を揺るがすように見られる羞しい苦痛。

再びむら子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペンで川路むら子は耐えられず、再登場した。その際、四度、鮮鋭な想

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
両膝を棒に開股縛りにした。横臥に縛りながら、好みの責め

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
鼻責めを極め、鼻を縛られた。手

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
全裸で後手に縛られた。トイレに追い込んで無理矢理排泄

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
縄を用いて逆エビ縛り。痛

棒責めの全裸女体

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
縄を用いて棒責め。痛

椅子責めでいためる

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
椅子を使ったグルグル巻きで、椅子を縛られた。グルグル巻きで

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
部屋の中央にある柱に全裸のま

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
顔面を縛り、顔面を玩弄する。

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
両手を上げて、媚態を示す。

悦楽責めアツプ集

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
柱と棒利用の開股責めを初めと

棒責めの全裸女体

大手札三枚一組 略号八〇〇円
川路むら子 一組 略号八〇〇円
棒を用いて棒責め。痛

で揺れている大理石のようにすべすべした太腿から内股へと、かろうじてとどまっている湯文字の裾を、大事そうにつまみあげると、こきざみにふるえる指先を、はなす。

紫綸子の湯文字は、花びらのように哀しくも、舞い散った。

その幽かになまめく、むらさき蘭の妖しさを、五百匁の蠟燭の明りが、ありありと照らし出す。

領田たちは、赤く濁った両眼を、満月のように見開いて、唇にそそがれるはずの手にもつ酒盃を、胸のあたりにとどめて、貴子の、香り高い絶妙の美体を、ただ、みつめるだけであつた。

「フッフッフ……老中肥田さま。これからどのようにお責めなされます」

元禄屋は、紫蘭の門をまえにして、固唾を呑んで、ためらっている、ときの権力者によびかけた。

その声のつくりだした微風に、広間の蠟燭の焰が、いっせいに、ゆらぎ、貴子の裸身をかこむ十数人の男たちの黒い影が、魑魅魍魎のように、躍った。

△読者投稿▽

再会の美酒に酔いて

乃 美 対 造



『Mの妖精』と銘うって本誌の読者通信欄を通じて姿を現実のものにした深田菊子嬢と関係者の好意から私が深田菊子嬢とSMプレイに耽美の極致を求めあってから、既に早いもので半年近い日数がたちました。

と望む菊子嬢を求めて右往左往する奴輩のうちから選ばれた幸運児、益田茂夫氏が愛読者代表らしい遠慮がちなルポを発表されています。

更に、時折り読者通信欄などに熱烈なSM

それからも、日増しに飼育調教されて、Mの妖花として開花してゆく菊子嬢の艶姿を眺めているうち、女の業というものを見せつけられる思いです。被虐の甘美さに魅力をつくされたのか、正面きって勇敢にもMの権化になりたい

の思いを寄せていられる女性読者の小杉千恵夫人が、深田菊子嬢責めの場の介添え役に列席を許された上、女性らしい控え目なルポを発表されるなど、次々と新しく出現する責め手の前に羞恥の姿を晒しています。

大小二個のバイブで調教されて若々しく美しい二十才の肉体をいよいよ成熟させられてゆく菊子嬢を想い続けてきましたが、「努力は万事を征服する」とかで、再会への涙ぐましいばかりの努力が実のり、二月十九日の土曜日に再度のSMプレイの機会を持つことが出来ました。

想像に反して菊子嬢は当初のういういしさ

を全く失っていなかったのですが、それでも可愛らしい呼びリンのような乳首をかこむ乳暈の色艶や、むっちりとした太腿、それに、やや色素の濃い目の双臀の割れ目などが、思惑が助長するのもかも知れないけれども、心なしか被虐を求めて媚を売るかのように成熟してきているのを感じました。

さんざんに縛り上げて責めさいなみ、その耽美の極致の緊縛姿態をカメラに納めた最後の宴は、半年間もの間、私が悶々の中に願ひ続けてきた想いの成就に外なりません。

かつて豪華なホテルの絹布団を甘美な夢のように濡らした澄みきった水液。また、モーターの贅沢な布団の上に再度の想いを、彼女自身の述べた読者通信のあの一言、「新鮮な尿の匂い」で満たした

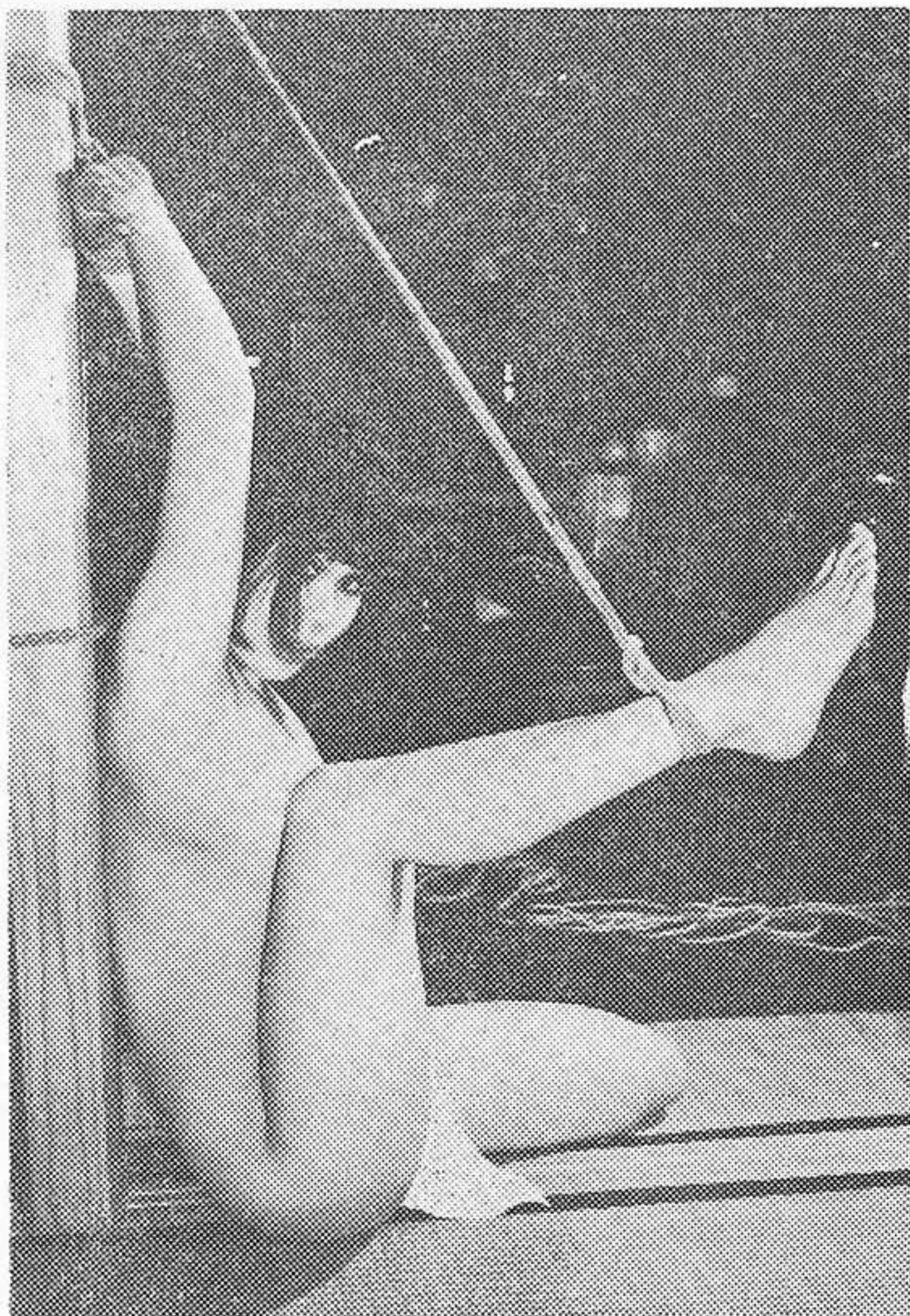
水晶以上に美しい水玉の輝き。誰もが空しく布団に吸わせてしまった宝石のような水滴を私はSMの祝宴の美酒として愛飲したかったのです。

立位開股に全裸の美しい姿を縄で固定させられて、羞恥の歓喜に全身を火照らせている菊子嬢と私との間で交わされた会話は、凡人では思いもよらない「飲ます」と「飲ませま

せん」という、やりとりでした。

結局は直接挿受で顔をくっつけたのでは、恥かしさで筋肉が硬直してしまつて排出できないと言うので、双方譲歩の末、コップに受け、そのかわり、後始末だけは犬のように、しかも時間をかけて、垢までも舐めとつてもよいということに折り合いました。

立位開脚の菊子嬢の足元に、何十枚も新聞紙をひろげて敷きつめ、更に洗面器を配置しました。そして冷蔵庫の上の透明コップをゆすぎに立った私は、菊子嬢の美酒を満たすコップをわざわざ洗う倒錯したマニア心理を思い、自分もそろそろ半人前ぐらいのSMマニアになれたのだなあと思いました。コップに入りきらない残余の尿意を足下の洗面器に迸らせるのをみきわめたあと、飲み干すそれは、それこそ咽喉が灼けるように熱く感じられ、そして塩からかったですが、そんな私を、じっと上から見つめる濡れたような菊子嬢の黒い瞳を痛いほど感じました。





連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(27)

—— なおみの巻 Ⅱ (1) ——

鬼 山 絢 策

バー「プペ」

去年、馬場氏が久しぶりに大阪から出て来て、二、三日、東京に居たが、早速、私の処に電話してきて、二年ぶりで渋谷で飲んだ。

ここ三、四年は、いつも私が大阪へ行って彼と会うのだが、東京で会うのは、ほんとに久しぶりである。

「昨夜「家畜人ヤプー」の店」へ行きました」

まだ、あの店ができたばかりの頃だったがそこは好きな道で新宿三丁目裏の「ヤプー」へ行った時のことを話してくれた。

しかし「ヤプー」の店のことは、本誌にも二、三、書かれているし、私も行こう行こうと思っていながら、行きそびれて、この目で見ていないので、ここに書くつもりはない。

「まあまあ、よい加減で、勘定も、そう高くないし、十二時を過ぎると面白くなる店ですね」

馬場氏は、すでに、この道のヴェテランである。大抵のことには、驚かない。

彼は五年も前に、すでに「ヤプー」の店以上の経験をしてきているので、それほど珍しくは感じなかったであろう。

「そう言えば「プペ」のあとは、どうなっていますかね」

「サア、私もこの頃は行かないので分からないですよ。なおみがやめてからは、しゅっちゅう、代が替わったようですね」

私が書こうと思うのは、渋谷道玄坂の「プペ」というバーのマダム、なおみのことである。

当時は、まだ馬場氏が高円寺に住んでいて私とは三日にあげず、よく会って、一緒に飲んだり撮影したりしていた頃のことである。

「この間、ちょっと面白いバーを発見しましたよ。一度、行って見ませんか」

馬場氏に誘われて道玄坂を上り、途中で右に折れて百軒店の方へ入って行った。

「此処はちょっと、やばいんじゃないかな」

当時は新宿の歌舞伎町、新宿二丁目裏、池袋のカスバとともに渋谷の百軒店と言えば、暴力バーで有名な地帯だった。

「ええ、つい先頃まではね。でも、この頃はだいぶ、おとなしくなりましたよ」

バーにかけては馬場氏は情報通である。

古着屋だの質流れ品だの、ギョウザの店だのがゴチャゴチャと狭い道を挟んで立ち並んでいる中を通り抜け、百軒店の裏側のバーや小料理屋が並んでいる中の一軒で「プペ」という看板の出ている小さな店の扉を押した。

二坪ほどの小さなスタンドバーだった。

とまり木の椅子が六つほど並んでる中で、客が四人ほどもいて、私達が入ると満員になっ

てしまった。

「ワア、パパさん来てくれたの。うれしい」

カウンターの中央のマダムは白い腕を二の腕まで出していた。その腕で馬場氏の顔を抱いてキスした。えらいモチかたである。

「こちらは、ぼくの先輩でキヤマさん」

「まあ、こんな狭い所へ、よくおいで下さいました。なおみです」

かなりグラマーで須田開代子のような顔立ちのマダムだった。もっとも目は、もう少し大きく、渥美マリの目に似ているセクシーな女性だった。

「この人、あんたのパパなの」

「ウン、だって馬場さんでしょ。バーさんてのおかしいじゃないの。だからババさんをパパさんと呼んでんの。いまに、ほんとに、あたしのパパさんになるかもしれないわよ。ねえ、パパ」

馬場氏は、入るそうそう、キスされて悦に入り、ニヤニヤしている。

「どうなんだよ、コラ」

なおみは馬場氏の額を背で突ついていた。

「そりゃ、ママの方でその気があるなら、光栄この上なしですよ。パパより奴隷にでも何でもなりますよ」

「ハハア、これだな」

馬場氏の気に入ったわけが分かった。

「今日は、だいぶ入ってるね」

「そうよ。だって、ずーっと一ぱいなんだから。皆、好きな人ばかり来てくれて、うれしくなっちゃった。ホラ、光ちゃんでしょ。マア公でしょ。ムウさんでしょ。それに、あちらは社長さん。そこへパパが来てくれたんだもん。しかも、素敵なお紳士を連れてさ」

なおみは、また両腕を伸ばしてスタンド越しに馬場氏の顔を両手ではさんで、グイと荒っぽく引き寄せ、頬ぺたへ、キスした。

「痛てて、乱暴だなあ」

「フフフ、おビール？ お酒」

「おいおい、そっちばかりサービスしねえでこっちにもしろよ」

「うるせえな、この野郎。黙って、おとなしく飲んでろい！」

男のような太い声で、マア公と呼ばれる若い男を、どなりつけた。

「なるほど、これだな——」

ナポリのお勝

「どうです？ あの女はサジっ気があるでしょ」

よう」

「サア、一度、行っただけでは、どうか分かりませんね。ムードとしては、そういうものを感じさせるけれど、まあ普通の女でも、少し気の強い女は、あのくらいのことは、やりますからね」

と言ったものの、私自身、あのな、おみという女の発散する色気は、私の好みに合っているし、顔も身体も私の好きなタイプだし「ああいう女がサジスチンだったら、いいなあ」という希望的想像は、いだきたくなるのだった。

「ま、もう一度、行って、よく観察する必要がありますね」

今度は私がおぐる番だから、また「プペ」でお返しをしようと思った。

「それは別として、あのママは、あんたに惚れてるんじゃないんですか。ママの言う様にほんとにパパになってやったら、どうです」

「いやあ、ぼくなんか、その資格はありませんよ。第一、そんな資力がありませんよ。しかしあの女には、すでに亭主かパトロンが居るのじゃないですか。どう思います」

「一度、見ただけじゃ分かりませんね」

と言うことで、二、三日後に今度は私が誘

って「プペ」へ行った。

十時を過ぎていたが、今夜は空いていて、客は若い男一人しか居ず、なおみはスタンドから出て、その若い男と並んで飲んでいた。「あら、いらっしやい。こないだは失礼しました。あたし、酔っぱらってたもんですからごめんなさい」

なおみは私に向かって、そう言った。

「イヤイヤ、ああいう鉄火なムードが、いいよ。パパ氏も、あんたの、ああいうところが好きだと言ってるよ」

「フフ、ごめんなさいね。あたし、何か悪いことした？」

「ああ、こづきまわされましたよ。でも、あなたに、ああされると気持ちいいですよ」

「ごめんなさい。あたし、酒癖が悪いのよ」

「そうだよ、そうだよ。俺なんか、いつも張り倒されてるんだから」

隅の若い男が、調子を合わせた。

「うるせえ、若造は黙ってる。でないと、また、ぶん殴るよ」

なおみの白い手がのびて、男の髪の毛をサツと払った。男は殴られるのかと思って首をすくめた。なおみは私達の方を向いて、

「すみません。つい地金が出ちゃって……」

「イヤイヤ、ママのその、男を男とも思わないところに、みんな魅かれて来るんじゃないかな」

「俺、帰るよ。殴られねえうちにな」

若い男は勘定を払わずにサツと立って出て行った。何か、やくざっぽい感じがする。

「あの若いの、どっかの組の人？」

私は、さり気なく聞いて見た。

「有線放送の子よ」

このあたりのバーは、みな有線が入って居て、どの店も同じレコードが、鳴っている。

また、ポツリと客が入ってきた。三十七、八のトックリ・セーターを着た苦味走った、

いい男である。サラリーマンには見えない。

ジロリと私達を見ると、値踏みをするような目つきをした。

「今日は上がりなの、松ちゃん」

「いや、これからだよ。まだ、時間が早い」

時間は十一時を過ぎていた。まだ早いと言う仕事は何だろう。

「こないだ、ケツの穴が痛てえとか言ってたが、どしたい」

「色消しねえ。お客さんの前で、そんなこと言わないでよ」

この松ちゃんが現われると、なおみは急に

おとなしくなった。それにつけこむように松ちゃんは、なおみを冗談まじりに、こきおろした。

「今夜は、また妙にイキが悪いじゃねえか。なあ、昔は百軒店のナポリのお勝と言やあ、泣く子も黙る、おあねさんだったじゃねえか」

「ナポリって店は、どのへんですか」

およその察しはついたが、私は松ちゃんに話しかけた。それを待ってたように、

「いまは、なくなりましたよ。一斉取り締まりにあって、あのへん一帯は、ペチャンコでさあ。当時は面白かったですよ。この女なんざあ、あおやぎのお勝と言ってね……」

「よしてよ、松ちゃん。もう足を洗ったんだから昔の事バラさなくてもいいじゃないの」

「ヘエ、あおやぎねえ」

「あおやぎって、知ってますか」

「知りませんねえ。どういう意味ですか」

「あおやぎっていう貝があるでしょう。あのことですよ」

「イヤだねえ。よしてよ、松ちゃん」

「つまりね、お客を身ぐるみ剥いで、あおやぎのように剥き身にしまうことであさあ」

「なああるほど、うまい表現だなあ」

バツの悪そうな、なおみの顔を見ながら、私は大いに愉快になってきた。

「何しろねえ、カモが一匹、とび込みゃあ、扉に鍵かけちまって、寄ってたかって料理しちゃうんだからねえ」

なおみは、レコードのボリュームを、やけに高く上げて、話し声を消してしまおうとした。

「うるせえな、おい」

「もう、やめて！ 帰ってよ、あんた」

なおみは、とうとう怒り出した。松ちゃんは、ヘッヘッヘッと笑い出した。

「これで、みんな、いいお客さんを、逃がしちゃうんだから」

「いやいや、面白いよ。そういう経験のあるママってのは貴重な存在だよ」

「そうですか。そう言って下さると、うれし

いわ。いまは決して、そんなことしませんからね。これからも御ひいきにして下さいね」

「今度はママの口から、昔の話をジックリ聞かしてもらおうじゃないか」

「イヤですよ。もうその話、おしまい！」

そろそろカンパンの時間なので、指で勘定のサインをおくったが、なおみは私の耳に口をつけて、

「お願い。もう少し、いらして下さい」

馬場氏は一人ポツンとして、遠慮がちに手酌で飲んでいる。馬場氏だけが、とり残されたような存在になってしまった。

「おい、ビール、もう一本」

「だめよ。もうカンバンだよ。この頃、デカが、うるさいからね。あんた、それ以上、飲むと仕事にさわるよ」

松ちゃんは、何だかだと粘っていたが、ようやく腰をあげて出て行った。

「どうもすみませんでした。しつこくてねえあの男」

「何してんの、あの女」

「運ちゃんですよ。神風タクシー」

毛 殺 し

「あのママは相当、したたかな女ですね」

“プペ”を出てから深夜喫茶に入った。馬場氏は彼女が元暴力バーに居たということで相当ショックだったらしい。

「まあ大したことはないでしょう、いまは足を洗ってると言ってるんだから。それとも恐れをなしましたか」

「いや、魅力倍増ですよ。あの女、亭主がい

ますかね」

「さかんにそのことを気にしますね。ひと晩つき合おうというんですか」

「いやあ、ハッハッハッ」

馬場氏はテレたように笑った。

「何なら、橋渡しをしてあげましょうか」

「でも何となく恐いな、あの女」

「亭主がいるとか、パトロンがいるとか、そんなこと、問題じゃないじゃありませんか」

「そう言えばそうですね。いや正直言いますとね、ぼくは普通のセックスを望んでいるわけじゃないんです。ただひと晩、ゆっくり彼女と飲み明かしたいし、彼女のサジ振りに接したいのですよ」

「それなら、わけはない。ただし、その場合はやはり、あなたがMであることを打ち明けないじゃダメですよ」

「それが、どうもやりにくいんですよ。冗談のように言えば向こうは冗談だと思うしね。まさかこの年で、本気でそう言いにくいですよ。まわりに客でもいたら、ちょっとまずいし、二人きりの時じゃ、何か妙に深刻な感じで言えませんか」

「じゃ私が話してあげましょうか。もちろん軽い意味で、しかも冗談ではなく、話してあ

げますよ」

「じゃあ、うまくお願いします。ところで、そういう場合、いくらぐらい、かかるものでしょうかね」

「旅館の費用は別として、まあ一枚で、いいんじゃないですか」

「それで、いいですか」

「そんなもの、値段はあってないようなものですから。向こうもお遊びだし、気が向けばやると言った程度でしょう。金が目当てでやるわけじゃないけど、と言って、ただではつまらないと言った按配でしょうね」

それから私は、ちよいちよい「プペ」に行った。

客は若い男が多かったが、それらは大なり小なりママのなおみに気のある連中だった。

なおみを張りに来ている連中を、彼女は巧みに、さばいていた。適当に色気を見せ、気をもたせ、あとをひくようにもって行った。

冗談に見せかけてママを口説く男はいたが話が本気になりかけると、今度はなおみの方でパンパンと啖呵を切るような冗談で、ごまかしてしまうのだった。

伝法肌で荒っぽいところを見せるのが、彼女の看枚芸で、気の強い男には、その上に押

し跨がるような強気で押し伏せてしまうのだった。だが、気が弱くて一人で無口に飲んでいる男には、姉のようにやさしく振舞った。私は、なるべく客に調子を合わせるようにした。ワイ談が始まれば、こっちもフランスの小咄などを、もち出した。

「ええ、これはフランスは花の都、パリのおはなし。ドウトヌヌの付近に美人の後家さんが住んでいました。この未亡人、我が子のよきに可愛がっているブードルがおりましたがこの犬が、だんだん弱ってきて、とうとう死んでしまいました。一人息子を亡くしたように悲しんだ未亡人は、犬が何の病気で死んだのか分からなかったので、獣医のところに行って行って、病気の原因を確かめてくれと頼みました。獣医は犬を解剖してみても、奥さんあれでは死ぬのも当然です。あの犬の胃袋の中は毛で一ぱいでしたよ」

アッハハハと、なおみがテーブルを叩く。

「それを聞いた未亡人は、ああ、そうですかそれで主人が死んだ原因も分かりました」

なおみは、身をよじって笑った。

「おい、誰か、あたしの亭主になる奴は居ないか。その犬と亭主のように殺してやるよ」
「おれが、なるよ」

「ぼくだって、なるよ」

「よし、そいじゃ最初は、お前ね。お前が死んだら、そのつぎは、まあ公。いいね。まあ公、殺したら、つぎは誰になる？」

「おれだよ」

「光ちゃんかい。光ちゃんはタフだから、時間をかけて、ゆっくり、なぶり殺しにしてや

るからね」

「そちらの先生は、どうです」

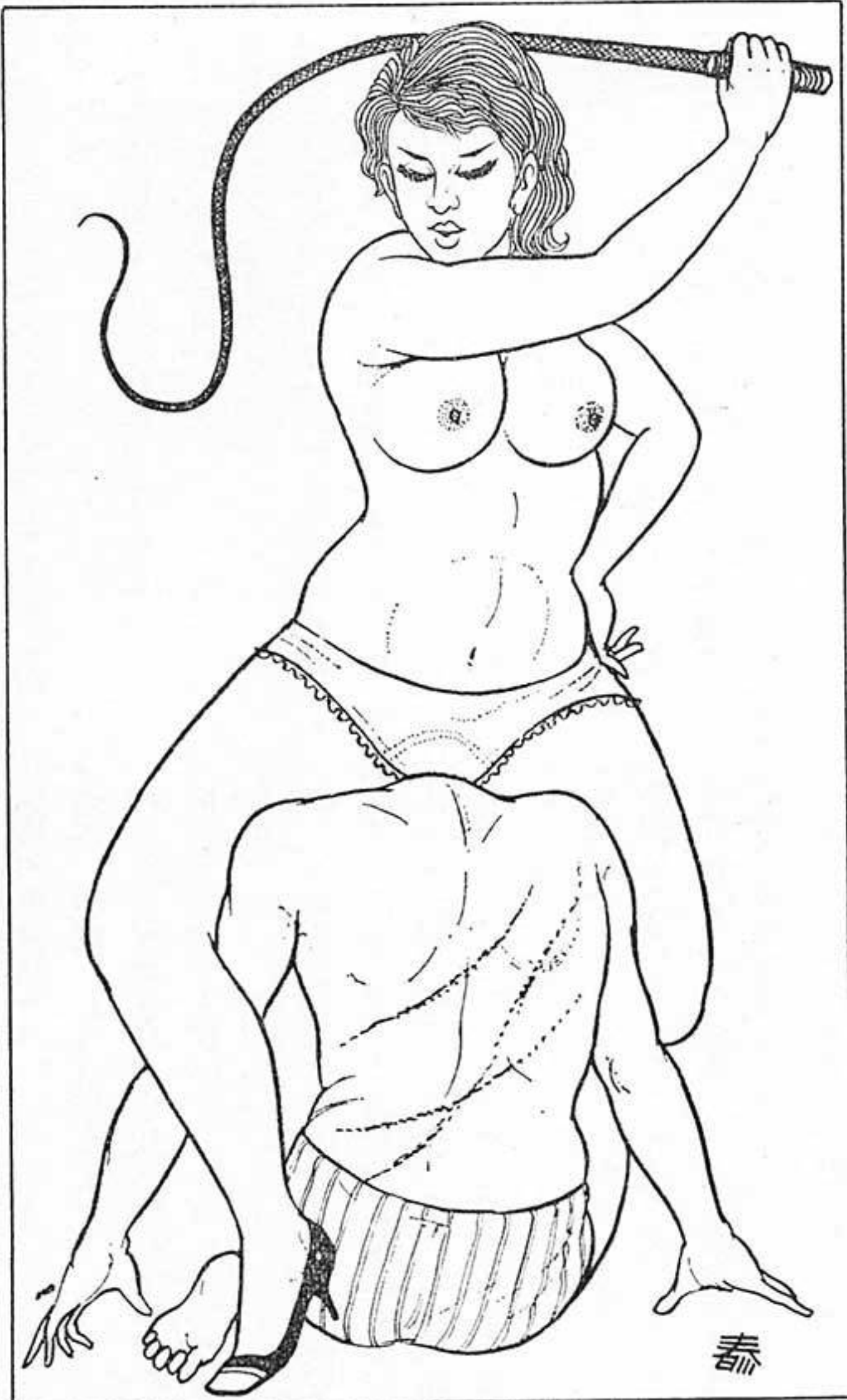
私のところに、お鉢がまわってきた。

「いいねえ。喜んでなるよ」

「先生だったら、やり甲斐があるね。財産を

ゴッソリ乗っ取っちゃうから」

「私は死なないよ。毎晩胃の洗滌するから」



ナミオM画廊 『隷属の儀式』 春川 ナミオ

「ああ、そういう手があったか」

「だが、そんなに殺したらママ、パイパンになっちゃうだろう」

「その前に俺の舌の方が荒れて、熱いものなど食えなくなっちゃうよ」

「バカ、何言ってやがんだい」

大勢で、ワイワイと騒いでいる。こんな時馬場氏がいたら喜ぶだろう。

「パパ、来るかい」

「うん、来るわよ。あの人は早く来るわね」

馬場氏とは最近、会っていないが、やはり足しげく来ているらしい。私は仕事の都合でどうしても十時過ぎになってしまう。

「ママは毛深い方かい」

デパートの企画部にいるという青木という元気のいい男が聞いた。この男が一番、なほみに熱をあげているようである。

「ああ、毛深いわよ。おヘソの上の方まであるんだから」

「すげえ。一度、拝観させてもらいてえな」

「そりゃ、もう少し飲まなきゃね。ビールも一本、あけるよ。あたしが飲むからね」

「そしたら、見せてくれるかい」

「あたしが見せてあげるのは、この人」

隅の方で黙って飲んでいる二十才を、やっ

と越したばかりの蒼白い青年を指さした。青年はパツと、あかくなつたようである。

「可愛いいわ、この人。あんた、お名前、何て言うの」

なおみは両手で青年の頬を、はさんだ。

「まあ、あつたかい！」

青年は、ますますテレた。

また三人ばかり、客が入ってきた。椅子が一ぱいになつたので、私は勘定を頼んだが、なおみは知らん顔をして、

「入れますよ、どうぞ。一人、立ってもらわなきゃなんないけど我慢してね」

あまり客が大勢になつてしまふと却つて散慢になつて、話をして、まとまりがなくなつてしまふ。スタンドに片ひじをついたまま私は眠ってしまった。

尻敷きっぱなし

三十分も眠つたのであろうか。時計を見ると十二時に、近かつた。客は、いつの間にか減つていて、四人ほどになつていた。

「よく眠つたわね」

なおみは、愛想よくコップに水をくんでくれた。恰度、飲みたいところだった。

「俺も水、くれよ」

見ると、いつかの有線放送の男だという羽島道雄が来ていた。

「道雄。お前、もうお帰りよ」

「何でよ。ママと徹夜で飲み明かすんだぞ」

「何言つてやがんだい。もうカンバンだから帰れよ」

カンバンと言われて他の二人の客も勘定と言つた。なおみは小さな紙片に勘定を書いて一人一人に渡した。私も指で促したが、なおみはウインクして、私にだけ勘定書きを渡さない。また、最後までいてくれというサインなので、仕方なく坐っていたが、一面、なおみを張りに来ているこの男達の鞆当てを見るのも面白いし、なおみが、それをどうさばくかにも、興味があつた。

「ビール、もう一本だけ。な、頼むよ」

道雄は頭を下げんばかりにして言う。私が道雄に話しかけても、ジロリとこちらを見ただけで話にのらない。感じの悪い奴だった。

勘定を済ませた二人の客、一人はムウさんと言つたと思うが、これもまた、帰りそうにしている、なかなか帰らない。

なおみはスタンドの上の皿小鉢や盃やコップをサツサと片づけはじめた。

とうとうムーさんと、もう一人は帰つて行った。残りは道雄だけである。

「もう一本、飲みます？」

「イヤ、もういいよ」

と言つたが、なおみは一本つけて、

「きいさん、飲まないなら、あたし飲むわ」

「おい、俺にもビール一本」

「うるせえな。飲みたきゃ、前の勘定を払いなよ。勘定払やいくらでも飲ましてやるよ」

「払うよ、払うからさ」

「いくらだと思つてるんだい。四万六千円だよ。サア、出しな」

「今日はないよ。月給日に払うよ」

「月給日に払う払うって、三カ月も、ためやがつたじゃないか」

なおみは、コップに酒をあけて、ひと息にグイと、あふつた。酒は、かなり強い。

「少しでも内金、入れなよ」

「ねえんだよ。ママんとこへ来りゃ安心して飲ましてくれと思うから来るんだよ」

「冗談じゃないよ。伊達や酔興で商売やってるんじゃないんだからね。タダ酒なんか一滴もないんだよ」

「分かつてるよ。入ればまとめて払うから」

「まとめて払えるかよ、四万六千円だよ。観

音さまの命日でもあるまいし、てめえにや荷が重すぎるだろう」

手ぎわよく皿小鉢をサッサと洗って棚に片づけ、スタンドの上を綺麗に拭くと、出入口をくぐってスタンドの中から出てきた。

「サ。掃除するんだから、サッサと帰れっ」

「ママ、ママよう。今夜、行こうよ」

「バカヤロツ！」

なおみの平手が、ピシッと頬に鳴った。

「痛ててっ」

「ただ飲みしやがった上に、何てこと吐かしやがんだい」

パンパンと両手でビンタをくれた。

道雄は狭い中で板壁にドスンと身体をぶっつけながら、椅子から転がり落ちた。

「この野郎、ふざけやがって！」

なおみは足をあげて、道雄の肩を蹴った。

蹴ったはずみにはいていたサンダルが脱げてカタンと大きな音を立てて扉にぶつかった。

「蹴るんなら蹴れよ。蹴って気が済むんならいくらでも蹴れ」

「ようし、この野郎、言ったなっ」

膝までの、当時としては、かなり短いスカートが捲くれ上がって、ストッキングもない素足が、暗い土間に白く躍って、なおみは道

雄の肩と言わず、頭と言わず、続けざまに蹴りとばした。道雄は顔を横に向けたが、避けるでもなく、なおみの足を顔で受けていた。だが、両手を後について這うように後ずさりしてくるので、だんだん私の椅子の方へ寄ってきた。

なおみの顔を見ると、目を吊り上げて、唇を曲げ、憎悪をむき出しにしたその顔は、サジスチックそのものだった。

「この野郎っ！ すっ呆けやがって」

今度は左足を上げてサンダルのまま、頭をカクンと蹴る。今度サンダルをとばされるとモロに私の方に、とんでくる。

「もう、勘弁してやれよ」

ほんとは、もっと蹴るところを見たかったのだが、心とうらはらな言葉が出た。

「イヤ、もっと蹴ってくれよ。横から口、出すんじゃねえよ。もっと蹴れよう。蹴って気が済むんならよう」

道雄は目をつむって、酔っぱらったようにどなっている。

すると、なおみは短いスカートを両手でクルツと捲くると、大きく足をあげて、道雄の頭の上に尻を乗せて、腰かけてしまった。

必然的に私と向かい合って腰をかけた位置

になった。

「すみません。きいさん、あたし、怒っちゃうと前後の見さかいがなくなっちゃうのよ」
道雄の頭に腰かけたまま、ニッコリ笑って私に話しかける。

「昔とった杵づかかい」

「フフ、昔はこんなもんじゃなかったわよ。きいさんだから、ぶちまけるけど、こんな野郎、半殺しの目に合やすのは朝飯前よ」

「くるしい。ママ、どいてくれ。重いよ」

「なにを言ってるやがんだい。どうだ、四万六千円は重いだろう」

なおみはウンウンと尻に重味をつけて押さえつける。

「もう勘忍してくれ。帰るよ」

「こん畜生、ふざけやがって。今になって音をあげたって承知しないよ」

なおみは不安定な尻を、スタンドに両ひじをついて支え、私を見て笑った。その顔はサジスティックで美しかった。

「あんた、男をいじめる趣味があるの？」

「べつに、どうってことないけどさ。男だつて女だって癪にさわる奴は、とちめてやるのさ。ふん、この道雄って野郎くらい、いけ図々しい野郎はないんだから。いままで甘い

顔、見せすぎたのよ。今日は少し、こりるよ
うに分からせてやるのよ」

「ウッ。おい、首の骨が折れそうだよ」

「バカやろ。そんな細首、折れちまえよ。これでもか。ホラ、折れちまえっ」

道雄の頭は、なおみの尻の下に隠れているので、どういう風に乗っかっているのか、よく見えなかったが、どうやら首を横に捻じ向けて、首と肩で、なおみの六十キロはある体重を支えているらしかった。

私は残り少なくなった徳利の酒をコップに注いでやった。なおみはグイッと、ひと口で呑みほした。

「ああ、うまい。男の上に乗っかって飲む酒はまた格別だよ」

小便ビール

翌日、私は馬場氏と新宿で会った。

「あのママは、あなたの見込み通り、たしかにSですね」

昨夜の、いちぶしじゅうを話した。

「ヘエ！ 惜しかったなあ。昨夜、行けばよかった。あなたにも会えたし」

「凄い迫力がありましたよ」

「今夜、行きませんか」

「私は二晩、続けての酒は、飲まない主義なんですね」

「いいじゃありませんか。たまには、つき合って下さいよ」

まだ、八時である。

「ちょっと早いですね。あすこは十時過ぎからカンバン近くが面白いんですよ。今から行くと、私の方が酔いつぶれちゃうから」

先に飯を食おうというと、馬場氏は、あまり賛成でないような顔つきだったが、近所のすし屋で軽く詰め込んだ。馬場氏は、そこで三本ほど、飲んだ。

「ぼくのこと、話してくれましたか」

「ええ、ちょっとだけね」

あの晩、なおみとカンバンの後、焼肉を食べたが、その時、馬場氏を今晚の羽島道雄のように、扱ってやれば喜ぶよと、言っていた。

なおみは「フン……」とだけ言ってチラと目を動かした。

「変わってるのね、馬場さんて。そんな風なところのある人だと思ってたわ」

「今度、試しにやってみてごらん」

「でもねえ、理由もないのに、あんなこと、

できないわよ」

「それが彼に対するサービスなんだよ」

「そりゃ分かるけどねえ」

なおみは丸山の近くのアパートに住んでいて、家まで送ってやった。彼女は現在のところ、亭主も恋人もない様子だった。

馬場氏は目を輝かせて、

「で彼女、何と言いました」

「やるとも、やらないとも言いませんでしたよ。そりゃ、やってやるとは言えないんじゃないんですか。あとは、あなたの方で、そのムードに誘導するんですよ」

「それが、ぼくにはできないですよ。何だか恥かしくてね」

「他人のいる前じゃ、いやなんでしょう」

「それなんです。うまく二人きりの時に、そういうチャンスに恵まればいいんですがね。せめて鬼山さんと、三人だけの時にでもね」

「まあチャンスを待つことですね」

お酒を三本、飲む間、話はずんで十時近くになった。それから「プペ」へ出かけた。店は混んでいた。客が五人ほどいる。私達二人が坐る椅子は一つしかない。

「満員だね、あとで来るよ」

「待って！」

と言う声がしたが扉を閉めて二、三步、歩
き出すと、なおみがとび出してきて、いきな
り私に抱きつき、往来でキスされた。

馬場氏の見ている前で、馬場氏に案内され
た店のママからキスされるのは、馬場氏に対

して悪いように思った。

「大丈夫よ、入れるわ。よく来て下さったわ
ね、パパ」

なおみは平気な顔で馬場氏にも笑顔を見せ
「サア、入ってよ」

馬場氏を先に入れて一つ空いている椅子に



……イメーシギャラリー……『小 休 止』……岡 たかし……

坐らせようとしたが、遠慮して立っている。

店へ入ると、客の見えている前で続けざまに
頬へキスしてきた。

「昨夜は、すみませんでした」

と耳もとで、ささやく。ピュッと、けた
たましい口笛で、やじられた。

三人連れの若い男達が出て行ったので楽に
なった。なおみは、はしゃいでスタンドの中
でゴーゴーを踊り出した。残りの客はムーさ
んと東急デパートの光村で、両方とも馴染み
客だった。

「この頃、松っちゃん、来ないのかい」

「あの神風タクシー？ 来ないわよ。あんな
奴、来ない方が、いいよ」

なおみの馬場氏に対する態度を、注意して
見ていたが、別に、いつもと変わりがなかつ
た。昨夜、私が話したことは忘れてしまった
のかもしれない。

十二時頃まで何となく飲んでいるうち、光
ちゃんも帰ったが、ムーさんは、まだ粘って
いる。この男は昨夜も来ていたから、なおみ
を張っている口だろう。

そこへ羽島道雄が現われた。

とたんに、いままで機嫌よく、はしゃいで
いた、なおみが眉を寄せて不機嫌になった。

道雄は、ムーさん、馬場氏、私と見廻して私と目が合うと憎悪の目を、むいた。

「何だよ、いまごろ。もうカンバンだよ。帰りな」

なおみは道雄を睨みつけて言った。

「ママ、頼むよ、一本だけ」

「金、持ってきたかい」

「ビール一本で帰るよ」

「文無し野郎に飲ます酒は、ないんだよ」

なおみが煙草を、くわえる。道雄がマッチを擦って、差し出す。馬場氏がライターをカチッと、ならした。なおみは馬場氏の火で悠々と、つけた。

「明日、給料が入るんだよ。明日、必ず持つてくるからさ」

「その手で何度、あたしをだましたんだい」

「よう、一本ぐらい、いいじゃねえか」

スタンドに両ひじをつこうとする道雄の横っ面をピシッとなおみの平手がなぐった。

「帰れっ、馬鹿野郎っ」

なおみの凄い見暮に、なごやかなムードはすっかり、しらけてしまった。

「帰るよ」

ムーさんが千円札を二枚、出した。

「まだ、いいじゃない？ 帰るの。お釣り」

「いいよ」

ムーさんはサッサと出て行った。

「てめえも帰れ」

殴られた頬をさすりながら、道雄は図々しくスタンドに両ひじをついた。

「ママんとこ、アテにして来たんだからさ、

一本でも飲まねえと俺、寝られねえよ」

「何言ってやがんだい。寝られなきゃ起きてたらいいいじゃないか」

「冷てえんだなあ、ママと俺の間は、そんなもんじゃねえだろう」

この道雄は確かに前は、なおみと関係があると私は見ていた。その事を道雄が、しゃべり出す気配が見えたので、なおみは怒った。

「そんなに飲みたいのかい、あたしのお酒」

なおみの目が、あやしく、ひかった。

なおみが変な恰好をした。白い膝小僧が交互にチラッとスタンドから持ちあげられるのが見え、立っていたなおみが、中腰のように低くなった。

その恰好は何をしているのか私には想像がついたが、まさか店の中で私の想像していたことを、なおみがやるとは思えなかった。

こごんでいたなおみがスッと身をおこすと突然スタンドの上にコップが置かれた。

コップには泡を少し立てたビールが八分目ほど入っていた。スタンドにはムーさんが飲み残して行ったビールびんが立っていた。

なおみは、それをとってコップ一ぱいに満たした。

「てめえなんか、お客の飲みカスでも飲んでりゃ身分相応だよ。ホラ、飲みな」

馬場氏の顔色が変わっていた。私と顔を見合わせた。馬場氏もビールの中味が何であるかを知っているのだ。

「いまにな、ドカンと金を儲けてママを買い切ってやるからな」

道雄は、すでにどこかで飲んできたらしく両ひじをついた腕の中に顔を埋めるようにして、ひとり言を言っていた。

「ちき生、金がなんだよ。金、金って吐かしやがる」

「ホラ、ビールだよ。飲みな」

道雄はコップを無難作にとってグーッと半分ほど飲んだが、とたんにプーッと、むせるように吐き出した。それが、かなり離れていた馬場氏の洋服の袖にかかった。

「な、なんだい、こりゃ」

「アッハハハ、アッハハハハ」

なおみは天井向いて大口開けて笑い、テー

ブルを叩いて、けたたましいまでに笑った。
「アッハハハ、飲みやがった。バカ！ あたしの、おしっこだよ。アハハハ、バカヤロ！ あたしの、おしっこ飲ましてやったんだよ。ざまあ見やがれ」

道雄は絶句し、放心したようになった。こういう時は、次に狂暴な行動に出ることが多いのだ。

「文無し野郎は、小便ビールでも飲んでるのが身分相応だよ。どうだい、うまいかい。あたしの身体の中を通ったお酒だよ。有難く頭を下げて飲みやがれ。バカ！」

道雄はポカンと口を開け、横目で私達の方を見ていた。だが、焦点が、ぼけていた。

「何だい、四万六千円も踏み倒しやがって。あたしは、お金を出して、お酒を買ってるんだよ。てめえみてえにタダ酒、喰らい倒すのとは違うんだよ。てめえにゃ元のかからない小便飲ましてやるんだ。わかったかい馬鹿」
ポンポンと首を上下に振って絶え間なく、なおみの悪罵がとんだ。

「分かったかよ、間抜け野郎。分かったら、ホラまだ半分、残ってるよ。それを飲みな」
私と馬場氏は、もはや完全な傍観者であった。口を、さしはさむ余地は全然なかった。

「飲みなよ、文無し野郎。あたしのおしっこが飲めないってのかい。飲ましてくれと言うから出してやったんだろ。飲めよ、ホラ」
なおみは半分ほど液体の残っているコップをとって、道雄の口へ持って行った。

「これ飲めば、勘定、棒引にしてくれるか」
「馬鹿野郎、勘定は勘定だよ。なめるんじゃないよ。三月も溜めやがって、本来なら利息が、うんとつくんだよ。利息ぐらいいは勘弁してやらあ。ホラ、飲めよ。飲め！」
唇の間へ、コップのふちを割りこませた。

道雄は両手でコップを、おさえた。

「何すんだよ。飲まねえのか、あたしのおしっこ。飲めよ、ホラ！」

道雄は泣き出しそうな顔で、なおみを見つめた。いまにも爆発する激情を、かろうじて抑えている様子だった。

「このウスノロ野郎、飲めっ！」

なおみはパッとコップを離すと道雄の顔をめがけてコップの液体をパッとぶっかけた。
「アハハハハ。ざま見ろ、バカヤロ」

道雄はモロに浴びせられた顔を、スタンドについた腕の中に埋めて突伏してしまった。
「来るなと言ったろ。昨夜もあれだけやってやったのに性こりもなく来るから、こういう

めに合うんだよ」

「小便を飲まされて口惜しいと思ったら金を持って来い。そうすりゃ、お客さま並みに扱ってやらあ。四万六千円、耳を揃えて持って来い」

道雄は、ガバと頭を上げた。私はハッとした。暴れ出すのではないかと思ったからだ。

「ママ、お願いがあるんだ」

「なんだよ。汚ねえ面して、何だい」

「二千円、貸してくれよ。な、頼むよ」

「な、なんだって、この野郎。四万六千円も踏み倒しやがった上に」

「すまねえ、頼むよ。どうしても要るんだ」

「この野郎、どこまで図々しい野郎だ」

「な、頼む」

道雄は両手を合わせて拝んだ。

「こんちき生ッ。ホラッ、これ持って、とっと出て行け。二度と来るんじゃないよ」

「乞食野郎」

千円札二枚を放り投げた。札は椅子の間の土間に落ちた。道雄は、それを拾うと、ものも言わずに扉を開け、パターン！ と強く締めて逃げるように出て行った。

外の風がサッと流れ込むと同時に、酒の香のほかには異様な臭気が鼻をついた。（続く）



残酷ショートショート

う ら め し や

小倉 幸男

「うらめしやー」
不気味な声に目をさますと、枕もとに、ま
るはだかの美しい女性が立っていた。

「あなたは誰なの」
「うらめしやーっていったでしょ。私はユー
レイよ」

この答には、さすがのわたしも驚いた。
「ねえ、人違いじゃないの。わたしはユーレ
イなんかに、でられるおぼえはないわ」
「ウウン。誰でもよかったの、若くて美しけ
ればね。それに私、ひと目であなたが好きに
なっちゃったわ。ここに居させてよ」

「冗談じゃない。わたしレズじゃないわ」
抗議しても、ユーレイでは簡単に追い払え
ないし、わたしを若く美しいと認めたのが、
当然ながら気に入る、よく見直すと、首のま
わりに、赤い細い線がついている。
「その赤いすじは何なの？」

「これはね、ギロチンでスッパリやられちゃ
ったあとよ。うらめしやー」

「じゃあ、あなたは……」

「思いだした？ 最近話題の女死刑囚よ」

「とうとう死刑をうけたのね」

「そう。たった今、すんだところよ」

「お気の毒ね。痛かったでしょう？」

「同情してくれてありがとう。死刑そのもの
はアツと云う間で、痛くもかゆくもなかった
わ。もの足りないくらいよ。でも、この世に
やりたいことが沢山あるのに、志なかばで首
を刎ねられた、その思いがのこってユーレイ
になったのよ。うらめしやー」

「やりのこしたって、まだ殺したりないの？
……あらッ。まさかあなた、それを、わたし
に、やれっていうつもりじゃあないんでしょ
うね」

「ご名答！ さすがだわ」

ユーレイの話によれば、彼女は生前、すべ
ての若く美しい女性に反感をもっていた。こ
れは当然だが、いっそ消えてくれと願った。
ここまでは異常とは云えぬ。しかし、それが
エスカレートし、彼女は、ついに実行にうつ
ってしまったのだ。

だが、僅か八人を殺^やっただけで捕われ、あ
えなくもギロチンの錆と消えた次第。

「目標は二十六人だったのよ。これでは成仏
できないので、あなたに協力してもらいたい
の。ねえ、やってくんない？」

「その気持、よくわかるわ。でも、具体的に
どうすればよいのよ」

「私があなたにのりうつるの。それで、あな
たは超人的な力をもてるわ。じゃあ、いいわ
ね。いくわよ」

返事もまたず、ユーレイの姿は消え、とた
んに何か異常な力がついたよう。

夜明けをまって、獄門に梟けられた女囚の
生首を見に行った。やはり彼女だ。両脚をひ
ろげて逆吊りに晒された胴体の、おへソの下
のホクロにも、たしかな見覚えがある。

「いいわ。あなたの意志をうけつぐわよ」

生首にむかって、つぶやいた。心なしか、
獄門首がほえみ、こんな声が聞こえた。

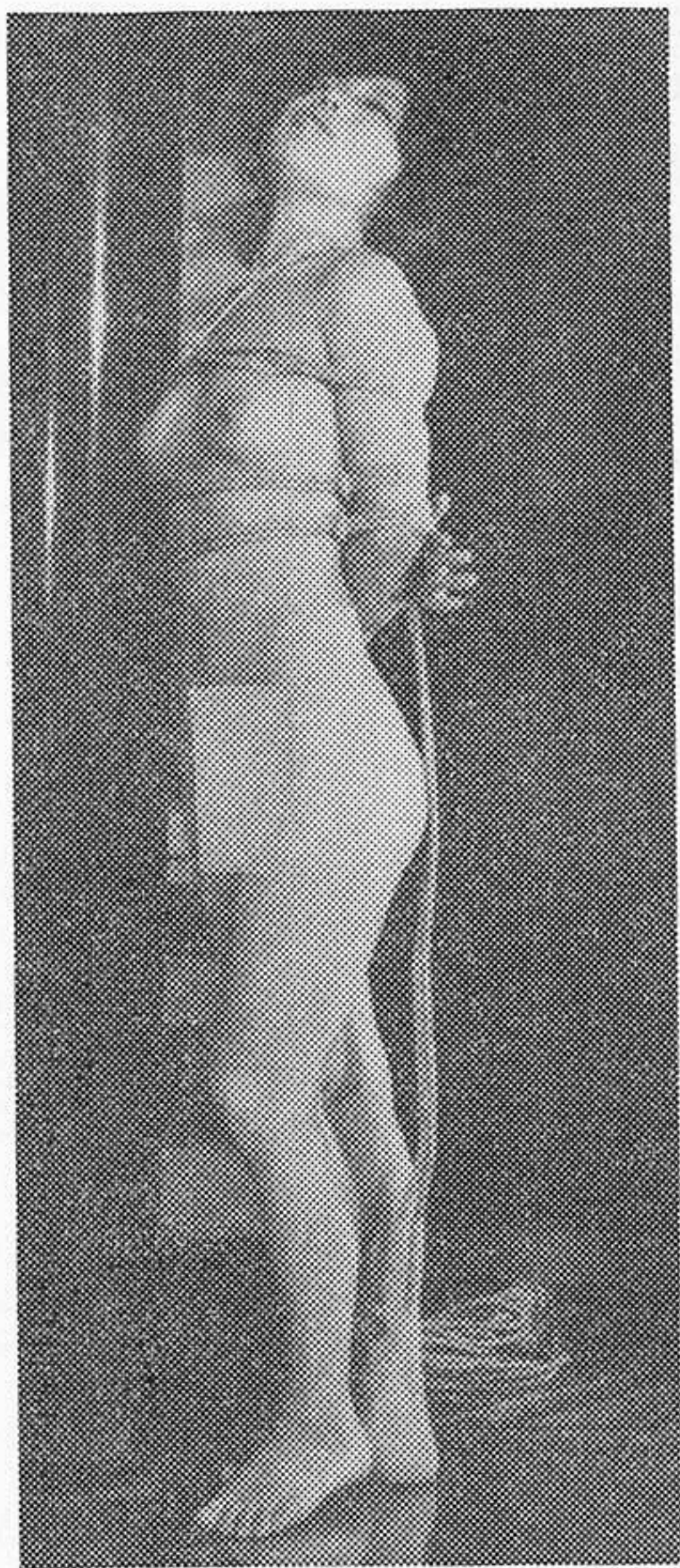
「しっかりね。うらめしやー」

彼女、喜んでるのか、羨んでいるのか、知
らないけれど、その時から、わたしの性質は

〔カメラ・ルポ〕

東京の踊子緊縛記

塚 本 鉄 三



私は奇クの一月号で『全日空機で来た女』二月号では『縄に恋した女』と題して、芸者福竜こと松本たえの緊縛ルポを書いたが、案外に好評で誌友のファンの方々から、盛んに第三回目のルポを書くようにという便りを貰った。松本たえとは、九月に初めて松山の道後温泉で逢って以来、十月に一回、十一月に一回と、都合三回しか逢っていないが、私は彼女のことを鮮烈な印象となって頭の中に灼き付いていて未だに忘れることが出来ない。

十月に逢った第二回目のとき、即ち奇ク誌上でのルポでは、一月号に載った『全日空機で来た女』を書いたあるとき、痩せ型のほっそりとした福竜の裸身に力いっぱいこめて厳しい縄目をかけて畳の上にくるがした、あの光景を、私は今も、はっきりと目の中に浮かび上がらすことが出来る。

たしか江戸川乱歩の小説に、『芋虫ころころ』という描写があったと思うが、そのとき私は、いみじくも福竜の真白い裸身のうごめくを見て、その文句を思いだした。

全裸の肢体を縄で嚴重に肌に喰い込むほど縛られた松本たえは、畳の上にくるがされていて、不思議な運動をはじめたのである。

全身がうねうねと悶えるように、奇妙な蠕

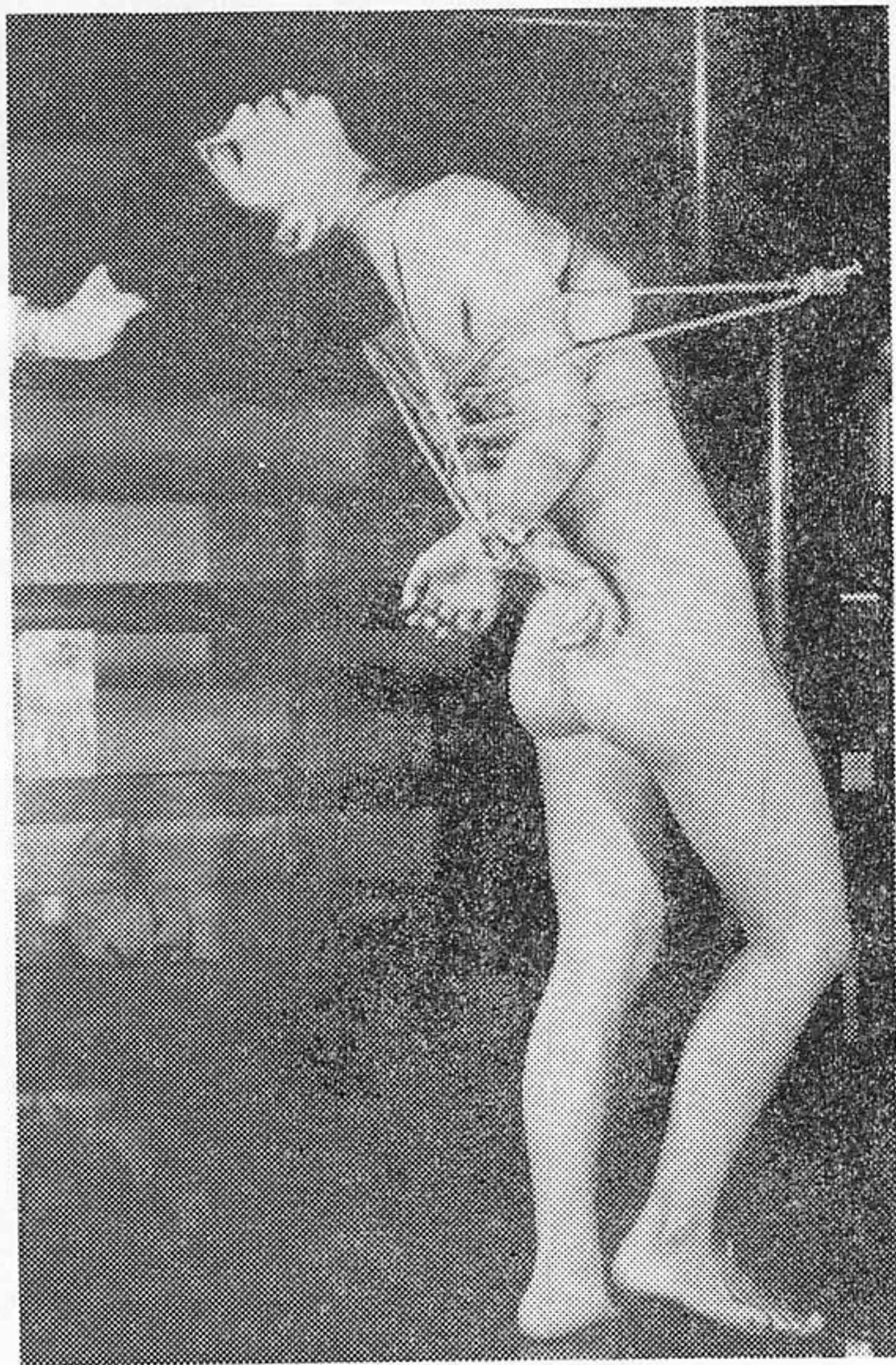
動運動を起こしたのである。芋虫ころころというよりも、真白い裸身だから蛆虫ころころという方が、よりむしろ、よく似ていた。

まるで縄をなうように、細身の身体がうねりにうねって、畳の上をころがっている有様は、まことに嗜虐的な見物^{みもの}であった。見ている私の胸は、思わずカッカッと燃え上がってくるような気持がした。

福竜のその不思議な全身運動は、いつ止むともなく続いた。足の拇指は折れ曲がらんばかりにくの字になり、額から、腋の下から汗の玉を流して悶えているのであった。縛られることが好きだとは聞いていたが、これほどまでとは私には想像出来なかった。

十一月に逢った第三回目のとき、即ち奇ク誌上では『縄に恋した女』と題して二月号に発表したルポを書いたときのこと、私には忘れることが出来ない。

柱にまるで蟬が樹にとまったように後手に縛り上げて、両肢を開いて頭の上まであげさせて宙に浮かしたときであった。正面から見ている私の前で、たらたらと、とめどもなく流し続けて、八縄に恋した女Vの真骨頂を如実に示し、この女こそ、マゾに徹した貴重な女性であると私に固く肝にめいじさせた。



ファンの方々から催促されるまでもなく、私は次回、松本たえを責めることを楽しみにしていた。今度こそ、彼女のマゾとしての真の姿を読者の皆さまに披露しようと、手ぐすねを引いてその機会を待っていたのだ。だが十二月は芸者という稼業を持つ福竜にとって、一年中で一番お座敷の忙しいときなので大阪まで出てくる時間的余裕はなかった。私

に松山まで出向いてくれれば、という便りがあったが、私もまた年末というあわただしい時節を迎えて気分的にも道後温泉へ遊びに行く気にはなれなかった。

そして年は明けて一月、お正月は彼女の職業柄、休みをとることはむづかしかった。成人式の一月十五日を迎えて、ようやくお正月気分が抜けきった頃、松本たえから御無沙汰



したことを詫びる手紙が届いた。一月の末、二十五日から三十一日までだったら、一泊の予定で大阪まで行けます、という文面であった。私は、わくわくする思いで早速OKと返事を書いた。詳しい日時は追って電話するからと。

ところが、二十日すぎになって、私が福竜に来て貰うのは、いつの日がよいか考えているとき、編集長から電話があつて、一月下旬はいつでも出動できるよう待機していてほしいというのである。なんでも、東京在住のフリーのショードンサーだそうだが読者通信で出したんだけど、せっかちなため、のんびり返事を待っておれないので、東名神を自分で車を運転して大阪まで行くから、とにかく会ってほしいと言ってきているというのだ。

福竜のことを言うと、彼女

はすでに二回に亘って掲載したのだから、二月にでも三月にでも、やったらよいではないか。今回はとにかく、この鈴木千鶴子という東京のショードンサーを取材してくれないかという差し迫った依頼であった。私は心残りではあったが、やむなく松本たえに断わりの電話をしておいて、東京からやってくるという若き踊子が大阪へ到着するのを待った。

私がOKの返事をしたので早速編集部から読者通信の初校をコピーして届けてくれた。

それは四月号の読者通信二五三頁の一枚で校正の赤字の入ったままのものであったが、私に対して鈴木千鶴子の予備知識を与えておくつもりでわざわざ送ってくれたものらしかった。ゲラ刷りのコピーを届けてくれたというのも、四月号が二月発行であつてみれば、これまたやむを得ないことであつた。私は早速、一読してみた。

○

私は現在、武蔵野市に在住する二十二才になるフリーのショードンサーです。昨年の夏頃、なにげなく入った書店で目にふれた奇譚クラブを手にしてから、熱心な愛読者になり非常に気に入っています。SMといってもマルキ・ド・サドの名前位しか知らない私でし

たが今では奇クのおかげで、SMプレイをしてもよいと思う程になっています。もとより好奇心の強い私のこととて、真似ごとに少しやってみたこともあります。相手にその気がなかったたので、余り面白くありませんでした。職業柄遠くへ旅行することも多く、東名神は自分で車を運転して今まで十数回、往復しました。時速一〇〇キロ以上で飛ばすスリルが、たまりません。今までで一番遠くへ行ったのは西では広島までです。奇クの発行所は大阪だそうですが、もしよろしければ東名神をぶっ飛ばして、緊縛モデルに応募してもよろしい。身長一五六cm、体重四八kg、プロポーションは踊りできたえているので最高に自信があります。今までCMのモデル、ヘヤーのモデル、映画出演の経験があります。フリーなので時間的にはいつでも都合がつけられます。今、考えていることは、複数の男性による同時責めで、くたくたになるまでいじめ抜かれたいということです。仕事でハダカになることが多いので、肌に傷がつくようなことは困ります。年輩のS好みの男性から受ける羞恥責めプレイを一番にして欲しいと思います。縛られたりする痛さに対する耐久力は、誰にも負けないつもりです。一度、こ

んな私を責めの実験台として試してみませんか。明朗で研究心は旺盛ですから、何かの役に立つと思います。それから、奇ク読者の方で何人がかりかで私を責めてみようと思われる方がありましたら、ぜひお便り下さいませんか。私は出来るだけ多くの男性の方から同時にいじめられてみたいと思っていますのですが、直接、手を下さなくても見物人になって下さっても構いません。

（東京都・鈴木千鶴子）

○

このゲラ刷りを読んでみて私は感じた。この鈴木千鶴子という東京の踊り子は、やや小柄ないささかカーキチに近い、ピチピチとした、頭の回転の早やそいうな二十二才になる近代的なお嬢さんだということを。

文中、昨年の夏頃から読者になったということだから、一月になってから読者通信を寄せたのだろう。複数の男性から同時に責められたいということや、

羞恥責めが好きだというのは、きっと露出癖もあるのだろう。ショーダンサーという職業も彼女のそういった性向を満足させているの



かもしれない。

私は箕田氏に電話して、鈴木千鶴子からの私信や電話のやりとりなどで参考になることがあったら知らせて欲しいと頼んだ。

彼女の来阪についてのガソリン代、通行料や滞在費、ギャラ等については打合わせ済みなので一切タッチしなくてもよいという事であった。それから彼女の私信によると、これは大きな声では言えないが、セックスプレイを含んだSMプレイを、それも複数の男性を相手として望んでいる——というようなことが書いてあった。ポルノ解禁になっているのだったら、絶好のポルノモデルなんだが、と箕田氏は電話で冗談を言っていた。

その翌日。

午後3時すぎ、箕田氏から電話があった。

鈴木千鶴子さんが只今到着した。場所は豊中インターチェンジを出たところにあるホリディインの駐車場、車種とナンバーはこれこれ彼女の服装は——と詳しく連絡があった。

私は十五分でそちらへ行くから、と返事しておいて呉れと電話で答えておいて直ちに地下の駐車場へ降りて行った。

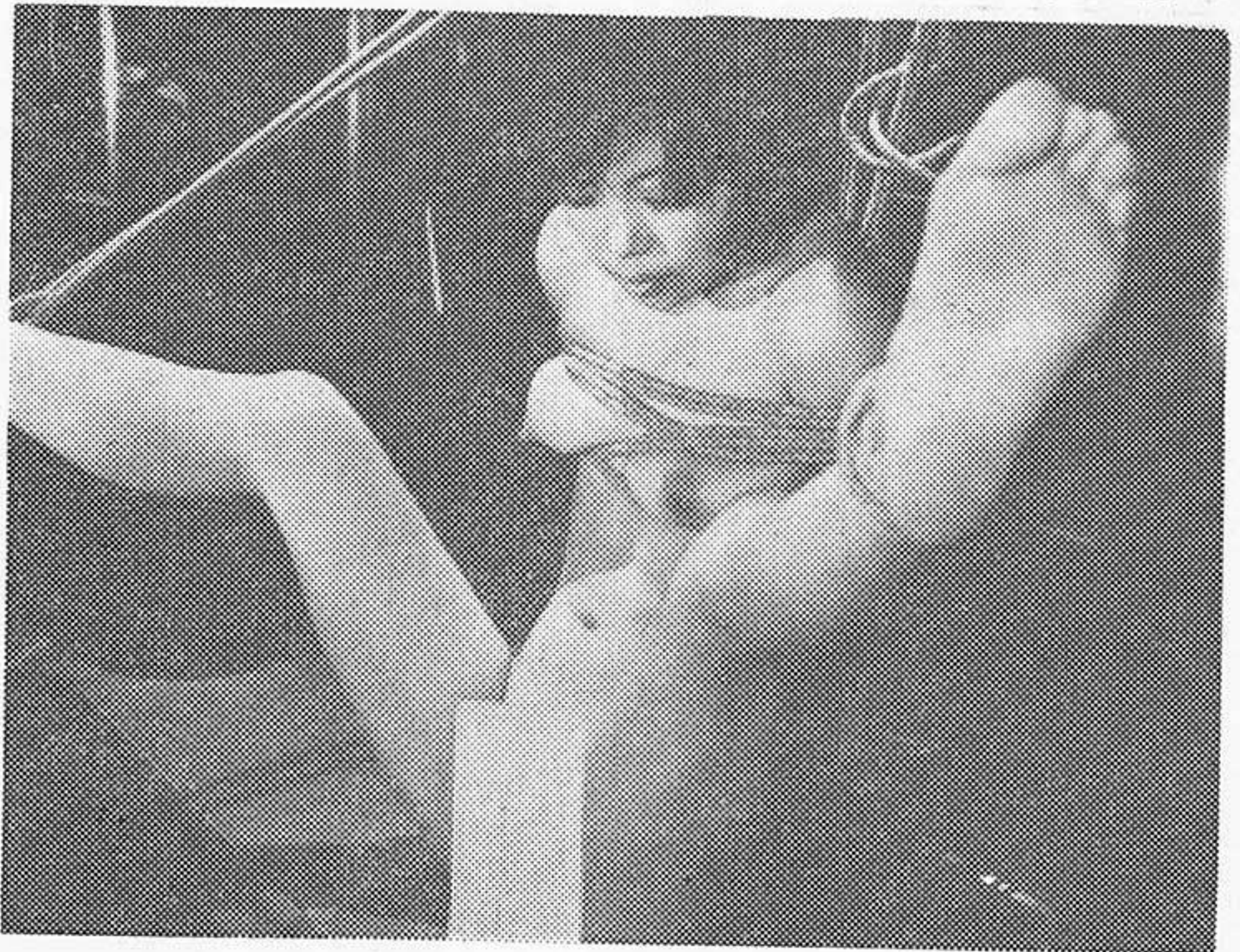
ホリディインといえば中国式の塔のような特徴のある建物が高く聳えているので遠くか

らでもよく見えるドライブインである。以前に、中河恵子さんの緊縛フォトを撮影したときに一度行ったことがある。その時のことは私も書きたかったのだが、中河恵子さんが素晴らしい文章で、何回にも亘って告白を書いたので、私の出る幕がなくなってしまったという、記憶がある。

一階が遊戯場、二階がレストラン、三階以上が客室になっているし、駐車場も広いので車で遊びにやってくる者にとっては格好のオアシスになっている。

客室の窓から眺める夜景が素晴らしくてロマンチックな感じにさえさせられる。あの当時の中河恵子さんの告白の文章は、その様子を、いきいきとよく描いていた。その恵子さんも奇巧の読者と結ばれて、今では二児の母として幸福に暮らしているそうである。

その後、神戸まで所用で旅行してきた恵子さんと二度ばかり緊縛プレイをやり写真も撮



ったが、未だに誌上には発表しないでいる。やはり以前のSMに対する情熱を失わない彼女を知って嬉しく思ったが、さすがに二児

の母ともなれば、未婚時代のあの若々しさが失われていたのは少し淋しかった。三回目に来神したときは、私の方が都合が悪くて折角連絡を貰ったが逢うことが出来なかった。

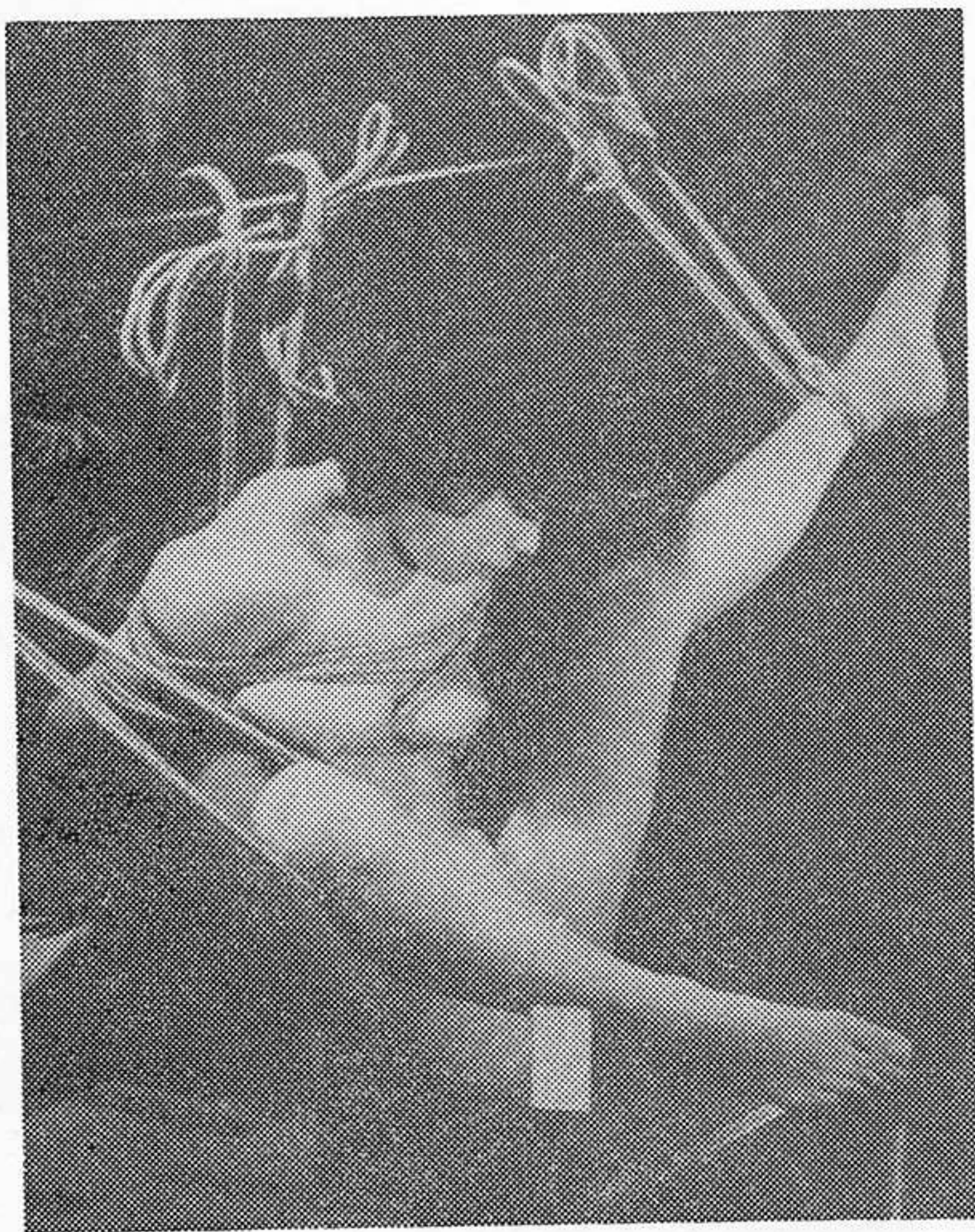
さて――

ホリディインの駐車場に私が車を乗り入れたとき、目ざすナンバーのアイボリーホワイトのブルバードの扉の前に立っている鈴木千鶴子を目ざとく見つけた。

膝までのモヘアの白いコートの裾から黒のロングブーツが強いコントラストを描いて薄日のさす中で逆光気味に浮かび上っていた。

「鈴木千鶴子さんですね。私、塚本です」

「ハイ、チズコです。よろしく。早かったのですね。私、レストランから電話をかけて、コーヒーを一杯、飲んで出てきましたのよ」



「ええと、東京は朝、発^たれたのですか」
「ハイ、朝寝坊ですから、今頃になってしまいました。もっと早く着くつもりだったのですが、浜名湖と琵琶湖で、少し休憩しましたし、中途半端な時間に着いてしまっ、て、申し訳ありませんでした」

東京大阪間五百数十キロを時速一〇〇キロ

で飛ばしてきた燃えるようなエンジンの熱気が私の顔面まで迫ってくる感じだ。彼女は扉をさっと開けてハンドバッグをとった。東京の空気をそのままに孕んだ車内の暖房のきいた風が、むっと私の頬をなでる。

ホリディインのレストランの奥まったテーブルに席をとって私は鈴木千鶴子と向かいあって坐った。白いコートを脱いだ彼女がロングブーツの上には身にぴったりとついたジーンズをはいている。そして上衣は肩口と袖口がオレンジ、他はライト・ブルーの派手なセーターという、軽快な服装である。

鈴木千鶴子は齒切れのよい東京弁で自分の仕事のことや、東名神高速道路のことなどを、私の問いを待つまでもなく、次々と喋る。いつも関西の女性と接している私にとって、しゃきしゃきの東京弁は耳に快く響く。語尾を濁して余韻を持たず関西の女性は、どうもイエスとノーがはっきりしないが東京の女性はその点、肯定と否定を最後の語尾まで、はっきりと言

いきってしまうので、好感が持てるようだ。

今逢ったばかりの初対面の私に対して、十年の知己のように人なつっこく語りかける鈴木千鶴子。かくしだてすることなく話しくる彼女に、私はなんとなく自分も心を許すものを感じた。いつまでも、このかわいいこちゃんと話し合っていたい気がした。しかし、今日の曇り日はすでに四時に近く、外はどんよりと靄のようなスモッグが立ちこめていて、なんだか薄暮のような感じである。窓の外の名神高速道路を走っている車も、一きわ、せわしそうに目に映る。

私は話を本題に入れるべく、彼女にいつ頃から、どんな理由でSMに関心を持つようになったかを尋ねてみた。彼女は私の言葉に頬を一寸染めて、はにかんだかと思うと、意を決したように喋りだした。

「私には、はっきりとはわかんないんだけどお手紙にも書いたように、去年の夏頃かしらね。奇クという雑誌を見てからだけど、でもそれまでにも、いろいろと思ひ出はあったわよ。それというのはね、私、踊っていても、見られちゃうのが大好き」

彼女の話はまたしても、次々と続きそうである。しかし、私は次の彼女の言葉で思わず

度肝をぬかれてしまった。

「それはそうと、今日、私を縛って責めるのは貴方一人なの？ 私は四人も五人も見えるかと思っていたのよ」

鈴木千鶴子は、すでにもうやる気十分なのである。今日はこれから、ぶっ通しで明日の朝まで責めてくれてもよい、とも言った。そして、SMプレイの中でもセックスプレイを混じえたものが大好きだ、とも言った。

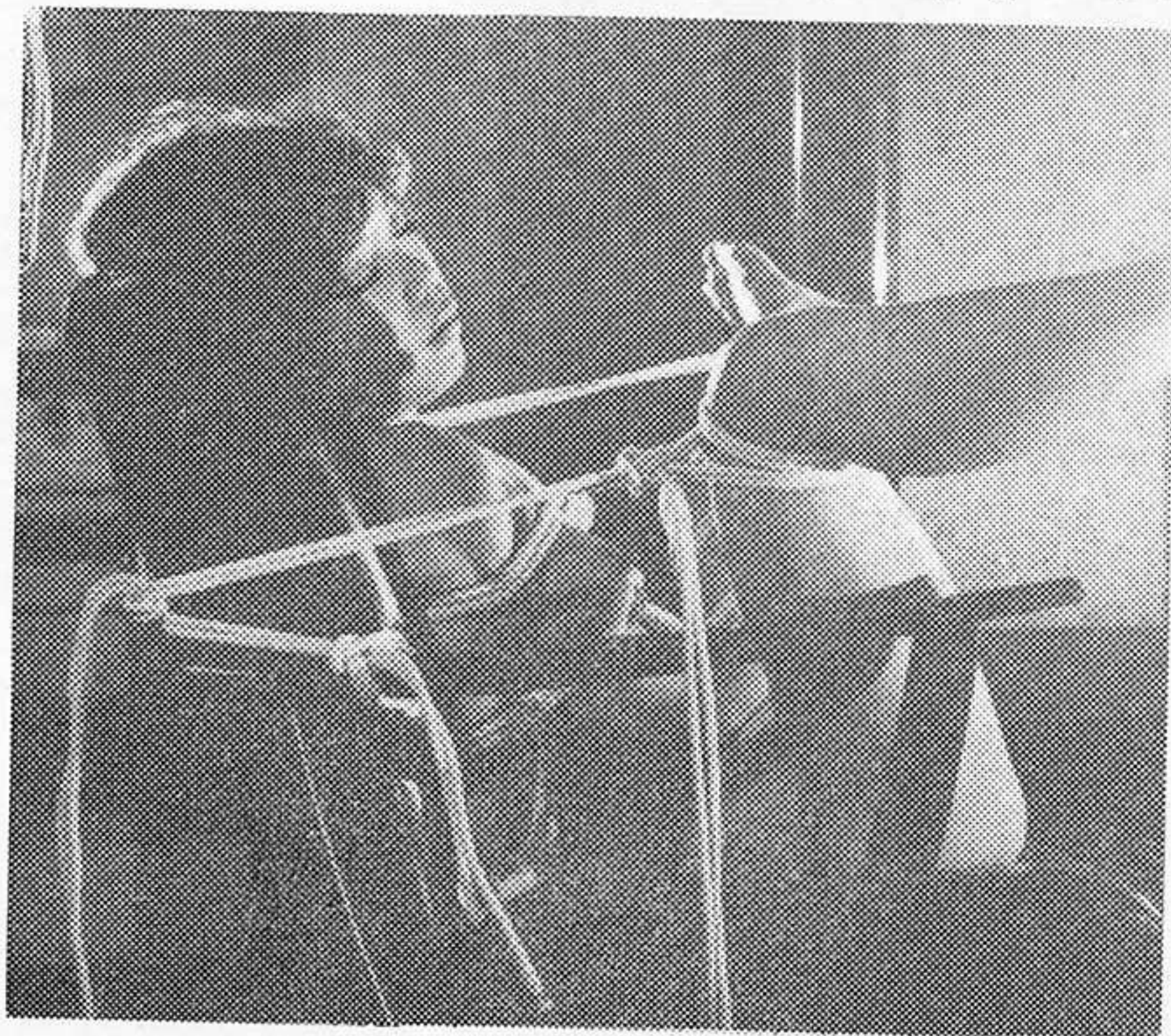
夕食にはまだ少し早かったが、これからの作戦に備えて軽く食事を摂った。

連れだってレストランを出て車に乗った。どこか、ワンガレージ、ワンルームのモーターへ行きたいと思った。今日の私は大型のエレベーター三脚を四本、それに責め道具や照明道具を入れた大型の革鞆二個、カメラ二台と交換レンズやアクセサリを入れた提鞆一個の計三個をトランクに入れていたので普通のホテ

ルでは、どうしても都合が悪いのである。

二十分程走ってガレージ付きのモーターをやっと見つけた。一階が車庫、二階と三階が客室になっているというので広そうである。

私の車をバックで車庫に入れ、その前に東



京ナンバーの彼女の車を駐めた。彼女はブーツを脱ぐのに時間がかかった。客あしらいに馴れた老婆がシャッターを下ろして外へ出て

しまうと私はトランクから荷物をとりだして二階へ運んだ。二階は浴室とロビー、そして三階はベッドルームになっている。

厚いカーテンが窓とい

う窓を掩っていて室内は暗く淀んでいる。黒一色の調度に光線が反射しないのでシャンデリアの光りも淡く闇に浮かんでいるだけである。部屋全体が一つのドームのようになっている、今、スイッチを入れたらしいヒーターの吹き込む音がシューシューと派手な音を立てているが、冷んやりとした空気は一向に暖まらない。

重そうなソファが置いてあるこのロビー風の部屋の四隅には、土俵の四本柱のように黒塗りの円柱が建てられていて、まるで全体が責めの部屋そっくりである。

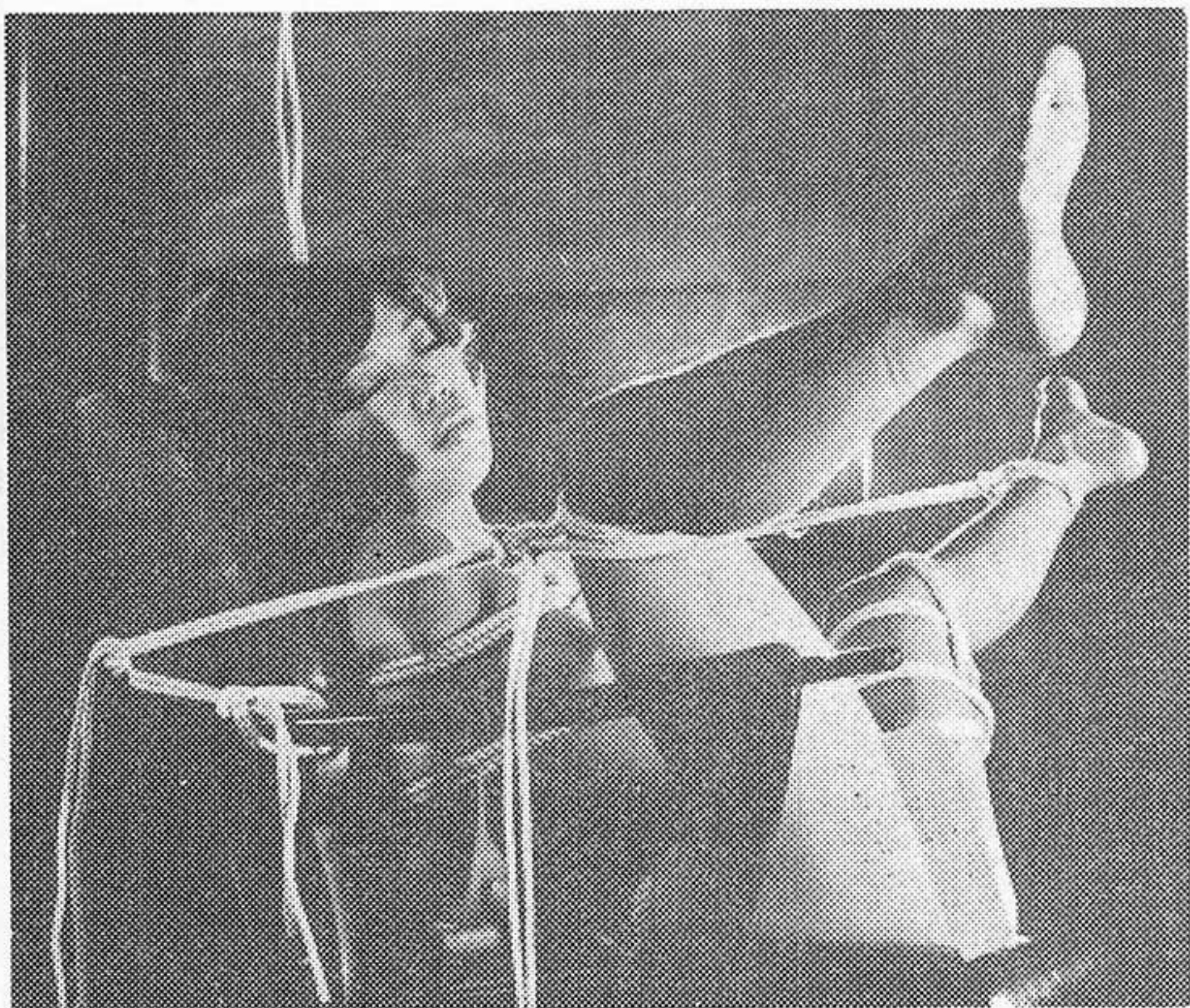
真黒に塗った階段を下りて中二階には浴室があつて、その傍は植込みになっている。その上は硝子張りで、上を歩く人を見上げるようになっていいる。浴室、中二階、ロビー、ベッドルーム（三階）と撮影場所は豊富だし、五〇〇Wのフラッドランプを照らしても、吸い込まれるように光を反射しない黒一色の陰惨なムードは、まったく責めプレイを行なうのには、ふさわしいと思われた。

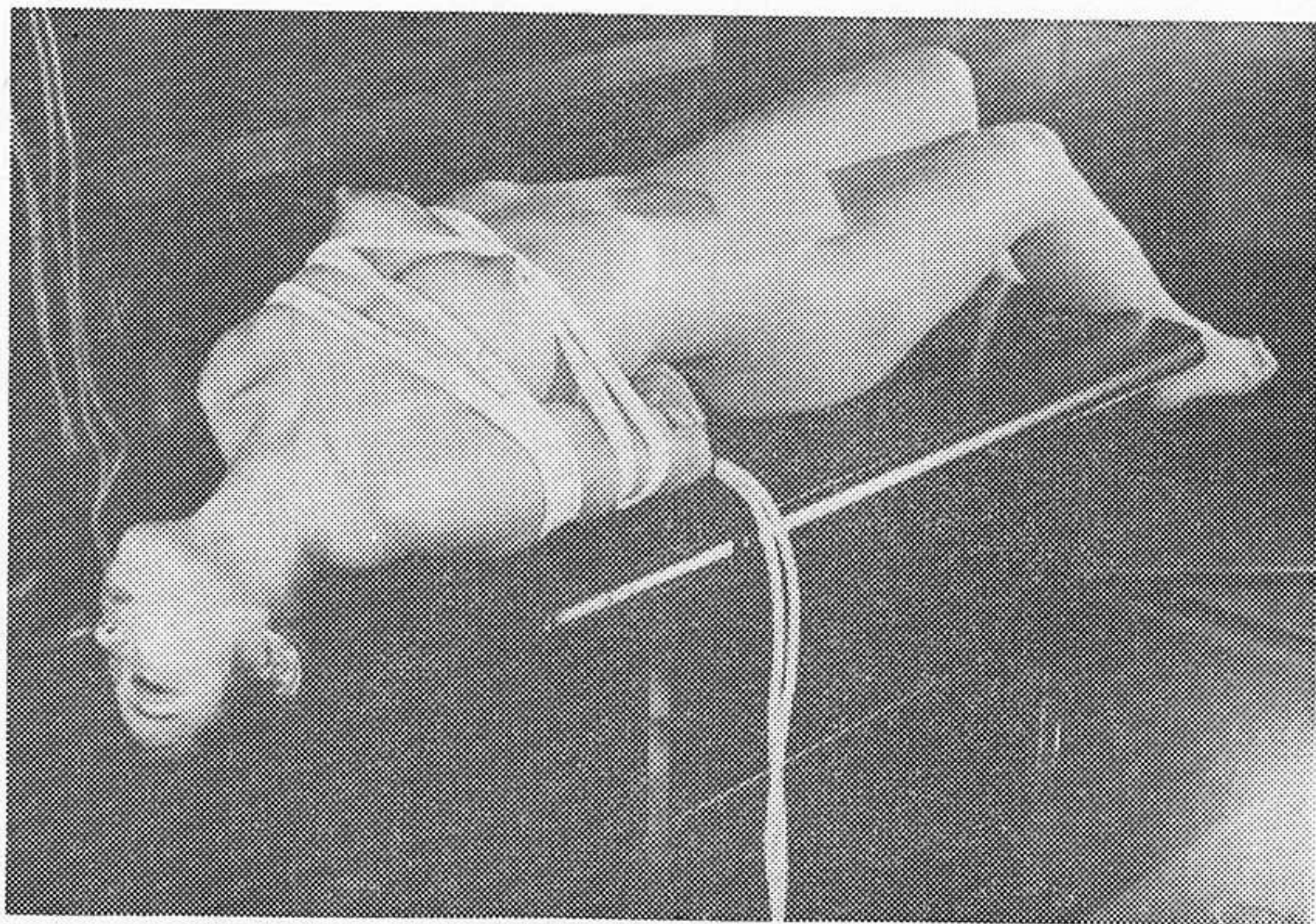
ソファに腰を下ろして一杯の茶を飲んでいいる間も、早く鈴木千鶴子のハダカを見たい早く彼女の柔肌を責めてみたい——と私は心が逸る気持で尻が、むずむずしてきた。

「君は今日は私が一人だったので不満のようだったけど、四人も五人もの人から責められたいと思っていたのかい」

私はバッグのファスナーを開けながら彼女に聞いてみた。

「ええ、なんととはなしに車を飛ばしていると、きから、大阪まで来たら沢山の方に責められるというような夢を見ていたんだわ。でも、そんな経験なんて一度もないのよ。セックスプレーだって、私一人の夢なの。縛られたり責められたりする夢をみるときは、いつもセックスを伴うんですもの、私って変わってる





でしょ」

鈴木千鶴子の誘いかけるような妖しいムードに、私はなにかしら、そこに舞台の上から投げかける媚のようなものを感じた。たしかに彼女はジョーダンサーである。全身で男をとろかす術を心得ているのかもしれない。私は危ふく鞘を持つ手を止めて、彼女のふりまく誘いにのって、抱擁し激しいキッスを試してみた。気持にかられた。彼女の濡れた唇が物言いたげに私の方に注がれている。

私はあわてて、彼女に告げた。これから撮影と責めの準備をしておくから、その間に入浴を済まして来なさいと。

ぶ厚いカーテンの隙き間から、わずかにのぞいていた薄明りも、今はすっかり消えて陽は落ちてしまった。これから如何にゆっくりしても日の暮れる心配はない。彼女の望

むように夜通し責めて責めて、責めまくって、時間に不足はない筈である。

踊りできたえたピチピチとした若鮎のような鈴木千鶴子の身体を思うままに責められるのだと思うと、私の心はわくわくしてきた。

彼女に逢うのも今日が初めてだし、彼女のハダカを見るのも初めてである。ましてや、縛りたい、責められたい、SMのセックスプレイをやりたいと願っている、若い女性と一夜を過ごせるのだから、撮影の準備を整える私の手に弾みがつくのも当然であった。

それにしても鈴木千鶴子という女性とは、如何にも近代的な東京っ子らしく、言葉もハキハキしているが、言うこともハッキリしている。読者通信で手紙のやりとりをしているのなんか、まどろかしいので、直接自分が車を運転して東京から大阪まで、すっ飛んできたというのだから、まことに行動派である。

東名神の往復の通行料だけでも何千円もする筈である。箕田氏は、私に何も詳しいことは言わなかったが、きっと彼女はたんまりとギャラをふっかけたのと違うだろうかとはふと考えた。ホリディインに到着して逢ったのは私が始めてなのだが、金を受取っているのか、まだなのか、その点については、彼女

も何も言わない。或は箕田氏のことだから、現金書留で先に送っているのかもしれない。いずれにしても、その方は私に関係のないことである。私は鈴木千鶴子を縛り上げて責めまくり、その写真を撮り、そして、読者の方々に報告するためにルポを書いて送れば役目が果たせるのだ。

黒のカーテン、黒い柱、黒い階段、鳥居のように赤く塗った手摺り、この陰惨さに酔っていた私も、そこに写真的に大きな陥穽が仕組まれていたことに、そのとき私は気づいていなかった。これから展開されるSMプレイの旨酒をたらふく飲めるという愉しさに有頂天になっていたため、いつもの目が狂っていたのかもしれない。

三台の大型エレベーター三脚、小型携帯用三脚二本をすべて使って、ストロボ四灯、五〇〇Wフラッドランプ一灯を配置し、プロニカを三脚にすえ、マミヤレフを手持ち用としてプリズムファインダーを取りつけた。

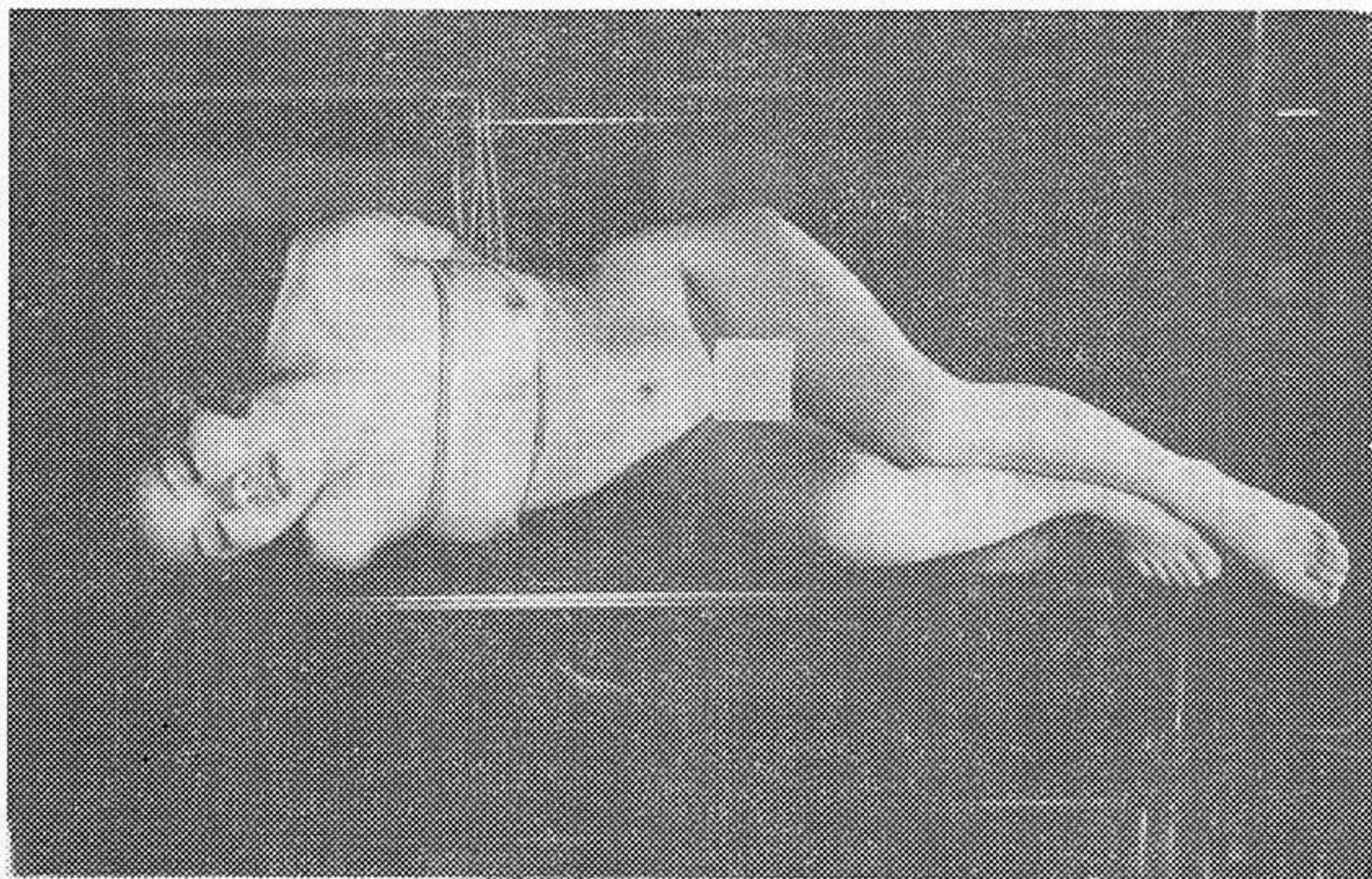
殆ど準備が終わったところへ鈴木千鶴子が湯上がりの湯気を、ほかほかと立ち上らせながら裸身にバスタオルをまとって出てきた。

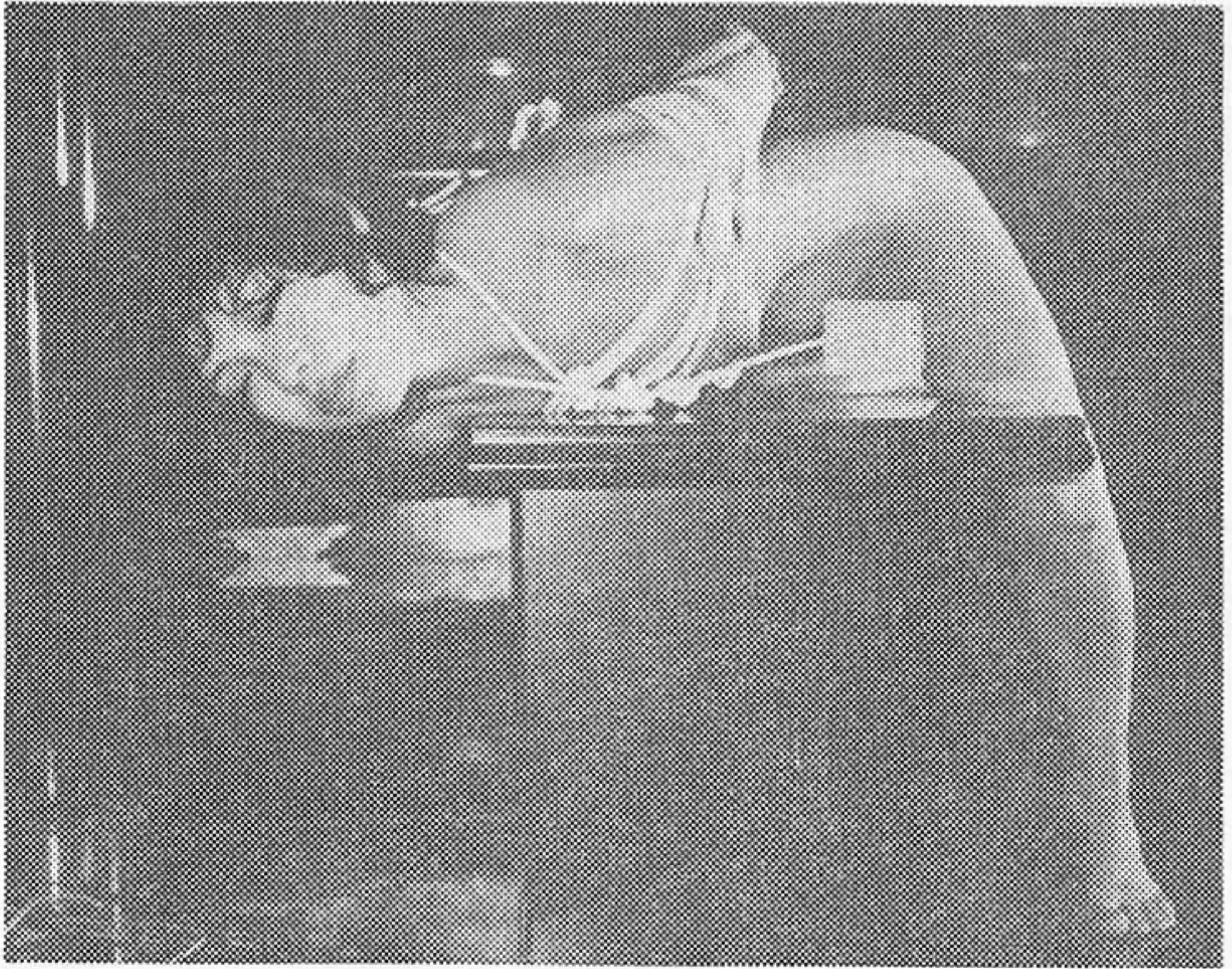
さあ、いよいよ、これから、鈴木千鶴子のハダカを縛り上げるのである。今後展開され

るSMプレイがどのような進展を見せるか、私にもわからないが、鞆から取り出した大小五本のガラス製浣腸器、エネマシリンジ、イリリガートルの嘴管、大中小のローソク三本、コケン付バイブレーター、ハンド式マッサージ器、クスコなどの責め道具を、ずらりとテーブルの上に並べてみた。

私は先ず手始めにマンダラ模様のある柔らかい紐を手にして鈴木千鶴子の背後にまわった。この縄は縄と呼ぶにはふさわしくないほど手ざわりがよくて、女体の柔肌にぐっと喰い込むように縄目を作っても、痛さの方は比較的きびしくない。私には初めての女性を第一番に縛りあげるときは、主にこの縄を用いることが多かった。

鈴木千鶴子は彼女の読者通信の文面から考えても、この私の心づかいは必要ないかのようなであったが、同じく昨年三月号の読者通信で登場した深田菊子にしても、最初はやはり縄目の痛さを訴え、柱





そのかわり、バスタオルをパツとめくって裸身をむきだしにさせた鈴木千鶴子に縄を掛けたときは、情容赦なく高手小手に力いっぱい肌もくびれよとばかり、締めつけていた。

いつものことながら、新人のモデルを縛るとき、私も男性の一人として、好奇の眼を以て、鈴木千鶴子の裸を眺めた。これから、さまざまに縛り上げ、羞恥責めの極致をきわめる対象であったとしても初めて見る女性にはどうしても興味が走るのである。

本年になってからでも、私は高村浩子、福井桃子、前田真知子、深田菊子と四人の女性を縛ってきた。今日の鈴木千鶴子は私が予定していた芸者福竜コト松本たえとのSMプレイを断ってフォト撮影をかって出た新人モデルである。この新鮮なモデルに私は彼女の読者通信を読んで大いに期待していた。鈴

木千鶴子の全裸の肢体を目の前にして、私の好奇心が大きく疼いたのも当然であった。

しかし反面、初対面の新人と接するときはまだ気苦労も多く、対象の気質や身体的特徴も掴めていないせいもあって、いつもいつも成功するとは限っていない。その点、二度、三度、四度と接している、前記の高村浩子、福井桃子、深田菊子のような女性であると、気心もよくお互いに知り合っているし、緊縛や撮影の順序にしても心得ているので、冗談を言い交しながらスムーズにプレイを進行させることが出来て肩がこらない。

決して鈴木千鶴子を相手にするのが肩がこるというのではないが、なにしろ、私は今日始めて逢ったばかりで彼女のことを知らなすぎる。話をしている、彼女が純粋の東京弁であるということが、関西弁を専ら使う私とはしっくりゆかないものがあった。万博開催の年、白人女性のシーラー・ケニーを縛って写真を撮ったことがあったが、彼女も日本語を少しも解さない白人であることから、どうもなじめないものがあった。

鈴木千鶴子は東京からわざわざ車を走らせて大阪まで足を運んでくれた賓客である。翌朝までの数時間を十分に欲待しなければ申訳

縛りにして腹部に縄を掛けたときは気分が悪くなったくらいだから私は最初から麻縄やシユロ縄を用いることのないように配慮した。

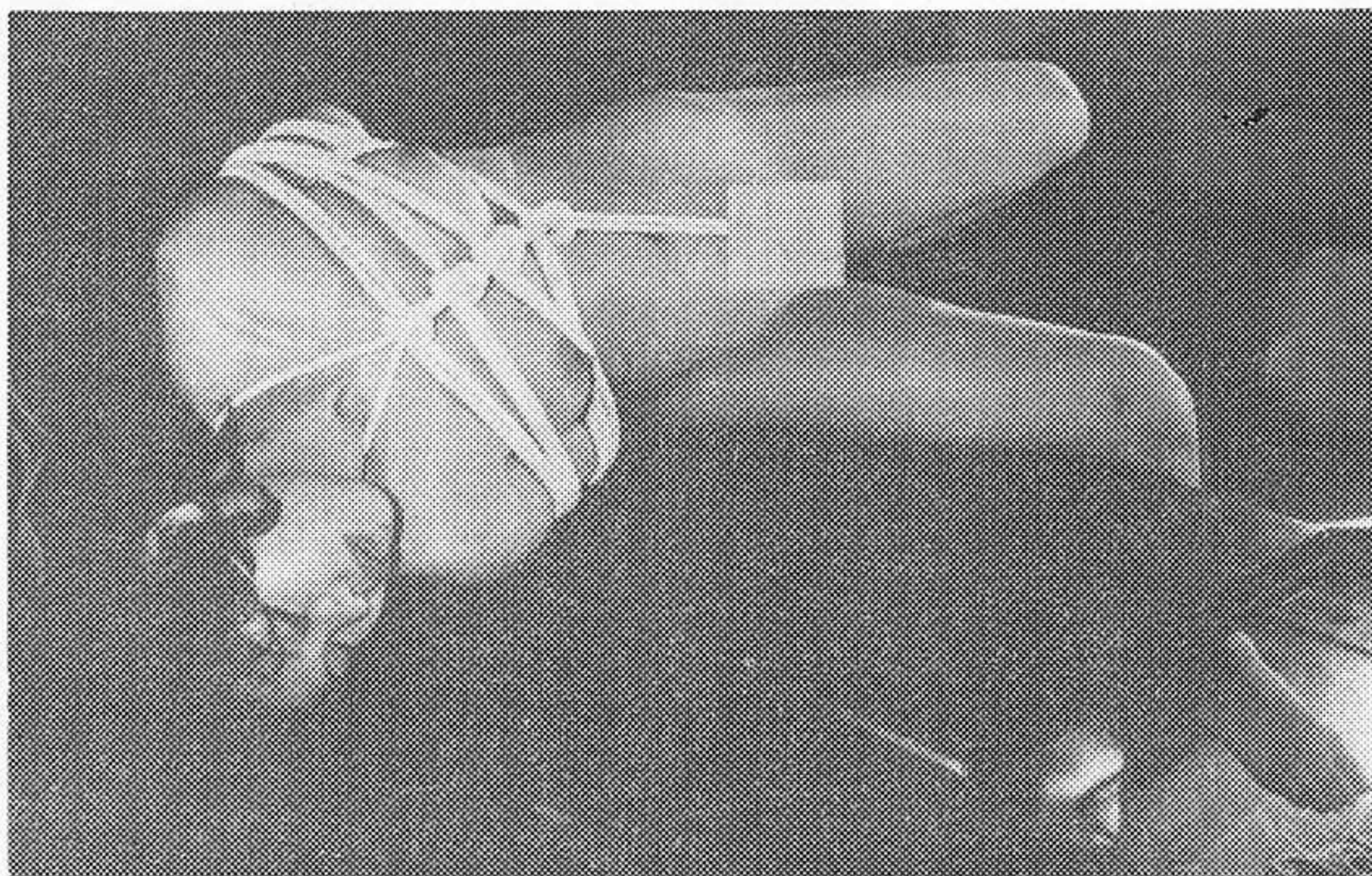
けないことになる。抜群のプロポーションだと彼女自身が誇示した肢体。私は縄尻をそのままに垂らして立位の縛りポーズをマミヤの105ミリで三枚ばかり狙った。三脚にのせたブルニカの75ミリでは円柱に縄尻を使って縛りつけたところをエラーリリースで、これも均斉のとれた鈴木千鶴子の高手小手に縛られた裸身は写真電球の光茫に美しく浮かび上がっていた。フィルムには、その美しい緊縛肢体が、ぱちりと捕捉されたことだと思う。

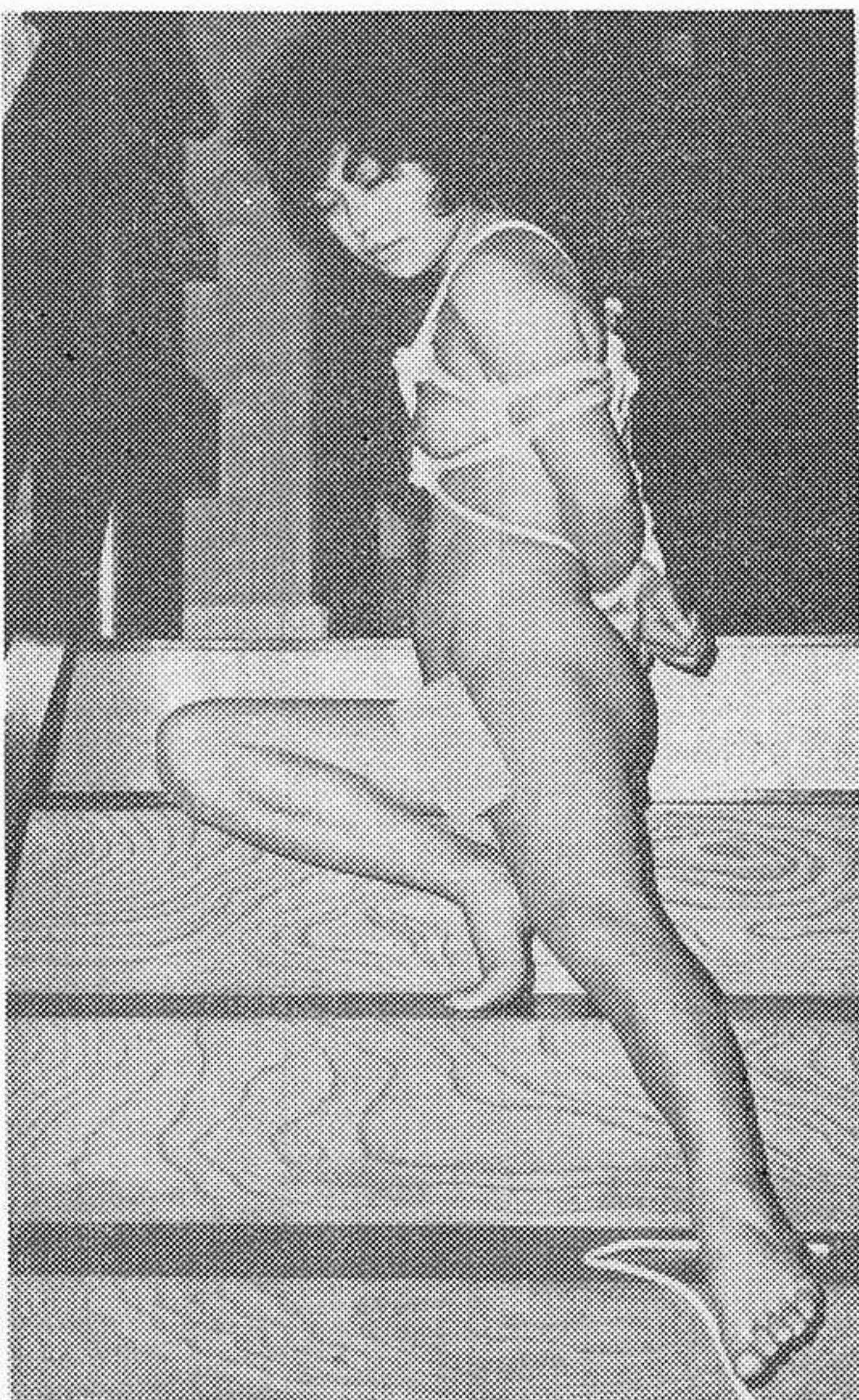
これは先ず手始めのポーズで彼女の気持を落ちつかせ、これからのSMプレイをスムーズにやろうという考えであった。だから私は一応そこまで序の段階を終えて高手小手の縛りを解いて休憩に入った。

黒塗りの太い柱を利用して宙縛りにしてやろうと考えた。これは松本たえを柱に縛ったとき、両脚を頭の上を越すくらい高々と挙げて開股で縛った、あの責め方を、この踊りできたえたショーダンサーの裸身で試みてやろうと、思いついたのである。小柄でもあるし体重も軽い。きつと、うまく蟬が樹にとまった様に縄で柱にとまってくれることだろう。私は柱の下にテーブルを運んできて据え、彼女に、その上に立つように命じた。

テーブルの上に立った鈴木千鶴子を先ず高手小手に縛り、その縄尻で柱に結びつけた。テーブルの上で爪先立たせておいて、足首のところ、両膝頭の下のところ、太股のつけ根のところ、下腹部のところ、と次々柱に縛りつけていって、最後の乳房の上と下に縄を掛けて柱に固定した。全身の血の循環が一瞬、止まるほど力をこめて締めつけた。ここで縄締めを緩くしておく、体重を支えているテーブルの台を除いたとき、ズルズルと下がってしまった、宙縛りの格好をなさないのだ。

これが成功したら、次には両脚を頭上高く挙げたり、また両膝に左右から縄を掛けて吊ってみたいと思った。両足首や両膝に縄を掛けておくと、仮に柱に縛った上半身が、ずり落ちてきたとしても、下がれば下がるほど足や両膝が左右に大きく広げられるという結果を現わし羞恥責めをより一層効果的に発揮するということになるの





である。

私は鈴木千鶴子の裸身を十分に柱に固定しておいてから、足の支えになっているテーブルを傾けて徐々に、はずそうとした。こうした時も体重が軽いということは好都合なのである。超グラマーであるとかでも動かないというところであるが、精巧なトランジスタ・グラマーであると、一寸、テーブルを持ち上げる気味にして傾けると、難なく彼女の足

から、はずすことが出来るのだ。

だが、この時――。

私が既にピントも合わせてシャッターを切るばかりにしたゼンザブロニカの方へ歩み寄ったとき鈴木千鶴子の口から悲鳴が洩れた。

「く、くるしい。吐きそう――」

私は一瞬、シャッターを切る一千分の一秒の間を持ちたいと思ったが、やはり彼女の方へ、引き返していた。鈴木千鶴子の顔面が蒼

白なのである。私はあわててテーブルを足の下へ斜めに置いて、こじ上げるようにして足にかかる全体重を支えた。

「胃の上の縄が締まって、くるしいの。なんだか吐きそうな気持――」

足をテーブルで支えることが出来て、一息ついた鈴木千鶴子は、ほっとした表情でそう言った。蒼白だった顔色に、少し赤味を帯びてきたが、額には冷汗の粒が、ふつつつと、いくつも、うかび上がっている。

私は物も言わず手を忙しく動かして、胸の縄から順次、下に向かって解いていった。高小手の縄を解き終わったとき、彼女の上体は、ぐらりと揺れて私の両腕の中に全体重をゆだねてきた。

私は全裸の女体を両腕に抱えて階段を上り三階のベッドルームまで運んで、クッションのよくきいたベッドの上へ置いた。

「ごめんなさい。折角これからというときにこんなことになってしまった。私、少々のことだったら辛抱するつもりで来たんだけど、なんだか気分が悪くなってしまうって、大変で迷惑をかけてしまいましたわね」

「朝早くから車を運転してきて、疲れたんじゃないの？ 少し睡ったらいいよ。きっと睡

眠不足かもしれないよ」

私は、そういつて素裸のまま掛蒲団の上に長々とのびている彼女を敷布の上に滑り込ませて蒲団を、かけてやった。彼女は蒲団の間から、するりと両腕を伸ばして私の首にまわして引き寄せて囁いた。

「私、羞恥責めだったら自信あるんだけど、ひょっとしたら、縄で宙に吊られたりするの駄目かもしれないわ。ここんところを押さえられると弱いのに」

鈴木千鶴子は掛蒲団をめくると、上半身をあらわにして鳩尾のところを掌で押さえた。

「大分、元気になってきたじゃないか。この調子だったら、少し休んだら引き続いてやれそうだね」

「ええ、煙草一本、吸わしてもらったら、すぐ、やれそうよ」

最初から起こったアクシデントに私は、いささか氣勢をそがれた具合であった。黒塗りの柱を見て考えついた責め方は、ここで予定を変更しなければならなかった。鈴木千鶴子が一休みしている間、私はさっきの縄の残骸のとり片づけにかかった。一枚の写真も撮らなかったけれど丸い柱に巻きつけたままになった縄は次の緊縛に必要な小道具であった。

柱と柱の間には、二階の庭

園を区切り欄間があった。これも黒塗りで如何にも重厚な感じの造りである。これを利用して両脚を思いきり拡げさせた開股縛りの羞恥責めをやってやろうと考えた。これだったら、彼女の鬼門の胃を圧迫することもないであろう。

縄の後始末が出来たところで、私はベッドルームの鈴木千鶴子を呼んだ。

後手高手小手に縛り上げ、その縄尻を欄間の最上段に括りつけた。左右の足首にも縄を掛けて引き上げ、これも欄間に括りつける。

彼女の白い頬に僅かだが、赤味がさしてきた。八の字に左右に両脚をひろげさせられ、とても柔軟な肢体は、いささかも苦痛を感じることはないらしい。私は正面にすえたカメラのシャッターを矢つぎ早やに切っていた。ストロボの





充電時間を、待てないようなはやりきった気持であった。髪をわしづかみにして顔を横向けにさせてエヤーリリースを握った。

彼女の羞恥の極点にライトを集中させてアップでも狙いをつけた。さっきの宙縛りの失敗を、とり返すつもりで、これでもか、これでもかと羞恥責めを加えていったが、それはもう＼責め＼というよりも、露出症気味の鈴木千鶴子に対してのサービスのようなものであった。私は写真効果を考えて、次は椅子を用いた責めと、縛りに移行していった。

縄はここで白いロープに変えた。椅子に腰を下ろさせて縛りつけた上で、左右の膝に縄を掛けて椅子の背後から両側へひろげさせる縛り方である。勿論、この縛り方も、さっきと同じように、彼女の羞

恥を最高度に発揮させるために、写真電球の光を集中させ、カメラを正面に据えた。

嘗ては中河恵子、最近では深田菊子や松本たえなどの女性に、この羞恥責めを加えてM女性の華々しい変わり身に私も驚いたものであるが、鈴木千鶴子も露出症気味のMの本領を発揮して、さっきからの爛漫たる開花が、今ここに至って、最高度に達した感がある。

柱の宙縛りには「苦しい」と悲鳴を挙げて耐えられなかった彼女であるが、この羞恥責めを受けては、全身に媚を見せて、カメラという複数の目の前に、悦虐におののいているようであった。

私は鈴木千鶴子の表情の変化に多大の興味を以て注目していた。

浣腸器、バイブなどの責めの小道具が、ここに至って始めて登場してきた。ようやく出番の回ってきたそれらの小道具は、如何にも処を得たというように勢いづいていた。

次に取り出したのは、さっきも使ったテーブルである。人身御供ひとみぐうの白い裸身を、その黒一色のテーブルの上に横たえて、鈴木千鶴子は私の命じるままのポーズをとっていった。宙縛りで気分を悪くして失敗した償いに、テーブルの上で演ずる縛られた裸身の痴態は

幾度となく、テーブルから落ちそうになりながらも、十数ポーズにわたってフラッシュの閃光を浴びて、もがきまわった。どうやら、ようやくSMプレイも佳境に入ってきたようである。私は随時、カメラを近づけてアップで鈴木千鶴子の肉体の各部を接写した。こうしたとき、マミヤレフは極めて便利である。蛇腹を伸ばしさえすれば、プロクサーをつけなくとも容易に毛穴さえも極鮮明にキャッチすることが出来るのだ。

ここで私は休憩の時間を持った。

煙草を吸いたいということもあったが、場所を変えるために、戦線を整理する必要があったからである。松本たえなんかであったらフィルムの入れ替えや場所の変更などでも、縛ったままでころがして置いたのだが、鈴木千鶴子には、そういったことも出来ないであろう。縄を解いて椅子に休ませる。

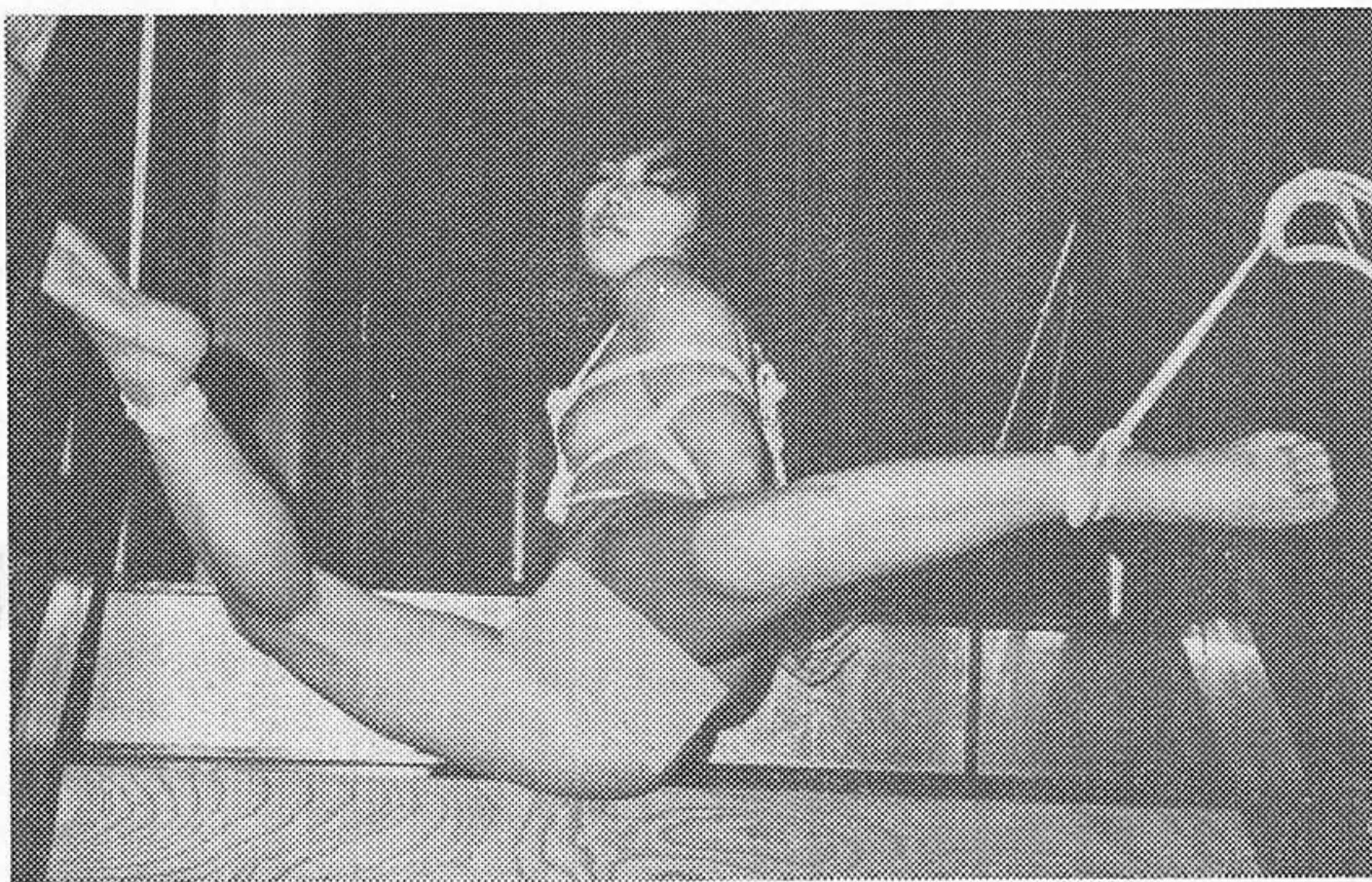
ストロボとフラッドランプの大移動が始まった。三脚に固定したものは、そのまま場所を変えたらよいが、クリップ止めのものは適当な取付位置を探すのに一苦労する。ACコード、エクステンションコードなどが交錯して足の踏み場もないくらいであるが、撮影が終わるまでは、これらのコードをないがしろ

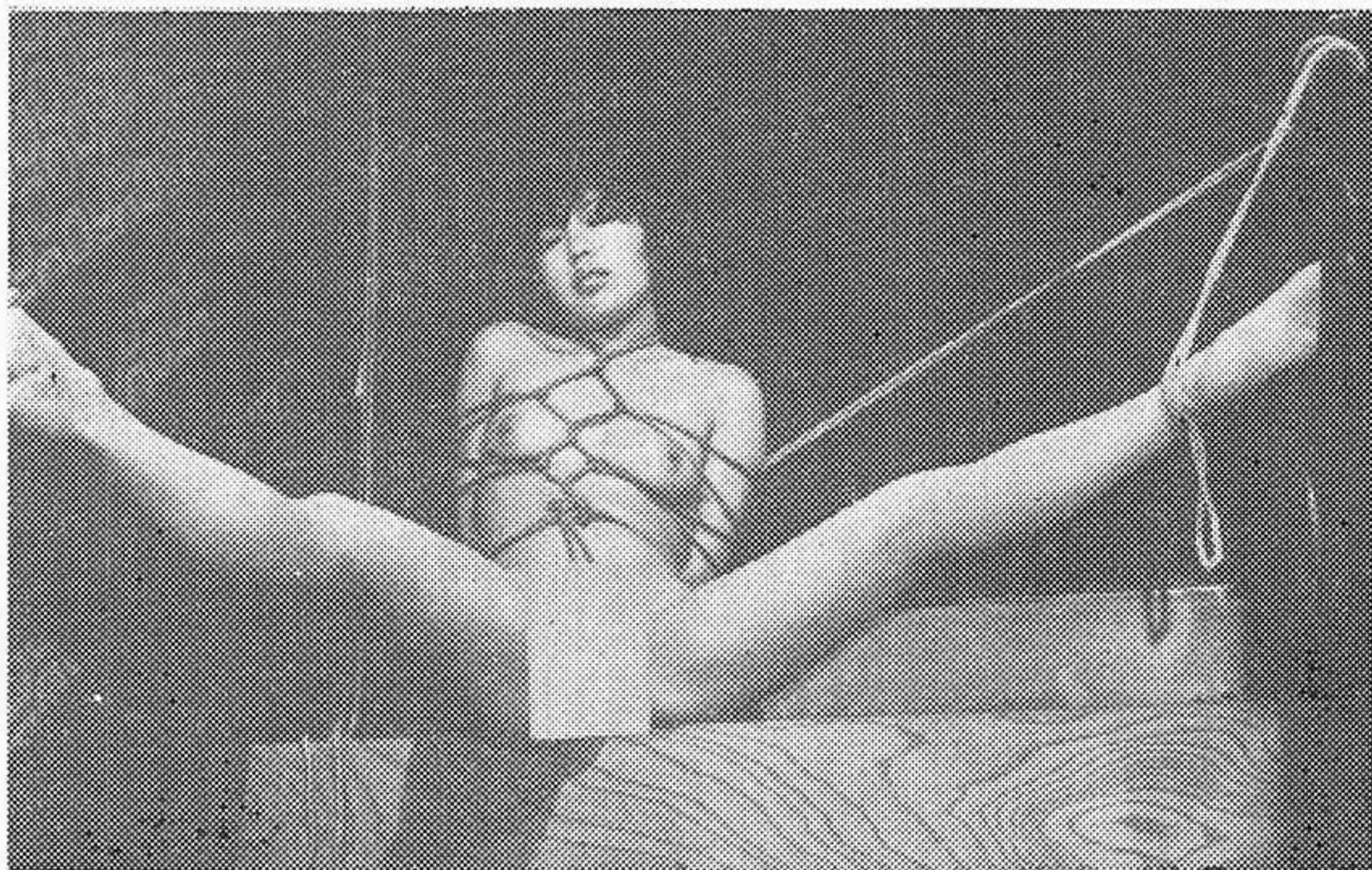
にするわけにはいかない。

次に狙った場所は二階から三階へ通ずる階段である。階段の両側には、これも黒塗りの手摺があるので、これを利用して両脚縛りをやってみようと思う。今日は、もう徹底的に彼女の望む、羞恥責めだ。ライト五灯を前後左右に配して準備を完了する。

股間縛りにした上で階段の上へ追いあげておいて、私はカメラの後に位置して、ポーズを指定して一々命令する。やはりダンサーだけあって、私の命令を受けるカンは鋭い。手を煩わして指示しなくても、口からの命令だけで、私の考えたポーズを次々と取ってゆく鈴木千鶴子。気にいらなときはシャッターを切らないでポーズの変更を命じ、気にいったポーズのときは、カメラアングルを変えたり、接写したりした。

鈴木千鶴子は従順に私の命令通りに敏捷に動いた。いささかも嫌だとか、拒否するような態度は見





えなかった。

脚を八の字に開いてカメラの方にお尻を向け、顔を股の間からのぞかせるようにラフむいたポーズなど、若い女性として最も羞かしいものであったが、彼女は嬉々として私の命令に従って股倉越しに顔を見せた。そのときの彼女のにんまりとした表情は、羞恥にまみれたポーズをとらされる方が、むしろ活々としているように私に感じさせた。

階段の上でのポーズが一わたり終わると、いよいよ縄を使つての開股縛りである。左右に手摺があるのだから至って簡単に彼女を股裂き責めにすることが出来るのである。もうこれ以上、両脚をひろげることが出来ない、というくらい左右に開かして足首を固定しておいて、さて、彼女の望む羞恥責めを、どのように展開させてゆくか。私は諸々の責めの小道具を階段の下に準備しておいて、魅惑あふれる鈴木千鶴子の肢体に狙いを

つけて十数回のシャッターを切った。

シャッターを切り終わったところで私はガラス製の一〇〇CCの浣腸器と太い蠟燭、パイプとパイプ付コケシ、パイプレーションのついたハンド式按摩器、大筆などを階段の下に並べておいて千鶴子の緊縛姿態をつぶさに鑑賞した。さすがに踊りをやっていたというだけあって、一五八センチという小柄な身体なのに、開股されて縛られたその肢体は、いかにも伸びやかで、しかも身をくねらせたところなどは舞台の上で踊っているような媚態の片鱗を窺うことができた。

階段の丁度、真中あたりで両脚を思いきり開かされて縛られた鈴木千鶴子は彼女の本来持っている良さを発露して、水を得た魚のように、いきいきとしているように見えた。

階段の下での見物人は私一人である。彼女としては、数人、いや十数人以上の見物人によって眺められたいのだろう。

「今日は貴方、一人なの？」と不満そうに尋ねた鈴木千鶴子。殆どのM女性は複数の男性によって、それも多人数で責められることを怖れていたのに、彼女は違っていた。

私が冷徹なカメラマンから、好奇心に満ちた見物人になつたとき鈴木千鶴子の白い肌

は、ほのかに赤味を帯びてきたようだ。いわば、彼女の肉体のエンジンがようやくフル回転しだした兆しなのかもしれない。はじめ、柱宙縛りで、全身の血行が停滞するほど厳しく縛り上げ、しかも胃の上に縄をかけて気分を悪くさせたのは、私の失敗であった。

今日始めて逢ったということもあって、私は鈴木千鶴子のペースを知らなすぎた。冷えきったエンジンのまま高速で走らせてノッキングを起こしたようなものだ。

その点、松本たえなんかは、最初の第一回の縛りだけで忽ち燃え上がって強烈なSMプレイに耐え得るだけの身体の調子を出してくれたが、鈴木千鶴子はスロースターターらしいというよりも縄だけでは燃え上がらない、いわば、もっと直接的な羞恥責めでなければ調子が出せないタチなのであろう。

今になって、そのことに気がつくとは、私としては迂闊なことであった。

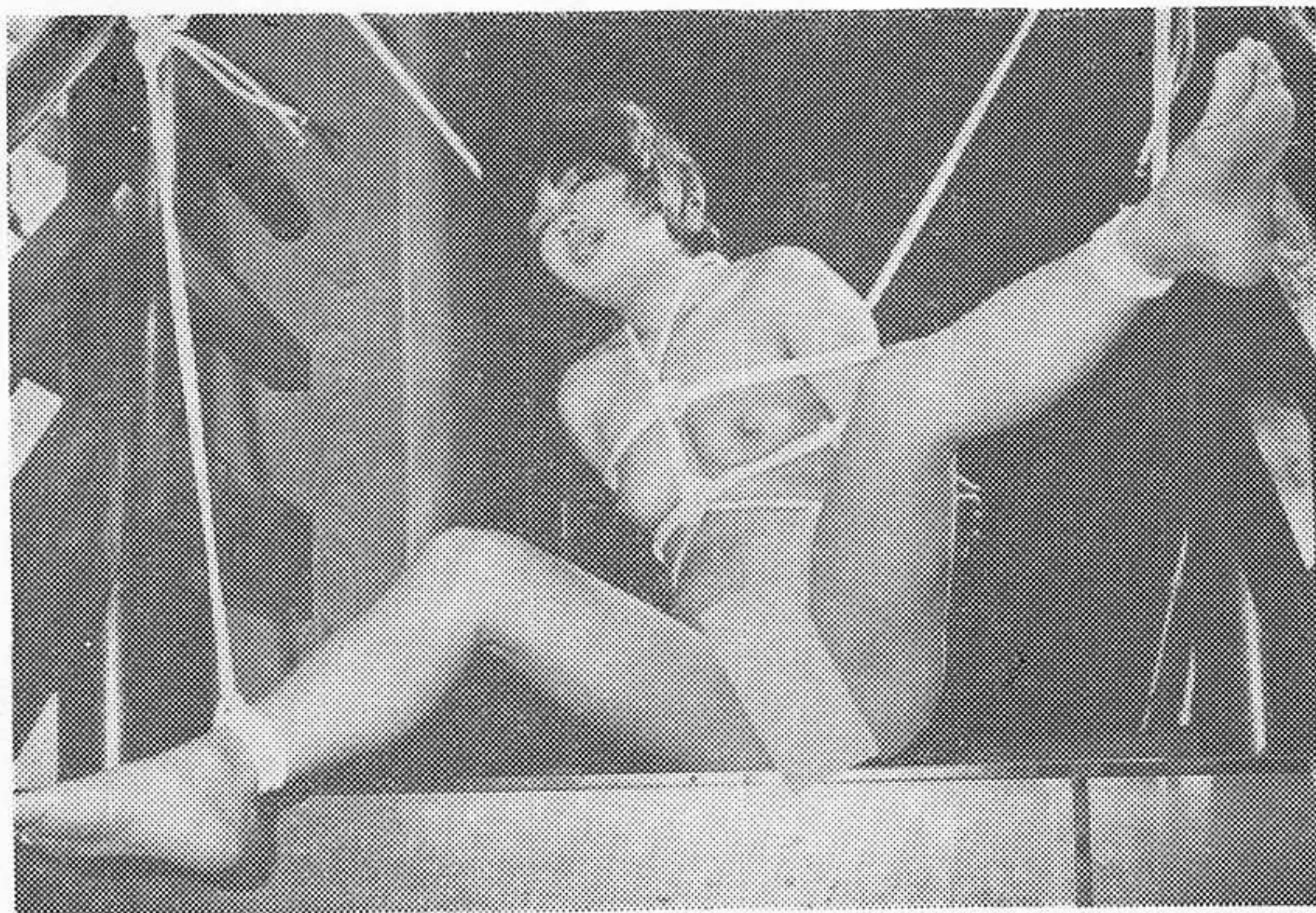
私の目の前に縛られたままで放置されている鈴木千鶴子は、如何にも満足げに、うっとりとした表情である。エンジンのかかった今の彼女であつたら、あの柱の宙縛りも易々と可能であつたのではなからうか。でも今は、もう私の方のエンジンが別の方にスタートし

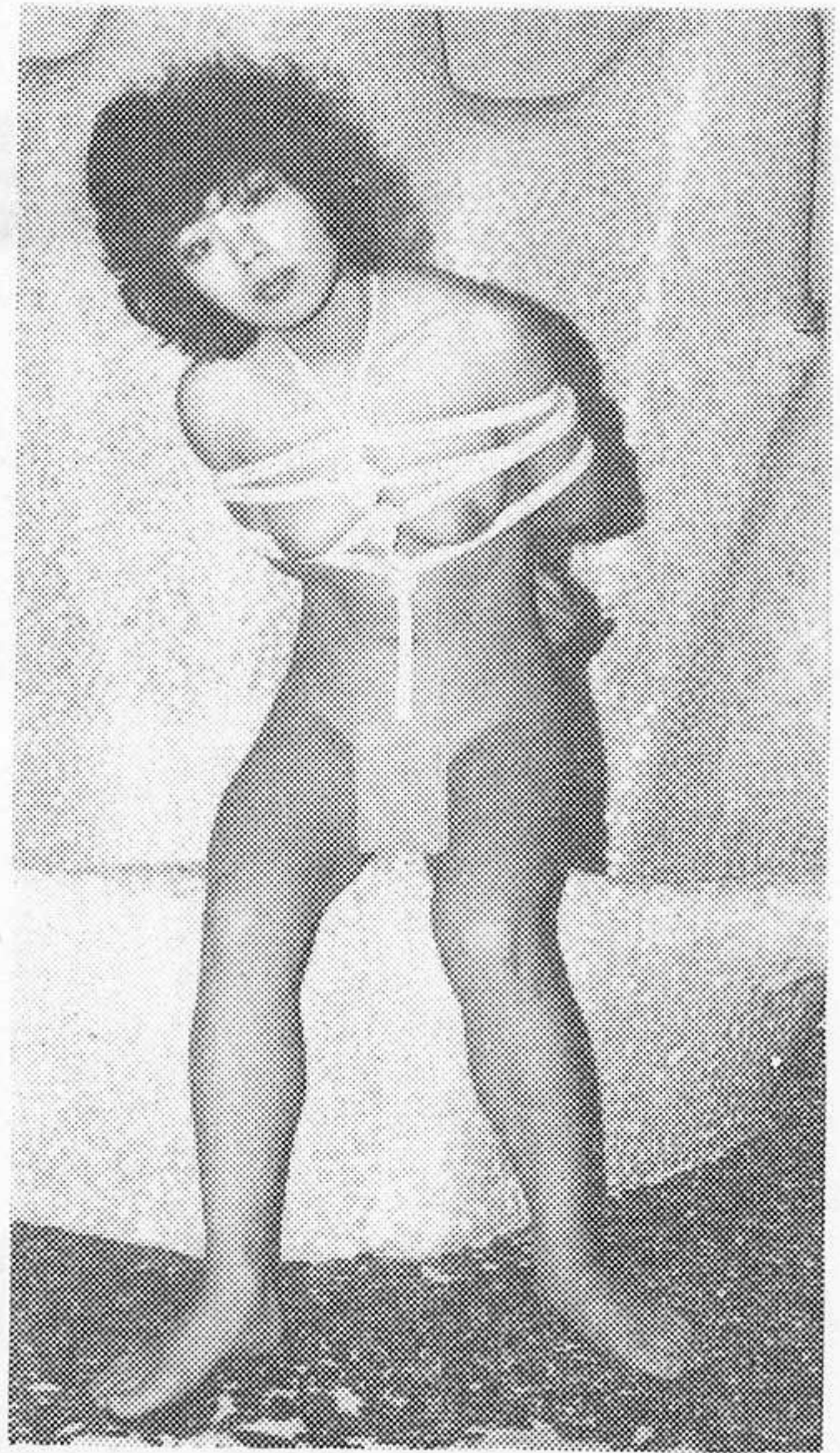
始めているので、今更そのような手のこんだ縛りをやる気持は起こっていない。

階段の上はゴツゴツとしていてSMプレイの場所として適当ではなかった。その上、いかにも足場が悪い。私は両足首の縄だけを解くと、高小手に縛られたまま、うっとりと放心状態になっている鈴木千鶴子を抱き上げて三階のベッドルームへ運んだ。

スイッチを入れると電動式で回転する円形のベッドである。周囲のカーテンを引くと多面体の鏡がベッド上の人物をあらゆる角度から映し出すという仕掛けである。しかし今はもう、そんな精巧な仕掛けも徒らに煩わしいだけである。

私は大切な宝物でも扱うように鈴木千鶴子の縛られた女体を真白いシーツの真中に置いた。もうここにはカメラは





介在しなかった。ベッドの真上から照らし出す光だけが鈴木千鶴子の美しい裸身を彫像のように浮かび上がらせていた。

暖房の熱気が上部に集まるせいか、この三階のベッドルームは暖かかった。私の顔にはいつしか、べっとり汗が、にじんできた。私は着ていた下着を、すべて脱ぎ去ると、やおろ羞恥責めの小道具を手にして、転がっている鈴木千鶴子に近づいていった。

既に夜は更けていて、静かである。

物音一つしない静寂というものは、日夜騒音に慣れている都会人にとっては、一種の不気味さでさえある。時折り遠くで聞こえるクラクションの音が、私を幻想の世界から現実へと引き戻してくれる。

柳の枝のように、しなやかな肢、すべすべとして、なめらかな太股。若々しい肌の香が鼻孔を快く、くすぐってくれる。

視覚と、触覚と、嗅覚とが、私をして夢幻の境地へと誘い込んで放さない。

かすかに目を閉じて心持ち軽く唇を開き、顎をわずかばかり突きだしたようにしている鈴木千鶴子の顔を、私は観音菩薩を拝むような気持で眺めていた。

これが仏教でいう涅槃ねはんというのか、或は極楽浄土というのであろうか。

SMプレイといい、羞恥責めといったって所詮は仏に魂を入れることではないのか。

裸でいても寒くもなし暑くもなし、快適な気温と湿度がエアコンで調節されているのか、私は自分の肉体の存在そのものを忘れ去ってしまった中空に漂っていた。

鈴木千鶴子の縄を、いつ、どのような状態で解いたのか、私は覚えていない。

精巧な機械のように計算された通り正確にしかも敏捷に動く、鈴木千鶴子の白い女体をかき抱いたまま、私はいつの間にやら眠ってしまったらしい。甘美な余韻が全身を弛緩させて倦怠感が大脳神経をも麻痺させていた。

眠い。眠くて、だるい。たまらなく眠い。このままの状態で、ずっと続けていたい。もう何をするのも、いやだ。眠い、眠い。

そんなとき、私は鈴木千鶴子のハリのある声で現実に取り戻された。

「ねえ、私、お腹、すいたワ。食事に行かな

いこと」

いつの間に私の腕の中を、すり抜けたのか
ガウンを身にまとった彼女が私の寝顔をのぞ
き込んでいた。

「食事だなんて、キミ、今、何時だと思って
いるんだい？」

「ええ、二時よ。でも終夜営業のレストラン
が開いてる筈よ。私、エンジンかけてくるか
ら、貴方、寝て待っててよ」

鈴木千鶴子はガウンの上にコートを羽織る
とキーを持って出ていった。なんという行動
的な女性であろう。私だったら、どんなにお
腹がすいていても、この寒空を外へ出て行く
のは気がすすまない。第一、冷蔵庫にビール
や缶詰ぐらいだったら入っている筈である。
そんなことを考えているとき、彼女は車か
ら出してきたのだろうか、手提げ鞆の中から
キラキラと銀色に輝くスーツをとり出して着
替えた。

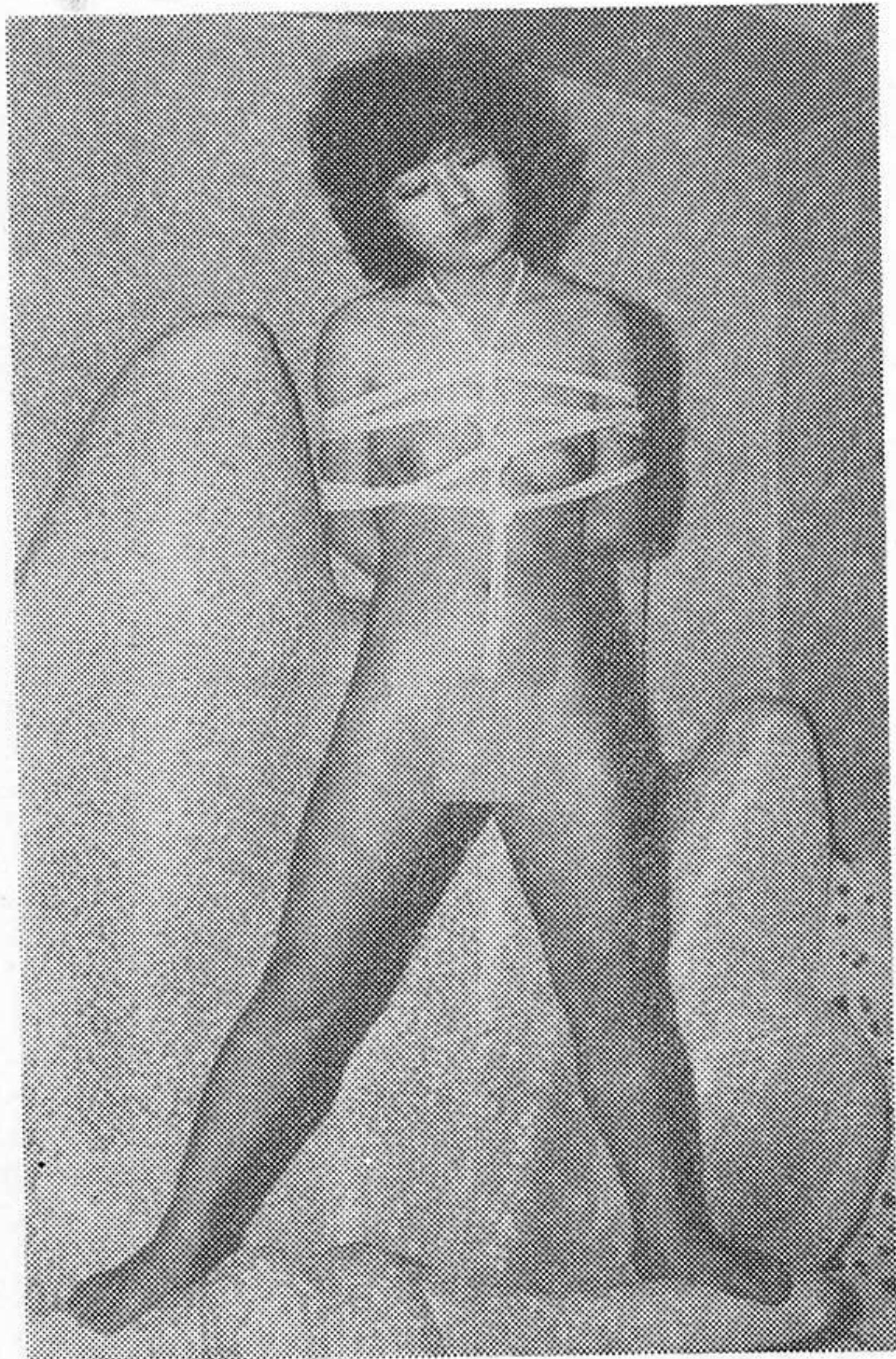
「さあ、私が連れて行ってあげるから、いら
っしゃい」

私は彼女に促されて夢遊病者のように、ふ
らふらとあとをついていった。マフラーから
白い煙を吐いて、彼女の車は夜のしじまに響
く高いエンジンの音を立てていた。

私は助手席に深々と腰を落として腕組みを
しながら、ハンドルを握る鈴木千鶴子の可愛
いい横顔を眺めていた。私の目のピントは彼
女の顔に合っている。窓の外の走り去る光は
ピントからはずれて、まるでソフトフォーカ
スだ。この車内の狭い空間が、今の私にとっ
て総べてである。どこをどう走っているのか
私には、さっぱり、わからない。

ヒーターがきいてきて足下から暖気が全身
に、しのび寄ってくる。快い震動は身も心も
ほぐしてくれる。私は、うっとりとして鈴木
千鶴子の横顔ばかりを眺めていた。

「着いたわよ。さあ、降りるのよ」
彼女の声に私は目がさめた。ガラス窓から
まばゆい光が発散して、私には不夜城のよう
に一瞬、思えた終夜営業のレストランであっ



た。ジュークボックスの歌謡曲が「なぜにあなたは京都へ行くの」と唄っていて定期便の運転手らしいグループが、かたまっていた。

席に腰をおろした鈴木千鶴子は私の耳元に口を寄せて楽しそうに囁いた。

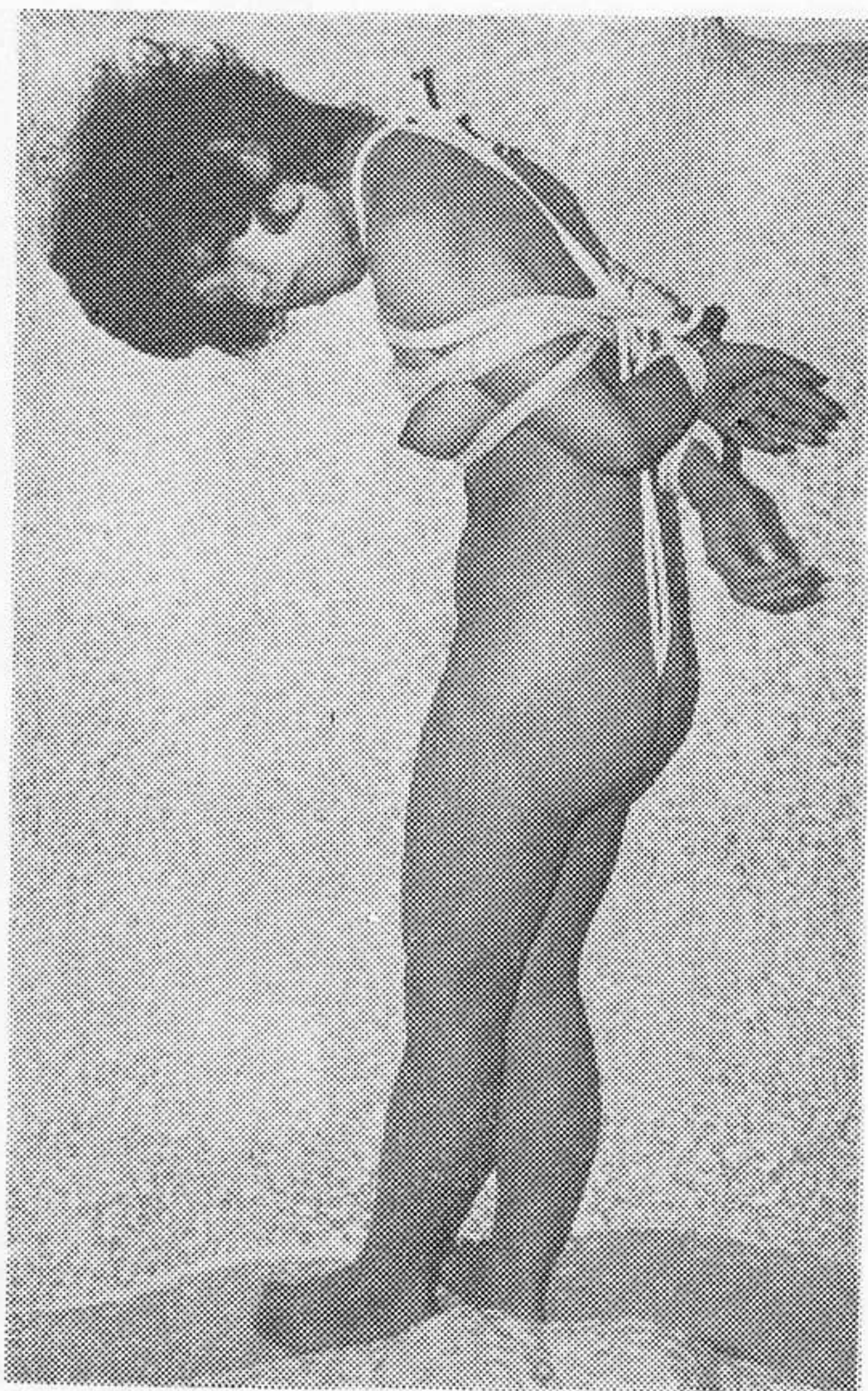
「私、夜行族なの。深夜にならないと目が冴えて来ないのよ」

光を反射してキラキラと輝く彼女の銀色のスーツは如何にも、夜行族にふさわしい洋服である。だが、残念ながら、私はこのあたりは、はっきりと記憶に残っていないのだ。いつもだったら、いつもの私だったら、ぐっすり和白河夜舟で前後不覚に眠っている頃である。夜行族でない私は、半睡の状態で彼女のあとをついていったに過ぎない。

次に私が、はっきりと意識を回復したときモーターの三階のベッドルームで、それが当然のように鈴木千鶴子と二人、並んで寝ていたのである。

朝だ。既にカーテンのすき間からは、輝くような陽光が、さし込んでいる。

朝型の私にとって、昨夜の寝不足も敢て意に介さないほど、四肢に元気が満ちていた。熟睡している彼女を起こさないようにして起きた私は、先ず朝風呂に入った。



ここの浴室は豪華であった。ミラーボールのように光る銀色のタイルを貼りつめた浴槽は一度に十人ぐらいいれそうな広さであるが、栓をひねると、上部から滝のように流れてくる温湯で忽ちのうちに一杯になった。洗場も至って広い。これは写真を撮るのには、面白い背景になるぞ——と思った。

私はそうそうに風呂から上がると、ベッドルームへ鈴木千鶴子を誘いに行った。彼女は

軽い寝息をたてて、睡っていた。

今度は私が起こす番であった。揺すって起こしにかかる、「ねむいのよう」と、まだまだ寝ていた風で蒲団に、もぐり込む。

私は強引に蒲団をめくって鈴木千鶴子の目を覚まさせた。

「もう朝だよ。一風呂浴びてきたらどうだ。ついでに浴室で一枚、撮りたいからね」

私のその言葉で彼女は起き上がると寝乱れ

た髪を撫でつけ裸身にバスタオルを巻いて浴室へ向かった。彼女が入浴している間、私はコードを電源から伸ばして配線し、浴室内で撮影出来るように準備した。

まだ水滴の落ちている鈴木千鶴子の裸身に縄をかけていった。今の彼女は昨夜の私のように半睡半醒の状態であった。夜行族の彼女にとって、午前十時というのは、まだまだ熟



睡時間の最中なのであろう。浴槽の中で、私の命ずるままに素直にポーズをとってはいるが、全身はクラゲのように力がない。

私は気の毒になってフィルム一本分を撮影し終ると、そうそうに彼女を解放した。ふらふらする足で階段を昇っていった鈴木千鶴子はベッドルームで再び眠りに入ってしまった。すやすやと軽い寝息を立てて熟睡している

鈴木千鶴子をベッドに残してロビーに戻った私は、電源のコードを抜いてから浴室までの継線をたどって配線を回収にかかった。縄や紐がコードにからまり、それにエヤレリーズのゴム紐やエクステンションのビニール線がダンゴのようになってしまっただけに解けない。ストロボやレフランプ等と共に撮影用具を三個の革鞆に分けて入れるのに、小一時間はかかってしまった。

私と彼女が連れ立って、そのモーターを出たのは既に正午を、とくに過ぎていた。昨日とは打って変わって、からりと晴れあがった青空に、白い雲が二つ三つ、ちらばっていた。やはり大阪市内から離れているのでスモッグもないのであろうか。

銀色のスーツに赤いマフラーを巻いた鈴木千鶴子は、愛車の窓から皮手套の掌を出して別れの握手を求めてきた。

「昨日はスゴク楽しかったわ。また機会があったらお逢いして下さいね。ここへお電話下さったら私に連絡つきますの。では、お元気で。さようなら」

二、三度、手を振ったかと思うと白いブルードは次第に加速を増し、やがて見送っている私の視界から消えていった。

カット・小川茂正



私は玄関で靴を脱ぎ棄てると、走るようにして洋間へ向かった。

「貴方」

妻の玲子の喘ぐような声が、私を迎えた。

懸賞入選創作

サドの競演

一月洋工

ビールビン三本の錘を黒皮帯によって結び付けられて引き下げられた玲子の、むっちりした白い両太股の間には木馬の背の三角の角材が喰い込んでいた。

「すぐ降ろしてあげるからね」

「早く降ろして、早く」

黒皮帯により、木馬に繋ぎ留められた白いむっちりした両腕を振るようにして、玲子は呻いた。

「あー、痛い」

腕を動かすだけでも、角材が肌を痛めつけるのだろう。

黒皮紐を黒髪に巻き付けられて、天井の梁に吊り上げられているので、軀を倒すこともできない。木の角に当たる決まった部分ばかりを、痛め続けられていたのだろう。小さく慄える、薫るような白い下半身は、上半身を包む赤いセータと調和して美しい光景を作り出していた。

「貴方。私、死にそうに苦しいの。早く降ろして」

妻の熟れたような唇が哀願した。

「よし、判った」

まず、妻のむっちりした白い足を引き下げている三本のビールビンの黒皮帯を解いた。両足の錘を外されても、白い薫るような太股は静止したままだった。

しかし、天井から吊るされた黒皮紐から、艶のある黒髪を取り外した時は、玲子の赤い

セーターの上半身は、崩れるように、前に倒れた。玲子のむっちりした両手を合掌さすように、結び付け、木馬に繋ぎ留めていた黒皮帯を外したとたん、その両手は跨がっている木馬を支え、腰を上げようと腕いた。

妻を木馬から降ろす時には、重いのを我慢して、しっかりと抱き止めたうえ、妻の玲子の弾力のある太股をそっと支え上げるようにして、慎重にやったつもりなのに、玲子は、痛みを訴え続けた。

よろめく足を踏みしめて、やっと降ろした玲子の躰を、木馬の傍の赤い絨毯の上に横たえた。玲子は、動かなかった。でも、その表情は安らかになっていた。

私は、傍の石油ストーブの温かみが、今迄苦闘していた、むっちりした滑らかな白い下半身に当たるようにしておいてやってから、大急ぎで二階に駆け上がり、玲子の身に着ける物をもって来た。

それから、玲子の赤くなった肌のあちこちに、軟膏を擦り込んだ。あんなに痛がっていたのに、木馬による傷はなかった。木馬の背の角の部分に尖らさずに、一センチぐらいの幅をもった平らな面にしていたせいで、妻が痛みを耐えて暴れなかったせいであろう。

肌を痛めないようにと、黒皮帯を広い範囲に巻き付けていたためか、白い餅肌も痣が残るまでには、なっていないようだ。

「貴方、やはり早く帰って来てくれたのね。嬉しかったわ。私、もう一時間も、木馬に掛けられていたら、どうなっていたか判らなかつたわよ」

今日は土曜なので、昼過ぎには帰宅する予定で、朝、妻を木馬に掛けた後、会社に出勤したのだが、妻が木馬の上で苦吟している様子が脳裡から去らず、いいようなない昂奮と万が一という気掛かりで仕事を手につかず、係長の私としては、仕事の遂行上に不都合はあったのだが、遂に体の具合が悪いことにして、出勤後、一時間足らずで退社してきてしまったのである。

「貴方は、やっぱり私の躰を大切に思ってくれているのね」

可愛い赤い唇が囁いた。

「当然じゃないか」

と言いながら私は、素早く玲子のむっちりした太腿に黒皮パンティを嵌め付け、その柔らかい両手に皮手錠を掛けた。それまで、静かに横たわって、私のするままに任せていた妻は、驚いたように、

「貴方、どうなさるの。まだ、いじめるおつもりなの？」

と、起き上がりかけた。それを押しとどめて、

「いや。手足を動かさない方が、玲子の体力の回復が早いんだよ」

私は、妻の両足首にも皮足錠を掛けた。うらめしそうに私を見る妻に電気毛布と布団を掛けてやってから、目を閉じた妻の傍に聳え立つ木馬の背に鼻を当ててみた。妻の香りがほのかに薫って来た。気掛かりだった心配がなくなると、急に悩ましい気分が湧き上がってきた。

○

先日、テレビのザ・ガードマンの番組で、男女が縛られて痛めつけられる場面を妻と共に見た後、サドプレイをしようと私が熱烈に提案し、妻も、それを承諾してくれたのだった。その際のルールも、私の提案案を基にして、話し合いで決定した。そのルールは次のようであった。

サドプレイのルール

一、会社の仕事に支障の無いように行なう。従って、実施日は土曜か、祭日の前日、或は日曜か祭日が適當。

二、軀を傷つけない。
三、交互に行なう。

このサドプレイが、まさか、とんでもないことに発展しようとは思ってはいなかった。初めに、私がS役を行なう事になり、角材で木馬を作成して、妻を掛けたのであった。

○

妻を木馬に掛けた次の日曜日の昼過ぎ、妻は、今度も一人子の小学四年生の女兒を里へ遊びに行かせた後、いたずらっぽい笑いを浮かべながら、

「今日は、貴方のM番ですわ。木馬を倉庫から取っていらっしゃい」

覚悟はしていたものの、私の気持は暗くなってきた。キリストが自ら掛けられる十字架を引いて来たように、私も重い木馬の部品を倉庫から四回も往復して引き出して来て、洋間に運び込み、組み立てた。

妻を木馬に掛ける時は、胸をわくわくさせながら、楽しく組み立てたのだが、今は、自分がこの木馬に掛けられるために組み立てるのかと思うと、その作業もつい鈍りがちだった。玲子が木馬の上で痛がっていた様子が、頭にまざまざと浮かび続けていた。木馬の背は、一センチ位の水平な幅を持ったものにし

てあるのだが、それが、妻を掛ける時は、広過ぎるように見えたのに、今は、狭過ぎるように見えた。

「さあ、下を脱ぎなさい」

「やっぱり、脱がないといけないのかい」

「この前、貴方がおっしゃった様に、下を裸にして跨がらないと、木馬の効果は半減しますわよ。私も下半身、裸にされて掛けられたのですからね」

恨みが籠っているような口調の、妻の玲子の冷厳なる言葉だった。私は覚悟を決め、椅子を台にして、半裸の姿で木馬に跨がった。とたんに、突き上げられる様な痛みが、頭の先まで響いて来た。

「どう？ 痛いでしょう」

妻の声は弾んでいた。足首が皮の感触で縛られた。

「やっぱり、足に錘を掛けるのかね」

「当たり前ですわ。こうしなければ、木馬の真価が味わえないと、貴方がおっしゃったのではありませんか」

足に錘を結び付けられてしまうと、股間にギリギリと刃物が喰い込んで来るような気さえた。私は、右足を少し引き上げてみた。すると、重い感じと同時に、骨に響く痛さに

襲われて、

「あー」

と、私は思わず唸り声を上げてしまった。

「私が、どんなに苦しかったか、お判りになったでしょう」

私は、両手首を前で合わさされ、黒皮帯で締めつけられて、私が妻にしたように、両手首を木馬に留められた。なんだか惨めな気持ちになって来た。

「子供は帰って来ないだろうね」

喘ぐように言った。

「さあ。ただ、行ってらっしゃいって云っただけだから、どうでしょうかね。美代子がひょっこり帰って来て、パパのこんな姿を見たら、どう思うでしょうか。……まあ、心配そうね。冗談ですわよ」

冗談だと言われても、木馬の上で、ぶざまに苦吟させられている現在、不安な気持は拭い去れなかった。だが玲子はケロリとして、私の頭髪にも皮紐を結び付けだしたようだ。別に真似なくともよいのに、何から何まで私が妻にしたと同じにしようとしている。

「何だか、復讐されているようだな」

苦しみの中から、私は訴えた。

「上半身を立たされてごらんなさい。一層、

木馬の味が身に染みるわよ。フフフ……」

妻は、嬉しそうである。

だが、上半身を真っ直ぐに立たされても、とり立てて痛さが増したようには思えなかった。男女の体形上の違いからかもしれない。私は内心、少し安心した。だが、痛いのは痛い。のだから、すぐコタえるようにしてみせた。しかし、髪を吊られたため、顔を横に向けようとする、まとめて引き抜かれそうで顔の動きも自由にならなかった。

暫くの間、妻は痛み苦しむ私をからかっていたが、そのうちに、洋間から出て行ってしまった。痛みは増すばかりである。

「玲子」

私は、何度も呼んだが、何の反応も戻って来なかった。今は苦しくとも、あと一時間でもすれば、この苦しみから解放されて、ほっと出来るのだと自分に言い聞かせたが、人間に痛覚があることが恨めしくなった。

長い苦吟だった。ようやく玲子の声を聞いた時は、天使の声と聞こえた。

「早く。早く、降ろしてくれ」

私が帰宅した時、今の私のように、妻が叫んだ気持がよく判った。でも、妻は、私の足首を引き下げる錘さえ外してくれようともし

ない。

「早くしてくれ。もう我慢できない」

私は、叫んだ。

「そんなに、いらいらしなさんな。まだ、二時間そこそしか経ってないのよ」

柔らかい滑らかな手が私の尻を叩いた。瞬間、股間がピリッと痛めつけられた。

「もう、今日は止めてくれ」

私は叫び続けた。

「貴方は、弱虫だわねえ」

妻は、くすくす笑いながら、足首を解いてくれた。私は苦痛から脱けられる期待で胸が躍った。

木馬から降ろされる時も痛かったが、やっと待ち望んでいた安楽がやって来た。私は、股間にひりひりとした痛みを感じながらも、呆然と軀を横たえていた。柔らかくて暖かい毛布が掛かって来た。かなり前から電気を入れていたらしく、毛布は暖かく私の軀を包んでくれた。毛布を暖めてくれていた妻の心遣いも嬉しく、心も暖まった。

○

二週間後、今度は私が妻をいじめる番となった。私は寝具に潜り込んだ時、要求書を妻に示した。

玲子の行なうべき事（今週の土曜）

一、寝具に入る前に次の処理をすること。

。歯を磨き、口を漱ぐ。

。入浴し体をよく洗い剃毛する。

二、次の衣裳を着けて待つこと。

。口に皮製嵌口具を嵌める。

。皮製貞操帯を着用する。

。生ゴム手袋を嵌める。

。嵌口具、貞操帯を外す鍵は、予め夫に渡して置く。

三、当夜は心をこめてサービスすること。

「まあ、随分、面倒な手続きがいるのですわね。貴方も同じ様な目に合わされるようになってもいいの？」

みずみずしい唇が、私の目の傍で囁いた。

「いいよ。それは、覚悟の上だよ」

○

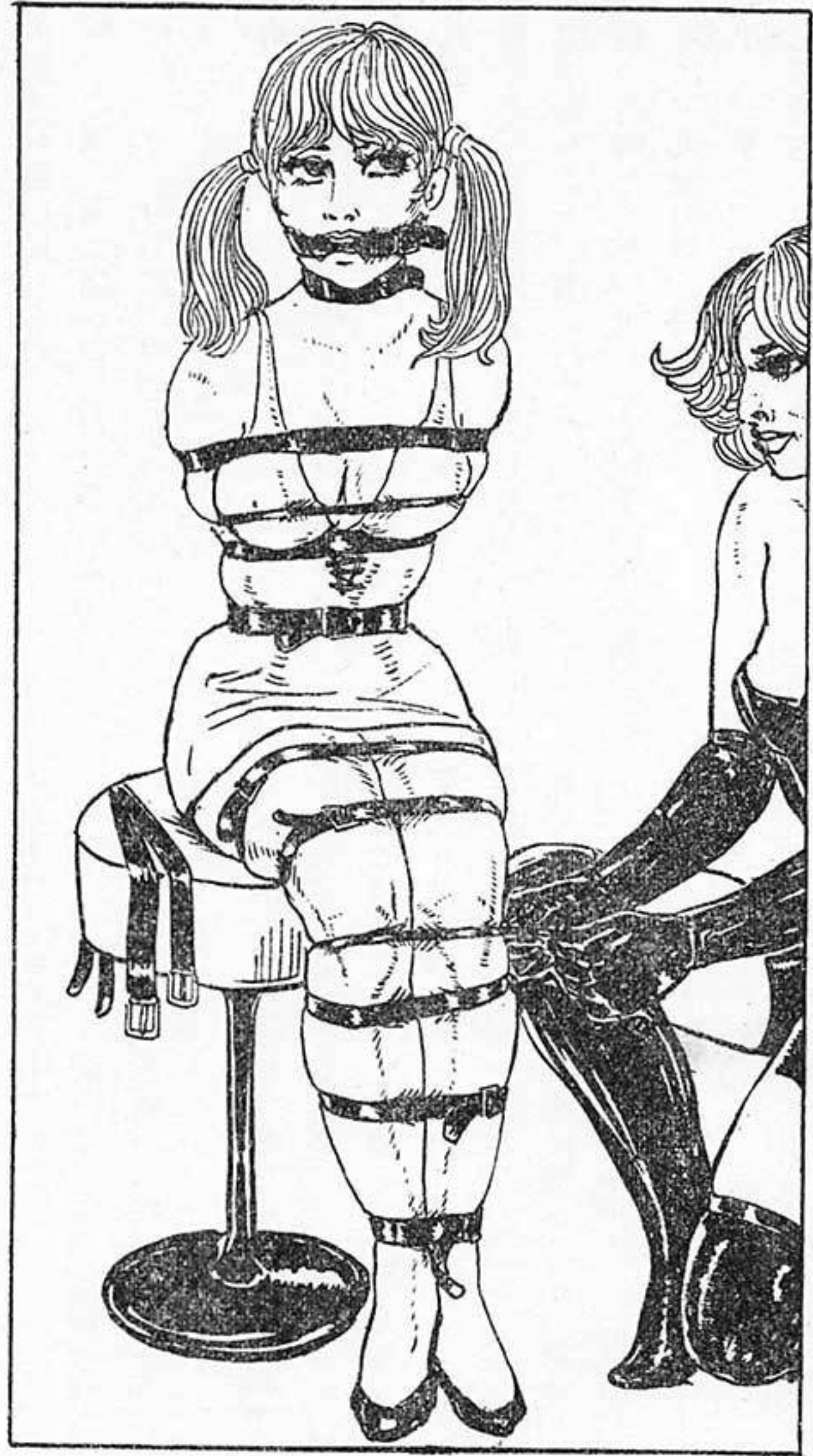
当夜は、私は少し風邪気味故、入浴しなかったが、妻は入浴し、私の要求通りにしているらしかった。

私は、妻の準備する様子を何故か見ようとは思わなかった。見てみると、要求通りにしてもらえないような気がしたからかもしれない。だが、待ち遠しくて、見ているテレビも上の空だった。

イメージギャラリー

『歡迎ベルト』

志羽利也



やっと準備ができたらしいので二階の寝室に入ると、黒皮の嵌口具を締め付けた、妻の白いふっくらした顔が寝具からのぞいているのが見えた。私は、その妻のすべすべした額に接吻してから布団を剥いだ。何か言いたげに、妻は、黒皮の嵌口具で締め付けられた白い顔を動かした。だが、自ら嵌め付けた嵌口具であっても、声は出る筈は無かった。

白いむっちりした腰部には期待していた黒皮の貞操帯が、ぴっちりとはまっていた。私は、その腰部を抱き締めた。暖かく滑らかな感触は、私をうっとりさせた。

玲子は、あめ色のゴム手袋も嵌めていたし貞操帯の下も要求通りにしてくれていた。私は感激のため頬擦りをせざるを得なかった。妻も、悶えだしたようだが、嵌口具が頬に

喰い込み、口中まで拘束しているため、声は出せないようだ。そんな妻が、たまらなく、いとおしくなり、嵌口具を外してやり、赤く跡のついた頬にキスしてやった。

今まで嵌口具を押し付けられていた柔らかい妻の唇とゴム手袋の艶かしさに、陶醉境を味わうことが出来た私は、感謝の気持をこめて、柔らかな玲子の脰を抱き締めた。

○

次の週、布団に入った時に妻が要求書を突きつけてきた。何でも真似をするなど思いながら、私は要求書に目を通した。

洋一さんのしてくださいさる事。

。入浴し、歯を磨き、口を漱いでから布団に入ること。

。その際は、男性用貞操帯を着用の上、ゴム手袋を着けてくださること。

。男性用貞操帯を外す鍵は、予め、妻に渡して置く事。

。犬、猫のようにサービスをしてくださること。

「フーン。この犬、猫のようにサービスするとは、どうすることだね」

「それは、貴方が考えて工夫してください。この前は、私、貴方の気持を察してサービス

してあげたのだから」

当夜、妻の要求通りにして、鍵を渡した後自ら、男性用黒皮貞操帯を締めて布団に入った。皮の感触を味わいながら、かなり待たされた後、

「お待ち遠さま」

やっと、玲子が入って来た。

私は、要求されたとおりに、一生懸命になつて考えたサービスを尽したつもりだが、玲子は、さして、感謝しているようでもない。

そうしながらも、一番、じれったかったのは、玲子が私の貞操帯の錠を外してくれないことだった。私のサービスが足りないからではないかと、私は必死になった。

だが、その効果が一向に現われないうちに「もう、いいわ」

玲子は、投げ棄てるように言うのと、くろりと背を向けてしまった。私は無駄骨を折らされたようで後味が悪かった。そこで、おそろおそろ頼んでみた。

「これを外してくれないかなあ」

「ああ、貞操帯は自分では外されないのだったわね。でも、自分で締めたのだから、そのまま我慢しなさいよ」

玲子の返事は、まことに、ソツケない。私

には、妻が冷酷な理由が解せなかった。

○

四日後、次週は私がS役を行なう番になるので、私の要求を告げると、妻は、

「それは、出来ませんわ。貴方は、この前、私を満足させてくれなかったじゃない。このままでは不公平ですわよ」

何故か玲子是不気嫌である。弁解しても、取り合ってくれない。あまり、妻に逆らつて今後のサドプレイを拒否されてはいけないうで、私は妻に従うことにした。

「やはり次週も、貴方が責めを受ける方になるのよ。いいこと」

妻はサド気が増したのか、或は、何か私に不満があるのか解せないながらも、私は仕方なく承諾した。

○

どんな事をされるかを告げられないまま、責めを受ける土曜の夜を迎えた。

「僕は、どうしていればいいのだい？ いじめるんだろ？ 今夜も」

「もちろんですわ。そうね、玄関の土間に寝転がってなさい」

そのわけを聞いても、妻は教えてくれなかった。

「裸にならなくてもいいのかい」

「裸になる必要はないわ。でも、汚れてもいいような古い服を着なさい」

妻の威圧するような語調には逆らえず、私は肘の抜けたセーターと、学生時代のよれよれになったズボンを穿いて、玄関の土間に横たわった。しかし、すぐに

「土間一面に、新聞を敷き詰めなさい」

という命令が飛んできたのでそれに従う。

「目を閉じて！」

私の横にしゃがみこんだ玲子。いよいよ開始らしい。

「口を開けなさい」

と言われたかと思うと、ぬめりとしたあめ色の物が玄関の土間に寝そべった私の顔を覆った。生ゴム布だ。

続いて、その生ゴム布を押し込むように、玲子の手が口の中に突き入って来た。私は、顔を生ゴムで覆われ、口の所に窪みをつけられた事になる。

「そのまま待っててね」

妻の語調が優しくなった。そう云っておいて、妻は玄関の傍のトイレに入ったようだったが、出てくるなり、ぺったりと生ゴムで覆われた私の顔に、ずっしりとした柔らかい重

量が覆い被さって来た。妻のヒップだ。私は重いヒップで顔を押し潰された。息が詰まって死ぬかと思った。

間もなく、ヒップは顔から離れたが、また玲子の手が生ゴムの上から口の中に突き入って来た。

「さあ、口をしっかり開けておくのですよ。顔を動かしても駄目よ。零さないようにね」

口の中に、生ゴムを通して柔らかい物が、詰まって来たのが感じられた。私は直感的にそれが何か分かり、ぞくっとした。

「零さないように、ゆっくり噛んでごらん」
 思ったより噛みごたえはあった。生ゴムの上からとはいえ、内容物が判ったので、その物を直接、食べさされるような気もしないではなかった。

「そう。上手に出来たわね。零さないようにそれを包んでトイレに棄てて来て頂戴」
 後処理したペーパーも、その中に入っていた。

「それから、生ゴムをバスで、よく洗っていらっしゃいね」

○

先日の妻の責めには、驚かされたので、私も妻をいじめる方法を改めて考え直し、妻を

完全拘束してやることにした。

その日も、子供を里に遊びに行かすことにした。その当日の日曜の朝食後、どんなプレイをするかを知らせぬままに、妻を倉庫に導いた。

私はその日迄に、妻に知れぬように倉庫内を片付け、卓球台の片面を床に寝かせておき更に、石油ストーブもそこに持ち込んで倉庫内を暖めて置いたのだ。

妻に真裸になるように頼み、卓球台の上に仰むけに寝るように望むと、しぶしぶではあったが、玲子は従ってくれた。

卓球台の横のあちこちに打ち付けて置いた太釘を利用して、黒革帯で妻を大の字に繋ぎ留めたが、黒革帯を肌に広く巻き付けて、悲ができないように計らった。妻の白い手の指一本一本にも、黒皮紐を巻き付けて動かないように釘に留めた。足の指も同様にした。丁度、中学時代に行なった蛙の解剖の時のように、妻を卓球台に繋ぎ留めた事になる。

「あまり、ひどい事をしないでよ」
 手足を微動すら、さし得なくなった妻は、哀れな声を出した。

「うん」

とは言ったものの、私はそんな妻に構わず

口を開けさせ、その舌を伸ばすことを命じて出させるや否や、細い二本のゴム棒で、その赤い舌を挟み留め、そのゴム棒を、黒皮紐により妻の後頭部を回して、口にかっちりと留め付けた。

妻は、舌は動かせなくても、喉から不満そうな音を漏らし、けわしい目で私を睨み付けた。その怒りを含んではいるが、ぱっちりとした瞼の中に、黒い十円玉くらいの大きさのゴムの円板を入れ込んだ。

赤い舌を引き出して黒いゴム棒で挟み留めた上に両目を黒ゴムでフタをし終わってみると、可愛いかった玲子の顔が不気味ささえ漂わしだした。赤い舌の突き出た唇からは、涎が垂れ流れていた。

その妻の耳にゴム栓を嵌め込み、艶やかな黒髪を二等分して黒皮紐を巻き結び、左右に引き絞った。これでもう玲子は、ふっくらした白い顔も動かすことはできないだろう。

それから、足を引っぱっていた黒皮帯を少し緩めて、黒皮の貞操帯装着にかかった。接着剤で二本の突起物も取り付けておいたのでいつものようにスナリとは行かず、だいたい手間が掛かったが、私の恍惚感は一層続き続けた。

大の字に張り付けられた玲子の裸身は、むちりした白い乳房と腹を忙しく上下させ得るのみでその他のどこも動かし得ない筈だ。指さえも動かさなくしてある。更に、鼻孔を除いては、目も耳も完全閉鎖してあるのだ。木馬に掛けられた時とは違った激烈な拘束感に玲子は襲われていることだろうと思うと私には、ぞくぞくするような快感が湧き起って来るのだった。

瞼にピッタリと黒ゴムを嵌め込まれ、赤い舌を黒ゴム棒により引き出され、黒髪を左右に引き上げられた玲子は、僅かに顎をのけ反らすことで苦しみを表現しようとしているように見えた。

私が、その完全拘束の妻の姿に見惚れ、上下する乳房に手を伸ばした時、ガチャッという金属音とギャーと切き裂かれたような声が聞こえて折角盛り上がっていた陶酔が中断された。驚いて倉庫から出て見ると、居間の窓の小鳥籠の下に仕掛けて置いた鉄罌に掛かった黒猫が暴れていた。近頃、二回も小鳥を取られたので、罌を仕掛けて置いたのだ。

妻に嵌め付けた黒皮と同じように、黒くて艶のある猫の毛並みである。暴れ狂う、その殺鳥犯を見ているうちに、私には斬新なアイ

デアが浮かんで来た。ちらっとではあるが不吉な予感もしないではなかったが、とにかく針金を使って黒猫の手足や口の動きを止め、台所から持ち出して来た刺身庖丁も携えて、倉庫の妻の許に戻った。

左手に提げた黒猫が針金で動きを止められているように、裸で黒皮の貞操帯を掛けられた妻は、卓球台の上で、黒皮紐により動きを止められて、大の字に貼り付けられたままだった。黒猫を針金で縛り上げたために、私の気持は一層、昂ぶっていた。

妻の瞼の中から黒いゴム棒を引き出した。べつとりと湿った黒いゴム棒の下から、赤く血走った玲子の瞳が現われ出た。その瞳の前に、黒猫をかざし、黒猫の腹の辺りに刺身庖丁を突き刺して抉った。鮮血が迸り、赤い内臓も剥き出てきた。その赤い内臓を引き千切り取り、妻の白い乳房の上に投げつけた。

その途端、妻の表情が引き締まったかと思うと、妻の瞳の動きが止まった。黒ゴム棒で舌を引き出された妻の顔色が、みるみるうちに死人のようになりだした。私は慌てた。今迄の昂ぶりは消滅し、別の昂ぶりに襲われた。妻が死ぬかもしれない。私はおろおろしながら、大急ぎで妻を留めている黒皮紐を刺身庖

丁で切り外し始めた。手足の指一本一本まで黒皮紐で留めているので、全部、切り外すのは大変だった。

慌てたためか、庖丁の先が妻の右手の薬指と小指を切り、血が滲み出したので、私の気持は一層転倒した。転がるようにして居間から毛布を運び入れ、妻の軀をくるみながら、妻の心臓に耳を当てた。動いてはいたが不規則である。

大慌てで近くの医院に電話して、今日が日曜であることを思い知らされた。往診を断わられると余計に、妻が刻々死に近づくように思われ夢中で一一九番に電話してしまった。とって返して、妻の許に戻ると、妻の舌はゴム棒で引き出されたままだし、突起付き黒皮貞操帯も装着したままだ。

慌てながらも、やっとそれ等を取り外し、妻の白い肌にベツトリと流れ落ちた、黒猫の血を拭き取り、毛布にくるんだ妻を居間まで運び入れた時には、もう、ピーポーという叫びを上げながら救急車が家の前で止まる音がし、二、三人の白衣の人が家の中へ駆け込んできた。妻を毛布にくるんだまま担架に乗せた。何処から出て来たのか、もう救急車の周りには、人だかりがしていた。

ナミオM画廊

『新型マツト』

春川 ナミオ



走り出した救急車の中で、白衣の人から事情を訊かれた。

「奥さんは、真っ裸ですね。どうしておられたのですか？」

「ハア。そのう、風呂に入っていたので…」

「でも、躰が濡れていませんね」

「いいえ、風呂場に入った途端に、心臓の発作が起きたようで」

苦しい応答を、せざるを得なかった。

幸い妻はしばらくして気がついてくれた。

翌日は会社を休んだが、妻の容態も快方に向かい出したので次の日には出勤し、帰りに病院に寄ると、もう病室は空だった。里の人が妻を連れ帰ったというのである。

その足で妻の実家に立ち寄ったが、

「今日は会わないでくれ」

との、妻の母の言葉だった。子供も里へ預けたままになっている。

十数日も毎日のように妻の実家へ通った後、やっと、妻に会わせてもらえた。妻の躰は、すっかり回復していた。しかし妻の再会第一声は、

「貴方のような残忍な人とは、もう、一緒に生活したくありません」

との情けない宣告であった。ただ、実家の父母には、私達の間の事情をまだ話してないという聞いて、少しは救われる気持だった。

その八日後、妻と談合しているうちに、私は情け無くなって涙が、ぽろぽろと出た。

「別れるとしても、別れる前に、もう一度だけ、僕をいじめてくれないか」

「フーン。でも、もう貴方に愛情が持てなくなったのでひどくするかもしれませんわよ」

「どんなにひどくされても構わない。最後の情けで、もう一度だけ、いじめてくれ」

私は涙ながらに哀願した。

○

約束の日——土曜の午後四時頃だった。私は、衿元に、むっちりした白い肌をのぞかせている妻と、いそいそとタクシーで自宅へ着いた。玄関のドアを閉めるや否や、いきなり玲子の掌が私の頬を強打した。私は、本能的に、きつと身構えて妻を見詰めた。

「何よ。いじめてくれといったじゃないの」

その途端、股間に痛烈な打撃を受けた。玲子が蹴り上げたらしい。うずくまってしまう私の背の上に、

「あの黒い皮の変な物を、全部、此处へ持っていくらっしゃい」

と、命令が降ってきた。

私は、それを引き摺るようにして持って来た。

「それを全部持って、倉庫へ行くのよ。それから、真っ裸になって待っていなさい」

私から頼みこんだ事であるので、言われるままにせざるを得ない。

倉庫に入ると、先日との妻との騒ぎの跡が歴然と残っていた。黒血の付いた卓球台、突起付黒皮貞操帯、黒皮紐の切れ端などが、あの時の光景をまざまざと思い出させた。妻を死

にかけさせた黒猫だけは、あの後すぐ取り片付けていたのが幸いだった。再び幸いなことに、あの時の石油ストーブが置いたままであり、石油缶も倉庫の隅に置いてあった。

石油を注ぎ、火を点け、玲子に命じられた通り真裸になって待っていると、赤いワンピースの玲子が入って来た。

「男性用貞操帯と嵌口具を嵌めなさい」

あくまで、事務的な命令口調だった。

私は、黒皮で作られたそれらを締めつけながら、これから玲子にいじめられる事が嬉しいような、恐ろしいような妙な気持で、急激に昂ぶってくるのを感じた。

「仰むけに、卓球台の上に寝なさい」

玲子は、あの時に、私が玲子にしたと同じようなことをしようとしているのだろうと思った。案の定、手首や足首に皮紐を結び付けられ、大の字に引き留められた。大の字に板に貼り付けられると、組の上の鯉にされたようにで不安な思いにかられた。

「どう、こんなにされた気持は？」

その声と共に玲子が近づいて来て、私を見降ろすようにしたかと思うと、突然、股間に痛烈な痛みが走って、思わず嵌口具の奥で呻いた。玲子のハイヒールの堅い踵が、私の装

着した貞操帯を踏み付けたらしい。

本能的に引続いての攻撃を覚悟して、体を固くしたが、その一回の痛撃だけで、玲子がいなくなった。

このまま私を放って置くのかと心配になった頃、掃除器を持って玲子が現われた。掃除好きの玲子を象徴しているように思えて、私は、これから、されようとしている事を甘く考えていた。玲子は、掃除器を倉庫の片隅のコンセントに連結するとスイッチを入れた。

それから、玲子の、柔らかいが弾力のある手が、私の腰の貞操帯を取り外しだしたようだった。私はますます甘い責めを期待する気持になった。股間の拘束が無くなって楽になったと感じると、間もなくぐつぐつと堅い物でつつ突かれ始め、不気味に皮膚が引っ張られた。外した貞操帯の代りに、掃除器を掛けだしたらしい。擦ったさも襲って来た。だが、私の口中にまで喰い込んでいる皮嵌口具のため、笑い声も出し得ない。大の字に引き上げられているので手足も動かし得ない。

「掃除器の先に、だいぶ、いい匂いが染みついた頃ね。……貴方、口を開けてごらん。あら御免なさい。開けられないわね」

私は、嵌口具を取り外されて、大きく息を

することが出来た。だが、すぐに電気掃除器の管先が、楽になったばかりの口の中へ突き入って来た。舌が吸い付けられた。たった今まで、貞操帯代りしていた管が、ぐいぐい口の奥に突き入って来て、嵌口具代りに早替わりしたわけだ。

苦しい。だが、こんなにされながらも、この管が、玲子の貞操帯代りをした物だったら素晴らしいかもしれない、などと思うのだった。呼吸が思うようにならず、苦しさは深刻になって来たが、同時に、被虐の快感が体内に漲り出した。

「あら、呆れた！ こんなにされながら……」

次の瞬間、今度は、貞操帯の庇護もない股間に、死ぬかと思う激痛が襲ってきた。

卓球台に黒皮紐で大の字に貼り付けられ、口中は掃除器で吸われ続けているので、勿論その痛みを訴えることは出来なかった。でも目がくらみそうな激痛が徐々に鎮まってくる、痺れるような受虐の喜びは、却って昂まって来た。

「まあ。あれだけ強く踏んでやったのに！」

玲子の口惜しそうな呟きとともに、押し挟まれるような痛みに襲われ始めた。玲子は、ハイヒールの踵を武器としているらしい。

「まったく、どういう人なんでしょうね！」呆れ返ったというような言葉を残して、更に強い一踏みの後、妻は倉庫から出て行ってしまった。激痛の薄らぐのを待って、私は顔を振ってようやく口中から、掃除器の管先を吐き出すことができたが、手足を払って引張り留められているので、此処から逃げ去ることはできない。

さすがに疲れて、私がぐったりになった頃に玲子が刺身庖丁を右手に持って戻って来た。「あら。しゃくだから切り付けてあげようと思ったのに、まいっちゃったらしいのねえ。興冷めだわ」

「じょうだんじゃない。庖丁で切り付けるのは止めてくれよ」

「何を言っているのよ！ どんなにひどくされても良いと言ったじゃないの。この前、私は、傷付けられないというルールを無視されて、指をこれで切られて、血を流したのよ。忘れたわけじゃないでしょ？ だから、復讐をしあげるのよ」

大の字に引き留められたままの私は、逃がれる術もない。

「あれは、玲子を切るつもりでやったのじゃないのだ。皮紐を切る時、誤って傷付けてし

まったのだ。慌てたハズミなんだ。たのむ！それで切るのだけは勘弁してくれ」

玲子は、それには答えず、刺身庖丁を構えて、私に近付いて来た。美しい復讐鬼は、本当に切りつけそうな見幕で、尖先を向けている。

「堪えてくれ、玲子！」

ピリツと太腿が痛んだ。

「助けてくれ！」

尖先をちょっと触れただけらしいが、私は今にも切断されるのではないかと思った。

「弱虫だわね」

玲子は刺身庖丁を手から離した。私は、ほっとしたが、玲子の黒いハイヒールが、私の顔に近づいてきた。

「弱虫は、これでも噛むがいいわ」

痛みを伴いながら、黒皮のハイヒールの先が、私の歯を割り抜けて、突き入ってきた。口の中が痛いと共に、息をするのさえ苦しくなった。でも上を見上げると、玲子の両太股を、ピッチリと包んだ純白のパンティが窺えた。結婚して以来、パンティを真下から眺めたのは初めてであった。その純白のパンティからは、玲子の薰りが漂って来るようにさえ感じられた。口中は突き痛められているが、

私は、こんないじめられ方なら、痛みぐらい我慢しようと思った。すると、すっと靴先が口中から消えた。

たった今、我慢しようと思ったばかりだがやはり、私はホッとした。

玲子は、ハイヒールを脱いだらしく、今度は、ナイロンに包まれたままの柔らかい足が突き入って来た。

私は嬉しくなって、純白のパンティを眺めながら、ナイロンの靴下に包まれた玲子の足先を、しゃぶり続けた。

「擦ったいわね。噛んだらどうなの？ 貴方を喜ばしてあげるつもりじゃないんですからね！」

という玲子の声とともに、下腹が押し潰されるような痛みに襲われた。口と下腹の同時圧迫なのだ。それはまことに強烈であり、今

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

にも破壊されそうな責めだ。もう玲子の足先をしゃぶるところではなくなった。

玲子は、ハイヒールを穿いた方の足で下腹を踏み付け、ナイロン靴下の方を私の口中に突き込んでいるようだ。

すなわち、玲子は、口と下腹を踏んで、私の軀の上に乗っているのだ。このままだと不具になってしまう。

死ぬような苦しみの後、ようやくその圧力が去った。

「相当、応えたようね。でも、自ら望んだことだから、恨みはしないわね」

踏みこまれた口中の、どこかが割^きけ切れているようで、私は口をきく気力も、失っていた。

「今後は絶対、この間の黒猫を使ったような残忍なことはしないと誓える？」

玲子が、爪先で私の頬をこづきながら云った。

私は、必死に気力を振り絞って、喘ぎながら、答えた。

「ぜ、絶対に、し、しません」

また私の口の中に、あの恐ろしい、べろっとしたナイロン靴下が押し入ってきた。でも

今度は、口の中は押し潰されそうにはならなかった。

「フッフフ……。貴方も可愛いところがあるのね。実はねえ、もし、私の靴下だけの足を噛んだら、本当に貴方と別れようと思っていたのよ。でも、あれだけ苦しめてあげても噛まなかったわね。可哀想だから、許してあげることにするわ」

私は天にも昇るばかりに嬉しくなった。声をあげ手足を振り動かして喜びを表現したかったが、口の中には、玲子の足を突っ込まれ手足を大の字に引き広げられているので、それは叶わなかった。せめて、口の中に突っ込まれている玲子のナイロンに包まれた柔らかい足をしゃぶることで、喜びを妻に伝えようと努めた。

玲子は、暫くは私の、しゃぶるままにしてくれていたが、やがて静かに、口から足を外して、私の顔を見降ろして、ニッコリしてくれた。

「有難う」

私は、玲子の気が変わらない事を祈るように、気力を振り絞って叫んだ。

——（おわり）——

奇クリザロウ

妊婦マニヤの手記

四月号を喜び五月号を期待する

大原

茂

私はこの手記を書くにあたって
編集者の皆様に心から御礼申上げ

ます。私に限りましては、四月号
は近來にない充実した記事、フォ

ト、手記の満載
で十年來の愛読
者として嬉しい
限りです。

私は特に妊婦
マニヤである
と共に、肥満女性
のマニヤでもあ
ります。では四
月号の読後感を
述べてみます。
M女の高村浩子
さん。このとこ
ろ連続的に通信
を出しておられ
ますが楽しく毎
月拝見していま
す。小柄で愛く
るしい貴女の長
い黒髪、ボリュ
ームのある形の
好い乳房等、い

つもながら被虐味あふれた姿態。
私は貴女のバスト・ラインに惚れ
込みました。もっとも私のような
中年のジイサンでは惚れられても
貴女は少しも嬉しいことはないで
しょうけれど。

次は『ピッコロ狂詩曲』で登場
した佐野みさ子さん。貴女が四十
五年十一月号に八あるM的妊婦の
告白Vというタイトルの随筆で姿
を現わされ、私共マニヤに大きな
期待を抱かせて下さいました。翌
年一月号では、臨月腹のプレイフ
ォトを観賞させてくれたり忘れら
れない人です。それ以来「奇クサ
ロン」では、よくお見かけしまし
たが久方振りの本文登場ですね。
ロマン派生氏の手際のよいプレイ
が、フォト・ナンバーと解説文と
で手にとるように判り、大変興味
深く読ませて頂きました。今後の
御健斗を祈ります。

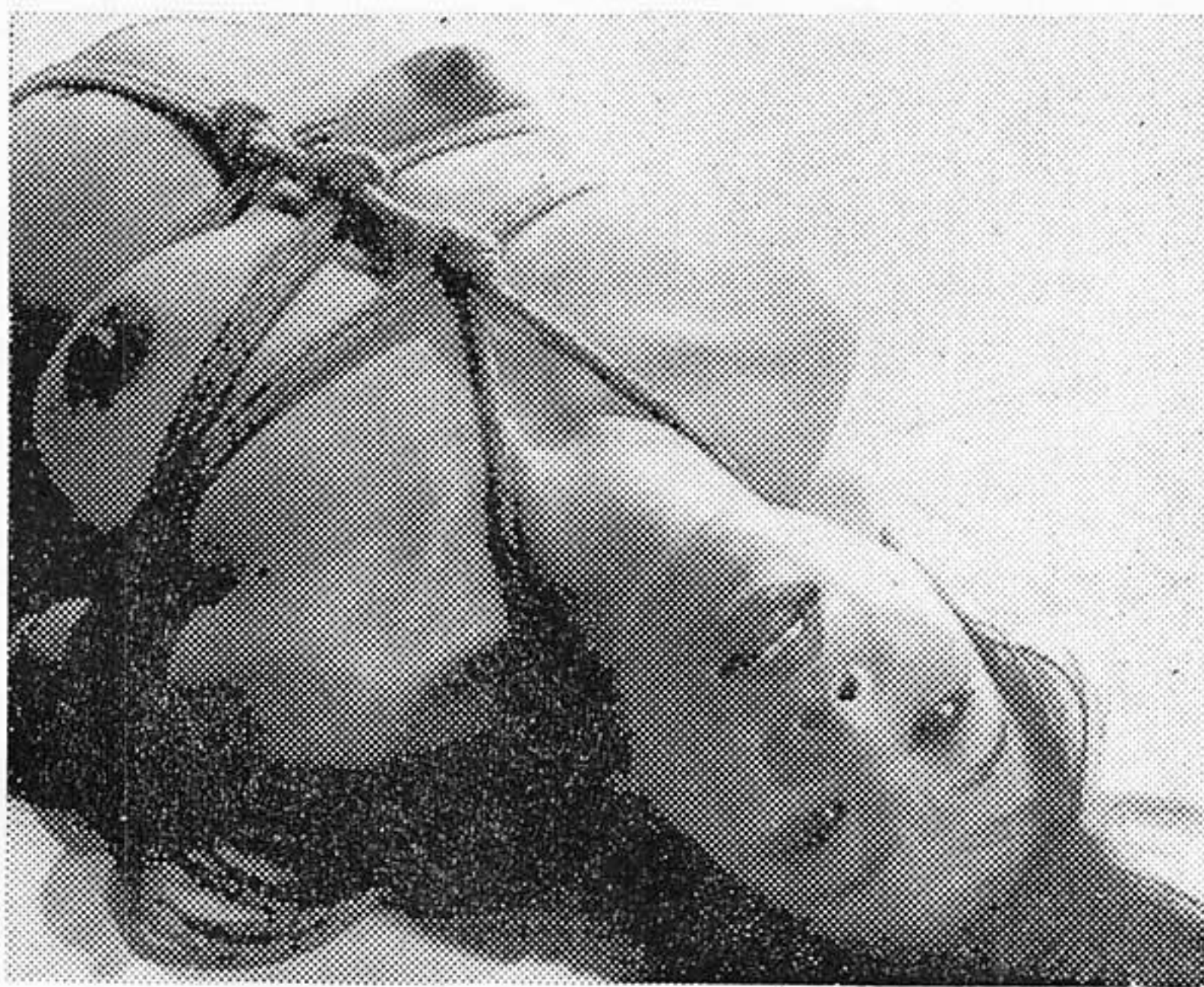
さて、私にとっては今月のハイ
ライト、大ホームランともいうべ
き快挙を福井さんがやってくれま
したね。二月号、三月号と連続し
て誌上に登場している写真で、妊
娠しているのではないかと思っ
いた予想がズバリ当たり、心の中
で快哉を叫んでいる次第です。
福井桃子さん、ご妊娠おめでと

う。私は、かねがね貴女のボリュ
ームのある美しい姿態に接して、
ほのかな慕情を抱いていました。

肥り肉の柔らかい肌に、ぐっと喰
い込む縄目に、フェミニストの私
は、さぞや痛かろうと余計な心配
をしていました。妊娠されたから
には、なるべく無理をなさらぬよ
うに、お体に気をつけて下さい。
とお願ひする反面、是非共、臨月
腹プレイを考えると考えるマニヤの虫の
よさ。どうかお許し下さい。早速
分譲フォトも申込みました。やは
り、直接、印画紙に焼付けた写真
の迫力は抜群ですからね。大切に
私のマスコットとして、コレクシ
ョンするつもりです。

五月号にも八美美代のお喋りV
を掲載して下さいることを、福井桃
子さんに望みます。次号の出る頃
には二人目のママさんになってい
らっしゃることでしょう。可愛い
いお子さんが生まれますよう祈っ
ております。

次は、奇ク名物の『カメラ・ハ
ント』塚本鉄三先生の八カメラ・
ルポVと、いずれがアヤマかカキ
ツバタ、辻村隆先生の才筆は、い
よいよ冴えて、ファンを文中に引
き込む巧みさは他の追従を許さぬ
ものです。その上、今月号のモデ



ルの喜多夫人は、私好みの△肥満体Vで全く嬉しい。辻村先生と同様、私の男性はノータッチ。夫人は初めての体験の方にしては相当勇気のいったことでしたね。三枚目のフォトなどは、先生が大変ハッスルしている様子がよく写されていて、なぜか羨ましく思いました。フォトで拝見したところでは夫人は肥った方に珍しく均整がとれていてボディの肉付きの素晴らしさに比べ、下肢がスナリし、外人に多いタイプで結構なプロポーションです。

羞恥縛りの感じは初体験のせいか、よく出ていると思いました。妊娠を恐れているようですが、私共マニヤのためによりしくお願い致します。

最後に△奇クサロンVで、みゆき夫人のことをリバイバルで希望されている大原女生氏へ。私とよく似たペンネームを使っておられることと、同好の士としての親しみからお知らせします。夫人のことは、辻村先生が四十一年十二月号に、みゆきの妊婦シリーズ七カ月『命ふくらむ』と、新年号は先生御多忙のため、御主人の増田喜代司氏が八カ月、二月号は再び先生が九カ月目の夫人の撮影状態を

お書きになっています。

臨月は双胎のため、何時出産が始まるか分らぬから編集部のカメラマンが撮影されたそうです。以上のことから判断して、先生は立会っていないと思います。四十二年五月号で最近登場しておりませんが、この道の大家同好者の瀬沼四郎氏がお書きになった『オメデトウみゆきさん』というタイトルで、双胎臨月腹の分譲フォトの解説記事を載せています。

私も先程申し述べた通りやはりマニヤとしては、少し金が掛かってても鮮明な印画紙焼付の分譲写真の本誌と対比しながら楽しむのが真のマニヤではないかと思っています。

私は今、手元にコレクションした数十枚の妊婦物の逸品を眺めて悦に入っています。といって私もビンボー神の親類、財布の底をはいた小遣をさいて求めたもの。内外のフォト誌、本など百点あまり、これもみな妊婦物ばかり。好い物は好いのたえ、私は小遣いの総べてを回しても、マニヤとしてのコレクションには注力する考えです。

では又、誌上でお目にかかりましょう。

夫婦プレイに思う

土田 純

四月号で

阪東太郎様の嬉しいお言葉を頂いて

感謝です。奥様の出産後、育児

優先でプレイは不満足のご様子。

私も夫婦も、プレイ中に子供が

泣き出し、大急ぎで縛ったロープ

を解いたということが幾度もあり

まして、現在の阪東ご夫妻のご様

子が、よく想像出来ます。でも、

今振り返ってみると、これもまた

楽しい思い出で、夫婦だけの、よ

い笑い話となっています。

その意味で、阪東様も他にモデ

ルを求めるより、奥様とご協力さ

れるほうが……とも思います。奥

様のプレイ・フォトに期待し、憧

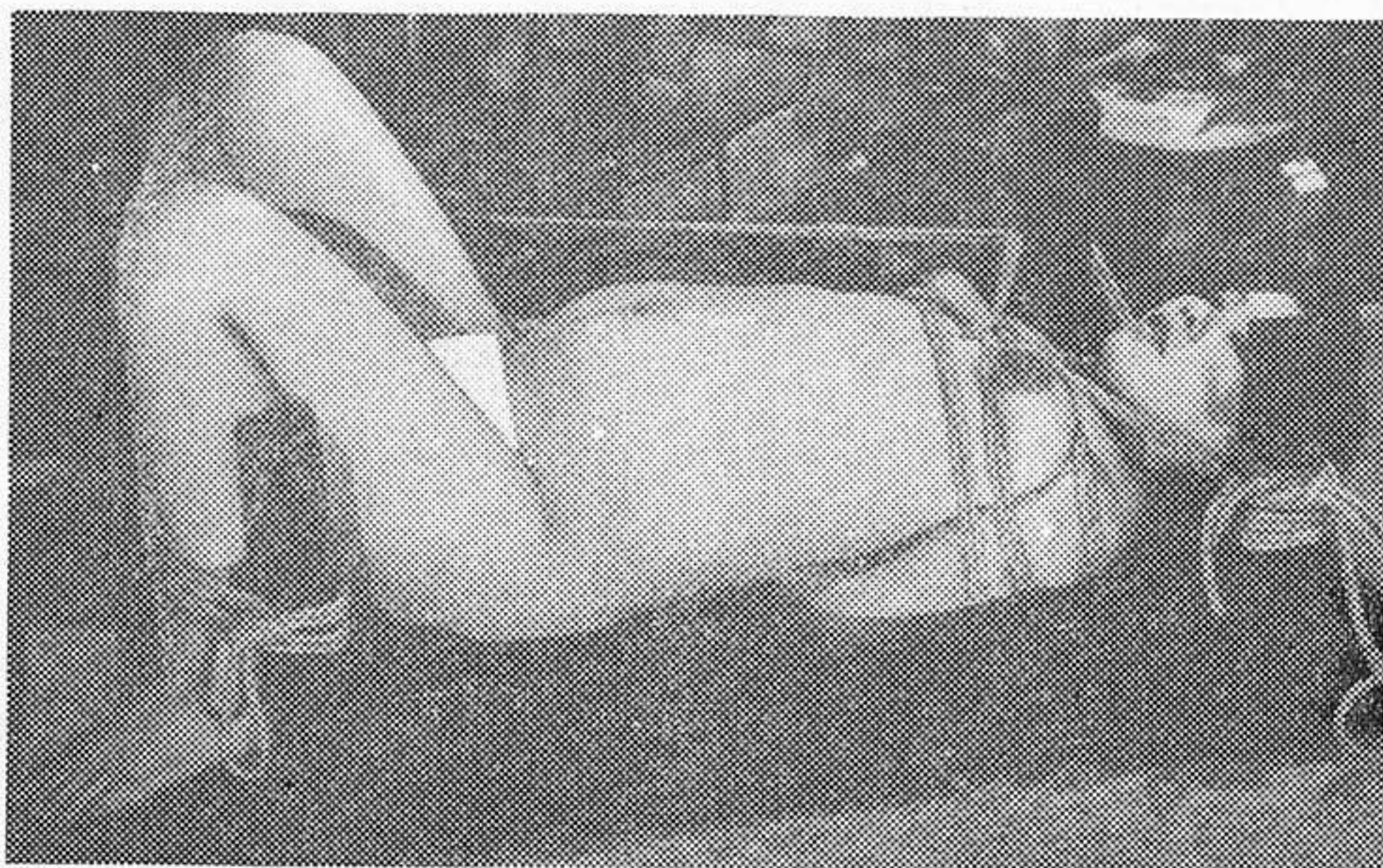


れを抱いているのは、私一人ではないでしょうから、今後とも阪東夫人ファンを失望させないで頂きたいものです。

私も夫婦も、昨年三月号に初めて採り上げて頂いて以来、幾度かの拙い作品に対し、数多い同好者の皆様から嬉しいお呼びかけやご批評を頂き、この一年間、本当に満ち足りた、幸福な日々を過ごすことが出来ました。特に紀川正信氏に知遇を得られたこと、又三月号で井上浩様のお呼びかけなど感激です。

四月号を読んで……マダム芙美代の蛙腹に驚く

大原 女生



四月号の奇クサロンに、小生がおそろおそろ投稿した拙文が堂々と活字になってのっているのを見て、大いに感激しました。二月号の、辻村先生のカメラ・ハントに登場した妊婦（といっても七年半前の追憶談ですが）に刺激されて、つい見さかいなく書いてしまったもので、内容は、本当にお恥ずかしいようなものです。それが増田みゆき夫人の巨大な臨月腹の写真まで添えていただいているのですから、全く言うこととはありません。メロンと言うよりは、まるでとてつもなく大きな西瓜のような半球状の腹が、おそらく広角レンズでク

ローズ・アップされて、完全に圧倒されました。そして、なおさらのこと、増田みゆき夫人の双胎臨月腹ハントのリバイバルを、あらためて辻村先生のSMカメラ・ハントとして切望しないではいられません。

ところで、それはそれとして、昨年十一月号奇クサロンのハダム芙美代の履歴書Vと同時に、本文でもハダム芙美代の告白Vで登場されて以来、月号欠かさず、ハダム芙美代の告白Vという副題で、お喋りと写真とを提供して来られた福井桃子さんが、四月号では突然、ハダム芙美代のお喋り——妊娠したって嘘じゃないでしょVという題で、アツという変貌ぶりを見せ、見事な蛙腹を読者の前にさらけ出して見せられたのには、思わずウーンとうなってしまいました。何という奔放さ、何という大胆さでしょうか。昨年十一月号以降一月も休まず連載されて来たこのシリーズが、突如として第六回目に、このような思いがけない展開を示すことを誰が予想したでしょう。今にして思えば、三月号の写真など、地腹にしては少し大き過ぎるという感じがしますが。（二月号ハ編集部だよりVに「身

体的変化」とあったわけですが、小生もまさか妊娠だとは思いませんでした）妊婦マニアにとって、まさに感謝感激以外の何物でもありません。そしてまた、このシリーズが第七回、第八回……と続くことを考えると、今後二、三カ月にますます大きくなって行くであろう蛙腹の誌上公開が、非常に楽しみになって来ます。大型小型と里まぜて現在、街にあふれているポルノ雑誌、SM雑誌のたぐいがどれを見ても、小生の知る限りでは、はっきりと蛙腹になるまで月の進んだ腹の大きな妊婦を写真した写真をのせているのは皆無で、これだけは奇クの独壇場と言っていいと思うからです。（それに付けても、奇クにカラー・グラビアがあつたなら……と思うのは小生だけでしょいか！）さしあたり分譲写真も出ているので早速、申しこみ、まだ現物は見ていませんが分譲写真の方の続編も、期待しています。

若いうちに妊娠することはそう何回も期待出来ないとい分でも言われるように、せっかく珍しいチャンスにめぐまれたのを、まわりで放っておくという手はないと思います。何なら、伊藤晴雨画伯の

ように、臨月の妊婦の逆さ吊りだ
って辞さないと言われる桃子さん
を、辻村先生以下総出動で、是非
逆さ吊りにしてあげてほしいので
す。「虎は死して皮を残す」と言
いますが「芙美代は孕んで写真を

残す」というふうには、是非そうあ
りたいものです。

一月十二日で妊娠八カ月の後半
と言われるからには、分娩予定日
は三月二十日ごろでしょうか。そ
うだとすれば、一月十二日に撮ら

那津子にとまどう

長田 二郎

本年に入って、奇譚クラブ2月
号、4月号と連続して、城章夫氏
の緊縛プレイ・フォトが掲載され

た。城章夫氏は、今までも度々
那津子という女性の緊縛プレイ・
フォトを発表されているが、その
たびに、私は、この那津子という
女性に、何故となく惹かれるもの
を感じてきた。

嘗て、梨花悠紀子が奇譚クラブ
に華々しく登場してきたとき、私
は夢中になった。彼女の緊縛フォ
トはすべて可能な限り入手に努力
してきた。しかし彼女が奇譚クラ
ブから姿を消してすでに久しい。
だが私は奇譚クラブに出現する女
性のフォトに常に注意し、ときには
梨花悠紀子の幻に夜の明けるの
を忘れたこともあった。そういつ
た私の日常にとって、城章夫氏が
発表される緊縛フォトは、一種の

オアシスともいうべき、すがすが
しい印象を私に与えてくれたので
ある。

本年2月号の奇譚クラブは、城
章夫氏の長文と多くのフォトを掲
載してくれた。私が今まで、何故
となく惹かれてきた那津子の、種
々の角度からのフォトは、私に、
更に一種の憧憬ともいえる深い感
激を惹き起こしてくれた。そして
4月号には、その第2弾である。
城章夫氏が那津子のフォトを惜し
げもなく、私達読者の前に公開し
てくれたことに、厚い感謝の気持
を捧げたい。

那津子のフォトを眺めながら、
私はつくづく考える。女優八千草
薫のデビュー当時を想起させるこ
のいとけなき女性の、縄をまとい
カメラと向かい合う時の心のうず
きを……。

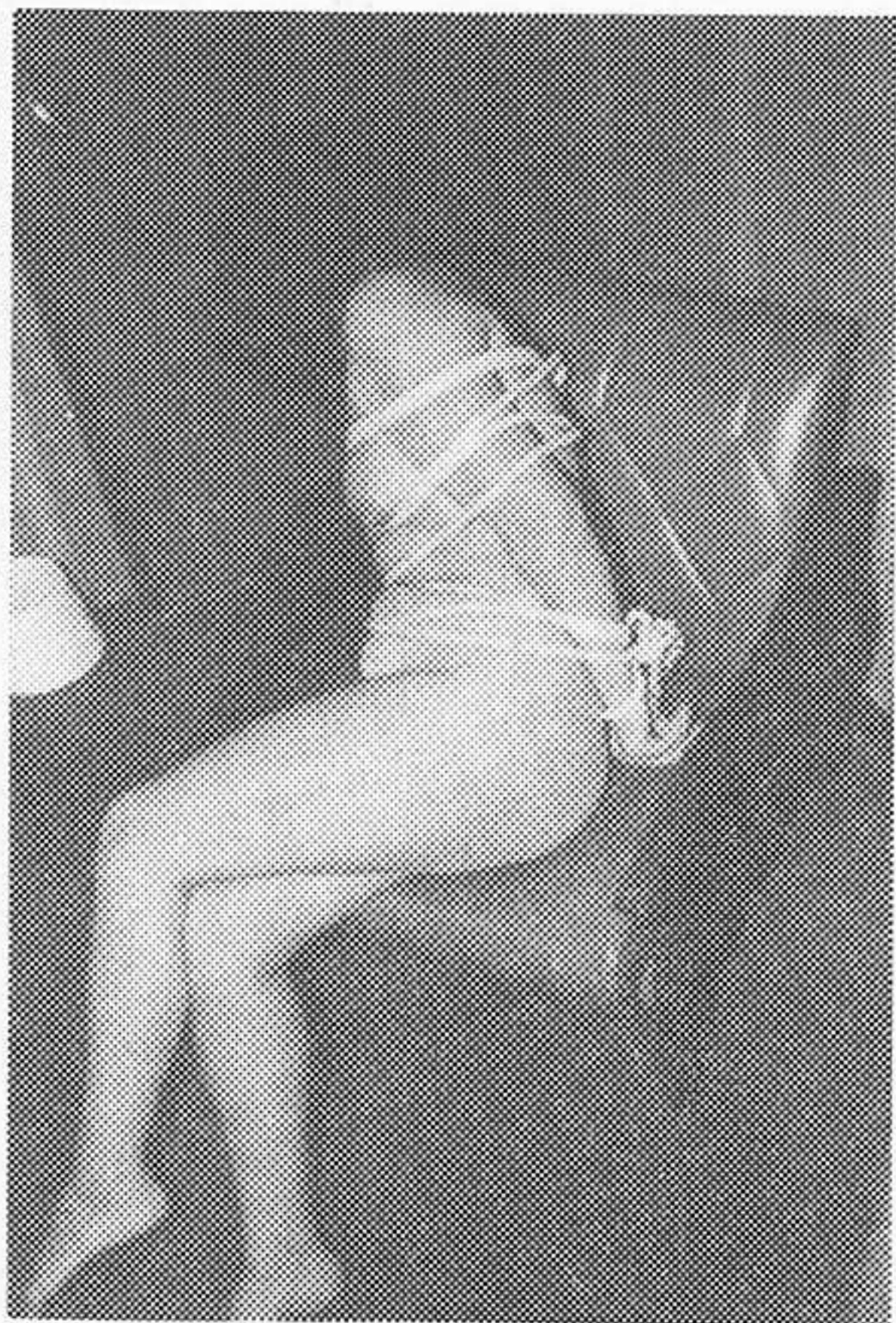
れたという写真が、予想外に大き
な蛙腹ぶりだというしかありませ
んが、時期を失しないうちに、早
く……という気がします。桃子さ
んの全面的な協力を得て、今度こ
そ、完全な臨月妊婦の逆さ吊り写

真の実現を心から望むものです。
そしてもし可能なら、次の臨時増
刊号のカラー・グラビア第一ペー
ジを飾って、世間をアツと言わせ
ることが出来ないものかと思いま
す。つまらない事を書きました。

城章夫氏の文章も私は好きであ
る。辻村氏、塚本氏の文章が、ど
ちらかといえば油っこく、いささ
か露出過剰気味であるのに比して
城氏の文章は淡彩である。やや物
足りなく感ずる読者もあるかも知
れない。しかし私には、那津子と
いう女性を描くには、城氏の文章
の味わいの方がピッタリする。や
はり長年コンビとして、フォトを
撮りつづけてきたカメラマンなら
ではの文章ではなからうか。もち
ろん、度重なる奇譚クラブへの発
表により、那津子の気持も変化し
その変身はフォトにも現われるも
のと思うし、城氏の文章も又濃厚
となるであらう。氏は言っておら
れる。「那津子は少々瘠せ気味。
緊縛モデルとしては、もうちょっ
と肉がついてもらいたところだ
が……」しかし私は、城氏には失
礼かも知れないが、緊縛モデルと
しては十分ではないかと思う。私
の恋人「梨花悠紀子」のデビュー

当時は、もっと肉がなかった様に
思う。矢つぎばやの発表と共に、
彼女は大きく変身していったし、
又その変身の経過を楽しく眺めた
ものである。城氏の黒縄と、猿轡
が、那津子の裸身の上で、適度な
アクセントとなって、思わず溜息
のでる様なフォトとなっている。
梨花悠紀子と同様に、いやそれ
以上に、城氏が那津子を飼育し、
那津子が緊縛モデルとして、華や
かな羽ばたきをするのを私は見守
りたい。その変身の経過の記録を
これから発表されると共に、奇
譚クラブとしては、分譲フォトを
計画されることを希望する。

那津子のフォトに、とまどう、
或は梨花悠紀子の再来かと、心中
ひそかに喜び、若し分譲フォトの
発表あれば、久し振りに、フォト
コレクションの楽しみに溺れるこ
とができるのではないかと、あら
ぬ空想を描きつづける老青年の繰
り言である。



愛妻弘美の・・・

・緊縛フォト

井上 浩

先日、奇クに掲載されました、三浦敬一様の△愛妻フォトVを真似て私も拙い作品を、お送りします。万一、編集部の方に、お目に止めて頂けるものでしたら、誠にあつかましい事です。御掲載願いたいと思つた居ります。全国の夫婦プレイ愛好家の皆さま。どうか皆さまの△愛妻フォトVを、しどし誌上でお見せ下さるよう、お待ちしております。

懐剣の妻の初夜

井上 則子

愛読者の皆様、お久しぶりでございます。昨年の奇クに「夫婦固めの切腹」「懐剣の妻」を載せて頂きました則子でございます。

あれから間もなく結婚致しました私でございますが、ついに、初夜の床で、念願の「懐剣の妻」になれたのでございます。

婚約中に誕生日プレゼントとし

て彼に買って貰った、おもちゃの懐剣を用いたのですが、刀身は竹製。ですから、その切先は僅か三センチほどですが、その時の激痛は筆舌に尽し難いほどのものでございました。

この、私にとって記念すべきプレイの詳細を、何とか文章にしてみたいと思ひ、ペンをとるのですが原稿用紙の紙屑ばかり作ってしまひ、いまだに纏っておりません。結婚一周年の記念日までは、どうにかして奇クにお送りしたいと思つてがんばってはいますが、ず

いぶん気の長いはなしだと、ひとりでおかしがつております。

私のプレイに対する夫の評判は上々でございます。以来、私共夫婦の愛の交換は、必ずといってよいくらい、私の切腹プレイで始められることになってしまいました。そればかりでなく、この頃では夫の手に握られた懐剣で、私の肌にプレイが加えられることもございます。

初夜のプレイでの衣裳も、たいへん夫の気に入ったそうでした。昨年七月号で御紹介下さったミニ

の紅いお腰巻は、あれ以来、私の下着として定着してしまいました。が、上には、もちろん和服を着ます。ですが、デパートの呉服売場の経験もありますので、一般の若い方のように、和服で過ごす生活に苦痛を感じるようなことはございません。

ただ、恥ずかしく思うのはお風呂屋さんに行く時です。この頃はもう、だいたいは致しましたけれど、着物を脱いだとたんに、紅いミニのお腰巻一枚の素肌が、同性とはいえ人眼に触れてしまうのには、たいへん恥ずかしい思いをしました。

もう一つ恥ずかしかったことがございます。やはりお風呂屋さんででしたが、プレイの後のミニズ腫れがハッキリと、下腹に十文字についていたのを、ご近所の奥様に見つかってしまった時でございました。私は顔を真赤にして、その場から逃げ出しました。

我が肌に突き立つ刃その妻になりてうれしき夜毎々々に行き今日この頃でございます。あの記念すべきプレイのご報告を、がんばって書いてみます。

(井上則子、旧姓浅川)

まりこの替歌

北川 まりこ

マゾ女ワルツ

(芸者ワルツの替歌)

- (一) あなたに観られて 帯解く夜の
部屋の灯りの なやましさ
生れたままの 裸に剥かれ
今夜のお仕置 どんなに辛い
(二) 早く脱げよと あなたに急かれ
肩から落とす 長襦袢
せめて最後の 一枚だけは
許して頂戴 おねがいだから
(三) やはり駄目ねと 眩きながら
お湯文字ずらす はずかしさ
一糸まとわぬ 全裸のあたし
そんなに见ないで 瞋めちゃ嫌
(四) 両手を背中に お縄をねだる
マゾのおんなの あさましさ
全裸のこの身が 羞かし嬉し
縛るも打つも お好きにどうぞ
(五) あなたの鞭に この肌燃えて
浣腸責めの せつなさよ
この身捧げた 今夜のあなた
お気の済むまで 虐めていいの
(六) 乳房に喰い込む 荒縄受けて
ハダにゃ無数の ムチのあと
あたしの体は あなたのものよ
もっと虐めて お好きなように

桃子取材に対する願望と提案

国川 栄一



テープ・レコーダー利用の福井桃子の告白やお喋り編集は十一月号を皮切りに毎号、愛読者好評のうちが続いており、その桃子の妊婦腹は多くのマニヤを感泣させたことは間違いない。半年にわたる桃子の独り言は魅力的な女性であるだけに飽きはさらさら感じさせられないが、積極的な女性とは云え、根は女心ゆえに好評この上もないパロディ「花と蛇」や「紫蘭の門」に迫る力はなく、また、最近の女臭匂うが如き辻村隆節に肉迫するを期待するのは、ちと、酷である。

このまれにみる美女をより生かすために私は対話形式によるレポートを提案する。
女性だけがもつ感情の領域に遡り、羞恥という宿命でもって意志が求める快楽の耽美を心ならずも抑制する。
彼女が意識の外に知らずして培養し続けている禁忌(タブー)の思想を巧みなマニヤとの対話によって引き剥がしていただきたい。
巧みな誘導尋問によって今迄に語ったこともない彼女の被虐願望の心の奥底を、そして燃えさかる彼女の成熟した肉体の秘奥の深淵

までも彼女が語る時、マニヤはSMの極致に一步、近づくのである。

自然の中にあつて、性は種族繁栄の、手段であり、獣達は、天しんらんまんに、交わり続ける。人間だけが快楽の道具として性を知った。しかし、反面、それは性の悦びを抑圧した。人間の求める性の究極は思考する欲望に変化した思考の悦びSMが誕生したとも考えられる。

桃子の全裸を、どのように美麗辞句で美化しようとも、あの、ねっとりした魅力的な美しさは性そのものであり、羞恥の女体そのものである。

美しい単語で修飾するよりはむしろ、私は桃子という希有の美しいSM女を通じて欲びをえたいのである。巧妙な対話によって桃子の妊婦としての羞恥をかりたて、あまつさえ、そのねっとり色づき、妊娠婦特有の愛液で、ぬめった唇を拡張、うるおうのを見とどけてみたい。

SMが求める究極としての性の深奥はSMの思考であり、その媒体が桃子のような感じの女性である。



Ⅱ／第九十五回Ⅱ

辻村

隆

衝撃の告白『桎梏より遁れて』を送ってきた岸悠子さんの原稿を編集部に戻送して掲載されたことは、既に御存知の通りであるが、昨秋以来、今にも来訪するようない便りを寄越してきていた夫の岸英雄氏が、私のしばしばの要請にもかかわらず、次第に連絡が遠ざかり、ここもう二カ月近く、便りがなくなっていた。九月来訪が十一月に伸び、十二月となつて、遂に約は果たせず、年が変わってからパタリと便りが止まってしまったのである。

堅く約束しておきながら、履行出来なかった心苦しさが、自らを責めて、手紙を書くのが辛くなったのかも知れない。

彼と彼女の、再会の当初は、歎びの余り、プレイの再婚旅行をす



それが、彼の新しい職場での仕事と、生活や住居のことで、一日伸ばしにするうち、いつしか熱がさめてきたらしかった。

狭いながらも愛の棲家をみつけ熱愛する二人が、誰にも邪魔されず、蜜のような生活をつづけたとすれば、何の要あって、わざわざ費用を使ってまで旅行する必要があるのだろうか——という風に、変化していったのではなからうか。

私の、そうした想念を裏書きするかのような、彼の便りが、昨日ひょっこり舞い込み、便箋一枚の簡単な近況と共に、最近撮ったという、悠子さんのフォトが三葉、同封されてあった。

訪問の不履行を詫び、最近やつと仕事に慣れて面白くなり、忙しくて、有給休暇もとれぬためと、理由をしたためてあり、悠子さんは、洋裁の傍、近くのスナックにパートタイムで働きに出ていると書いてあった。

三日にあげず、強烈な緊縛プレイを愉しんでいるが、そろそろ飽和状態的な行き詰まりを感じている。若し上京の節は、是非お立ち寄り願って、緊縛を愛妻悠子に施してやって欲しいと、反対に私の上京を期待している風であった。

自分以外はイヤだというのが、上京の暁には、必ず悠子を説伏させますと結んであった。

夫婦プレイの実践者の、誰しもが一度は突き当たる壁に、岸夫妻も例外ではなく突き当たったようである。

SMのプレイは所詮、激しい愛情や汲めども尽きせぬセックスライフとは又、別ものである。いかにプレイが烈しくとも、緊縛に変化があっても、いつかはマンネリズムに陥ることは、一対一の男女である以上、それは必然的なものかも知れない。岸悠子さんと相逢う日は、又しばらくお預けになりそうである。

三葉のフォトのうち二葉は、プレイが烈し過ぎてどうも掲載には不向きだし彼に文句をいわれてもいけないので、緊縛に重点をおいた一葉を、悠子ファンの方のために発表させてもらった。

× × ×

二月二十五日の朝、和歌山県の白浜温泉に近い、椿温泉の椿グラウンドホテルが全焼したというニュースをきいて、私は感慨無量であった。

古い読者の方なら御記憶かも知れないが、私は、この椿グラウンドホテルを舞台にして一篇のカメラ・ハントを書いているのである。

(昭和四十三年一月号『野猿と戯れる少女』三浦一美、及安井邦臣喜久子夫妻の巻)

椿温泉から程遠からぬ伊勢ヶ谷という、野猿の棲息する地へ散策にいった時、偶々出会った一少女が三浦一美であって、今から考えれば、ハントにするのもお恥かしい程度のフォトしか、撮っていない。

この椿温泉のグラウンドホテルへ一緒に出掛けたのが、外ならぬ安井夫妻であった。夫婦プレイのハシリのような存在で、あのハント以来、編集部でも大いに乗気にな

って、安井喜久子夫人を撮りまくって、夫の安井邦臣氏も、喜久子夫人の恩恵を受けて、確か、四、五人ぐらゐの緊縛モデル女性と、プレイしたらしかったが、すっかりそちらの方へ熱を上げだしたためいつしか私と彼とは、別段、喧嘩別れでもなく、自然に疎遠になっ

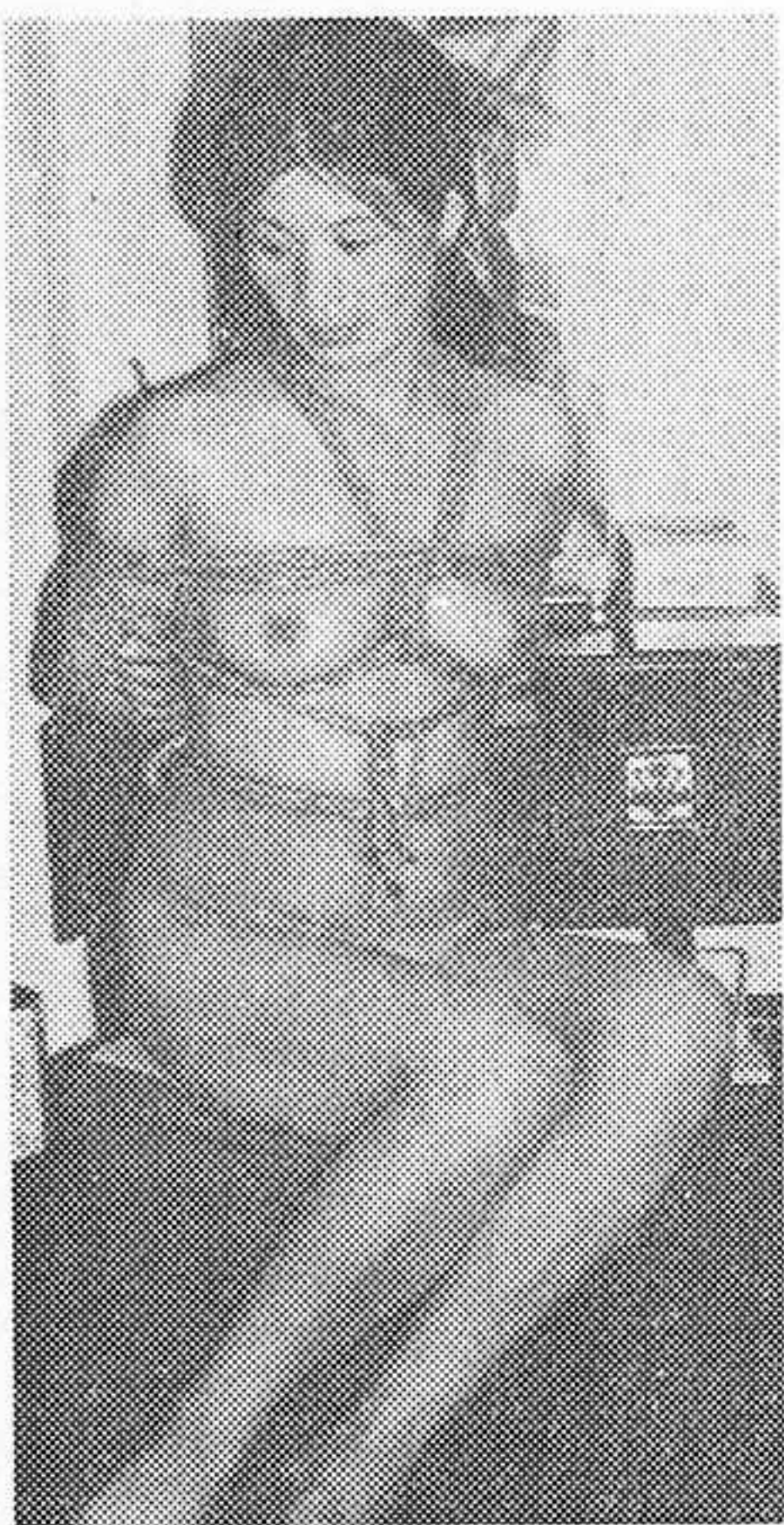
ていったのであった。私の車に彼等夫妻をのせて、椿温泉へ出掛けたのは、昭和四十二年の十月中旬で、そのころ、よくテレビでも宣伝し、ハワイ・仲の浪花節調で(浪の瀬音を枕に一風呂浴びるコンコロモチは、ああいよ)と唄われていた。

旧館の四階の部屋から、眼下に大プールを見下ろし、私達は、白

浜の景観にも似た、ミニ千畳敷へ遊歩道を伝って散策し、白く砕ける波濤の彼方の、壮大な展望に堪能し、その夜、激しい緊縛のSMプレイを繰り広げていたのであった。

その思い出のホテルも焼けて今はない。若し、あの夜の烈しいプレイの、緊縛のさなか、火災に会っていたら、私達は、どんなに周章狼狽したことだろうと、フト冷汗めいたものが胸をよぎり、プレイの場が、いつもホテルの密室だけに、他人事ならず、不意の災厄ばかりを想像するのであった。

嘗つての名画「舞踏会の手帖」ならぬ、過去のハント女性の、その後の追憶を求めて、数々の女性



を巡礼し、その一部は、昭和四十四年の十二月号で『追憶の甘き花びらの群れ』と題して書き始めたが、ハント全女性との、再会の至難に諦めて、挫折したのであるが安井喜久子夫人とは、昭和四十五年の二月頃、彼女の自宅で再会して、私のために、彼女は快く、昼下がりのひととき、数種の緊縛フォトを撮るのに協力してくれた。いずれ、数人のハント女性と共に発表しようと、筐底に眠らせ、遂に発表する機会もなく、埋もれさせてしまった。

その折のことを、精しく書けば続・安井喜久子の巻として、一篇のカメラ・ハントにもなろうが、既に旧聞に属してしまった。今は唯、その時の夫人の、あの秀麗柔肌のフォト一葉を以て、今ひとつたび、彼女を偲ぶ、さすがにしてみたいのみである。一本、一本を毛抜きで抜きとり、二度と繁茂することのない夫人のすべやかな秘丘が、ことさらに強い印象となって私の脳裡に灼きついている。

× × ×

女性のセックス年令は、年毎に伸びているようである。テレビで拝見する、高峯三枝子、山口淑子、月丘夢路、森光子等の皆さんは、

確かに私と同年輩前後の女性であるが、等しくお色気横溢して、益々お若い。

五十才を過ぎて、生理のある女性など、当今はザラであるらしく先日、本職の方で、ある国立の病院の、臨床検査の技師の先生と四方山話をしていたら、面白いことをきいた。

近頃は、予防医学の立て前で、ガンなどの早期発見の検査を受ける女性が非常に多くなってきて、最も多いといわれる子宮ガンにしても、病理の解明と共に早期発見出来るようになり、早いに手術すれば、十中八、九までは治癒するそうである。

子宮頸官の分泌物を採取して、アルコールで固定したスメアをつくり提出するのであるが、プレイ用にも近頃登場した、ギネのクスコ（アヒルの嘴状の開拡器）など手許にあると、医師の手をかりなくとも夫婦の仲で採取出来る。

ガン年令は、大体四十才前後から更年期の人に多いが、その標本の中に、しばしばザーメンが固着しているのを発見するというのである。成程、セックスの後始末はしても、それは手の届く範囲に過ぎない。ウテルスの入口近くまで

は、到底、払拭しきれないのは当然で、分泌ぶつに、チャンと混じっているというのも、うなずけることである。

時によって、六十数才の御婦人のスメアに、ザーメンを発見してやはり昔から、雀百までの例え通り、この年令にしても、やはり燎らかに、セックスを実証するものが附着しているのかと、可笑しくなり、くだんの先生、曰くに、五十才は鼻タレ、未だ未だいけると、肩を叩くのであった。

別段ハジでもないが、こうした分泌物の検査を提出する同好の方の奥様は、マジメくさって診断をきいていても、ウラには、前日、あるいは前々日の、夫婦の愉しき「きわみ」を知られていることを心に刻んで、病院にお出でになるべきであろう。呵々。

女性のセックス年令の伸びた実証、よってくだんの如しである。

× × ×

ポルノ攻勢が、このところ烈しくて、日活映画を皮切りに、ポルノ女優を紹介した火石プロ。関西ではモデル幹旋業。ミナミの名物秘密クラブショウと、身辺まことに慌しく、カメラ・ハントを書く私にしても、実の処、戦々競々で

ある。数年前のハント記事にくらべて、確かに近頃は、私のハントもポルノ的になっていて、四囲の情勢と共に、かなりキワどくなっている。

一体どのあたりまで許容されるのか見当もつかず、何となく心冷えてソワソワし、折角書いたカメラ・ハント余聞「逆吊り考現学」一〇〇枚も、その俚じつと抱え込んで編集部へ送ってはいない。

筆も鈍って、いつしかおとなしくなり、今月号のカメラ・ハント石田敦子の巻も、もう一度、強烈なのを撮ってから発表しようと思っていたが、あっさり書き上げてしまった。

独自の愉しみで、コツコツと、長年に亘って蒐集してきた、SM関係の文献、フォト等も、つまらぬことで引っ掛かって、参考品にゴッソリ持ち去られることを懼れるからに外ならない。

奇クに書いている方でも、自分の正体を現わした人は、今は本誌より姿を消した鬼六先生と私ぐらいのもので、それ以外は皆無の実情である。

隠れ蓑を着て、こっそり書いているから、少々ドギツク、露骨でも、いざとなれば遁蔽出来ようが

私の場合、そうはゆかない。私自身、何も売名的でなくても永年この道一筋でくると、いつしか、かり出され、好むと、好まざるにかかわらず、映画、テレビ等で、我が顔が曝されてしまう結果となり、ええい、こうなりや俚よと、ハントのフォトにも、むしろ、実証の如くに、我が醜態を、さらけ出して、自虐めいた感懐に浸ったりにしているのである。

しかし、SM面に目をつけられたら、一番に飛火してきそうな危険を孕んでいるだけに、この際、一寸、自重せざるを得ない状態である。

ポルノ解禁は秋などと、誰がい出したか知らぬ噂を、まにうけかなりキワどく書いて、正直に告白してしまつて、今頃ヒヤヒヤしている。

ハント、一向に面白くないぞと笑わば笑え——。実害を蒙るのは私であるとすれば、これをつづける以上は、否が応でも、幾分は、控えめにならざるを得ないのである。

いっそ「辻村隆」を抹殺してやろうかと、そんな気にすらなる昨今なのである。

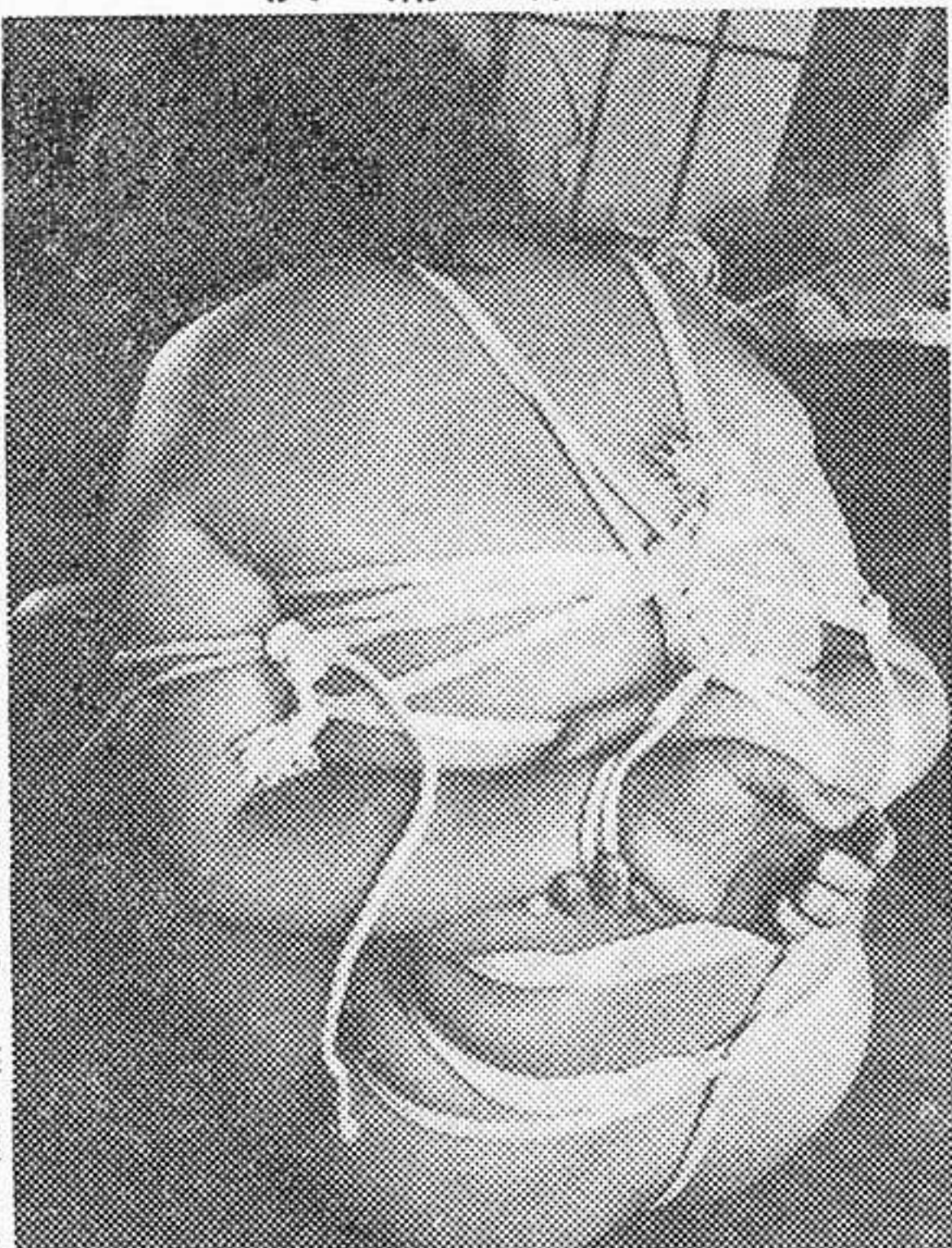
私の近作を語る

浜 浦 順 一



一年周期の仕事をしておりまして、やはり年度末は何かと忙しくて自分の時間もうくれないような

始末です。私にとって最も楽しみなS Mプレイも、ここ暫くおあずけでホッと一息つくのが奇クが発



売の日です。

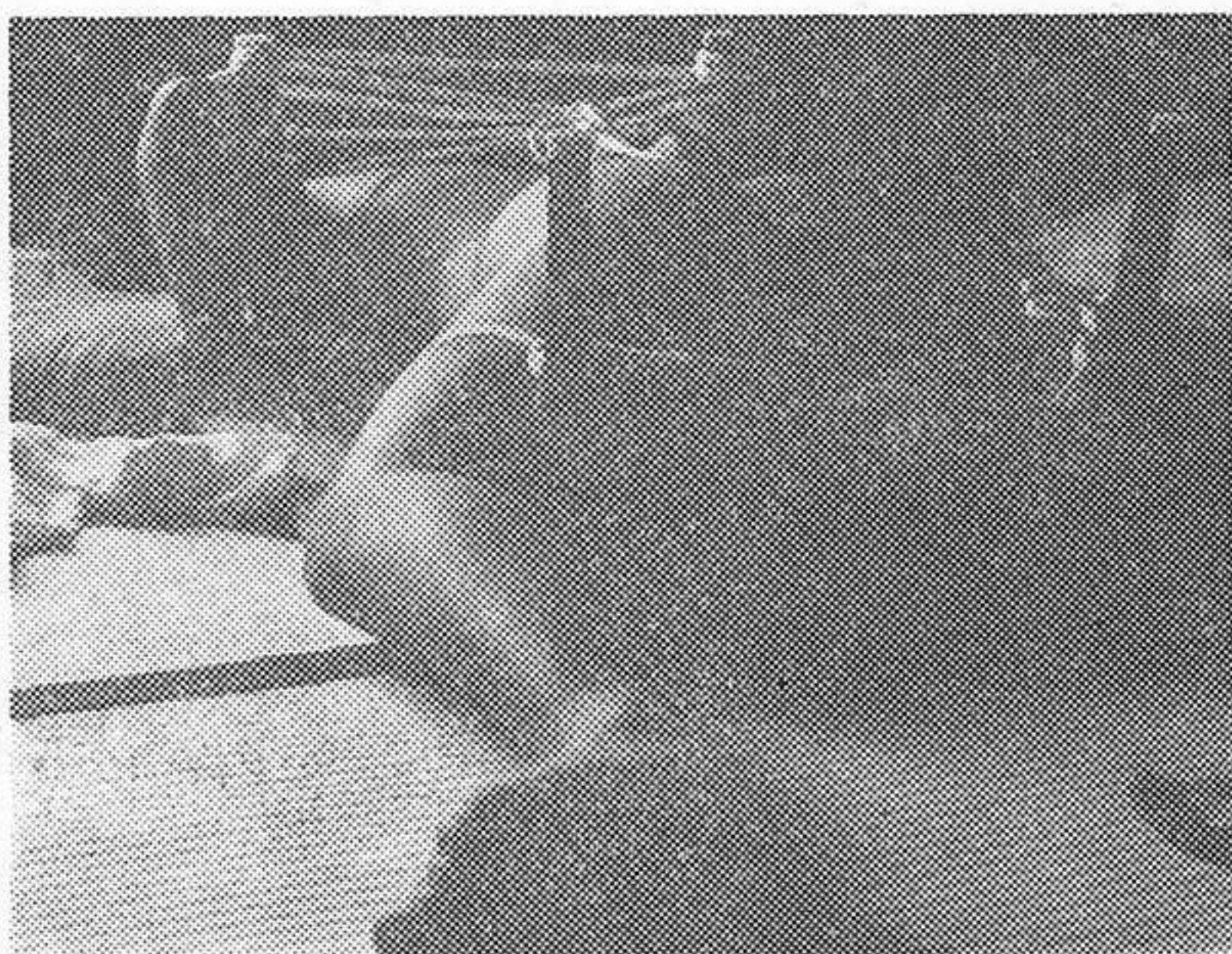
「奇クサロン」で読者諸氏のかずかずの発表をうらやましく拝見しておりますが、三月号の井上浩様には、私のお粗末な記録をお目にとめていただき光栄です。

35ミリカメラだけしか使用しませんが、S R T 101 28%付かペンタックスSPを手持ちで35%付スプリングモーターのコンパクトを定位置に長尺レリーズ、照明はレフランプとストロボです。

緊縛が主眼です

から大きく移動することもありませんのでアングル、フレーミングは手持ちのカメラで、時間的変化は定位置のものでと、なまけ者の私でも、この方法で何とか、やれます。

ライティングを直径2メートル程の範囲内でワンタッチで移動できるよう製図用スタンドを改造し



てレフランプを使用していますが多灯となると意外にわずらわしくて計画倒れでした。

現在アパート住いで暗室がなく仕上げも満足なもの出来ませんが、下手は下手なりにマイペースでやっております。数葉の近作同封しましたので御意見等いただければ幸いです。

中川英子氏の手記
「被虐と浣腸の幻想」に寄せて

渡川 真

私の頭の中にめくるめくものは
いったい何であろうか。

今、読み終えた一編の告白文に
よって言い様もない恐ろしさが身
体中の毛を逆立てる。

いつも奇クを読み終えた時、独
身者の私にとって一種の羨望まじ
りにも似た感情が起るのだが、
今回は違う。

何か大きな声で天に向かい叫び
上げたい気持でいっぱいである。

フィクションと言うものは例え
それが真実味があるとしても所詮
フィクションでしかない。しかし
たどたどしい文であっても、それ
が全くの事実であるとすれば、そ
れは、すでに何篇かの名作品によ
っても書き現わせないものがある
はずである。丁度一枚の報道写真
が事件の全てを物語る様に。

三月号△手記▽による中川英子
氏の「被虐と浣腸の幻想」を読ん
だ感想である。

一人の女性というものは、いつ
たい何処まで可能性があるのだろ
うか。夫が医者であった事も一般

女性と異なった人生経験を送った
事になろうが、問題は夫が医者で
ある事実のみでなく、女性が一人
の男性によって、こうまで変わっ
てしまうという事実である。

誌面に夫婦交換等に夫人側から
呼びかけをしている場合もあるが
しかし、その場合でもキツカケは
ほとんど男性が出し始めではない
か。話が横道にそれてしまったが
中川英子氏は文中、医者の妻とし
て人間の生理に対して「神の見事
な芸術作品」と言い切っている。

しかし芸術作品たる人間は粘土
の様にまた形を変える事によって
芸術価値が向上するのではなく、
そのままですでに完成品である事
を忘れないでほしい。神の創造に
よる完成品である人間を人間によ
って（医者によって）作り変える
事の恐ろしさ。おそらく私が中川
氏の告白文を読み終えた時に戦慄
に近い恐怖を覚えたというのは本
質そのものを変えてしまったとい
う事以外にない。

私は奇クを愛読して10年以上に

イメージ画 「無情の窄衣」 黒田 縛



なる。もちろんSである。

長い間には「花と蛇」の様な名
作も生まれ、貴重な体験談も耳に
した。くり返すが、それ等もフィ
クションであれば創造力の豊富さ
として受けとる事ができる。辻村
氏がいつも言う様にSMはプレイ
である。しかし人間の機能を作り
変えてしまつては（本質的に）も
早やプレイと言えるだろうか。

以上、思いつくままに述べたが
決して彼女を非難するつもりは毛

頭ない。すでに矢は放たれたので
ある。もし彼女にその意志があれ
ばもっとくわしく発表してほしい
と思う。何故なら彼女は奇クであ
ればこそ発表できたのであり、そ
の辺の三文誌等では到底、告白す
る気にもならず、一生、彼女の心
の底に眠りつづけたであろう。
奇ク誌たる所以がここにあると
思う。次文を期待してペンを置き
ます。

△以上▽



深田菊子を謳う

広島一騎

キクに咲く花かずかずあれど、
なぜか惹かれるキク一輪。特別美
人と思わぬに。べつに好みじゃあ
りやせぬに……。

ニクさもニクしわが胸に、無断
で根ざせしこの麗花。妖しき香り
撒き散らし、不思議な魅力でなや
ませる……。

牝豹のようにしなやかな、柔き

肢体の躍動美。この目をうたがう
身のこなし。うしろ手縛りにされ
ながら……。

前髪越しにキラキラと、われを
挑発するような、妖しき眸のかが
やきは、ここまでおいでのウイン
クか……。

無断侵入したうえに、大胆不敵
な振舞いで、わが魂を奪いとる。
被縛の美体を誇示しつつ……。

ニクいキクをば手折らんと、縄
を片手に意気込めど、柔肌掴めぬ
もどかしさ。わが胸内に居りなが
ら。今を盛りと咲きながら……。

SM誌氾濫中の奇クに望む

竹 迫 誠 也

最近のSMブームは凄じいくら
いで、SM雑誌類は、むしろ乱作
の傾向とさえ、思う。その中で私
が貴誌を高く評価しているのは、
内容にズバ抜けた特長があると思
うからです。まだ読者として要
望したい点は多々あります。

(1) 発行日が遅いこと。

多くのSM雑誌は、大体二十日
から月末頃までに揃うようです
が、書店に出る頃からいうと、貴
誌は大体二十三、四日で五番目く
らいだと思えます。他誌が早く出
ていれば、読者は当然目移りもす
るでしょう。貴誌も一日を争う気
構えを持って発売日を繰り上げる
ようにして欲しい。私などは、貴
誌の発行が月一回では物足りなく
思っているくらいです……。

(2) もっと多くの書店に出させる
こと。

貴誌を買う場合、私は常に上野
まで出ます。その書店ではSM関
係誌を多く扱っている関係もあつ
て、貴誌の他に数種を買いますが、結
局は貴誌を扱っていない書店が多
いからということになります。私

は書店の内情は知りませんが、内
容の良否を云々するのは書店では
なく読者なのだから、貴誌のよう
なものは、もっと積極的に働きか
けて、どこの書店でも扱うように
して、愛読者が、はるばる遠くま
で足をのばさなくとも買えるよう
にして欲しいものです。

(3) 更に大胆、奇抜、斬新さを加
えること。

四月号編集後記では、コワイ筋
とかなんとか奥歯に物が挟まった
ような表現があったが、コワイ筋
を意識しては良い本は作れな
いでしょう。第一、SMが何故コ
ワイ筋に引っ掛かるのだろうかと思
います。SMは、エロではなく
一種のプレイなのだから、もしコ
ワイ筋が云々するとすれば、誠に
笑止千万なことというほかはない
でしょう。貴誌は読者のためにあ
るのだから、もっと大胆に、奇抜
さを追及して欲しいものです。

(4) グラビア復活のこと。
写真は鮮明度が生命ですから、
グラビアを要望するのは当然のこ
とでしょう。折角のフォトが不鮮
明では何にもなりません。



砂川圭子さんへ
デートの申込み
島田悦史

奇ク三月号の誌上で、貴女に初めてお目にかかりました。(と言っても、私の方からの一方的な初対面ですが)そして、ぜひ知り合いたいと思います。

残念な事に、私は既に三十七才になっており、世の通例に従って結婚もしておりますので、好いたはれたと言ふような事を口に出す資格はありません。ですから、私は、ただ貴女が大変、気に入ったとだけしか言えません。

私は、映画監督を職業にしております。本名を書けば、今年の正

月の二十二日、封切った、ある映画の監督であることが、お分かりになると思います。

私は、これ迄に何度か、若い女性の緊縛フォトを撮ったことがあります。その何枚かを同封しますから、御覧下さい。(実は、もっと強烈なのが沢山あるのですが、誌上なので、ごく初歩的なものだけを入れておきます)

ぜひ、貴女の写真を撮ってみたい。それも貴女が耐えられる、ぎりぎりの線まで責めてみたいと思います。私の好みとしては、女性

に対して肉体的苦痛を与えることより、精神的羞恥を与えることの方を、より好みます。ですから、貴女の体に、傷痕をつけるようなことはありません。

私も、一人の男性ですから、SMプレイから、SMセックスに進む欲望は待っておりますが、貴女が、セックスは望まないなら、幸なことに、私は、自分の欲望を抑えられるぐらいの年になっており、社会的にも一応の地位におりますので(私の職業は、名前が大事なので)決して、無理な行為には走らないことを、お約束致します。

もし貴女が、私とデートしても

良いとお考えになったら、奇クの編集部へ御連絡下さい。私の本名電話番号等を知らせてありますから。

そして、これも貴女の了解があればの事です。貴女とのデートの模様を、写真入りで、この奇クに発表したいと思ひます。又、貴女が映画に出てみたいという希望がありでしたら、三月の中頃から、次の仕事に入りますので、それで、何かの役(初めてですから大きな役は、望まないで下さい)に、つけて差し上げることもできます。

では、御連絡をお待ちします。





私がモデル志願

したことなど

中津市 南 加津子

「貴女は真面目で優しい感じ」とか、「おとなしい感じ」と友達からよく言われます。「純情だからからかうのが面白い。気にならないう人からかう人はいない」などと男の人に言われます。でも、恥かしそうにうつむく私が心の底で何を考えているか分かったら、きっとびっくりすることでしょう。

私は大分で生まれました。四人姉妹の二番目として。小さい時からなぜか私はひがみっぽく、高2の春、女友達の部屋で彼女の友人の男三人によって経験しました。悪い女と知っていたながら心を許してつき合った私が一番いけなかったのです。高校でまじめだったのは一年のときだけ。その時でも近所の中学二年の男の子を誘ってかかったり、病気をしていた私のふとんに入れて身体にさわらせてり吸わせたりしました。

学校では遅刻、早退の常習犯。三年になると別府へ移り大分の高

校へ電車で通うようになり、電車の中で、いろんなことを想像しました。エッチな本ばかり読みました。授業中に読んでとりあげられ、数学の先生に凄く怒られて一週間返してくれませんでした。「こんな本を読んでいいと思っているのか」と言われ、あっ読んだな、自分だってスケベだって心の中で思いました。小説なので読まなければ意味がわかりません。三年の夏、親に叱られて家を飛び出し、雨の中を歩いていきますと変な中年の男に誘われ旅館へ行きました。裸にさせられ、いろんなポーズを、とらされました。もちろん電灯をつけてです。

太い棒を熱い湯の中にひたして、それで……するのです。興奮がさめると湯から上がり鏡の前でいろんなポーズをしました。二階の自分の部屋では裸になると足を別々にひもでくくっておいて、はじめはローをたらしめていたがあきたらなくなつて入れてしまいましたが、一回そんなことをしているとき家の人が帰ってきてひもをとりたり鏡をかたづけたり道具を汗だくで片づけたりして服を着ました。顔が真赤になっているのがわかりますが、何げない風で階段を下りて、カギをはずしました。カギをかけてなかったら、どんなことになったかと思うと、ゾッとしました。

最近、中津に越してきて、始めて奇クを知って驚きました。その本をみながら、ひもを身体にまとって勤めに行ったことやコートの下にろくに服を着てないでそわそわしたことを思い出します。はじめで買ったときは逃げるようにして出ましたが、最近では堂々として図々しいなと思います。私が本屋へいっただけで店の人は本を包んでくれるのです。モデルに応募したのはこの本に慣れる前でしたが返事がこないのに半分ホッとしたものです。でもすぐあきたらなくなつてお友達を欲しく思いました。三人からお返事があり本当は三人ともつきあいたいと図々しく思ったのです。でも他にもお友達を求めている女の人があるかもしれないと思うと、そんなことはできません。三月号をみて高村浩子さんはなんと可愛いらしい書き方をされるのだろうと感心しました。この方ほどの方だったら、きっとお友達がたくさんできると思います。私も浩子さんのように写真入りで誌上に載せて欲しいと思います。そして私、浩子さんともつき合いたいのですが女の子じゃ駄目でしょうかしら。彼女を凄く優しく残酷に痛めつけてみたいのです。あれ私、Mだと思ったのだけどS気もあるのかしら。

追伸——どうしても書きたい気が持が嵩じてきて、どうしようもなく、つい書いてしまいました。編集部の皆様のたいくつしのぎにでも読んでいただけたら幸いに存じます。私に勇気をふるってお呼びかけ下さったという三宅様に、お手紙下さるよう言っさいませ。

渡部光雄・好美夫妻の為に
純愛の人を讃えて

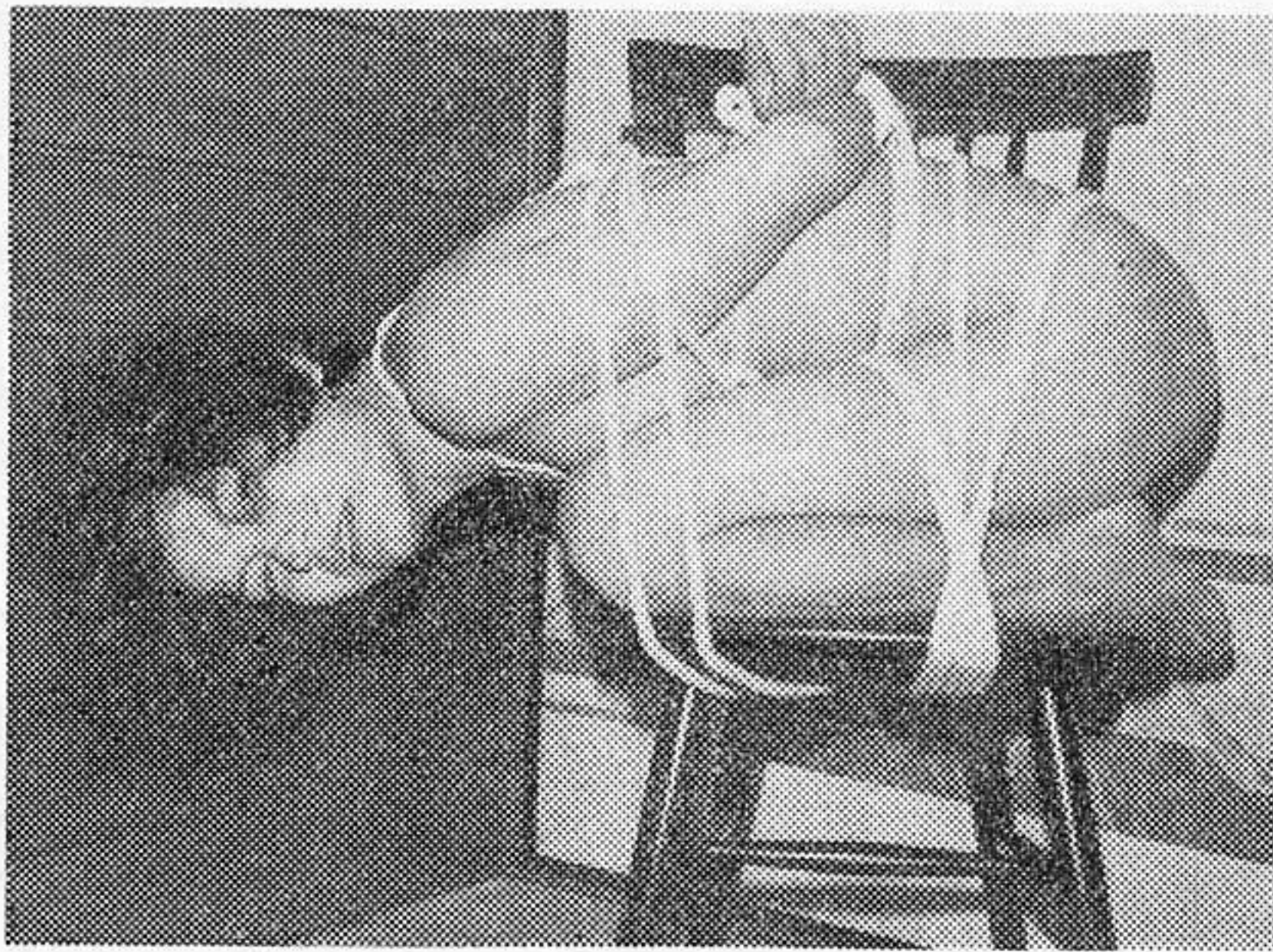
瞳

耀太郎

妻を愛するが故に被虐プレイの旅に発たせられた渡部氏。夫を愛するが故にその柔肌を供して新しい世界を拓いて行かれる、好美さ

ら。その御二方の睦じい生活に、心から祝福を捧げつつ此の筆を走らせる。

○



まことの愛とは何の事であろうか。漠とした青い鳥を求めて我々は巷をさまよい、徒手空拳無為の中に人生を過ごして行く。私は、それを残念に思う。

夫君の意に添う為に、一身を投げ出されて花を開かれた好美さんもある事ながら、愛するが故にこそ、愛するものの喜びを深く、より高く燃え立たせるために辻村氏の許へ、敢えて妻を単身で送られた渡部光雄氏こそ、素晴らしい人だと思えます。

それが、確かに新しい未来を湧き立たせ、自分と妻のSMの生活が、一段と高いレベルに上がってゆくであろうことを信じているとしても、普通では仲々に、その決断は出来ないものです。

SMの生活。それは既成された一つの世界に住むものの眼から見れば、全く次元の違った世界であるかも知れません。その人々は、渡部さん御夫妻を好き者、異端者と見るかも知れないし、近視眼的な、根拠のない非難を浴びせるかも知れない。

だが、それを深く理解し、愛の完成への一つの道標にしか過ぎないと結論し、定義づけている私の眼から見れば、それは勇気と大悟の要る愛の世界の開拓者の様に感じられるだけでなく、マルコポーロやマゼランの様に長い人生に詩を与えようとする熱いお二人、と私は言い切って差し支えないと思うのです。

愛の完成の伴侶として、そして美の創造者としての辻村さんが、夫君とその夫人の愛に耳を傾け、生まれたままの無垢の夫人を緊縛し、羞らいの中の彼女の、肉体の中に宿る求道の心を導き出し、歓喜・陶酔の中に有明の光を知った

編集部だより

○東京の鈴木千鶴子さんが来阪されたのを機会に塚本氏の手を煩して取材してもらった。急なことなので出迎えや準備に万全を期すことが出来なかったが、塚本氏の得意の早書き原稿のおかげで、とにかく誌上を飾ることが出来た。

○東京といえば、佐野みさ子さんが美しい若奥様ぶりのカラーフォトを同封して本誌のモデル志願をされたのでロマン派生氏に紹介してSMプレイの成果は先月号の誌上を賑わした。他にもカメラとペンに自信のある方に取材を依頼したのだが、今のところ誌上に掲載出来るまでには至っていない。

○奇巧の女性読者の方で緊縛フォトを撮影されてもよいという便りが数件寄せられているので腕に自信のある方には取材を依頼したいと思っている。旅費取材費一切は編集部にて負担するので必ず作品を寄せて頂きたい。沖縄まで出張可能なれば尚好都合である。

○本誌上に緊縛の美しい姿態を登場させていた福井桃子さんが妊娠したというのは、曾ての中河恵子

彼女に霊肉の洗礼を与え、新しい境地を開いて見せたのは宗教者のそれであり、光雄・好美の御夫妻は殉教者のそれであるといっても過言ではないでしょう。

自らを引出物として、SM世界を辿られる、その道は峻しくとも日々新たな境地に、一步々と着実に進まれ、誰よりも幸せな幸福の前取りをされてゆくことでしょ

うし、羨ましい限りと云えるでしょう。

お二方の眼中にあるのは常識を超越した世界。SとMの、人間の本能的な回帰心の中とも云えるでしょうが、二人自身が素裸で飛び込まれているその次元は、第四次元の世界へ向かう私達が、何れ解き明かさなければならぬ課題でもあります。

「偽れる盛装」ともいう様な人々の満ち溢れている今日此頃、しっかりと目を開いて現実というものを直視するだけでなく、それこそ何一つ隠す必要のない天衣に包まれて、あるべきものがあるがままに確認し、お互いの実在を確かめ合い乍ら、あるいは啓示的な詩文を綴り、真白い咽喉はソプラノを唄い、その肉体は舞踏手のようにくねり合って絵を描いてゆく。誰

もが到達しようと思いつめ乍ら、仲々到達し得なかった愛の世界。辻村氏の祝福を受けて道は更に拓け、二つの魂はしっかりと結び合

って、月にたわむれるニフフの様に、アポロの様にたくましく、失われた世界を取り戻すために進んでいられる。

人間回復の先導をしていられるのだ。

好美さん一人が求めても得られなかった世界の扉を開き、光雄さん一人が力んでも完成しなかった世界が拡がり、愛する者を愛するが故に一人旅に旅だたせ、愛するが故に裸身を開いて体当りの真実をまさぐり、一境に達してはその郷に戻って練成を重ね、手を取り足とりして歩まれる道、それは美しく、ほのかなる慕情を私達に誘いかける。

六月号で好美さんが語られている様に、若し何等かの機縁に恵まれ、御夫妻と語らう時があるとすれば、私は求道者の御二方のための旅の漕手となり、一つ小舟を浮かべつつ、心通わせつつ手馴れたカメラを駆り、筆を握って、お二人の輝く絵巻のために、私はホーマーの様に詩を捧げることができ

るでしょう。お二人の人生が、更に幸せに健やかに伸び、強くあら

れるために、進んで、轡をとって道の供をすることでしょう。

百人寄れば百様の考えが、観方が生まれるでしょう。それは何故でしょう？

それぞれ立っている世界観が異なるからです。何故その様な世界観が生まれてくるのでしょうか。それは振り立った世界を含めての現在の環境の所産でありましょう。

他に累を及ぼし、他人の権利を侵犯しない限り、SMの世界が仮に異端なるもの、倒錯したものであったとしても、それは法治国家では、容認された私権の中に包まれるものです。

夫君としての光雄さんが、更に広い視界の中で愛の真実を謳歌され、好美さんが良きアシスタントとして月に胡弓を奏で、愛の唄を歌い続けられることを深く望みつつ、新しい天と地の創造の為に身を置かれ、心と肉体を一つにした真実の愛の完成を、愛の讃歌をその肉体を通して記されることを、一讃仰者として望むものです。

△旅する愛の海のはとりにて、慕情を感じたる「渡部」なる人の為に……。瞳耀太郎▽

さんと同じケースである。平常の裸身から妊娠した裸身への変化は奇クファンの方々にとっては、大いに興味あることと思う。

○東京から上洛された麗人前田真知子さんの素晴らしい紀行文は四月号に△京都慕情▽として掲載したが結婚適齢期としての彼女はやはり配偶者として奇クの愛読者を望んでいるとか。我と思わん独身者は名乗りを挙げてみませんか。

○原稿料は従来、掲載誌の発売の月にお送りしていたが事務輻輳の都合で発売月の翌月中に発送することに変更したので諒承を乞う。

○嘗て山本章氏のルポを読んで谷山久美子がファンレターを寄せたことから彼女も本誌に幾回となく登場したのであるが、現在誌上にカメラルポを発表している塚本鉄三氏に笠井奈保子という二十才の女性から、SMレターがきた。一面識もないこの素人の女性に塚本氏は果してどのような飼育ぶりを見せるか大いに期待している。

○毎月欠かさず精力的にSMのハントを続ける辻村氏からの連絡に依れば、ここ三、四カ月ばかり掲載する材料には不足しないということだから当分の間、辻村節の名調子に酔う事が出来る筈である。

平山連浣

恐らく貴女の太モモから臀部にかけての感じは、さわればピンとはねるような弾力性のあるピチピチした極上モノではないかと想像されます。さて私の羞恥責めはいうまでもなく最近非常に流行して来た浣腸責めです。これだとムチ叩きのように痛くもなく傷もつかないので肌のスベスベした、またキレイでなくてはならぬ貴女に、最も適した責めだと思っています。

するものは食べてはなりません。なにしろ澱粉性の食物は多くは体内に吸収されずカス即ち便として残るわけです。しかも強力便秘剤をのんでいるので便意は何日もなく貴女の腸内はたまりにたまった便で一杯です。恐らく黒光りに近い固い便で貴女のアヌスはふさがれてしまいます。こうして一週間ぐらいたつと、なんとなく下腹あたりが張ったような、しかも重々しい感じで貴女自身指をアヌスから差し込んで便を出したい気持ち一杯になります。しかしアヌス口あたりの便は一週間ぐらいたつた古い便なので、固まりに固まっています。

さて、このような極度な便秘になつたのを見届けたら、今度は逆に下剤をのんでもらいます。下剤をのんで約二時間ぐらいたつと下剤の効き目があらわれ、貴女の下腹部はシクシク痛くなり、辛抱すればする程、下腹部の痛さが腹全体にひろがりトイレへ行かなければどうしようもなくなります。貴女は腹をおさえて、「トイレへ行かせて……」と私に哀願するでし

貴女のショーで鍛えた双尻とそ
の中におさまっている薄茶がかつ
た菊薔が、まともに私の目に飛び
込んで来ます。時やよしと百CC
硝子浣腸器にドナン原液とグリセ
リンとを半々に混ぜ更に強力な便
意を催させるため、食塩まで加え
たものを浣腸器一杯吸引、有無を
もいわせず、始めはジワジワ注入
あとになって一挙に注入します。
もうその頃になると下剤の効き目

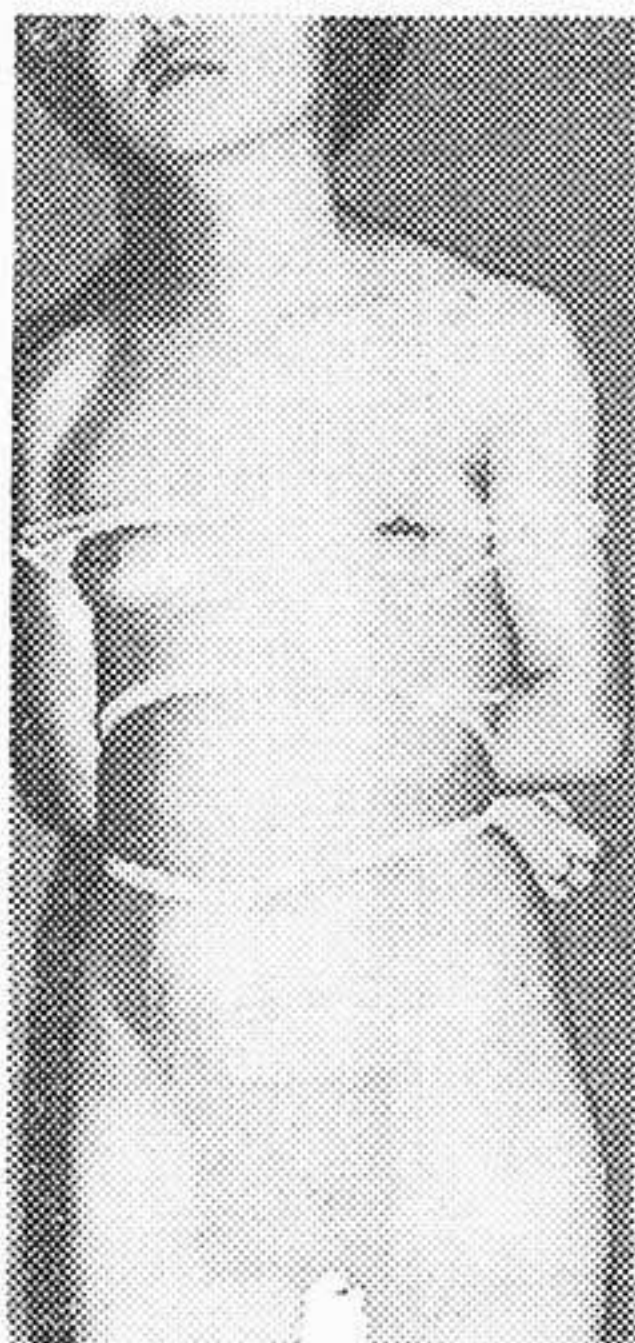
がアヌス口あたりまで来、しかも浣腸液の効き目と一緒に、今にも漏れそうな極限状態になります。貴女は双尻を動かし激しい便意を少しでも辛抱しようとしても両腕、両足が縛られ身動きできない状態ではどうしようもありません。「ああ、洩れる。早く何か」と貴女は悲痛な叫びをあげ菊薔は今まさに開かれようとする瞬間、直径二センチ程のソーセージを差し込みます。なにしろ排泄寸前に栓をされたのですから折角の便がまた腸の奥へ戻された感じです。

「ああ苦しい。お願い、許して」と貴女が哀願しても私は許しません。下剤の苦痛はまた浣腸の苦痛と異なり、それこそ腹を力一杯しぼるようなキリキリした痛さなのです。排泄を強いられながら、それが出来ない苦しさは正に言語に絶します。二十分ぐらいたつと貴女の首筋といわず腹から臀部にかけてジツトリとあぶら汗がにじみ出、もう息するのさえ苦しく「ハアハア、ウッウーム」と貴女の口から洩れるのは溜息ばかりです。頃はよしと突き出された貴女の下尻の下面にビニール布を敷きソーセージを、す早く抜きとるやいなや、「ア、アーッウーム」の声と同時に、ブチブチ、ブーイッビチビチビッ」と音ならぬ音と共に、一週間たまりにたまった下剤と浣腸液が入り混じった便が、勢いよく噴出します。

なんと壮烈といおうか、凄まじいといおうか、空前絶後の浣腸責めではありませんか。

千鶴子さん、私はコト浣腸責めに關しては誰にも劣らぬくらいのテクニクを持っているつもりです。私も東京です。貴女の好きな日時と場所を指定して頂ければ、何はさておいても馳せ参じます。

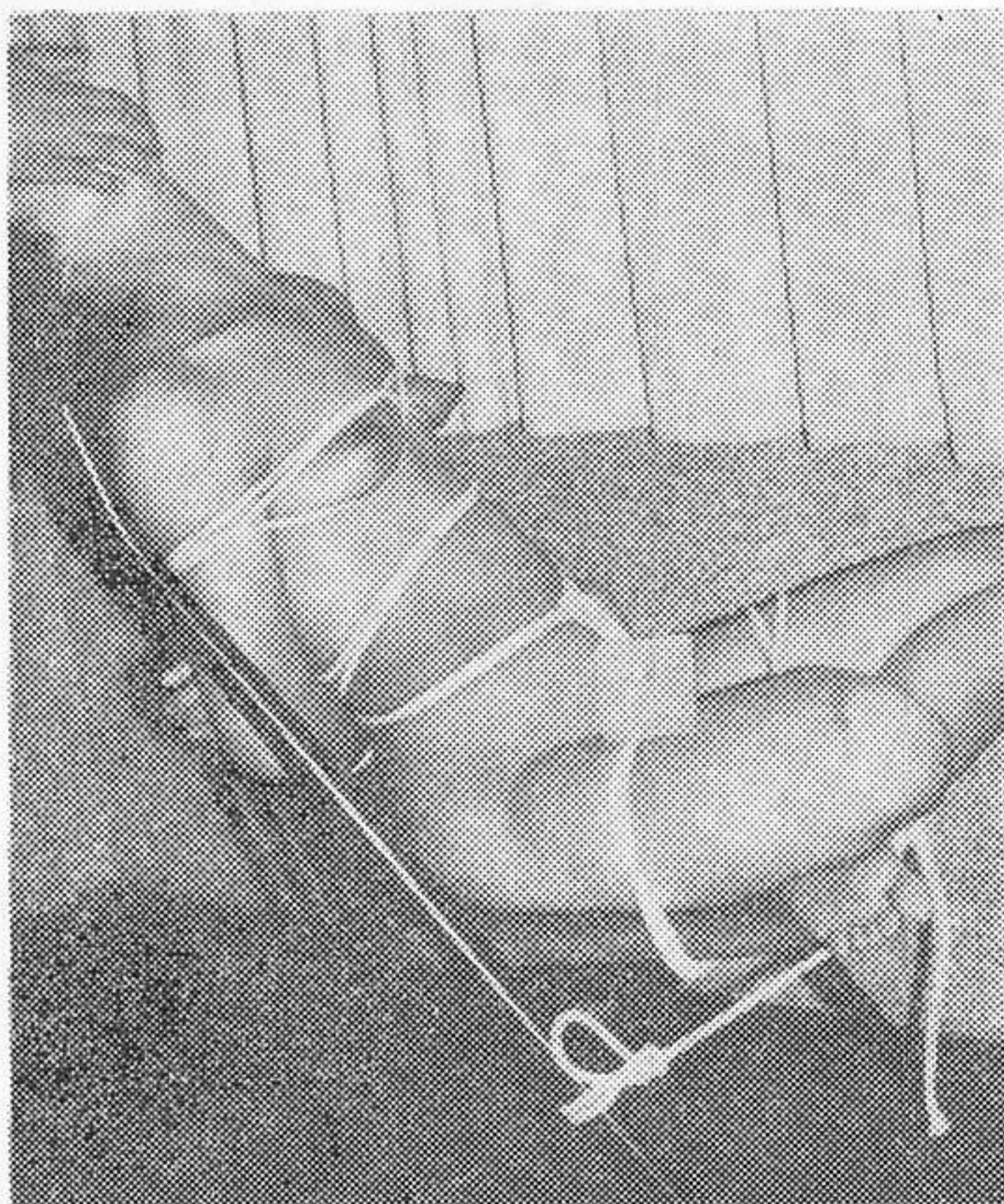
夫婦プレイ の断片 阪東太郎



同好の皆様、今日は。今まで同好の皆様のプレイぶりを誌上で拝見しておりましたが、ここに数カ月ぶりに私達のプレイフォトを投稿致します。良い作品ではございませんが皆様方同好の方々の御指

導により一層の進歩があれば願っております。

佐野みさ子様。四月号ではロマン派生さんとのプレイの模様、拝見させて頂きました。一度はこの手で責めてみたいと願っております。



したみさ子様を、ロマン派生さんに先を越されてしまい、阪東太郎一生一代の不覚でした。それというのも貴女に対する呼びかけに拙さがあつたからでしょう。

しかし、私は貴女に対する夢はすてておりません。同じ関東の人でありますので、お呼びかけ下さいますれば、さっそく飛んで行って御満足の頂けるプレイを楽しみたいと願っております。

読者通信にも関東在住のM女性が多く呼びかけております。是非一度、阪東太郎にもお呼びかけ下さいますようお願い致します。必ずや御満足頂けるプレイを行いたいと思います。私は妻を相手に夫婦のSMプレイを楽しんでおりますので、女性に対するプレイでの扱いは十分心得ているつもりです。写真直は三枚同封しておきますから、掲載下されば幸いです。

短信往来

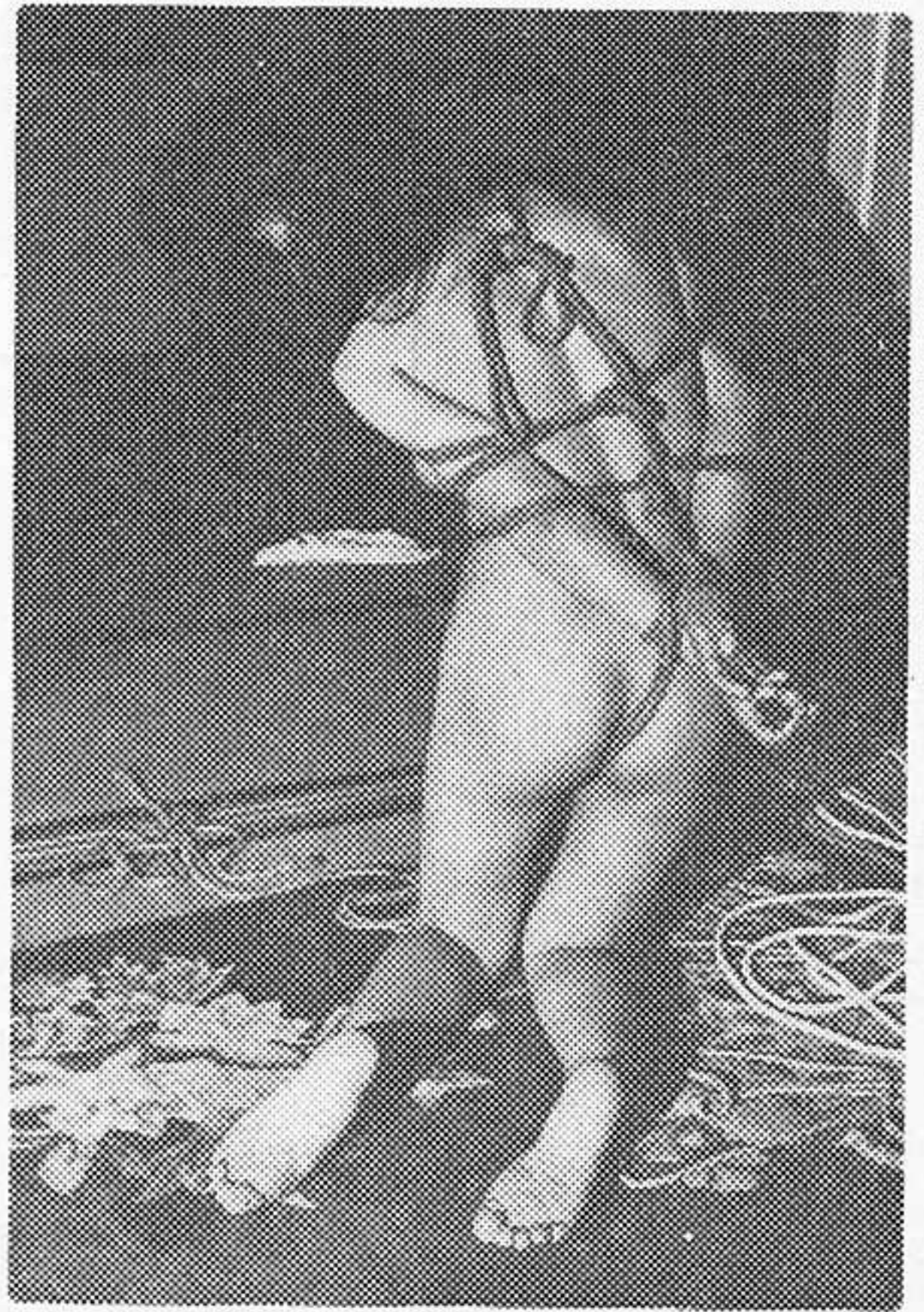
高村浩子様へ

奈良秀夫より

貴女が初めて奇クに載った時から、理想の女性であり、一度はプレイの相手をしてもらえないかと思つて過ぎて来たのですが、三月号の『私は誘拐されたい』それに四月号の『被虐の初夢』を読んで、もうじつとしておれなくなりました。

四月号に貴女が書いておられました「責めの旅行」に、行きませんか。貴女はこんなことは、かなえられないのが当然と書かれてありましたが、あきらめるのはまだ早すぎますよ。僕でよかったら、二日でも三日でも付き合つてあげましょう。

そして、いろいろな場所で、いろいろな縛り、いろいろな責めで貴女を責めてあげます。塚本氏の様に、上手には出来ないかも知れませんが、そのかわりに貴女が責めてほしいと思つた時、いつでも都合がきますので貴女の希望通りになるはずです。一応プレイ



の経験もありますので満足してもらえはります。

もし今、貴女の住んでいる所がわかれば、すぐにでも飛んで行って、お望みどおりに誘拐してしまふのですが……。

最後に、僕みたいに、貴女の事ばかり思い続けている者も居る事を忘れずに、その気になったらいつでも誘つて下さい。

僕は、プレイ以外の事は、何も望みません。又、秘密も絶対に守ります。いつでも被虐の旅に連れたいってあげます。

小杉千恵様へ

北摂の石田生

「ブラボー」四月号の貴女のフォトを見て、そう呼びかけずにはおられませんでした。そして神が許してくれらるなら、ベールを脱いだ素晴らしい貴女を、私のこの手で縛つてあげ、思いきりプレイしたい衝動にかられてなりません。

なぜなら、貴方の美しいヌードに縄が蛇のようにまといつけば、その美しさが更に倍増されるからです。そして貴女が望んでいられ

る羞恥責めを、徹底的に味あわせてあげましょう。

私の責めプランは、まず、美しい貴女に「静子」になつてもらいます。というところは一切の着衣は許さず、肌になとうものは、ただ縄のみということですが、縄のブラジャーに縄パンティだけの肌をコートで隠し、散歩に連れて行ってあげます。貴女は、歩き難くてモタモタすると同時に、きつと燃え上がることでしょう。

次には密室で、ドッグ・スタイルになつてもらいます。そして百CCの流腸液と十分間対決してもらい、更に百CCを加えて、貴女の腸内を完全にダウンさせてあげましょう。その後、それまでの後手縛りを、右手と右足首、左手と左足首をそれぞれ一つにする縛りかたに縛り直してあげます。どんな姿になるかは想像出来るでしょう？ 貴女の望む羞恥責め開始のための縛りです。そして貴方は鶏になつて、何個も卵を産まなければなりません。ごほうびはバイブです。

貴女のフォトを見ていると次々と責め案が浮かびます。とにかく一度、ご返事下さい。そして私の責めを受けて下さい。

自殺志願者の話

松山壮吉

週刊新潮二月二六日号スナップ欄に、『自殺志願の男を、いま金に糸目をつけないで捜しているのですよ』商社と特約しているコーラル・アッセン業社の話で、『最近じゃ女性の実力者が多くなってきた、男を世話するケースが多くなっただんです』自殺志願男で、『どうせ死ぬんだ!』で、やけになっで一晩中、異常性愛に狂うというタイプが、ねらい目。これがなかなか、むずかしいらしく『その点、男客の方は楽ですよ。女でさえありゃ、いいんだから』

と、その高級? ポン引氏”(以上、全文)との記事が出ている。当節、どうせ死ぬんだと、やけにならねば出来ない異常性愛とは何があるかといえ、常識的にみて極限的なSMしかないだろう。「タブー」では、獲物を責め殺す楽しみが甚だ感覚的に描かれていたけれど、現実には、そう簡単にはさられて来るわけにもいかない。そこで相当の金を出しても後腐れのない男を提供させて、徹底的に責めて責め殺してみたいという女性実力者の御注文に応ずるために

苦労中と思われる。

オープンに広告出来ることではなし、金に糸目をつけぬと言ってみたところで多寡の知れたことでもとも保険の額ほどにも、なりはすまい。第一、死ぬとしても、なるべく苦痛の少ない死に方を選ぶのが人情で、どうせ死ぬのなら、思いきり責めさいなまれて死のうと一寸ひねった感覚を持つのは、作中人物としては、むしろ自然だが実際には殆どいないだろう。おあつらえの自殺志願の男をみつけるのは、甚だ困難と思われる。ぐっと妥協して、生命まではとらない、半死半生という程度までで辛抱するとなれば、事態は自ら

異なってくる。マゾヒストは口が軽くて信用出来ないという恐れがあれば、一応の職業的体面を要する人物を選び、不信行為のある時は、事実と身分氏名を暴露するといふ切札を仲介者が握っていれば秘密保持には別段の心配はないだろうと思われる。

もとより、その程度の遊びには満足出来なくなったところに、自殺志願の男を求める必要が生じて来たのではあろうけれど、そのもう一歩前ぐらいなら喜んで応募するのに、そういう需要はないものだろうか。そういう需要のある方から呼びかけていただければ甚だ有難いと思う。

映画の人間馬シーン

仏伊合作「La Matiarca」より

佐野 寿



〔秘蔵版SM資料一覧表〕

従前一時的に分譲中止しており
ましたSM資料の中で特に好評だ
った左記の写真は特に御希望の方
に限り焼増し致します故、前金に
て天星社宛お申込み願います。

レインコートの拘束

大手札四枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 六〇〇円

猪 吊りの美女 略号 五〇〇円
梨花悠紀子 略号 五〇〇円

色 禪の開股縛り 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

椅子責めの果て 略号 五〇〇円
長野 良子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 五〇〇円

マニヤの全裸緊縛フォト 略号 五〇〇円
栗本 ミチ 略号 五〇〇円

日本髪全裸強烈縛り 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

洋髪全裸強烈縛り 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

日本髪全裸股間縛り 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

可憐島田髷全裸縛り 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

メンスバンド責め

大手札五枚一組 略号 七〇〇円
東浦ひかる 略号 七〇〇円

ハ リ ッ ケ 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

鼻 責めのアップ 略号 五〇〇円
新宮 夫人 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 五〇〇円

メンスバンド足挙げ 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

鼻 責め万華鏡 略号 五〇〇円
東浦ひかる 略号 五〇〇円

鼻 いじめ三態 略号 五〇〇円
鈴木 晃子 略号 五〇〇円

浴 後の剃玉子縛り 略号 五〇〇円
山原 清子 略号 五〇〇円

投げだす緊縛裸身 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

待 望の脚挙げ姿態 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

ニツ折女体エビ責め 略号 六〇〇円
中河 恵子 略号 六〇〇円

開股縛りにて喜ぶ女 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 五〇〇円

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号 六〇〇円
田中美佐子 略号 六〇〇円

臨 月腹開陳(座位) 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

臨 月腹開陳(立位) 略号 六〇〇円
田中美佐子 略号 六〇〇円

突 き出た臨 月腹 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

臨 月の裸身像(座位) 略号 五〇〇円
田中美佐子 略号 五〇〇円

柱 縛りの妊産婦 略号 五〇〇円
田中美佐子 略号 五〇〇円

臨 月の妊婦緊縛 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 四〇〇円

臨 月の妊婦裸身像(立位) 略号 五〇〇円
田中美佐子 略号 五〇〇円

縛 られた妊婦の裸身 略号 五〇〇円
田中美佐子 略号 五〇〇円

九 力月の妊娠腹 略号 四〇〇円
田中美佐子 略号 四〇〇円

八 力月の妊娠腹 略号 五〇〇円
安原さゆり 略号 五〇〇円

乳 房強調妊婦菱縄縛り 略号 五〇〇円
安原さゆり 略号 五〇〇円

増 田みゆき 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

増 田みゆき 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

増 田みゆき 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

増 田みゆき 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

増 田みゆき 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

増 田みゆき 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

双胎八力月腹大写真

大手札四枚一組 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

双 胎妊娠線の出た蛙腹 略号 六〇〇円
大手札四枚一組 略号 六〇〇円

後 手縛りの双胎妊婦 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

八 力月の双胎の猿轡と緊縛 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

股 間縛りに喘ぐ妊婦 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

初 産双胎妊婦開股縛り 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

双 胎妊娠腹の凄愴切腹 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

八 力月の双胎革具責め 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

九 力月の双胎首枷責め 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

逆 さ吊りの正面と背面 略号 六〇〇円
増田みゆき 略号 六〇〇円

手 と足の宙吊り 略号 四〇〇円
増田みゆき 略号 四〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

梨 花悠紀子 略号 五〇〇円
大手札三枚一組 略号 五〇〇円

で負担いたします。ご不明な点はお電話かメールにてお問い合わせください。

二人のマダムのハイライト

メロン腹白縄縛り

正面柱縛りの蛙腹

開脚縛りの妊娠腹

蛙腹を晒す開股責

太鼓腹強調片足吊

妊孕緊縛美の極致

美しき妊孕腹緊縛

八カ月の妊婦裸身

以上の印画紙焼付写真はマニ

お送りいたします。

苦悶するエビ縛りの神秘

翻弄されるマダムの法悦境

江口 淑子

五〇〇円
 大手札三枚一組
 愁いある目と猿ぐつわ

江口淑子 略号「ちゆ」

大手札三枚一組 五〇〇円

いたぶられて燃える媚態

大 手 村 三 枚 一 組
江 口 淑 子
略 号 △ ち わ ∇

紅閨へのいさなに濡れる
大手札三枚組 五〇〇円

江口 淑子 略号△ちは▽

大手札三枚一組 五〇〇円

開股縛りの醍醐味披露

大口三枚組 五〇〇円
江口淑子 略号△ちし▽

強烈股間縛りの点描

江口 淑子 略号△ちへ▽

大手札三枚一組 五〇〇円

江口 淑子 略号／ちせ

大手札十二枚一組
深田 菊子
略号△ちあ▽
二〇〇〇円

前開型バンド着用フオート

深田 菊子 略号△ちか▽

〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組 百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円
十組十枚 一五〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇円
百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が
出回っているようですが、これは
全部特殊マニアの蒐集用として一
粒選りのネガから直接印画紙に焼
付した極めて鮮明な逸品揃いばか
りです。きつとファンのアルバム
を最高に充実させると信じます。
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社
へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)
2 トイレ排泄強要(三浦 純子)
3 完全二つ折締め(三浦 純子)
4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)
5 超強烈エビ責め(三浦 純子)
6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)
7 全裸縛玄閑晒し(三浦 純子)
8 ネどうでもして(高村 浩子)
9 蠟燭責後手縛り(富田由美子)

10 羞恥の源を抉る(江口 淑子)
11 妊婦縛りの圧巻(富田由美子)
12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)
13 正面の妊婦縛り(富田由美子)
14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)
15 両手挙前面晒し(高村 浩子)
16 強烈浣腸ポーズ(高村 浩子)
17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)
18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)
19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)
20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)
21 柱縛り開股強要(福井 桃子)
22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)
23 本格的な麻縄責(前田真知子)
24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)
25 正面股間縛晒し(高村 浩子)
26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)
27 店での全裸縛り(福井 桃子)
28 豊満な女体開陳(福井 桃子)
29 恍惚バイブ責め(江口 淑子)
30 マダム責の哀愁(江口 淑子)
31 開股強制棒責め(前田真知子)
32 大の字片足挙げ(高村 浩子)
33 雁字搦目の女体(江口 淑子)
34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)
35 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)
36 海老開脚強制責(深田 菊子)

37 全裸立像後手縛(富田由美子)
38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)
39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)
40 マダム全裸開陳(江口 淑子)
41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)
42 女体美を晒して(深田 菊子)
43 高々と後手緊縛(福井 桃子)
44 猿轡に悶える女(高村 浩子)
45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)
46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)
47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)
48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)
49 エビ責めの序曲(江口 淑子)
50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)
51 料理される女体(高村 浩子)
52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)
53 両手両足開責め(三浦 純子)
54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)
55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)
56 浴室での浣腸責(江口 淑子)
57 股間に喰込む麻(深田 菊子)
58 浣腸責めのあと(福井 桃子)
59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)
60 スナックで縛る(福井 桃子)
61 喰込む股間縄責(江口 淑子)
62 責めに呻くM女(高村 浩子)
63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)
64 菱縄悲し女泣く(江口 淑子)
65 M女を責め尽す(前田真知子)
66 引回される全裸(江口 淑子)
67 尻立蠟燭悦虐貨(福井 桃子)
68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)

69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)
70 剃毛の女体展開(荒尾 慶子)
71 被縛者のマダム(江口 淑子)
72 縄の山と浣腸器(福井 桃子)
73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)
74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)
75 両手両足吊り責(江口 淑子)
76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
77 全裸一直線開股(福井 桃子)
78 裏門を開放する(深田 菊子)
79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)
80 後手胴締股間縛(深田 菊子)
81 強烈海老責地獄(江口 淑子)
82 大の字縛り正面(高村 浩子)
83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)
84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)
85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)
86 後手吊上げ責め(三浦 純子)
87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)
88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)
90 マダム開股の図(福井 桃子)
91 がっちり後手縛(深田 菊子)
92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)
93 妊婦大の字縛り(富田由美子)
94 開脚を強要せよ(富田由美子)
95 引回される妊婦(富田由美子)
96 強烈麻菱縄掛け(前田真知子)
97 股間縛の引回し(江口 淑子)
98 正座する股間縛(荒尾 慶子)
99 荒縄後手二つ折(前田真知子)
100 椅子開股羞恥責(前田真知子)

最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

(郵便番号545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
痛苦に耐える女(三浦純子)	喘ぐ縄猿轡痛め(三浦純子)	正面エビ強烈責(三浦純子)	海老縛り閨責め(三浦純子)	エビ責め縄猿轡(三浦純子)	麻縄強烈柱縛り(三浦純子)	二つ折り臀挙げ(三浦純子)	尻挙げ開脚責め(三浦純子)	開股パイプ責め(三浦純子)	台上に晒す全裸(三浦純子)

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
全裸緊縛の愉悦(渡部好美)	閨中の股間縛り(渡部好美)	悦虐の開股縛り(渡部好美)	蠟涙責めに哭く(渡部好美)	開股責めの序曲(渡部好美)	責に諦観の美貌(前田真知子)	逆反り弓吊り責(前田真知子)	光に映える白肌(前田真知子)	裸女を押込める(前田真知子)	柔肌に喰い込む(前田真知子)	首縄菱亀甲縛り(前田真知子)	純肌を柱に晒す(前田真知子)	さらけ出した女(前田真知子)	全裸の美女に縄(前田真知子)	鏡に映るエビ責(前田真知子)	白肌をくびる縄(前田真知子)	緊縛に悶える足(座間明子)	開股縛りに諦観(座間明子)	後手縛りを誇る(座間明子)	美しき全裸縛(座間明子)	股間縛りに喘ぐ(座間明子)	高らかに笑う顔(座間明子)	沖縄美人の表情(座間明子)	豊満を縛る魔手(座間明子)	開股正面逆立責(三浦純子)	二折りの引回し(三浦純子)	驚づかみの黒髪(三浦純子)

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
羞恥に悶える女(叢子・好美)	連縛双丘の珍景(好美・叢子)	椅子開股の二人(好美・叢子)	高手小手を開陳(好美・叢子)	全裸の二女陳列(好美・叢子)	責め疲れた二女(好美・叢子)	柱に二女の連縛(好美・叢子)	女性自身を晒す(谷山久美子)	哀憫非情な麻縄(谷山久美子)	条痕を尻に残す(谷山久美子)	ムチ打ちに泣く(谷山久美子)	厳しき後手縛り(谷山久美子)	情容赦ない麻縄(谷山久美子)	大の字開股縛り(谷山久美子)	強縛愉悦の極み(谷山久美子)	椅子開股で晒す(谷山久美子)	苦悶の末の頂点(谷山久美子)	責めるの許して(谷山久美子)	齒で咬んだ猿轡(谷山久美子)	緊縛最高の悦楽(谷山久美子)	悦虐悶えの果て(谷山久美子)	極限の苦痛襲う(谷山久美子)	苦痛に反る足指(谷山久美子)	アニマルの表情(谷山久美子)	赤裸の尻を暴く(谷山久美子)	強烈二折り責め(谷山久美子)	海老責に喘ぐ顔(谷山久美子)	股間縛りの正面(三浦純子)	愛妻飼育の過程(三浦純子)	ムチ打ちの洗礼(三浦純子)	爛熟した女体責(三浦純子)

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
縛った異国の女(シーラケニ)	畳の上に転がる(シーラケニ)	卓上の一輪の花(シーラケニ)	投げだした全裸(シーラケニ)	諦観白人の表情(シーラケニ)	高手小手に縛る(シーラケニ)	金髪碧眼の女性(シーラケニ)	白人の肌を縛る(シーラケニ)	碧眼に驚きの目(シーラケニ)	日本式胡坐縛り(シーラケニ)	両手挙げ美肌晒(シーラケニ)	後手縛りで開脚(シーラケニ)	金髪は縄に動く(シーラケニ)	白肌と汚れた縄(前田真知子)	美は麻縄を超越(前田真知子)	無垢の肌に麻縄(前田真知子)	Mを恋する表情(前田真知子)	灯籠の前で縛る(前田真知子)	一糸まとわぬ女(前田真知子)	伸びやかな肢体(前田真知子)	麗しき首縄旅情(前田真知子)	三本の棒で拘束(川路むら子)	棒縛り羞恥責め(川路むら子)	足挙げ正面棒責(川路むら子)	点火した蠟燭責(渡部・川路)	一体にした緊縛(渡部・川路)	捕われの全裸像(渡部・川路)	尻も何も丸出し(好美・叢子)	股間縛りの併立(叢子・好美)	正面相對の連縛(叢子・好美)	羞らう美女二人(叢子・好美)	美しき床の飾り(叢子・好美)

女子大生前田真知子天然色緊縛フォト

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常に人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢の方から要望されて、広くファンの方々に新しく特写の機会を持ちました。こので好事家のお目にかけます。

柱縛りと脚挙縛り

肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあばく。

麻縄高手小手首縄

黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まっていた美しいカラードレスは格別である。

荒縄強烈エビ縛り

トゲトゲとした荒縄で情を救う強烈なエビ縛りに責められて、流石のM女も白肌を赤く染める。

荒縄悦虐羞恥責め

赤い絨氈の上に荒縄でぎゅぎゅと縛られた全裸の女体が芋虫のように浅間しくうごめいている。

悶える強烈海老責

前田真知子 略号一〇〇〇円
高小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

柔肌をくびる縄目

前田真知子 略号一〇〇〇円
正面と側面と横臥と、その姿態は交れども全裸の美しい女体に重に掛った縄目はむごたらしい。

緊縛女体をいびる

前田真知子 略号一〇〇〇円
身動きも出来ない縛られた裸身を動かす下にして、思うがままにいたぶるのはS男子の本望である。

羞恥を晒す女体柱

前田真知子 略号一〇〇〇円
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となって哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラプリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一系まとわぬ緊縛フォトばかりです。必ずや女体緊縛フォト蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

☆ 深田菊子浣腸悦虐責めフェチフォト

〔悦虐浣腸写真〕

溶液を圧入される

深田 菊子 略号四〇〇円
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

全裸で受ける浣腸

深田 菊子 略号四〇〇円
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で浣腸。

イルリの嘴管挿入

深田 菊子 略号四〇〇円
二千CCのイルリガイトルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

刺す浣腸器の恐怖

深田 菊子 略号四〇〇円
百CCの硝子製ポンプの先端がブズリと突き刺さる浣腸の恐怖。

自ら施す浣腸悦楽

深田 菊子 略号四〇〇円
強制されて自分自ら浣腸器を握って浣腸の羞恥と被虐悦楽。

体内に奔流する液

深田 菊子 略号四〇〇円
深田 菊子 略号四〇〇円

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

浣腸を楽しむ美女

深田 菊子 略号四〇〇円
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ悦の小道具となる。

〔オシメ着用写真〕

オシメからカバ

深田 菊子 略号二〇〇円
浣腸のあとオシメを着て生ゴム製のオムツカバーを着着する。

おムツに排便する

深田 菊子 略号二〇〇円
オムツを当てカバを着けるまでの段階を順序を追って見せる。

生ゴムのオムツへ

深田 菊子 略号一八〇円
ヌメヌメとした生ゴムのカバとオシメとの奇妙な組合せ。

◎以上発表しました「浣腸写真」の要望により、誠に勝手ながら、この種のS嬢に興味と関心を抱くお申し込みは前金にて作成しました。郵便局私書箱第14号「天竺宛」へ、略号記載の上、どうぞ。

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅しき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にくぐめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円

女に縛られて弄ばれる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まで) 八〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円



絵・あらいかず

初めてお便りします。29才、自家営業の独身男性です。私はSMプレイは必ず相手に対しての愛情があるということが必要だと思えます。単に縛ったり打ったりするという欲望を満足させるだけなら相手は誰でもいいわけです。M気のない女性に、お金を出して縛らせてもらうようなものです。要するに愛情の発露としてのプレイが最も楽しいのではないのかと思います。またSMプレイはあくまで正常な日常生活の裏にあるものでなければならぬとも思っています。私はまだプレイらしいプレイの経験がないので色々な人に縛られつけているM女を縛る自信も技術もありません。そのためかどうか「飼育したい」という願望が強

女性、勇気を出して、お便り下さい。
(東京・赤羽橋育男)

四月号拝見、いつも乍ら素晴らしい誌面楽しませてもらいました。女性の腹部に強いあこがれとそこに加えられる責めを最も好む私は今月号の福井桃子のフォトは最大のプレゼントでした。彼女のオシャベリも面白いですが、それにしても、凄いラージポポンですね。ことに臍下のカーブがよいです。でも残念な事は折角彼女から妊娠腹を切りたい、つまり切腹願望を口にしてに、なぜ切腹プレイのフォトを撮らなかったのでしょうか。誠に千載一遇の好機を惜しいと思いましたが、いかがですか。彼女ならフェイスも良いし、モデルとして最高の一人かと

思います。本誌によく関西の女性M志願者の読者通信を見ますが腹部嗜虐に関心のある女性の方、私と共に楽しみませんか。お便り待ちます。(神戸市・N・Y生)

○

松本たえさんの二月号の緊縛写真を見ると私は五年前に別れたSMプレイガールの雪子を思い出します。三月号を楽しみにしていましたが載っていないのがっかり。是非更に引続いて松本たえさん取材して下さいよう願います。私の雪子は身長一五六糎、体重三九疋で顔は小さく首が長く細っそりしたなで肩の、純日本の美人でした。それだけに体は柔らかく、しかも我慢強く、手首を高々と肩までねじ上げた緊縛ポーズは一幅の歌麿の美人画を見ているようでした。従って緊縛もそれにふさわしい縛りを研究し、如何に美しく且緊縛らしく見えるか、研究しました。奇巧に載った松本たえさんの緊縛写真は、すばらしいと思います。かもしかの様に柔軟な日本美人のたえさんの様な身体の方はただ縛るだけでも素晴らしい緊縛美が味わえます。恐らく雪子と同様たえさんは非常に我慢強いかなる責も甘受するのではないですか。

私も二月初旬、部下と全日空で松山へ行き道後温泉の近くへ行きました。その際たえさん即ち芸者福竜さんはこの辺におられると考えながら当日高松へ参りました。これから松山で工事がはじまり今後松山へ行く事も多くなりますが、その節あってもうえますか。よろしければ誌上でお返事下さい。
(神戸市・吉岡恭一)

○

思いきっておたよりします。私は四国から東京に出てきて働いている20才の娘です。今の生活はあまり楽しくありません。といって享楽だけに興味を持っています。うのではありません。真面目な意味でSMを愛してみたいと心から考えています。こんな私は変わっているのでしょうか。生まれたままの姿に剃毛されて縛られ、羞恥責めに悶えているところを流腸をされるとか、更に排泄しているとをを写真にとられて残しておきたいと思います。私のような田舎の娘でも、その時の私は美しくみえるかもしれないと思うからです。Sのナイトのあらわれるのを待っています。おたより下さい。かならずご返事を書きますから。
(東京都新宿区・大山俊江)

前々より奇クを愛読していましたが、三月号誌上では野村信子とS氏の具体的なプレイ実践に度肝を抜かれました。それに夫婦プレイの記事とフォトが気に入りました。小生はSM写真を集めることに異常なまでに熱中し洋の東西を問わずプレイ写真はもとよりSMに関係のある種類は数多く蒐集しました。女性Mも好きですが、男性Mのものにも強い関心を持ちます。今まであれこれ広告を見て集めました。幼稚でインチキ物が多く現在書店に氾濫しているものは相手にしなくなりました。貴誌のような老舗でもっとどんどん開発してほしいものと願っています。(千葉県市川市・姉川定信)

「お知らせ」

本誌はここ数号、熱心にご支持下さる愛読者各位のご要望に応え、漸次収載写真の充実を目指してまいりましたが、更にフォト面の拡充を計るため、本号八五月号Vから若干増頁を致しますと共に、定価を八四百円Vに改訂させていただきますのでよろしくお願い申し上げます。

この欄は関西方面の方が多く思っていた矢先、4月号では2人も東京の女性が登場されていたので早速ペンを手にした次第です。私は奇クを愛読して10年になりましたが、不幸にも一度もMの女性に逢った事はありません。従ってM女性との体験もないわけですが、浣腸責めとA責めには自信を持っていますつもりです。私も安部文子様と同じ様に鞭打ちや相手を痛めつける責めよりむしろ羞恥責めを好みます。27才の独身者ですが、一時的な交際でなく長く交際できる事を望みます。

(東京都・茅場信)

神戸の井上浩様、三月号で私へのお呼びかけ本当に有難うございました。早速十二月号をとり出して「夫婦プレイ雑感」を読みなおしてみても多い共通性に私自身、井上様のようなお方と文通出来ればとうれしくなり早速ペンをとりました。多くの事を言葉以上に精細に表現出来る写真は大好きです。私自身SMについてお互いに気持ちを許して大いに語り合える友が欲しいのです。是非お手紙下さい。期待にそえるものと、思っています。また鳥取の松井寛様、大牟田

市の鈴木忠様、お便りいただければ幸いです。(山口・田尻長州)

本日奇クの発売日なので早速購入し拝見したところ夢想だになかった福井桃子さんの妊娠フォトに接し、まったく強烈な感動を受けました。元々桃子さんは肉づきの豊かな方なので私の一番好みに合ったタイプで顔立ちも大好きでした。呉々も良い御子様を安産されることを祈ります。

(東京都・北川文男)

私の随想と私見を3月号に採用下さって有難うございました。中河恵子、長井葉津子両名の一頁大の緊縛フォトの贈り物は見事でした。実質上のグラビア解禁と、心から喜びます。且、「紫蘭の門」「パロディ花と蛇」などの悦虐小説の耽美ぶりには編集部の方々の意気込みが感じられて心強く思いました。SMマニアの唯一の伴侶である奇クがマニヤのストレス解消のためにつくされている貢献度は高く評価されてもよいと思います。その一端のあらわれとして読者通信女性の深田菊子嬢がそのよろこびの姿を、誌上にさらし、一方読者の益田茂夫、乃美対

造の両氏が菊子嬢に接してルポを公表するなどほほえましい限りです。私もぜひM女性に接したいと思いつながら思いめぐらしており羨望のきわみです。願わくば深田菊子嬢、福井桃子さん、高村浩子嬢などを撮影させていただければと思います。このたび思いきって関係者の御配慮をお願いする次第です。万一にもお許し願えました暁には一生懸命プレイのありのままをレポ投稿致す所存ですので宜敷しく願います。

(神戸市・大西弘明)

私は奇クを愛読して七年、現在喫茶店を営んでいる一男性です。女性の最高の魅力、肉体と心の美しさを引き出し得るのはSMの境界だと思っています。奇クはそのSMの先達として水先案内として必要欠くべからざるものです。3月号でモデル志願をされた砂川圭子様。私は貴女を縛り、少女の様に剃毛し、アヌス責め、パイプ責め、ローソク責め、空気浣腸、羞恥責め等々、色々な道具を使っての責め、また全裸開脚して放尿する姿をカメラにおさめたく思っています。辻村様や塚本様のようにうまくとれるかどうか判りません

が趣味でDPをやっていますのできつと圭子様の望んでおられる美しく恥かしい写真が、とれると思っ
ています。そしてSMについて色々
と話し合い良きパートナーとして
プレイが出来たら奇クに投稿し
たく思っております。

（東京都・足立正道）

○

奇クを毎月夫婦そろって楽しく読
ませて頂いております。奇クの新
刊の届いた日は私達は必ず夫婦
プレイを実行しております。私は
27才、妻は23才、結婚して一年、
子供はまだありません。職業は自
営の印刷業で夫婦二人っきりの生
活です。いつも思っていた時に
プレイが出来ます。最近の奇ク
は非常に充実して私達好みの記事
や写真が多く載っているで大変
参考になります。4月号では文章
では風流極道軒氏の「紫蘭の門」
と山光純氏の「パロディ花と蛇」
を読んだ時は思わず妻と共鳴して
激しい夫婦プレイを演じてしま
いました。写真では「京都慕情」の
前田真知子さんは大変美しいで
すね。黒ずんだ縄で後手にきつく縛
られた真知子さんの白い肌は黒い
バックの中に見事に浮かんでいま
す。彼女は私の妻と同年輩ですが

美人でもありスタイルも抜群です
ね。それになんと文章のうまいこ
と。さすがに大学の国文科出身だ
けのことはあると思いましたが。福
井桃子さんの妊娠腹の縛りもスゴ
イですね。私も妻が妊娠したら四
カ月あたりから臨月まで十日おき
ぐらいに写してみたいと思ってい
ますが、なにしろカメラを手にし
たこともないので、うまくゆか
どうか不安です。塚本様あたりに
出張撮影していただければと虫の
よいことを考えています。ついで
に妻を飼育して貰えればこれに越
したことはありません。ロマン派
生氏の「ピッコロ狂詩曲」馴染の
ある佐野みさ子さんなので興味を
以て、見ました。私達の夫婦プレ
イの参考になるようなフォトも数
多くありました。妻にこんな恰好
をしてみるといって責めたりしま
した。妻はまだ只私のいいなりに
なっているだけでMのなんたるか
も余り理解していません。カメラ
ハントの喜多知子さんの写真、
非常に肉づきがよくてなんだ
か縄の方が負けてゆるんでいるよ
うに感じましたが私の縛りも凡そ
こんな風ですからほえましくな
りました。今月号は奇クサロンに
も写真の挿入が多くて、私達にと

最新版分譲フォト うら若き美女を緊縛する 印画紙直接焼付極鮮明写真		逆エビ縛り吊り上げ	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろて	縄付きで愛してネ	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろせ	棒責め開股縛り	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろひ	可愛い牝犬の珍芸披露	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろり	開股責めの種々相	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろみ	柔肌に喰い込む麻縄	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろし	海老責めで虐める女	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろめ	責め抜かれた結末	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろに	股間縛りにあえぐ女	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろち	高手小手縛り首縄悦楽	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろと	脚吊り柱強烈縛り	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろも			
白ロープの亀甲縛り 逆エビ縛りで晒す美形		開股開陳羞恥責め	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろへ	白縄の強烈縛り地獄	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろは	牢舎へ引き回す囚女	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろい	菱縄縛りで責める	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
深田 菊子	略号 八ろふ	M女荒尾慶子のすべて	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
荒尾 慶子	略号 八ろに	浣腸溶液受入態勢充分	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
荒尾 慶子	略号 八ろし	剃毛の美女を縛る	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
荒尾 慶子	略号 八ろふ	私をよく觀賞してね	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
荒尾 慶子	略号 八ろな	ベッド上での狂態を縛る	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
荒尾 慶子	略号 八ろは	強烈菱縄股間縛り	大手札三枚一組	略号 四〇〇円
荒尾 慶子	略号 八ろい			

って大いに参考になりました。写真がとれるよう上達しましたら誌上に掲載していただくのを楽しみにしております。

(静岡県・伊豆原二郎)

○

暖かい日があったり急に小雪がちらついたり不安定な日々が続いております。軽井沢で赤軍派の事件があった人質となった泰子さんがトイレへ行くのにも後手に縛られたまま行かされた記事を読むにつけ私はなんとなく羨ましい気がしてきました。私も人妻で子供が一人ありますが年齢は泰子さんが三十一ということですが私は二十六才です。いろいろと思いなやんだ末、やっと決心してこんな手紙を書いてしまいました。私は身長一六一センチ、体重五四キロ、B八五、W六二、H九一です。夫が奇クの愛読者だった関係で縛りや責めに對して非常に興味を持ち、椅子とかローソク浣腸器などの道具を使った責め等には無性に喜びを感じるので。特に羞恥責めにはとてもたまらない程になります。ただ体に傷やあとさえつかなければどんな責めでも辛抱できると思っています。見知らぬ読者の方ですとなんだか不安ですので、奇クの女

性モデルの募集に応じてみたいと思います。ただ主人も愛読者です。ので彼にわからないようにして下されば誌上に掲載されてもかまいません。最近乗船している都合で主人は二月か三月に一回ぐらいの割でしか帰宅しません。子供は母親が(主人の)見てくれますのでいつでも外出できますが余り晩くなると困ります。赤軍派が泰子さんにしたように全裸の私を後手に縛ってトイレに行かされたりしたら、どんなに素晴らしいだろうかと想像しております。いろいろと身勝手なことばかり書きましたが羞恥責めの好きな若妻の夢と、どうかお笑い下さい。

(京都市・藤田堯子)

○

モデル志願の砂川圭子さん。ぜひとも私のモデルになっていただけません。貴女の写真と文を誌上で拝見し、すっかり虜になりました。心ゆくまで貴女をモデルにしてSM画を描かせて下さい。写真もです。私は女性を美しくすることに関係のある職業ですので、貴女を、よりチャームアップに差し上げる自信があります。ミニのよく似合う圭子さん。御写真から想像して素敵な脚線美をお持ち

☆芸者福竜の悦虐表情の神秘を探ぐる

本誌一月号でへ全日空機で来た女として登場した芸者福竜は、稀なM女性であるが、二月号でもへ縄に恋した女として誌上を賑わし、紙に焼付けた極鮮明な写真に提供し謎の女性松本たえのM性の神秘を抜抉して頂きたい。

バイブ責めに呻く

大手札三枚一組 略号八きわ
松本 たえ

麻縄による後手の厳しい縛り、身自由を奪われた福竜は埋没したバイブ股間責めの威力で全身を芋虫のようにしててもがき抜く。

両足挙げ柱宙縛り

大手札三枚一組 略号八きろ
松本 たえ

柱に後手で宙縛りの両足を頭上高く挙げさせられた福竜は、まるで赤ン坊がオシメを替えられる格好で、とめどもなく流し続ける。

強烈黒縄縛り地獄

大手札三枚一組 略号八きろ
松本 たえ

口を割る猿ぐつわで悲鳴の洩れ喰い込めば縄に恋した女福竜は喘ぎ泣きながら虫のように這う。

責めに陶醉する女

全身をくびる位締めつける縄がこの女を、これ程までに恍惚境へ誘い込むのである。陶酔の表情を、この悶え悶えた末の陶酔の表情を。

猿轡と涕泣の瞬間

大手札三枚一組 略号八きへ
松本 たえ

縄に悶えていた福竜の口から、かすかなすすり泣きが洩れたが、猿轡を解いた途端、激情は福竜の肢体をエビのように曲げさせた。

柱宙縛と逆さ責め

大手札三枚一組 略号八きた
松本 たえ

完全に宙に浮かして柱に縛られた福竜の華奢な身体からは逆立縛りの肢体からは無惨さがにじむ。

足を吊られた悦虐

大手札三枚一組 略号八きほ
松本 たえ

とめどもなく慈液を流しながら緊縛にもだえ抜く福竜の蠢めきを止めるために脚を吊り固定すれば上半身が更に激しい蠕動を起す。

◎以上はいずれも直接ネガから印刷紙に焼付けた極鮮明な一粒選りの写真ばかりです。お申込みは前箱にて、大阪市阿倍野郵便局私書

と思います。その華奢で伸びやかな四肢に、ひしひしと縄をかけ、紅唇を割って猿ぐつわを噛ませます。なぜなら、むうと被うスタイルでは、折角の貴女の表情が、隠されてしまうからです。もう私の脳裏には、貴女にとっていただくようなポーズが浮かんできます。清純な羞恥におののく可愛い貴女を、ぜひとも私のカンバスの上に創造してみたいのです。

(静岡・志羽利也)

○ 佐野朱美様。貴女の性格を知り、よくも心強くなりました。男のくせに内向的な性格で友達も出来ず一人さびしく奇クを読んで貴女のような人を全裸で縛り、色々と責めたいと想像しているのです。貴女の便りを見て勇気を出し、早速ペンをとりました。私は二十九才になる独身の会社員です。自分ではSM半々ぐらいと思っていますので、女性に責められる事も望んでいます。たとえば、全裸にされエレキ責めにされたり、針を足の親指にさされたり、その他、どんな責めでも受ける覚悟でいます。

(千葉・佐藤正雄)

○ 佐野朱美様。私は二十二才の男

性です。人間は自分の自覚する性格と反対のことにあこがれるものです。ところが人間は、あこがれに対して、実現に努力するか否かによって、自分の世界が広がるか狭まるかがまぎります。私は経験できることは、どんなことでも、やれば人間性を成長させるのにプラスになるというのが私の自論です。まして、自ら望むことなら、ぜひ経験すべきです。今こそ、かなり内向的な貴女が努力するときです。以前から思い続けていたことを投書という形で出されたことは、内向性から抜け出す努力の第一歩だと思っています。ところで私はSMプレイに対しては、まだ未経験です。だが、辻村氏でも初めての時があったと思います。貴女も未経験だから、ぜひ、お互いに初体験をしようじゃありませんか。もしプレイの機会がもてたら、つぎのようにして貴女を責めたい。まず、両手を高く上げて縛り、少しづつ脱がしてゆきます。そして全てをあからさまにしたとき、裸体美をたたえて貴女の胸の二つのつぼみに、そっと口づけしてあげましょう。それから、貴女を台の上に仰向けの大きな字に縛り、かげりのない童女にしてあげます。つ

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (かみ) 四〇〇円
東浦ひかる

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (かく) 四〇〇円
東浦ひかる

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (かな) 四〇〇円
東浦ひかる

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (かむ) 四〇〇円
東浦ひかる

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (れち) 一五〇〇円
梨花悠紀子

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (きか) 四〇〇円
絹川 文代

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (いるり) 一五〇〇円
梨花悠紀子

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (かふ) 四〇〇円
東浦ひかる

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子

浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号 (ほの) 四〇〇円
絹川 文代

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (るい) 五〇〇円
大塚 啓子

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (るは) 六〇〇円
大塚 啓子

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (ほは) 四〇〇円
大塚 啓子

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (ほい) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 (へき) 六〇〇円
大塚 啓子

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (へか) 六〇〇円
大塚 啓子

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (かる) 四〇〇円
山原 清子

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (かへ) 一三〇〇円
山原 清子

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (かに) 一二〇〇円
山原 清子

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (かも) 一五〇〇円
山原・東浦

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (かて) 一〇〇〇円
山原・東浦

ぎに犬のように首輪をはめ、ひざをつかせず室中、歩きまわらせ、片足を上げて放尿させます。そして、こんなにやく責めを試みたいと思います。こんなにやく責めとは、身動きできないように縛り上げ、つめたくひやしたこんにやくで、全身を、なでてゆくという責めです。この他、新しい羞恥責めを考えています。

(兵庫県・芳多繁男)

皆さん、非常に豊かな才能をお持ちで羨ましい限りです。しばらく姿を見せなかった小杉千恵さんが筆をとっていられるのも嬉しいかぎりです。可愛い小悪魔さん頑張りなさい。私は、いつも見つめています。お友達の皆様、お目にかかって談論をしたいものです。昔に比べると須磨の海岸も汚れましたし、松林もまばらになりましたが、のびのびとした若者の群れは心温まる思いです。今は本当に、いい時代です。真実を求める人生こそ本当の人生でしょう。SMは、すべての人の本質的なものです。砲火の洗礼は学歴でも社会でも学び得ないものを、いくつか教えてくれました。生活が安定し、いくつかの公職をもつ私は、

今は真実のみを追って行きたいと思えます。関谷さんを見ないのが残念です。(神戸・瞳耀太郎)

○

谷山久美子様。本誌を十数年、読んでいるものですが、思いきって通信させていただきます。今までプレイの経験はなく、ただ空想の中で、美しい女性から馬のり、犬の奉仕、ヒップ責め、ネクタールなどを賜わることが出来たら、どんなに素晴らしいかと念願して参りました。そしてプレイの楽しさは非情、残酷さではなく、優しさ心の触れあいのうちに求めたいと思っています。プレイの中でSからMへ自然に移るといような変化も、この世界の楽しみを、より広く豊かにするものかもしれせん。谷山様のお気持ちも文章を拝見して、理解できるつもりでおります。一度お話ししたいものと思えます。(岡山市・松田幸男)

○

私は貴誌を知って半年にも満たない二十才の男性です。私の趣味はS一辺倒なのですが、熱烈的なフエチリストでもあります。しかし交際範囲がせまく、経済力もない青二才には、渴望する女性の下着も容易には入手できません。そこ

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

で、まことに勝手なお願いではあります。奇く愛読者の女性に下着をゆずっていただきたいと思い

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アィヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)

ます。あまり古くてもコレクションには、うまくありませんので、一、二回、着用なさったものであ

れば最高なのですが、新品でも結構です。私はブラジャーとかガードル、コルセットなどといった、締めつける力のあるものが好きです。最近、出廻ってきたボディースーツなどは、すばらしいと思います。

○

(千葉市・椿伸一郎)

福井桃子様。貴女の「マダム芙美代の告白」を拝見しました。その中でM男を責めてみたいとのことで、小生でよろしければドレイとして桃子様に責められたいと思います。まだ一度も経験がないので桃子様の気に召すかどうか分かりませんが、よろしくお願ひします。プレイにつきましてはすべて桃子様のよろしいように進めて下さい。参考までに小生の好みを言いますと、全裸で高手小手首縄縛りにされ、引き回されたりムチ打ちを受けたり、足舐めや足蹴りにされる。女性用貞操帯を着用し、亀甲縛りにされて、いたぶられる。全裸にされ、荒縄で縛り上げられ、トイレにつながれて人間便器として使用される。このようなことを考えていますので、どうか桃子様のドレイとして、ご使用下さるよう、お願いいたします。

(名古屋市・松山一郎)

○

名古屋の久保田道代様。貴女のお気持ちを、この頁で知りました。きつと貴女の呼びかけにこたえる男性が多数、現われると思います。三月号を見ましたが、貴女にアッピールする男性が一人も現われないうは……貴女は自分を大柄でデブだと言われましたが、大歓迎です。ファッションモデルやツイギーのような、ゴツゴツと骨ばった女性を縛り上げてみたところで、絵にも写真にもなるものではありません。貴女のような豊満な肉体にグイグイと喰い入る縄目こそ、SMの一幅の絵になるのだと確信します。私は一月号の虹丸氏の如く、太った女性しか愛を感じません。SといいMといっても、あえて言わせてもらいますと、一種の愛の表現でありまして、そこに愛がなければ醜悪なものになりがちになるのではないのでしょうか。こんなことを書くと、お前は甘い、俺はただ責め抜いて、責めに徹するだけだと、他のマニアの方から笑われるかもしれないが、それはそれで結構です。私は文句抜きのマニアであることが、痛い程、ヒシヒシと身にします。SMマニアだから女性が好きなのか、女性が

〔異色緊縛女性フォト集〕

△光沢印画紙極鮮明焼付▽

首縄高手小手全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いき▽

縄の痛さに耐える表情

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いめ▽

股間縛りは凄く締まる

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いあ▽

卓上の緊縛裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いて▽

両手吊りの全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いた▽

投げだした被縛女体

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いま▽

麻縄は白人の女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いゆ▽

縛られるのいや!

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いせ▽

私の裸をジロジロ見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いし▽

日本式後手縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いそ▽

白人女性をいたぶる魔手

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いや▽

金髪美女も縛られて台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いも▽

異国女性の被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いむ▽

美しい白人緊縛の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いけ▽

逆エビ責めの外人女性

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いひ▽

雁字搦目で椅子に縛る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いえ▽

落花狼藉のしとねの上で

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いう▽

妖艶な縛られぶりの沖縄美人

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほけ▽

股間縛りの痛さに開股か

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほへ▽

悶える厳しい縛りの明子

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほて▽

椅子で演ずる明子の痴態

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほと▽

観念して縄に身を任す

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほあ▽

縄は豊満な柔肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほさ▽

好きだから愛の行きつくところ、SMマニアになったのか、ニワトリと卵のようなもので、自分でもサッパリわかりません。最後に、もう一度。久保田道代様、勇気を出して私の呼びかけに応じて下さい。きつとそのときから、貴女に昨日までと違った世界が開ける筈です。

(静岡・浜野静男)

井上浩様。誌上で奥さんの縛られた写真と、貴方の記事を見ました。私は解剖学の専門家ですから女体の構造に精通しています。私は全裸の女体を縛って、見たり触れたりすることが大好きです。貴方と交際してSM研究を一緒にしたいと思っています。

(千葉県市川市・触覚派)

東京近辺で、プレイの記録を撮影して、アルバム等を作っておられる御夫婦の方。またはSM関係の写真や図書をコレクションされているマニアの方々に、お願い致します。プレイベートな物でしようが、一度拝見させていただきたいと思ひます。最近では本誌まがいのSM誌や写真集が、どこかの書店でも一コーナー設置されている時代になりましたが、質より量の内

容が多く、ぼくのように何の経験もなく、ただ空想だけでSM画を描いている者には、この様に一般化されたSMムードの時代は、かえって以前の限定された時代の緊縛感が稀薄になってしまいうように「ぼくのイメージ画集」も、実は半年あまりも、ご無沙汰しています。何かイメージをかきたてられるような資料はないかと思っても薄給の青二才の身では何も手に入らず、それで同好のマニアの方々と、お近づきになれたらと思っております。三月号のサロンで中津浩様が提案されていた東京支部や撮影会のアイデアは何とか実現していただきたいものです。ぼくの好みは緊縛自体を主体としたものには、あまり興味がなく、たとえ縄は一本も使用していなくてもまた時には着衣のままでも、そこにただよう屈辱感、被虐感がSM的で美しいものを理想とします。だから、単に職業モデルをつかったSM風ヌード写真には何の感興もわかず、畜化や羞恥責めなどプレイの記録としての写真を拝見したいと思っています。また、いつかは、ご夫婦のプレイベートなプレイの様子を、側で見学させていただき、写真やスケッチで記録さ

美しき抜群の正面を晒す

大手札三枚一組 略号△ほゆ▽ 四〇〇円

座間 明子 略号△ほゆ▽ 四〇〇円

悦虐にむせぶ美貌のひと 略号△ほし▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほし▽ 四〇〇円

責められて恍惚境をさまよう 略号△ほし▽ 四〇〇円

足挙げ縛りと開股縛り 略号△ほし▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほし▽ 四〇〇円

超羞恥責めの極致 略号△ほし▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△ほし▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほし▽ 四〇〇円

さていただけたらと、勝手な夢を

みております。ぼくは多分、どなたかが分類しておられたSの男に

ありがちの、小心で利己的で非社

交的な人間なのだろうと思ひます

が、おつき合いいただける奇特な

方の、ご親切をお待ちしております。

(東京・室井亜砂路)

私の最も好みとするM女、佐野みさ子様に親しく、お便りいたします。三月号で体験記を告白された「ロマン派生」との熱烈なプレイの数々を發表されて、その大胆なプレイと共に、みさ子様は完全なるM女であることを知り、その甘美なる香りと魅力に、この私の心は、すっかり酔いしびれてしま

股縄は何んでも知っている

大手札三枚一組 略号△ほす▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほす▽ 四〇〇円

鼻責めの悦楽境地 略号△ほす▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほす▽ 四〇〇円

鼻を愛撫する責め 略号△ほす▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△ほす▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほす▽ 四〇〇円

蠟燭責めと臀部打ち 略号△ほす▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△ほす▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほす▽ 四〇〇円

喰い込む股間縛り 略号△ほす▽ 四〇〇円

大手札三枚一組 略号△ほす▽ 四〇〇円

渡部 好美 略号△ほす▽ 四〇〇円

燃えていゝのです。誰も知らない

二人だけが求め合い知り得る、S

Mの世界の神秘的扉を、そっと開

いて、人生最高の歓喜に酔いしび

れてみたい欲望と、実現される日

を心から念願しております。過去

のプレイで、みさ子様が体験され

た以上の秘かなプレイの数々を二

人だけで開発したいと、思うので

す。この私はS的プレイには自信

があり、M的な立場でも、どんな

プレイにも耐え得る自信と体験を

持っていますので、どうか一度、プレイを実現してみてください。もちろん、プレイ中は、みさ子様の希望通りに、どんなことでも心ゆくまで奉仕します。

(横浜・プレイ派生)

○

三月号の中津浩氏の「スウィートサディズム」の写真三葉は、全くすばらしかった。私の好みも中津氏と全く同じで、腋窩の見えるもの。縄の余り身体にかからぬもの。目かくし、さるぐつわをしたもの(処刑ムード一杯)。さらに

(東京渋谷・磔刑マニア)

○

縛ブームだが、昔からある、お仕置、処刑で若い娘の裸身をはりつけたり、火あぶり柱にしぼりつけたりしたシーンが少ない。もちろん、白衣を着せては、つや消しだし、縄をかけ過ぎては、いけないので、中津氏並みにして、はりつけシーンを出して欲しい。前田真知子や、清楚な感じのモデルの磔刑が、もっと出れば良いと思う。毎月のカメラハントに必ず磔刑ポーズを入れて欲しい。

東京の佐野朱美様。私はS九十九パーセントの三十八才になる中年男です。もちろん、妻子がおりますが、SMプレイの経験は十年ぐらいになります。いかがですか、一度、私とプレイしませんか？

中年のネバッコイ羞恥責めは、きつと強い刺激を与えることと思います。一人、せまいアパートにじこもっていたのでは、いつまでたっても友人はできませんよ。思いきって空想の世界から現実の世

界へ、とび出して下さい。そうすれば、もう貴女は一人ぼっちではなく、めくるめくSMの園へ足を踏み入れることができるのです。わずかな勇気を惜しみさえしな

本誌愛読者美女緊縛姿態

膨満なる乳房責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひら

片足吊りにもだえる裸女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひむ

初縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひな

縛りは大好きなのよ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひれ

芳紀二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひつ

恥かしき緊縛ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
高村 浩子 略号 八ひよ

ローソク責めの妊娠腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へえ

これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へふ

前手縛りの妊娠太鼓腹

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
富田由美子 略号 八へら

臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へれ

稚妻の妊娠太鼓腹観賞

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へあ

若妻妊婦全裸の羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へう

メロンのような腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へよ

一糸まとわぬ妊婦像

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
富田由美子 略号 八へや

強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
谷山久美子 略号 八ひあ

麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
谷山久美子 略号 八ひて

開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひえ

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひま

後手縛り吊り上げに呻く

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひの

開股責めの醍醐味

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひこ

縄で汚す清純乙女の肌

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひふ

エビ責めに映える柔肌

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひう

捕われの美女は泣く

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
前田真知子 略号 八ひや

れば、貴女の同僚の全く知らない新しい世界を体験できるのです。

どんな生き方をしようと、歳月は容赦なく過ぎて行きます。空想のまま終わるのも一生。しかも青春は永くありません。その短い青春を、少しでも有意義に使って下さい。とは申せ、一面識もない男を信じろと言うのが無理かも知れませんが、それが現実の社会なのかも知れない、とすると、SMに生甲斐を持つ私達にとって、誠に淋しい限りと申す他ありません。お便りを、お待ちしております。

(神奈川県相模原市・山田三郎)

三月号誌上の「モデル志願」の砂川圭子様。モデルになつてみたいと思つただけで身ぶるいするよくな気持……と言われる貴女と、ぜひとも、おつき合ひの上、カメラハントしたいと心から願つております。同県に在住の同好の一人として、大いに語り合ひ、慰めあつて私の夢を実現したいと思ひますので、どうか勇気を出して、モデル進出の道をひらいて下さい。お化粧の仕方も未熟とのこと、そんなことは心配しないで、すべてこの私に一切を任せて下さい。

(神奈川県・鈴木邦雄)

○

大阪の石橋君子様。貴女のお便り拝見しました。ぜひ私とプレイして下さい。私は二十三才の平凡なサラリーマンです。若いかもしれませんが、SMに限りない興味を持っています。残念ながら未だプレイの経験に恵まれず、毎日、悶々とした生活を送っています。私の好みは、全裸緊縛、開股縛り、股間縛り、浣腸等です。貴女の御希望通り、責めて責めて、責め抜いて、死ぬほど恥かしい目にあわせてあげることが約束します。

(奈良・原田圭一)

○

安部文子様。お便り拝見しました。私は二十四才のS男性です。ぜひ私と一度、プレイをして下さいませんか。私は大の浣腸ファンで、体に傷のつくようなプレイは好みません。浣腸を中心とした羞恥プレイで、貴女のマンネリ性を必ず満足させて上げられると思ひます。貴女を全裸にして身動きできぬように縛り上げ、恥かしい注入ポーズをとらせませう。大型二百CCの浣腸器で強烈なグリセリンやドナンを注入します。貴女は煮えくりかえるような便意とたたかわなければなりません。もし、早

惨酷海老責め胡坐縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひす▽

亀甲縛りと後手柱縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひせ▽

足挙げ開股責めを拒む

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひし▽

臀部責めの悦楽境

大手札三枚一組 四〇〇円

く洩らせば、更に恥かしい責めが待っています。このようなプレイは、いかがでしょうか。プレイは強烈ですが、その他のことは、きわめて紳士的にふるまいます。プレイ用道具は豊富にとりそろえてあります。どうかよろしく。

(東京・豊田真二)

高村浩子様。私は、ふとしたことから奇クを愛読しはじめて早や六年になります。二十六才の独身男性です。そのうちにMという一字が目につくついて離れないようになりまして。しかし、まだ一度もSMプレイの相手にめぐまれません。奇クによって心の中に住むSを、なぐさめております。三月号で高村さんの告白を読み、貴女のような人と一度でもいいからSMプレイをしてみたいと思ひ、ペンをと

三浦 純子 略号△ひも▽

髪を掴んでいじめる

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひさ▽

化粧室とトイレ責め

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひん▽

股間縛りと臀部責め

大手札三枚一組 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひゆ▽

らせていただきました。股間縛り、開股縛り、あぐら縛り、浣腸責め、蠟涙責め、などや、またロープのパンティとブラジャーをつけて、その上に洋服を着せてお茶を飲みにいったり、ドライブにいったり精神的な、いたづらをします。どうか私と一度、プレイをしていただき、はかない夢をかなえてやって下さい。

(豊田市・岡村哲也)

○

小倉悠紀様。私の寄稿拙文(十二月号)を読んでいただきました。誠に恐縮です。お尋ねの件は、何分にも右書店からの入手で肝心な輸入取次店が不明。発行先の記載面が生憎、紛失されている不完全な状態でしたので、ご用件のお答えが出来ず、ご無礼いたします。また、ご紹介いたしました洋書の

次号(六月号)は四月二十五日に発売いたします

殆どが、恐らく都内の新、古書店でも在庫皆無(私自身、都内の主要書店に幾度も検索の経験上から推察で)の現況で、残念ながら邦土では入手難渋の模様です。先ずご返答まで。(東京・松本一彦)

○ 神奈川の砂川圭子嬢、東京の佐野朱美嬢。貴女方の三月号での勇気ある志願、また告白を非常にうれしく思っている一人である。私も三月号においてM的素質のある女性パートナー・モデル求めるの弁を掲載したものであるが、貴女方が、どのような女性であるかは分からないまでも、SM美の追求者として、今までの経験から、貴女方の望みをかなえられる自信はある。幸い写真の現像、焼き付けもできる。もしよかったら、ゆっくり話し合い、お互いを理解したいと思っている。SMプレイの根本には、あくまでも相互の理解が必要であることは、いうまでもないことである。理解するのに、かなりの時間を要したり、また理解できない場合もあれば、会った瞬間に気が合う場合もある。とにかく

く会って語り合い、理解し、信頼する時間が得られることを希望する。(東京・一角正人)

○ 東京の安部文子さん。私の浣腸責めを受けたことの由。喜んで貴女に、私の愛用の百CC硝子浣腸器を使用したと思います。貴女は身長百六十一センチのほか、バスト、ウエスト、ヒップからみると、プロポーションも抜群のようです。私も身長百七十七センチ。何もかも、貴女と合致するようです。私は叩いたり、ムチを使う、いわゆる外的痛感を加えるのは嫌いな方で、緊縛は、むしろ浣腸をより効果あらため、浣腸をエスカレートさせるための手段にしか使いません。痛くないようA責めをして下さいとの希望ですが、私の浣腸は、痛くないのが特長です。(ただ、浣腸による内部の苦しさは別)浣腸前ポマードで時間をかけて、ほぐします。そして第一回はドナン原液の五十CCを注入します。これは直ぐたかまりますので、そのまま排泄させ、腹の中を一応、からにします。つぎに、あ

ひる型をした腔開口器で除々に拡張します。今度はグリセリン原液を百CC浣腸し、ソーセージで栓をし、腹を押して便意のたかまりを助長し、二十分ほどたって、ようやく排泄させます。文子さん、ぜひ会って私の空前絶後の浣腸をうけて下さい。恐らく、その強烈さは一生、忘れ得ぬ思い出になるでしょう。もし浣腸愛というものがあんなら、私と文子さんとは、浣腸愛で結ばれた伴侶なのかもしれせん。浣腸をとおしての愛、何とすばらしい、愛ではありませんか。(東京都・浣腸キチ)

○ 室生雪子様へ。呼びかけて下さって、ほんとうにありがとうございます。貴女様の御投稿を一目拝見したときから私の胸は高鳴りまじ、毎夜、夢に見るほどです。まだSMのことも、羞恥責めに対しても憧れているという事実だけでなく無知な私ですので、どんなにかしい責めにも、かならず耐えるとは断言できませんし、実際行なわれるプレイに耐えられず、泣き出してしまいかも分かりませんがそれでもよろしかったら、ぜひプレイに参加させて下さい。では、

この夢が一日も早く実現されることを心より祈っています。

(軽井沢・落合葉子)

○ 東京の佐野朱美嬢。内向的な性格のために友達がいないうことですが、ぼくとプレイをしましょう。プロポーズは、のちほどに言わせてもらいます。苦痛責めより羞恥責めを好むべくとしては、海老縛りの浣腸責め、排出、剃毛をしてのパイプ責め、開股縛り等、その他、色々のことを考えております。以上は屋内でのプレイですが屋外でも、いろいろと面白いプレイがあると思います。全裸の貴女に股間縛り、乳房を強調させるような縛りや乳首縛りなどを行なった上でオーバーコートを着ただけで外出するのです。洋服を着るかどうかは、その日の気分や天気によります。その姿で映画を見たり、喫茶店へ行ったり、食事をしたりすれば一層、羞恥心は増すと思います。プレイというものはホテルとかモーターだけではなく、どこでも出来るものであると確信しております。ぼくは今、貴女という人を発見して、何でも相談できるような友達として、これか

編集後記

○本号も「本文」／「サロン」を通じて少なからぬ「体験・告白」を収載することが出来た。いつものことながら、本誌ご支援の現われとして心強く思う各種投稿の中で、特に有難く拝見出来るのが、なんのてらいも誇張も感じられない「体験告白」です。事実である以上、針小棒大に書かない限り、また「創った告白」でない限り「小説より奇」なのは、そうザラにはありますまいが、素直に自己を見詰めてお書き下さる支援者の存在があればこそ、本誌が文献誌としての価値を高め得ているのだと感謝しています。その点、それなりに貴重ですが「憧憬、願望」となる性質上、空想が混じる故か変化と飛躍に富

んで、読み物としては面白味が増すもの、やはり文献としての性質は、だいたい様子が変わるようです。いずれにしても、思いを文字にするのは難作業ながら、一種の「胸内のス払い」式に、今後とも珍らしい事柄についてのご寄稿を賜りますようお願いいたします。○先月号でちょっと予告しておきました、本号から、不本意ですが「五十円」の値上げをお願いしなければならなくなりました。写真版四頁分を増頁しましたが、これを以て値上げの理由にするつもりではありません。結果は同じじゃないかと思われるかも知れませんが、定価改訂をお願いする上、せめても編纂部の微衷とお受取り願いたい。……とか何とか弁解したくもなる事情ご賢察下さいまして、よろしくご諒承願い上げます。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を贈呈します。

映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。○御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

読者通信原稿

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の榮 ☆

予約に限り
一月分(1冊)四〇〇円／送32円
三月分(3冊)一二〇〇円／送共
半年分(6冊)二四〇〇円／送共

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

五月号

(第二十六巻第五号)
(通刊第二百九十一号)

昭和四十七年四月二十日 印刷
昭和四十七年五月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 俊夫
印刷人 北村 俊夫

大阪住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
（昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可）
（昭和四十二年四月二一日）
国鉄大島特別扱承認雑誌第二二〇号

☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めることと致しております。すいよう本来成人として編集いたしましたりませんが、関係上、十八才未満の方には絶対販売下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。